



大正十二年二月十日印刷
大正十二年二月十五日發行

花袋全集第三卷

（非賣品）

不許複製

著作者　田山錄彌
東京市小石川區東青柳町二十九番地

發行者　川俣馨一
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者　松浦政吉
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所　株式會社博文館印刷所

發行所　花袋全集刊行會
東京市小石川區東青柳町二十九番地
電話小石川一〇五四番
振替東京三一七〇〇番

月がいかにも明るかつた。大きな石段を落ちた影が總べてくつきりと鮮かに見えた。石段の上には支那苦力の蹲踞つて寢て居るのが其處にも此處にも指される。此世では見られぬやうな一種の光景と氣分とが到る處に滿ち渡つて居た。

病人の容態を見に行つた屬員が、慌てゝ歸つて來て、

『もう死んでゐる。』

『え？』

一種の戰慄が人々の脈を震はせた。

『もう、冷たくなつて居た！』と屬員は深い感慨に充ちた聲で續いて言つた。

誰も口を開く者はなかつた。月に照された石段と宏壯な洋館とを前にして、神秘な深い沈默が續いた。

從軍記者と屬員とはやがて其石段を登つて行つた。丈の高い二つの洋服姿は白い冷たい花崗石の上に小さい影を黑くくつきりと印した。靴の音は一段毎に高く冴え渡つて響いた。登り詰めると、其處に大きな扉がある。開けようとしたが、鍵がかゝつて居た。

——花袋全集第三卷終——

は正面に向つて眠つて居る講釋師の顏がくつきりと照らされて居た。從軍記者はうつゝ心に、『あゝ月が出たな。』と思つたが、其まゝ又すぐ眠つて了つた。

それから馬車は村落の傍を通つたり、大きな楊樹の黑い影の下を通つたり、牧場のやうな處を通つたりした。行く先にぴかッと大きく光るものがあつたが、それは大きな池に月の照つたのであつたのがやがて解つた。

人家が段々多くなつた。

一行が眼を覺ました時には、馬車は大きな石造の洋館の前に來て居た。前には宏壯な洋館が幾つとなく連つて居て、バルコニや棟や簷(のき)が月の光の中に黑い線を描いて聳えて居る。丁度西洋の繪葉書でも見るやうに思はれた。それに其處には大きな石の階段がまともに月に照らされて、其下には、驢馬や馬車や輜重車が一面に置かれてあるのが眼に入つた。

誰も皆夢のやうな氣がした。他界に來たやうに驚いた。

『此處は何處だ。』

誰も皆な眼を睜つた。

死の暗い境を通つて、驚くべき光明の彼岸に達したやうに誰も感じた。神仙譚にある一齣を實現したやうにすら從軍記者には思はれた。

い影がゴト〳〵動いて行くのが微かに見える。

從軍記者は猶暫くいろ〳〵の想像に耽つて居たが、十分ほど經つた後には、かれの頭は馬車の柱に、手はだらりと膝の上に顏を少し斜にして、早くも熟睡の境に落ちて居た。

懷中電燈が徒に車中を照した。

其の微かな電燈の光に、ある光が加はり始めたのはそれから三十分ほど經つてからであつた。東の地平線が段々明るくなつて、村落の所在を示した楊樹（やなぎ）が其中にこんもりと黑く見え始める。高粱畑の遠く連つたさまもそれと認められる。

遲く月が出た。

其月は血のやうな色をして居た。道の屈曲した具合によつて、泥濘が一面にドロ〳〵と黃い侘しい光を帶びて光る。その時には、車臺に居る御者の顏は亡者のやうに見え、馬車は屍を他界に運ぶ柩のやうに黑い影を長く後に布いた。時には、高粱の影に蔽はれて見えず、時には濁つた川のキラ〳〵する土手のやうな處を行つた。

野は矢張廣々として居たが、それでも處々に村落があつたり、人家があつたりした。雨は此附近に於いて、殊に烈しかつたと見えて、川は音を立てゝ流れ、路の泥濘は更に一層の深さを增した。

やがて月の光は馬車の中まで照らすやうになつた。前の馬車では車內ががらんとしてゐた。後の馬車で

從軍記者はいろ／＼なことを思つた。寫眞師が話好きの輕い調子で、其の身の上話をしたことがそれとなく思ひ出される。田舍から出て日本橋のある寫眞屋の見習書生で居た頃、今の芝の寫眞屋に年頃の意氣な娘があつた。その娘と色目を遣ひ合つたり、暗室の中で手を握り合つたりしたことを得意に笑つて話した。流暢な滑かな口の利きやうをしたが、その中に何處か訥るやうな、ひつつるやうな處のあるのを、其時分過つて藥用の硫酸を飲んだ爲めだと言つた。其時、手代が、

『それぢや硫酸を飲まなかつたら、大變だつたらう。今でさへこんなに立派な雄辯家なのに。』と言つて笑つたのを思ひ出した。酒の席では二上り新内を得意にして唄つた。大の見得坊で、しやれ者で、一行中での御大將と言つたやうな樣子をするので有名であつた。それから財布の中に十圓金貨を三箇ばかり入れて置いて、管理部の下士や兵卒などの居る處に行つては、よくそれを出して見せた。蓋平では、驢馬を十八圓出して買つて、支那人の苦力(くりー)を別當らしく仕立てゝ、行軍中には、いつもそれに騎(の)つたが、ある日、振落されて向う脛をしたゝか打つた。其のさまが可笑かつたとて、一行ではそれを話の種にした。昨夜、營口の細い巷路のある家で、ある室から出て來たかれのにこ／＼した顏も眼の前に見えるやうに思はれる。それが、かうして滿洲の……と思ふと、從軍記者はゾッとせざるを得なかつた。同情の念も湧くやうに起つた。

雨は全く止んだ。空には星も見え出して來た。闇に續く闇、其の無限の闇の中に、前に行く馬車の黑

暗い壁のやうな闇は續いた。馬の喘ぐ音と、御者の鞭を鳴らす音と、車の動く音とが四邊の沈默を破つて聞かれた。車の中では誰も口を開くものはなかつた。

不意に、

『もう、何時だ。』と言ふ聲がした。」

『どれ、一寸懷中電燈を見せ！』

暫くして、

『九時二十分。』

『もう七時間以上も懸つてるぢやないか、一體何うしたんだ。本當に大石橋に向つて進行してるのかしら。』

と言ふ不安らしい聲がした。しかしそれに調子を合せるものもなかつた。跡はまた沈默に返つた。

誰も皆疲れ切つて了つた。

寫眞班の屬員は一番先にその大きな體を車臺に凭せ懸けてこつくりこつくりやり始めた。手代は荷物に打伏に凭れかゝつて、やがて輕い鼾を立て出した。講釋師は猶暫く懷中電燈の薄暗い光の中に眼を光らせて居たが、やがて其の丸い顏が前に踣(のめ)りさうになるのを從軍記者は見た。

『うむ、うむ――』

『しつかりし給へ、もうぢきだから、大石橋に行きさへすりや、軍醫も居るから、……しつかりしなくつちやいけないよ。』

『うむ――うむ――』

急に催して來たといふ風に、首を猫のやうに立てゝ、頻りに嘔吐し始めた。

誰も彼も馬車を離れた。

『困つたねえ。』

『あれぢやとても駄目だ。』

『あゝして放つて置くのは、實に忍びんけれど、何うすることも出來んねえ。』

『爲方がないよ、あれぢや……』

と講釋師は言つた。

『一刻も早く行くことが專一だ！』

誰も皆言つた。

さて御者を促し立てゝ行かうとすると、今度は御者が苦情を言ひ出した。彼等も病人のコレラであるのに氣が附いたらしい。それを賺したり威嚇したりして進行を續けるのは容易ではなかつた。

『何うだ、よくないか?』

今一度聲をかけて見た。矢張、唸聲が其返事であつた。闇なので、車の中はよく解らなかつたが、病人は打伏になつて臥てゐるやうであつた。

御者が二人して一生懸命に川に陷つた馬車を揚げようとしてゐる傍に、急いで戻つて來て、

『おい、一寸懷中電燈を借せ。』

それに跟いて、講釋師も手代も寫眞班の屬員も行つて見た。從軍記者は懷中電燈を高くかゝげた。末ひろがりに線を成して廣がつた光の下には、果して打伏になつた洋服姿が朧げながら照らされて見えた。橫にした顏が微白く、左の手はだらりと下げられてあつた。講釋師は其の顏の周圍から懸けて其處ら一面に嘔吐した不潔物の散らばつてゐるのを見て取つて、ゾツとしたといふ風で、急いで馬車から身を離した。微かな唸聲が聞えた。

人々は顏を見合せた。

從軍記者は、

『太田君、何うした?』

病人は頭を少し擡げて、眼を開いて、此方を見た。其顏は死人のやうに蒼かつた。

『太田君、何うだえ?』

死のやうな暗い夜だ。

御者は燈火の準備をして居なかつた。馬車は路の岐れる處に來ては迷つたり、俄に出來た深い泥川に邂逅しては危く倒れさうになつたりした。馬の糧食を買ふやうな村落は行つても行つても到着せず、それに路を迷つたと見えて、來る時に日本軍が國旗を軒に出して一小隊ばかり屯して居た大きな廟のある村落をも過ぎなかつた。

御者は絶えず不平を言つたが、しかしかれ等に取つても、行く處まで行くより他に爲方がなかつた。

後の車にはそれでも微かな火の光が見えた。それは御用商人の手代が携へて居た懐中電燈の光であつた。その光は一種の青みを帶びて、微かに暗い車中を照した。寫眞班屬員の頰髯の深い顏、從軍記者のしよんぼりとした痩せた顏、講釋師の丸い顏などが、丸で他界から來たものゝやうに厭に蒼く物凄く見えた。

今少し前、車が泥川に陷つた時、從軍記者は流石に心配になると見えて、車から下りて、前の馬車の留つて居る處へ行つて横木の處から中を覗いて、

『何うだね、おい？』

と聲をかけた。

其返事の代りに厭な苦しさうな唸聲が聞えた。身の毛もよだつやうな凄じい唸聲であつた。

と厲員は言つた。

『夕立が來る。』

と心細さうに從軍記者も言つた。

果然夕立が來た。恐るべき滿洲の夕立！　雷が鳴り出したと思ふと、それが天から地から一面に轟き渡つて、槍のやうな雨が車軸を流すばかりに降頻つた。殊に恐ろしいのは、電光で、黑い凄い雲の堆積を破つて、片時も止む時なく、無數の大きな光を空に投げると、それに續いて、碓を引くやうな雷の轟音。

それに、滿洲の道路の習ひ、石のやうに固かつた土は、時の間に壁土のやうに滑かになつて、車軸は忽ち泥の海に埋められるといふ光景になつた。

降る、降る、實によく降る。鳴る、鳴る、實によく鳴る。今まで聞えて居た砲聲ももう何處かへ行つて了つて、天地は唯ザアと降る音、轟と鳴る音。

その物凄い暗くなりかけた空を――想ふべき樹蔭も人家も見えずに唯無限に高粱畑の續く中の道路を二輛の支那馬車は、泥に塗れながら覺束なくたどつて行つた。

雨の小降になつた時は、もう全く夜になつて居た。

『けれど對馬沖は、敵艦が出沒してゐて危ないさうだ！』

と傍から寫眞班の屬員が言つた。

『だから、運送船で歸らずに、營口に出て、外國船で歸れば、危險なことは少しもない。旅順の傍でも、手を振つて通つて行かれますァ。』と手代は得意さうに言つて、『だから、私はちやんと、營口で其手筈を定めて來ました。山海關に出て、汽車で天津に行つて、そこから外國船で歸るやうに定めて來ました。』

『もう歸る、歸る。いやだ、いやだ。よく／＼厭だ。』

と講釋師はさも厭さうに言つた。

自由に歸國することの出來ない寫眞班の屬員と從軍記者とは長大息（ためいき）を吐いた。

空が俄かに曇つて來たのを誰も知らずに居た。砲聲が頻りに聞えるので、それとなく外を見ると、廣い廣い滿洲の野には一面に恐ろしい黑い雲が蔽ひ懸つて、沈まうとした夕日は黃い物凄い光を四邊に漲らした。兩側の高粱はザワ／＼と風に鳴つて、天地が今にも恐ろしい凄じい怪物に襲はれるかと疑はれた。遠い村落の楊樹（やなぎ）は既に其黑雲に蔽ひつゝまれて見える。

砲聲がドロ／＼ドロ／＼と聞える。

『ひどい天氣になつたねえ！』

『一人で患者を放つて置いては酷い！』

誰も皆かう思つた。しかし自ら進んで、危險な病氣を看護する任に當らうとするものもなかつた。其中で、比較的關係の深い從軍記者は、『自分も何だか腹の具合が惡い、それに熱もある。』と言つて居た。

『あゝあゝ、もう戰爭はよく〳〵厭だ。』

と講釋師は言つた。戰爭の初期に、かれは司令部から默つて野戰隊へ出て行つた軍規違犯で、久しく憲兵隊に拘留されて、人一倍辛い思ひをした。その苦痛が何となく其言葉に顯はれて居た。

『今度、司令部に着いたら、是非歸して貰ひませうや。もう金にも慾にも易へられない。命あつての物種だ！』

御用商人の手代はかう言つて相槌を打つた。

『本當ですともな、命には代へられませんやな。軍人なら、そりや命が商賣、戰死は國家の爲めで、此上もない名譽ですけれども、我々が死んだツて、泣くのは嗚位なもんで、犬死ですァ。死んぢや詰らねえ。』

『本當にさうですとも。』

『歸りませう歸りませう。司令部についたら、早速參謀にお願ひして、歸して貰ふことにしませう。』

通辯の男は間に挾つて困つたが、段々其譯を話して、――病人が居るんだから何うすることも出來ん、次の村に日本軍が居れば好いが、居なかつたら大石橋まで行つて呉れといふことを懇々と話した。賃錢も増してやらう、飯も分けてやらう、馬の糧食を買ふ錢もやらうと言つた。御者はそれでも素直には應じなかつた。

一行は軍の出征當時から、司令部について戰地に遣つて來た。大本營の寫眞班の屬員もあれば、某雜誌の從軍記者もあつた。戰地の事業を視察に來た御用商人の手代は粗食に窶れて蒼い顏をして居るし、戰爭の實見講談をやらうと思つてついて來た講釋師は、汚い洋服の胸をはだけて肩からヅックの雜嚢をかけて、憊れ切つたといふ顏をして居た。コレラに罹つた男は、芝で可也聞えた寫眞師で、活動寫眞の興行師から莫大な金を取つて、大きな寫眞機械を携へて來た。

これ等の人達は上陸してから三月の間、具さに艱難を嘗め盡くした。車の輪の半分以上も埋まる路の後押をしたこともあれば、道明寺糒をかじつて二日二夜野山に寢たこともある。鮭鑵、福神漬鑵、砂のヂャリ〳〵する粟のかて飯。それよりも一番辛かつたのは、夏の暑い日の急行軍、司令部に離れた時の不安、雨に降られた夜の露營。それに、かれ等は何ぞと言つてはよく喧嘩をした。戰爭の空氣が齎らした一種の氣風、女氣を拔きにした殺伐の世界は總ての人の心をして獸に近からしめた。かれ等は時には食を爭ふことさへあつた。

『それにしても、實際コレラなんだらうか。』

『何うも……たしかには解らんが、十中八九はさうらしい、皮膚の色なども變つて居たし、熱が烈しいし、吃逆の出るのは惡性ださうだ。』

『さうだとなると……ぐづ〳〵して居られん。一刻も早く日本軍の居る處へ行つて、兵站部でもさがして、醫者に見せなければならん。先生だつて、此處で死んでは可哀相だ。』

『兎に角大石橋までは大急ぎで行かなくつちやならん。』

で、馬車を成るたけ早く促して進めることに一決して、片言なりにも支那語の話せる一行中の一人が身振をしたり手眞似をしたりして御者に談判した。けれど急には要領を得なかつた。營口を出る時、大石橋までゆくと言ふと、とても跟いて來さうにもないので、出鱈目に近い處の村落の名を言つて、無理やりに約束をきめて來た。それに、道路が非常に惡く、泥濘のまゝ石のやうに固くなつて居る。とても内地で想像するやうな譯には行かない。

『駄目だよ、奴さん、飯を持つて來ない、それに、馬にやるものを準備して來ないとぬかしやがる。』

かう其男が一行に報告した。

『駄目だつて、爲方がない。無理やりに、引つぱたいても伴れて行くさ！　奴等は腕力でなくつちや駄目だ。』

又他の一人も言つた。

また沈默した。

馬車がごと〳〵行く。

『それに、司令部は何處に行つてるか解らんのが困る。昨日發つたといふからには、もう餘程先に行つてるに違ひない。』

『一二里の處に居れば好いけれど、それはとても望めないことだからナア。』

軍司令部に離れるといふことは――知つてる顏に離れるといふことは、滿洲の廣い野に放たれたといふことゝ同じであつた。不安が募つて來た。

『許可された日限通りに、昨日歸れやよかつたんだ。餘り快樂を追つたから惡いんだ！　昨夜など、あんな處に行つて、くだらぬ金を使つて……』昨夜の滯在に反對した瘠削の男が愚痴をこぼした。

『本當だ！』

と他の一人も言つた。

『そんな愚痴をこぼしたつて仕方がない。それよりも、現在に對する適當な處分をしなくつちやならんさ！』

肥つた男はかう言つた。實際さうなので、誰も皆口を噤んだ。

同じ婦人を其夜、細い小路の、四角の小さい室のある、白いカーテンで四面を圍んだ一室に見た時は、誰も驚かぬものはなかつた。其處にはドイツ生れのマリーといふ女も居た。

日本軍の守備隊本部が居留地の公園近くにあつた。其入口には日章旗が交叉されて、番兵が立つて居た。一行は其處で軍司令部が戰鬪の爲めに昨日前進したといふ報を聞いた。柝木城攻撃が第十師團方面に始まつたので、軍の前衞は海城攻撃に向つたといふ專ら評判である。『今朝から砲聲は聞えてるぢやないか。』かう言つて、守備隊の小隊長は遠方に其音を聞き得るやうな樣子をして見せた。一行は慌てゝ出發の準備をした。行かぬといふ馬車を二臺無理に引張つて來て、色々買物をした荷物を載せた。寫眞の種板もあつた。蠅取紙もあつた。ビールもあつた。

居留地を發つて來たのは午後二時頃であつた。九十度以上の暑い日影がキラ〳〵と人の眼を眩惑させた。前の馬車に乘つた一人は今朝から熱があると言つて居た。

『困つたもんだ。』

暫くして一人が沈默を破つた。

『本當だ、營口なら、醫師もあつたが、此處ぢや何うすることも出來ん。』

『本當に困つたなア。』

『開路、開路！』

と叫んだ。御者は慌てゝ鞭を鳴らした。

馬車はまたごと〱動いて行つた。

肥つた男が後の馬車に乗ると、待設けた同じ質問が車中の三人から口を衝いて出た。

『何うした？』

『何うも様子が悪い！』と少し途切れて、『それに嘔吐(もど)す！』

『嘔吐す！』

と欷のやうに應じたが、しかも沈黙がそれに續いた。

恐るべきコレラ！　恐るべきコレラの流行地から遣つて來たといふことが誰の心にもあつた。遼河の赤く濁つた水、それに血のやうな色をした夕日が射して、汚い支那街には汗臭い不潔な臭ひが充滿して居た。九十度以上の酷烈な暑さに、悪るいと知りながら河沿ひの公園を賣り歩く氷の塊をも嚙(か)めば、町の角に出て居る安アイスクリームをも食つた。長い間、軍隊の飯や鑵詰に飽きた身には、何んなものでも食慾を誘はぬ譯には行かなかつた。一二日の許可を軍司令部から得て大石橋から遣つて來たかれ等に取つては、營口の市街は丸でパラダイスのやうにすら思はれた。

公園の楊(やなぎ)の涼しい蔭を、派手な涼傘(パラソル)をさした若い美しい西洋婦人がぞろ〱と通る。それを、――其

死

馬車がまたとまる。蒼い顏をしてよろ〳〵とまた高粱畑の中に入つて行く。

後の馬車の人々は皆心配した。

『何うしたんだ?』

『さつきの處からまだ一町も來やしないぢやないか。』かう言つて一人は首を外に出した。

肥つた一人は、先程から心配さうに默つてぢつとして居たが、ふいと立上つて馬車を下りた。カーキー色の夏服は夕暮近い空氣にはつきりと見えた。

長い鞭を持つた支那の御者は、二人寄り添つて、何かこそ〳〵話してゐる。

高粱の畑の中に入つた男は、やがてそこから其姿を見せた。いかにも疲れ切つたといふ風で、蹣るやうにして辛うじて馬車の中に入つて行つた。肥つた男は、其後を追つて半分馬車の中に顏を入れて、暫く何か言つて居たが、やがて、

せつせと耕して居る母親の鋤の刄に、ふとガチリと音がしたものがあつた。例の石と思つて、取除けやうとして、手を其處に遣つて見ると、思ひもかけぬ其の古い庖丁の身が出て來た。錆びて、汚れて、赤くなつて………。

『まアこんな處に。』

と母親は思はず聲を立てた。

『定や、庖丁がこんな處に。』

男の兒を呼んで見せた。

男の兒は默つて顏を赧くして低頭(うつむ)いて了つた。其秘密をすつかり讀まれたやうな氣がした。

『誰がまアこんな處に放つて置いたんだらう？　こんなに錆びちやつて……。』と母親は庖丁の身の泥を落して、『本當に誰だか知らないけれど、使ひ忘れて、こんな處に放り出して置いたんだね。』

母親は不思議には思つたが、しかしこれが八歳の男の兒の爲たことゝは思はなかつた。まして物置の壁に顏を押しつけて泣いたなどゝは夢にも知らない。

古馴染の庖丁は新しい柄をつけて再び主婦の手に使はれた。男の兒は其の掘出された時の心地を大きくなるまで忘れなかつた。

つて來たもので、いろいろの記念があるばかりではなく、切れ味がすぐれてよかつた。柄が惡るくなると、幾度となくつけ更へて使つて居た。少くとももう二十年近くになる。齒の中央が灣形を爲して居るのを見ても、主婦には離れ難ない馴染のほどが想像される。母親は新しい庖丁を手にする度に、其の古い庖丁を思つた。

『何處へ行つたんだらう、不思議なことがあるものだ。定が持つてるんなら、何時か出て來さうなもんだが――出て來ないのを見ると矢張定が何うかしたんぢやないのか知らん。不思議なことだ。』

かう幾度も思つた。

けれどその心も薄らいだ。新しい庖丁に馴れると共に、古い庖丁のことは段々忘れるやうになつた。

初秋の晴れた日のことであつた。

蠶豆の畝の間に作つた小豆も熟して、二三日前に收穫れて了つた。跡には漬菜をまかうと思つて、母親はせつせと畑を耕して居た。もう大分耕されて三畝ばかりの畠には、新しい土の臭ひが充ち渡つた。母親は襟に懸けた手拭を取つては、鋤の手を留めて、をりをり額の汗を拭いた。

傍には栗の樹が涼しい蔭をつくつて居た。新しい荒莚に陶器の小さい火鉢、其處には螢のやうな火種が生けてあつて、母親の煙草盆と煙管とが置かれてあるが、男の兒は其傍で跣足で遊んで居た。草や花を取つて來て、莚の隅に並べては、一人で餘念なく獨言を言つて居た。

母親はむき惜い思ひをして、小刀で里芋の皮を剝いた。

少時すると、其男の兒の姿が、裏の畑に見えた。

もう日が暮れ懸つて居た。畑には蠶豆が熟して居た。唐蜀黍の二尺ほどになつたのがガサガサと夕風に靡いた。

落ちた栗の花が地上に白く見えた。

男の兒は唐蜀黍を分けて、蠶豆の畑の中に入つた。四邊を眴はしてから、體を低くして、蠶豆の畝の柔かくなつて居る土を掘つた。何をするのか解らなかつた。

やがて男の兒は其處から出て來た。裏に廻ると小屋があつた。その中には、澤庵を漬けた桶や薪や炭俵がごたごたと入れられてあつた。味噌桶の臭氣が強く鼻を衝いた。男の兒は其の小屋の入口の壁にひつたりと顏を寄せて、一人で悲しさうに歔欷げた。涙が留度もなく出る。よごれた筒袖で、拭いても拭いても出る。終には涙にぬれた手で、壁に字を書き出した。

庖丁の身は何處へ行つたか解らなかつた。新しい庖丁が町から買はれた。けれど母親は其の使ひ馴れた庖丁の無くなつたのを悔んだ。其庖丁は亡つた夫が若い頃大阪に在番に行つた時に、堺から土産に買

……』

『知らない、知らない。母さんの馬鹿！』

其處に老人が來て、

『お前はまた何故子供を泣かしてるんだえ……日が暮れる時分には、さうでなくつてさへ忙しいのに、子供を泣かして、一緒になつて、ケンケン言つて居たつて爲方がない……。』

『でもこの子は庖丁を隱して出さないもんだから。』

『庖丁をかくした？』かう言つて男の兒の傍へ寄つて、『本當に定や知つてるんなら、出さなくつちやいけないよ。母さんがお菜を拵へるので要るんだつて言ふからな、好い兒だから。』

『知らない、知らない。』

と男の兒は泣きながら頭を振つた。

『知らないッて言ふものを折檻したつて爲方がない、其處等に落ちてるんぢやないか。よく搜して見る方が好い。』

老人は腰を曲げて、四邊を晌した。庖丁の身は何處にもなかつた。

母親はぶつぶつ言ひながら、庖丁の柄を持つて、勝手元へ行つた。小さい竈には汁の鍋が懸つて、火が燃えて居た。俎板の上には、里芋の入つた味噌漉が置かれてあつた。

と男の兒は矢張頭を振つた。

『後生だから出してお呉れよ。この兒は本當に強情で仕方がありやしない。誰に似てこんなに性が惡いんだらう。亡つた父さんだつて、兄さんだつて、お前のやうな性の惡いものは家には一人もないのに……。よう、後生だから、お出しよ。隱してなど置かないで、出してお呉れよ。小言など母さんは言ひはしないからさ……。母さん、芋の皮をむかなくちやならないんだから。』

と苦々しさうに、腹立しさうに言つて、鼻洟（はな）を垂して低頭（うつむ）いて居る男の兒を小突き廻した。

『よう、お出しつたら、』と言つた母親の聲は尖つて顏は赤かつた。男の兒は猶默つて居るので、母親はいきなり懷の中に手を入れてさがし廻した。ふところの中からは草と折紙と一錢銅貨が出た。

『ありやしない！　ありやしない！　母さんの馬鹿！』

男の兒はたうとう泣出した。口を半分あけて、眼と鼻と額とを一つに寄せて、わアわア聲を立てた。

終ひには、

『母さんの馬鹿！』

と泣きながら手を擧げて打ちにかゝつた。

『呆れた兒だ。お前は母さんを打つ氣か、好い氣になりやがつて……。』と、母親はむら／＼と癇癪を立てたが、思ひ返して、『本當に、好い兒だから、出してお呉れよ。お菜を拵へるに要るんだから……

庖丁

庖丁の柄ばかり緣側に落ちて居たのを母親は手に取つて、

『庖丁を何うしたい。また、お前、何處かに遣つたんぢやないかえ？』

『知らない、知らない。』

と八歲ばかりの男の兒は頭を振つた。

『知らないぢやないよ、本當に、此子は爲方がありやしない。また何處かに遣つたんだねえ、此子は？』

『知らない、知らない。』

『だつて、此處に柄が落ちてるぢやないか、お前より他に庖丁なぞを持出して惡戲するものはありやしない。眞ちやんだつて政だつて………』

『知らない、知らない。』

『兎に角、私はまださういふ經驗をしたことがない。』

かう言つて誰も彼も新規蒔直しをやる。

………………………………

五十年……百年……千年……萬々年……萬々億々年……

考へれば考へるほど、頭が眩惑する。何處に行つても其力にぶつかる。パン、パン、パン、パンの叫び聲が耳を劈く。白い腕が其處にも此處にも見える。

自由！

自由とは何だ。自由とは何だ。そんなものが此の世の中にあるか。あり得るか。皆なその力の爲めに十重にも二十重にも縛られて、勝手に身動きが出來なくなつて居るではないか。右も左も前も後も、皆なその暗い壁だ、本能の暗い壁だ。

ふことを遣つて、『ねんね、ねんね、』と片言交りを言ふ。

自己の占領して居る母親を他が占領し始めたのが本能的に分るのだ。

つまり幼兒が廻らぬ舌で第一に表白する嫉妬の聲だ。

で、五月位になると、母親の乳が細くなる。腹の中の兒と外の兒との競爭がいよ〳〵始まる。すると外の兒は今迄とは變つたやうに氣難かしくなつて、癇癪は起す、腹は立てる、泣く、喚く。だましたつて言ふことを聞くものではない。

生存の爭ひ！淺ましい食の爭はもう其頃から始まつて居る。

そしてこれが戀の爭鬪、愛の爭鬪、蠶食の爭鬪、死の爭鬪となる。」

けれども女の兒は矢張平氣で枕を脊に絡りつけて、

『ねんねんよう、ねんねんよう。』

と唄つてゐる。

其聲は時代から時代へと續く。撲滅したくつても撲滅されない。兎に角自分で遣つて見なければ承知が出來ないといふ風で、ドシ〳〵新しい發展を遂げて行く。

何と言つて聞かしたッて駄目だ。つまらない一生だの、悲慘な生涯だの、殘酷な世の中だのと言つて聞かせたつて何だつて駄目だ。

旨く腹に中つた。

猫は慌てゝ飛び下りたが忽ち緣の下に逃げて了つた。

翌日見ると、矢張その黑猫は其處に居た。

危難よりも飢餓が恐ろしいのだ。矢張かれ等も係蹄の中に陷れられながら、それを係蹄と知らずに居る。

食ふことゝ、寢ることゝ、罪惡を行ふことゝ……。それより他に何もない。我々も猫と同じやうに矢張庇に立つて、こつそり何か覘つて居るのだ。

十一

女の兒が枕を結付けに負つて、ねん〳〵ようを遣つて居る。

『ねん〳〵よう!』

何も知らずに遣つて居る。

それがまた決して女の兒でなければさういふ眞似は遣らない。遺傳の力、本能の力、それがそんな無邪氣なものにも容赦なく働いてゐるのだ。

また、かういふことがある。母の腹に餘り近くにおとが出來ると、幼兒は無意識に股ぐらかがみとい

居るといふことが僕の心を暗くした。

暗い力が自分と猫とに同じやうに流れてゐるのを發見した。

互ひに弱點を握るといふことがよく人の口に上る。

互ひに弱點を握る！　つまり悲慘なる共食狀態だ。猫だから、何でもないが、もしこれが同じ人間で、かうした他人の暗い心理を攫んだのなら、つかまへられた奴も災難だが、攫んだ奴も災難だ。弱點を握つた以上、それを利用せずには居られぬのが人間である。

夫婦がそれである。兄弟がそれである。親子がそれである。友人がそれである。師弟がそれである。戀人同士が殊にそれである。敢て敵に握られるのを恐るゝ勿れ、敵よりも味方に握られるのが一層恐ろしい。

猫はまだぢつとして居る。

小窓の中では、膳や皿をガチヤガチヤさせて居る音が聞える。下婢の晴れやかに笑ふ聲も聞える。

僕はそッと立つて行つた。

餘程近くへ行つても、まだ佝難の其身に迫りつゝあるのを知らない。依然として耳を立てゝ物音を聞きすましてゐる。

大きな石を拾つて投げた。

にも人間が居るんだ。虚誕をついたり、姦淫をしたり、罪惡を犯したり、人殺しをしたりする人間が居るんだ。憎み、ひがみ、嫉妬などゝいふ分子が其處で刻むやうに呼吸をついて居るのだ。淺間しい！淺ましいが爲方がない。蛇のやうに生れぬ前から人間に憎まれて居る動物でさへその種は數千年來撲滅されずに繼續して來て居る。

犬殺しの持つてるやうな太い棒を提げて、片つ端から人間を撲滅して歩き度い。少くとも人間にも眼に見えるさうした大きな動物があつて、ドシ〳〵迫害を加へて吳れゝば好いと思ふ。

駄目だ、駄目だ、駄目だ……

坐つて居たが、ふと見ると硝子戸を透して、梧桐の葉がガサ〳〵動いた。其處には庇が少し出て居て、下に小さな窓があつた。夜は其處から灯が葉を漉してチラ〳〵見えた。

庇の上に一疋の黑猫が居た。

眼をギヨロ〳〵光らせながら、頻りに四邊に氣を配つて居るらしかつた。しかし遠く離れて居るので、此處にかうして人が見て居るとは流石にかれも氣が附かなかつた。

僕はジッとそれを見てゐた。

猫の暗い心理――生存の爲めに、これから臺所に人の居らぬのを耳で聞き眼で見鼻で嗅いで、こつそりその小窓から入らうとするさま、それよりもさうした暗い狀態をそのものに知られずにかうして見て

女の親と男との本能爭ひが起ると、親はいつも敗北する。敗北するやうに出來てると言つて好い。

力と力との爭鬪――

結んで解けない爭鬪、第三者が解かうとしても解けない爭鬪、一生喧嘩をしても何うすることも出來ない爭鬪、その爭鬪が時とすると、何の苦もなくすぐ解け去つて了ふことがある。力と力とが忽にして水平に歸し去つて了ふことがある。

『何故だらう？』

かう訊ねるものがある。

『解らない？』

『解らない。』と空が反響した。

泥沼の向うの家には矢張人が居ない。裸蠟燭がチラ〳〵する。

十

懷妊して蒼い顏をした女が、腹の處をぢつと見て居た。

『そらまた動いた。』

メリンスの帶の縞の模樣が動くのが見えるといふ。見える筈がないのだが確かに見えるといふ。其處

くやうなものはありはしない。

けれど泣かざるを得ないではないか。苟くも一度歡樂を縱まゝにした上は、それが一生涯附いて廻るのだもの、歡樂の報酬は必ず來るのだもの、一度で濟まして置くなどといふことは出來ないのだもの。が勝利者であるか女が勝利者であるか何方だか解らないのだもの……。

男離れたくたつて離れられない。

後の不愉快――それは矢張飽食の不愉快と同じだ。その不愉快の狀態は丁度泥沼の汚ないのに似て居る。それで居て、それがある期間を通過すれば、其力は更に前と同じやうな鮮かさと生々しさとを以て迫つて來る。

其力!

その力から此世界が生れて居るのだ。その力から此の人間が出來て居るのだ。その力からこの悲痛悲慘な狀態が生々とした色を着けて居るのだ。呪つて好いのか、崇拜して好いのか、平氣でそれに服從してゐれば好いのか、分らない。

男が逃げようとすると女が追ひかける。女が逃げようとすると男が追ひかける。『もう、どうせ外に嫁に行くことは出來ない體だ』『肉體も精神も皆な己の所有物だ』『親だツて何だツてもう何うすることも出來ない』

其灯で室の中が見透かされた。其處には誰も居なかつた。簞笥のやうなものと鏡臺のやうなものと寳巨のやうなものとが朧ろげに眼に映つた。

蠟燭の火がいやに赤く黄い。この世ではないやうだ。周圍には誰も居なかつた。茶湯臺にビールが二本明けられてあつた。丼には大根のあさ漬が二切入れられてあつた。

泥沼の臭ひが時々鼻を衝いた。夏の暑い日に腐つた臭ひだ。風は全く絶えて、ムツとした暑さが汗を誘つた。

家に添つた路が一二間ばかり微かに見える。軒の梧桐の葉が靑く灯に照らされて居る。この路を時々白地を着た人達が闇から來て闇へ出て行つた。大抵二人連であつた。艶かしいそゝるやうな聲も交つて聞えた。ハアモニカを吹いて行く靑年の後には庇髪に結つた肩揚のある娘が跟いた。

酒を飮んで居る人々の顏は蒼白かつた。肉の疲れ、心の疲れ、神經のつかれは歴々と見えた。

『本當に水だらうか。』

かう思つて、またマッチをすツて擲つて見た。矢張途中で消えた。

裸蠟燭がチラ〳〵する。

其時本能の話をしたことを思ひ出す。

處女が始めて肉慾を知つた時に、悲しくなつて泣いたとある本の中に書いてあつたが、今の女には泣

『寺――さうだ、寺より外に逃れる處がない。』

雨と泥濘の中をびしよ濡れにぬれながら歩いて來た。

九

夜だ。

汚い泥沼に面した茶席がゝつた小さな間で酒を飲んで居た。

榮えの後の衰へ、醉ひの後の醒めと言つたやうな厭な氣が四邊に充ち渡つた。闇の上に闇が蔽ひかぶさつて、何處が路だか何處が森だか解らない。

『其處は水ですか。』

と誰かがうつろのやうな聲で言つた。

マッチを抛つて見た。幾度投つて見ても途中で消えた。闇は矢張闇だ。池だか水だか解らない。池だと知つて居ても矢張さうでないやうな氣がした。

闇の中に一ところぱツと明るいところがあつた。よく見るとその灯はランプでも瓦斯でも電氣でもなく、裸蠟燭だ。燭臺に一本ぽつねんとして立つて居た。その影がチラ〳〵した。それで『成程其處は水に移つてるんだな。』といふことが飲込めた。

かうした話はいつもした。

時には眞面目な顏で、『その中、樂にして遣るサ。子供とお前と食ふだけの財產のある樂後家にしてやるサ。後家といふものは羨しさうなものだ、』などゝ言ふこともあつた。妻は又妻で、『死んだら、妾の保險が二百圓あるから、好きな女を貰ふ結婚の費用になさい。』

こんなことも言つた。

八

夥しく醉つて居た。

ランプも黃ろく見えた。人の顏も黃く見えた。頭腦がぐら〳〵した。

外には雨がザン〳〵降つて居る。

疑惑が盛に起つた。征服者だか敗北者だか解らなかつた。

傘がないので、びしよぬれにぬれた。路は暗い暗い林の中を通つて居る。此處を少し行くと、蘆荻の茂つた泥深い沼があつたのを覺えて居る。雨滴の大きいのが頭の上に落ちるので氣がついて見ると、帽子を被つて居なかつた。帽子は床の間に置いた。床の間には萩と桔梗とが生けられてあつた。その鮮かな色が雨の降頻る暗い闇の中にはつきりと浮んだ。

『また始つたぢやない、眞面目に言ふのだ。夫婦といふものは四十二になつてもお互ひに喧嘩しなければならないやうな間柄に出來てるんだ。……厭だ！、厭だ！』

互ひに默つた。暫くして、

『ぢや、何うすれば好いんですす？』

『厭だ！　厭だ！』

と打附けたやうに言つた。

『お前は此間亭主孝行だつて言はれたね。』

と言つて言葉を繼いで、

『亭主孝行！　旨いことを言つたもんだ。お前は何處かさう出來てゐるよ。さういふ風に見えるやうに出來てゐる。何處か從順なところがあるんだ。貞節らしい處があるんだ。』

『何も私が亭主孝行と言はれたつて、喜んで居る譯ぢや有りません。』

『誰も喜んで居ると言ひはせんよ。さういふ風にお目出度く出來てると言ふだけだよ。』

『たんと仰しやい、……たんとお酷めなさい！』

『厭だ！　厭だ！』

と立上つた。

れて出かける男の人はいくらもあるぢやありませんか。』

『己にはそんなことはちつとも面白くないから駄目だ。……人が持つてるものに手を出して見たつて爲方がない。』

『人が持つてるものとは？』

『お前の持つてる子供と言ふことだ。』

『また、あんな事を言ふ……ぢや、子供を貴郎が育てれば好い。』

『育てられないから言ふんだ。子供は女でなくつては育てられないやうに出來て居るから情けないんだ。』

『それぢや、男は一家の主のやうに、妻に對しても子に對しても立派に嚴かに男らしくして居れば好い。』

『立派に、嚴かに男らしくとは、何ういふことだ。』

『……』

『働いて、金を澤山取つて、後の萬一のことを考へて、亭主が死んでも、樂に暮して行けるやうにして置いて遣れば、それで好いんだらう。』

『また始まつた。』

『さうさ――』
『女は何うしたら好いんでせう。』
『何うしたらつて――子供さへ育てゝ居たら好いのさ。』
『だつて、子供にも厭々した。』
『うそを言へ。』
『うそなものですか。毎日子供と喧嘩ばかりしてるぢやありませんか。』
『それがうその證據だ。喧嘩でもする相手があるから女はまだ幸福だ――。』
『まア、あんなことを……』
と妻は淋しく笑つて、『男といふものは勝手なものですねえ。』
『勝手はお互ひさ。……兎に角女は子供があるから幸福だ。亭主の家に居る時だけ、神妙に小さくなつてゐるが、亭主が出かけた跡では、子供を相手にぼた餅でも拵へて、暢氣に遊んで居るぢやないか。何しろ子供と笑つたり泣いたりして暮らして居るのを見ると憎くなるよ。』
『ぢや、貴郎もさうして子供と遊べば好いぢやありませんか。』
『暢氣なことを言つてる。己は女ぢやない。』
『だつて、子煩悩な男の人も世の中には隨分あるぢやありませんか。緣日に奥さんと一緒に子供をつ

今日其姉が來て居る。

汚いみすぼらしい風をして居る。

『何うしたねえ？』

姉は低頭いて居る。年は四十二、髪は半ば白くなつて居た。

矢張喧嘩をして出て來たといふ。四十二になつて矢張同じやうな喧嘩？

僕は言つた。

『一體何うしたんだ。不眞面目極まるぢやないか。四十二にもなつて、夫婦喧嘩をして居るものが何處にある。世の中といふものを眞面目に考へて見ないから惡いんだ。喧嘩をしてつまらないとか、馬鹿馬鹿しいとか、世間體が惡いとか、さういふことを考へさうなものぢやないか。』

又次のやうなことを言つた。

『お互ひに喧嘩を面白づくで遣つてゐるんぢやないか。喧嘩はつまらないが、喧嘩から仲直りをする時の心持は格別好いもんださうだ。』

七

『三十八九になると、男はそんな風になるんですねえ。』かう妻が言つた。

つた兄の書齋には其頃賴まれて仲裁に入つた男が幾人となく出たり入つたりした。

後には兄は頑として强硬の態度を取つた。『とても一緒に添はせて置いたツて駄目だ、斷乎として其間を裂く方が雙方の幸福だ。子供は子供で何うにでもなる。』かういふ決心をした兄は容易に其仲裁に應ずるやうな氣色を見せなかつた。

『始めて中に入つて下すつた方には、私の言分が非常に不人情のやうに聞えませうけれど、とても一緒にして置いても駄目なんですから。』

かう言つて拒絶した。

それにも拘はらず、姉は矢張逃げた。それは日が暮れてからであつた。鳥渡の間に姉の姿が見えない。四邊をさがして見ても矢張見えない。下婢は『さう思へばお姉さんは風呂敷をかゝへて、裏からこつそり出て行つた。』といふ。

『馬鹿な奴だ！』

と兄は言つた。

『あゝして一生を暮すんだ。』

と母もしみ〴〵言つた。

……………………………………

がう言つて怒つた兄も死んだ。

この姉の一生を考へると、隨分いろ／＼なことが眼に浮んで來る。悲慘なる夫妻蠶食のさまが歷々と見える。

十月の初め頃、山手の屋敷町の寺の門前に髯の蓬々と生えた三十七八の職人風の男が三歳位の女の兒を伴れて立つて居た。

『お母が居ない――』と子供は泣いて爲方がなかつた。細い秋雨は蕭々と降つて居た。屋敷の庭からは木犀のにほひがした。

『母さん、もうこれから決してこんな不都合はしないから、今度だけと思つて了簡して、貞を返して下さい。』

母が行くと手を合はさぬばかりにして、其男は賴んだ。

『丸で芝居のやうだつた。』

と母は其時言つた。

姉の遁げて來た跡を追つて、其亭主が里の家の周圍をつけねらつたのも一度や二度ではなかつた。家の周圍には畠があつて玉蜀黍がガサガサと風に靡いた。朝早く顏洗ひに井戸端に行つた兄が、前の普請場に其の見すぼらしい風をした弟婿が後向になつて寢て居るのを發見したこともあつた。夕日のさし渡

母はいつも姉にさう言つた。
『子供の爲め――』
かう言つては、姉は幾度となく仲直りをして歸つた。
しかしそれは單に子供の爲めでなかつたことは言ふまでもない。喧嘩しても矢張亭主が時々戀しくなつた。
『貞（姉の名）の夫婦喧嘩はくせ見たいなものだよ。懷姙になりさへすると、屹度出るの入るのと言つて大騷ぎを始めるのだよ。』
後には母も呆れてかう言ふやうになつた。
成程喧嘩をする時には屹度身重になつて居た。その度毎に一人づゝ子供が產れた。次が產れる頃には一番下のが屹度乳離れをする位になつて居る。子供等は一人々々皆な母の跡を慕つて里の家に遣つて來るやうな眼に逢つた。
『貞にも困るよ。』
と言つた母も死んだ。
『本當かと思つて、一生懸命になつてると、すぐまた亭主心がついて、歸つて行つて了んだから馬鹿馬鹿しい。もう相手には決してなれない。一生懸命になつてわざとかつがれるやうなものだからな。』

烟筒からは煙が出て居た。

時々尖つたやうな汽笛が鳴つた。

僧侶は碌々お經を讀まなかつた。椿の葉の暗く繁つた蔭に穴が掘つてあつて、それに小さな四角の棺を投り込んで土を掛けた。姉も亭主も泣いた。

死んだ兄が其時、

『父さんや母さんに仲直りをさせやうと思つて、死んだのだ。お前が心配して死んだのに、父さんも母さんも、今日から了簡を入れ替へて、もう決して子供に心配をかけるやうなことはしないさうだから……』

言ひかけて聲は曇つた。此の娘の三歳の時から、姉はあんな薄情な亭主には添つて居られないと言つて喧嘩しては里に歸つて來た。此の娘は父と母と喧嘩するのを見て常に心を痛めて居た。姉が逃げて來てるると、

『お母さんは來てますか。』

と、まだ十歳位の幼い娘が跡を慕つて遣つて來た。

『お前、子供を泣かせるのが可哀相なら、子供の爲に、身はないものと思つて、働いたら好いぢやないか。』

Indifference of Nature.

寂寞なる人生に本能の跳梁――沒交渉の人間の離れ難い肉の束縛。

本能の無限の跳梁は人生の底に橫れる寂寞を得て、益々其力を逞うする。

本能から起る快樂に由つて人はその寂寞を忘れやうとする。しかしそれは一歩々々深い係蹄の中に陷れられて行くのであるのを知るものはない。

……………………………………

ある日、社から歸つて來ると、姉が來て居た。

此姉には四年ほど逢つたことがない。

四年前に、此姉は僕の家から斷りなしに亭主の家に逃げて戻つた。『もう決して二度と歸らない。』と愛想をつかして出て來た亭主の家へ歸つて行つた。

それが出るの入るのと苦情を言ひ始めてから五度目であつた。

姉には子供が三人あつた。五人あつたのだが、二人はその貧しい夫婦喧嘩の中で死んだのだ。

其總領の娘の子が十五になつて肺病で死んだ時のことを僕は覺えてゐる。淺草の汚い場末の棟割長屋からその葬式は出た。秋の日の午後の黄ばんだ光線を受けて、長屋や寺や小工場の煙突や埋立てた田圃などの續いた間を花も導師もない棺が通つた。

同じ道を通つて、同じ町を曲つて、同じ社に出勤する。社に同じ顔ばかりで、毎日々々同じことを繰り返し巻き返し遣つて居る。風が吹くと木の葉が動くやうに、この人間も矢張ある力にあやつられて動いてゐる。

路の角にサハノツルと書いた看板がある。是れは言ふまでもなく酒の看板である。その看板は毎日毎日二度づゝ僕の眼に映る。午後にはいつも夕日がまともに眩しいほど射してゐる。

それが何の反應をも呈さない。

鼻缺けの小使が毎朝バケツを階段の中ほどに置いて、雑巾を水に浸して、いかにも倦(あ)きたといふ風でだらしなく其處等を拭(ふ)いてゐる。

矢張何等の反應もない。

室の中央に勤惰計(タイムレジスター)があつて、自分の番號を推すとカンと鳴る。そしてそれが巻きつけた細長い紙に出勤時刻を青く捺した。しかし矢張何等の反應もない。

反應がないのが辛い。淋しいのが辛い。人間と人間と、飽まで沒交渉で、何を言つた處で、何を爭つた處で、要するにそれは木の葉が風にさわぐやうなもので、何うにもならない。泥醉(よつぱらひ)同士が互ひに寄り集つて、お互ひに解りもしないことを聲高く罵り合つて居るのと同じだ。

表面は賑かな活動の人生——しかも底は唯だ寂寞！

肉縛り！

考へて見給へ、此位情ないことがあるか。肉縛りにされなければ生きて居られない世の中である。爭鬪と煩悶と苦痛と矛盾とそれが一生涯續くのだ。

平凡と單調との中にこの肉縛り！

ある友人は言つた。

『そんなにつまらない家庭なら、ドシ〳〵破壞したら好いぢやないか。そんなにつまらぬ世の中ならドシ〳〵辭職をした方が好いぢやないか。』

破壞したり辭職したりすることが出來るやうな簡單な繩や罠なら、何にもさうヤキモキすることはないのだ。破壞せられざる辭職せられざる肉の繩でくゝられて居るから辛いのだ。

『ぢやそれに服從するさ、悟りなり何なり開くさ。また必要なら眼も閉いでしまふさ。』

かう言つて平氣で居る。

平氣で居られる。

六

電車も倦きた。

弱い獨立の出來ないものには、その程度に從つて、やさしいとか可愛らしいとかいふ人の同情をひくものが附いて居る。

此處に二人の女がある。一人は意志が强く肉體も完全に發達してゐる。一人は感情ばかりで、意志が弱く、肉體も弱い。さういふ時には大抵は一人は人に可愛がられ、一人は人に憎まれるものである。しかし――さういふことが明かに解つて居て、神聖なる愛情でも何でも無いといふことが明かに解つて居て、それで猶其力に支配されるといふことが心外だ。

心外だが致方がない。

一人前になつてから子は親に向つて何んなことを言ふと思ふ。

『自分は親の爲めに生きて居るんぢやない。自分は自分だけの滿足を貰はなけりやならない。』

でなければ、

『何も、親に自由にされる義務はない。親には子を養ふ責任がある』

などゝいふ。

親となり子となつたのが既に悲慘である。夫となり妻となつたのが既に〳〵悲慘である。生れながらにして、夫妻親子となるべき罠に陷れられて居るのが第一の悲劇である。

金縛りといふことがあるが、それよりも一層辛いのは肉縛りである。

生れ落ちるとから、ちやんと生存に必要なる力を持つて來る。滑かな暖かい肉や、柔かに乳を吸ふ力や些やかな可憐さうな泣聲や、是等が總て母親の同情を動かすやうに出來て居る。一刻も止む時のない不斷の要求をも甘んじて滿たして遣らうといふ氣を母親に起させる。

三十日も經つと、もう母親をちやんと見覺えて居て、其後姿を見送つたり何かする。間もなく笑つて見せたり何かする。

『可愛い子！』

母親はその柔かい頰に接吻する。

世間の人はこれを名づけて愛情といふ。神聖なる愛ともいふ。愛情の鎹などゝいふ字も出來て居る。

實際さうだらうか、實際愛情の鎹だらうか、生存の必要の爲に生じた利己の自家防衛ではないだらうか。

當然の自家防衛！

『かアちやん。』

『とウちやん。』

これは男が女の肉體を得るまで、『わが愛する君』とか『わが命を支配する君』とかいろ〳〵な上手なことを言つて女をたらすのと同じことだ。目的は女を得るにあると同じやうに、子も矢張獨立生存の出來るまで哺育して貰ふ爲めの必要のお世辭である。

かへて、亭主は岩乗な體格をして、肥つた脛を露はにせつせと働いて居た。

本能作用は此處にも完全に其力を發展して居るのを僕は見た。

僕は不愉快を感じた。

亭主は朝早く河岸に買出に出かける。それを送り出して、上さんは今一寢入遣ると見える。何うかすると、日がカン／＼照つても雨戸も明けずに居ることがある。一度などは、亭主が魚をかついで歸つて來ても、まだ寢て居るので、お宮――とか何とか言つて戶を叩いて居るのを見たことがあつた。

一月ばかりは、上さんは蒼い顏をして寢たり起きたりして居た。汚い蒲團から髮を蓬々とさせた女の頭が見えて居た。

やがて子供が生れた。

此頃では風車が天井から吊つてあつて、下に赤い小さい枕と月代の生えた兒の頭が見える。

騙されて、罠に入れられて、子供を一人育てなければならないはめに入つたのも知らずに、やれお七夜だ、やれお頭つきだ、やれ赤飯だと騷いで居る人間の愚かさ加減が解らない。

五

子がまたあれで中々親をたらすことが上手だ。

いたものだが、段々得意先が出來て、其中には金廻りもよくなつたと見えて、やがて新しい商賣道具を新調して、天秤で威勢よく得意廻りをしてゐるのを見懸けるやうになつた。

六疊の一間に簞笥も見えた。

松魚の刺身をつくつて居ることなどもあつた。

矮鷄を二羽飼つた。

それに餌を撒いて居る赤い手絡の丸髷を非常によく似合ふと思つたこともあつた。

雨の後の朝日には、蛇の目傘と番傘とが干してあつた。

亭主は板きれを前の普請場に居た大工から貰つて、それを箱庭にして、其處に築山やら池やら橋やらをこしらへて、樂んで居る。陶器の小さい燈籠なども買つて來て其處に置いた。仕事を早く仕舞つた時には、餘念なくそれに水をやつたり何かして居るのを常に見懸けた。

亭主の留守に近所の若者が聲をかけて話して居ることもある。

上さんが髮を亂していつにも似ず蒼い顏をして居ると、

『餘りたしなみがわるいから、さういふ眼に逢ふんだ！』

と聲を立てゝ笑つた。

氣を附けて見ると、若い上さんは初めのやうな元氣がなくなつて、常に蒼い顏をして居た。それに引

高臺の屋敷町との連絡上からその低い田が埋立てられて貸地になり、やがて繩が張られて貸家が建つた。

其貸家は久しく空いて居た。

人間の移住して來る狀態は、餌のある處に集つて來る蟲や鳥と同じことだ。高臺が開けなければ其田は埋め立られない。屋敷町が開けなければ其長屋は建てられない。魚類の必要があつて始めて其處に肴屋が移つて來た。

始めは氣にも留らなかつた。

『これでも肴屋かな、けちな肴屋もあつたもんだ。』

こんなことを思つたきりだ。

處がある日其上さんが綺麗に丸髷に結つて居たのを見た。赤い手絡が秋の晴れた日の空氣に際立つて鮮かに見えた。年は十九か二十位であつた。

『あれでも初めて世の中に出て、立派にならうと思つて、一生懸命に働いて居るんだ。前途に色々な苦痛があるのも知らないで、春のやうな希望を抱いて遣つてるんだ。本能に騙されて居る中が羨しい。』

かう思つてから、段々其若夫婦の生活に眼をつけるやうになつた。

時には亭主（と言つても二十四位）が一生懸命に板の間を洗つて居ることもあれば、細君一人で洗濯をして居ることもある。初めは小さい半ぎりを簡單に肩に載せて、見すぼらしい風をして肴を賣つて步

人間の種類から言へば、夫に妻に子に老人に下婢、室の構造から言へば、前にも言つた座敷に居間に勝手、ちやんと人間の家庭の型が出來上つて居て、其時間々々には、何處の家でも皆な同じやうなことをして居る。

かう考へて來ると、寢室と人生とがまた思ひ出されずには居られない。

僕は家屋の中から庭に遁れる。庭から門外に遁れる。門外から野に遁れる。

野も矢張穹窿の型に篏つて居る。

泣いたッて叫んだッて駄目だ。

四

毎日通ふ路に若夫婦の肴屋が住んで居た。

此家屋は四軒長屋で、向うの隅がその肴屋の若夫婦、其隣が西洋洗濯、其隣が鷄を飼つて、『生み立たまごあり』などゝいふ看板を出して居る。

此處は二三年前まで田だつた。今、鬚の立派な軍人や、ハイカラな洋服を着けた會社員や、菫色の袴に靴を穿いた女學生などの通る大通りは、田と田の間の細い畦道であつた。小川に架けた橋も丸太を二本並べたきりで、夜など危なくつて通れなかつた。それが段々開けて來た。高臺が屋敷町になるにつれて向うの

屋敷町――

三

垣と門とで家々が出來て居る。其間を大きな通りや小さな路が縱橫について居る。朝に夕に豆腐屋のラッパの聲が聞える。流行のパンパンパンパンも聞える。

大小の別はあつても、門に玄關に居間に座敷に書齋に臺所に厠。座敷には額や幅物が屹度懸つて居る。居間には屹度簞笥や服簞笥が置いてある。長火鉢も置いてある。其前には夫と妻とが坐つて、茶を飲んだり菓子を食つたりする。時には感情の衝突などをすることもある。

貸家を建てる時、大家は、

『此の間と此間とは通れるやうにして置かなければ不自由だ。客が來ると第一困る。それに臺所と茶の間とを今少し接近させなければ具合が惡い。それに何處の家にも老人といふものが居るものだ。一つ離れた間をこしらへて置かなければいけない。』

こんなことを言つて、成たけ便利の好い借手の早くつきさうな家を建てる。

盜賊はまた物を盜む目的で、この家庭といふものを研究して居る。新築の家があると、夜、こつそりと、その構造を見て步く。

横に廣い顔と……あゝあゝもう倦きた！』

『變つた顔を少し見ていらつしやい。』

それには頓着せず、

『よく世の中の人は倦きないなア。同じ顔を毎日々々見て、同じことを毎日々々言つて、三度の食事も大抵型に嵌つたものを食つて、よくそれで生きて居られるなア。』

かう言ふと、

『だツて、それは無理ですもの、誰れだツて皆なさうして生きて居るんですもの。』

『ぢやお前などは、さういふ感じは起らんかねえ？』

『起したツて仕方がないぢやありませんか。』

『仕方がないだけで、起さないで居られるんだね。』

『え、さうですとも。』

明瞭なる答である。かういふ明瞭なる答を爲し得られる人は幸福だ。罠の中に入つて居ても罠と知らずにはまつて行く人間が羨ましい。

本能萬歳！

る。それなのに、其の無限の『生きた墓の割棟長屋』を狭い本箱の中につくられるのは、やり切れないことだと思つた。

死んだら、遺言をして葬式などはせずに焼場に持つて行つて骨にして、それをこつそり何處かに埋めて貰ひたい。石碑などは忘れても建てゝ貰ひたくない。すぐ忘れて貰ひ度い。

いつか庭に下りて居た。

梧桐に山吹に芭蕉に沈丁花に椿に櫻――表庭に廻ると、扇骨子に糸檜に楓に寒山竹に高野槇にひよろ松――いつも同じだ。

敷石の數も矢張十八しかない。

それがまた癪に觸つた。何故いつも同じである！　何故いつも同じである！　何故いつも同じである！

長火鉢の傍でせつせと裁縫をしてゐる妻に、

『いつも同じ顔をして居るなア。』

と言つて見た。妻は笑つて、

『また始まりましたね。』

『だツてさうだもの、お前の蒼い汚點のある顔と、餓鬼共の涎を垂らした顔と、お金（下婢）の肥つた

同じ見飽きたものばかりで、眼に映るが早いか、頭腦はすぐそれを反撥して了ふ。

『こんなものは無い方が好い。いつそ外して物置にでも藏つて了はうか。』

かう思ふが、しかしそれを實行するほどの熱心もない。緣側にある籐椅子に横になつて見詰めて居ると、不思議にもそれが皆な壁と同じものになつて了ふ――壁以上の感覺は起らなくなつて了ふ。そしてその灰色の壁が空の灰色と無窮に續いて居るかのやうに思はれて來る。自分の心も頭も矢張それと續いてゐる。

頭を石に打付けて了ひたいやうな不思議なイラ〳〵する氣になつた。

籐椅子にも安んじて横はつて居られない。

書齋に入らうとしたが、何だか其處に入るのも厭な氣がする。其處にはイブセンやツルゲネエフやモウパッサンの幽靈が居るやうに思はれる。空の上を飛んでホンヂユの沼の臭氣を嗅いだ話や、椅子や家具がグン〳〵鳴つて空を飛んだ話などが思出される。それに、本箱の中の本が、いつも同じなのが癪に觸つた。イブセンの隣には屹度ダヌンチオがゐる。ゾラと並んでは屹度ドオデエが居る。それが大抵は讀んで知つて居る。何んなことが書いてあるかといふことがすぐ思ひ浮べられる。かれ等が一生かゝつて、小さい眼で世の中を見て、かうして遠い東洋の日本の果ての書齋の中にまで『生きた墓』を築いて居るかと思ふと、情けなくなる。唯の墓でさへ厭だ。青山の共同墓地の割棟長屋を見ると、ゾッとす

止むを得ないぢやないか。

二

平凡と單調！

實に平凡だ、單調だ。世の中に何がある。何んな色彩がある。何んな興味がある。飢渴と飽滿、不平と得意、それが本能の力に飜弄されて、人生の表面にさゞ波を立てゝ居るばかりだ。

『今日、軍人の弟から久し振で便があつた。

――田舍にかくれて、新兵共の相手をして、練兵場の埃に眞黑になつて暮し居り候。

こんなことが書いてあつた。それを妻が見て、『旨いことを言つて居なさる。もう澤山貯金が出來たでせう。』など丶言つた。練兵場の埃に汗みどろになつて、號令をかけて一生を暮す軍人も軍人だが、かうした手紙を見てさへ、すぐ金のことを思ひ出す女も女だ。

默つてふいと立つた。

『長火鉢のさし向ひもつまらないし、子供をからかつて見たところでおあづけをしたりチン〳〵をしたりする犬以上の面白味は得られない。仕方なく座敷に入つて見る。床には依然として布袋の幅が懸つて居て、違ひ棚には鉢の蘇鐵の葉が埃に塗れて白くなつて居る。長押の油繪、水彩畫、何れもこれも皆な

けれど總て『覺める』とか『自覺する』とか言ふ形は、本能の上から言つて餘り好ましいことではないと見える。『全く覺める』といふことが生存上出來ないのを見ても、その間の消息は略々解る。覺めない中には、精神がそれを助けるが、覺めて來ると今度は肉體がそれを助ける。

子が生れると、夫妻の關係は益々肉體的になる。

肉體と肉體――自我と自我、其處に猛烈な悲慘な蠶食狀態が始まる。

子が生れると、夫に對する妻の愛情が薄らいでそれに集る。夫などは何うでも好いといふ形になる。尤も女に言はせると、さうぢやないさうだ。子を育てるのに忙しいから、ついさういふ風になつて行くのださうだ。然し、證據がチャンとあるから駄目だ。第一、乳といふものがある。これはまだ兒が世の中に出ない中から、十箇月といふもの既に完全な哺乳作用をつゞけて居る。

女には兒が腹に居る中から、『自分の兒』といふ愛情が知らず識らずの間に成り立つて居る。兒は男のものでなくて女のものであるといふ運命は、その最初から明かにきまつて居る。

第二に、其兒のまことの父親は誰であるかといふことは女より他に知るものがない。男に取つては、隨分大きな苦痛にもなり煩悶にもなる秘密の鍵をちやんと女に握られて居る。

見給へ、母親が其幼い兒を膝に抱いて、暖かい白い頰を胸に當てゝ、張つて來た乳房を含ませてゐるさまの心地よささうなうれしさうな狀態を。男が保留された本能作用を自由に家庭以外に縱にするのも

り、食ひたくもないお汁粉を一緒に食べたり、時には社からの歸りに菓子屋に寄つて妻の好きな餅菓子を貰つて來て遣つたりしたものだ。それに初めての兒が生れた時には、一廉お父さんになつた氣で、此兒が生長くなつたら何うしやうの、海老茶の袴を穿かせてリボンをさせて天晴小さな女學生に仕立て丶一緒に伴れて歩いたらさぞ好からうの何のとつまらぬ空想に耽つたものだ。それが何うだ。今では、其娘の兒が十歳になるが、その空想の一端でも實行が出來たことか、無類のわからずやのわるあがきをする悪戯ものになつて、女でありながら、男の兒を酷めて泣かせたり、お錢をねだつて外で立食を遣らかしたり、それは見られた態ではないといふ始末だ。

妻だつて矢張其通りだ。子供を產んでから、狀態はすつかり變つて了つた。お互ひに空想のある中には努力もすれば反省もする。時には恥かしいなど丶いふ若々しい顏色も見せることがあるが、兒を產んで、これで一家の主婦といふ地位が定ると、すつかりその樣子が變つて、我儘といふ地金がドシ〳〵出て來る。つまり女は兒を產んで初めて現實に觸れて來るのだ。

その現實に觸れる狀態が女のは一層烈しいやうに考へられる。今まで矯めて押へて居ただけそれだけその反動が強く來るといふ譯なのかも知れない。

社會と自分との關係、自分と夫との關係、自分と兒との關係、それが意識されないまでにも分明と解つて來る。肉慾の上にも覺めて來る。

けれど一體夫妻の關係からして既にさう出來てゐるんだ。

『妾はあの人でなくては厭！』

『戀しき戀しきわが天使！』

始めはこんなことをお互ひに言ひ合つて美しい夢を見てゐる。その爲めには世間の義理どころか、十餘年來養育して貰つた親をも弊履のごとく捨てゝ顧みない。その癖、男も女もある滿足を得さへすれば、それでもうさめ心地になるのはちやんときまつてゐる。少し注意して居さへすれば、何日の何時にかれ等は其の慾の滿足を得たかといふことが歴然として解る位である。

『あんな女を戀人にしたのかなア。』と言つた風な言葉を屹度男は其時に利くものである。

そして其時から男女の間の悲慘なる關係が續く。離れた心を合せやうとする努力、弱點を押へて平和な美しい家庭をつくらうとする努力、昔の美しい夢を再びくり返さうとする努力――それが皆な空しい努力だ。

けれどこの努力が空しい努力であるといふことが、却つて生殖とか本能とかいふものゝ目的には適つて居るのだ。

僕も妻を持つた二三年は、これでも随分努力を遣つたものだ。愛情を繋ぐ爲めに心にもない御世辭を言つて見たり、錢も無いのに帶の一筋も買つて遣つたり、緣日に連れて行つて寄席の御つきあひをした

してるんぢやないか。少し醫師にでもかゝつて見て貰つたら何うだ。』と言つてまた僕の顏を見た。

『だツて仕方がないさ、僕はさう感ずるんだから。』

かう言つて僕はいろ〳〵なことを饒舌つた。一體本能といふ奴が癪に觸るといふことから始めて、それに服從して平氣で居る人間や、それと妥協して表面で綺麗なことを言つて裏面で汚い業をして居る輩や、わざとすまして悟つたやうな顏をしてゐる意氣地のない人達のことなどを話した。

『結婚の式に床盃といふことがあるが、あれは親が子女の性慾の一種の保證と言ふやうなものだ。あれ位不思議な醜惡な不自然なものはない。』

こんなことを言つた。

けれど寢室がなければ人生もないのだ。寢室を撲滅すれば家庭も撲滅しなければならんのだ。情ないが仕方がない。

しかし醜惡なるものは矢張醜惡に眼にも映れば心にも映る。單に仕方がないで濟まして は居られない。そこで矛盾が起つたり衝突が起つたり動搖が始まつたりする。

夫の床が敷かれる。妻の床が敷かれる。子供の床が敷かれる。

これで六疊の間が一杯になる。赤兒でも居ればそれこそみじめだ。何のことはない悲慘なる人生の縮圖だ。

罠

一

何處の家にも醜惡なるものが必ず一つある。それは寢室だ。

モウパッサンの作にもThe Bedといふのがあつて、人生とベッドとの關係がいろ〳〵な風に書いてあつたのを覺えて居る。

人間はベッドで生れてベッドで死ぬといふことが書いてあつた。

家庭改良論者も寢室に就いて一考することがあるだらうが、一體何んな風に考へて居るかそれを聽き度いと思ふ。さう言つたら其人達は『戯談を言つては困る。』などゝ笑ふかも知れない。が決して戯談ではない、笑ひ事ではない。

僕は此間それをある友人に話した。するとその友人は變な眼色をして僕の顔を見て――丁度それは僕が何うかしたのぢやないかと怪しむやうな風で、『困るねえ、そんな風に考へては………體が少し何うか

罠外二編

『もう大丈夫ですよ。水が出るやうなことはありませんよ。』から貸本屋の亭主が言つた時には、雨が晴れて、土手下の黄ばんだ溝に日がわびしくさしてゐた、番傘などが干してあつた。

『でもかうして一人してゐると、さびしう御座んすよ。矢張忙しけりや、思ひ出す暇もないやうなもんですからね。』こんなことをお粂は言つた。

お粂は早くから戸を締めて、毎夜土手の方に遊びに出かけた。師匠の家で花牌を引いてゐることもあれば貸本屋の家で夜遲くまで話してゐることもあつた。雨のやんだ後には、月が明るく河水を照らした。

三十九

その後は雨が猶つゞいて降つた。水が出るといふほどではないが、土手の此方は大方泥濘の深い路になつて了つた。川には黄い佗しい水が漲りわたつて見えた。

何うかすると蔽ひかさなつた雲の中から日影が一時ぱつとさすことなどもあつた。お粂はさびしく二階で三味線などを彈いた。

歌子に對する噂をお粂は時々耳にした。富田は矢張其處に行くらしかつた。男の心といふことがお粂にはわかりかねた。賴りになるやうで賴りにならないやうな心持がしてゐた。賴りにして好いのか、賴りにしても爲方がないのか、それもちよつとお粂にはわからなかつた。『そんなもんですよ、一緒になれば皆な思つたやうにならないものですよ。』かう貸本屋の細君は言つた。

もつと落附いた心持でゐたいとは思ふが、今の境遇では、何うしてもぢつとしてはゐられなかつた。何時かういふ生活が破れて、新しい困難が其の前に迫つて來るか知れなかつた。窓に凭りかゝつて、お粂は降り頻る雨を見てゐた。

工場の汽笛の音が川に鳴りひゞいて聞えた。大きな鼠色をした帆が樹と樹との間から見えた。女工と男工とが夜おそく戯談を言ひながら窓の下を通つて行く氣勢がした。

『でもわからないわ。出れば一晩の中に水をかぶつて了ふんだつて言ふから。』
『もう天氣になるよ。』
『なら好いけど……』かう言つて、長火鉢の向うに坐つて、鐵瓶を下して、火箸で火をあらけて見て、
『すつかり消えちやつた。』
お粂も嬉しさうに莞爾してゐた。一人でゐる時には、女心のさびしさに、ついいろ〳〵なことを思ふけれど、かうして男に向つてゐると、さういふことは何も彼も忘れて了つてゐるのであつた。歌子の話もこの夜は二人の口に上らなかつた。
お粂は下の上さんに賴んで、鰻などを取つて貰つた。お粂は貸本屋の亭主の話などをして、『だから、其時は來て貰ふやうに賴んで置くのよ。』
『大丈夫だよ、僕だつて來るよ。』
『でも本當にひとりでゐると心細いわ。力になつて呉れる人は誰もゐないんですもの。』
樂しげに笑ふ聲は久し振で二階から洩れて聞えた。つゞいて三味線の音などもした。二階の一間はその夜は遲くまで明るく雨の降り頻る中に見えてゐた。

『何あに大丈夫だらう。』といふ聲が中でして、車は靜かに土手から向うへと下りて行つた。

深い泥濘の中を縫ふやうにして辿つて行く車の影は、夕暮の薄暗い暗闇の中にやゝ暫く見えてゐたが、お粂はそれを前にして急いで歩いた。雨はまた盛んに降り出して來てゐた。

辛うじて家に辿り着いた時には、富田はもう二階に上つて、明るい電燈の下に莞爾した顏を見せてゐた。

『えらい路だね、あんなちやないと思つた。』かう富田は言つて、『今時分何處へ行つたんだえ？』

『ちよつと買物に……』

『すつかり濡れたちやないか。』

『だつて、ひどい降りなんですもの。』お粂はかう言つてちよつと笑つて見せたが、着物を着替へながら、

『何うしたんですの？　此頃は？　少しも來て下さらないのね。……』

『少し忙しかつたもんだから。』

『土地ちや、此間から水が出る水が出るといふ評判ばかりよ。今でもあの通り、溝なんかがすつかり開いて了つてゐるんだから、本當にその時は何うしやうかと思つて、心細いつたらないのよ。』

『大丈夫だよ。』

たよ。何しろ土手から此方ですからね、すぐ水がかぶつてしまふんですからね。油斷はしては居られませんよ。』などゝ下の上さんは言つた。

貸本屋の亭主は『なあに、貴女の家は二階があるから大丈夫ですよ。あの時だつて、二階までは來はしなかつたんですから……。え、好う御座んすとも、その時は行つて上げますとも。』かう言つてその時の話などをした。

溝がひらいて、塵埃が汚なく流れ出してゐる路を、高い足駄を穿いて、泥濘を拾ひながら歩いて行く人達の姿はお粂の二階からよく見えた。大抵はぴつしやり締つてゐる二階の白い障子に雨が終日斜に降りかゝつた。

『お上さんよく降るわねえ。』

こんなことを言ひながら、紺蛇の目の傘を傾けて、お粂は土手の方へ買物に行つた。

色々な買物をすませて、土手を下りようとすると、丁度向うから幌をかけた車が一臺やつて來た。擦れ違ひながら、ちよつと覗き込んだお粂は、

『あ、貴方？』

と思はず聲を立てた。

それは久しくやつて來ない富田であつた。『路がわるいのよ。車が通るかしら？』かうお粂は言つたが、

靜かな口の利き方をする人で、『お才や、お才や、』といつもやさしく細君を呼んだ。女の兒も何方かと言へば父さん子で、『父さんと母さんと何方が好き？』などゝ訊くと、始めは默つてゐても、『父さんの方でせう。』かう言はれると、笑つて小さく點頭いて見せた。夜など行くと、店の處で、亭主はあぐらをかいて女の兒を抱いてゐた。

『駄目ですよ。うちのなんか、働きがないから。』こんなことを言ふ細君の口裏からは、絕えず生計の苦しい愚痴が零されてゐた。しかしさういふやさしい男となら、不足勝な世帶を切り廻して行くのも樂しみだらうとお粂は思つた。

何うかすると、細君の用足しに出たあとへ行つて、女の兒を中に置いて、二人で長い間世間話をすることなどもないではなかつた。夕方にはお粂はいつも湯に行つて、綺麗にお扮裝をして、セルの着物に黑繻子の帶などをしめてゐた。店頭に坐つて話をしてゐると、土手の上を通る人達は何處の女だらうといふやうに、めづらしさうにして此方を見て行つた。

十月の中頃になつてから、雨が續いて降つた。時には一日外に出られないやうな吹降の日もあつた。河の水は夥しく增して、黃く濁つた色が鼠色の空氣の中に氣味わるく漲つて見えた。橋杭に當る水は凄じく渦を卷いた。

三四年前の洪水の話などがもうあたりの人達の口に上るやうになつてゐた。『あの時はひどう御座んし

人か何かゞ好きなもんで、矢張、あの桃子さんのやうなもんだアね。その爲めに、好い目も出ず終ひになつて了つたのさ……。それでも好いた男と一緒になつたにはなつたんだけれども、なつてからは碌なことはなかつたよ。』

『矢張苦勞をして來たんですね。』

『その代り面白いこともあつたよ。三十五六位までは、イヤならいつでも別れてやる。未だ相手にして呉れるものはいくらもあるからつていふ腹でゐたからね、お前さん。でも、四十二三になつてからは流石にもう駄目だと思つたね。』

こんな話をして師匠は笑つた。然し、內情に詳しいお粂は、進んで藝者にならうとも思はなかつた。不見轉の生活は慘めなものであつた。お粂は夜遲く白粉を白く塗つて箱も持たずにやつて來る女を頭に描いた。

三十八

『貴女は仕合せよ。』かういふ言葉をお粂は度々貸本屋の細君に言つた。二人一緒に話してゐる時にも、お粂は絕えずその亭主の濃い髪や色艶の好い唇を見てゐた。長烟管に煙草をつめる白い手首なども眼に附いた。

十分にして具れるのも有難いとは思つた。しかしそれだけではまだ滿足が出來なかつた。お粂はさびしく暮らした。

お粂は將來のことなどを多く考へるやうになつてゐた。かういふ生活が到底長く續くものでないといふことも考へた。お粂は桃子やお梅やお秀のことなどを思つた。

『お前さん、そんなことを言ふのは贅澤ですよ。好い旦那さんぢやないか。』富田に度々物を貰つたりする下の上さんは、お粂のさびしがつてゐるのを見ると、いつもかう言つて慰めた。

ある日、師匠の許でお粂は笑ひながら言つた。『私、藝者にでもならうかしら。もう少しお稽古したら……』

『お前さんなんか、いくらでもならうと思へばなれるともさ。容色はあるし、藝だつて、お前さんより出來ない人はいくらでもあるんだから……。妹の家に此間目見得に來た妓なんか、それはペンともシャンとも言へないやうな妓だよ。それで、今までよし町にゐたんだとさ。藝なんかなくつたつて、いくらでも藝者で候つてゐられる時世だからね。』師匠はかう言つて、自分が此土地で賣つてゐた若い時分の話を自慢さうにして、『それは忙しかつたもんだよ。一日に四座敷や五座敷するのは當り前で、忙しい時には家に歸つてゐる隙もなかつた位だからね。……その爲め今の妹なんかも大きくなれたんだよ。それにその時分には好い旦那もあつて世話をしてやらうといふ方もあつたんだけれど、若い時分には意氣な藝

あんなわかりの早い妓はめづらしかつたつて言つてゐたわ。でも、いくら利口でもあの役者だけは忘れられないんでせう。』

富田は默つて笑つてゐた。歌子の話になると、お粂は不思議にもつよい敵意をむき出しに見せて來た。富田は話をやめて裏の欄干の處に行つた。お粂は傍に寄つて來て、

『私、こんなことを此頃よく考へるのよ。今から五六年經つたら私は何うなつてゐるだらうつて。夜ひとりで寢られないでゐる時などには、ことにさうよ。私は身寄と言ふものがないから一層さう思ふのかも知れないわねえ。本當に私、一人ぼつちですものね。伯父や伯母はそれでもまア心配して呉れるけれど、親がゐないつて言ふものは悲しいものですよ。本當に何うなつて了ふでせう。その時分になつても貴方は力になつて呉れるかしら? え? 力になつて下さる? 私と別れて了つてからも。』

『それはなつてやるさ。』

三十七

貸本屋の女の兒を借りて、頬摺りして一緒に寢るやうな日が幾夜か續いた。富田は來たり來なかつたりした。お粂に取つては、容易に眞劍になれない男の心が何だか頼りにならないやうな氣がした。單に玩弄にしてゐるのではないのは、それはよく解つてゐた。かうして遊んでゐても困らないだけの手當を

『そのうち好い亭主をさがすんだね。』
『私なんか亭主が持てるでせうか。』
『それは持てるさ。そのうち一つ好いのをさがしてやらうか。』
『澤山。』
かう言つてさびしさうな顔をして、『貴方は矢張情がないわね。』
『情がないんぢやないよ。わかい時の情が枯れちやつたんだよ。これでも、お前が他の男でも拵へて此方のことを構はないやうになると、熱くなつて行くんだよ。』
『それは情ぢやないわ。……矢張情がないわねえ。』
『そんなことはないよ。あれなんかには、男の心持はわかりやしないよ。桃子のやうな飛離れた暮は何うせ打てない女だからね。矢張勘定連だよ。一生あんなにして、眞劍に腹も立てず、眞劍に人も思はずに、ぐづ〳〵に世の中を送つて行つて了ふんだね。男は唯、金さへ巻上げれば好いもの、女は體を貸しさへすれば好いものとばかり思つてゐるんだからな。桃子のことなんかも、馬鹿な智慧のない女とばかり映つて見えるんだね。面白い世間話の一つ位にしか考へられないんだね。』
『あの人はしかし利口ですよ。他の土地から來て、まだ二三年にしかならないのに、あんな姐さんになつたんですからね。女將がよく言つてたわ。歌ちやんが來た時分には、それはよく稼いだもんだつて。

『矢張、何處かで褄を取つてゐるつていふ話だよ。でも……その時分からだね、段々色戀のことが少しづゝわかつて來たやうな氣のしたのは。惚れるといふところから、本當のことがわかつて來たんだね。人間は一度やつたことを二度やる時には、前よりはいくらか利口になつて來てゐるからね。』

『それはさうね。』

『お前にもあるだらう？』

『私なんか、何にもないわ。』

『ないことはないぢやないか。兵隊さんのこともあるし、それから二階に來た男のことだつて。』

『女なんて駄目ですよ。捨てられたつて、男のやうに眞劍になることは出來ないんですもの。いつだつて泣寢入ですもの。』

『でも少し話してお聞かせよ。』

『何にもありやしないわ。本當に女は詰らないもんですよ。向うにゐる時には、私は働きに生れて來たのかしらと思ふ位でしたもの。でも、小間物屋にゐれば好かつたとは思ひませんね。餘程イヤだつたんですね。』

いろ〳〵身の上が思ひ廻されるといふ風で、ぢつと考へ込んでゐたが、『私なんか、何うなつて了ふかわからないわねえ。』

とても身は持てなかつたんだけれどね。』

『一番惚れた女は？』

『それは二十五六の時だがね。その時は死んで了はうかと思つた位だよ。ラブした女は皆な中年の男に取られて了ふんだからね。僕のやうな貧乏書生などは相手にして呉れやしないからね。……始終、靑い顏をしてふさぎ込んでばかりゐたんだよ。話せば、面白いことがあるけど、面倒臭い。』

『少し話して聞かせて下さいよ。』

『一番ひどい眼に逢つたのは、友達に取られて了つた時だつたよ。わかつたやうな顏をしてゐても、まだその頃は、存外色戀なんて本當にわかつてゐやしないんだからね。三人一緖に睦じく步いたり遊んだりしてゐる中に、いつかその女が友達のものになつてゐるのを知らずにゐたんだね……。その時は隨分痛かつたよ。初めは自分のものだつたんだからね。悲觀して山の中に入つて半年ほどゐても、その傷痍は治らなかつたよ……。それからもう一つ、これは餘程あとのことだがね、かなり眞劍になつて世話をしてやつた女があつたんだ。さうだよ、素人ぢやないんだよ。ところが好い加減絞られたところで、うまく寢がへりを打たれて了つたんだね。その時もかなりに辛かつた。しかし、そんな話をいくらしたつて際限がない。』

『好いから話して聞かせて下さい。その女、今何うしてるの？』

ですよ。でも、本當にあの兄さんかしら?』かう言つて間を置いて、『本當にいろんなことがあるわね。一と月と言はれないわね。』

お粂の眼の前には、種々な人が映つたり消えたりした。移り變りの烈しいのが今更のやうにお粂には思ひ廻された。かうして話してゐる富田とも、いつ別れて行つて了ふかわからなかつた。泣いたり笑つたりして過ぎて來た自分の姿が其處にも此處にも見えた。さういふ人達に比べて何うなつて行く自分だらう。お粂は默つて富田の盃に酌をした。

お粂は不意に富田に言つた。『そして、貴方は本當にこれまでに眞劍に女に惚れたことはあつて?』

『それはあるとも……。眞劍に惚れて、煮湯を飮ませられるやうな思ひをしたのも二度や三度ぢやないよ。だからこんなになつちやつたんだ。』

『何んな事があつたの?』

『それは澤山あるよ。數へ切れないほどあるよ。僕も何方かと言へば、すぐ眞劍になつて了ふ方だからね。十六七時分からもう眞劍の戀をしてたんだよ。』

『だつて、その時分は唯、綺麗に思つてゐたばかりでせう。』

『十六七時分には、まださうだがね。三度目位にラブした女には、もう思つてゐるばかりでは滿足が出來なくなつてゐたよ。これでね、僕がもう少し好い男か何かで、女が向うから寄つて來るやうだと、

『男も來てるのかしら。』

『さうらしいよ。兎に角評判だね。何處でもその話ばかりだよ。あの女がさういふことをしたといふことが非常にめづらしいと見えるね。それから、あのお照をばさんの監督の下で、さういふことが出來たといふことも並でないといふ風に思はれてるるんだね。』

『それはさうでせうね……。それにしても、一體初めは何うして出來たんでせう？』

『何でも稽古の途中か何かで出來たらしいよ。だから、今まで知れないでゐたんだよ。稽古に行くんだつて言つちや、朝の八時頃から三四時位まで始終内を明けてゐたつて言ふからね。その位時間があれば、どんなことでも出來るからね。』急にふと思ひ出したらしく、『さう言へば、常子が置手紙をして、家出をしたさうだよ。』

『常ちゃんが？』

『僕も吃驚したよ。本當にこの頃はいろんなことがある。此間、友達を呼んで會をした時ね。あの時常子も桃子も皆な來てゐたんだからね。まだいくらも經ちやしない。二た月位にしかなりやしないよ。』

『さうね。』考へるやうにして、『矢張、あの兄さんかしら。』

『さうらしいよ。』

『あの人は默つてゐる質だけども、何處かしつかりしたところがあるから、さういふことが出來るん

のは面白い。その爲めに始めてあの女の價値が出て來たといふやうなものだ。僕はそこを賛成だ。』

『それはさうですけども、見す〳〵だまされてゐるのがわかつてゐては可哀相ね。あの人はやさしいんですもの。今の秀奴さんの旦那だつて、もとは桃ちやんの旦那だつたんですものね……。あの時だつて可哀相だつた。「何ともないわ。」など、平氣で言つてはゐたけれどもね。』

『矢張何處か面白い處のある女なんだよ。』

『ちや、私もさうしようかしら。』笑ひながら戯談のやうに言つたお粂は、『でも、私のやうなものは駄目ね。……相手がないもの。』

『相手があるなしぢやないよ。惚れるつていふことは、惚れられるから惚れるつて言ふものぢやないからね。』

『それはさうね。現に、私なんぞそれよ。』

『何うだか。』

富田は笑つてゐた。

『さうよ、本當に……』かう言つたお粂はすぐ話頭をかへて、『さうして、何うしてるの？ 一緒にゐるの？』

『丸髷なんかに結つてゐるさうだ。』

『可哀相ね。』

『さうさ、可哀相だと言へば可哀相だが、しかし自分の心からさうしたんだんから、悔むところはないさ。あの社會にも、さういふ事件が時々あるから面白いんだ。矢張、人間だからな。いくら稼業にしてゐても、金ばかりぢや駄目だからな……。それは金ばかりのやつもあるさ。金さへ取れゃ好いつていふ奴が當世さ。しかし、さうしてゐられないところが面白いぢやないか。生物だからな。』富田はこんなことを言つて笑つて、

『しかし、今度のことはあの女などにはありさうなことだよ。中年から藝者になつたんなら、もつとわるく賢くなつてゐるんだけれど、藝こそあれ、あゝいふ容色で、あゝいふむづかしい養母を持つて、自分の本當の願はこれまですこしも滿足させられたことがないんだからな。目が覺めたんだよ、覺醒したんだよ。散々剝かれて女郎にでも賣られるか。それともまたさういふ色師を自分のものにすることが出來るか。そこが面白いぢやないか。當人のためには少くとも眞劍のことだからね。本當の意味から言ふと、却つて幸福だよ。』

『でも、夢中で、先が見えないんでせうからね。』

『夢中になつたのが面白いぢやないか。意味があるぢやないか。盲目にならずに、勘定ばかりして燃えもせずに、ぶす〳〵くすぶつて一生を終つて了ふやつが澤山にある世の中だ。それを、兎に角、燃え

ずお座敷で眼を赤くしてゐることなどもあつた。お照をばさんの難しいことなどもよく零してゐた。二十三にもなつて、まだ心から男の情を知らないといふ風な妓であつた『騙されてゐると思へば、可哀相だけども、それまでに思込んで男に惚れゝば本望には本望ね。』かう言つたお粂の胸には、しんみりした同情が湧くやうに上つて來てゐた。土手を家の方へ歸りながら、お粂は種々とそのことを思つた。さういふ脆い女心を玩弄にする男心が憎いといふよりも、さうまで惚れて行つた女心が羨ましかつた。その日一日桃子の姿はお粂の頭を離れなかつた。

その話を富田はもつと詳しく知つてゐた。つきものがわるいので、檢番のお照をばさんもあきらめて桃子が申込を承諾したが、淸算の結果、桃子が少からぬ金を出さなければならぬことになつて、旦那に拵へて貰つた衣裳やら帶やら時計やらを大抵質に置いたり賣つたりしたといふことであつた。』もう、あのダイヤなどもありやしないとさ。』

『さう、あのダイアも……』

お粂は驚いたやうな顔色をした。

それはさういふ仲間にも評判になるほどの大きなダイヤで、誰も彼も皆な羨望の眼を睜つたものであつた。お粂もよく知つてゐた。歌子もちよつとお座敷で借りて自分の指にはめて見て、『好いわねえ、私も一つ欲しい、貴方買つて頂戴よ。その位の心意氣を見せるものよ。』など、言つたことがあつた。

て行つてやるつて言ふんですつて！　そして支度が出來たら待つてゐて下さい、私の方から行くからつてかう言ふんですつて。いゝえ飛んでもない、こちらが上りますつてね、何しろ先は一流の姐さんだから、早目に支度をして行つて見ると、矢張鍵がかゝつてゐるんですとさ。そして何故私の方から行くつて言つたのに、來たつて言つて何うしても中に入れないんですつて。何でもその時にも男の影が奥に見えてゐたつて。旦那ぢやなかつたつて！』

『それぢや、始終家で逢つてたのね。』

『だから今日までわからないでゐたんだよ。お茶屋さんならすぐわかるんだけど。お茶屋では、春月に一度とか二度とか行つたことがあるさうだけれど、その時も男は早く歸つたんだつて……。あのお照さんのことだから、かねぐ〵さういふことにも氣を配つて、家を持つ時にも堅い婆さんをつけてやつて置いたんだけども、その婆さんもすつかり向うに虜になつて了つたんだね。お照さんが聞いても、いゝえそんなことはありませんつて言ふもんだから安心してゐたんですとさ。それが、わかる時には小さなことからわかつて行くもんだね。そら、子分が大勢來て飲んだり食つたりして行くでせう。何うも米がいりすぎる、香の物がいりすぎるつていふ處から段々知れて行つたんだと……』

『餘程深く打込んだのね。』かう言つたお粂は、桃子の姿を頭に浮べて見た。容色がないから堅くしてゐられるといふ妓であつたことをお粂は思ひ出した。涙脆いやうな質で、女將に叱られて年に似合は

言つてゐるんだとさうだけども、それが手なんだとさ。今に、すつかり剝かれて、放り出されて了ふんだらうつて、それは評判だよ。』

『まあ、さうですかね。あの桃ちやんが。あのおとなしい人がね。』お粂は溜息をついて深く考へるやうな顏色をした。

師匠は話をつゞけた。

『それに、さういふ男だから、子分が澤山にゐるから、かなはないよ。イザとなると、當人は知らん顏をしてゐて、子分が何うかして了ひますからね。さういふ人にかゝつては大變だよ、お前さん。』

『さうね……そして、それはいつから始まつた話なんでせう。』

『なんでもこの四月頃からだつて！』

『四月？　よくわからないでゐましたねえ。よくあのお照をばさんが知らずにゐましたねえ。』

『それといふのもお前さん、あの妓がおとなしいもの、誰もそんなことをしやうとは思はなかつたんだもの。』

『さうねえ。』と言つて、お粂は考へて、『それまで誰も知らずにゐたんでせうか？』

『先月あたりから、すこし變だとは勘付かれてゐたにはゐたんですと。何時行つて見てもあそこの家の格子の鍵がかゝつてゐるんですつて。妹の家にゐる抱妓があの人と懇意で、ある日一緒に芝居に伴れ

言ふんですつて。不思議だと思つたんですつて？　でも、ねえ、あのおとなしい妓だから、そんなことはないと誰も思ふし、姐さん方だつて、あの妓に限つて、そんなことはないつて言つてゐたんだつて。それがお前さん、てきぱき旦那には自分から斷る。檢番のお照さんには、これまでの御恩は忘れないけども、淸算をして關係を斷ちたいつて申込んで行つたんですとさ。』

『男つて何ういふ人？』

『その人だか何だかわからないけれど、何でも、賭博打の岩何とかいふ親分の息子か何かで、名代の女たらしだとさ。その人なら、よし町あたりぢや聞えたもんだつて。その男が通ると、彼方でも此方でも女の子が鼠鳴きをするやうな男なんだつて。何でも五人や六人は眞裸にされて放り出された藝妓もゐるんだつていふことだよ。上さんも子供もあるんだつて言ふけれどね。』

『まあねえ……』

『多分、その男だつて言ふ話だよ。惡いものに引かゝつたものだつて、昨日妹の處に行つたら話してゐましたよ。妹はよし町にゐたことがあるから、よくその男のことを知つてゐるんですよ。その男に上さんが出來ない前は大したもんだつて？　意氣な扮裝をして、十五兩もする下駄などを穿いて、鶯の籠でも持つてすらり〳〵歩くといふ風なんだつて、そしてその男が通ると、お酌さん達が、アとかトとか言つて手眞似をするやうな人だつたつて？　今度も女房を出して、お前をあとに入れるつて桃ちやんに。

三十六

ある日、師匠は何處から聞いて來たか、踊の上手なので名高い桃子といふ藝者が、ある男に夢中になつてゐる話をお粂にしてきかせた。『桃ちやん？　まア、あの桃ちやんが？』

お粂は眼を丸くした。

容色こそそんなに好い方ではなかつたけれど、検番のお照をばさんの養女で、小さい時分から藝事を仕込んで、土地でも五本の指に數へられる妓であつた。つい昨年あたり好い旦那が出來て、新しく家を持つに就いても、その旦那のつぎ込んだ金は、ちつとやそつとのことではないといふ噂であつた。おとなしくつて堅くつてそれでゐて何處かしつかりしてゐた。富田も贔負にして、いつもよく聘んでは『春雨』などをどらせた。

『お前さんも知つてるけど、あのおとなしい妓でせう。そんなことができようとは何うしたつて思はれやしないよ。それが、お前さん、自分でちやんと旦那に斷つたんだつて言ふからね。お暇を頂きたいつてちやんと自分で言つたんだとさ。尤も、その前にも旦那が不思議にしたことがあるんだつて。ある日、行つて見ると、前の格子に鍵がかゝつてゐる。おいおいつて呼ぶと、桃ちやん、障子をあけて顔を出したつけが、あの、今日はお人ですから、すぐ參りますからお茶屋の方へ行つてゐて下さいつて。

さくして行つた時で、別れてからのことを考へると、さびしくつてとてもそれは堪へられないやうな氣がした。富田の體は離れられずにしつかりお粂に絡みついてゐた。お粂は其處に行くと、いつも突當つて了つた。後には、自分で世話になつてゐるから、自分の思ひが心から男に通じない。いつも當つて了つた。後には、自分で世話になつてゐるから、自分の思ひが心から男に通じない。いつそ自分で苦勞して男に入揚げて誠を見せたらなどとも想像した。『今に、私の心を見せて上げますから。』お粂はかう富田に言つた。

……妙見さんへ願かけて、

かへる路にもその人に、

逢ひたや見たやこひしやと、

こつちばかりで、先やしらぬ、

しん氣らしいぢやないかいな、

かういふ唄を師匠のもとで敎はつた時には、『好いわねえ』と言つて、すつかり覺え込むまで、お粂は何遍となく彈いて見た。男戀しい女心は昔の唄の文句の中にも闇夜の星か何ぞのやうに澤山にかゞやいて殘つてゐた。お粂は家に歸つて來てからも、三味線を下して、裏の窓の處に坐つて、靜かな調子で猶ほ二度も三度もそれを彈いた。お粂の頰にはいつか淚が流れて來た。

由にあやなしてゐるらしかつた。春月で逢つてゐるばかりでなく、もとのやうにそのお茶屋にも出かけて行くらしかつた。女將や女中のことを富田はよく知つてゐた。

お粂をかうして圍つて置くといふことも富田はよく歌子に話して聞かせる樣子であつた。そんなことはないやうに常に辯解はしてゐるけれど、話をしてゐる口裏からすぐそれがわかつて行つた。さうした社會のことに詳しいお粂には、何も彼もはつきりと判斷された。女に逢つて來た時と逢はずにやつて來た時との區別は、一目見てすぐ飮込めた。

利口な歌子は、お粂のわる口などは少しも富田に言はないらしいが、それに引かへて、富田は歌子のわる口をよくお粂に言つた。後にはお粂は『實はさうぢやないんでせう。憎いんぢやなくつて可愛いんでせう。わる口もお惚けの部でせう。』などゝ言つて笑つた。

心と體とを合はせて、お互に泣いたりあやまつたりして見たところで、それはその時ばかりで、何うにもならないものだつた。自分に對してもかなりの愛情を持つてゐながら、一方では歌子の體から離れることの出來ない男の心といふやうなものも、矢張何うにもしやうのないものだといふことが段々お粂にもわかつて來てゐた。

初めはお粂は富田とわかれる時のことを常に想像した。戀しいのが昂じて、後には辛く悲しく、かういふ思ひをする位なら、いつそ別れた方がなどと思ふこともあるが、それは自分で自分の疑惑の影を大

『醉つてなんか來ちや厭ですよ。』

富田は默つて笑つてゐた。

お粂が此間來た男の手紙を富田に見せる時分には、富田も歌子の話をちよいちよいお粂に聞かせた。歌子の話だと言つて、富田はその大きなお茶屋の話などをした。『へえ、さう、お仙さんが采配を振るやうになつたんですか。さうだらうと思つた。あの人も出るなんて言つてゐたけれども。何うしてあの人が出るもんですか。お定さんを出すやうに出すやうにとばかり仕かけてゐたんですもの。それをお定さんは知らずに、お上さんがわからないつてばかり言つてゐるんだもの。お定姐さんはごくずるい人が好いんですからね。』かう言つたお粂はお茶屋にゐた時分のことなどを繰返して考へてゐた。

電燈の微暗い中で、二人は種々のことを話した。下に寢てゐる上さんは、富田が醉つて入つて來た時から眼が覺めて、それからすつかり眠られなくなつて了つたが、二階の話聲は、初めは強く、中頃は靜かに、ちよつと途切れたかと思ふと、今度はまた靜かな私語が長く〳〵續いた。女のひそやかに笑ふ聲などもした。

『いやですよ、貴方は。あの人のことばかり考へてゐるんですもの。』かういふお粂の聲がやがて際立つてはつきり聞えた。あとはしんとした。

お粂は男の話の中から絕えず歌子の面影を搜した。歌子は例の美しい表情と巧みな腕とで男の心を自

持つた喜悅で、お粂の心は前よりも一層深く男の方に向つて展けて行くと共に、男もこのやさしい女心を離し難いやうな氣がして互ひに堅く手を握り合つた。他に女があらうがあるまいが、この男の情は忘れられないといふ風にお粂は思つた。

『あれのことなんか、本當に思はないたつて好いんだよ。あいつ等は稼業にしてるるんぢやないか。あいつ等は商賣品だよ。僕だつて、君のことを思つてゐなけれや、かういふ風に世話をする譯はないんだからね。そこを考へて見れば、すぐ解るぢやないか。』

『それは解つてるわ。だけど、私のことだつて考へて見て下さいよ。私、一人でかうして二階にゐるんですもの、時には淋しくつて爲方がないこともありますよ。毎晩、待つてるるんですもの、貴方の來るのを……』かう言つて笑つて見せて、『今度はもつと近く來て下さい。この間來てから十日目になるのよ、今度は。三日目位に來て下さると好いんだけど……』

『さうは行かないけど……』

『お家の都合もあるんでせうけどもね。私、一人でさびしくなつて了ふ……。今度のやうに來て下さらないと、何うかしたんぢやないかとすぐ思ふのよ。矢張始終一緒にゐて下さらなけれや物足りないわねえ。』お粂は何か思ひ出すやうにしてほろりとした。

『成たけちよいちよい來るやうにするよ。』

忍して呉れ。』

『いゝえ、それ處ぢやないわ。こんなにお世話をして下すつて有難いと思つてゐるんですもの……。けども……けども……』言ひかけてお粂は蒲團の上に突伏して了つた。涙が止度もなく出て來た。歔欷げる度に、銀杏返の鬢の搖くのが微かに電燈の薄暗い光線の中に見えてゐた。

『本當に勘忍して呉れ。僕がわるいんだから。え、え、勘忍して呉れる？』かう言つて顔を寄せて、女の體を抱へるやうにして、『本當に、そんな風には思つてゐはしないんだから……、』

男の腕に抱へ上げられたお粂の白い頬は、名殘なく涙に濡れてゐた。自分ながら不思議に思はれるほど、あとからあとへと涙が出て來た。お粂は長い間顔に手巾を當てゝゐた。

富田は種々になだめすかした『本當にそんな風に思つてゐやしないんだから。』かう繰返して言つて、富田は、わざと女の顔を覗き込んだりした。富田の醉はすつかり覺めてゐた。やがて涙の過ぎて行つたあとには今度は甘い悲しいしんみりした情が二人の胸を占領して來た。二人は俄に心と心の觸合ふのを感じた。

三十五

心の蟠りの解けて流れて行つたあとには、やさしい情味が溢れて漲つて來た。それは眞面目な情緒を

こに行つたんだよ。』

『そんなことはないよ。あれから今日初めて逢つたんだから。』

『うそばつかり！』ちよつと間を置いて『そして何て言つてゝ？』

『お上のことを言つてたつけ。』

『何つて？』

『あれでは女中が可哀相だなんて。』

『貴方、そんなことを聴いて來たの？』かう言つたが、急に眞面目な聲になつて『私、お世話になつて居てもお氣の毒だから、何處かに行くわ。元を言へば、私がわるいんだもの……貴方はほんの出來心でやつたことなんだから、お世話になつてゐる方が間違つてゐるんですよ。私が馬鹿なんですから。』

『何故だえ？　何故そんなことを言ふんだえ？』

『だつて、さうですもの。私が馬鹿で勝手でかういふことになつたんですもの。私がわるいんですもの……。誰を恨むせきはありませんわ。貴方だつて、よくして下さるんですもの。今度だつて、大變お世話になつたんです。』いやに聲を細くしたと思ふと、お粂の眼からは涙がいつかこぼれかけてゐた。

富田は慌てゝ『そんな風に思つて呉れちや困るよ。行つて逢つたのがわるければ、あやまるよ。そんな氣で行つたんぢやないんだから、本當にさうなんだから。』お粂の方に體を寄せて『おい、本當に、勘

『本當だつて言ふのに……』

『厭……。今日行つたところをすつかり話して聞かせなければ厭……』

『ぢや話すよ。歌公がよろしくつて言つてゐたよ。』

『知らない。』

お粂は肱で男を強く衝いた。富田は、『でも、この通りへゞれけに醉つて歸つて來たんでも無事だつたのがわかるぢやないか。うんと惚氣をきかせてやつたよ。散々人を酷めた罰だ。』

『ぢや、貴方、私のことをすつかり話しちやつたの？』お粂は俄に起き返つた。

『何アに、詳しく……話しやしないよ。』富田は慌てゝ言つて、『好いぢやないか、話したつて構ひやしないよ。』

『知らない。知らない。』お粂は身を悶えて見せた。

暫く默つてから、

『そして、何處なの？　一體、春月？　花の家？』

『まアそんな處だよ。好いぢやないか、何處でも。』

『春月よ、屹度。』

かう言つたが、『あそこで始終逢つてゐるんでせう？　それに違ひないわ。此間早く歸つた時にもあそ

つ氣勢がした。

しかし一時間後には、二人はいつか顏を合せて話をしてゐた。

『もうさめて？』

『大分醒めた――』

『何處でそんなに醉つたの？』

『友達と川の向うに行つてね――えらく醉つちやつて、此處に來るのもやつとだつたよ。よく路を忘れなかつたらう！』

『川の向う？　さう川の向う？』

お粂はわざと笑つて見せた。

『何故？』

『だつて、私だつて、その位のことはわかるわ。歌ちやん、何つて言つてゐて？　私のわる口を言つてゐたでせう。』考へるやうにして、『男つて當てにならないものね。貴方も矢張信用の出來ない人ね。』

『何故だえ？　また、疑つてゐるのがえ？』

『好いのよ。』

お粂は男の方に脊中を向けて了つた。

て裏の欄干の方へ行つた。秋雨がさびしく音を立てゝ降つて來てゐた。

三十四

夜遲く來た時には、富田はひどく醉つてゐた。二階にあがるとすぐ着物も脫がずに蚊帳の中に入つた。お粂は金盥に水を入れてそれを枕元に持つて來て置いた。

『何うして、そんなに醉つたの？』

かう訊いても、

『うん……醉つちやつた。』とばかりで、さも苦しさうにすぐ彼方に向いて了つた。手足をだらしなく疊の上に投げ出した。

『まア、着物だけお脫ぎなさいよ。』お粂は强ひて寢卷に着替へさせて、蚊帳の外でそれを疊みながら、袂の隅々を隈なく探した。酒の香の染みた手巾と丸めた紙とが出て來た。

女の移香もした。

お粂は默つて蚊帳の中に入つて、長い間其處に坐つてゐた。室の隅の方に引張つて行つてある袋をかけた五燭の電燈は、微かに寢卷すがたのお粂を照した。お粂はぢつとして身動きもせずにやゝ暫く坐つてゐたが、やがて微かな溜息をついて、男に脊を向けたまゝ小さく橫になつた。男の苦しさうに寢返りを打

『一晩貸して頂戴。』

時にはお粂は女の兒を無理につれて來て一夜抱き緊めて寢ることなどもあつた。お粂は端唄などをひとりで彈いた。

ある夜下の上さんの持つて來て呉れた郵便には、附箋が澤山についてゐた。手に取つて一目見たお粂には、その差出人の誰であるかゞわかつた。それは兵營に行つてゐた人からであつた。お粂は封を切つて長い長い手紙を讀んだ。男は病氣で、兵營から歸つて、今では國でぶら〳〵してゐた。肺病らしい容體であつた。

手紙には種々なことが書いてあつた。熱いさびしい男の心が其處にも此處にも見えた。お粂は別るゝともなくいつとなく別れて行つた徑路を頭に描いた。互に逢ふことの出來ないやうな境遇から段々覺めて行つたやうな戀であつた。それに、男は弱い性質で、氣象もはき〳〵してはゐなかつた。お粂は手紙を膝の上に置いてその時分のことを思ひ耽つた。

續いてこの春二階で逢つた男の事も思ひ出されて來た。『何うしてゐるだらう』などゝも思つた。浮草のやうに、かうして段々移り變つて行く自分の身も繩つて考へられた。お粂はもう二十三になつてゐた。

貸本屋の睦ましい夫婦の仲に自分の身を引較べて、最初に持つた亭主を思ひ浮べて見た時には、厭な氣がした。その爲にかうなつて行つた自分の生涯のやうにも思はれた。お粂は手紙を丸めて、立つ

簾も出來た。壁には鬱金の袋に入つた三味線がかゝつた。裏の欄干のところには、秋草の小さい盆栽などが置かれた。お粂は朝に夕にそれに水を灌いだ。

三十三

朝早く富田の姿が渡場のところに見えてゐることなどもあつた。秋になつてから、川の水は著しく澄んで、向うの岸の新しい二階や、樹木や、石を積上げた塀や、小さな雁木などが朝潮の滿ちた上にはつきり映つて搖いてゐた。汽船のまだ來ない小さな埠頭の傍には、荷を一杯に積んだ船が靜かに往つたり來たりした。あらゆるものが總て皆な生々として爽かな色を着けてゐた。上流の大きなガス溜の周圍には、煤煙が勢よく渦を卷いて漲り渡つて見えてゐた。

垣に添つた道には赤い白い木槿が咲いてゐた。蓮の葉はやゝ寠れて土手の櫻はバラ／＼と散つた。富田は工場の方へ出かけて行く勞働者の群に其處此處で逢つた。工場の汽笛の音は彼方此方から聞えて來た。

一日毎に寂しい秋はやつて來た。蟲の音は枕に近く、月が晝のやうに裏からさし込んで來る夜もあつた。蚊はもう餘程少くなつてゐた。秋雨が幾日か續いて降つたあとに、日がくわつと照つて、田圃の上には赤蜻蛉などが飛んだ。お粂は富田の來るのを毎晩のやうに待ちながら、新しく出來たふつくりした蒲團の上にひとりで寢た。

れて、手を出すと、その傍に行つて抱かれた。後には富田も玩具などを買つて來た。

ある日、お粂は富田に言つた。『此間、歌ちやんに逢つちやつた。』

それは貸本屋の細君と女の兒と三人で活動寫眞に行つた歸途であつた。お粂は此處に來てからは、成たけ女中達や知つてゐる人達に逢ふのを避けて、いつも川の方から汽船に乘つて出かけて行くのを例としてゐたが、その日は土手に上らうとするところで、向うから來る歌子の車にばつたり出會つた。歌子は奥の料理屋へ行く途中らしく、ヴェールなどをしてゐた。それでもちよつと頭を下げて挨拶して行つた。

『私の此處にゐるのを皆な知つてるかしら。』かうお粂は考へるやうにして言つたが、『貴方、逢つてるんでせう此頃？』

『逢つてやしないよ。』

『逢つてるのよ。』

『そんなら、さうして置くさ。』

そんな話は時々出たが、富田はいつもそれを否定した。『だつて、きまりがわるくつて、あそこにはもう行けやしないぢやないか。勘定がまだ少し殘つてるんだけど、それさへやらずにあるんだよ。』

『だつて、他にいくらもお茶屋があるもの。』

此頃では、二階の一間は前とは見違へるやうに綺麗になつてゐた。床の懸物も出來れば、夕日を遮る

はさびしくつて爲方がないといふ話、さういふ話を二人は寄ると觸るとした。棚の奧にかくして藏つてある本を借りて來た時には、『大丈夫よ、體に毒になつたつて構はないわよ。』こんなことをお糸は笑ひながら言つた。

お糸はその女の兒を度々二階に伴れて來た。眼のくるつとした、西洋人形のやうな顏をした兒で、『小母ちやん、小母ちやん、』と言つてはよく跡を趁つて來た。近所の人達は、無邪氣なことを話しながら土手下の路を歩いて來る二人の姿をいつも見かけた。

本を讀んだり三味線を彈いたりするお糸の傍で、おとなしく遊んでゐる中に、不意に眠氣がさして、小さな手を疊の上に投げ出して、すや〳〵眠つて了ふことなどもあつた。お糸にはそれがたまらなく可愛かつた。お糸は小さな手だの足だのに觸つて見た。お糸は心から子供が欲しいと思つた。

『此處は小母ちやんの家よ。』寢ぼけて、戸惑ひしたやうなキヨロリとした顏をして立つてゐるのを、傍に寄つて、しつかり抱きしめて、此方に伴れて來たりなどした。富田に向つては、『可愛い子でせう？この位の中が一番可愛い盛りね。こんな子が一人あつたら、何んなに好いだらうと思ふわねえ。お仙さんが子供に夢中で、男のことなんか何とも思つてゐないのを不思議に思つてゐたが、かういふ可愛い子があれば、さうかも知れないと思ふわ。』

始めは富田の鬚の多い顏や、ピカ〳〵光る眼鏡などを怖いものゝやうに思つてゐたが、後には段々馴

はきまつて貸本屋の店に寄つて面白さうな本を借りて來た。細君と話してゐる間、傍に寄つて來る女の兒の頭を撫でゝ、『子供つて本當に可愛い。私も欲しいけれどもねえ。』などゝ言つた。男といふものを話の種にする時には、二人は聲を擧げて笑つたりした。『家のは、弱くつて仕方がないんですよ。』後には細君はこんなことを言ふやうになつた。

お粂は此頃よく化粧をした。高い香水や白粉下などをも買つて來た。夕方になると、きまつて縁側の處に鏡臺を持出して、長い間かゝつて髮を梳いた。肥つた髮結が一日おきには屹度やつて來た。

富田は一週間に一度位はきまつて訪ねて來たが、待つてゐて來ない時には、溜息がひとり手に出た。さういふ時には、貸本屋の店に睦じさうに坐つてゐる夫婦が羨ましかつた。好い男を亭主にしてゐる細君が殊に羨ましかつた。亭主は莞爾して棚から本を出してお粂に渡した。手首の際立つて白いのがいつもお粂の眼に附いた。

『旦那がやさしくつて貴方は仕合せよ。』

こんなことを言ふかと思ふと、時には富田の來て泊つて行つた晩の惚けなどを細君に話した。『昨夜は喧嘩をしちやつたのよ。だつて、遲く來て置いて、今夜は泊つて行けないなんて言ふんだもの。男ッて本當に勝手なものね。餘りだから怒つてやつたわ。』

體の爲めになるといふ食物の話、何うしてか此頃心から男が戀しくなつたといふ話、一夜でも獨りで

た八百屋や、軒燈のおぼろげについた蕎麥屋などが並んでゐた。若い上さんの氷を削つてゐる店などもあつた。土手の奧のお宮のあるあたりまで行つて、二人は引返して來た。二人はやがて別な路を通つて家の方へと歸つて來たが、出る時つけて行つた二階の電燈は、遠くから明るくそれと指さゝれた。

三十二

俄かに暇になつたお粂は、講談や小說本などを近所の貸本屋から借りて讀んだり、前にゐた家の上さんを誘ひ出して、活動寫眞を見に行つたりして日を暮らした。下女の好いのがないのと、一つには下の上さんが飯位は炊いて與れるので、强ひてそれを搜さうともしなかつた。夜は遲く、朝は十時すぎまでも寢てゐた。貸本屋の亭主といふのは、髮を綺麗にわけた色の生白い男で、ぢき近くの役場に勤めてゐたが、お粂は今年五つになる女の兒を持つたその細君とやがて懇意になつて、半日其處に行つてお饒舌を續けたりした。可愛い女の兒はぢきお粂に昵んだ。

『私、淸元を少しさらつて見ようかしら。』ある日かうお粂は富田に言つたが、その翌日から、お粂の姿は貸本屋の二三軒先にある格子戶のはまつた女の師匠の許に見えてゐた。師匠は二三年前まで――土地に出稽古に行つたものだが、年を取つて大儀なので、此頃では家に來るものばかりを敎へてゐるといふやうな品の好い婆さんであつた。お粂は午前の一時間、時には午後の一時間を其處で過して、歸りに

『お前もちつとは赤くなつた。』

『さう赤くなつて？』顏を撫で〻見て、『本當に嬉しいわ。だけど、歌ちやんて言ふ人があるんだから心細い。』

『まだあんなことを言つてる。』

『だつてさうですもの。』

『まだ、わからないんだな。そんなわからないものかね、男の心は——』

こんな話を二人は笑ひながらした。二人は好い加減にして酒をきり上げて蕎麥を食つた。丁度その頃田圃を越した向うの長屋では、混雜した中で、女の行水を使つてゐるのが見えた。襁褓や洗濯物などに當つた夕日はもう薄れて行つてゐた。

夜になつてから二人は散步にと外へ出かけた。二人は川の方へと先づ向つて行つた。其處には新しく出來た橋錢を取る橋などがあつた。大きな工場の窓の灯の中では、夜業のエンジンの音が高くあたりにきこえてゐた。

汽船のとまる小さな埠頭から渡場の方へ出て、堤に添つた細い道を通つて、二人は土手の方へと出て來た。川は溶々として流れてゐた。對岸の灯が二筋三筋、水に落ちて靜かに搖いてゐた。

櫻の葉のチラ〳〵散る中を樂しい氣分で二人は步いた。土手下には、灯の明るい酒屋や、野菜を並べ

について、富田の出した金はまだ多く殘つてゐた。鐵瓶や湯わかしなどをもお粂は買つた。床間のがらんとしてゐるのを氣にしては、『貴方、今度來る時には、何か懸物を持つて來て頂戴ね。わるいんで好いから……。何かあるでせう。』などゝ言つた。二人はつゞいて蒲團を拵へる話などをした。お粂の持つて來た夜着の襟は汚れてゐた。

その他買つて來たものに、餉臺だの手桶だの茶碗だのがあつた。水差しは大きな土瓶で間に合せた。團扇や七輪や德利などは、下から上さんが貸して與れた。

聽て鐵瓶の沸く音が靜かに聞え出して來た。お粂はいかにも嬉しさうにして、長火鉢の前に横に坐つて、蓋などを明けて見て、『鐵氣は出ないでせうか、』などゝ言つた。派手な中形がよく似合つて見えた。

茶を淹れて二人は樂しさうにして話した。夕日の深くさし込んで來るのを見ては、『簾を一つ買つて來なくつてはいかんね、』などと富田は言つた。お粂はお粂で、『此次ぎ入らつしやる時までには、綺麗にして置きますよ。花か何か買つて來て其處に置くと好いわね。……本當に綺麗にして置くわ、見違へるやうにね。』

移轉蕎麥を下へ持つて來る時分には、硝子瓶の德利の二本目がもう鐵瓶の中に浸つてゐた。

『今日は馬鹿に醉が早い。もう赤くなつたらう？』

『さうね、かなり赤いわ。……私は？』

どが靜かに啼いてゐた。階下に住んでゐる夫婦者は、工場の方へ行つてゐることが多いので、つい此間までそこの二階を借りてゐた若夫婦は、下婢を一人使つて自分で総べての炊事をしてゐた。『私もさうするわ、』などゝお粂は言つてゐた。

荷物を運んで行つた時には、昨夜夜業で遲かつたと言つて、上さんは晝寢をしてゐた。樹の間を透した日影は薄く二階の緣側にさして、涼しい風は川の方から來た。お粂は汗ばんだ顏を手巾で拭いて、『涼しいのね、』などゝ言つて、狹い裏の欄干の處に立つてゐた。下には鳳仙花などが赤く白く咲いてゐた。

暫くしてから、前で荷車の留る音がした。と思ふと、新しい簞笥の隅がちらりと見えた。『來たわ、早いのねえ。』かう言つてお粂は嬉しさうにして下りて行つたが、小僧を手傳つて、やがて富田はそれを二階に運び上げた。茶簞笥の方には、小さい硝子戶がはまつてゐた。

室の隅に、壁に寄せて置いて、お粂はすぐ自分の行李から着物を出してそれに入れた。『でも、あそこにゐたんで、着物だけは出來たのよ。このお召は好い柄でせう、』などゝ言つて入れかけたのを出して富田に見せたりした。『これでも總桐ね……。いくらしたの？　十五圓。これで結構ですとも。十分だわ。』ちよつと笑つて見せて、『貴方のも二三枚その中に拵へて入れませうね。』

長火鉢を古道具屋から屆けてよこした。お粂は自分で出かけて行つて、近所の荢屋からそこに入れる灰などを買つて來た。早くきちんと家らしくして見なければ氣がすまないといふ風であつた。今度の移轉

『いくらもあるだらうよ。』

『心がけて置いておくんなさいな。』

かう頼んで置いてからお粂は女將のことや女中達のことなどを話した。歌子と富田との關係から、自分と富田との關係の出來て行つた話などをも細々としてきかせた『わからないものねえ。こんなにならうとは、私、その時分は少しも思はなかつたんですものね。緣ね、矢張……』などゝ言つた。

三十一

路は土手からだらくと下りて、工場に勤める人達の長屋の傍を通つて、眞菰や葭などの茂つたところから段々川の方へと向つて行つてゐた。そこに靜かな二階屋が一軒あつた。ある晴れた日の午後に、少しばかりの荷物を載せた一臺の車は、徐かに其處を通つてその前に行つて留つた。お粂と富田とがあとから續いた。

矢張工場に勤めてゐる夫婦者が住んでゐるのではあるが、室が綺麗なのと、川に近いのと、前の處よりはいくらか世離れがしてゐるのとで、二人は取敢へず其處を借りることにきめた。二人は二三日前に一緒に來てそこを見て行つた。

庭といふほどの庭もないが、兎に角樹木の多いのが富田の氣に入つた。殘暑の赤い夕日の下には蟬な

お粂は皆なに暇乞をして、やがて其處から出て來た。門には丁度自動車が一臺來てゐて、若い藝者が二人客と縺れながら此方へ入つて來ようとしてゐた。

『何うしたの？　お前さん。』

家では、車につけて行つた荷物を見て、上さんが吃驚したやうな顔をして訊いた。お粂は碌々その返事もせずに、二階に上つて、其處にある硯箱の蓋を取つて、長い間かゝつて、金釘のやうな拙い字で、富田に宛てた手紙を書いた。――何うか一刻も早く來て下さいまし、何うして好いかわからないで困つてをりますから――かういふ言葉の次ぎに、――うれしい〳〵此間のことは忘れられません――などゝつづけた。

宛名を旦那さまと書いた。

下に降りて、自分でそれを出して來てから、お粂は初めて詳しい話を上さんにした。上さんは同情したやうな顔をして點頭いて聞いた。『あの方が世話して下さるなら、その方が仕合せだとも、お前さん。女中なんかしてゐるより何んなに好いか知れやしないよ。』

『何處か好い處はないだらうかね？　お上さん。』

『矢張、此の近所でかえ？』

『この近所の方が好いつて言ふのよ。』

てよ……。それにしても、お前さんは何うするの？』かう言ひかけたが、ちよつと笑つて見せて、『歌ちやんが昨日來て、長いこと何か話してたよ、お上さんと。』

『さう？』

女將の後姿が見えたので、話を半に、お条は別れて此方に來たが、種々なことが胸に迫つて來て、急に涙が出さうになつた。兎に角一年近くもゐた家をかうして離れて行くのが辛かつた。自分と同じやうに忙しい中を勤めて來た女中達がさうして皆な出て行つて了ふのも悲しかつた。

一年間のことが取集めてお条の頭に簇つて來た。中でも、田舍の停車場で富田に逢つたことがはつきりと考へられた。あの時富田にも逢はず、逢つても一緒に川の縁の旅館に行かなかつたならば、かういふことは初めから出來て來なかつたのである。お条はその時の自分の心持を振返つて繰返して見た。

女將は、『お前、また取りに來るのは大變だから、荷物をすつかりまとめて持つてお出でよ。』などゝ言つた。お条は今更に人の心の冷めたいのを思ひながら、二階に行つて、押入の中から自分の行李を取出して、種々なものをそれに入れた。お条は其處に蹲踞つて一時間ほど何か頻りに整理してゐた。

お条は新しい生活を思つてゐた。別れて行くのも辛いやうな氣がするけれど、かういふ忙しい束縛から脱れて、自由に暮して行かれるやうになるのは嬉しかつた。お条は新しい住心地の好い二階などを想像した。

お粂は驚いて訊いた。
『少し譯があるんだよ。あれから、お前さんが出て行つてから、大騷ぎだつたよ。女將さんが怒つてね。』
『私のこと？』
『いゝえ、さうぢやないんだよ。種々なことが溜つてゐたんだよ。私も散々毒づかれたよ。お前のやうなぐづは何年使つたつて役に立たないから、他所に行つて、もう少し世間を見て來いつて言はれたのよ。私だつて、お袋つていふものがあるから、扶持を離れちやちよつと困るけれど、さう言はれて見りやねえ、お前さん、仕方がないから、下谷に行くつもりなんだよ。』
『さう？』
かう言つて顏を曇らせて、『ぢや、皆なゐなくなつて了ふのね？』
『お仙さんも出るらしいよ。』
『お仙さん？　本當？　それはうそぢやない？』
『本當だよ。』
『さうかしら？』容易に信じられないといふ風でお粂は言つたが、『そして下谷は何處？』
『あそこにちよつと知つてる家があるんだよ。眞砂家つていふ。お前さん、また、彼方に來たらお出

三十

女將は別に小言を言はなかつたけれど、お粂はもう其處に勤めてはゐられない身になつてゐた。お粂の秘密はもうすつかり女將や女中達に知れてゐた。さういふ二階がお粂にあつて、今度の事件の前にも男が來て泊つて行つたといふことまでも、何處からともなく知れて來てゐた。『私も變だ、變だと思つてゐたんですよ。』かう歌子が女將に詳しい話をした時には、女將は深く考へるやうな顏色をして點頭いて聞いてゐた。『生若い女中は何うしても駄目だね。』などゝ言つてゐた。

兎に角相手が長い間贔屓にして呉れた客だといふことも女將の腹にあつた。お粂がきまりわるさうに入つて行つて二日默つて留守にした詫を言ふと、『解つてゐるよ、もう解つてゐるよ。』かう女將は手で制して、眞面目な顏をして、スッと向うへ行つて了つた。其處にゐた姪のお貞は凝とお粂の顏を見た。お仙もお妻もわざと知らん顏をしてはゐたが、眼から來る冷笑は絕えず鋭くお粂の體に浴せかけられてゐた。誰も彼れも皆な腹の中で指して笑つてゐるやうにお粂には見えた。

ふとお定が手招きをするので、其方に行くと、

『私も急に出ることになつたよ。』

『何うして？』

下りて、灯の明るい町の中を歩いた。活動寫眞の大きな看板に誘はれて、ちよつと入つては見たが、面白くないので、一時間も經たない中に其處から出て來た。二人は流石に旅籠屋にも入る氣になれなかつた。

ふと氣が附くと、小さな停車場が二人の前にあつて、明るいガランとした中に乘客が二三人待つてゐた。奥には電車が一臺來てゐた。

『あそこが好いぢやないか。』

『さうね、好いかもしれない。私、よく知らないけど……。』

『あそこにしよう。』

富田が切符を買つてゐる間、お粂は待合室の隅の方に行つて腰をかけてゐた。やがて時間は來た。

二人を乘せた電車は山の裾のやうなところを廻るやうにして早く〳〵通つて行つた。空いた車室の中には五六人しか客は乘つてゐなかつた。やがて下りた小さな停車場、その停車場から廣告燈をたよりに暗いところを登つて行くやうな路、繁つた木立の中にあるさびしい一軒の旅館、その入口からすぐ奥に傳つて行くやうな長い廊下、歩く度にぎし〳〵きしむやうな粗雜な普請、その奥のところに二人は落附く六疊の一と間を發見した。

やつた。淸どん、ひどいんだツて。あんなやさしい蟲も殺さないやうな顏をしてゐて、あそこを出ると間もなく卷き上げて突放さうとしたんですツて、私、あの人とはそんなに懇意にしてゐなかつたけれど、話を聞いて可哀相になつちやつた。あそこで拵へた着物なんかすつかりなくして了つたんですつて！隨分ひどいのねえ。』

『それでも今でも矢張離れずにゐるのかえ？』

『矢張離れられないやうな樣子ね。……あそこの女中達のごたくも知つてたわ。お梅さんの話もしてたわ。私も出るかもしれないツて言つたら、ちやもう皆なゐなくなつて了ふのね。本當にあゝ喧ましくつちや、いくらお金になつたツてゐられやしないなんて言つてたわ。』かう言つたが、小聲で、『私も捨てられたら、仕方がないから、またさういふ處に行くのね。』

お粂はこんなことを言つて笑つた。人は織るやうに通つてゐた。誰も二人の方を見るものもなかつた。人道の片側には、夜店がずらりと並んで、古道具屋の爺の顏は灯の中に明るく浮出すやうに見えてゐた。片側の氷店には、電燈が靑く赤く輝いて、夜涼を趁つた客が一杯に詰つて入つてゐた。二人はある小さい西洋料理店に入つて、手輕な二三品を命じて麥酒などを飮んだ。二人の向ひ合つて腰をかけた卓の上には、小さな柘榴の盆栽などが置いてあつた。白いエプロンをした女給仕はじろくと二人の方を見た。

其處を出て電車に乘つた二人は、何處に行くといふ當てもなかつた。二人はやがて大きな停車場の前で

い通りを大通りの方へ出ようとするところで、向うからやつて來たお秀にばつたり顔を合せた。

『おや、まア、富田さん。』

かう言つたお秀は、お粂を捉へたまゝ容易に放さうとはしなかつた。二人は立つて話した。富田はぶらぶらと二足三足先に歩いて行つたが、振返つて見たときには、二人は顔を合せて何か熱心に話してゐた。お粂の顔は人の往つたり來たりする中に白く浮出すやうに見えてゐた。富田は五六間先の電信柱の處に立つて待つてゐた。

やがて別れて急いで此方に來たお粂は、

『放さなくつて困つたわ。』

『何うしてるんだえ、此頃？』

『淸どんにすつかり入揚げて了つたんですとさ。今ぢや、この土地の濱の家ツて言ふ家にゐるんだツて滴してるてよ。』

『僕のことを何ツて言つてゐたえ？』

『吃驚してたわ。』

『何う言つて吃驚してたえ？』

『まアさう？　なんて言つてたわ。歌ちやんのことも言つてゐたわ。……でも、私、可哀相になつち

『でも、東京の旅籠屋は險呑だ。』

『大丈夫よ。』お粂はかう言つたが、『もうかうなつて了へば、何でもないわ。何うなつたつて構はないわ。仲店だの、彼方此方歩いて見ませうね。誰に見られたッて逢つたッて構ひやしない。』

瀟洒した意氣な扮裝をして富田と一緒にお粂が其處を出たのは、日が暮れてから少し經つた後であつた。出かけたのをちよつと戻つて、『何とか言つて來たら、體の具合がわるいッてさつき出て行つたきりまだ歸らないッて言つて頂戴な。』かう上さんに賴んで置いて、五六間先に行つて待つてる富田に追ひ附いた。

それでも流石に二人は土手の方へは行かなかつた。二人は裏道を選んで歩いて行つた。二人は戀人のやうにして歩いた。『何うなつたッてもう構はない。』お粂はかう繰返して男の手を闇に握つた。

賑やかな明るい灯は、やがて二人の前に開けた。此頃は夜は餘程涼しくはなつたが、それでも人はまだ陸續と涼みに出てゐた。電車の中の人影が明るく透いて見えたり、廣告燈が赤く靑くぐる〳〵と迴轉してゐたりした。仲見世の入口の柳の葉は灯の影を微かに帶びて、その下では男が頻りに夕刊を賣つてゐた。仲見世は美しく灯にかゞやいてゐた。

觀音堂の大きな門の傍の暗い處では、お粂は富田を待たせて酸漿を買つたりした。それほどお粂の心は晴々してゐた。二人は池の傍を廻つたり活動寫眞前の雜沓の中を押すやうにして通つたりしたが、細

『この近所では駄目だね？』
『さうね、近所でない方が好いわ。』
女將のことも氣にかゝるにはかゝつたけれど、さうした歡樂の方がより多く力強くお粂の心を引いてゐた。初めて逢つた時きり、お粂は思ふまゝ體を男に任せる機會がなかつた。今日こそ心も體もすつかり男に任せて了ひたいとお粂は思つた。ふとお粂は言つた。
『でも、髮が壞れてるわねえ。』
『何アに、それで好いよ。』
『ちよつと待つて頂戴。』かう言つて髮結さんが來て吳れるか來ないかを相談しに階下に下りて行つたが、すぐ上つて來て『構はない、これで行くわ。』かう言つて鏡臺を出して髮を撫でつけ始めた。
富田が財布を出して中を改めてゐるのを見て、お粂は鬢を梳きながら言つた。『私、少しなら、お金、持つてますよ。』
『僕もある。』
『餘りお金のかゝらない處が好いわねえ。待合なんか駄目ですよ。』
『でも、他に好い處があるかえ？』
『何處だツて好いぢやない？　旅籠屋だツて何だツて？』

とがあつたらきかないから……。その時は私はどんな眞似でもするから。』かう言つたお粂の頰には、後毛が二三本かゝつて、壞れかけた髮からは櫛が落ちてゐた。隣の錺屋からは、絕えず鎚の音が聞えて來てゐた。

『何處かへ行つて見たいな。』

突然富田はこんなことを言出した。

『行つて見ませうか。』

眞面目な調子でお粂は合はせた。

『歸らないでも好いかえ?』

『いゝわ、何うせ叱られるんだもの……。今度叱られたら、此方から出て來るんだもの。さうきめて了へば、何でもないわ。行つて見ませうか?』

『よければ行つても好い。』

『行きませう。』

お粂は嬉々して立上つた。

『何處へ行く?』

『何處か凉しいところが好いけれど……』

『何うして？』

『何うしても厭……。苦勞しても此方にゐるわ、私。貴方が世話が出來ないと言へば、他に行くところはいくらもあるんだから。……私、いつそ丸つきり知つてる人のゐないところに行かうかしら？』

『何故だえ？』

『何故でも……詰らないんだもの。私なんかゞ、貴方などのお世話にならうと言ふのが間違つてるんだもの。』

『そんなことはないよ。世話はしてやるよ。』

見ると、お粂はいつか涙を慘ませてゐるので、富田は可哀相になつて、なだめるやうに體を寄せてギウと手を握つた。さういふ處につとめてゐる女中に似合はずしほらしい素直なところのあるのが、富田に離れ難ない情を起させた。『大丈夫だよ、本當に大丈夫だよ、そんなに心配しないでも……』

一時間ほどした後には、お粂は男に縋るやうにすつかり心を開いてゐた。二人は其間に種々なことを語つた。『あんな奴』といふ言葉が久し振で富田の口から出た。『ちや、さうして下さるわねえ、本當に——』こんなことを言ひながら、お粂は階下を歩く人の足音に氣を兼ねて、話をやめて耳を欹てたりなどした。滅多に口にしたことのない富田の細君の話なども出た。『奥さんのことなんか私は何とも思つてやしない。奥さんの爲めなら、一と月貴方が來ないたツて好いけれど……、あの人の爲めに來ないやうなこ

粂は一歩突込んで言はうとしては幾度か躊躇した。段々お粂の心は焦立つて行つた。

『それにしても、一體、貴方何うするつもりなの？』

『世話はしてやるよ。僕だツて、そんなに無責任ぢやないから。』

『だツて、世話をするだけではわからないわ。何う世話をして下さるの？』

『それは僕の出來ることなら、何うにでもしてやるよ。何處かの二階でも何でも借りるさ。』考へて、

『しかし、まだ、お上に言はれた譯ぢやないんだから、もう少しぢつとしてゐたら何うだえ。』

『だツて恥をかゝせられるのは厭だわ。』

『好いよ、好いよ、そんなに心配しないたツて好いよ。イザとなれば、何うにでもしてやるよ。』

『私はかうなつては、明日にも暇を取らうと思つてゐるのよ。』かう言つたお粂はふと頼りないやうな心になつて、『貴方、本當は、私のことなんか考へてゐやしないでせう？』

『何故？』

『だつて……さうなら、もつと心配して哭なけれやならない譯だもの。ボートに行つた時だツて私はさう思つた。貴方はあの人に惚れてるんだから駄目よ。』

『そんなことはないよ。』富田は笑つて、『ぢや、前に言つたやうに、田舍に行くかえ？』

『田舍は厭……』

で歩いた。

お粂が行つて一時間ほどしてから富田はやつて來た。お粂は何うにか話をきめて、急いで歸らうと思つたけれど、さて逢つて見ると、さうも行かなかつた。お粂は二人の間のかなり深く突詰めてゐるのを感じた。お粂は話しかけて男の心を讀まうとするやうに、ぢつと顔を見たりした。考へ込むやうにしてゐる富田の態度はお粂には物足らなかつた。

『兎に角、私はもうあそこを出なけれやならないんですから。』

お粂は決心を示したやうな口の利き方をした。

『それにしても本當に、お上は知つてるだらうか。』

『知つてるんですとも……確に知つてるんです。でなくつちや、あんなことを言ふわけはありませんもの。』

『何うして知れたんだらう?』

『何處かで見られたんぢやなくつて?……。そしてかまかなんかかけられたんぢやなくつて? あの人、中々さういふことは巧いんですから。』

『いや、さうぢやない。誰か知つて話した奴があるんだよ。』

こんなことを言つて見たところで仕方がなかつた。何とか富田が言つて吳れるのをお粂は望んだ。お

顏には、神經性の激した色が上つてゐた。

お粂は氣の毒でならなかつた。もう時計は三時を過ぎてゐた。言ひ出せば屹度何か言はれるに相違ない。烈しい小言を打突けられるに相違ない。いつそお定に賴んで默つて行かうとも思つて見た。しかし後護たい心が底にあるので、それも出來なかつた。お粂は立つたり居たりしてゐた。その間にも段々時は經つて行つた。お客でもあれば猶ほ出られなくなる……。かう思つたお粂は、思ひ切つて、女將とお貞の母親との話の隙を見て、『ちよつと、一時間ほど醫者に行つて來たう御座いますが、』と言ひ出した。

『何處がわるいのだい？　また齒かえ？』女將の聲は銳かつた。

『いゝえ、熱が少しあるやうで、頭が痛くつて仕方がありませんから。』

『とんだ頭だねえ……。二階で、誰か待つてるんだらう。馬鹿におしでないよ。』

お粂はギヨツとした。顏がサツと赧くなつた。

『お前にも言ふことがあるんだよ。本當に碌でもないものばかり揃つてゐる。そんなに男が戀しいのかねえ。そんなに戀しけれや、男の傍に行つてかぢりついてお出でよ。』かう言つたが、好いともわるいとも言はずに、もつと肝心なことがあるといふやうに、お貞の母親の方に話を向けて了つた。お粂はすごすご此方へとやつて來たが、此まゝ行かずにゐる譯にも行かなかつた。お粂の內心の要求は愈々熾になつて來てゐた。お粂はお定に賴んで、こつそり裏門の方から出て行つた。通りに出ると、お粂は急い

て來た。溜息がひとり手に出た。

二十九

その日は朝の內は女將の機嫌が好かつたが、午後貰ひに行つた勘定が取れなかつたので、急に機嫌がわるくなつて、散々女中達に當り散らした。『お上さんだッて、あれで心配があるんだから、無理はないけれど、何もそんなに私達に當らなくつたッて好ささうなものだ。』など、お定は言つてゐた。女將は到るところで癇癪の聲を立てた。後には、庭の掃除の仕方がわるいと言つて男衆にまで呶鳴り附けた。姪のお貞などは隅の方に小さくなつてゐた。

そこに運わるくお貞の母親がやつて來た。それは女將の妹で、來ると常に無心を言つて行つた。これに限らず女將の同胞には運のわるいものが多かつた。弟に當る男は、女將の留守によく麥酒の罎を內所で持つて行つたりした。兄は種々なことを計畫して、失敗する度に、いつも此處に來て女將を苦めた。『それはねえ、貴方、同胞だから、出來ることはしてやりたいんですけれど、さう〳〵私だつて續きませんからね。』女將はこんなことを常に自慢さうに懇意な客に話して聞かせた。

お貞のことを心配してやつて來た母親は、一も二もなく癇癪の餘波を受けた。帳場の傍で話してゐた女將の聲は次第に高くなつて行つてゐた。『お前、そんなことを言つたつて駄目だよ。』かう言つた女將の

心を何遍となく押靜めて見たが、矢張駄目だつた。……歌子……富田……自分が怒つたり泣いたりしてゐるのを、歌子と富田とが平氣で笑つて見てゐる夢から覺めた時には、お粂の枕は涙に濡れてゐた。夜はいつか明方近くなつてゐた。

朝起きて一緒に掃除をしながらも、お粂は何となくお仙の眼に逢ふのを恐れた。その眼は凝と自分の方を見てゐるやうに思はれた。それにお妻もお定も其他の女中も皆なもうその事を知つてゐて、笑つて自分に對してゐるやうにすら思はれた。やがて起きて來て、姪のお貞を指圖して朝の座敷の花を生けかへてゐる女將の傍を通るのも何となく後めたいやうな氣がした。『お粂さんお早う。』こんなことを男衆から言はれたのも氣にかゝつた。

昨夜遲くお粂の番に當つた泊込みのお客は、奥の桔梗の間に寢てゐた。お粂はその前の座敷を掃除して、廊下に雜巾をかけてゐたが、ふと其處のベルが靜かに鳴つた。『姐さん？　お風呂は？』かういふ艶かしい聲がつゞいてその中から聞えて、やがて長襦袢のまゝの女は、其處から出て廁に入つて行つた。目の覺めるやうな綺麗な女であつた。つゞいて出て來た男は、風呂の加減をお粂が見に行つてゐる間、座敷の緣側のところに蹲踞つて、庭に咲いた草花などを見てゐた。

『何うぞお召し下さいまし。』かう言つて置いて、お粂は桔梗の間に入つて行つて、蚊帳を外したり蒲團を疊んだりした。散らばつてゐる櫛だのマッチだの煙草だのを小さいみだれ箱の中に入れて其處から出

二十八

お粂は種々のことが氣に懸つた。歌子に知れたといふことは、女中達や女將に知れたといふこと丶同じであつた。いつお粂は女將から呼びつけられて、お秀と同じやうな運命に遇ふか知れなかつた。お粂はかうして落附いて居られないやうな心持になつてゐた。番に當つたのがお仙であつたのも運がわるいと思つた。お粂はもう少しさつき車を呼んで急いで歸つて行つた富田のことを考へて、床に入つてからまでもひとりそのことを繰返してゐた。

『何うしてお歸んなさるの？　もう遲いぢやありませんか。』

など丶その時女將は寢ようとしたのを二階から下りて來て富田に言つてゐた。其處に立つて見送つてゐた歌子は、富田の車の出て行つたあとで、帳場で何か二た言三言女將に話してゐた。女將は笑つてゐた。

闇の中に沒して行つた富田のパナマ帽の白いのが疲れたお粂の夢現の中に往つたり來たりした。なアに……構ひやしない。こんな家になんか置いて貰はなくつても好い。明日は早速相談して、一刻も早く此處から出ることにしやう。こんなことを考へるかと思ふと、あとからあとへと男に對する不安やら疑惑やらが續いて出て來た。『そんな富田さんぢやない。』お粂はかう强ひて獨言して、渦のやうに亂れて來る

『何うしてだか、よくわからないがね。』

『それで、あんな風だつたのね。私も變だとは思つた。』

『しかし、大丈夫だよ。』

『でも……知れちや大變ね。』

『まア、心配しないでお出でよ、その中行くから。』

『明日來て下さいな。』

『成たけ行く――』富田はかう言つたが、『ぢや、その時緩くり話をするから……。さつきからそれを言はうと思つてゐたんだけども、中々駄目なんだよ。ぢや、その時……』

『明日、いつもの頃にね。』

『あゝ。』

かう言つたが、その時長い敷石を此方に傳つて來る女中の足音が聞えたので、二人は慌てゝ別れた。

二人手を握る間さへなかつた。やがて女中をやりすごして其處から出て行つたお粂は、俄かに胸の鼓動の高くなるのを覺えた。さつきの歌子の態度や言葉などが繰返されて來た。お粂は明るい電燈の下で思はず溜息をついた。

二度目に此方から話しかけた時には『さうね、』と冷かに挨拶したゞけで、そのまゝ富田の室の方へ急いで入つて行つた。

兎に角今日は不思議だ。喧嘩でもしたのかも知れない。こんなことをお粂は思つてゐたが、持つた番の忙しいのについ追はれて、別にさう深く考へる暇もなかつた。十時過にそつと行つて見た時には、二人はもう其室にはゐなかつた。

『歌ちやん、萩？』

などゝお粂は番のお仙に訊いた。

それから一時間ほど經つた。大勢の客の跡片附をして了つて、そこから此方へ出て來ると、夜具蒲團などを入れて置く傍の暗い押入の處に、黒い一つの影があつて、頻りに此方を手招きしてゐた。

お粂は寄つて行つた。

それは富田であつた。やがて二つの影は傍の明いた暗い一間の中にと入つて行つた。富田は顔を寄せて、小聲で二言三言お粂に言つた。

『さうなの？』

『だから、さう思つてゐなくつちやいけないよ。』

『困つたわねえ。何うして知れたんでせう。』

二人きりになつた時、歌子は、言つた。『矢張、さうね。わかるわねえ。』
『いゝぢやないか、そんなことはもう……。』
『好う御座んすども……。わるいツて言ひはしないわ。』
『まア、酒でも注いで呉れたまへ。』
『女は隨分度胸が好いわねえ。……私を笑ひ草の種か何かにする積りでゐるのね。でも、さうはいかないわ。』
『まア好いツて言ふのに……』男は機嫌を取るやうに笑ひかけて體を女の方へ寄せて行つた。
その次ぎにお仙が入つて來た時には、以前に引きかへて、二人は唯面白さうに笑ひ戯れてゐた。

二十七

その夜はお粂は富田の傍に寄りつけなかつた。隙を窺つて何遍となくその室の方へ行つて見たけれど、歌子はいつも富田の傍を離れずについてゐた。さつき歌子の自分を見た眼も氣にかゝつた。
そればかりではなかつた。そこから一間置いた室の番に當つてゐたお粂は、廊下の處で一度ならず二度までも歌子とすれちがつた。いつもならば莞爾した顔を見せて、如才のない世辭を言ふのが常であるのに、今日は不思議にも、すツとすまして、見ないやうな風をして、わざと別の女中に聲をかけたりした。

歌子は靜かに落附いた調子で言つた。しかし庭の方を見た眼をすぐお粂の方へ移して行くのを富田は見た。歌子はまた歌子で、見ないやうにして絶えず富田の眼の行方を見てゐた。

『早く涼しくなれば好いのねえ。』

お粂はこんなことを言つてゐた。お粂は何となく壓されるやうな氣分を感じた。いつもとは著しく違つてゐた。富田と歌子との間も變であつた。富田が手酌で酒を注いだりするのをも歌子は默つて見てゐた。お粂は富田の顏を見た。そのあとを歌子の眼は追ひかけて行つた。

女將が昨日から病氣で寢てゐる話などをお粂のするのを、歌子は平生と少しも變らない調子で聞いてゐたが、それでも時々變な鋭い眼色をしてお粂の體を搜すやうにして見るのを富田は見た。其處へお仙は水を持つて來て富田に渡した。

やがてお仙を捉へて、輕い戲談を言ひ始めた富田の態度には、何處かわざとらしい調子があつた。お仙は唯キヤツ〳〵と言つて笑つた。歌子が『でもお仙姐さんなんか大丈夫ね。』と言ふと、『えゝ、えゝ、私なんか男にはもう懲々……それはねえ、歌ちやん、亭主にはもう愛想をつかしたんだもの。』こんなことを言つてお仙はめづらしくその亭主の話を持出した。傍からお粂はちよいちよい口を挾んで見たが、富田も歌子もいつものやうに調子好く相手になつて呉れないので、お粂は少しゐてから、つまらなさうにして挨拶して向うへ行つた。

富田はかう言つて、兩手を後頭部に組んだまゝ後にごろりと倒れて了つた。其處に番のお仙がやつて來て、例のお世辭を振り蒔いたが、いつもとは座敷の樣子が違つてゐるので、ちよつとあたりを見廻して、『何うかなすつたの？』かう歌子に訊いた。

『何でもないのよ。』歌子は笑つて打消した。其處にお粂が莞爾しながらやつて來た。

其處に來て挨拶したお粂の顏を歌子は凝と見た。『今日は隨分暑いのねえ。』かう言つてお粂は緣側に腰をかけてゐたが、寢ころんだまゝで容易に起きない富田の方を見て、

『何うかなすつたの？』

『いゝえ。』

歌子がかう言つたと同時に、富田は急に起きかへつた。ちよつと掠めるやうに、お粂の顏を見た富田は、すぐお仙の方を向いて、『水を一杯呉れ給へな。』

『何うかなすつたの？』

『何アに、何でもないよ。』

お仙はやがて立つて行つた。富田は餉臺の上についであつた盃をぐつと呷つたが、狹い庭に咲いてゐる草花を見て、『もう秋草もちきだね。萩がもうあんなに咲いた。』

『本當ね。』

『さうですかよ。貴方も隨分此頃はたちがわるくなつたわねえ。お茶屋の女中なんかと出來たり何かして、見つともないぢやありませんか。人に知れて、きまりがわるくないの？　貴方？』

『まア、好いよ、何うでも……』

『本當に、私だツてきまりがわるいわ。此處にゐる大勢の姐さん達に知れたツて物笑ひだわ。イヤだえ、本當に、貴方は？』

『まア、よせ、面倒臭い。』

『私、言つてやるから構はない。だつて、お茶屋の姐さんが藝者の內情をすつぱぬくつていふ法はないんだもの。それぢや稼業は出來やしないもの。』

『まあ、好いつて言ふのに……』かう言つた富田はいくらか眞面目になつて、『俺だつて言ふことは澤山あるよ。隨分俺だつて、お前の世話をしてやつた。お前はそんなことを言はれた義理ぢやないか。』

『何うして？』

『ひどい目に遭はせてゐるぢやないか』

『何う、ひどい目に？』

『わかつてゐるぢやないか。もう言ふのは面倒臭い。』

富田は自分の口からはつひにお粂との關係を言はなかつたけれど、何の位の程度まで歌子がそれを知つてゐるかといふことに就いては、苦心して探つた。歌子は『一體何うして出來たんです？』などゝ言つて迫つて行つた。富田は辯解した。

『おや、何うして、貴方、あんな處に出入するの？』

『昔から知つてるんだよ。』

『そこの上さんを？　そんな噓を言つたつて駄目よ……』

『でも、僕が行つてゐる家に、お粂さんが行つてゐたつて不思議はないぢやないか。わるく疑ふからさう見えるんだよ。』

『そんなことはない……』

『つまらんことを女將に言つたり何かしてはいけないよ。そんなことはないよ、さういふ風に思はれちや、お粂さんに氣の毒だからね。』

『それ、御覽なさい。本當ぢやありませんか。』

『何故？』

『さうでなくつて、今、言つた口が出ますかよ。矢張心配になるんだよ。』

『駄目だな、すぐあゝ取るから。唯、さう思はれちや氣の毒だと思つたから言つたんだよ。』

『何だかちつともわからない。』

『まア、貴方も貴方だが、あの女も女ね。隨分度胸が好いのね。私、そんなことは夢にも知らなかつたから平氣で甘いことを言つてゐたのね。隨分、私、甘かつたわねえ。中でもこの間セーターに行つた時なんか甘かつたわねえ。』

こんなことを言つて歌子はまた笑つて見せた。富田はまご〳〵したやうにしてゐた。富田はお粂のことを考へてゐた。『それにしても、何うして知れたらう、本當に見られたのかしら。』こんなことを思つてゐたが、すぐそのあとから、お粂の身の上のことが逸早く胸に上つて來た。お秀のことなども思ひ廻された。しかし、二人の間の空氣はさう突詰めてはゐなかつた。

『えらい想像をしたもんだな。』

富田はわざと笑ひながら、

『もう、白狀した方が好いわよ。』歌子はをかしくなつたといふ風で、『私も甘いけど、貴方も隨分甘いわねえ。何うしたの？　一體？　何處で出來たのよ。此處で？　ちやない？　すつかり白狀おしなさいよ。堪忍して上げるから。』

『だつてそんなことちつとも知らないもの……。知らないものを何うしやうもないぢやないか。』

『變だ、變だとは私も思つてゐたのよ。』歌子はかう繰返して言つて、笑ひながら富田の顏を見た。

あそこの角から曲つて行つたでせう。あそこに行つたでせう。』
『あそこツて何處？』
『まだあんなことを言つてゐる。すつかり種は上つたのよ。いくら隱したツて駄目よ。私が見てたんだもの……』
『だつて、知らない。』
かうは言つたが、富田の顏はいくらか赤くなつてゐた。
『知らないことがあるもんですか。その二階屋の上さんが店頭に出てゐて、貴方が何か言ひながら上つて行つたぢやありませんか。私、實は呆れて了つた。そんな貴方ぢやないと思つてゐた。男ツてそんなもんですかね。』
輕く笑つたやうな調子で歌子は言つた。
『そんなことを言つたツて、僕はちつとも知らないよ。僕はそんな處に行きやしないよ。何故、そんなことを言ふんだい？　誰か人違ひぢやないかえ？』
『人違ひ？　さうかも知れないわ。』
かう言つて、『まア、人違なら人違ひで好いわよ。何も私がそんなお世話なんかやかないツたツて好いんだものねえ。だけど、呆れましたよ、本當に……。』

『ちや、今度行つたら、それとなく訊いて頂戴よ。少し譯があるんだから……』

『いゝともね。』

『その代りお禮はするわ。』

『兎に角、あんな人があんな家に出入りするのがちつと變だね……。いゝともね、聞いておくともね。すぐわかるよ。』

『へえ？ さうですかね。そんな處に出入りするんですかね。』歌子はかう繰返して言つて、その不思議の中から思ひ當る節々を捜すやうな顔色をした。

二十六

その次ぎの次ぎに逢つた時に、歌子はだしぬけに富田に言つた。

『貴方、好い穴が出來てね。』

『何故？』

『何故もないわ。變だ、變だと此間から思つてゐたら、思つてゐた通りね。』

『何が――』

『何がもないわ。此間――さう昨日、一昨日の午後にこの裏の通りをこつそり通つて行つたでせう。

『二階でも貸しさうな人ぢやない？』
『それがさ……上さんが何うもさういふ風な人だから、私もちよつと胸に浮んだのさ。あゝいふ人があんな家に行つてるのがをかしいからね。』
『さうね……』少し間を置いて、『そしてお上さんぢき歸つて來たの？』
『でも、三十分位ゐたよ。お前さんの話なんかしてゐたよ。』
『何だツて？』
『かういふ人がゐるだらうなんて言つてゐたよ。それから、小照さんや春子さんの話なんかもしてたよ。かなり土地のことをよく知つてる人ね。』
『へえ？』かう言つた歌子は持つてゐた不思議の中に明るい光線のさして來るやうな氣がした。歌子は暫し考へ込んでゐたが、
『他にはどんなことを言つて？』
『私は、それからすぐ歸つて來ちやつたから、あとは知らないけれど、此間、お前さんと歩いてゐる人がその人だから、へい！　と思つたよ。』
『お上さん時々行くの、其處へ？』
『別に行きもしないけれども……』

出てゐる上さんの許で。』
『へえ。』
と歌子は不思議さうな顔をして、『そんな處にあの人行つてゐたの？』考へるやうにして、『親類か何かかしら？』
『私も詳しいことは知らないけどもね。それに、その上さんともつい此頃懇意になつたばかりなんだから。』
『それで、何んなにしてゐて？』
『私が少し用があつて入つて行くと、あの人長火鉢の處に坐つてゐたつけが、いろんなことを言ふのよ。この土地の藝者のことなどよく知つてる人ね。』
『誰か伴れ込んで來てるんぢやないかしら。』また考へて、『其の時は一人？』
『一人きりだツたよ。でも、親類ツて言ふ風な話し振でもなかつたよ。』
『上さんは何んな人？』
『上さんはもう四十先きだよ。亭主は五十位の人で、それは内にも一二度來たことがあるよ。』
『二階があるの？』
『あるよ。』

妓などの置かれたのを見ると、何だか腹立たしいやうな惜しいやうな心持がしないでもなかつた。しかしそれもほんの幾の間で、やがて男の家は滅茶滅茶になつて、男は北海道の方へと行つて了つた。小照はその爲め、ピストルなどを向けられて、一時近所の噂の種になつて新聞にまで書かれた。『好い時、思ひ切つたわねえ。』などゝ歌子はその時言つてゐた。

土手の上で逢つてから、四五日歌子はその婆さんに逢はなかつた。處がある日のこと、ある處で逢つて、いろ／＼な饒舌をしてゐると、婆さんは思出したやうに、

『此間、一緒にゐた方は、お客樣？』

『え。』

『いつから？　長いお馴染？』

『もう、かなり前よ。』

『あの人一度見たことがあるから……』

『さう？　何處で？』

『何アに、ちよつとした處だがね。』

『この土地で？』

『え……』と婆さんは點頭いて見せて、『この奥にゐる、うちの人とつい此頃懇意になつた、同じ工場に

『君方のよく行く處かえ？』

『また、あんなことを……。私はそんなんぢやないッて言ふのに……』かう言つたが、『でも、此間まで照江さんのお客で、その二階を借りてゐた人があつたわ。』

『今はゐないのかえ？』

『照江さん、すつかり絞つて了つたんでせう。何でも、何處かの若旦那よ。まだわかい學生見たいな人よ。』

今でこそこんなことを言つてゐるけれど、一二年前には、歌子も一度その婆さんの二階の厄介になつたことがあつた。その男を今でも歌子は時々思ひ出した『あの人がもう少し何うかした男だッたら？』など、思つた。芝あたりのかなりの骨董商の息子で、二三年前に父親が死んで、家は餘り評判のよくない母親と番頭とがやつてゐた。歌子の爲めには前後に澤山ない位に利益になつたお客であつた。金なども一時湯水のやうに使つた。唯、厭なのは、其男が執こく、嫉妬深いことで、朝から晩まで女の顏を見てゐなければ承知が出來ないといふ人であつた。歌子はある待合からその男をその二階に引張つて來て、半年ほど其處で逢つてゐた。別れた時には、もうかなり男の手元はあやしくなつてゐたが、それでもまだ無理をすれば少しは何うにか出來る位は持つてゐた。歌子はつくづく顏を見るのが厭になつて別れたのだから、さう大して未練はなかつたけれど、そのあとに小照といふ妓と出來て、小照の家に新しく抱

つてゐない？　うそを言つてる。女はだから嫌ひさ。』こんなことを言ふと、女將は例の轉げる樣な笑ひ方をして、『貴方が女がきらひ？　貴方が？　さう？　貴方が女がきらひ？』わざと繰返すやうにして言つた。

ある時には、男と女とは內所でゐようと思へば、いつまでも兩方で內所にして置かれるものだらうかといふ話から始まつて、不倫な關係をした男と女の話を長く〳〵富田は話した。『さうね、さう兩方で內所に出來たら面白いでせうね。でも駄目でせうよ、屹度。何うしてもわかるでせうよ。』その時歌子はこんなことを言つたが、不思議にもその富田の話が後までも忘られずにはつきりと歌子の頭に殘つてゐた。歌子はそこから不思議の絲をひき出して來ることが出來るやうな氣がした。

二十五

ある晩、歌子と富田と土手の上を步いてゐると、ちよつと摩れ違つた婆さんが、笑ひながら歌子に挨拶して行つた。夕暮でよくはわからなかつたけれど、何處かで富田は見たやうな氣がしたので、

『誰だえ？』

『なアに、ちよつと知つてるお婆さんよ。』歌子は打消すやうにして、『このちき下にゐる人よ。貸二階なんかしてゐるのよ。』

た時には、『それは人が違ふぢやないか、』と言つたきりで、富田は巧みに話を他に外して了つた。

それにも懲りずに、歌子はその話を種々にして持出して見た。歌子は白い腕と濃い髪と暗い灯の影とが男の心をいかに蕩かし得べきかといふことを、人一倍深く知つてゐる女であつた。醉つた時の男の心に乘つて行くことなども上手であつた。しかし、今度はその巧みな表情も、美しい容色も、髪も腕も總ていつものやうな滑らかな効果を奏さないのを歌子は見た。歌子は種々に男の心やら態度やらを想像して首を傾けた。

後には歌子はその不思議をわざと顏にも口にも現はさないやうにして、唯素直に靜かに男の態度にのみ注意した。『私なんか、もう飽きたんでせう、』などゝ言つて輕く笑つた。

この不思議の容易に解けない中に月日は經つて行つた。その間には二度も三度も歌子は富田に逢つてゐた。一方には、富田の言葉に鋭い皮肉やわる口が多くなつて行くと共に、一方には藝者なんか仕やうのないもんだ――女なんかは玩具にさへしてゐれば好いもんだといふやうな調子が色濃く出て來てゐた。お定を前に置いて『女ッて言ふものは玩具にして置くにかぎるよ。眞劍になつたらおしまひだ。すぐ引張られて行つて了ふからね、』と言つたりした。ある時はかなり醉つてゐた。女將をつかまへて、『女なんて、なアに、わけはないよ。ぢき何うかなつて了ふもんだ。女の要求の方が男の要求よりも強いかも知れないんだからな。少し話して聞かせないか。女將なんかさういふ經驗を澤山持つてゐるんだらう？　持

歌子はかまをかけて、種々のことを裏から探つた。『貴方、此頃玉の屋に行きやしない？……うそ……うそ、屹度行つたんだよ、貴方。イヤねえ、屹度、春子さんと出來てるんだよ。』

『何故だえ？』

『だツて……』『でなくつてはそんなことを知る譯がない』かう言はうとして、慌てゝよして、『屹度さうよ。』

『それぢや思ひ當ることがあるんだね、』

富田は靜かな皮肉な調子で言つた。

しかし、その玉の屋にも富田が行くやうな風は見えなかつた。不思議は愈々不思議になつて行つた。それに富田の態度も此一と月二た月非常に變つて行つてゐた。『駄目よ、そんなに氣を廻しちや、誰か好い加減なことを言ふのよ。誰？　一體？　そんなことを貴方に言ふのは？』歌子は甘えた調子で、男に絡みつくやうにして言つた。

歌子は具合が好かつたら、此の頃富田から少し金を引出さうと考へてゐた。かねて抱妓を一人置きたいと思つてゐて、一二度はその話を富田にしたこともないではなかつた。富田はその時、『僕などでなくつても、もつと好い氏子が澤山ゐるだらう、』などゝ言つてゐた。が、しかし押して行けば押切ることの出來ないこともないやうな口吻であつた。それが俄に調子が變つて行つた。此間、それとなく當つて見

勿論、富田も正面からそれを言ふのではなかつた。いつもと違つたやうな處は少しも見せないでゐて、知らん顔をでちよいちよい眞相に突込んで行つたやうな口裏を見せた。歌子は默つて富田の顏を見た。

『私、そんな女に見えて？』かうは口には言つてゐる歌子も、腹の中ではよく狼狽した。逢ふ度に不思議の影は愈々濃かになつて行つてゐた。歌子は自分の身の周圍を振返つて見たりした。何處か別な待合かなんかに富田は出かけて行つて、他の藝者からさうした種々なことを聞くのではないかと思つても見た。それからは歌子は、富田の知つてゐる待合や藝者などを注意して見た。しかし、何處にもさういふ影も形もなかつた。自分の知つてゐる範圍では、何處の待合にも富田らしいと思ふ客は見えなかつた。

『不思議だねえ。』かう歌子は竊かに腹の中で思つてゐた。

『お前は水臭いから厭さ……。それは稼業だから、何とも言ひやしないがね。しかし、そんなに隱さなくつたつて好いぢやないか。』こんなことを言ふかと思ふと、時には、押默つて相對して、歌子の體がそんな體であるのをさもめづらしいといふやうに見た。歌子はいつも自分の上に深く閃めいてゐる富田の眼を見た。

誰も知つてゐる筈のないある客筋との關係を富田が知つてゐるやうな口吻を見せた時には、歌子は思はずはつとした。『何うして貴方、そんなことを知つてゐるの？』と思はず口から出ようとした。歌子は富田の顏を凝と見た。

の顏を照した。お粂の顏は美しく白く見えた。

河風に消えさうになるのを皆で袖で被つて、辛うじて新しい蠟燭をそれにつぎ足した。その時お粂は富田の膝からある微かな暗示を受けてすぐそれを返した。お粂は消えないやうに靜かに提燈を開いてゐた。

河に臨んだ料理店のあるところまで行つて、其處からボートは引返して來た。灯の澤山ついてゐるさつきの舟の中からは、行く時の騷ぎに引かへて、『河風についさそはれし涼み舟、文句もどうか口說して……』などゝいふ小唄が靜かにきこえてゐた。『まア、お月樣が……』ボートが元の河岸に着いた時、かうお酌は聲を立てゝ言つたが、それは丁度前の黑い森から毬のやうに浮び上つた遲い月であつた。土手の上には河風が行く人々の袖を涼しく吹いた。

二十四

歌子は此頃富田が種々なことを知つてゐるのを不思議にした。前にも何うしてあんなことを知つてゐるだらうと思つたことも一度や二度ではなかつたが、新聞か何かに出たのかも知れない位に思つて、別にそれを氣にも留めずにゐた。『貴方、此頃、餘程何うかしたわねえ。人を疑つてばかりゐるわねえ。大變人がわるくなつたわねえ、』など丶言つて笑つて過ぎて來た。

た。岸の灯の影も少く、船の往來も稀に、モーターの音ばかりさびしく水に響いて聞えた。をりからのさし潮に岸の蘆のたぷ〳〵動いてゐるのや、渡場の森の黑い影や、大きな工場の夜業の灯などが闇の中にそれと指さゝれた。上からモーターが一艘下りて來たが、それは靜かな處で操縱の修練でもやつてゐるといふやうに、少し行つては、また引返して上流の方へ溯つて行つた。

『秀さんかも知れないわ。』

お酌はモーター通のやうな口の利き方をして、河岸の近くに住んでゐるモーター道樂の人の話などをした。と、歌子は、『澤ちやん、よく知つてるのね……。さう？　あの人もモーターを持つてるの？　雪ちやんの旦那でせう？』

『え、さうよ。私、雪ちやんと一緒によく乘せて貰つたわ。』

『旦那が運轉手で？』

『えゝ。』

此時富田が盃を出したので、お粂は其處にある德利を取つて酌をした。提灯の蠟燭はもう殘り少なになつて、灯が底の方にヂ、と瞬いてゐた。『もう蠟燭はないの？』かう富田に訊かれて、『いゝえ、持つてゐます、』と言つて、お粂は船緣のところに置いた蠟燭を闇にさぐつて、モーターの機械の一端にかけて置いた提灯を取つて、それを膝の上に置いたまゝ、靜かに疊んだ。短かくなつた蠟燭は急に明るくお粂

か何かの方が好いわねえ。』

橋を越えてから、ボートはぐるりと廻つて、元來た流れを今度は上流の方へと行つた。歌子は、うで玉子をボートの持主にやつたりした。鬚の生えたその持主は、やがてモーターの機械の説明などをして聞かせた。

『もつと上流に行きますか？』

出て行つた河岸近く來た時、ボウトの持主は訊いた。

『もう少し行つて見ませうね。』歌子は富田の方を見てかう言つたが、急に思ひ附いたやうに、『大橋あたりまで行つて見ませうか？』

『千住の？』

『えゝ。』

『大變だ……あそこまで行くのは――まア、そこらまで少し行つて見よう。』

『ぢきよ、この早さでは――』

『でも、千住までは遠いわねえ。』

お粂は傍から言つた。

少し溯ると、下流の賑やかな光景は、あれは幻影であつたかと思はれるやうにあたりがしんとしてる

船が動けば、すぐ落こつて了ふよ。はひれないかな、此方に？』など〻も言つた。お粂はその度毎に、『大丈夫ですよ、しつかりつかまつてゐるから、』など〻言つてゐたが、後には、『落こつて死んだつて好いんですよ、私なんか。誰も泣いて呉れるやうな人はゐないから、』など〻言つて笑つた。お粂の顏は闇に白く見えてゐた。

富田は枝豆だのうで玉子だのをお粂に取つてやつた。歌子は、『お粂姐さん、私が代つて上げようか。』

『い〻え、好いのよ、大丈夫よ。』

ボートがその次の橋の下を通る時分には、それでもお粂は歌子と並んで富田の前の處に小さく割込んで入ることが出來た。皆なの膝と膝とが觸れ合つた。

『窮屈ねえ、無理ねえ。三人しか乘られないのね、これは。』

『でも好いよ、この方が——。落こつちや大變だからな。それこそこんなにしてゐられやしない。』かう言つた富田は始めて安心したやうに盃をお粂の方にやつた。漲るやうな光の都會はまたその前に近づいて來てゐた。岸の灯、橋の轟き、赤く青く變る廣告燈、交叉する度にピカ〱光る電車の線、開放した料理店の一と間、その中を黑く光つた水は溶々として漲り流れてゐた。

『柳橋ね、もう此處は？　早いわねえ。』

歌子はかう言つたが『でも、三味線はこれでは駄目ね。セーターの音がイヤね。本當なら、矢張屋形

歌子はめづらしさうに鬚の生えた肥つた男の方を見た。男は脊を丸くして頻りにボートの器械の加減をはかつてゐた。

モーターの音がけたゝましくあたりに響いて、ボートはやがて川へと出て行つた。岸に臨んだ水樓や涼しい風に開放された二階の室や、長く水に落ちて動いてゐる幾條の灯の影や、さういふものは皆な逸早く目まぐろしく眼の前を動いて通つた。華やかな灯を載せて靜かに上流に上つて行く涼み舟からは、三味線が流るゝやうに聞えた。

ある大きな料理屋の納涼棚の傍を通つた時には、そこには電燈が眩ゆくかゞやいて、女と男の影が幾組ともなく明かるい光線の中に動いてゐた。『今日はお客が大變入つてゐるのね、』などゝ歌子はお条に言つた。

都會の賑やかな夏の夜の納涼が其處にあつた。摩れ違つて通つて行く數艘のモーターボート、多い船の中を人を滿載して縫つて行く渡船、岸の向うに美しく輝いて見えるイルミネーション、土手の上にチラチラする白地の浴衣、岸に連つて構へられてある遊泳所、大きな會社の煙突、長い橋の下を通る時には、車馬の音や人の足音が轟くやうに頭の上に聞えた。『丸で活動寫眞を見てるやうね。』『橋を過ぎて光線の漲りわたつた方へ行く時、歌子はかう富田に言つた。

『其處に腰をかけてるちや危ないよ。』富田はかう既に何遍となくお条に注意した。『其處で、ぐらつと

那なら、あんな處の女中なんかしてゐないだつて、家なんかいくらでも持たして呉れるだらう、』など〻二階の上さんは言つた。

忙しく賑かな空氣の中でお粂は矢張同じやうにして其の日〳〵を送つて行つた。大勢の藝者を伴れて土手下の船からやつて來るお客を迎へに行つた時には、月が美しく川に碎けて、藝者達の縺れるやうに歩いて來る黑い影が丸で繪か何ぞのやうに見えた。

河岸にはいつも一艘のモーターボートが繫がれてあつた。それは近所にゐるある人が持つてゐるもので、お客はよくそれを借りて、藝者などを乘せて川に涼みに行つた。富田が歌子とお酌とを伴れて出かけて行つた時には、お粂は好い鹽梅に番に當つて矢張一緒について行つた。それは四人乘るには窮屈な位な小さなボートで、眞中に料理を入れると、一人は傍に腰をかけてゐなければならなかつた。ぼんやりついた提燈の置處がないので、お粂がそれを持てあつかつてゐると、富田は戲談にそれを自分の襟にさして見たりした。お粂は富田の傍に腰をかけてゐた。

『今日は主人が運轉手ね。』

お酌はこんなことを言つて、『だツて、いつももう一人の書生さん見たいな人がするんだけど、今日はあの人よ。』

『さう、あの人が持つてゐるの？』

田舍の方で家を持つといふ話も度々出たけれど、お粂も富田もそれを實行する心持にはまだなつてゐなかつた。田舍に圍はれるのも好いが、それには男の心をもつと確かりつかまなければ駄目だとお粂は思つてゐた。『こんな二階汚なくつて仕方がない。』こんなことを言ひながら、富田はそれでも二三度は其處にやつて來てゐた。

二十三

そのまゝで一と月二た月は經つて行つた。お粂に歌子に富田、かう三人顏を合せることも其の間には幾度かあつた。番に當らない時にも、お粂はいつも其處に顏を出した。暑い日影に華やかな夾竹桃の咲いてゐる室で二人が晝酒を飮んでゐる傍に行つて見たこともあれば、朝早く浴衣がけで隣の花園に草花を見に行く歌子と富田とを見たこともあつた。お粂は初めは何うかして二人の仲を割かうと思はぬではなかつたけれど――歌子がゐてはとても十分に富田を自分のものにすることは出來ないと思つたけれど、しかもそれを押詰めて行けば、歌子と富田との間ばかりではなく、自分と富田の間も矢張同じやうに破壞されて了ひさうな細かな心の關係があるので、當分はをり〳〵の二階の會合だけで滿足してゐなければならないといふことを段々お粂は知つ行つてゐた。お粂に取つては、富田は好い情夫ではないが、好い旦那ではあつた。富田は指環だの蝙蝠傘だのを買つてやつた。『好い旦那だね、お前さん。あゝいふ旦

間の夜のことを探らうとした。あの夜はいつものやうに面白くなかつたことは薄々ながら歌子の口裏から お粂は判じた。何でも、男はそれとはなしに菊の間の客のことを歌子に言つたらしかつた。電話をかけた話も別の話にして言つたらしかつた。しかし思つたほどさう深く露骨には言はなかつたらしいのがお粂には嬉しかつた。また、歌子が何も知らないのも――夕暮の蚊柱の軒下の光景も何も知らないのもお粂には得意であつた。その夜も、男に對して自分の占めてゐる位置の疑惑が一番强く頭の中に繰返されたが、その疑惑の解けて行くにつれて、お粂の結ぼれた心も忽ちにして開けて行つた。

『駄目ですよ、本當に……。そんなことを言つて了つては――』

お粂は後にはこんな風に言つた。

しかしそれも逢つて話をしてゐる中だけで、――むしろ逢つた當座一日二日の間で、暫く逢はずに居ると、その疑惑は忽ち元のやうに生きて動いて來るのをお粂は見た。時には、『そんなことをやきもき思つたつて仕方がない。男の出やうを待つて見てゐるより他仕方がない。男の出やうで何うにでも出來る。』こんな風に考へることもあるが、歌子の容色や腕や巧い言葉などを思ひ浮べると、さう暢氣にはしてもゐられなかつた。久しく逢はない時には、何處か別な處で、富田は歌子に逢つてゐはしないかといふ疑念が熾に起つた。

違ひすぎてゐるけれど、がつしりした體格と崩さない服裝と落附いた態度とは、十分に世間の波に浸つた中年の男を思はせた。言葉にも素振にも他人の氣を兼ねるとかきまりがわるがるとかいふやうなところは少しもなかつた。平氣で入つて來て、平氣で二階に上つて行つた。『えらい人を伴れて來たもんだ。今度のは情夫ぢやないな、金だね。』上さんは一目見てすぐさう思つた。富田はまた富田で、厭にお世辭の上手な卑しい狡るさうな笑ひ方をする上さんを見た。

店にある煙草の入つた棚、緣の取れた長火鉢、暗い窓の上に置いてある安物の植木鉢、木版の美人畫の張つてある枕屛風、さういふものが前の男の眼に映つたと同じやうに、矢張富田の眼にも映つた。富田も矢張隣から來る飾屋の小さな金槌の音を氣にして、『何だえ？　あれは？』とお粂に訊いた。

『えらい處があるんだね。』

こんなことを言つて富田はあたりを見廻した。矢張同じやうに上さんの素性やら、何うしてお粂が上さんと懇意になつたかといふ事やらを富田は訊いた。『君方にはかういふ宿が一軒づゝあると見えるね。これぢやどんな男でも呼んで來られるぢやないか。』かう富田が笑ひながら言ふと、『だつて、私、そんなぢやない……私つい三月ばかり前に懇意になつたんですもの、』など、眞面目な顏をしてお粂は言つた。

お粂は逃げて行つたお梅の話から女中達の話をした。『だつて、お女將さんも解らないんですもの、お定さんも、もうぢき出るかも知れない。』『初めはこんなことを言つてゐたお粂は、段々男の口から詳しく此

姐さんがゐないから、何うしたのかと思つて、呼んで見たのよ。けども返事がないんだらう。不思議にしながら、奧の萩に行つて見ると、其處にゐるぢやないの？　男と二人で。』

『これで？』お妻は腕を首にあてる眞似をして、驚いたやうな顏をして見せた。

『私、わるいと思つたから、さつさと此方に來ちやつた。』お仙は笑ひながら、『イヤだねえ、本當に……いくら何でも……』

こんな話をしながら、女中達は蚊帳を釣つたり、入口の雨戶をしめたりした。お粂は翌日は早く起きる番なので、そんな話を好い加減に聞きながら、入口の傍の六疊に入つて行つたが、種々なことが思ひ出されて、枕を着けても容易に眠られなかつた。男と女の間柄が何處まで行つたら好いのかお粂にはわからないやうな氣がした。離座敷のことが浮んだり、今聞いた姐さんの話が思ひ出されたりする中に、ある秘密なシーンがはつきりと眼の前にちらついて、黑い影が執念く體に絡み附いた。男の爲めに今夜こつそりぬけ出して逃げて行くお梅のことなども考へられた。しかし幸ひに體は疲れてゐた。お粂はいつか眠りに落ちて行つた。

二十二

裏通りにあるその二階屋の上さんの眼には前の男とは丸で違つた立派な旦那が映つた。お粂とは年が

『早いのね。……』

お条は歌子と一緒に離座敷の方へと出かけて行つた。暫くの間、室を片附けたり雨戸を締めたりしてゐたが、やがて蚊帳の傍に置いてある歌子の着物と富田の着物とを一まとめに風呂敷に包んで、『お休みなさい、』と挨拶して、それを持つて其處から出て來た。富田がむかうむきになつて、足を投げ出してぐつすり寢込んでゐるのが蚊帳の中にはつきりと見えてゐた。

歌子の着物と富田の着物とを一緒に包む時にもお条は一種の衝動を體に覺えて厭な氣がした。男の着物も帶も、此間旅で見たのと同じであつた。同じ鐵色がゝつた絽の羽織で、同じ縮緬のへこ帶であつた。お条は川沿ひの旅館で、その羽織を疊んだ時のことなどを頭に繰返しながら此方へと歩いて來た。

ついさつきまで月の間では、まだ客が騷いでゐたが、それもいつ靜まるとなく靜まつて、歸るものは歸り、寢るものは寢て了つた。それからまた一時間ほど經つた。その頃には、女中達ももう寢る支度をした。お梅はまだ其處にゐた。『紅葉には誰？　絹枝さん？　竹には？』などゝお定は訊いてゐた。

お仙はある姐さんが思ひもかけない客と出來たといふ話をさもめづらしいものを見たやうにして話してゐた。『そんなことが出來るものかね。それがお前さん、二度か三度逢つたつきりの人だよ。旦那もわるいのさ、若いのを伴れて來たりなんかして、散々あの人を焦らしたり何かしたんだけども。……けどもねえ、あの年になつて、あの名高い姐さんで、そんな氣が起るもんかね。私は吃驚したよ、私がね、

ても勤まらないから、今夜遲く默つて出て行くといふ話であつた。着物などは晝の中にこつそり隣の植木屋へ運んで置いた。『お前さんには默つては行けないから、話すんだがね……。出るまでは知らない顔をしてゐてお呉れよ。今のお金はすぐ返すから。』かうお梅は言つた。お粂はお梅に同情せずには居られなかつた。此方に來た時には、お粂は胸が塞るやうな氣がして、涙が頬を傳つて落ちた。

氣になつた離座敷の方からは、いつまで經つても歌子は出て來なかつた。何うしたかと思つてゐると、十一時過ぎになつて、離座敷のベルが始めて鳴つた。急いで行つて見たお粂は、長襦袢のまゝで蚊帳の外に出てゐた歌子を見た。歌子は、『今夜はお泊りになるんですツて。』かうつまらなさうに言つて、『姐さん、もう何時？』

『もう時間よ。』

『さう？　もうそんなになるの？』

『歌ちやん、歸るの？』

『いゝえ、私も泊つて行くわ。』かう言つた歌子は、もう一度電話をかけてから向うに行きかけたが、また戻つて來て、煙草を二つ出して貰つた。

『女將さん、もうおやすみ？』

『もう、とうに。』

お梅は下りて行つて了つた。

夜風は熱したお粂の顏を吹いた。氣が附くと、考へはいつかまた歌子の上に移つて行つてゐた。離座敷をすまして歌子はさつき電話をかけた處に出かけて行くに相違ない。あれは確に情夫だ……。かう思ふと、その電話をすつかり聞かなかつたのがお粂には惜しかつた。

座敷ではいつかお酌達の踊りももう濟んでゐた。女將は『わかい人達の踊を見ると、こんなお婆さんになつても、あゝいふ年にもう一度なりたいと思ふから不思議ですね、』などゝ言つて客の傍でお世辭を振りまいてゐた。『こちらなんか、もう何も彼もお存じなんですから……。貴方のやうに氣のお廣い方はありませんよ、』などゝ言ふと、客はそらお出でなすつたと言はぬばかりに、ピシャリと禿げた頭を叩いて見せた。

『こちらは面白い方ね。あはゝ、あはゝ、』と女將は轉げる樣にして笑つた。

暫くしてから下に下りて行つたお粂は、其處にゐたお梅に手招きされて、ちよつと廁の傍の暗い處に行つた。二人の姿は暫し其處に見えてゐたが、やがて其處から出て來たお粂の顏には、ある感動の跡が歷々と讀まれた。『好いのよ、そんなこと心配しないでも……』かうお粂は言つた。今朝、お梅は男のことで女將にひどく叱られて、一時間以上も皆なのゐる前で口汚く意見された。『それはね、私もわるいのよ。でもあんなに言はなくつても好い、』などゝお梅は晝間も口惜しがつて眼を赤くしてゐた。お梅はと

全く男の玩具になつてゐるとしか思はれなかつた。何故自分はあの時逃げて歸つて來なかつたらう。男の手を振切つて歸つて來なかつたらう。自分は馬鹿だ、意氣地なしだ。かう思つてお粂は下唇を咬んだ。

二間の光景はまた浮かんで見えた。

厭な厭な何とも言はれない厭な氣がした。たまらなく歌子が憎くなつて來た。自分の言つたことを富田が歌子に話しやしないかと心配したことなどはもう何處かに行つて了つた。今はお粂はそれどころではなかつた。お粂は立つて、廊下から二階の階梯の處に行つて立ち留つて、闇の中の離座敷の方を凝と見た。

其處へお梅がソツと寄つて來た。

顏を寄せて、

『氣の毒だけど……持つてゐない。』お梅は金を貸せと言ふのであつた。」

『何か、急な用でも出來たの?』

『あとで話すから。』

『ぢや……』

と言つて、お粂はさつき富田に貰つた金を帶の間から出してお梅に渡した。

『あとで話すよ。』

うね？』歌子はかう言つたが、『あちらに、お煙草は行つてゐて？』

『え、行つてるわ。』

歌子はちよつと輕い溜息をついて、何か考へ込んでゐたが、其まゝ立つて、電話口に入つて把手を廻した。歌子はまたさつきの處に電話をかけるのであつた。

その時、『お粂さアん。』二階で呼ぶ聲がしたので、お粂はその電話を半分聞きかけて二階へと行つた。今度下りて來た時には、歌子はもう其處にゐなかつた。

二階には大勢藝者達が來てゐた。土地でも綺麗な方のお酌が三人に、若い妓が二人に、中姐さんが二人、それにさつきの豐子も來てゐた。丁度踊りが始まつてゐるところで、女將も廊下の處で女中達と一緒に並んで坐つて見てゐた。今年の春の新曲の手の面白いところだけを撰んで若い妓達は躍つた。三味線は湧くやうに陽氣に鳴つた。

お粂も其處でそれを見てゐたが、心は絕えず離座敷の一間の方へと行つてゐた。暗い一間の光景はすぐ眼の前にでもあるかのやうに思はれた。歌子は例の巧みな手で、巧みに男の心を奪つて行つてゐるだらう。男は忽ちその心と體とを女に任せて了つてゐるだらう。富田が歌子に惚れてゐると思ふと、お粂は急に深い焦燥の全身に襲つて來るのを見た。一間の光景はまたはつきりと浮んで見えた。つゞいて富田の心は單に好奇心に留まつてゐるのではないかと思つた時には、お粂には自分のやつたさつきのことが

かういふ富田の聲につれて、二人の笑ふ聲が押し附けるやうに聞えた。

『菊かえ。』

『妬いてるのねえ。』かう言つて笑つたと思ふと、すぐ、『知らない、知らない、』といふお粂の聲が續いてした。あとはしんとして、表二階のドンチャン騷ぎが手に取るやうに聞えて來た。さつき下男が來て灯を入れて行つた小行燈は、闇の中の綠葉に靑く透き通るやうに映つてゐた。軒端には蚊柱が立つて、ひとり座敷に取殘された蚊遣火の烟が、細く薄靑く灯の影に靡いて行つてゐた。暫くしてからお粂のこつそり其處を出て行く姿が見えた。

暫くしてお粂が二階から下りて來た時、菊の間の歌子の客は歸つて行く處であつた。『お近い中に』とか何とか言つて、大勢車の周圍を取卷いてゐたが、やがて送り出して了ふと、歌子はお粂の傍にやつて來て、

『今日は忙しいのね。』

『え、二階が大勢さまなもんだから。』

『何處のお客?』

『そら、頭の禿げたわる口ばかり言ふ人のお伴れよ、何でも新聞の人か何か――』

『中田さん……。中田さんツて言ふのよ、あの人。私御挨拶か何かにして吳れないかしら? 駄目さ

かう言つても起きないので、
『貴方、貴方、富田さん』
と今度は體を搖り動かした。
眼を覺した富田は、いつか全く夜になつて了つたのに驚いたといふやうに、あたりを見廻したが、大きな伸を一つして、『もう、皆な歸つたのかえ？』
『さつき、皆な挨拶をして歸つて行つたぢやありませんか。』
『さうかなア、すつかり醉つちやつた！』
『もうそれでもいくらかは覺めて――？』
『うむ、もう好い。』蚊に食はれた足や手をぼりぼり搔きながら、『餘程、寢たね。』
『かなり寢たわ。』お粂は笑つて見せて、『もう、お休みなさいよ。此處にこんなにしてゐると蚊に食はれますよ。』
『成るほどひどい蚊だ。』
かう言つて立上つて、別室の方へ行きかけたが、あとからついて行つたお粂は、『歌ちやん、ちき來ますツて……』
『何を言つてるんだい！』

二十一

初めは詰らなさうな顏をしてゐた富田が、中頃行つて見た時には、いつもに似合はずひどく醉つて、其處にゐる妓達に鋭い皮肉を浴せかけてゐた。しかしそれも僅かの間で、後には後に倒れて手枕をしてごろりとして了つた。お粂が枕をあてがつてやつたのも、藝者達が挨拶をして歸つて行つたのも、何も彼も知らないらしかつた。

『お□がさめたら呼んで下さい』

歌子はかういお粂に言つて置いて、菊の間の方に行つて了つた。

お粂はかういふ介抱を前にも度々したことがあつた。歌子の爲めに、富田のお伽をしてやつたことも一度や二度ではなかつた。しかし今日は藝者達や客の世話をする普通の女中の心持でゐる事は出來なかつた。お粂の心は際限なく動搖した。何うして好いかわからないやうな渦卷が凄じく捲き上つてゐた。自分を信賴して好いのか、富田を信賴して好いのか、それとも自分も富田も全く信賴することが出來ないのか、それが容易にわからなかつた。

お粂は別室の支度をして來てから、富田に聲をかけた。

『蚊が食ふぢやないの？　貴方？』

居られない筈だが……。かう思ふと、此方にゐる間、お粂は氣が氣でなかつた。しかし、金平が來、豐子姐さんが來て、再び其處へ行つた時には、富田の顏にも歌子の顏にも初めと變つた樣子は少しも見えなかつた。歌子は快活に笑つてお粂や富田に話しかけた。

金平といふ妓は果して富田の言つた通り飮んでゐた酒が拙くなりさうな女であつた。それがちよつと立つて行つたあとで、富田は、『好い妓だね、中々。あれぢや賣れるだらう、』などゝ歌子に言つた。『たんとおつしやい！』といふやうな顏を歌子はして見せた。

豐子といふ姐さんは、痩せたすらりとした好い藝者であつた。細い中に細かい曲折を持つたやうな聲で、得意な小唄ものなどを唄ふと、靜かな情緒が人の腸をそゝるやうにあたりに漂ひ渡つた。富田はいくらか醉つたやうな風で、默つてそれに聞惚れてゐた。

生憎にもお粂がかけ持ちをしなければならないやうな客がまた一組やつて來た。それは大勢の客で、後番のお定一人では間に合はないやうなお座敷であつた。お粂は藝者連に離れの方をまかせて置いて、二階の廣間の方へ階段を上つて行かなければならなかつた。さつき一言、唯一言で好いから口留めをすれば好かつた。『今言つた事を歌ちやんに言つちや駄目ですよ。』かう言ふのを忘れた。お粂にはそれが絶えず、心配になつた。隙を見て、ちよつと行つて見たりした。二階のお客に戲談を言つてゐる間にも、富田の座敷の方のことが氣に懸つた。

かり富田に饒舌つてやつた。しかし初めの時のやうな焦燥を富田はもう顏にはあらはさなかつた。フムフムと言つて唯笑ひながら聞いてゐた。旋て歌子に對してよく口にした『あんな奴』といふ言葉も出なかつた。富田は唯默つて考へてゐるやうにしてゐた。お粂は男の心を讀みかねた。

『あゝ、さうだつたね。』富田は急に思ひ出したやうに、懷の財布から五圓札を一枚出して、『此間借りたのを有難う。』

『好いのよ。』

『でも、借金は借金だから。』

『水臭いのねえ、貴方は。』

『さういふ譯ぢやないよ。僕は女に金をつかはせることが嫌ひだから。』

『おや、これぢや多いわ。』

『いゝから、取つてお置きよ。あまつたら何かお買ひよ。……ぐづ〱してゐると、それ、誰か來るぢやないか。』

『さう、』と言つて、お粂は後を振返つたが、急いでそれを帶の間に挿んだ。足音は歌子であつた。急いで下駄を穿きかけたお粂の素振はいくらか狼狽へてゐた。

今、言つたことを富田は歌子に饒舌りはしないだらうか。歌子に惚れてゐればゐるだけ饒舌らずには

かう言つて富田は其處に置いてあつた盃を初めて起した。お粂は默つて酌をした。男の輕快な氣分は著しく變つて來てゐた。しかし流石にすぐ思ひ返したといふ風で、

『かけた人、皆な來るッて？』

『え丶。』

『金平ッて何んな人だえ？』

『私、知らない。』

二人はまた暫し默つた。

やがて押へに押へた心が溢れて漲つたといふやうに、お粂は言つた。『矢張、氣になるのね？』

『何が？』

『歌ちやんのことが――』

『さういふ譯ぢやないよ。僕だつてそんなうぶぢやないよ。』

『さう、』と言つたが、お粂はつまらなさうに溜息をついて、『私も早くやめる積りよ。お秀さんも出されて了ふし、お定さんも出るッて言つてゐるし、イヤだわ、こんな處にゐるのは――』

『安心してゐたまへ。』富田はかう眞面目な顏をして言つた。

お粂は詰すまいと思ひながら、歌子の客のことや、さつき電話を歌子がある處へかけた話などをすつ

『あれからすぐ歸つたかえ？』

『えゝ。』

『うちで何とか言つてやしなかつたかえ？』

『何とも……』

お粂は何か言はうとしたが、富田があとから人が來るのを頼りに氣にしてゐるのを見て、

『そんなに氣にしなくつても……大丈夫よ。歌ちやん、菊に行つたから。』ちよつと富田の耳の方に顏を寄せて、『幇間が來てるなんてうそよ。』

富田の顏はサッと變つた。すぐそれを見て取つたお粂は、つゞいて素つぱ拔かうとした歌子の秘密をちよつと躊躇して男の顏を見た。

『誰だえ？』

暫くしてからかう富田は訊いた。

『家のお客よ、誰でもないのよ。』かう言つたお粂はいくらか眞面目な突詰めた心持になつてゐた。『矢張、歌ちやんに惚れてゐるんだ。』かういふ考へが咄嗟の間にお粂の頭を掠めて行つた。

『お酌でもしませうか。』

『うむ。』

帳場でお粂がその電話をかけて、お誂へを持つて離座敷に行かうとすると、丁度角のところでばつたりすれ違つた歌子は、

『ぢや、ちよつと、私、菊に行つてるから、……』

『え、え。』

お粂は輕く點頭いて見せた。

お粂が入つて行つた時には、富田は向うむきになつて庭の方を見てゐた。わざとゆつくり歩いて其方へ行くと、此方を振向いた富田は笑つて見せて、

『何うしたえ?』

『何うもしないわ。』

あとから誰か來やしないかといふやうに向うを見た富田は、

『運わるく、お前の番に當つちやつたのかえ?　駄目だよ、知れちやア。』

『大丈夫。』

かうお粂は押しつけるやうにして言つて、座敷に上つて富田の傍に來て坐つた。お粂はちよつとの間に着物を着替へて、さつぱりした風をして來てゐた。翡翠の金簪が形の好い銀杏返の髷によく映つて見えてゐた。

『お誂へはいつものでよう御座んすか。』かう言つたお粂は絶えず眼でいろ〳〵な事を言はせてゐた。

『それにしても、お前、丁度よく來てたね。』

かう富田が歌子に言ふと、

『もう少しさつき來たのよ。深川の方のお客で、いつも知つてる人なの。男の方二人連よ。仲の歸りか何かで、幇間が一緒に來てるは。』富田の顏を見て、『貴方、今日は緩くりしてつても好いんでせう? 誰か呼んで頂戴な。義理のある妓があるのよ。』

『義理は眞平だ。』

『だつて、今度のは好い妓だツて言ふ話よ。私のもとゐた家の妓だから、呼んで頂戴よ。』

『折角聘んでやつても、酒がまづくなるやうな妓は眞平だよ。』

『そんなんぢやないツていふのに……。貴方も此頃意地がわるくなつたわねえ。ねえ、お粂姐さん、元のやうにおとなしくなくなつたわねえ。』かう言つたが、『好いでせう。それにいつもの豐子姐さん――好いわねえ。』富田の默つてゐるのにも頓着せず、『ちやお粂姐さん、かけて頂戴……。豐子さんに、眞砂屋の金平さん。』

『金平なんて、イヤな名だな。』

『まア、默つてゐらつしやいな。』

慌てゝ褄を取つて其處に出て行つた歌子は、『本當にお久し振り、』とか何とか言つて、女將と一緒にお世辭を振撒いてゐたが、其時其處に出て來たお粂とちらりと眼を合せた富田は、ステツキを持つたまゝ敷石の上を向うに行かうとした。

『離れが好いよ。富田さんは靜かなのが好きだから。』

かう女將が後から言つた。お粂と歌子とは先に立つた。

風呂場の傍を通つて、綺麗に掃除してある敷石の上を傳つて、稺樹の栽ゑてある處を少し行くと、其處に二間つゞきの離座敷があつて、眞中は板敷になつてゐて、都合によつては、客を二組入れることが出來るやうになつてゐた。歌子の客が菊にゐるので、女將は特にこの離座敷に富田を導いたのであつた。お粂は丁度その番に當つてゐた。

案内してから煙草盆を持つてお粂が行つた時には、歌子は鏡臺に向つて坐つてゐる富田とは離れて、下駄を穿いたまゝ着物の裾をまくるやうにして腰をかけて、派手なお召の長襦袢を其處に見せて、頻りに卷煙草の吸口を長く細く引出して捻つてゐた。『何うして、こんなに入らつしやらなかつたの？　今日でもう半月以上になるわね、』などゝ言つてゐた。お粂はやがて茶道具を持つて來て鏡臺を拭いた。

『お風呂は？』

『今日はやめる。』

に行くかと思ふと、さうせずに、帳場の傍のところに來て坐つて、

『お粂さん、いくらか肥つてね。』

『さう？』

『樂をするのに限るわね。一日二日だツて樂をすると、違ふわ。……』聲を低くして、『それは大騷ぎだツたわ。女將が怒つてね。照江さんも意見されたんだツて。……それに、機嫌がわるいのよ、此頃。お粂さん、ゐなくつて好かつた。』

『そんなに騷ぎだつたの？』

『それは他のこともあるにはあるのだよ。これね。』お仙のことを暗に指して、『これが中々ものね。あれの手にかゝつて、あの人なども一緒になつて怒つてゐるんだもの。……あの人が自分で身を引くやうにこれが仕むけてゐるのよ。』

『さう。』

お粂が何か言はうとした時、表の方に車の音がした。お客樣かしらと思つてゐると、『入らつしやい、』と言ふ聲が續いて門のところで聞えた。風呂場の傍にゐた女將が慌てゝ此方に姿を見せた時には、客を乘せた車はもう帳場の前へと來てゐた。お粂の眼にも、歌子の眼にも、同時に新しいパナマ帽をかぶつた富田の姿が映つた。『まア、富田さんだよ、お久し振ね。』女將はかう言つてその傍に寄つて行つた。

お秀さんたうとう出ちやつてね。』

『さうだツてね。』

『それは大騷ぎだツたのよ。淸どん、今でも此處には入れないんでせう。』

『さうなの?』お粂は歌子の顏を見ながら、『そして何うしてるの?』

『何でもあの近所にゐるツていふ話よ。花もとのお上が力を入れてるらしいよ。そら、淸どんの關係で。』

『そして照江さんは何うして?』

『何だかごた〳〵してるやうよ。』

其處に、風呂場の傍に女將の姿が見えたので、二人は話をやめて帳場の方へと行つた。

『お妻姐さん、菊でお煙草よ。』歌子は番の女中にかう言つて置いて、立つて帳場の隅にある電話室の中に入つて行つた。お粂は其處で把手を廻して受話器を耳に當てゝ立つてゐる歌子の姿を見てゐたが、やがて、『貴女? お高さん? まだ何とも言つて來なくつて? さう? ぢやね、何とか言つて來たらね。待たして置いて下さいな……うそよ、そんなことはないのよ。その代り、あのことね、あのことは約束して置いても好いわ。』面白さうに笑つて、『ぢや、好いわね。私? 私、二三時間すれば明くわ。それぢやよろしくね。』かう言つて話を切つて、把手を廻して、そして歌子は其處から出て來た。すぐ座敷

てよ。病氣はもう好いの？』

『有難う。』

お粂はかう言つたが、不思議にも歌子の體がお粂の體に新らしい意味を持つたある感覺を與へて來てゐた。歌子の體には、富田の體が生きて動いてゐた。お粂は汚い旅籠屋の夜のことなどを繰返しながら、

『此方も忙かつたんですつてね。』

『え、割に忙しかつたわ。』かう歌子は言つたが、お粂と並んで帳場の方へ歩いて來ながら、『田舍に行つてたら好いでせうね。幾日ゐて？　十日？　そんなものかしら？　隨分長いやうに思つてよ。お粂姐さんまだ歸つて來ないの？　隨分長いッて一昨日もお梅姐さんに言つてたのよ……。それでも病氣はすつかり好いの？』

『お蔭樣で……』お粂はまた歌子の色の白い肌や綺麗な顏などを凝と見た。

『田舍は好いでせう？』

『何にも見るものがないからぢき退屈して了つてね。』

『伯母さんの家にばかりゐたの？』

『えゝ。』

『でも、田舍は好いわ。旅に出ると、本當に氣が淸々するものね。……さう言へば、話は違ふけれど、

藥などを張つてゐた。姪のお貞は、今年十七で、將來は此處の跡取りにさせるといふ話であるが、イヤに才はじけて、おつくりなどをべたくして、通俗な可哀相な小說本などに絕えず讀耽つてゐた。客の前に出ることが好きで、女將の代理と言ふやうな顏をして、長い間お座敷に坐つてつまらないことを饒舌つてゐた。『お貞ちやんにも困るよ、』などゝ女中達はこぼした。

忙しい朝夕は再びお粂の周圍にあつた。相變らず客が多く、自動車の音は絕えず門前に聞えてゐた。土地の政子といふ妓に立派な旦那が出來て今では見違へるやうな全盛になつたといふ話や、梅勇といふ妓のお腹が大きくなつたといふ話や、ちよつと留守にした間に、世の中にはかうも變つたことが多いものかと驚かされた。それに比べてお粂は過ぎ去つた三日間の出來事を考へた。

その翌日の午後であつた。お粂は菊の間の前のところで、ふと座敷に入つて行く歌子の後姿を見た。お粂ははつとした。『菊は誰？　お客さまは？　富田さんぢやない？』かう其處にゐたお梅にすぐ聞いて見たが、それは工場を持つてゐる亘といふ中年の男で、近頃家でつけてやつたお客であつた。お粂はその座敷にも二三度出て知つてゐた。

『歌ちやん。』

帳場の方へ行かうとするのを後からからかうお粂は呼び留めた。

ちよつと振返つて見た歌子は、『まア、お粂姐さん、何時歸つて來て？　さう？　昨日？　誰かと思つ

かう言つてお粂は床の中に入つた。しかし男は疲れて、ぐつすり寢込んでゐた。

今日は何うしても歸るといふので、その翌日、二人は朝早く其處を立つて停車場の方へと行つた。そこから二人は猶ほ大廻りに線路を廻つて、二時間ほど汽車の中にゐた。富田とわかれた停車場には、富田の家の方に行く郊外の電車が來て待つてゐた。『ぢや、また――』かう言つて汽車を下りた富田の後姿はやがてその電車の中に消えた。

一人になつたお粂は思はず溜息をついた。夢ではないかと思つた。一昨日から今日にかけて、誰が自分の秘密と快樂とを知つてゐるだらう。かう思ふと、微笑がひとり手にお粂の胸に渦まき上つて來た。」昨夜の汚ない旅籠屋のことなどを頭に繰返してお粂は獨りで樂んだ。

二十

十日ほど明けた間に、其處にはいろ〳〵なことがあつた。清どんとの間がばれて、お秀はもう其處にゐなかつた。お定はお定で、女將の仕打が餘りだと言つて、『私はいつでも身を退くよ、私はちやんとその積でゐるんだから、』などゝ言つてゐた。帳場には、深川に行つてゐた女將の姪のお貞が暇を取つて來て坐つてゐた。

『お前、手がなくつて忙しくつて困つたよ。病氣は好いかえ？』女將も四五日寢たとかで、蜂谷に膏

『仕方がない、旅に出ると、何うかするとかういふ眼に遭ふよ。その代り靜かだ。』富田はそれでも酒だけは二本ほど明けた。

『夫婦と思つてるからをかしい。ちつとも疑はないね。』

『本當ですね。』

『汚い代りに、さういふ處が取柄だね。じろ〳〵見られるのも餘り好くはない。』

一日彼方此方と遊び廻つたので、二人はかなりに勞れてゐた。しかしその疲勞が却つて二人の心と體とを近づけて行つてゐた。『町なんか歩いて見たつて、面白いことはないだらう。早く寢ようね。』かう言つて二人は飯がすむとすぐ婢に床を取らせた。

厠は欄干を傳つて階段を下りて行つたところにあつた。四角なランプにぼんやり灯の點いてゐるのも佗しかつた。朝顏は古く缺けて、草履はわるく濕つてゐた。黃い安物の手洗鉢の上にさがつてゐる手拭で手をふきかけて半分でよしたお粂は、『貴方、ハンケチを持つていらつしやらない？ 汚い手拭ね。』かう言つて、もう蚊帳の中に入つてゐる富田に聲をかけた。二度目にお粂が下に下りて行つた時には、中庭の上に星が美しくかゞやいて、明日の天氣の好いのを思はせてゐた。下ではまだ眠らずに起きてゐるらしかつた。

『蚤がゐるのね。』

てゐたりした。親猿は小猿の蚤を頻りに口で取りながら、巧みにそれを手で取つて食つた。傍には早くも氷を賣つてる店などが出てゐた。

眞中の金網の前で、

『一つやつて見ませうね。』

お粂はかう言つて其處にあるブリキの小さな罐に入つてゐる五六疋の鰌を細い樋の中にあけてやると其處にゐたペリカンは大きな嘴をひろげて、忽ちそれを鵜呑にした。續いて富田のやつたもう一杯の方は、あけやうが下手だつたので、鰌は一二疋樋の外にこぼれ出して頻りに地の上を跳ね廻つた。

襖に田舍廻りの繪師のかく芋山水が張つてあるやうなわびしい宿にその夜は泊つた。夜の物なども粗末に、綿蚊帳の色は褪せて、地はぺたく〳〵と重々しく肌に粘り着いた。『これで一番好い旅籠屋かな、さつきの奴に騙されたんだね。だから、知つてる家でなくつては滅多には泊れないよ。』などゝ富田は言つた。

それは二階の裏座敷で、欄干から下を見ると、汚ない鐵色をした泉水に金魚などが泳いでゐた。裏の小屋には、薪が一杯に積んであつて、頬かぶりをした親爺が頻りに米をついてゐた。杵を下す音が地に響いて日の暮れるまで聞えてゐた。

膳に上つたものなども食へるやうなものはなかつた。お粂は玉子燒で纔かに夕飯をすませた。給仕には碌々口もきけないやうな小い婢が出て、山盛に飯を盛つたのを、富田は半分お椀に明けたりなどした。

れば運がひらけるつて卦だよ。』

『さう！』お粂はちよつと思當つたといふやうな顔をして、『さういへば、私、隨分頼りにはする方なんですけども……いつでもぢきいやになるのね。それがいけないのね。賴ればいゝのね。』意味ありさうに富田の顔を見て、『貴方のは？』

『僕のは大變だ……福祿自隆昌、どんなことでも出來るつて言ふ卦だよ。運星が非常に好いんだね。』面白さうに笑つて、『殊に、女のことにかけては好いつて書いてある。』

『何れ、お見せなさい。』手に取つて見て、『そんなこと書いてないぢやありませんか。うそばつかり！』

お粂はちよつと笑つて見せて、さて熱心にそれに見入つた。

暫く行つてから、男の方のを返して、男の手から自分のを取つて、丁寧にそれを小さく疊んで帶の間に挾んだ。『これで、おみくじなんて不思議なものね。よく當るものよ。』

『何だかわかりやしない。』

こんなことを言ひながら、二人は其處から出て鐘樓の前を通つて、公園の方へと行つた。其處には地方の人達や官衙や名高い海軍の將校などの寄附で出來た小さな動物園があつて、眞中の大きな金網の圍ひの中には、鶴だの鴨だのペリカンなどがゐた。羽の綺麗な鴛鴦などもゐた。

猿の二三疋ゐる前には、人が大勢たかつて、一杯一錢の甘藷の屑を長い柄杓に乘せて面白半分にやつ

『さうね、あそこね、ちよつと待つて頂戴、私、引いて來るから。』かう言つて、お粂は向うの方へ驅け出して行つた。

其處には品の好い爺さんが眼鏡をかけて坐つてゐた。おみくじを出す間、お粂は二人の新しい關係を念頭に置いてゐたが、やがて物々しい爺さんの取出したのを見ると、三十七吉としてあつた。

喜んで戻つて來て、

『吉よ。』

『僕も引いて見よう。』

かう言つて面白さうに富田も其方へ駈けて行つたが、やがて莞爾して其處から出て來た。

『貴方のは？』

『大吉だよ、七十八大吉だよ。』

『大吉は却つてわるいのよ。』

『そんなことがあるもんか。』

互に引いたおみくじを見ながら二人は靜かに歩いた。『どれ、お見せ。』やがてかう言つて富田はお粂のを手に取つて見たが、『うん、これは好い。池頭月欲明、この明かならんと欲すといふ文句が好い。だんだん運がひらけて行くといふ意味だね。賴る人にあつたら、十分に賴らなければいけない。賴りさへす

などに不自由しないやうな富田が何よりもお粂には頼もしかつた。『かうやつて倦きるまで遊んで歩くと面白いね。……金のなくなるまで、何處とも處をきめずに、行きあたりばつたりにね、』などゝ富田は言つた。

汽車の周圍には、やがて山だの雪だのが見え出して來た。山の裾にある小さな停車場では、大きな包みを持つた田舍娘が一人ぽつねんとさびしさうに立つてゐた。旅などに出たことのないお粂には、眼に見えるものが何も彼もめづらしかつた。お粂はところ〲に散らばつてゐる村や、踏切の傍にある竹藪の中の水車などをめづらしさうに男に指さして見せた。午近く、大きな町で汽車を下りた二人は、公園にある涼しい料理屋の二階で午飯を食つた。そこには赤い襷をかけた女中達が大勢ゐて、お粂の顏をじろじろと穴のあくほど見た。お粂は此の町に奉公に來てゐるといふ昔の友達などを思ひ出して、その茶屋のある場所を聞いて見たりした。膳に上つた鮎を、富田は『何處の鮎だえ？　さうかえ？　遠くから來るんだな、』などゝ言つて、旨さうにして食つた。

そこからまた汽車に乘つて、暫くして下りた町には、大きな名高い流行佛の本堂があつた。本堂の前には形の面白い松が這ふやうに靡いてゐて、澤山の鳩が長い鋪石の上で頻りに豆を拾つてゐた。大きな花崗石の手水鉢からは、綺麗な水が涼しさうに流れ落ちてゐた。

熱心にお百度を踏んでゐる人達を暫し立つて見てゐたお粂は、俄かに、『おみくじがあるでせうね……

十九

停車場で待つ間に、二人はその近くにある靜御前の墓に行つて見た。お粂は數年前に兄と一緒に來たことなどを思ひ出しながら、ある家の庭のやうになつてゐる垣の扉を開けて先に立つて入つて行つた。樹のこんもりと繁つた中に紫陽花が鮮かな色を見せて、その奥に小さな墓石がしよんぼり立つてゐた。『本當に、此處まで來て死んだんですつてね。その時の衣裳などが川向うの寺に今でも殘つてゐるんですつてね、』などゝお粂は話した。梅雨晴の日影に美しく照つたお粂の蝙蝠傘は、枳殻の新芽の垣の傍を通つて行つた。

大きな鐵橋の上を汽車の通る時には、二人は車窓から首を出して、昨夜泊つた旅館の方を指し合つた。溶々と漲り渡つた川の土手の上には、その二階が高くはつきりと見えてゐて、丁度其時大きな帆がそのすぐ傍を掠めるやうにして通つて行つてゐた。帆が幾つとなく重なり合つて上流へ上流へとのぼつて來てゐた。

乘換をする停車場では、さう長い時間を待たずに汽車は出た。お粂は自分の生活がすつかり一夜の中に變つてゞも行つたやうに、をり〳〵男の顔をめづらしさうに不思議さうに見た。あの忙しいお茶屋や暢氣な田舍の伯父伯母や、從妹や、さういふ事は皆遠くの方へ行つて了つたやうにすら考へられた。金

方の線は知つてる人に逢ふといけないから、汽車で小山まで行つて、足利から呑龍さまの方まで行つて見ないか。』

『でも、大變ぢやない？　貴方？』

『なアに、僕は好いよ。』富田はかう言つて、『さア、それぢや起きやう……、起きて早く飯を食つて出かける支度をしようぢやないか。』

『さうね。』

お粂は起きて、傍の雨戸をもう一枚明けて、蚊帳などを外した。『好い天氣ね。』かう言つてキラ〳〵川に映る日影を眩しさうに見てゐたが、衣裳を着替へるとすぐ、男のあとについてそのまゝ外に出かけて行つた。川には多い帆の影に交つて、けたゝましい音をあたりに響かせて、一杯人を載せた大きな傳馬を引船にして一艘のモーターボートが、早く早く川を横ぎつて行つてゐた。其處にゐた女中は、『あれは河川工事の人達ですよ、』などゝ二人に話してきかせた。お粂はふと昨日停車場で逢つて忽ち五年も六年も一緒にゐた仲のやうな氣分になつた自分を不思議にしながら、靜かに川縁を富田と並んで歩いて行つた。川の水は芦や萱や藻の新芽にたぷ〳〵と漲つてゐた。

『矢張、氣になるかね。』
富田はかう言つて笑ひかけると、
『氣になるつて言ふこともないけど……厭ですねえ。』
お粂は女中達の內所の話や藝者の內幕などをつゞいて富田に話して聞かせた。『そんなもんだらうな。』
富田は唯笑つてゐた。暫くしてから、
『今日は何うするえ?』
『歸ります。』
『もう少し遊んで行かないか。』
『でもねえ。』
『家の方は心配はなし……。向うの方だつて手紙か何かちよつと出してことわつて置けば一日二日は好いんだらう?』
『それは構はないけども。』
『あきたかえ?』
『そんなことはないけど……』
『今日一日ゆつくり遊んで、明日歸らうぢやないか。天氣は好いし、此まゝ歸るのはつまらない。此

『それはうそ……それは確かにうそね。』笑つて見せて、『そんなに譯なくやめられるものですか。あの人はそれは上手だッていふ評判ですもの。』富田の默つてゐるのを見て、『折角、お世話になつても、私、一人ぼつちで田舍で待たされてゐるのは厭よ。……矢張、東京にゐて、何處かで逢つてる方が好いかも知れない。兎に角、昨夜言つた私の二階に來て下さい？　ね？』

『それは行くけどもね。しかし、本當に內所にして置かなくつては駄目だよ。僕があそこに行つたッて、變な顏色なんかしちやいけないよ。』

『それは大丈夫……。けども、本當に何うして下さるの？　田舍より東京の方が好くはなくつて？　東京で何處か好い處がないかしら？』

『それはいくらもあるだらうがね。矢張田舍の方が好いぢやないか。僕は何うせ每月四五度は此方に來るんだから……。あの汽車の通る處なら、もつと近い處でも好いんだが。』

『でも、滿更知らない人ばかしの處は厭だし、さうかと言つて、餘り私のことを知つてる人のゐる處ではいけないし、ちよつとこれでむづかしいのねえ。』

『少し考へて見るんだねえ。』

『でも、本當に、あそこに長くつとめてゐる氣はないわ、私……。忙しいばかりなら好いけど……それにお金にもなるけれど、いやな稼業ですものね。』

戸を明ける音、客のぶつ〳〵呶鳴る聲、送り出した後で女中の何か言つてゐる聲などをお粂はおぼろげに聞いてゐたが、颯々と水を截つて汽船の遠くなつて行つた時分には、今、立つて行つたお客は間に合つたらうかなど丶思ひながら、お粂はいつか恍惚と眠に落ちて行つてゐた……。

『藤岡あたりだと好いわね。』

お粂はふと思ひ出したやうに言ふと、

『さうだな、あそこあたりなら、却つて人の眼に立たなくつて好いかも知れない。しかし、不便は不便だな。』

『でも、會社まで一里半位しかないでせう？』

『それは、そんなもんだ……』

かう言つて富田は考へてゐたが、やがて、

『でも、東京に歸つて、そんな樣子をちよつとでも見せては駄目だよ。知らん顔をしてるんだよ。』

『それは大丈夫ですとも……。けども、本當なの？　一體？　好加減ぢやないの？』

『それは確かだよ。』

『歌ちやんは何うするの？』

『あんなものはやめて了ふよ。』

ッと笑つて見せた。朝川を漕いで行く櫓の音が靜かに石垣の下に聞えた。

暫くしてから、富田はまた立上つて、川に面した方の雨戸をすつかり明け放した。『昨日かゝつてゐた船は大抵上流に發つて行つて了つたよ。一艘か二艘しかゐないよ、もう。』かう言つて再び蚊帳の中に戻つて來て、蒲團の上に腹這ひになつて、煙草を旨さうにスパ〳〵ふかした。

『さう言へば、昨夜夜中に、汽船が通つて行つたのね。』

『さう、さう……知つてゐる知つて居る。』富田は思ひ出すやうにして、『あれは何時頃だッたらう？』

『二時か三時頃ね。』

『もつと前ぢやないかな……そんなもんかな。此處の家からも、あの汽船に乘つて行つたものがあつたと見えて、何だか向うの方でごた〳〵してたね。』

『もう間に合はないとか何とか言つて、ぶつ〳〵お客が怒つて立つて行つたやうだつたわ。あの時分起されるんでは、此處等の女中も大變ね。』

ボウといふ汽笛の音が耳に入つて初めて眼をさましたお粂は、その時夢現に汽船の水を截る音の段々近くなつて來るのを聞いてゐた。石垣のすぐ下のところあたりを通る時には、汽船は再び長い〳〵汽笛を鳴らした。『藤岡の方に行くんだ。』こんなことを思つたお粂は、田圃の中にある天神さまや茅葺交りの田舍町などを思ひ出してゐた。十二三の時、お粂は其處に一年ほど行つてゐた。やがてけたゝましく雨

『そんなことは譯はないことだ。月に三四十兩もあれや澤山だ。……それも面白いね。さうするんなら、東京よりも却つて田舍の方が好いね。何うせ、月に四五度位は此方に出て來るんだから。』かう男が言つたのをお条は思出した。其時お条は、『でも、私、一人で田舍で待つてゐるのに、貴方は來て下さらなかつたりすると詰らないのね、』などゝ言つた。

影と影とが急に深く縺れ合つて、いくら解いても解けなくなつたやうな複雑した氣分が其處に醸されてゐたのをお条は見た。お条は想像に想像を重ねた。『何を言つてるのかわかりやしない。旨いことを言つてるのかも知れない。』かう思つても見た。しかし歌子との關係を見て知つてゐるお条には、さういふ風に簡單に富田を考へて了ふことは出來なかつた。

『譯がないことだよ……。彼奴？　彼奴なんか何うでも好いんだ。』かう男はお条の手を取りながら言つた……。

ふつと富田は眼をあいた。

『もうお起きなさい。』

『何だ、起きてるのかえ？』かう言つてちよつと笑つて見せたが、さし込んで來る朝日の方を眩しさうに見て、『いやに明るいな、……もう何時だえ？　六時半ちやないか。もう少し寢よう。』かう言つて富田は立上つて、靜かにさつき明けた雨戸を繰寄せた。室は急に薄暗くなつて行つた。お条は此方を見てに

十八

お粂が眼覺めた時には、朝日が晴れやかに室にさし込んで、涼しい風が輕く蚊帳の裾を吹き動かしてゐた。もうすこし前、富田が立つて、雨戸を一枚明けて、『好い景色だ、おい起きないか、』とか何とか言ふのをお粂は夢現のやうに聞いてゐたが、今見ると、二度寢をした富田は、腕を疊の上に投げ出して、顏を此方に向けて、心持好ささうにすや〳〵寢てゐた。と、お粂の頭には昨夜の光景がすぐ歴々と蘇つて繰返された來た。考へて見ると、隨分いろ〳〵なことを話した。身の上話もすれば、お茶屋の內幕の話もした。つい此間まで關係してゐた男のことは流石に打明けなかつたけれど、前に持つた亭主のことも兵隊さんのことも何も彼も皆んな話した。歌子の長い間情夫にしてゐた役者の話などもした。暴風雨のやうに胸が騷いだり心が躍つたりした。ぼんやりした薄暗い夜の空氣の中に俄かに濃かに織り込まれた心と體との動搖を繰返して見ると、お粂にはそれが何だか夢ではなかつたかとさへ思はれた。それほど複雜した幻影が今だにお粂の頭を離れずにゐた。

お粂は初めて本當に男を知つたやうに思つた。兵隊さんにしろ、二階に來た男にしろ、富田に比べるとまだ本當に熟さない果物のやうなものであつた。お粂は輕い溜息をついて、亂れた髮を手でかき上げて、枕元に置いてある卷煙草にマッチを摩つた。輕い青い煙が靜にお粂の白い疲れた顏を掠めて行つた。

て、大勢人を乘せた渡船が往つたり來たりしてゐるのだが、今は唯闇に包まれて、僅かに川筋が微白く認められるばかりであつた。對岸の灯が二條三條長く水に落ちて搖いてゐた。

『川だわねえ。』

『晝間見ると好い處なんだが……。』

こんなことを言つて、二人はやゝ暫し其處に立つてゐた。岸に近くかゝつてゐる船には、苫の間から灯が微かに見えて、樂しさうな團欒の笑聲が洩れて聞えて居た。

『さびしいから、もう、歸りませうよ。』かう言つた女は男の手を堅く握りしめた。富田は漲るやうなあつい女の情を闇に繰返しながら、靜かに其處から引返して來た。

『歌ちやん、何うしてるでせうね。』

半ば笑つたやうなくすぐつたいやうな聲でお粂は言ふと、男も笑つて、『さア、何うしてるかな――』

二人が土手を下りて門から入つて行くと、『お歸んなさい。』かう言つて婢は賑かに帳場から迎へた。しかし奥まで二人を送つて行かうとはしなかつた。その室の雨戸はもうちやんと締つてゐて、一枚明いた副室の障子の外には、笠のない竹ボヤのランプが一つしよんぼりと置いてあつた。お粂は先に入つて行つた富田に、『おひやが來てゝ?』かう訊いて置いてから、靜かに障子をしめて中へ入つて行つた。

土手にあがりかけて、ちよつとお粂が躊躇すると、男は手を取つて抱へるやうにして呉れた。醉つた男の酒氣は、お粂の顏を輕く掠めて行つた。

大きな倉庫の並んで立つてゐる向うに、一ところ料理屋の灯が明るく闇を照してゐるばかりで、土手下に展げられた灯の少い田舍町は、早くも眠りに落ちたやうにしんとしてゐた。二人の笑聲は闇の中にをり〳〵聞えた。

少し行つたところで、地から湧きでもしたやうに、大きな黑い背の高い姿が二人のすぐ傍を摩れ違つて通つて行つた。

『今のは何アに、人間？　私はびつくりした。馬かと思つた。』

『馬鹿な……』

暫く行つてから二人はこんなことを言つて笑つた。『だつて、大きいんですもの、見上げるやうだッたわ。』

『本當に暗いな。』

縺れたり離れたりする二人の影はすつかり闇の中に包まれてゐた。男は唯女の白い顏と白い手とを見た。お粂は男に縋るやうにして歩いた。

倉庫が盡きると、其處から川がひろ〴〵と見渡されてゐた。晝間だと、前に大きな鐵橋が一目に見え

の茶碗に飯を盛り始めた。

『僕にもおくれよ。』

『召上つて？』

男の茶碗を取つて、靜かにそれに飯を盛つて『お香の物は？』

『おくんなさい。』

飯を食ひながら、途中で二人は顏を見合せて面白さうに笑つた。婢はやがて茶を煎れて持つて來た。

『姐さん、蚊がゐるね。蚊帳をつらなくつては駄目だね。』

『えゝえゝをりますとも……。蚊は大變、これから蚊で一苦勞……』こんなことを言つて、越後から來たといふ婢は大きく笑つた。婢は越後の藝者の藝のある話などを長々と話した。

『雨はまだ降つてるかえ？』

『今はやんでをります。』

『ぢや、ちよつと土手の上を歩いて來ない。』かかう富田がお粂に言ふと、『さうね。雨が降つてるなければ行つても好いわ。さうすると、醉がさめるから。』

『では、お床は此方に延べて置きますから。』二人の出て行く後からかういふ婢の聲がした。

『眞暗ねえ。』

長い身の上話をしてから、お粂は言つた。『だから、私、これで、隨分、苦勞してるんですよ。あそこなんかでも、それは隨分忙しいんですからねえ。』

婢がランプを運んで來る時分には富田はもうかなりに醉つてゐた。鰻の蒲燒が來たのを機會に、『もう飯にしようかね、』と言ふと、『ぢや、御馳走になるわ。私、醉つちやつた！』かう言つてお粂はまた頬に手を當てた。

突如、富田はお粂の手を握りしめた。お粂も握り返した。

『此處の鰻は旨いんだよ。』

『さうですツてね。』

お粂はわざと落附いた風で、茶碗を手に取りかけて、『あなたはまだ？』

『僕も食ふよ。』

『まだ、飲みたさうね？』

德利を倒にして見た富田は、『だつて、もうありやしない。』

『取りませうか？』

『もう澤山。』手を振つて見せて、『本當に、今日は奇遇だツたね。』富田はまた笑つて見せた。

その代り捨てるときかないからといふ顔をお粂はして見せたが、しかし何も言はずに、默つて、自分

二階は煩さいから。』かう言つて富田は又婢の方を向いて『隣の室は客があつてもつかはないだらうね？』

『えゝえゝ、此頃は閑ですから。』

かう言つて婢は笑ひながら向うに出て行つた。二人は向ひ合つて坐つて、互に眼で笑つて見せた。『丁度好かつた。此處は何うかすると、込んで、ごたごたしてゐることがあるんだよ。これでも名代の旅館だからね。東京からよく客が來るんだからね。』富田は茶を啜りながら言つた。お粂は默つて鬢のほつれをかき上げてゐた。

婢はやがて膳を運んで來た。鯉のあらひに鯉こくに胡瓜もみ。『此處は食物が旨いから好い。』こんなことを言ひながら心持好さゝうに富田は盃を手にした。お粂はお粂で、不思議な邂逅を猶ほ頭の中で繰返しながら、

『私、餘り飮んだことはないのよ。』

『少し、醉ふ方が好いよ。』

『でも、あとで苦しくなるもの。』

富田はお粂の體の段々此方へ寄つて來るのを感ぜずには居られなかつた。二三杯の酒にほんのりと紅くなつた顏は、灯のまだ來ない夕暮の薄明るい空氣の中にほのかに美しく見えてゐた。『もうこんなに醉つちやつて、』など言つてお粂は兩方の頰に手を當てた。

其處にある庭下駄を突かけて、男の立つてゐるところへと行つて見た。成ほど其處にはトロコ用の軌道などを載せた大きな船が二艘も三艘もかゝつてゐて、體を半分出した船頭の嬶は、繩つるべで頻りに河の水を汲み上げてゐた。

『上流へ行くんでせうか？』

『風の都合で、かうして休んでゐるんだね……。風さへよくなれば、夜中でも何でも發つて上つて行くんだよ。』

『船頭なんて、面白い稼業ですね。皆な船が家ね。あの狹い中で、子供を育てたり何かしてるのね。』

『船頭なんて舟の中で子供ばかり拵へてゐるやうなもんだよ。』富田はこんなことを言つて、笑ひながら座敷へ上がつて行つたが、丁度其處に煙草盆を運んで來た婢に、

『二階は明いてゐないの？』

『明いてをります。』

『二階にしようか。』

かうお粂の方に向いて相談するやうに言ふと、靜かに此方に歩いて來たお粂は、

『此處で結構ぢやありませんか。』

『さうだね。二階は好いんだけども……、却つて此處の方が好いかも知れないな……。客があると、

る舟を男に指して見せた。

十七

停車場から乘つた車はやがて二人を川の縁の旅館へと伴れて行つた。其處では、門を入つたところの一間で男が二三人頻に玉を突いてゐたが、奥には幸ひに客がなく、川に臨んだ室の前の庭に、芍藥が唯靜かに見事に咲いてゐた。

『好いな、何時見ても……』

富田は室に上る前に、長い庇の出た軒下を通つて、鐵柵の前へ行つてこんなことを言ひながら、長い間前に展げられた川を見てゐた。降雨期の水は溶々と岸に溢れるやうに漲つて、雨に濡れた影の暗い帆は、重さうに緩やかに動いて行つてゐた。

『大きな帆ね。』

お粂は一度坐つた席から、かう言つて立つて來た。

『前にも來たことはあるんだらう？』

『いゝえ、聞いてはゐますけども、來たのは初めてよ。好いところね……』かう言つて障子に片手をかけて、お粂は恍惚と眺めてゐたが、『おい、來て御覽、船が澤山かゝつてゐるから。』かう富田に言はれで

『何かいけないことでもあるかえ。』

『いゝえ……』

かう言つたお粂は其處に二三の知つた顏のあるのを思ひ出してゐた。しかし、もしさういふ顏に逢つたにしても、非常に困るといふやうなものでもなかつた。お粂の胸は唯躍つた。

其方に行く汽車は一番先にやつて來た。幸ひに其處には知つてゐる顏がなかつた。驛長が見はしなかつたかと心配したお粂は、人氣の乏しい客室の中に自分を發見して、ほつと微かな溜息を吐いた。

汽車が動き出してから、富田はいろ〳〵な話を始めた。餘所から見て絕えず懇意な親しみを持つてゐた男も、かうして、正面に自分が立つて見ると、何となく氣が詰るやうな氣がした。お粂はかうした不思議な機會が來ようとは夢にも知らなかつた。

『雨がよく降るねえ。』

『本當ねえ。』

『もう、今日で三日目だね。』

『さうね。』

初めは向う側にゐた富田は、やがてお粂の傍に來て並んで腰を掛けた。お粂の心と體とは段々解けて男の方に偏つて行つてゐた。小さな沼の緣のやうなところを汽車が通る時には、お粂は声の中に繫いであ

富田の態度が其時お粂の頭の中に描かれてゐた。誰れも周圍に知つてゐるものゝないといふことも、お粂の好奇心を十分に誘つてゐた。

『でもね……私、今日歸らなくつちや。』

富田が切符を買つて入つて來るのを見ると、お粂はもう一度かう言つて男の顏を見た。

『だッて、もう、買つて來ちやつた。……好いぢやないか。大丈夫だよ。何んな申譯でもしてやるよ。』かう笑ひながら富田は言つて、青切符を一枚お粂に渡した。

『貴方は好いの？ 歸らなくつても……』

『僕は好いとも……もう用がすんだんだから。』

お粂は切符の行先を見た。そこには東京とは丸で反對の方向になつてゐる驛の名が記されてあつた。お粂はよく其處を知つてゐた。曾て富田と話し合つたことなどもあつた。停車場から田圃を越して向うに見える田舍町、その町の裏には高い堤防があつて、それを上ると、大きな川が見える。そこに眺望の好い旅館がある。

『あそこに行くの？』お粂は思はず言つた。

『好いだらう？』

『…………』

『何うですか。』莞爾笑つて見せて、『今日はもうすぐお歸り？』
富田は默頭て見せたが、『君は？』
『私は歸るの。』
『今日歸ることになつてゐるのかえ？』
『えゝ。』
『でも、今日歸らなくつたつて好いんだらう？』ぢつと女の顏を見て、『え？　好いんだらう？』
かう言つた富田の顏には、中年の男でなければ容易に出來ないやうな大膽な表情が歷々と見えてゐた。
お粂は默つたまゝ、立つてゐた體を卓に凭せて、其處に置いてある雜誌の綴込の上に眼を落した。女の熱した橫顏を男は見るやうになつてゐた。
『でもねえ……』
暫くして微かに言つた。忽ち相觸れた二人の胸は不思議にも同じやうにある物に向つて波打ちつゝあるのを感じた。
『好いんだらう？』富田は靜かに繰返した。
『まだ切符は買はないんだらう。』富田はかう言つて急いで出札口の方へと行つた。お粂は默つて立つてゐた。氣が附くと、金離れが好くつて、深切で、氣前がさつぱりしてゐて、何處か男らしい處のある

らね。』間を置いて、『それで、これから行くのかえ？』
『いゝえ、歸るところ。』
『何處にゐるの？　一體、伯母さんは？　此處にゐるのかえ？』
『いゝえ、この向うの町ですよ。今日ちよつと此處で下りて兄の家に寄つたんですの。』
『何日から來てたんだえ？』
『もう、今日で九日目になりますよ。體が弱いもんだから、少し保養しようと思つて來たんですけど、あつちも手がありませんからね。』
『體ツて、君が？』
『えゝ。』
お粂は笑つて見せた。かうした對話をする間、お粂は富田の腰をかけてゐる大きな長い椅子の傍に立つてその體を寄せるやうにしてゐた。富田はお粂の顏を見上げるやうにして話した。前に腰をかけてゐた白髮の老紳士は、初めはめづらしさうに此方を見てゐたが、此時すつと立つて三等待合室の方へ出て行つた。
『此頃入らしつて？』
『いや、暫く行かない。』

『似てる、似てるとさつきから思つてゐたのよ、私……』かう言つたお粂は何となく體がほてるやうな氣がした。富田の眼には、少し赧くなつた色白のお粂の顏と形の好い銀杏返と派手な夏のコートとが先づ映つた。

『何うしたの、一體？』

富田が繰返して訊くと、

『伯母の家に來てたんですの……』かうお粂は嬉しさうに言つて、『貴方は？』

『僕は昨日ちよつと用があつて、其處まで行つて、今歸るところだよ。大宮の方を通つて行かうと思つて、さつき、汽車を下りて此處で待つてゐるんだよ。』

『さうですか？』

男の顏を凝と見て、

『よく入らつしやるの、此方に……』

『あそこの町に會社があるだらう、あそこに要があるんだよ。』

『さう？』かう言つたお粂はあたりに氣を兼ねるやうに聲を低くして、『でも、此處でお目にかゝらうとは思はなかつた。私、さつきから似てる、似てると思つて見てたんですよ。』

『さうかえ、僕はちつとも知らなかつた。此處で、君に逢はうとは僕の方でも思ひもかけなかつたか

きな寫眞の額も矢張同じやうに其處に掲げられてあつた。

お粂は覗いては見たが、賣店には妹の代りに知らない下女らしい肥つた女が出てゐた。で、お粂は信玄袋を其處に置いて、出札口の前に行つて、上りの時間表などを見てゐたが、まだ二三十分間があるので安心して、もとの處に戻つて來て、傍に立つたまゝ、信玄袋の中から吸ひ殘りの敷島の袋を出して、マッチを摩つて火をつけた。

待合室の上の處には、石版刷の綺麗な避暑地案内のビラが下つてゐた。それをお粂は卷煙草をふかし乍ら何氣なく見てゐたが續いて賣店の玩具の虎だの狗だのに移つて行つた眼は、二等待合室の中に行つてピタリと留つた。其處には卓に身を凭せかけて、熱心に新聞を見てゐるインバネスを着た中年の男がゐた。暫くぢつと眼を放さずに見てゐたお粂は、男がちよつと此方に横顏を向けると、われを忘れたやうに立つて其方へと行つた。

『富田さん。』

思ひもかけない處で思ひもかけず自分の名を呼ばれたので、男ははつとした樣子で、此方を見たが、

『お、お粂さん。』

かう言つて、立上つた。富田の顏にも心の動搖が明かに讀まれた。

『何うして？　此處へ？』

十六

歸りがけにちよつと寄つた兄の家を辭して、お粂が停車場へとやつて來たのは、もうかれこれ午後四時をすぎてゐた。雨はまだ車の幌の上に靜かに音を立てゝ降つてゐた。

長々しい兄の意見に好い加減氣を腐らせたお粂は、これから歸つて行く生活の忙しさと慌しさとを考へて、不安な不愉快な思ひにすつかり胸を閉されてゐた。折角治りかけた病氣が復た起つて來さうにすら思はれた。

停車場に着いて、幌の中から信玄袋を持つて下りたお粂は、一番先にそこにある賣店の中を覗くやうにして見た。それは停車場前の旅館で出してゐる店で、以前はお粂の友達がよく其處で店番をしてゐた。この前下りた時には見違へるやうに大きくなつたその妹が其處に出てゐて、『お粂さん』かうなつかしさうに聲をかけた。お粂に取つては、この停車場は追憶の多い停車場であつた。東京へ初めて出て行く時、東京から逃げて歸つて夜遲く着いた時、兵隊さんの跡を追つて出かけて行つた時、過ぎ去つた月日は今でも細かに濃かに織り込まれて、その折々の自分の姿がはつきり其處に動いてゐるやうにすら思はれた。硝子戸越しに見えてゐる事務室では、矢張若い男が忙しさうに電信を取扱つてゐるし、プラットホームには、見知越しの驛長が煙草をふかしながら靜かに彼方此方を歩いてゐた。何處か遠くの海水浴場の大

窓から一目に見渡された。

夜は名物の落雁に茶など淹れて伯母は莞爾して二階に上つて來た。しんみりした調子で伯母は話した。伯母はお粂の勤先のことなどを詳しく聞かうともしなかつたが、しかしお粂の身の固まらないのが、絕えず心配の種になるやうに見えてゐた。『姉さへ生きてゐればなア。お前だつて、こんなに苦勞なんかしないでも好いんだに……』などと靜かなやさしい聲で伯母は言つた。

『でもなア、行つても詰らなかんべいがな、折角來たんだから、兄の許へも、ちよつくら歸りに顏を出して行けやな……。なアに、構ふもんかな。こつちでちつとも身を退いてゐることはねえだよ。』

こんな話をする傍で、娘は近い中にある踊りのお淩ひの衣裳の話などをした。『着物々々ッてこの子は着物のことばかり言つてゐる。』かう伯母はたしなめるやうに言つた。娘は母親の肩に凭りかゝるやうにしてゐた。

蛙の聲は湧くやうに聞えてゐた。雨はまたしめやかに降つて通つた。闇の中を一ところ劃つた二階のランプの光線は、半分吊つた蚊帳を青くくつきりと見せてゐた。もうかなり多く蚊が出てゐた。『田舍は唯蚊が多いんで困るな……菊、お前、蚊いぶしを持つて來なよ。』

『螢！　螢！』

不意に娘が言ふので其方を見ると、螢が一つ靜かに雨の闇の中を明滅して飛んで行つてゐた。

などがさがつてゐた。今年は、繭の出來が好いので、活氣が何となく四邊に漲つて、夜は三味線の音が、蛙の聲に雑はつて何處からともなく聞えて來たりした。お粂は青田から朝日の晴やかにさし込んで來る二階の一間でいつも早くから眼をさました。

少し離れた家の畑に娘と一緒に行つて、蠶豆を取つて來たりした。莢の太いのを茹でて白あへにして伯母が食はせて呉れた時には、『旨しいのね。東京ではこんな柔かなのは食べたくつても食べられないよ。お肴なんかよりどんなに好いか知れやしない。』お粂はこんなことを言つて、好んで野菜物に箸をつけた。

幼い時分に食つたものがお粂には何よりもめづらしいやうに見えた。『また、今度、玉蜀黍が出來る時分に來て御馳走になりますよ。裏の畑から毎日、お午すぎになると、ギイ〳〵音をさせて折つて來たものねえ……。あの時分のことが戀しい。』

茄子、胡瓜、南瓜、里芋などが畑には澤山栽ゑられてあつた。畑の縁に咲いてゐる背の高い赤い白い花を見て、『さう？　これが芥子なの？　こんな綺麗な花が咲くの？　芥子には？……これが實ね。成ほど芥子坊主ッて言ふがよく似てるのね。』かう言つて、めづらしさうにその實に觸つて見たりした。お粂は裏から畑の方へよく出かけて行つた。

雨が鬱陶しく降る日もあつた。裏の物持の庭には緑が蔽ひかぶさるやうに繁つて、町の傍を流れてゐる溝川には、蘆や藺や澤瀉などが一面に浮いて漂つてゐた。田植笠の並んでゐるのがお粂のゐる二階の

昔の學校友達に逢つた時のさまも忘れられなかつた。お粂が訪ねて行くと、奥で働いてゐた上さんは、『まア、お粂さん、』と言つて、心持顏を赧くして、きまりがわるさうな物の言ひ方をした。同い年ではあつたが、子供がもう二人もあるので、姿は窶れて、四つも五つもお粂よりはふけて見えた。此處に嫁いて來た時きり、お粂は五六年もこの友達に逢はなかつた。それはお粂がまだ東京の伯父の家に行かない前で、立派な支度の出來たことや、嫁いて行く先がかなりの財產家であるといふことなどがお粂を此上なく羨しがらせた。お粂は友達の總領の四つになる女の兒の頭を撫でながら、その時分のことなどを思ひ出してゐた。『こんな大きな可愛い子があつて羨しい、』などとお粂は言つた。

然し眞黑になつて働いてゐる友達の生活は決して羨ましいとは思はなかつた。東京にも一度行つたきりで、もういつ行かれるか知れないやうな生活、筒袖か何か着てせつせと働いてゐる色の黑い亭主と小むづかしさうな眼の惡い姑とに侍いて、子供に追はれて齷齪してゐる生活と、不安はあつても派手な賑かな自由な生活と比べて、お粂は自分の生活を寧ろ生效のある生活だと思つた。二階で逢つた男に對する傷痍は日增に治つて、今では心靜かに落附いて、やがて再び開かれて來る新しい生活をお粂は胸に描いてゐた。お粂に取つては何も彼もまだ自由であつた。何ういふ好運が其前に待つてゐるか知れなかつた。お粂は色の白い顏ををり〳〵鏡に映して見てひとりで微笑した。

それは丁度繭買の大勢町に集つて來る頃で、町の角には、『繭、買升、大勉强で買升』などといふ大き

ふ靜かな落附いた生活だらうとお粂は思つた。店に田舍の百姓が來て、のんきに煙草をふかしてゐるかと思ふと、今度は繭買の男が立寄つて茶を飮んで、長い間話し込んで行つた。『伯母さん、ランプのホヤをお呉れ、』などと言つて田舍の娘達は入つて來た。

お粂は來た晩娘に伴れられて、町の通りを歩いた。庇の長く出た家並が續いて、呉服屋の店には若い番頭が坐つてゐた。角の旅籠屋には自轉車が置いてあつて、混雜した厨の中が薄暗いランプの光に照されて見えてゐた。『此處等は皆なランプね。電氣が來ないのね。』こんなことを言ひながらお粂は步いた。靜かな穩かな夜であつた。お粂は郵便局や銀行のあるあたりまで行つて其處から引きかへして來た。

『此處だよ、私のお師匠さんの家は。』かう娘が指して敎へた近所には、軒燈の明るくついた家が二三軒並んでゐて、おつくりをした顏を夕闇の中に際立たせて、此方を長く見送つてゐる女などがゐた。『きいちやん、何處へ行くの？』かう娘の顏をのぞき込んで聲をかけて摩れちがつて行つた若い女を、『あれはお師匠さんの許にゐる藝者だよ、』などと娘は言つた。お粂は細い明るい小路をぶら〳〵步き乍ら家の方へと歸つて來た。

小意氣な扮裝をしたお粂の姿は、絕えず町の人達の眼を惹いた。『荒物屋に東京から別嬪が來たぜ、』などと誰も彼も評判した。娘は到るところで、『誰だえ？　親類の人かえ？』などと訊かれた。晝間退屈して通りを步くと、店の人達はわざ〳〵手を留めてめづらしさうにして長くお粂の姿を見送つた。

さん、こんなに仕込みましたね。田舍の娘のやうぢやない。』お粂はかう言つて褒めて、『どれ、それぢや、私が春雨を彈いて見るから踊つて御覽……。好いかえ……。』『三味線を取つて見て、『調子が少し變ね。……こんなにして置いちや駄目ですよ。さはりが丸でついてゐないぢやないの？』紙を細く割いて絲の間に挾んで見て、『でも、暫く彈かないから忘れて了つたかも知れない。ちよつとお待ち。』『少し彈いて見て、『さア、好いかえ、……ヤア、よい、』などと言つて、首を振つて調子を取つた。と、伯母は忙しい店の手をやめて、階段の處から半分體を出して扇子を飜へして踊る娘の姿をさも得意さうに嬉しさうにして見てゐた。

『上手ねえ。體のこなしが柔かで好いよ。お師匠さんは？　もうお婆さん？　さう、娘が藝妓屋をしてるの？』

お粂はこんなことを言ひながら、娘を相手に、都々逸や流行唄などを彈いた。やがて三味線を傍に置いて、『忙しい中で、それでもよく仕込んだのね。田舍でこれまでにするのは大變ですよ。』かう言つたお粂は、伯母が昔里に歸つて來てはよく三味線を彈いたり何かしたのを思ひ出して、『伯母さんも今でも彈いたり何かすることがあつて？』

『駄目だよ。三味線だけはあるけれどもね。彈いたことなんかはありやしないよ。もう駄目だよ。』

お粂は別な世界にでも來たやうな氣がせずには居られなかつた。忙しいお茶屋の世界に比べて何とい

その話を女將にすると、

『うちも知つてる通り、手がたいから困るけれど、餘り長くなければ行つて來ても好いよ。……田舍は好からうよ。お醫者にかゝつてぐづ〳〵してゐるよりも好いかも知れない。』

で、伯母の許に手紙をやつたが、その返事が來るのを待ちかねて、お粂はすぐ出かける支度をした。意氣な小さな信玄袋に化粧道具とセルの着換を一枚入れて、紙を銀杏返に結つて、小形の翡翠の金簪をさして、黑繻子と縮緬との腹合せの帶をしめた。『意氣な下町の娘さんが出來たね、』などと女將は笑つた。

お粂を乘せた車は、やがて細い路を幾度も曲りくねりして、田圃の中の停車場の方へと急いだ。午前の明るい日影の下に剖葦が頻りに鳴いてゐた。

伯父も伯母も喜んで姪を迎へた。『まア幾日でも保養して行きなよ。何うせ誰も氣のおけるものはないんだから。』伯母はかう言つて二階の六疊を掃除して、障子を新しく張り替へて呉れた。靑田から來る風は、涼しく軒の簾を動かして行つた。

町の師匠の許に踊やら三味線やらを習ひに行つてゐる今年十二になる一人娘の從妹は、中でも殊に東京から來た客をめづらしがつて、容易にその傍から離れようとはしなかつた。『泊つて行くの？　幾日も泊つて行くの？　うれしい、』と言つて胸を撫でる眞似をした。後には天神のぐら〳〵する稽口三味線を持つて來て、黃い聲を立てゝ、『松の葉のようにこん濃やかに……』などと唄つて見せたりした。『よく、伯母

お粂は涼しい綠葉の蔭に人知れず蹲踞つて、長い間頭を押へてゐたりなどした。

『お前、何うかしたかえ？　顏の色がわるいよ。醫者に見て貰ふ方が好いよ。』かう女將が言つて吳れるので、門を入つたところにある二階の四疊半に上つて、お粂は一日二日靜かに休んで見た。しかし自動車などが威勢よく乘込んで來る氣勢をきくとぢつとしてその薄暗い一間に寢てはゐられなかつた。忙しい女中達の手前に對しても、ゆつくり落付いて寢てなどゐられなかつた。

手が書けるので、帳場位には坐つてゐられるだらうと思つて、二三日其處で勤めても見た。しかしそれも矢張氣が詰つて仕方がなかつた。細かい女中達の言葉の上の暗鬪なども絕えずお粂の氣に懸つた。

神經衰弱だからぢつと落附いてさへゐれば治ると醫者は言つた。それを聞いたお粂はふと思つた。少し田舍に行つて休んで來よう。それが好い、それが好い。一週間、十日ほど暇を貰つて田舍でぢつと休んで來よう。かう思つたお粂は、伯母の嫁いてゐる織物の出來る靜かな田舍町を思ひ出した。兄弟の住んでゐる町には決して行かうとは思はないお粂も、その町なら、靜かで、落附いてゐて好いと思つた。伯母夫婦はそこで小體な堅い荒物屋をしてゐた。その二階からは靑田がひろびろと見渡されて、蛙の聲が湧くやうに聞えた。お粂はまだ娘でゐた時分に遊びに行つた時のことを思ひ出した。と、小づくりな人の好い伯父の笑顏なども眼に見えるやうな氣がして來た。それに、その町には仲の好かつたお征矢さんといふ幼な友達が嫁いて行つてゐた。

『兄妹はやめにしてね？』

『それはさうさ。』

『好いわ、屹度好いわ。ねえ、お粂姐さん。』かう言つて歌子は輕く笑つたが、すぐ調子をかへて、『しかし、本當にお粂姐さんをいつもほめてるのよ。本當に調子が柔かに落附いてゐて好いッて言つてゐらつしやるのよ。だつて、いつだッて、お粂姐さんは？　ッて訊かないことはないんですもの。』

『さう？　でも、私なんか駄目ねえ。』

かうは言つたものゝ、お粂は富田が醉つぱらつて、廊下のところでお粂の肩に兩手をかけて乳のところをぐつと緊めた時のことなどを思ひ出してゐた。考へて見ると、これまでにもお粂は富田の世話を何遍してやつたかわからなかつた。歌子が來ないので他の女を聘ぶといふのを漸くなだめて寢かしてやつたこともあれば、面白くない顏をして默つて坐つてゐた二人をなだめてやつたことなどもあつた。『兄妹、兄妹！』かう言つて、醉つた富田はいつも强い力でお粂の手を握つた。

十五

お粂は此頃體が急に弱くなつて來たのを感じた。日に由つて、烈しい眩惑がして、いかに我慢をしても起きて働いてゐられないやうな時もあれば、わるく逆上せて齒が痛んで仕方がないやうな時もあつた。

『さう？　お前さんも家來にしたことがあるの？　隨分だねえ。』

こんな言葉は到る處で繰返されてゐた。

かと思ふと、中には『でも、つく〴〵淋しいと思ふこともあるわねえ。いくら遲くまで働いて歸つて行つても、家には猫と婆やしきやゐないんだからね。待つてゐて吳れる人があると、働くにも張合があると思ふこともあるわね。』こんなことを言つて少し間を置いて、『それに來れば好いと思ふ時には來なくつて、生憎な時に一緒になつて、泡を食つたり何かするんだものね、思ふまゝにはならないわねえ。』お粂は浪費された男心と女心とを比べては考へずには居られなかつた。

お粂は富田に言つた。『でも、苦勞があつたツて、誰も私なんか本當に相手にしてはくれませんもの。』

『そんなことはない。君の方で逃げてゐても男の方で承知しないから確かなもんだ。』

『本當に、私なんか駄目ですよ。』

傍に坐つてゐる歌子は、『本當よ、お粂姐さんは堅いツていふ評判よ。』

『堅い？』

富田はわざと眼を睜るやうにして、『お粂さんが堅くしてゐられるもんか。』

『でも、本當よ。』

歌子がかう言ふと、『本當かえ？　確かに本當かえ？　なら、僕が相手になつてやらうか。』

見轉の域を脱して他から姐さんと立てられるやうになつたのも、半分以上富田が力になつてやつてゐた。それでゐながら、浮氣で情夫を拵へたり、役者に關係して金を取られたり、不見轉の癖がぬけないで、わづかな金で體を他の男に任せたりした。富田は知らなかつたけれど、富田の友達に歌子が關係した時には、『それぱかりはおよしよ、歌ちやん。お前さんだツて、長年あの方にはお世話になつてるるんぢやないか。』かう女將に意見された。いろ〳〵なことを見て知つてゐるお粂には、をり〳〵富田の心が氣の毒になつて來ることなどもあつた。『何故あんな女に關係してるんだらう。もつと好い藝者がいくらでもあるのに……』お粂に取つては、さういふ熱い男の心が冷めたい女の心に觸れて、無駄に浪費されてゐるのが惜しかつた。『あゝいふやさしい人もあるのに……』お粂は來なくなつた自分の男と富田とを引較べて考へた。

一方ではまた藝者達が男の心を幾つも握つて持つてゐるといふことがお粂には羨ましかつた。『他で見たほどではないよ。隨分厭だと思ふお客もあるよ。』それはさうに違ひないが、しかし大勢の心を自由にしてゐることは、その社會の得意でもありまた見得でもあつた。女達は關係した男のことを皆な『家來、家來』と言つてゐた。『家來が大勢ゐて、心丈夫で好いわねえ、』などと言つてゐた。ある藝者は、『今日はもとの家來に逢つちやつた。何處かの色の生白い女と來てたよ。でも、矢張家來だわねえ。他人のやうな氣がしないから不思議ね。』などと言つて平氣で笑つた。

こともたまにはあつた。お客は大抵相手の女の來るのが遲いのをも默つて辛抱して待つてゐた。好い加減腹が立つてゐても、女が顏をそこに出して、『遲くなつて、何うもすみません。……だつてあのお客、意地がわるいんですもの、』などと申譯を言ふと、それが見え透いた申譯であるといふことがちやんとわかつてゐても、お客の顏の相好はすぐ意氣地なく崩れて行つた。女は一言か二言で巧みにお客に金の指環などを貰つて貰つた。

藝者達は一番先に、先づ客の懷中を研究した。女將は、『お客の財布の中がすぐわかるやうにならなくつては、一人前のお茶屋の女中衆だと言つて威張つてはゐられないよ。つくりや樣子などにもあるけれど、それればかりではないよ。お茶代のおろし方でもわかるよ、』などと言つてよく女中達を叱つたが、それ以上に藝者は客の懷中を讀むことに心を碎いてゐた。枕の下に置いてある客の財布をそつと明けて見るやうな女も尠なくはなかつた。女達は銘々持つてゐるそのお客の每月の金の消費額などに細かに眼をつけてゐて、そこからその客の素性やら狀態やらを知つて行つた。『おつと、これればかりは見られちや大變……。こゝに、この中に、君達に對する僕等の細かい作戰計畫があるんだからな。これればかりは一緒に寢る時でも肌を離されないよ。これが僕等の金城鐵壁だよ。』こんなことを言つて、其處に置いてあつた財布をわざと戲談に懷中の奧深く藏ひ込むお客などもあつた。

富田も甘いやさしいお客の一人であつた。歌子との關係もかなりに長く、この土地で歌子が兎に角不

相手の藝者が何處かに行つてゐて容易にやつて來ない時などには、お粂は長い間其處に坐つて酒の相手をした。『何うしたんでせうね。本當に、歌子さん。さつき、すぐ來るツて電話があつたんですけども、もう一度かけて見ませうか。』

『好いよ、あいつなんか、君さへゐれや――』かう言つて、富田はお粂の手を握つたりなどした。歌子がゐる前では、『お粂さんと、兄妹約束をしたよ。なア、お粂さん、今日から、君とは兄妹だぜ。好いか、僕の妹になるんだぜ。さア、兄妹の盃、』などと言つて、猪口をさして、『戲談に言つてゐるんぢやないよ。本當だよ。飮まなくつちやいけないよ。』

お粂は何となくそのお客が好きであつた。年は取つてゐるが、何處かに若々しいやさしい氣分があつて、無邪氣でそしてさつぱりしてゐた。

『歌ちやん、罰があたるよ。あんな好いお客はありはしない。散々世話になつてゐながら、歌ちやんにはまだわからないんだね、富田さんの好い處が――』お定がいつかこんなことを言つたのをお粂は時々思ひ出した。

お客は皆なやさしい甘い、好きな女の爲めになら、何んなことでもやるやうなのが多かつた。藝者達の裏と表とに平生よく熟してゐるお粂には、それも別に不思議はないけれど、何うかすると、お客が可哀相になるやうなこともないではなかつた。『あんなに深切にしてゐるのに……』かういふ風に思はれる

…。奧羽線の乘替のある停車場の近所だらう？』―かっ圖星を指されたやうに言はれた時には、お粂はこのお客は自分の素性を知つてゐてわざと知らない風をしてゐるのではないかとさへ疑つた。『さうかえ？あそこの生れかえ？　よく當つたらう。ちやんと當るから不思議だ。』から得意さうに言つてそれからそのお客は常にお粂を贔屓にして、田舍の話などを何彼とした。お客は富田さんと呼ばれてゐた。

『さうかえ？　あの不動さんのある町にもゐたことがあるのかえ。』

こんなことを言つて、『だから、わかるわけだ。僕は始終あつちに行くんだもの。何處かで見たことがあるかも知れないよ。』

『本當ですか？　旦那？　本當に旦那は始終あつちに入らつしやるんですか。』

お粂はなつかしがつて常にその座敷の番に當るのを喜んでゐた。川の縁にある料理屋の二階の眺望の好いことだの、不動さまの緣日の賑やかなことだの、停車場の近所にある熊手を賣る大きな社だの、午過ぎにいつも上つて來る小さな汽船の話だの、さういふ話がいつも二人の間になつかしさうに繰返された。番に當らない時にも、そこに顏を出すと、

『そら、お粂さんが來た。何うしたえ？　丈夫かえ？　此頃久しく顏を見せないから何うしたかと思つてゐたよ。』いつもこんなことを言つて莞爾して饅頭などを吳れた。醉つて低い聲で小唄を歌つたりする人であつた。

かう言つてお粂はさびしく笑つた。長い手紙をこつそり書いて出してやつた後では、その返事が來ると思つて、お粂は度々上さんの店へと行つて見た。『お上さん、手紙が來なくつて？』始めは店頭からかう言つて入つて行つたが、後にはそれもきまりがわるいやうになつた。男は遂に返事を寄こさなかつた。女中達の衝突などはお粂には何うでも好かつた。お粂はこめかみの處に頭痛膏を張つてつまらなさうにして終日唯働いてゐた。溜息がひとり手に出た。

『何うかしたの？』

ある座敷で、かう土地の歌子といふ藝者はお粂に訊いた。

『頭痛がして仕方がないよ。』

『お粂姐さん、體が弱いのね。』かう續いて言つた歌子のあとについて、其處に坐つてゐた三十八九の肥つたお客は、『しかし、頭痛がしてゐる女なんて言ふものは艶なもんだね。何か苦勞があるんだね、お粂さん。話しておきかせよ。君とは兄妹の緣を結んだ筈ぢやないか。』かう言つて莞爾した笑顏をお粂の方に向けた。

それはかなり舊くから來てゐるお客だといふことであつた。お粂が此處に來て始めて番に當つてその座敷に出た時、そのお客は、いくらか訛のあるお粂の言葉をつかまへて、『君は東京ぢやないねえ、何處だか當てゝ見ようか。』などと言つて、『さうだな、何でもこれから北の方だね、そんなに遠くはないね……

もお仙は成たけかばつてやるやうにした。女中達はお仙の方に段々多く附いて行くやうになつてゐた。

細かい言葉の爭ひなどが絶えず繰返されてゐた。『お前さんの勝手におしよ』かう一人が言ふと、『こんな家にこびりついてゐなくつちやならないやうな私ぢやないんだからね。勝手にするとも、』などと一人は言つた。お仙の苛立つた聲が其處でも此處でも聞えた。

その夜の喧嘩の噂は彼方此方で繰返されてゐた。お梅は、『何アに、照ちやんがあの時初めて淸どんとの關係を知つたていふ譯ぢやないんだよ。そら、あのお客ね。あのことを彼奴が米屋さんにすつぱ拔いたんだよ。それで照ちやんがくわつとしたんだよ、女將に……。圖々しいんだよ、あれで中々……。』などとお粂に話した。それでもお秀はそれ以來悄氣たやうな顏をして、默つてせつせと神妙に働いてゐた。

お粂は度々男の處に電話をかけた。しかし男は電話に出て來ないやうなことが多かつた。お粂は何となく張合ひのないやうな月日を送つてゐた。

『お前さん、何うかしたの？』

かうお梅に訊かれて、

『何故？』

『何故ッて、元氣がないよ、此頃。』

『さう？』

『何をするんだえ。お前さん達は？』

かう言つたお定の聲には、流石は女中頭と言はれるだけの重味があつた。『お上さんが留守だと思つて馬鹿にしちや困るよ。此處には、いつお客樣が入つて來るかわからないんだよ。』

しかしかう言つた時には、二人はもうつかみ合ひを始めてゐた。照江のホラ〳〵した裾と、白い手と、蒼白い顏と、髮とが一緒になつてからみ合つて、こんがらかつて、電燈の明るい中に見えてゐた。罵る聲と泣聲とが一齊に起つた。

『何をするんだえ？』かう繰返して言ひながら、お定は照江を、お粂はお秀を一生懸命に離さうとした。しかし二人とも容易に手を離さなかつた。照江はお秀の髮を握つて右の手でポカ〳〵打つた。お秀は手を延して照江の顏を滅茶苦茶に引搔いた。

『誰か來てお呉れ！』

けたゝましいお定の聲に驚いて、やがて厨の方から板番と煮方とが飛んで入つて來た。」

十四

お定とお仙との衝突も其頃では際立つて眼に立つやうになつて來てゐた。お客の勘定のことでお定が少ししくじつたことがあるのを好い機會に、お仙は益々女將の信用を得ることに力めた。お秀のことで

業の邪魔をされて默つてゐる奴があるもんかね。』
『お前さん、一體、何を言つてるんだよ。』
お定はかう言つたが、すぐあとをついで、『お座敷はもう濟んだのかい？』
『お座敷なんか何うでも好いんだよ。……どうせしくじつちやつたんだよ。いろんなことを饒舌りやがつたんだからね。色の生白い、生意氣な顏をしやがつて。お世辭でも言つてお茶代の五十錢も餘計に貰つてゐさへすりやそれで好いんだよ、お前なんか。』
ふつと擧げたお秀の顏は蒼青になつてゐた。ぶる〳〵體が震へてゐるのをお粂もお定も見て取つた。何も知らないお定にも、これは何かあるのだといふことがすぐと飲み込まれた。
『あんな顏をしてやがる。……さう見えても口惜しいのかえ？』
『何だよ、照ちやん、見つともないぢやないか。』
お定が止めるのを振放つて、『何か言ひたけりやお言ひよ。言はせて御覽よ。口惜しいと見えるよあれでも……。そんな奴に負けてゐてたまるもんか。』
『何とでもお言ひよ。』
急にお秀が口を切つたので、『言はなくつてさ。馬鹿！』照江の顏に昂奮した色が歷々と上つたと思ふと、いきなり立つて其方へと行つた。お秀もそのまゝ身構へして立上つた。顏は蠟のやうに蒼白かつた。

雨は絶えずビショ〳〵と降つてゐた。新綠は濃くなつて、梧桐や梅や櫻の葉から雫が傘の上にバラバラと落ちた。灯は濡れた敷石の上に光つて、離座敷からは爪彈の三味線の音が靜かに聞えて來た。ある夜、お粂とお定とお秀とが帳場の處に坐つてゐると、少し醉つて裾をホラ〳〵させて入つて來た照江は、

『誰だか知らないけど、私のことを何の彼のッてお客に言つた奴があるんだよ。女中の癖に、內證にしてゐることをお客に言はれてたまるもんか。稼業の邪魔だよ。』

『何うしたのさ？　照ちやん。』

傍からお定が言ふと、『何うしたつて？　お定姐さん聞いて下さいよ。私、口惜しくつて、私のことを何の彼のとお客にすつぱぬく奴があるんだよ。生意氣な顏をしてゐて……』

『誰よ、照ちやん。』

『誰ッて、解つてゐるぢやないか。よく圖々しい顏をしてゐられるよ。人のことより自分のことを考へて見るが好い。』かう言つたが、向うに低頭いて默つてゐるお秀の方を睨むやうにして見た。

お粂もお秀の顏を見た。

『照ちやん、お前さん、醉つてるね。』

『醉つてやしないよ。正氣だよ。』照江は體をぐた〳〵させて、『他人のことを不見轉だの何だのと大きなお世話だよ。それよりも自分の足元に氣をつけるが好い。お上さんにさう言つてやるから構はない。稼

降りかゝつた。

『なアに大丈夫よ。』

上さんの意見に對して、お粂はかう何遍となく言つたが、しかし男の來ない時には、ぢつとして坐つてはゐられないやうな氣がした。『夏服をつくるんだから、金を少し何うかして□れないか、ぢきかへすから。』かう言ふので、無理算段をして、お粂は漸くそれを間に合せてやつた。それから二三度男はやつて來たが、最後の時には、つまらぬことで、痴話喧嘩をして、留めるのもきかずに男はスタ〳〵歸つて行つた。

『お前さんにも似合はない。私にはちやんと初めから解つてゐたよ。』

『でも……』

『好い加減にする方が好いよ。話が旨すぎるもの。』

『大丈夫だよ。』

お粂は下唇を咬むやうにして、いくらか顏を赧くして言つた。お粂は長火鉢の前で默つて溜息を吐いてゐたりした。かと思ふと、時には、『構ひやしないよ、何うなつたツて構ひやしないよ。何うせ、私なんかかういふ身になつたんだから、』などと言つて、自暴氣味に田舍で關係した二三人の男の話などを上さんにしてきかせた。

持つて來て、明放した二階に寢轉びながら、半日それを讀み耽つてゐることなどもあつた。『お上さん、お氣の毒ですがね。ビールを一本取つて下さいな、退屈しちやつた。』こんなことを言つて、男は財布から金を出した。

二階の二人は大抵は低い聲で樂しさうに話した。時々靜かな笑ひ聲が混つた。何うかすると、お粂の高く笑ふ聲なども聞えて來た。しかしさう面白いことばかりは續いてゐないらしかつた。ある日、いつもに違つた甲高いお粂の聲がしたので、『めづらしいことだ、』などと上さんが思つて居ると、やがて頻りにそれをなだめる男の聲があとから聞えた。時には男が變なつまらなさうな顏をして歸つて行くことなどもあつた。

ある日、男が歸つてから、お粂は長火鉢の傍で貯金の通ひ帳をひろげて、ひとりで溜息をついてゐた。と、『何うしたのさ？　お前さん。溜息なんかついて？』かう言つて上さんは店の方から入つて來た。お粂は急いでその通ひ帳を帶の間にかくした。

十三

さみだれの頃には、男の足はもう大分遠くなつてゐた。お粂は紺蛇の目の傘に思ひを包みながら、夕暮道を此方から彼方へ往つたり來たりした。溝は水が漲つて、ツン〳〵生えた藺や蘆などに雨が細かく

てやつた。

『お前さん、しつかりしなくちや駄目だよ。』

こんなことを上さんが言ふと、『さう見えるの？　お上さんには？……。でも、そんなでもないわ。』お粂はかう言つて靜かに笑つた。何うかして約束した日に男が遣つて來ない時などには、お粂はつまらなさうな顔をして、奥の長火鉢の前に默つて坐つてゐた。

『今日は何か急な用が出來たのね。もう來ないわ。』

かう言ひながらも、お粂は歸らうともせずに、いつまでもぐづ／＼してゐた。店から出て、夕暮近い町に立つて見てゐたりした。

『でも、あれでも、今、勤めてゐる處では、少しは月給は取つてゐるのよ。忙しくつて困るッて言つてるから。』

何うかするとお粂はかう言つて、男の素性などを長々しく上さんに話した。さういふ時には、お粂の顔には、いつも生々した得意さうな色がのぼつて來てゐた。男はいろ／＼と旨いことを女に言ふらしかつた。將來の事なども巧に女に話して聞かせるらしかつた。

男と上さんとも其頃にはもうかなり懇意になつてゐた。女の來ない間を、下に下りて來て話をして行くこともあれば、上さんが二階へ押かけて行つて長い間話し込むことなどもあつた。厚い小説本などを

るくついて、前の西洋料理では、客が二三人入つてビールを飲んでゐるのがはつきりと見えてゐた。『私此處で好いよ、ちよつと買物をして行くから。』お粂はかう言つて車を下りるとすぐ、土手下の細い裏道の方へ急いで姿をかくした。

店から呼吸を切つて入つて行くと、上さんは、

『お前さん、何うしたのさ？』

その返事はせずに、

『まだゐて？』

『ゐるにはゐるけれど……。もう歸るツて言ふのを、一生懸命で留めてるんだよ。』

『さう？　ゐるの？　有難う。』

かう言つて、何も彼も忘れたやうに、お粂はあたふたと二階に上つて行つた。

十二

宿の上さんは二人の仲を絶えず好奇心の眼で見てゐた。始めは男の素性や心持がよくわからなかつたが、二三度話をして居る中に、この仲はとても長く續くものでないといふことが段々わかつて來た。女は男の爲めに少からぬ金を出して居るらしかつた。お粂に賴まれて、男物のセルの單衣を上さんは縫つ

つてゐられない。それをまた伯父は平氣で、田舍の話だの親類の話だのを際限なく話しかける。次兄の家内のお產をした話などをお粂は唯うはの空で聞いてゐた。

『兎に角、餘り遲くなりますと叱られますから……。折角ですけれども、今度ゆつくりお暇を戴いて參りますから。』かうお粂は何遍となく言つて暇を告げた。しかし、伯父は、『まア、まア、折角だから、さう手間は取らせないから、』と言つて幾度もとめるし、外から歸つて來た伯母は伯母で、『そんなことを言はずに……お粂さん。久し振りぢやないか。折角賴んだんだから、私の家の御馳走だつて、食べて行つて吳れたつて好いぢやないか、』などと言ふので、それをふり切つて歸るわけにも行かなかつた。

長い日の影の段々障子の外に消えて行くのを氣にしながら、漸くやつて來た鰻の丼にちよつと箸をつけると、すぐ蓋をして、『ちや、本當に食べ立ちですけども、叱られると困りますから……。え、え、今度はゆつくり來ますとも。』かう言つて漸く立上つて暇を告げたお粂は、外へ出ると、其處にあくびをして待つてゐた車夫に、いくらか金を握らせて、そのまゝ歸途を急がせた。

車夫が一生懸命に走つて行くのにも拘はらず、早く滑かに前に輾つて行く電車が羨ましいやうな氣がして、お粂はいつそ車を下りて電車に乘らうかと何遍となく思つた。しかし滅多なことをして、そこから自分の祕密が知れて行くやうなことがあつては大變であつた。お粂は車の上で唯氣を揉んでゐた。

土手の車宿の前に來た時には、日がもうすつかり暮れ果てゝゐた。待合や料理店の廣告燈には灯が明

言はれる度に、その前に立つてよく涙を拭いた鼠入らずも勝手元に置いてあるし、何も彼も變つたものはないのに、變つて行つた自分の身の上がお粂には種々に思ひ廻された。二三年の中に心も氣分も境遇もすつかり變つて行つて了つた自分をお粂は見た。

『車なんか歸して了つた方が好い。』かう伯父は言つたが、『でも、早く歸らなくてはなりませんから。』かう言つたお粂の胸には、男が今日三時頃からその二階に來てゐることを思ひ出さずには居られなかつた。お粂は出がけに男の勤め先に電話をかけて置いた。

しかし、伯父伯母は容易に歸さうとしなかつた。伯父はお粂の勤めてゐる先を何の彼のと言つて訊いた。大きなお邸に奉公してゐることにしてお粂が話すと、『さういふ處なら好いやうなもんだけど……、早く身を固めて安心さして與れるやうにしなくつては仕方がないぢやないか。お前、もういくつだ？』などと伯父は言つた。

伯母の姿がちよいと見えないと思つてゐたが、話を早く切つて、歸り支度をすると、『まア、好い。此處ぢや旨いものはないが、今、鰻を御馳走するつて言つて出かけて行つたから。』伯父はかう言つて留めて、緩くりした調子で、また盡きない話を續けた。

お粂は段々氣が氣でなくなつて來てゐた。約束して置いた時間からもう二時間も經つてゐる。家の方は少しは遲くなつても構はないが、男がさぞ待つてゐるだらうと思ふと、氣が氣でない。ぢつとして坐

に出かけて行く自分を見た。宵の中から假睡をして伯父によく起される自分を見た。憐れな慘めな其頃の自分の姿は其處にも此處にもまだ歴々と殘つてゐた。

『まァお粂さん、綺麗になつたこと、丸で見違へるやうだよ。』

かういふ伯母の聲は、矢張其時分の聲だ。如才のない柔かな調子の底に針を包んだやうな神經性の聲だ。『お粂さんの尻燒けにも困るよ。』と言つた聲だ。伯母は矢張その時分と同じやうな眼色で、じろ〳〵と氣味わるくお粂の顏を見た。

姑の難かしいのも厭だつたが、その小間物屋の男の嫉妬深いのもお粂には堪へられなかつた。店に來るお客と話などしてゐてさへ、亭主はすぐ變な顏をした。大きな鼻、頰骨の高く立つた顏、肌理の荒い黑い肌――お粂の若い心はさういふ男を亭主にしてこれから長い一生を送る氣には何うしてもなれなかつた。お粂は子供の出來ることを恐れた。お粂は一日でも心を許して日を送つたことはなかつた。『何うかして出たい。』かう思ひながら、それでも半年程其處にゐた。

二三度出たり入つたりして、後には仲人まで中に入つたが、とても自分の體が此處にゐては駄目だと思つたので、お粂はある夜、身の廻りのものを持つて、こつそり其處から家出をした。そして伯父の家にも寄らずに、すぐ其處から田舍へと行つて了つた。お粂はその時分のことを頭に繰返した。

家こそ違ふが、伯父の袴や羽織が其處にかけてあるし、古い同じ簞笥が置いてあるし、伯母に喧しく

それこそ何と言つて怒るか知れなかつた。お粂はわるい人に逢つたと思つた。

しかしめぐり逢つたが百年目と言つたやうな態度で、しつかり捉へた伯父の手をお粂は容易に離れることが出來なかつた。『好い處で逢つた。お前の行方がわからないツて、田舍では心配してゐた。』かう言つてお粂は無理やりにその近くに住んでゐる伯父の家に伴れて行かれた。

最初小間物屋にお粂が嫁いたのも實はそこの伯母が周旋して呉れたのであつた。その時分には、伯父は今の處とは違つた所に住んでゐたが、お粂は其處に一年ほど世話になつてゐた。小間物屋に行つてからも、亭主や姑の愚痴をもよく其處にこぼしに行つた。多い伯父達の中でも、この伯父はことに幼い頃からお粂を可愛がつてゐて、お粂の父母が死んでからは、一層不憫に思つてゐるらしかつた。此間なども、田舍から出て來たお粂の兄に、『お前達がしつかりしてゐながら、妹に、そんな眞似をさせて置くつて言ふ奴があるもんか。それは、お粂もわるいが――あいつにも困つたものだが、何うかしなくちや仕方がないちやないか。お前達が餘り構つてやらないから、ついあゝいふ氣になるんだ。』などと小言を言つてゐた。

伯父の家は生籬などのある三間位の小さな家であつた。仕方がなく車をつれて、伯父のあとについてお粂が行くと、『ヤア、めづらしい。お粂さんかえ。』かう言つてお世辭の好い伯母は出て迎へた。

その伯母の聲の中には、お粂が初めて田舍から東京へ出て來た時分のことが細かく織込まれてゐた。お粂は其處にやかましく伯母に言はれて働いてゐる自分を見た。メリンスの帶をしめて町の通りに買物

十一

坂の下の賑やかな町を通つたり、活動寫眞の幟の並んで立つてゐる前を通つたりして、お粂はそれからそれへと杜若を配つて廻つた。午は名高い蕎麥屋に入つて、車夫にも天ぷらなどを御馳走した。それはつい二三日前に來たといふ若い衆で、お粂の生れた町から東に大きな川を一つ越した町の者であつた。そこにはお粂の伯母に當る人が嫁いでゐて、幼い時分にお祭によばれて行つたことなどがあるので、二人の話はよく合つた。『さうですか、東屋のお上さんなら、よく知つてゐますとも……』などとその若い衆は言つた。訛のある故鄕の言葉もお粂には何となくなつかしかつた。若い衆は、『一つ今度は思ひ切りこつちで稼がうと思つて、あそこへ入つたんですが、勤まりますかな？』などと言つた。お粂はその車屋の親方の話や得意先のお茶屋の話などを何彼となく聞かせてやつた。

午後の四時過ぎには、それでももう大抵配つて了つて、お粂を乘せた車は、元お粂のゐた山の手の通りを歸途の方へと向つてゐた。と、不意に後から聲をかけるものがあつた。振返つたお粂ははつとした。其處には母方の伯父が後から一生懸命に追つかけて來てゐた。

その伯父にはきまりがわるくつて顏を合せられない身の上にお粂はなつてゐた。堅い勤人の伯父はお粂が小間物屋を出て行く時分から喧しく意見を言ふやうな人であつた。今ゐる處などを話さうものなら

つたら、兵營を訪ねて男に逢ふ積であつたから、進んで出かけても行つたけれど、今年はさういふ望もないし、去年兵營の中でまごついて、たうとう逢はれなかつた失敗を二度繰返す元氣もないので、お粂に取つては、寧ろ近い下町を廻つて、早く切り上げて、あの二階でゆつくり男に逢ふ方が希望であつた。しかしさうも言つてゐられなかつた。お粂は澁々ながら出かけて行つた。

朝降つてゐた雨は、幸ひに晴れて、山の手に行つた頃には、日影が晴れやかに若葉にかゞやきわたつてゐた。海軍の御前と言はれたお邸から大きな會社の重役をつとめてゐる旦那の邸へ行つて、それからある貴族の嚴めしい門の中へ入つて行つた。花壇に見事な草花の咲いてゐる邸などもあつた。ある邸では、丈の高い色の白い綺麗なお孃さんが書生と犬とを相手にして遊んでゐたが、お粂が花を持つて內玄關の方から入つて行くと、それをめづらしさうにいつまでも長く長く見送つてゐた。さういふ大きな邸の主人をお粂は皆なよく知つてゐた。『あんな大きなお孃さんがあるんだね、まア、』などと思つてお粂は不思議な氣がした。新橋あたりからいつも大勢お酌を伴れて來て、裸踊などをさせて大騷ぎをして行く御前の邸には、自動車が一臺來てゐて、お粂が裏に廻らうとする時、山高帽にフロックを着た紳士が玄關から送られて出て來てゐた。入口には見事な牡丹の鉢などが置いてあつた。

『あゝ、さうかえ、御苦勞だッたッて言つてお吳れ。』かういふ奧方らしい聲が奧でして、やがて出て來た女中は、紙に包んだものをお粂に渡した。

い足音を立てゝ、奥の離座敷の方へと行つた。其處に引ちがひに、淸どんは菊奴の箱を持つて入つて來た。

十

杜若を持つて、市中の料理店や待合や客筋の家々を廻る時はやがて來た。女中達は毎日交る〲方面をきめて、車に乘つて出かけて行つた。澤山に井戸端に菰に包まれて置いてある紫白の花には、朝の雨がしめやかに降つてゐた。

『お配りも好いけれど、足代は皆な女中持だからね、お前さん。家に由つては、さう氣の利いたお家ばかりはないからね。遠いところをわざ〱行つて、書生さんに玄關で追拂はれて了ふやうなこともよくあるからね、』などとお定は言つたが、實際、女將の言ふやうな旨いことばかりはなかつた。山の手は殊にさうであつた。構ばかり大きくつて、取次が大きな聲をしてゐて、運が惡いと、鎖につながれた恐ろしい犬に嚙み附くやうに吠えられた。『お邸は犬が怖いよ。』かう言つて女中達は皆な山の手に行くのを厭がつてゐた。

『お粂、一番お前が山の手が好きだね。』

かう女將は笑ひながら言つた。去年はまだ此處に勤めたばかりの新參者であつたし、それに運が好か

なに怒つたり何かして？』などと言つてゐた。

『俺は歸る。』

客は急に席を立つた。

お粂は驚いて止めた。照江も放つておくわけには行かないので、何の彼のと言つてとめた。『もう、彼方に入らしつた方が好う御座いますよ。』お粂はかう言つて無理に客を向うの室の方へ伴れて行つた。

あとを片附けて帳場に行くと、お秀と照江とは何か其處で面白さうに話して笑つてゐた。

『さう？　あのお客？』

『すかないねえ。』

『誰？　來てるのは？』

『きいちやん。』

『きいちやんツて言へば、あそこのお爺ちやん、大變なんだツてね。だから、あそこは抱妓が落附かないんだツてね。』

『そんな話ねえ。ぢや、本當なのかしら？』

などとお秀は言つてゐたが、お粂が入つて行くと、照江は急に此方を向いて、『もう向うに行つて？

あんなことは今迄はないんだけども……今日は何うかしたのよ。』かう言つて、卷煙草に火をつけて、輕

り手に周圍が顧みられた。

お秀はやがて二階から下りて來たが、其處に淸どんのゐるのを見ると、わざと其方を見ないやうにして、厨の方へ行つた。その後姿を見送つてゐたお梅は、お粂と顏を合せて眼で笑つて見せた。お粂はくすぐつたいやうな變な氣がした。

その翌日、お粂は照江の客の番に當つて、離座敷の六疊に料理を運んで行つた。その客と照江との仲はかなり長い間であつた。島さん、島さんと女中達は常に呼んでゐた。日本橋の方の銀行に勤めてゐる人で、醉ふと長唄などをよく唄つた。お粂は照江の顏を不思議な心持で見ずには居られなかつた。此内だけでも、照江には他に馴染の客が二人程あつた。

土手下の混雜した細い巷路の中にある淸どんの家などもお粂には思ひ出されてゐた。淸どんは一人で住んでゐた。寢る時だけ其處に歸つて行つてゐた。照江が朝そこから出て來たなどといふ噂は前から女中達にも知られてゐた。『照ちやんも隨分浮氣だね。ちやんとあの井上さんツて言ふ人があるんだらう。彼處にも遲くなつてから寄つてツたり何かするんだよ。まさか淸どんとなんかうそだと思つてゐたが、本當だツてね、』などとお定も言つてゐた。

『貴方、そんなにお酒を上つちや駄目ですよ、』などと照江は始めは言つてゐたが、其後お粂が行つた時には客はつまらなさうな顏をして默つて坐つてゐた。照江はまた照江で、『見つともないわ、貴方、そん

『可笑しくなるね、お前さん。あんな利口さうな顔をしてゐてさ。間が抜けてるぢやないか。』

しかしお粂はこつそり其處を抜けて月の間へ男を見に行つたときのことなどを考へてゐた。他人のことばかり笑つてはゐられないやうな氣になつてゐた。三十一二の色の淺黒い箱屋と照江とお秀との顔が一緒になつて早く眼の前を掠めて通つて行つた。不思議な氣がした。

『それ、そこを通つて行くよ。』

かうお梅に頷でしやくつて教へられて、お粂が其方を見ると、藥罐と急須とを載せた盆を持つたお秀が眞面目な顔をして、向うの若葉の中に半身を見せて通つて行つてゐた。二人は顔を見合せて笑つた。

『默つてお出でよ。内所にしておやりよ。』

『でも、あいつの利口ぶつた顔が小憎らしいぢやないか。』

『でも、知らん顔をしてお出でよ。』

お粂には、眞面目の顔をしてゐるお秀の顔が何となく見られるやうな氣がして仕方がなかつた。お上さんに御世辭を言つてゐる顔なども可笑しかつた。夢にも知らないお秀は、のんきに煙草の煙を鼻から出してゐたりなどした。

夜になつてから、淸どんは、例の通り箱を持つて莞爾してやつて來た。その顔がまたお粂には何となく見詰められた。お粂はふと自分も誰かにさう思はれて何處かで見てゐられやしないかと思つた。ひと

んさ、あの人がね、これと出來てるんだとさ。』
『さう？』
お粂は眼を丸くした。
『さうッて、お前さん、芳どんぢやないよ。淸どんだよ。』
『淸どん？』
『面白いぢやないか、お前さん。芳どんに振られたもんだから、乘り換へたんだよ。』
『だッて、淸どんには照江さんッて言ふ人がゐるんぢやない？』
『だから面白いんだよ。淸どんは、あれで中々色師だアね。』
『本當かしら？』
『本當だとも、……。私、さつき、其處を掃除してゐると、あの爺やがね、イヤに莞爾笑つてゐるぢやないの？　いつもあんなに澄ましてゐるのに可怪しいと思つてゐると、長生をすると、世の中には面白い事があるもんぢやなんて言つて笑つてゐるんだよ。變だから、何うしたのさッて訊くと、昨夜、見たんだとさ。あそこん處で。』かう言つて、お梅は後の方を指して見せた。廣間と紅葉の間の奥のところにある畑がすぐお粂に想像された。
『イヤだねえ。』

までがこんなことを言つて笑つて、『それから思ふと、さくら屋の女將なんか丸で違ふわね。あの年になつて男なんか拵へるのは何とも思つてゐないんですから……。うつかりしてゐると、自分のお客を取られて、藝者がびつくりしたり何かするんですからね。……それから思ふと、此方のお上さんは堅いわ。男まさりだわ。全くよ……。』

『だから、仕方がないよ、嫉妬の深いのは――。その證據には、此處に勤めてゐた女中で、後々まで尋ねて來るものなどは滅多にないぢやないか。皆な男のことで出されて行つたものばかりぢやないか。……その癖おかしいのね。自分が乘氣になると、出來ない間柄でもまとめてやらうとするんだよ。あの坊主のことなんか、さうだらう。お上さんが纏めてやつたやうなものだアね。……でも、纏まつたあとでは羨ましいやうな氣がするんだね。一緒になつた當座は、政ちやんが來る度に油を取られてゐたよ。『お前さん、遲く歸つて行つて何うするんだえ？　お前さんの方から何うかするのかえ、なんと言はれてゐた。』こんなことを言つて、女中達は笑つた。しかしお仙のゐる前ではかういふ話は出たことがなかつた。お仙は何を女將に話すかわからなかつた。

ある日、お梅は面白さうにお粂に言つた。『お前さん、知つてる？　まだ知らないの？』

『何を？』

『知らないの？』お梅はまだ面白さうに笑つて、『話さうかね。……あのね、あの人がね、そら、兎さ

いんだから。』かう言つてお定は笑つて、『氣になんかしてゐちやとてもつとまりやしないよ。自分が面白くないから人に當るんだよ。放つて置くに限るよ。いゝ加減經つと、ひとり手に治るよ。……』こんなことを言つて女將のひとり寢のさびしさなどを話した。

『矢張、男がゐないと、女は何うしても氣難かしくなるのね』

『お客さまも此間言つてたわ。あゝいふ風に始終神經が立つたり、頭痛がしたり、腫物が出來たりするのは矢張一人でゐる故ですッてね……』

『さうかね。』

『それも子供でもあればだけども、本當のは一人もないんだらう……。あの深川に行つてゐる貞ちやんだつて、唯伯母、姪の間柄といふだけなんだからね……。お上さんだつて時々は癇癪が起るよ。』

『それに、嫉妬深いのね、お上さんは。』女中達は終にはいつも話をそんな處まで持つて行つた。女將の二階の寢間の話なども出た。『寢道具だけでもせめて綿の柔かいのを着なけれや、私なんか他に何にも樂みはないんだから。』かう言つて、體のふつくらと中に埋まるやうな蒲團を二枚も三枚も女將は重ねて敷いて寢た。貞子といふ姪が此處にゐる頃には、いつも厭がるのを無理に一緒につれて行つて抱いて寢たなどといふ話をお定は皆にして聞かせた。

『でも、今お上さんの身分ぢや、無闇なことも出來ないしね。』丁度其處に來合はした土地の中姐さん

や態度が自分にも不思議に思はれるほど際限なく繰返された。其處にも此處にも男の顏が見えたり消えたりした。『僕、少しは金を持つてるよ、』と言ふのを無理に男に仕舞はせて、料理の勘定をして來たことなども思ひ浮べられた。下番に當つて板前の男と一緒になつて働く時には、今までは厭で厭で仕方がなかつたが、それも此頃ではそれほどではなくなつて來てゐた。『作さん、お前さんの情婦は何うしたえ？』かう此方から冷かしてやるほどの元氣をお粂は見せた。

『お粂さん、此頃、何か好いことがあると見えるね。』

煮方の政はかう笑ひながら傍から言つた。其處には赤貝だの蜆だのが澤山に置いてあつて、此處の名物の赤貝の腸を、政は一生懸命に長い間かゝつて煮てゐた。

『それはさうさ、私だツて、ちつとは面白いことがなくつちやね。』こんなことを言ひながらお粂はせつせと働いた。

九

女將の機嫌のわるい日には、女中達は誰も落附いて坐つてはゐなかつた。女將の苛立つた聲は終日四邊に響いて聞えた。

『お上さんも癇癪が起るだらうよ。一人だからね。男のすることまで何も彼も心配しなければならな

の目の傘に美しく映つて見えた。廣間の廣い上り口の廊下では、泊り込みの綺麗な藝者が朝の電話を自分の内にかけてゐた。

一組か二組しか客のゐない靜かな午前には、女中達はそこらの明いた室に集つて、取留めもない世間話などをしてゐた。と、何處ともなくしめやかな小唄の爪彈などが聞えて來て、細かい雨が軒の簾を斜に掠めた。

風の吹く日には、長い廊下は、拭いても拭いても、すぐ塵埃でザラ〳〵した。『風が一番厭ね。』かう言つて、女中達はすぐ汚くなるバケツの水を井戸端へ何遍となく取替へに行つた。さういふ時には、風呂番の男も手傳に來て、戯談などを言ひながら、尻を高くして雑巾を此方から彼方へと押して行つた。

お条の胸の中に祕めて置いたその男の影は、その頃には、もうかなり濃く深くなつてゐた。それまでに、男は三四度はその汚い暗い二階に來てゐた。芝居に行つた時には、お条は一緒に見物に行つた土地の藝者に、『ちよつと私用があるから、今度の幕がすんだら歸りますからね、後生だから、お上さんには終までゐたことにして置いて頂戴ね。』かう言つて賴んで置いて、急いで裏道を通つてその二階へと行つた。その時はお条は初めて自分の願ひが遂げられたやうな氣がした。二人は緩くりした氣分で、近所から料理などを取寄せて食つた。

お条は忙しい用事をしてゐながらも、絶えず嬉しい媾曳の光景を頭に浮べてゐた。男のやさしい言葉

たいッて言つて、無理やりに出て行つたらう。その前の日に宮戸座か何かへ行つたらう？』
『今でもさうなんですか、旦那。』
『今、さうなら、誰がこんなことを話す奴があるもんかい。あいつはしつこいからな。それがいけないんだ。ちよつとは男も乘り氣になるが、ぢき飽きるよ。』其處にお粂が入つて來るのを見て、『此處なんかもあやしいもんだぜ、なア、お粂ちやん。一體お上が無理だよ。これぱかりはいくらやかましく言つたッて駄目だよ。だ………め………だ………よ、』と長く引ッ張つて、首を玩具の虎のやうに動かして見せた。
『何を言つていらつしやるの？　何が駄目なの？』其處に入つて來た相手の藝者が言つた。
『面白い話をしてたんだよ。』かう言つた女將は、舌をそつと出したお客と顔を見合せて、大きな體を抱へるやうにして笑つて、わざと慌てたやうにあたふたと其處から出て行つた。

八

忙しい花の時期もいつか過ぎて、花壇には毒々しい赤い西洋の草花などが咲き始めた。
帳場から廣間に行く路の兩側には、木爪だの椿だの錦木などの鮮やかな綠葉の中に、山吹の黃と躑躅の紅とが縫ふやうに雜つて咲いてゐて、雨の降る日などには、それが縺れるやうに歩いて來る女達の蛇

『そんなことばかりぢやないさ。もつとよく知つてるさ……お常が此處にゐる時分、よく下谷へ行くツて言つて出かけたらう。兄貴が病氣だなんて言つてゐたらう。』

『えゝ。』あやふやな顏をして女將がゐると、

『皆な此處の指金だよ。』得意さうに客は自分の鼻を指さして見せて、『あいつ、何處かちよつとおつなところがあるんだ。馬鹿に色つぽくつて、しつこく絡みついて來るからね。』

アハハと女將は笑つて、『それで旦那は一體何うしたんです？』

『いよ〳〵本氣になつて出直して來たね。』傍にあつた盃をぐつと呷つて、『油斷もすきもありやしないよ、お上……。駄目だよ、そんなことでは……』

『ぢや、旦那が何うかなすつたの？』

『話して聞かせようか。』

『えゝ。』

『さうさな……。外ならぬお上のことだから、參考に言つてきかせてやらうかな。……此處を出てから一と月位淺草のある家に居たよ。』

『皆な旦那が貢いだんですか。』

『さうさ、此處が軍師さ。』客はまた鼻を蠢かすやうにして、『あの時、お常が何うしてもお暇を頂き

かう言つて妓が入つて行つたと思ふと、やがて其處からのんきに笑ふ聲が聞えて來た。女將はまた女將で、『旦那のやうな氣のお廣い方はないんですから……。何も彼も知つてゐらつしやるんですから。とても旦那のやうな眞似はしたくつても私などには出來やしませんよ。本當に心が出來てゐらつしやるんだから、何よりこの妓が仕合せですよ、』などと彼方此方の座敷で同じやうなことを言つて、アハハと大きく笑つて見せた。

お粂の番に當つた菊の間の肥つた客の許に女將は例のお世辭をふり撒きに出かけて行つたが、いつもに似合はず其處で長い間何か話してゐた。

『好い加減なことばかり言つてゐらつしやるよ、旦那も……』

『好い加減なもんか。此頃はお上も餘程かんがわるくなつたぜ。』

『でも、ねえ、まさかお常が……』

『だから駄目だつて言ふんだ。古い奴だが、燈臺元暗しかね。』

『でも……それはうそだ……。いくら旦那が言つても、お常がまさか。』

『本當にしないんなら、もつと詳しく言つて見せうかね。』女將の顏を客は面白さうに笑ひながら見て、『此處から下谷へ行つて、土手下に來て、今ぢや、牛込にゐるだらう。』

『よく御存じね。』

前夜の盡きない涙などが思ひ出された。兵營の前の下宿にわざ〳〵逢ひに行つたことなども思ひ出された。お粂はその男の跡を追つて、東京に出たやうなものであつた。初めは商人の角帶から、俄に軍帽軍服を着けた姿を珍らしく、一緒に並んで淺草の仲見世を歩いたことなどもあつた。しかしそれが今では不思議にも遠い昔の繪のやうにお粂には見えて來てゐた。

男女の細かい關係は田舍でもかなり詳しく知つてゐたが、此處に來てから、半年と經たない中に、一層それが深くお粂の心にしみ込んで行つた。其處には思ひもかけないやうなことが澤山にあつた。若い妓が平氣でお爺ちやんの席に侍つたり、大勢の男を巧みに綾なしてゐたりするのを始めは不思議なやうな淺間しいやうな心持で見てゐたが、それにも段々慣れて行つた。『お粂さん、あちらに知れないやうにして下さいね。』此頃では平氣でかういふことをお粂は妓達から頼まれた。

『何うだえ？　あの妓を御覽よ、まだ十九だよ。それであの腕なんだからね。ちつともあの人のことなどをあのお客の前ではおくびにも出さないぢやないか。貴方一人ツて言ふやうなことを言つてるぢやないか。巧いんだね。私の知つてるだけでも、あの時が百圓、あの時が五十圓、もう餘程握つてるよ。』お定はよくこんなことを話の種にして笑つた。さういふ妓達は此方の座敷から彼方の座敷に行くことなどは何とも思つてゐなかつた。『一時間ばかり待たして置いて頂戴よ、ね、構ふことはないわよ。』などと言つて、平氣でその座敷を出て別の室に行つて寢たりした。『さう？　之なの？　御機嫌がわるいの？』

手紙を女將に發見されたのはもう半年ほど前のことであつたが、其時女將は『長い手紙だよ、ホラ、一間よりももつと長いよ。これでまだ半分だとさ。』かう言つて皆な女中達のゐる前で、その手紙をひろげて見せた。『こひしきこひしき兵隊さんは此頃は何うしたえ。』何ぞと言ふと、こんなことを言つて女將はよくひやかした。お粂の持つてゐる兵隊姿の男の寫眞をも女將はかねて知つてゐた。

『電話をかけるんなら、うちでおかけよ。構ひやしないよ。……でも、家ぢや、岡燒が多いからゆつくり話が出來ないと見えるね。皆な誰でも、さういふところには、こつそり電話をかけに行くから不思議だね。男ツてそんなに好いもんかね。』かう言つて女將はアハハと大きく笑つた。お定もお秀も笑つた。

その兵隊さんは、お粂が山の手の小間物屋から暇を取つて田舍に歸つて行つた時、その町の中ほどの大きな旅籠屋の帳場に父親の代理をして帳つけなどをして坐つてゐた若者であつた。お粂は三年ほど田舍にゐたが、その間に隨分種々な苦勞を嘗めた。二度目に緣づいた商家から戻つて來てからは、父母のない身の、兄弟の世話になるのが厭さに、自分で家を出て、彼方此方に行つて茶屋奉公などをもした。一里ほど離れた町の茶屋では、かなり長く一年ほどつとめてゐた。其處でお粂はその兵隊さんを知つた。

お粂は今でもをりをりその兵隊さんのことを頭に描いた。愈々兵營に入る時の別れの辛さや、その前

はいろ〳〵に考へながらその日を暮らした。お仙と女將と何か話してゐるのを見ると、すぐ自分の事ではないかといふ風に疑はれた。しかしその日は一日女將の機嫌が好かつた。内で出來たお客を他所の待合に連れ出して行つて、長い間出入をさし留められてゐた若い藝者が、姐さんにつれられてあやまりに來た時にも、いつもの調子とは違つて、『お前さんも、それぢやあんまり義理知らずだよ。それやお客さまが先のお茶屋に懇意だとか何とか言ふんなら、まだ仕方がないけども、お前さんのは、さうぢやないんだから……。義理知らずは、一番いけないよ、お前さん、』などと言つてゐた。『あはびや、お風呂のお加減だよ、』などといふ元氣な聲が終日聞えた。

いくらか安心してゐると、夜になつてから、お定とお梅とお秀とのゐる帳場の處で、男を拵へて遁げて行つた元の女中の話などが出てゐたが、ふと、『しかしお前、油斷がなりやしないよ。今日も土手に電話をかけに行つた人がゐるんだからね。』かう言つてお粂の方を見て笑つた。お粂ははつとして顔を赧くしたが、

『ちよつと用があつたもんですから。』

『兵隊さんかえ？　その中逢はせてやるからおとなしくしてお出でよ。』

女將はかう言つて笑つて、『此頃は手紙を書かないから、何うしたんだと思つてゐたんだよ。』

女將がお粂をひやかす時には、いつもきまつてその長い手紙と兵隊さんとが持出された。書きかけた

うとする時、お粂はもう一遍かう繰返して言つた。やがて店から男の出て行くのが奥から見えた。

『もう、私も歸らなくつちや――。お上さん、怒つてるよ、屹度。』お粂はこんなことを言つて、それから此間賴んで行つた洗濯物の話を始めた。

七

土手を上つて少し行つた處にある自働電話から出て二歩三歩來たと思ふと、お粂は急に後からお仙に聲をかけられた。

『何うしたのさ。』

『ちよつと用があつて……』かう言つたお粂の顏は俄かに赧くなつた。

お仙は意氣わるさうにじろ／＼とお粂の顏やら態度やらを見たが、そのまゝ何も言はずに、さつさと先に立つて歩いて行つた。お粂はわるい處をわるい人に見られたと思つた。今朝、『明日は芝居に行く日だから、晝から來て下さい、』と電話をかけたが、急にまた行かれなくなつたので、その斷りの電話をお粂は其處にかけに行つたのであつた。丁度、男は出勤してゐて、『さうかえ、それぢや仕方がない。その中また行く、』と言つて切れた。

屹度お上さんに話すに相違ない。話したつて構はない。その時はかう言はうかあゝ言はうかなどとお粂

『何だか變だね、しかし……』

『大丈夫ですよ。』お粂はかう言つたが、溜息をついて、『もう一時間以上經つたのね。もう歸らなくつちやならない……。今度、本當に、いつか緩くり來て下さいよ。電話をかけるから。でも、よく來て呉れてね。』堪らなく可愛いといふ眼色をして、お粂は男の手を堅く握つた。

お粂はやがて階梯の處から下を覗くやうにして、小聲で、

『お上さん。』

上さんは笑つた顏をちよつと其處に出して、點頭いて見せてから、靜かに二階に上つて來た。

『もう、お歸りでずか、まだ好う御座んせう。少し遊んでいらつしやい。』男の出かける支度をしてゐるのを見て、かう上さんは笑ひながら言つたが、そのまゝ其處に散らばつてゐる盆を片附けやうとすると、

『好いのよ、お上さん、私が片附けるから。』かうお粂は傍から言つた。

日曜日に遊びに來るかも知れないといふさつきの話をお粂が上さんにすると、

『えゝえゝ好う御座んすとも……。いつでも明いてゐるんですから。いくら緩くりしていらしつても好いんですよ。』こんなことを上さんは氣輕に言ひながら、散らばつたものを集めて、盆を持つて下へと下りて行つた。

『ぢや、其時ね。それまでは電話がかけられたらかけますから。』男がマントを着て下へと下りて行か

小さな金鎚の音が絶えず隣の方から聞えて來てゐた。

『何だらう？　あれは？』

『餝屋か何かでせう。』

暫し沈默が一間を領した。

ビールの一本の方の罎には、まだ酒が半分ほど殘つてゐて、それに向うの窓から差し込んで來る日影が明るく當つてゐた。半分剝きかけた黄い夏蜜柑と汁を吸つたあとの白い皮とが赤い丸盆の上に一杯に散らばつて、林檎が一つ疊の上に轉がり出してゐた。裏では長屋の上さん達の長い饒舌が頻りにしてゐた。

暫く時は經つて行つた。

男はやがて手を延して、其處に置いてある飲みかけのコツプのビールを取つて飲んだ。

やがてお粂の聲がした。『ね、時々、遊びにゐらつしやいよ。ね。日曜なんか一日來てたツて好いのよ。……夜は塞がつてゐるけれど、書間はこの通り誰も來やしないんだから、明いてるんだから……。私だツて、ちよつとなら、いつでも來られるから。』

『でも……』

『何アに構はないのよ。私、此處のお上さんにちやんと話して置くから……。ね？』

お粂は下りて行つたが、すぐビール二本と果物とを盆に載せて持つて來て、『何もないのよ。何か取りませうか。』

『澤山だよ。』

『お鮨でも取りませうか。』

『本當に澤山だよ。』

『ぢや今度ね。今日は緩くらしてゐられないんだから。……今度、芝居の見物の時か何かに、行く振りして緩くら來るから。電話は何番でしたつけね。本局の一一三七でしたね。大抵毎日出てゐるのね。』

こんなことを言ひながら、お粂は男のコツプと自分のコツプとにビールを波々と注いで、グウウと見事に一杯呷つた。『あゝ旨しい。』かう言つてお粂はにつこり笑つて見せて、あとを一二杯つゞけて飲んだ。

見る〳〵お粂の顏は赤くなつて來た。眼にも體にもすべて熱い心が漲つて溢れて來るのを男は見た。お粂は色白の丸顏の何方かと言へば肥つた女であつた。

其處には何かの雜誌の繪附錄に出た木版の美人繪を處々に貼つた枕屛風などがあつた、仰向くと、高窓の上に、萎れたパンジイの鉢が置いてあつた。二人の眼には、晴れた春の午後の空が碧くひろ〴〵と映つて見えてゐた。

かましいし、仕方がないねえ。』

『それでもよく今日は出られたね。』

『此處にちよつと來る位なら、お上さんはやかましく言はないのよ。』

『此間は知れなかつたかえ？』

『大丈夫ですとも。だけど怖いのねえ。何だか氣になつてあの時だつて落附いてゐられないんだもの。……あゝいふことが知れゝば、すぐもう彼處にはゐられなくなるんだから。貴方も誰にも言つちや駄目ですよ。お伴れの人も知らないでせう？』

『それは知らないよ。』

『でも、春枝さんには、餘程思ひを殘してるのね、貴方は――。あんな人に關係しては駄目ですよ。大不見轉よ。藝なんか何にも出來やしないんだ。』

『あんなものに思ひなんか殘してやしないよ。』

『何うだか……』お粂は笑つて、『でも、つまらないわねえ。……』と言ひかけて、あとをよして、男の顏を凝と見た。

『お粂さん。』かういふ聲がやがて下でした。お上さんはわざと階段の下からそつと聲をかけたのであつた。

を出して敷島を二つ買つた。

一度上つて行つた二階からお粂はやがて下りて來たが、『お上さん、ビールか何か取つて頂戴な。』かう言つていくらか金を渡して、別に五十錢銀貨を一つ上さんに握らせた。『好い男だね、お前さん。』上さんはこんなことを小聲で言つて、くすぐるやうに笑つて見せた。

男は高窓から裏を覗いて見て、『よくかういふ處を見附けたね？』

『あのお上さん、昔から知つてる人なんだから、氣が置けなくつて好いんですよ。』

『もうすつかり知つてるのかえ？』

『知つてるでせうよ、屹度。』

お粂は笑つて見せた。

『始終、この二階は明いてるのかねえ？』

『夜は御亭主が歸つて來るのよ、あのお上さんの――』

『かう言ふ處に下宿すると好いんだね。』かう男は言つて見たが、こんな汚い暗い處に下宿しやうといふ氣は勿論なかつた。

『さうすると好いのね、毎日逢へて――』お粂もかう輕く調子を合せたが、『もうすこし暇があると好いんだけども……。夜は明けられないし、半日だつてかう言ふ處にぐづ〱してゐると、お上さんがや

お粂は忙しい時には、洗濯物を賴んだり着物を縫つて貰つたりした。『いつでも二階は空いてるんだから、疲れた時には、寢にお出でよ。あゝいふところに勤めてゐては、お金にはなるだらうけれど、骨が折れるだらうからね。』で、後にはお粂は自分の荷物の一部を此處に預けて置いて、時々骨やすめにやつて來て、好きな五目飯などを炊いて貰つた。

『來てるよ。』

お粂の顏を見ると、上さんは莞爾笑ひながら言つた。

『さう？　もう餘程待つて？』

『さうね。そんなでもない……』

お粂は急いで二階へ上つて行つた。二三日前、お粂が來てその話をした時、『大丈夫だよ、お前さん、そんなに隱さないたツて。』かう上さんは笑ひながら言つた。今日も上さんは物珍らしいやうな心持で、お粂の賴んで行つた男の來る時刻を待つてゐた。と、今から三十分ほど前に、ソフトのハイカラな帽子を被つた、マントを着た、三十位の、何方かと言へば書生風の好い男が入つて來て、いくらか言ひ憎さうに顏を赧くして、『杉村さんツて言ふのは此方ですか。今日、三時頃に此處に來る人がある筈ですが、まだ來ないでせうか。』『もう參りませう。何うぞお上んなすツて。』かう言つて上さんは其まゝ男を二階に案內した。男は銘仙の袷に米琉の羽織を着て、頭髮を綺麗にわけてゐた。坐るとすぐ、財布から銀貨

六

『ちよつと着更を取つて參りますから。』ある日お粂はかう言つて出かけて來た。

ぐるりと廻つた處にちよつとした通りがあつて、其處には近所の工場に通ふ職工達が多く住んでゐた。干乾びた鰊の置いてある肴屋の小さな店の隣には、若い夫婦者の一生懸命に働いてゐる八百屋の店などがあつた。

『をばさん。』

かう言つてお粂の入つて行つたのは、それから四五軒行つた駄菓子だの煙草だのをごた〳〵と店に並べてゐる汚い二階屋であつた。そこの亭主はちき近くの護謨の會社に勤めてゐた。

それはお粂が最初に緣づいた山の手の小間物屋の近所で懇意になつたやうな人で、ある日土手下でばつたり邂逅した二人は、『まア、をばさん、何處にゐるの？』『さう、お前さん其處にゐるのかえ？』かう言つて、それからお粂は度々其處に遊びに行くやうになつた。お粂の初めの亭主の話などを上さんは笑ひながらよく話した。『お前さんのあとに、若い色の白い女が來たよ。しよつちう店に坐つてゐるよ。新さんは此頃何處か會社か何かに勤めてゐるらしいよ。お前さん、それでもよく斷念めたもんだね。あれから田舍に歸つて、いつ出て來たのさ？』かう上さんはお粂に訊いた。

斜に身を擦るやうにして通つて、お粂はやがて庭の木立の間へと出て行つた。と、急に夜番の爺さんのことが氣になつて來た。つい此間も離座敷に泥棒が入つて、お客と女と寢てゐる枕元のみだれ箱の中の金時計や指環を盜んで行つたので、此頃では夜番が嚴重になつて一時間每には屹度その爺さんが庭を見廻ることになつてゐた。お粂は先づ四邊を見廻した。

やがて樹の影の暗い間を選んで、成たけ庭の緣のやうな處を縫ふやうにして通つて行つた。其處にまともに月の光を受けた三疊の離座敷があつた。其處には土地の鈴子といふ藝者がお客と一緒に泊つてゐる筈である。番に當つたお粂は宵の中に其處にコップと水差とを載せた盆を運んで行つた。

そこをぐるりと廻つて、やがてその裏のところに來たお粂はほつと呼吸をついた。まアこれで安心だと思つたが、それと共に胸は却つて新しい期待に向つて躍つた。自分の身の周圍が今更のやうに振返られるやうな氣もした。お粂はそつと雨戶に手をかけた。栓を外して置いた雨戶は音もなく靜かに明いた。お粂は上にあがつてから體を屈めて手を伸して下駄を取つた。月はお粂の顏を白く照した。

茫と白くかすんだ夜は靜かであつた。花も草も木もすべて皆な恍惚としてゐた。夜露の落ちる音も靜かに聞えた。遠くの田圃では蛙が微かに鳴いてゐた。

間もなく夜番の爺の咳嗽をしながら通つて行く氣勢がした。

雨戸を締める音が暫し賑かにあたりに聞えてゐた。

五

寝る時分になつて、また自動車が來て、いろ〳〵忙しい思ひをしたが、それもやがては納まつて、電燈が空しく帳場を照らしてゐた。お定が最後に一枚殘つた入口の雨戸を締めるのをお粂は床の中から見てゐた。誰も彼も皆な疲れて綿のやうになつてぐつすり寝込んでゐた。お照の寝言がそろ〳〵始まり出した。

『お照さんのあれは持病だね。』かう女中達は常に言つてゐた。『聞いてをかしくなつてぷつと噴き出すやうなことがあるよ。のべつにやるんだからね。清元なんかをやつてるるかと思ふと、お前さん何うしたんだえ? などとすぐ變つて了ふんだからね。亭主になる人は災難ね。』などと言つて笑つた。お粂がそつと起き上つた時、お照は、『それぢや餘りだよ。隨分薄情だね、お前さんは、』などと言つてゐた。お粂はわざと帳場の方には行かずに、誰もゐない暗い臺所の方に出て、遠廻りに內藏の前を通つて、廁の側の緣側の處へと行つた。そこでお粂はさつき持つて來て置いた下駄をさがして、それからそツと音のしないやうに雨戸を明けた。

下駄を穿いて下に下りてから、あやしまれないやうに雨戸を外からしめて、垣と家屋との狹い間を、

『さうなの？　歸つても好いツて仰有るの？』

『え丶。』

車が遣つて來る間、春枝は其處に坐つて、煙管などを出して女中達といろ〳〵なお饒舌をしてゐた。

『さう？　傳次郎が來たの？　いつ？　さうなの？　柳橋の藝者？　どんな藝者？』かう言つて目を丸くして、

『旨いのね、屹度、あ丶いふ人は？　さう？　そんなにやさしいの？　ふむ、』などとさもめづらしさうに春枝は點頭いて見せたりした。其間、お粂は默つて長火鉢の傍の方に坐つてゐた。土瓶から茶をついで飮んだりした。電燈の光の下にお粂の顏は常よりも一層蒼白く見えてゐた。

車が來て、やがて春枝は歸つて行つた。女中達はまた一しきり饒舌つてから、やがて彼方此方の戸締りに取りかゝつた。お粂は先に立つてお妻やお仙と共に廣間の方へ行つた。いつかちやんと男の寢てゐる室を知つてゐるお粂は、皆なと一緒に雨戸をしめる風をして、その室の方へ裏から廻つて行く雨戸の栓をそつと外して置いた。

『お粂さん、其方は好いの？』

かうお仙が訊くと、

『え丶好いの、締めたよ。』

宵の中の忙しかつたに引かへて、今夜は遲く遣つて來る自動車もなかつた。十一時過ぎには、もうあたりがひつそりして、しめやかに洩れて來る男女の笑ひ聲も聞えなかつた。庭にある海棠の花がしつとり露に濡れてゐた。

女中達は帳場の處に固まつて、いろ〳〵と盡きない饒舌をしてゐた。市村の今度の狂言の話なども出てゐた。女將は二三日前から頭に腫物が出來て、氣分がわるい〳〵と言ひながら、繃帶などを業々しくして、座敷へ行つては、例のお世辭を滿遍なく振舞いてゐたが、やつと一片附かたづいたのを見てから、『今夜は早く仕舞へさうだね、何處からも電話がかゝつて來てゐないねえ。』かう言つてそのまゝ二階に寢に行つた。

時間近くになると、誰の目も皆々眠さうになつてゐた。一日働いた疲勞に誰も綿のやうになつてゐた。大きなあくびなどが其處にも此處にも出た。『昨夜遲かつたから、眠い、眠い。』お梅はこんなことを言ひながら、帳場の傍の一間の柱の方に行つて凭りかゝつた。

其處に、輕い冴えた駒下駄の音をさせて春枝が入つて來た。

『お前さん、何うしたの？』

其處にゐたお妻がすぐかう訊くと、

『歸るのよ。お氣の毒ですけど、車を呼んで頂戴な。』

『何處に行つてゐたんだえ？』

『それよりも貴方は隨分ね。』

『何故？』

『何故ツて……分つてるるぢやありませんか。』かう言つて、

『春枝さんが來たわねえ。』

『あれは仕方がないぢやないか。ぢき返すよ。』

かう言つて、男は何か二言三言低い聲で女の耳に囁いた。

『それもさうだけども……貴方も隨分だわ。』

『僕はまた、君がゐないから、何うしたんだと思つてゐたんだよ。』

『私だツて氣を揉んだ。』

『ぢや、あとでね。』

『屹度ですよ。』

先に男がその室から出て行つた。丁度其時お仙の聲が廣間の前の廊下の所でした。お粂は暫らく其處で身を躱してゐなければならなかつた。しかしそれも長い間ではなかつた。おぼろ月夜の薄白い光は、やがてこつそり裏の方から出て行くお粂の姿を照らした。

ぞれ片が附いて行つた。お粂はいくらかほつとした氣味で、ぼんやり帳場に來て坐つてゐた。丁度廣間の大勢の客が今立たうとしてゐるところで、女將さんを始め番の女中達がずらりと其處に並んで見送つてゐた。お粂も下駄を突つかけて行つた。

『お歸んなさい、御機嫌よう。またお近い中に……』

さういふ聲が一しきり賑やかに聞えた。女と男の色彩がおぼろ夜の月に亂れ合つたり絡み合つたりして見えた。門前には自動車が待つてゐた。

それと引きちがひに、『今晩は、』と言つて入つて來た一人の藝者があつた。それは春枝といふ若い妓であつた。お粂の眼はすぐそれに注がれた。

『春枝さん、月よ。』

かう其處にゐたお妻が言つた。若い妓は女將に挨拶して、そのまゝ長い路を月の間の方へと行つた。お粂の頭は不思議にも今夜は著しく冴えてゐた。何も彼もよく解つてゐた。何んな犧牲を拂つても、何うしてもその客に逢はなければならないやうな突きつめた氣分にお粂はなつてゐた。

厠の奧の一間は明いてゐた。其處に人に見られないやうに暗い處にこつそり立つてゐたお粂は、便所から出て來た男をいきなり其方へと伴れて行つた。

『御機嫌よう！』いやに笑ひながらお粂は言つた。

に其室を覗くことが出來た。さつき摩れ違つたお客と並んで、藝者を相手にその男が何か言つて笑つてゐるのを見た時には、お粂の胸はまた躍つた。

自分の受持の座敷が月の間と遠く離れてゐるので、その男と口を利く機會が容易にお粂には來なかつた。これがお定かお照なら、何とか言つて此方から出懸けて行つても逢へるのだけれど、お妻では何だか自分の心の中がすぐ見透かされさうな氣がして滅多なことは出來なかつた。お粂は唯心の中で焦れてゐた。あの時あんな旨いことを言つて、それが本當なら、顏位此方に見せたッて好ささうなものだ。矢張欺されたのかしら……などとお粂は思つた。それは一時發作的に來た男の病氣がすつかり治つて皆なが安心した二日目の朝であつた。其處にお粂が何氣なく入つて行くと、男はいきなり女の手を堅く握つた。

『まア。』

『好いよ、大丈夫だよ。』

『だッて、私なんか。』

こんな言葉をきれ〴〵に取りかはしたことなどが今もはつきりお粂の眼の前にあつた。お粂の體は熱くほてつて來てゐた。

夜が更けて行くにつれて、下座敷の騷ぎもやつと靜まつて、歸るものは歸り泊るものは泊つて、それ

『泊つて行つた人も來てて？』とお粂はかう訊かうとしたが、ふと氣が附いて、口まで出かゝつたのを引込めて、『大勢さん？』

『お連は二人よ。』

『藝者も來てて？』

『この間のが一人來てるよ』

急に呼鈴が鳴つたので、お妻はあたふたと向うに行つて了つた。お粂の胸は愈々騷いだ。其男が來てゐるかゐないかを確めないうちは、お粂は落附いて用が手に附かないといふやうな氣がし出した。頭髮を綺麗にわけた色の白いやさしい言葉の男……長い暗い萩の間への廊下……酒の後の急病で苦しんで二三日一人殘つて泊つた男の傍……黄い水藥の小罎と散藥の袋との載せてある赤い丸盆……。

お粂はやがて忙しい用の隙をぬすんで、こつそり裏の方へと出て行つた。月の間のすつかりよく覗かれる位置をお粂は豫てよく知つてゐた。お粂は紅葉の間の傍の庭をそつと拔けて、音のしないやうに敷石を除けて通つて、棧をそつと押すと、しきりの折戸は靜かに明いた。そこには、葱だの菜だのさや豌豆だの、一面につくつてある畑があつて、その隅に穉木の一重櫻が一本、月の光を浴びて眞白にぱつと光つてゐた。

月の間はその畠の隅から唯一目に見られた。幸ひにも障子はすべて明け放されてあつた。お粂は明か

『誰だらう、お妻さんぢやないかしら。』

訊かれたお梅はかう言つたまゝ盆に載せた蜆汁を持つて急いで二階に上つて行つた。

自分の受持の室からも頻りにベルが鳴つて來るので、お粂は月の間の受持をさがしてるひまもなかつた。お粂の胸は段々波立つて來た。おどけた幇間の踊なども見てる氣がしなかつた。

向うに出て行くお妻の姿をふと帳場のところで見附けたお粂は、

『お妻さん。』

と、やゝ聲高く後から呼んだ。

半ば行きかけたのをお妻は引返して來て、

『何アに？』

『月の間はお前さん？』

『あゝ。』

『此間來たお客ぢやなくつて？』

『此間ッて？』

『そら、私とお定さんとの番で、柳橋の藝者を二三人つれて來た人ぢやなくつて？』

『あゝ、病氣になつて一日二日殘つて泊つて行つた人が連中にあつたね。あのお連れよ。』

門の傍には小さな家があつて、一方は車夫の供待、一方は不寢番の爺さんの寢起きするところになつてゐた。その爺さんがまた面白かつた。元、旗本か何かのおちぶれで、のつそりのつそり大きな體を持餘すやうにあちこちを歩いてゐた。上野の彰義隊の戰爭の話をする時には、女將も女中も皆なひつくりかへつて笑つた。『お前でも戰爭をしたことがあるかね。その時はかうだらうね。刀を持つてぶる〳〵震へて……』かう言つて女將は後ずさりをする眞似をして見せた。その眞似がをかしいと言つて女中達はまた笑ひこけた。晝間は用事がないので、すまして謠などをうたつてゐた。その前の廣場に女中達は物干棹をわたして、汚れた自分達の洗濯物などを干した。

四

一夜客が大勢立て込んで、帳場に續いた方の二階の下座敷で手を明けかねてお粂はてんてこ舞をしてゐた。此處からも彼處からも三味線の音は湧くやうに聞えた。『今晩は。』かう言つて、褄を取つて白い顏を見せて、藝者はあとからあとへとやつて來た。

風呂場の傍のところで、お粂はふとある客と摩れ違つた。お粂ははつとした。確かにあの時一緒にゐたお客だとお粂は思つた。しかし唯ちよつとすれ違つたばかりなので、果してそれが本當にそのお客だつたか何うだつたかといふことがちよつと疑はれた。お粂は帳場に戻つて來て『月は誰？』

が好いんだからね。此間も腹が立つたから、うんと言つてやつた、』などといふ老妓もあるが、一度でも餘計に口をかけて貰はうと思つてゐる若い妓などは、『お仙姐さん、お仙姐さん、』と機嫌を取つて、內所でつかひ物をそつと袂に入れたり、一圓の祝儀を五十錢餘計に客から貰つてやつたりした。

それとは反對に、お定の方は客思ひで、長年來てゐる客が茶代を餘計におろさうなどとすると、『好いのよ、そんなにしないたつて……。結構ですとも、それで澤山ですとも。しよつちゆうかうやつて、御贔屓になつてゐるんですもの。無駄ですよ、』などと言つた。勘定などもキチン〳〵と拂つて貰はうともしなかつた。『貴方なら銀行に預けておくのも同じですよ。いつでも好う御座んすとも……。一體、お上さんが少し氣が小さすぎるのよ。少し位勘定がたまつたッて厭な顏をするやうぢやかういふ稼業はしてゐられませんよ。これだけのお茶屋ですものね。お客さまだッて都合ッていふものがありますからね。』總てかういふ風に物事がのんきに落附いてゐた。長年ゐただけに、女將の氣性などもよく飲込んで、何んな癇癪を打附けられても何とも思ふやうな風を見せなかつた。女將に怒られて困つてゐる若い妓などを、お定はいつもよく慰めてやつた。

女中達には皆な綽名がついてゐた。それは『おかめ』だの『あはび』だの『兎』だのといふ名であつた。『あはびや、お前何處へ行つてるんだえ』などと女將はよく言つた。『困つたね、おかめさんにも、また齒が痛いんだとさ。』女將はお梅の男のことを薄々知つてゐた。

げに若い箱屋の背中を叩いたりした。

かういふ若い人達に引かへて、お妻は唯何うかしてもう一度失敗した待合を開きたいと思つてゐた。かう大勢客の入るお茶屋にゐれば、自然世間も廣くなるし、顔馴染のお客も出來るし、一二年すれば彼方此方の借金も返すことも出來る。さうしたら、今度こそはしつかりやらう。こんなことをお妻は唯考へてゐた。『下谷に家があるんですよ。今度始めたら、是非來て下さいね。林子？ 丸屋のでせう？ 好い妓ですねえ。御戯談ばつかり、もうちやんと濟みでせう、』などとお妻は座敷で客に言つた。

お仙は勝氣でよく働いた。『お前さんのやうな眞似はしてゐられないよ。』かう口にこそ出して言はないが、素振から調子までさういふ風に見えてゐた。女將のゐる前では殊に效々しく働いて見せた。お世辭も上手だつた。土地で如才のないので聞えてゐる中姐さんさへ『お仙さんのお世辭の旨いつたらないわねえ。餘り上手なので聞いてゝ、をかしくなつて、ぷつと噴出し相になることがよくあるよ、』などと言つた。『左樣で御座いますとも……』かういつも猫撫聲で言つて、輕薄な冴えた賑やかな笑聲を立てた。その癖、底には冷たいところがあつて、女らしい色つぽい氣分は何處にも見出すことが出來なかつた。お座敷の勘定の時などにもテキパキした口の利き方をした。中には、『あんな女中があるもんかね。藝者の取扱ひやうも知らないんだよ。お上さんにさへ好ければ好いと思つてるやがるんだよ。一體、女中頭が意氣地がなさすぎるよ。あんなものに押されて引込んでゐる奴があるものかね。……でもまたあのお定が人

お吳れよ、』と手を合さぬばかりにしてお梅は賴んだ。『吳々も言つてあるのよ、來ちやいけないツて。お上さんに知れれやそれつ切りだからツて言つてあるのよ。それでも來るのよ。しやうがないわねえ。折角貯めた御祝儀をまた取られちやつた。』こんなことを言つてお梅は笑つた。後にはお梅は男のことをかくさずにお粂に話した。

お照は男の話をすると、『もう男には懲々、』と言つて手を振つて見せた。『だツて、私なんか、三年も切れられないで追かけ廻されたんだもの……。でもね、籍が入つてゐなかつたので、何うやら彼うやら別れることが出來たけども……一時はピストルを向けられたり何かして、それは怖いもんよ、男は――。今でも此處にゐることが知れると大變なんだから、』などと言つて、其時のことを話した。

お秀は山の手の通りで生れた。幼い時はかなりに贅澤に育つた肴屋の娘であつたが、父親が死んでから、後添の繼母が男を拵へて、家を滅茶々々にして、それから彼方此方と他人の中で苦勞の多い日を送つて來た。田舍の町に酌婦になつて行つたことなどもあつた。ちよつと小綺麗なので、お客なども手を出したりなどした。『でもお秀はあれで利口だよ。しつかりしてるよ、見かけによらないものだ……』などと女將は言つてゐた。

そのしつかりしてゐるお秀が、箱屋の芳どんに氣があつて、イヤに甘たるい口を利いたり、變な眼色をして見せたりするのをお粂やお梅はよく知つてゐた。『芳どん、しつかりおしよ、』などとお梅は意味あり

れを取つて旨さうにして靜かに吸つた。お粂が其處から出て來る時には、何か戲談をしたやうな睦しさうな二人の笑聲が後に聞えてゐた。

『お粂さアん、』と鶴の方で誰かが聲を長く引張つて呼んでゐるのが聞えて來た。

三

こんなところに來てゐる女中達は皆な一苦勞も二苦勞もして來ないものはなかつた。色つぽい柔かな口の利き方をするお梅は、十六の時に近所の若者と駈落をして、北海道迄行つて男に捨てられて、それからあらゆる苦勞を甞めて來た。此處に入る時にも、稚さい時分から知つてゐる女將に散々意見を言はれて、『お前ももう了簡を固めなくつては仕方がないよ。幾つになると思ふんだえ。六ぢやないか。浮氣をするなら私は世話が出來ないから。』かう呉々も念を押されてやつて來た。それにも拘らず、月に一度や二度は何の彼のと拵へ事をして其頃出來てゐた男の許へとお梅は出かけて行つた。その男を初めて見た時のことは、今でもお粂の頭にはつきりと殘つてゐた。ある日、裏口の處に何氣なく行つてゐると、ちよつと見てはわからないやうな垣のかげの處に、お梅は帶を此方に見せて立つて、帽子を眞深にかぶつた男と何か頻りに話してゐた。『私だから好いけれど、お仙さんにでも見られたら何うする積り？　すぐお上さんに知れちやうぢやないか。』『此方に來てからかうお粂が言ふと、『後生、後生だから、內所にして

其處には長けた春の日の光線が雨戸の隙を洩れて、みだらな一間の光景を明るく見せてゐた。彼方を向いて寢てゐる女の亂れた髮なども見えた。見馴れたお粂には、さういふ光景は無論めづらしくはなかつたが、しかし、男が好い男である場合には、何となく顏がほてるやうな氣がするのが常であつた。『男も女も兩方とも綺麗で、睦まじさうにしてゐる時が一番厭ね。さういふ時は羨しいのが通り越して腹が立つてよ。つく〴〵厭になるよ。不思議なもんね。』こんなことを言つて、お梅やお照と一緒になつて笑つたことをお粂は思ひ出してゐた。男のやさしいのが厭に氣になつた。

『起きようよ、ね、もう。』

かう重ねて言はれて、女はやつと此方を向いて、

『一體もう何時？』

『ぢき十時になるよ。』

『ぢや起きませうね……』かう言つた女は、『姐さん、あの、昨夜預けて置いた着物を此處に持つて來て頂戴な。』

『お召を？　かしこまりました。』お粂はかう言つて、『それぢや、あの、すぐお加減を見て參りますから、少々お待ち下さいまし。』

敷島の袋の中から卷煙草を一本拔いて、それに火をつけて、やさしく男が女に渡すと、女は平氣でそ

『さう〳〵自動車が來たね。』客は思ひ出したやうに見てゐた新聞を傍に置いて、『覺えてゐる覺えてゐる。あの時お前は怖い夢か何か見て魘されてゐたぢやないか。』

『さう？』

女は笑つて、『さうね、貴方に起されたわね。』

『起されたもないもんだ……』

後は言はずに客は意味あり氣に笑つた。

酒と蜆汁とを其處に運んで行つてゐると、その自動車で來た奥の離座敷の呼鈴が鳴つたので、お粂は風呂場の傍の方を通つて急いで其方へと行つた。別室の方の雨戸はまだ閉つてゐた。

しきりの襖の外から、

『お眼覺めですか？』

かう聲をかけると、やさしい男の聲で、『敷島を一つ持つて來て下さいな。』

引返して持つて行つた時には、お粂は襖を靜かに明けて入つて行つた。二人はまだ床の中にゐた。男は色の白い莞爾した顔を半ばもたげてゐたが、お粂の出す敷島を取りながら、半ば女に半ばお粂に言つた。

『もう起きませうよ、湯が沸きましたね？』

『え、すぐお加減を見て參ります。』

『まア私なんか。』

かう言つて、お粂はそこ〳〵に其處から出て來た。

風呂場の大きな鏡には、長襦袢の派手な色彩がチラ〳〵映つたり消えたりした。朝日の當る明るい窓の下では、女が代る〴〵鏡臺の前の座蒲團に長い間坐つて、鬢だの髱だのを丁寧に梳いた。鏡臺の抽斗には、女の油に染みた鬢櫛だの三本足だの粂だのに交つて、男の頭髪を撫でるブラシやチックが入つてゐた。其處にお粂は自分の受持の客の浴衣などを持つて行つた。

二

その朝お粂は座敷を三つほど持つてゐた。早く風呂を濟した方の客へ先づ新聞を持つて行つて、續いて茶の支度をした。客はいづれも湯上りの氣持の好ささうな顏をして、中には輕い戯談などを言ふものもあつた。お粂は縁先に立つて行つて朝日を除ける爲めの簾を下した。

女は綺麗におつくりをして、『あゝ好い氣持、』などと言つて客の傍に行つて品をして坐つた。わざと懷鏡を帶の間から出して、薄い紙で顏の白粉の濃い處を拭いたりなどした。

『昨夜、自動車で來たお客があつたわね。何でも二時頃ね。あの時分まで起きてゐたんですか？　大抵ちやないわね。』

『あゝ。』

何か言はうとしたが、其處に、向うの鶴のお客が庭下駄を穿いて歩いて來たので、ちよつと辭儀をして、

『お早う御座います。もうお目覺めですか。』

『好い天氣だね。』

などと言つて、客はぶら〳〵其處等を歩いてゐた。

お粂が再び風呂場に遣つて來た時には、かねて知つてゐる下町のお客が女と一緒に溢れるやうな綺麗な朝湯の中に浸つてゐた。女ともお粂は顏馴染であつた。

『まア、あなたですか、隨分お久し振りね。』

『つい、此間來たばかりぢやないか、一昨日來たぢやないか。』

『あんなことを……』

『でも、何うしてだか、本當にかけ違つて、お粂さんの番には當らないわねえ。昨日もさう言つてゐたのよ。あとで入らつしやいね。お粂さんは何うした何うしたツて言つてゐたのよ、旦那が――。ねえ貴方。』

かう女は客の方に向いて言つて、『お粂さんはいつもお綺麗ね。』

『だつて、昨日から頼んで置いたんだもの、ねえ健さん。』

無理だとは思つたが、古參で、お上さんに氣に入つてゐて、何ぞと言つては、女中頭の人の好いお定をさへ凌がうとしてゐる勢力のある女中なので、『さうなの？　ぢや仕方がない。』

かう言つてお粂は爭はずに風呂場から向うの方へと出て行つた。『また、お客からお金を餘計に貰つたんだらう。金ばかりためてゐる！』かう思つたお粂の頭には、昨夜、仲の好いお梅とお照と二人寄つて、『矢張、金か男ね、無理よ、かういふ處にゐて男禁制は？　それや、お上さんなんか散々面白いことをして來たんだから好いけれど、お仙さんのやうにお金ばかりためてゐる氣になれないねえ、』と言つたことなどが思ひ出された。『よくしたもんだ、お仙は子供が情人よ。子供の事だと、あれでもお金を出すよ。』女將が笑つていつかこんなことを言つたことがあつた。お仙は男の兒を伴れて、理髮肆の亭主と別れて來てゐた。

ふとお粂の眼の前に、兵隊に行つてゐる男と頭を綺麗にわけた男とがちよつと掠めて通つて行つたが、『お粂さあん』と長く引張つて呼ぶ聲が離座敷の方から聞えて來たので、お粂は急いで其方へと駈けて行つた。

途中でお梅とすれ違ひながら、

『お前さん、今日は下番ね。』

かけたが、やがてそれが意地のわるいお秀といふ女中から女將に知れて、すぐ二人は出されて行つた。『ちよつと小綺麗なものは駄目だよ。すぐあれだから。越後者に限るよ、風呂番は？』其時、女將は笑ひながらこんなことを言つた。

お兼は早起で評判であつた。明方の三時過に寢ても、風呂番の起きる時分には、屹度起きてゐた。二人は朝の逢瀬を樂しんでゐたのであつた。コオクスの烟がブス〳〵と烟突から出る時分、お兼はいつもそツと其處に入つて行つた。それは一日の中で一番人目の途絶えた時であつた。不寢番をしてゐる老爺も其時分は門の傍の自分の室に行つて寢てゐた。『イヤだねえ、あんな處で逢つてゐたんだよ。』それを一番先に見つけたお秀は、さもさげすむやうにして言つた。今でもお粂は、風呂場の釜前に行くと、はつきり其時の光景を思ひ出した。政といふのは實際意氣な男だつた。こんな處で風呂番をさせて置くのは惜しいとお粂も思つてゐた。それと比べて、代りに來た越後者のぶつきら棒の挨拶がお粂には暫しの間小面憎かつた。

『お上さんがまだお風呂が沸かないのかえツて言つてたよ、健さん。』

こんなことをお粂が言つてゐると、丁度其處に來かかつたお仙といふ空世辭の上手な女中が、

『私の方が先きだよ。』

『さう？』

『誰だえ、番は？　お妻かえ？　まだお湯は沸かないかい。』かういふ女將の聲につれて、遠い別の間に掃除に行つてゐるお妻を呼ぶ女中の聲が高く朝の空氣にひゞいて聞えた。

お粂が自分の受持の掃除をすまして、バケツを持つて、入口の方へ來た時には、お照がせつせと上り端の緣側に雜巾をかけてゐた。其處でも此處でも掃塵の音がして、綺麗になつた入口の三和土の上には、心持よく水がまかれてあつた。お粂は『隅々を綺麗に掃除しなくつちやいけないよ。』といつも口癖のやうに言ふ女將の言葉を思ひ出した。仰向いて天井板を一枚々々拭いた時の疲れなどをも思ひ出した。栄をつける時には、二日も三日も皆で代り合つて冷たい水の中に手を浸けてゐた。『それはね、貰ひが多いからつとめてゐられるやうなもんだけども……とても並ではつとまらないわ。』かう懇意な土地の藝者に言つたのをお粂は思ひ出した。

風呂場の小さい烟突からは、烟が黃く細く上つてゐた。其處には健作といふ越後出の男がせつせと釜の中にコオクスを入れてゐた。お粂はちよつと覗いて、『まだ？』

『もう、すぐだ。今朝は、はア、つい寢すごして了つたもんだで。』

お粂が來た時には、風呂番に政といふ好い男がゐた。體格のがつしりした愛想の好い肌の白い三十位の男で、『俺だツて、譯がなくつて、こんな處にいつまでもぐづ〳〵してやしねえ、』といつも言つてゐたが、誰も知らない中に、お兼といふ小肥りの女中と出來てゐた。釜の前で二人でよく話してゐるのを見

の人はよく物がわかつてゐるから……』などと思ひながら、雑巾がけをすまして立つてゐると、其處に女將は花を入れた桶をお妻といふ女中に持たせて、長い路を此方へとやつて來るのが見えた。女將は澤山の室の花を生けかへるのをいつもの朝の課業にしてゐた。

『お早う御座います。』

かう挨拶をすると、『お粂、鶴の方を掃除したかえ？　それから、あの向うも掃除しなくつちやいけないよ。あそこのお客樣はいつも早いんだからね。』

かう云つて女將は廣間の方に入つて行つたが、ゑにしだだのちんこやなぎだの黄梅だのを大きな瀬戸の花瓶に生けてゐるのが長い間見えてゐた。肥つた女將の白いエプロンには朝日が晴やかに當つてゐた。

其處に菊の間に寢てゐたお客がどてら姿で起きて來て、襷がけで働いてゐる女中達に聲をかけて、ぶら〳〵廣間の方へと入つて行つたが、お世辭の好い女將の笑聲は、やがて賑かに聞えて來た。

『貴方はいつもお早いことねえ。』

『これでも餘程我慢して寢てたんだよ。一緒に寢てゐるのも樂ぢやない。』

『は、は、』と大きく笑ふ女將の聲がして、『定ちやんは？』

『まだ夜中だ。』

新橋あたりの藝者で、薄手の色の白い小づくりの二十一二の女であつた。此前にも一二度此處にやつて來たことがある。お照さんの番に當つた時には、お客はもつと肥つた鬚の濃い男であつた。

『今度のが本當の情人かも知れないよ、』などと昨夜もお照はお粂に言つた。

自動車で來た二組の男女のさまなどもお粂の頭の中を掠めて通つて行つた。白いベエル、派手な長襦袢、細い蝙蝠傘、『貴方、寒いわねえ、』などと云つて、絡みつくやうにして女は男の跡について行つた。何處も彼處も塞がつてゐて、奧の離座敷しか明いてゐないので、お定といふ女中頭とお粂とが大騷ぎをして、火鉢だの座蒲團だのを運んで行つた。お粂の受持の方の一組は、何處かの商人の若旦那といふやうな色の白いいやににやけた男で、『さうでせう、』とか、『それはいけませんね、』とか、丸で女のやうな口の利き方をしてゐた。女はすつきりとした背の高い綺麗な人だつた。ダイヤの指環を左の指にはめて、翡翠の金簪をさしてゐた。床を延べて、『おやすみなさいまし、』と挨拶をして、そしていろ〳〵と後片附をして戻つて來た。

『すぐお寢よ、お粂さん、明日また早いんだから。』

女中頭のお定がかう言つて吳れたので、お粂は跡片附をすますと、すぐ上り端の右の方にある一間に入つて寢た。女將はいつか二階に上つて寢てゐた。

『お定さんなんか、十年も此處につとめてゐるツて云ふことだが、よく勤まるものだ……。でも、あ

殘る花

一

お粂は花の間と月の間の掃除をすまして、風呂場に行つて、バケツに湯を一杯汲んで來て、それから廊下の雜巾がけに取りかゝつた。朝日は朗らかに明放した室にさし込んで桃の花の紅く咲いてゐるのが庭を越して見えてゐた。

昨夜遲く自動車が來て、一度寢たのを起されて、それからちよつとうとうとしたばかりなので、何だか體が疲れて頭がぼんやりしてゐた。

これからまた一日働かなければならないと思ふと、お粂はとても體が續かないやうな氣がした。お粂は廣い廊下を此方から其方へと中腰になつて雜巾を押して行つた。

硝子戸の向うには、ちよつとした中庭が見えて、椿の花の眞紅に咲いてゐる傍に、朝日に當つた雨戸のぴつしやり閉つてゐるのが見えた。其處には、自分の受持の女を連れた客が寢てゐる筈である。女は

殘る花

土手の花の咲く時分には、玉子の許に通つて來る客ももう三四人は出來てゐた。聘ばれて行くお茶屋の數も殖えて行つてゐた。電話が掛つて來ると、『誰だらう？　あの人かしら？　それともあの方かしら？　それとも鈴木さんかしら？』こんな風に思ひながら玉子は急いて支度をして出かけて行つた。

『よく寢ますね、』などとお爺さんは言つた。

お爺さんは瓢簞などを持つて梅見になどよく出かけて行つた。『お爺さんなどは、もう、さういふ氣が起るやうなことはありませんでせうね。』かう玉子が笑ひながら訊くと、『さうぢやな、五年前位まではそれでも女の子が欲しいやうな氣がしてゐたが……もう、今ぢやさういふ氣はなくなつたな。こればかりぢや、もう今では。』かう言つて、お爺さんは盃を口に當てる眞似をした。

『五年前ッて言ふと、六十五六ですね。その位まではそれでもさういふ氣がありますかね。』

お爺さんは笑ひながら、『それはある。』

『さうすると女の方は早いわねえ、女はもつと早くなくなりますね。』

『さうぢやな、女は早いな。』

『私の母なぞ、もう餘程さういふ氣がなくなつてゐるんですもの。』

『さうかな母さんはまだ若いだらうに……』かう言つて、『いくつぢや四十二、まだなくなるには早いな。わしの婆さんなんぞ、五十位までは嫉妬をやいて困つた。』

『お爺さんなんか、それでもたんと面白いことをして來たんでせうね。』

『面白いこともあつたな。』

白い長い髯をいぢりながら、お爺さんはかう言つて笑つた。

二階でひとり寢をする玉子は綿のふつくりした蒲團を新しく拵へて、裏には赤いメリンスなどをつけた。襟當にも、役者の似顏のくつきりと出てゐる裏絹などをつかつた。

時間過ぎに歸つて來て、頭も體も勞れ切つた身を其のまゝ其處に横たへるのが玉子には何よりの樂みであつた。寒い夜は、婆やが氣をきかせて行火などを拵へて置いて呉れた。行火を入れて置いて呉れたの？　難有いわ。』かう言つて玉子はをり〳〵婆さんに小遣をやつた。

五燭の薄暗い電燈の下で、玉子は尠くとも一時間位は、………………………。さういふ時には、いろ〳〵な男の顏が眼の前を通つて行つた。黑い髭だの、淺黑い男らしい顏だの、綺麗にわけた髮だのがうつとりと好い心持になつて體に蘇つて來た。疲れた體を更に疲れさせなければ何うしても眠られないやうな習慣に玉子は此頃はなつてゐた。しんとした夜の空氣の中に、玉子の顏は白く、浮彫のやうになつて見えてゐた。……やがて玉子は讀みかけた本を蒲團と蒲團の間に入れた。……輕い眩惑が快く頭を掠めて通つて行つた。それが何とも言はれない快感を玉子に與へた。……玉子は辛うじて體を半ば起して、手を延して、電燈のスヰッチを捻つた。闇には種々な色彩がチラ〳〵と搖いた。

玉子は寢がへりを打つてからぐつすり寢込んで行つた。

時には、朝早く歸つて來て、わざと雨戸を閉めたまゝにして置いて、薄暗い光線の中に午過まで體を浸らせてゐることなどもあつた。朝日の光を眩しさうにして玉子は見た。

………。とても、あの人の眞似は出來ないよ。あのことゝお金ばかしなんだから、あの人は？』

『さうですかねえ、あんなに痩せてゐて？』

『だつて、時間過ぎに歸つて行くとあの御亭主がちやんと待つてゐるんだつて言ふもの……。あそこにゐた抱妓だつて、だから、大抵は體が續かないつて出て來るぢやないか。』

その勝次といふ中姐さんに初めて逢つた時には、玉子は不思議なやうな氣がして、ぢつとその顏を見ずには居られなかつた。容包の好いのでは、この姐さんなどよりもぐつと立ちまさつた妓がいくらもあつた。それにも拘はらず多くのお客は常に勝次のあとを追つてゐた。新しく家などを建てゝ、抱妓の三人も置いて、貯金なども澤山に持つてゐるといふ噂であつた。ある役者との關係がちよつと新聞に出た時には、『あれは嘘だよ。そんなことがあるもんですか。あの人がお金を役者になんか、何うして……。あの人は誰だつて好いんだもの、男でさへあれや好いんだよ。』

『さういふもんかしら？』玉子は獨りで床の中で考へたりした。それにさういふ話は到る處にあつた。あんなお婆さんがといふやうな妓が若い綺麗な老舖の旦那から澤山金を引出して贅澤な暮しをしてゐるのもあれば、旦那に内所で自分の習つた常磐津の師匠を長火鉢の前に坐らせてゐる妓もあつた。玉子は自分の體の血の湧くやうなのを覺えた。隣の二階では、いつも來る旦那とは丸で違つた若いにやけた男の聲などがをり〳〵聞えてゐた。

淺田の友達に病院の醫者があつて種々と病氣の豫防法を教へて吳れてから、玉子はいつも藥を用意して持つて行つてゐた。『私はそれで不思議に病氣はしないのよ。人に由ると、すぐひどくなつて了ふ人がよくありますけれど、私だけは大丈夫よ。そんなに怖いもんではないわよ、』などと玉子は若い妓に話した。

不思議にも玉子の聘ばれて行くお座敷の客の裏の返らないやうなものはなかつた。玉子よりも容色もあり藝もあるやうな妓でも玉子よりは遙かに賣れないやうな妓が幾人もあつた。奧の大きな茶屋の女將は、『でも、不思議なもんだよ。私など長い間かういふ稼業をしてるが、いろ〳〵な妓があるよ。あの小粂さんなんか、容色はよし、藝はあるし、あの人の若い時には、それやお客が大騷ぎをしたもんだよ。隨分澤山なお金を積んだお客もあつたんだよ。でも、不思議なのには、あの人は、出來ない中はさういふ風にお客の方で大騷ぎをするけれど、出來て了ふと、ぱつたり來なくなつて了ふんだよ。矢張逢つて見なければわからないものと見えるね、』などと言つて面白さうに笑つて、『さうかと思ふと、勝次さんのやうな人もあるからね。』

その勝次といふ藝者の噂を玉子は到る處で聞いた。ある姐あんは言つた。『あの人の體は違ふんだよ。私なんか、あの人のお酌さん時分から知つてるけれど、…………………………。今ぢや、家にちやんとあゝいふ人がゐてさ、それからあの深川の旦那と兜町の旦那があつてさ、…………………

『え？』

『あれで、あの爺さん、…………………。何でも昔から好きでためて持つてゐたんですッてね。あれで、結構、御飯がたべて行かれるんだッて？　不思議なもんね。』

『高いはねえ、しかし姐さん。』

『高くつて丁度好いのよ、…………………。』

玉子は笑つて『でも、隨分、あるもんだわねえ。』

『それはあるわよ、常磐家の姐さんなんか三年見たッて言ふぢやないの？』

『まア、さう！』

前にゐた土地でも姐さんが持つてゐたり、………………………、さういふものがかういふ風に興味を引いて來ようとは思はなかつた。今まで觸らずに放つて置いた體が急に發達して來たやうな心持を玉子は經驗した。『さういふもんですかねえ。』玉子はかう感心したやうに言つて、『それで別れられなくなるんですかね。さうですかね。情死したりするのは、さういふもんですかね。』

『矢張面白いものなのよ。』

『さうね。』

玉子は考へるやうにして言つた。

ある意味を持つて玉子の體に反響を傳へて來た。三十五六にもなつて若い男と死ぬ生きるの戀をしてゐる妓の心も飲込めて來れば、喧嘩に喧嘩をしてもつひに離れることの出來ない妓の心持などもわかつて來た。『さうですかね。打たれるのが嬉しいんですかね、惚れた男なら――』さういふ人達の世界に較べると、玉子のこれまで通つて來た境は單純な葛藤の乏しいものであつた。多くの男とも唯無意識に簡單に平氣で別れて來てゐた。

好きで讀む小說などの中に書いてある世間と實際の眼で見る世間とは非常に相違があるものだなどとも玉子は思つた。汚ない眼腐れの爺さんが、三日おき位には玉子のゐる二階に小說本を持つてやつて來たが、…………………………玉子は此頃は借りて讀むやうになつてゐた。『高いね、もうすこし負けてお置きよ。』などと言つて、玉子は財布から金を出した。

『もつと綺麗なめづらしいのがないかね。』

『え。今度持つて來ます。』

爺さんは眼をショボ〳〵させて、厭に笑ひながら言つた。爺さんは、淺黃の風呂敷に本を包んで、腰を曲げて、大儀さうにして二階を下りて行つた。

その爺さんを玉子に紹介した妓は二十七八の中妓さんであつた。二人は逢ふと、よくこんな話をした。

『此頃も爺さんから借りて？』

のよ。一つ、習つたところをさらつて見ませうか。』こんなことを言つて、玉子は鈴木に戻橋の初めの方を彈いて聞かせた。

『私、本當にこれからみつしり稽古するつもりよ。もう何も考へないで、お稽古ばかりするわ。來月からは清元のお師匠さんに來て貰ふつもりよ。だつて、私だつて、他の妓のやうにお金をかけて稽古をすれば上手になりますとも……。矢張お金ね、お金があつて、好い師匠さへ取れば、ひとり手によくなつて行きますとも。貫目だつてついて來るわ……。それに、藝者は何うしても初めから藝者になるつもりでやつたんでなくつては駄目ね。容色があつて、招牌がよくつて、小さい頃から藝が仕込んであれば、藝者も面白いわ。』かう言つて玉子は、近所にゐる若い綺麗な立派な旦那のある妓達を頭に浮べてゐた。

二十三

一方にはさういふ風に藝に向つて勵みがついて行つたと共に、一方には此頃好色の世界に向つて、不思議にもその心と體とが目覺めて行つてゐるのを玉子は見た。今までの自分はある程度まではその世界には盲目であつた。色彩の濃い中に身を置きながらその濃い色彩に十分浸ることが出來ないやうな自分であつた。男の心もわからないやうな場合が多かつた。

それがいつとはなしに目覺めて來てゐた。曾て何の氣もなしに見たり聞いたりしてゐたことが、皆な

彈いてそれで濟んで了ふやうな座敷は滅多になかつた。『君は何が地だえ、』などと玉子はよくきかれた。得體のわからない三四人の客の座敷に自分一人ほつゝり聘ばれて行くやうな時には、玉子は一層困つた。かなり達者だと自分も信じてゐた三味線も、姐さん達のすぐれた音〻を聞いてからは、きまりがわるくつて、一人では彈けないやうな氣がした。歌澤の家元か何かの女の人が四五人お客と來て、知らん顏をして、『お座附などを默つて聞いてゐて、あとで『ちよつと、貸して頂戴』かう言つて三味線を取つて玉を轉ばすやうな聲で歌澤を唄はれた時には、玉子は穴にでも入りたくなつて顏を赧くした。『だつて家元さんですものね。旨いわけね。默つて知らん顏をしてるのよ。人がわるいねえ。』後で玉子はかう女中に話した。

新橋あたりの綺麗なお酌を五人も六人も伴れて自動車でやつて來る華族の若樣もあれば、舞臺で顏を知つてゐる名高い役者が、富豪の後家さん見たいな中年の女と一緒にやつて來ることなどもあつた。二人のお客の一人の方に女のゐない場合などに玉子はいつもよく聘ばれて行つた。玉子は厭な情ない樣な氣がした。

『私、みつしり稽古しようと思ふの？　藝がなくつちや矢張駄目ね。私、此間から歌澤と常磐津のお師匠さんのところに行つてるわ。常磐津のお師匠さんは、それは名高い人なんですッて。喜代次姐さんが知つてる人なもんですから、一週間に二度づつ來て吳れるのよ。箱屋の政どんの二階でお稽古をする

『さうかしら？』

鈴木はその夜ほど玉子から身の上話をきかされたことはなかつた。淺田の話もすれば、小林の話もした。きかれるまゝに、大杉の話をも玉子は詳しくしてきかせた。『それつきりよ。私にはそれつきり何にもないわ。……。貴方、愛想がつきて？』かう言つて玉子は艷な眼色をして鈴木の顏を見た。體を男に寄せるやうにした。

『さうね、私の惚れたのは矢張小林でせうね。あの時は眞劍でしたもの。』續いて玉子はこんな話を鈴木にした。

玉子は始めて眼を開いて自分の周圍を見渡すやうな人になつてゐた。自分よりも少し後れて濠端から此方へ住替へて來た妓は、男に夢中になつて、二三年貯めた貯金や着物をすつかりなくして了つてゐた。うつかりしてはゐられないやうな氣がした。玉子はお茶屋の女中から懇意にして貰はなければならない弱い稼業を思つた。つとめて元氣なはしやいだ顏をして玉子はお座敷に出て行つた。

姐さん達の來てゐる時は、三味線の方には心配はないが、その代り姐さん達の機嫌も取らなければならず、不見轉藝者のやうに押されて默つて坐つてゐるわけにも行かず、それに女將や女中にもあらを見附けられないやうにもしなければならないので、玉子は一方ならぬ氣苦勞をしなければならなかつた。お客の方に藝のある人が多いのもお座敷に出ての心配の一つであつた。濠端のやうな流行唄をガチャ〳〵

守をつかふし、仕方がないぢやないの？　男ッてそんなもんかしら？』
『さうぢやないけれども……急に百兩返せと言はれちやちよつと男だッて困るね。』
『だつて、家はお金はあるんですもの、困つてなんかゐやしないんですもの……。それに、それなら、さうと言つてよこせば好いぢやないの？　今、困るからとか何とか言つて來れば、それでもッて私は言ひはしないわ。一體、心持がいつとなく離れて行つて了つてゐたのね。……さういふ心持になり出したのは、矢張お通夜の時のことが始めね。私、これで、中々嫉妬ぶかい方ね。』
『それで何うしたえ？』
『返すわ。』
『本當に返すかえ？』
『返さなくつても、取るわよ。でも、氣の毒だッたわ。ぢき向うに課長さんなどのゐるところが少し見えてゐるんですもの……。人がイヤに此方を見るぢやないの？』
『惚れ合つた同士もさうなつちやお終ひだね。』
かう言つて、鈴木は大きく笑つたが、ちよつと考へるやうにして、『それはお通夜のことも動機になつてはゐるけれど、金を貸したッて言ふことがさうなつて行く最初だね……。金ッていふ奴はこれで中々厄介だからな。金を貸したのがいけなかつたんだね。』

そんな男が此女にはあつたのか。始めは鈴木は不思議さうな顔をしてじろ〳〵玉子の方を見てゐたが、いつか話につりこまれて行かずには居られなかつた。

『で、逢つたかえ？』

『逢つたわ……。餘程困つたでせうよ。留守なんぞ使ふと、却つて荒立てゝ人に知られると思つたんでせうよ。それでもすこしはぐづ〳〵してましたがね。たうとう給仕がやつて來て、應接間につれて行つたわよ。汚い應接間よ。卓が一つ眞中に置いてあるばかりよ。私、わざとけば〳〵した扮裝をして行つてやつたもんですからね、皆な人が見るんでせう。給仕などがイヤに笑つて行くんでせう？　可笑しかつたわ。』

『それですぐ來たかえ？』

『十分位すると來たわ。眞赤な顔をしてたわ。それやね、そんなにわるい人ぢやないんですからね……初めはもじ〳〵してましたつけ。困るなアこんな處に來て呉れてッて言ふのよ。』

『困つたらうよ、それは――。君も隨分えらいことをやるね。』

『愛想がつきて？』

『さういふ譯ぢやないけれども……。兎に角、困つたよ、男は、それは――』

『だッて、向うがわるいんだから仕方がないわ。手紙をやれば返事もよこさないし、電話をかけれや留

わかることが其時は見えないんですもの。』かう言つたある待合の女將の言葉なども思ひ當つて來た。

玉子は四五日してから、もう一度手紙を出した。それまでに、玉子は男の勤めてゐる役所に四五度も電話をかけたが、いつも男は不在だと言つて出て來なかつた。ある時などは、給仕に留守をつかはせてゐるのがはつきりとわかつてゐた。玉子の心は益々焦立つて來た。『あの金だけでも取らなければ――』といふ風に考へて來た。

その手紙の文句には、かなり突込んだ烈しいことが書いてあつた。『さういふお積なら、私にも考へがありますから、……私はいつ貴方の役所へ出かけて行くか知れませんから、』などゝ書いた。玉子の身にしては、さういふ風にしてゐる男の仕打が憎くつて堪らなかつた。寒い嵐の中を遠い待合に出かけて行つて、見ず知らずの女中にもお世辭をつかつて、心にもない愛嬌を顏に見せて、座蒲團もない疊の上に長い間厭なことを言はれて坐つてゐて、揚句の果には、厭なお客も厭といふことも出來ないやうな自分の身の上を男のつれない心持に比べて考へて見ない譯に行かなかつた。玉子は淋しい田圃の中を車で通りながら、『あの金だけは取らずには置かない、』などと思つて下唇を強く咬んだ。お座敷のかゝつて來ない夜は玉子はさびしくひとりで二階に寢た。

男の役所に押しかけて行つた話を玉子はある夜鈴木に話して聞かせた。『だつて、餘りひどいぢやありませんか! 私、餘り腹が立つたから、構ふことはない、押しかけて行つてやつたわ。』

玉子が此方に來てから男はそれでも二度ほど訪ねて來た。勘定を拂ふ金を一度は男が持つてゐたが、一度は女が拂ひをしなければならなかつた。拂つたあとで玉子はつまらなさうに溜息をついた。一時あんなに一生懸命になつて、世話になつてゐる旦那にまで噓をついて、無理に金の工面をして媾曳をしたのは、あれは自分ではないやうな氣がした。此頃では、あれほど好いと思つた色の白い顏や、濃い形の好い鬚や、意氣なぞろりとした姿や綺麗にわけた髮などが、不思議にもう玉子の心を惹かなくなつてゐた。『ひとに苦勞をさせて置いて、あんな不見轉なんかに夢中になつて、あなた、それでも男はすんで行くんですか。』かういふ心持すら玉子には起らなかつた。『貴方は隨分好い加減ね。』かう言つて、玉子は振返りもせずに其時はわかれて來た。

手紙の返事の來ないのが、段々玉子の心を焦立たせた。『春月の女將の言つた通りだ。』かう思ふと、一概に自分が今まで男の爲めに騙されてゐたといふ風に考へられて來た。『お前さへ來て吳れゝば、妻などいつでも離緣する。』かう男は口癖のやうに言つたが、それは皆な女を引張つて置いた男の手だ。それでないものが――それほど女を思つてゐるものが、手紙の返事一つよこさないわけはない。騙されてゐたんだ。私は騙されて引張られてゐたんだ。かう思ふと、假令厭ではあつたとは言へ、世話になつた旦那をあの男の爲めに無駄に棄てゝ了つたその身の愚かさなども振り返つてはつきりと考へられて來た。もつと取れるものを取らずに了つたやうにも思はれた。『矢張、浮氣をしてゐる中は駄目ですよ。後になつて

『もう寢ませうね。』

かう言つて、さつき女中が敷いて行つて呉れた搔卷の中に男を入れてから、『寒いから、行火を入れて置きませうね。』

やがてトン／＼階段を下りて行く女の足音が靜かにした。さびしく更けた夜は三味線の音も聞えて來なかつた。床に生けた梅の花が徒らに唯白く見えてゐた。

やがて女は厠から戻つて來た。長襦袢一つになつて、着物や帶を疊みながら、

『靜かで好いわね。』

『本當に靜かだ。』

『明日は緩りしてゐらしつても好いんでせう？　ね、緩くりなさいよ。何處かへ行きませうか、梅見にでも……』

二十二

『お氣の毒ですけれども、少し入用があつて困つて居りますから、此間のお金を何うか都合して戴けないでせうか。此次の日曜あたりまでに何うかして戴きたいものですが――』玉子はかう男の許に手紙を書いてやつた。しかし其返事は容易に來なかつた。二三日は徒らに過ぎた。

りで考へてゐた。「いつそ催促してやらうかしら、構ふことはない。」かう思ひながら、『貴方もう澤山ね？』などゝ言つて、餉臺の上の德利を振つて見た。

『私の繪まだあつて？』

『うむ、ある。』

『破いて棄てゝ了つたかと思つたわ。』

『でも、記念だからな。』

『私に頂戴な。』

鈴木は考へて、『貰つて何うするんだえ？』

『二階にかけて置くわ……。貴方が書いて下すつたんだと思つて、いつまでも〳〵大事にして取つて置くわ。』

『あれはやれないけど……其中、別に書いてやるよ。』

『あれを頂戴な……記念になるから。私、本當に、今日來て下すつたのは嬉しいのよ。本當なら、私から手紙など上げられた義理ではないのね。その代り、ね、貴方今度は屹度あんなことはしないわ。』眼を潤ませて、『ぢや、あれでなくつて好いから、近い中に一枚書いて頂戴ね。大事にして取つて置くわ。』

靜かに夜は更けて行つた。

軒燈がほんのりついて、奧には茅葺屋根の二階屋がおぼろげに闇の中に見えてゐた。

勝手元の隣にあるやうな小さな風呂場から二人がサッパリして上つて來た時には、女中の拵へて行つた行火がもう可也暖かくなつてゐた。『何時まで寒いんでせうね。』かう言つて玉子は鈴木の手を握つた。

鈴木の眼には、濠端の賑かな空氣と違つて、淋しい心細い色街が映つた。かういふところに住替へて來た女が可哀相のやうにも思はれた。『だけど、此處は好いのよ。彼方のやうなことはないわ。體は樂ですし、御祝儀だッて、彼方とは餘程好う御座んすからね。その代り貰ひはきゝませんけれど。』かう言つて、玉子は種々その土地のことを話してきかせた。奧にある大きなお茶屋の女將が玉子を最負にして、お弘めの日からがけて呉れた話などもした。

玉子には遊び馴れたお客のやうにわるくすれてゐない鈴木の態度が何處となく氣に入つてゐた。金を拵べて貰ふ時ばかり喜んだ嬉しさうな顏を見せながら、此方で困つてゐる時には、何うして呉れることも出來ないやうな男とは何處か違つてゐるやうに玉子には思はれた。昨日も春月の女將がやつて來て、『お前さん、それは取つて了ふ方が好いよ。ぐづ〳〵してゐると、取れなくなつて了ふよ。此頃ぢや大和の常子ッて言ふのに大騷ぎをしてゐるつて言ふぢやないか。』などゝ言つてゐたのも思ひ出された。何うせ自分のものにすることが出來ないといふやうになつてから、男はいくらか疎々しくするやうな素振を見せて來てゐた。『本當に惚れたもんなら、そんなことはない筈だ。』こんなことを玉子はさつきも二階で獨

『でも、今日は歸らう。』

『貴方は隨分强情ね。家にだつて誰も待つてる人なんかないぢやありませんか？』言ひかけて、『わかつた、わかつた。千鳥さんの許へ行くのねえ？　なら、歸して上げるわ。さうと、ちやんと言へば歸して上げるわ。』

鈴木は唯にこ〳〵と笑つてゐた。

二人が其處を出たのは、もう彼是九時近かつた。『向うに行くと、好いお茶屋があるんですけれども、今日は近い處に行きませうね。すぐよ、土堤のすぐ下のところよ。お上さんは中で巴屋の女中をしてゐた人で、如才のない面白いお上さんよ。』こんなことを玉子は言ひながら、縺れるやうにして二人は歩いて行つた。春先の夜は寒くさびしかつた。路の角には巡査がぽつねんとして立つてゐた。少し行くと、大きな川が微白く闇の中に見えて、裸火を船尾の處で焚いてゐる舟などが通つて行つてゐた。

『圍ひ者なんかになるもんぢやないのね。もう私、今度は懲々した。』玉子はかう言つて、其話をぽつぽつ話しながら歩いた。

大きな眼を闇にかゞやかして自動車が通つて行く時には、二人はそれを路の傍に避けるやうにした。土堤を下りてからは、女は先に立つて行つた。

『其處よ、其家よ。』

川から來る夕日は、椎の葉を透して、明るく座敷にさし込んで來てゐた。溶々とした川の面には、光線のキラ〱と眩ゆく碎けた中を通つて行く舟が黑く見えてゐた。

『この室は明るすぎるわねえ。』

などゝ言つて、玉子は夕日を背にして坐つたりした。

灯のつく時分には、鈴木の顏には、もうかなり醉が上つて來てゐた。體を少し斜にして、玉子が三味線を彈いてゐる艶な姿を、鈴木は唯にこ〱して嬉しさうに見てゐた。鈴木は唄はずに默つてゐるやうな人であつた。

『貴方、何處かへ行くわね？』

『イヤ、僕は今日は歸る。』

『何故？』

『でも、少し都合がわるいから……。また來るよ、近い中に。君が此處にゐることさへわかれば大丈夫だから。又、すぐ來るよ。』

『でも、今夜は歸さないわ。折角人が久し振りでお目にかゝれて嬉しいと思つてゐるのに……。貴方の雪江が來てるのに……』玉子はちよつと笑つて見せて、『好いのよ。私が勘定するから好いのよ。私、少しばかり持つてるから大丈夫よ。』

『何うして知つてゐるんだえ？』

『それや知つてるわ、貴方のことはもつといろんなことを知つてるわ。話してきかせませうか。私がゐなくなつてから、あそこのお上が澤山貴方に藝者を取持つたでせう。貴方は醉つて騷いだでせう。雪江さんがゐなくちや駄目だつて言つたでせう。』かう言つて玉子は面白さうに笑つた。

鈴木は笑つて、

『誰に訊いたんだえ？』

『貴方のことは皆なよく知つてるわ。貴方のことは始終考へてゐたんですもの。』

『本當に誰が話したんだえ。あそこの女將が話したのかえ？』

『私、引いてから、あそこの家になど行つたことはありませんもの。』

『不思議だねえ。』

鈴木は考へるやうな顏色をした。玉子はつゞけて、

『貴方、千鳥さんなんか駄目よ。あの人はそれは浮氣なんですから……。それに、矢口ッていふ吳服屋の番頭さんがあるのよ。あんな人に關係しては駄目よ。それに體もわるいわ、屹度……』

『まァ好いよ。』

など丶鈴木は言つてゐた。

『僕は隨分あつちこつちさがしたよ。向う岸ときり手紙には書いてないんだらう。土地不案内だから、さういふ藝者屋があるかと思つて、あつちこつちさがしたよ。巡査に訊いたり何かして、それは可笑かつた。「ありますよ」なんて言つて巡査は笑つてゐるんだもの。此處に來る前に、君の家の前を通つて來たんだよ。えらい處にゐるんだね。』

『さう、通つたの家の前を？　寄つて下されば好いのに、……お爺さんきり、家には誰もゐないのよ。』

『さうも思つたけれどね、始めてだしね。變だと思つたからね。ゐたのかえ？』

『え、ゐたわ。』

玉子は何處となく嬉しさうな態度をしてゐた。酌をしながら、『あの時、田舍に書きに行つた繪は出來て？』

『うむ、出來たけれども、あの時は繪どころぢやなかつたよ。折角、君をよろこばせようと思つて、お土産なんか買つて來たんだぜ……ひどい眼に逢はせたもんだよ、あの時は？』

『腹が立つて？』

『腹が立つより、君のゐなくなつたことが惜しかつたねえ。』

『でも、千鳥さんがゐるぢやないの？』

笑ひながらかう玉子が言ふと、鈴木は、

『あ、鈴木さん！』

思はず聲を立てゝ、廣い座敷にぽつねんと坐つてゐる鈴木の方へなつかしさうにして入つて行つた。

『よく來て下すつたわねえ……私は……私は、貴方はもう來て下さらないかと思つた。』玉子はかう續けて言つて、長い裾を引いて、鈴木の傍に坐つて『屹度、貴方だと思つたのよ。虫が知らせたのよ……本當によく來て下すつたわねえ。』

『何時出たんだえ？』

『今月からよ。』

『矢張旨いこともなかつたかえ。』

相變らず、髮の毛を長く、粗末な服裝をして、卷煙草をぷかく／＼ふかしながら、じろく／＼鈴木は玉子の方を見てゐた。無邪氣な笑聲が玉子には嬉しかつた。

『去年は隨分ひどい眼に逢はせたね。』

やがてかう言はれた。玉子は流石に顔を赧くして、『だッて、あの時は急だつたんですもの。でも、あれは私がわるいわ。あれだけは御免なさい。私、後悔してゐたんですから。此間、手紙を上げる時にも、貴方は怒つてゐらつしやりやしないかと思つたんです。けれどもね……、貴方はそんな方ぢやないと思つて思ひかへして上げたのよ。本當によく來て下すつたわ。嬉しいわ。』

の上に蹲りながら、長い間かゝつて一通の手紙を書いた。『まだ、あそこにゐるか何うだかわからないけども出して見よう……。』かう思ひながら、玉子は巻いた手紙を封筒に入れて、鈴木の番地と名前とを書いた。鈴木のやさしいさつぱりした氣分が今は玉子の胸に温かく蘇つて來てゐた。『明日は早く出して貰はう。』かう思つて玉子は寢た。

あくる日の午頃には、玉子の姿は、土堤の上の自働電話の中に長い間見えてゐた。其處からは、河の波を截つて行く小蒸汽や、夫婦連で櫓を押してゐる傳馬などが見えてゐた。『私、誰れだかわかつて？私、今度此方から出たんですがね。竹本の小妻つて言つて出たんですがね。お近い中に來て下さるわね。さう……それぢや何うぞね。』かういふ電話を何遍となく繰返してあちこちに玉子はかけた。『あなた本局の五千十番、藤木さんは出勤してゐらつしやるでせうか、』などゝいふ聲も聞えた。遠藤と一緒に遊びに來た時分の醫師の處へも玉子は電話をかけた。

二三日經つてから、河沿ひの大きな料理屋から電話がかゝつて來た。それは出てから始めて行く家で、誰が掛けて呉れたんだらうなどゝ思ひながら玉子は出懸けて行つた。帳場で女將に挨拶して、女中にそれとなく聞いて見ると、お名指で、お客一人だといふ。階段を上つて行く時、『鈴木さんぢやないかしら？』とふと思つた玉子の胸は喜悅にそゝられるやうな氣がした。

階段を上りきる處の障子の硝子からそつと覗いて見た玉子は、

ひしますから、』など〻言つて歸つて行つた。お弘めの日は、誰も來て世話をして呉れるものはなかつた。來る筈の母親も、二三日此方持病の眼が急に惡くなつたと言つて來なかつた。玉子は婆さんを相手にいろ〳〵支度をしなければならなかつた。

お茶屋は離れ〴〵にあちこちに散らばつてゐた。『遠い河の緣にある大きな料理店までは一里近くもあつた。午前に近所を步いて廻つて、午から玉子は車で遠くの方へ出かけた。田圃の中を通つて行くやうなところもあれば、土堤をずつと下りて行くやうなところもあつた。ある茶屋では、如才のない女將が、じろ〳〵玉子の顏を見て、『竹次さんのあとに來たのかえ？　また、かけて上げますからね、』など〻深切に言つて呉れた。さびしい田圃の向うに、大きな川が流れて、『ペンキ塗の小蒸汽が波を截つて通つて行くのがあたりに浮き出すやうに見えてゐた。

その夜は、竹次の旦那といふ人がお座敷をつけて呉れた他に三口ほど續いて聘ばれて行つた。『お弘めの日に、それだけ出來れば結構ですよ。今はひまなんですからね。その代り花でも咲くと賑かになりますよ。』かう婆さんは慰め顏に言つて呉れた。

玉子は時間過ぎて二階に行つて寢たが、何とも言はれないやうな淋しい悲しい思ひにうたれて、容易に眠ることが出來なかつた。蛙の聲が裏の池から靜かに聞えて來た。

一時間ほどしてから、玉子は寢卷のま〻で、下に硯箱と卷紙とを取りに下りて言つたが、やがて蒲團

ゐる近所の不仕合せな少年は、丁度其處にやつて來てゐたが、『また、姉さん出るんですか。僕が……僕がもう少し大きくなつてゐれば、姉さんなんか出すんぢやないけれど、』などゝ言つて可愛い眼に涙を湛へた。皆な誘はれて泣いたりした。『母さん、浮氣なんかもうこれからしませんよ。しつかりしなくつては、身が立つて行かないんですもの。私、今度こそ眞面目に、眞劍になつて働くわ。男なんかあてにしては駄目ですよ、』玉子は下唇を咬みながら言つた。

その家は細い小路の中ほどにあつて、隣り近所からは三味線の音が賑かに聞えて來た。突當りの湯屋からは毛すぢを長く鬢にさして、ほんのりした顏をして、だらしない風で若い藝者が出て來たりなどした。

『何つて、まァ、さびしいところだらう。』初めて其處に行つた玉子は、さう思はずには居られなかつた。そこは春月の女將のお父さんと召使ひの婆さんと二人きりの暮しで、玉子の寢る二階には、壞れかけた本箱があるばかりで、箪笥一つ置いてなかつた。裏にはさびしい廣場が見渡されて、溝のやうに黑く濁つた池に、細い寒い雨が靜かに降つてゐた。

下に置いてある箪笥を借りて、玉子は持つて來た着物や帶などを入れた。『ぢや、この下の二つを雪ちやんの抽斗にして置きますからね。』一緒に來て吳れた春月の女將はかう言つて何彼と世話をして吳れて、『本當に年寄一人ですからね、何ぞと言つては、雪ちやんのお世話になるんでせうから、よろしくお願

白いなど〻も玉子は思つた。『だッて、遊んでるたッて、本當に仕方がないものねえ。もう一度出て見ようかねえ、母さん。その代り、今度出れやもう藝者を一生する氣よ。引かされたり何かするのはもう厭よ。それもねえ、しつかりした、此方でも一生世話にならうといふ人なら別だけれど。』かう玉子は言つて考へて、『お茶屋は大きいのが五六軒に、小さいのが七八軒、待合はさうたんとないんですッて。東京からお客がつれ込みか何かで出かけて行くやうなところですからね。お茶屋が大抵は旅館をかねてゐるんですッて。樂だッて、春月のお上さん話してるてよ。それはね、藝は少しは要るんださうだけれど、本當に、藝に身を入れようとするには好い處だッて。中から帮間だの姐さんだのが始終來る處なんですからね……さうね、お茶屋に馴染になるまでは大變だけれども……それはあそこの方が皆な知つてゐるから樂だけども、體は彼處では樂ッて言ふ譯には行かないからね。』

母親は玉子の身の上を哀れに思はない譯には行かなかつた。世が世ならなど〻言つて溜息を吐いた。『これも皆な父さんが甲斐性がないからだよ。神戸に行つた時でも、北海道に行つた時でも、もう少し骨を折つて呉れさへすれば、お前に、こんなに苦勞をかけないでも好かつたんだけれど。』かう言つて考へて、『でもね、遊んでゐても仕方がないねえ。』母親は玉子のほつそりした體を傷ましさうにして見た。

それから一月ほどしてから、愈出ることに話がきまつて、その支度に取りか〻つたが、今度ほど悲しい辛い心持を親子は經驗したことがなかつた。行く〳〵妹に娶はしても好いと思つて、目をかけてやつて

そもう一生其處から出て來ない覺悟でなければならない。かう思ふと、玉子は、堪らなく淋しく賴りないやうな悲しい心持がした。大勢の客の顏なども眼の前を通つて行つた。大晦日近い頃には、男が來て、一緒に注連飾りの賑かな明るい町を散步したりなどした。

二月ほどは唯ぶら〳〵と遊んでゐたが、矢張、褄を取るより他に仕方がないといふことが段々身に迫つて知れて來た。玉子は此場合、男が何うすることも出來ないでゐるのを情ないとも悲しいとも思つた。

『矢張、男なんて賴りにならないものね。』かう玉子は母親に言つた。

ある日、濠端のある待合に遊びに出かけて行つた玉子は、其處で川に近いある土地に出て見る氣はないかと女將から勸められた。其處は體が樂な上に、客種もよく、祝儀も多く、流行りさへすれば、此土地のやうなことは決してない。此方から出かけて行つた人でも、其處では皆な好い旦那が出來たり、自前になつたりして樂に暮してゐる。『そりや好いところださうですよ。宅でも父の內職仕事にやらして見てゐるんですがね、餘程樂なところらしいよ、出て見る氣はないかえ、雪ちやん。丁度今前にゐた妓が自前になつて、誰もゐなくつて、一人欲しいと思つてゐたところだがね。雪ちやんが行つて吳れゝば、これ程好いことはないんだけれど……わけで出て見る氣はないかね。雪ちやんなんかやめて了ふのは惜しいよ。今、稼ぎ盛りぢやないか。』かう勸められた玉子は、いくらか心が動いて歸つて來た。今までの土地には、いくら何でも、もうきまりがわるくつて出られないが、さういふところなら出て見るのも面

に向つては『お前、それは駄目だよ。そんな眞似はしない方が好いよ。お前はまだ年が行かないから、唯さう考へるかも知れないけれども、子供のある處へ行つて、お前がどうしてぢつとして長く居られるもんですか。それに、さういふ罪なことはしない方が好いよ。』

『それもさうね。』

かう言つた玉子は、淋しいやうな悲しいやうな思ひに包まれずには居られなかつた。それはいくら此方で眞心をつくしても、向うでそれを眞劍に受けて呉れないといふやうな悲哀であつた。たとへ向うで眞劍に受けて呉れたにしても、それを眞劍に受けて呉れたと信ずることの出來ないやうな悲哀であつた。縋りたいにも、本當に縋る心がいつか玉子にはなくなつて了つてゐた。

小林に別れた時分、ある大きな老舗から嫁に望まれたことなどを玉子はをり〳〵思ひ出した。其時、嫁げば嫁けないことはなかつた。さういふ稼業をしたことをも先方ではかなりよく知つてゐてそして望んで來てゐたのであつた。しかし其時は何うしても人の細君にならうとするやうな氣はなかつた。

『僕の許に來られないなら、此際すつかり足を洗つて、丸髷に結つて了ふ方が好いよ。いつまであゝいふ稼業をしてゐたッて、何うせ好いことはありやしないんだから。』男は玉子にかう言つてきかせた。

玉子は種々に思ひ惑つて日を送つた。自由な、のんきな年の暮ではあつたけれど、自分の一生のある境目に立つてゐるやうな氣は絶えず玉子の胸にあつた。今度また褄を取るやうなことがあれば、それこ

二十一

蔭に男があるといふことが薄々旦那の耳に入つて、唯でさへ難かしい顏が一層難かしい顏になつたが、いくらか自暴氣味で、平氣で玉子が家を明けるやうになつた頃には、旦那の足はもう餘程遠退いて行つてゐた。大切な道具類を店の番頭が取りに來たりなどした。

その年の暮近い頃には、玉子はもう其處から父母の家へと戻つて來てゐた。今度のことは、此方から打壞したやうな形になつてゐるので、買つて貰つたものだけはそのまゝ貰ふことが出來たが、別れの金はいくらも手にすることが出來なかつた。『此方にもさういふ弱味があるんですから、まア、その位で我慢して置く方が好いでせう。』仲に入つた人はかう言つて歸つて行つた。

不思議にも男の方では、その頃から熱い心を見せて來てゐた。度々父母の家に玉子を訪ねて來た。『母さん本當に、お咲を下さいますか。下さるなら、私にも少し考へることがありますから。』かう眞面目に男が母親に向つて言つた時には、母親の同情は却つて男の細君の方に行つてゐた。『さう言つて下さるのは、本當に有難いですけども……貴方だッて、奥さんやお子さんの事を少し考へて上げなければいけません。さういふことはよく世間にはあることですから、奥さんを出して、自分の好きな女を跡に直して、二年と經たない中にまたその女を出したといふ話はよくあることですから、』などゝ母親は言つた。玉子

ア、あの妓位元氣な妓はないよ。利口で、如才がなくつて、それでゐて貯金などをしてゐるんだとさ。』かうある女將が評判してゐたことなどを玉子は思ひ出した。何うして好いかわからないやうな自分の生活であつた。時には弟や妹のことなど考へることなどもあつた。本屋に行つた弟は段々主人に用ひられるやうになつて行つてはゐるが、地が弱い體で、それが父母の面倒をみるやうになるのはまだ容易なことではなかつた。機械商の工場に行つてゐる弟だッて矢張さうだ。妹は妹で、末子のあまやかしで育つて、何處かのお孃さんでゞもあるやうに、來年は女學校に入れてやらうなどゝ父母は言つてゐた。『私ばかりは誰れも考へて呉れる人がない。』かう思ふと玉子はいつも堪らなく悲しくなつた。

ふと鈴木のことなどが思ひだされて來たりした。其時には、『俺の雪江をつれて來い、』と言つた言葉が暗い闇の中に、字になつてはつきりと見えて來た。何故あの時、田舍から歸つて來るまで待つてゐなかつたらう。待つてゐて、詳しく話して、お禮を言つて別れて來なかつたらう。こんなことを思ひながら、玉子は最後に會つた一間の光景をくりかへした。その時、引かされることはもうちやんときまつてわかつてゐた。それを、知らん顏をして、そんなことは夢にもないやうな無邪氣な顏をして、『歸つたら、すぐ入らつしやい、』などゝ言つて玉子は送つて行つた。玉子は坂の上の明るい畫室の隅に立てかけて置いてある自分の肖像畫などを思ひ浮べた。

『さういふ譯ぢやないんだよ。さうと知つてゐれや、寢たりなんぞしなかつたけれど……』

『しかし、私は考へたわ。何うせ、貴方には奥さんがあるんだし、いくら、貴方がやさしいことを言つて下すつたッて、私なんか何うせ蔭のもんですからね……本當に、私は染々今度は考へたわ。』

『僕がわるかつたんだから、あやまるから、そのことはもう言はずに置いてお呉れ……』

玉子は默つて凝と考へ込んでゐた。『本當に妻になつて呉れる……本當かえ？』など〵男は前にも度々言つたが、さういふことは到底出來ないことだといふことを玉子は今更のやうに思ひ知つた。『矢張、自分は一人だ、ひとりでさびしく送つて行かなければならない身だ。』かういふ風に考へると、つく〴〵末のことが思ひ廻らされた。何うなつて行く身だか知れないやうにすら思はれた。

旦那と脊中合せに寢てゐる時などは、殊にさういふことが種々身に迫つて來て、嵐のやうな高鼾を聞きながら、玉子はそつと長襦袢の袖で涙を拭いた。つかまへどころのないやうな自分の生活がたまらなく悲しかつた。世間では、玉子位の年恰好になれば、皆柔かな家庭の束縛の中に身を入れて、縋るべき何物をか持つてゐないものはなかつた。自分の學校友達で、むづかしい姑のある家に嫁づいて、年中酷められ通して泣いて暮してゐる人などもあつたが、さういふ生活でも、自分の今の生活よりは增しだと玉子は思つた。玉子は幼くて田舍に行つた自分のことなどを繰返して、涙は枕の紙を濕らした。

さうかと思ふと、輕い氣分になつて、はしやいで騷ぎ廻つてゐる自分が其處にも此處にも見えた。『ま

『それは斷つて來たには來たけれども……』

『もう一時だよ。歸れやしませんよ。』男はかう言つて、『此方に來て鮨でもお上がんなさい。』

三時過ぎになつて、起きてゐたものも多くは別室に寢に行つた時分男は言つた。『僕も御免蒙つて、ちよつと寢かして貰ふから。明日もあるからな。雪ちやんは何うです　』

『私は――』と言つて玉子は起きてゐるといふ顏をして見せた。

『お寢よ、お前、本當に明日があるよ。昨夜も寢なかつたんだらう。私が今夜は代つて上げるから、』かう姉は傍から言つた。

男が向うの一間に行つてからの氣勢は絶えず玉子の耳についてゐた。細君は續いて入つて行つたが、容易に其處から出て來ようとはしなかつた。靜かな睦しさうな話聲が長い間聞えてゐた。しかし後にはそれもぱつたりやんで了つた。細君も其處に寢て了つたらしかつた。棺の前の線香の灰は音もなく落ちて、蠟燭がチラチラした。覺めたサッとした玉子の顏は、夜明近い一間の中に塑像のやうに白くくつきりと見えてゐた。

其次ぎに逢つた時、男は種々に言つて玉子に詫びた。『だッて、あの時は仕方がなかつたんだから……それに、僕はそんな風には思つてゐなかつたんだからね。』

『男ッて薄情ね。』

た。細君は綺麗におつくりをして、指環などをはめて、來る人達にしとやかに挨拶してゐた。『貴方、貴方、ちよいと、』などゝ呼ぶ聲が艶に聞えた。

この大勢の客の中で、誰も知るまいが、自分が一番陰で力になつてやつてゐるといふ玉子の最初の得意は、次第に男と細君との睦ましい態度に崩されて行つた。何となく此大勢の客が――殊に女客達が自分を見て笑つてゐる樣にすら思はれて來た。『あ、左樣ですか、御深切にまァ、』などゝ丁寧に不思議さうに挨拶されると、玉子は益々堅くならずには居られなかつた。わざと避けるやうにしてその傍を通つて行く細君の冷かな態度も、痛く玉子の心に觸れた。玉子は神經の昂つたやうな顔をして、隅の方に小さくなつて坐つてゐた。

忙しいとは言ひながら、その傍に男の遣つて來ないのも玉子には口惜しかつた。やつと來て其處に坐つてもさも落附かないといふやうな風ですぐ向うに行つて了つた。

夜遲く鮨だの酒だのが出て、客が賑かに話し始めた頃、緣側で、男と摩れ違つた玉子は、小聲で、

『私、歸りませうかしら？』

『何うして？』

『でも、家の方も少しは心配になるわ。これでも……』

『でも斷つて來たんだらう？』

目だといふ風に考へてゐた。『お寶さへあれば何んな好きなことでも出來るわねえ、』など〻言つてゐた。
いつも逢ふ處では、其日は男は先に行つて待つてゐた。『何う？　お父さん　』かう言つて、玉子はさも氣前が好さ〻うに、帶の間の財布から四つに折つた札を出して、『私、持つてるから、融通して置くわ。つかつて下さいよ……氣の毒なことなんかちつともないわ……貴方のお父さんの役に立つんですもの……返すのなんかいつだッて好いわ、』玉子の顏には得意の色が上つてゐた。
男の父親の通夜に出かけて行つた時には、玉子は不愉快な思ひをして歸つて來た。『私、本當に行つても好いかしら？　をかしくないかしら？』かう度々念を押したが、『さうして吳れ〻ば死んだ佛が喜ぶよ。』かう男は言ふし、男の細君も二人の今の關係には疑を挾んでゐないと言ふので、それで玉子は出かける氣になつた。秘密の好奇心にも二人は誘はれてゐた。其處には大勢人が集まつてゐた。『佛さまには一度お目にか〻つたきりですけれども、惜しいことを致しました、』など〻玉子は細君や男の姉などに挨拶した。
『まあ、何うぞ此方へ？』など〻姉は座敷の方に玉子を伴れて行つた。
棺の前に行つて線香を上げたり、白い手を合せて長い間祈念したりする姿は、一座の中に際立つて見えてゐた。玉子は落附いて、つ〻ましやかな口の利き方をして坐つてゐたが、その眼は絕えず細君と男の跡を追つてゐた。惚れ合つて一緒になつたといふだけに、何處か睦ましいところのあるのを玉子は見

ら淺草のわるい處に出かけて行つて困る話などをも知つてゐた。人の知らない蔭の方に身を置いて、互に思ひもかけない人の身の上を深く知つてゐるのを、男も女も不思議なやうな心持で見てゐた。玉子の母親は玉子の引かされる時から、さういふ男の蔭にあるのを知つて許して置いたのではあるが――四五度は男も玉子の父親の家を訪ねて行つたことがあるのではあるが、それでも時々心配して、意見がましいことを母親が言ふことがあると、『大丈夫よ、もし大杉に知れたら知れたで好いわ。もう、少しは知れてるかも知れないわ……でも、好いぢやないの？　母さんなんか、そんなことを心配しないでも、月々の手當さへ私が上げるやうにしてゐるさへすれや好いぢやないの？　何も言はないで此頃は何うやら彼うやら御飯が食べて行かれるぢやありませんか。』かういつも玉子に言はれるので、後には母親も口を噤んで了はなければならなかつた。何も彼も玉子のお蔭と言へばお蔭であつた。小林とわかれた時に貰つた金も、今でもちやんと貯金に殘つてゐる身分になつてゐた。

男の父親が愈いけないといふ二三日前に、玉子は自分の父親が同僚の連帶責任の證文の判を捺して必死に困つてゐるからと言つて、旦那から金を無理に五十圓工面して貰つた。そして、其日の午後に、銀行に行つて、自分の貯金から五十圓出して、それを小さな財布に入れて、帶の間に挾んで其處から出て來た。玉子の貯金帳にはかなりの金額が記されてあつた。玉子は一生懸命になつて稼いだ時のことなどを考へながら歩いた。大勢の客から二圓三圓と貰つた金をせつせと貯めて置いた頃には、何でも金でなければ駄

『あれがさうよ、大杉よ。』

『え！』

男の眼にはフロックコオトを着て山高帽をかぶつた車上の老紳士の後姿が見えてゐた。

死の床に臥つてゐる男の父親の經過を玉子は常に詳しく聞いて知つてゐた。とてもあと十日とは持つまいといふ醫師の宣告を受けてからでも、もうかれ是一月以上にもなつてゐた。此頃では子供の世話と看病とに追はれて細君が朝の化粧をする暇もないといふことや、田舍からその父親の姪に當る女が頼まれてやつて來た話や、財産の後見を姉の嫁いでゐる義兄に頼んだことや、さういふことを玉子はかなり詳しく知つてゐた。男の姉は濠端の町の金銀寶石商に嫁いでゐて、玉子はその店から月賦で金の指環や金の簪などを買つた。

『さう？　困るわねえ、もうすつかり立てなくなつたの？』などゝ玉子は言つた。

思ひもかけない玉子から父親の容體などを訊かれた男の姉は、『さうかえ？　お前が知つてる藝者だつたのかえ？　今は何處にゐるの？　園はれてゐるのかえ？　うちにも來て、父さんも知つてゐるんだツて？　さうとは知らないから不思議だと思つたよ。』かう姉は弟に言つた。

男はまた男で、玉子の家の細い事情や、大杉の店の話などによく熟してゐた。大杉の銀座の店に、つい近頃つかひ込みをした番頭があつて、それが訴へられた話だの、中學に通つてゐる大杉の息子が今か

母親の作れた女の兒の綺麗な友禪などに、午後の秋の日影は晴れやかにさしわたつて、黄くなつた葉は風もないのにヒラ〳〵と靜かに舞つて散つてゐる。うね〳〵曲つて上つて行つた丘の上からは、樹の間を隔て、海が明るく遠く眺められた。其處では赤い襷をかけた若い女中が二人の方へ茶を運んで來ながら、二人の姿を見ぬやうにしてじろ〳〵と見て行つた。色の白いすつきりとした男の姿が玉子には此上なく嬉しかつた。

やがて暗い樹の間の路から池のある方へと出て行つた二人は、其處で、二錢銅貨を小さな箱の中に入れて麩を池の中に投げてやつた。大きな緋鯉は彼方からも此方からも集まつて來た。麩は浮いたり沈んだりした。

池の向うには、廣い綺麗な通りがあつて、自動車や馬車が絶えず通つてゐた。日は麗かに樹の間の紅葉を照してゐた。

池の方からその通りの方へ出て行かうとした時、玉子は急に顏を背けて向うを向いて了つた。其處には一臺の車が通つてゐた。男は知らずに歩いて行つたが、その車をすこしやり過してから傍に寄つて來た玉子は、小聲で、

『御覧なさいよ其處を。』

『え？』

つて來たんでせう。私、どぎまぎして何うしようかしらと思つたわ。さうね、それでも一時間位ゐたわ。襟なんかお土産に持つて來て吳れてよ。變なもんね。私、あの時ばかりはつく〴〵厭になつて了つた。』

　こんな話を玉子は長々とした。男は二階からおりて、緣側から庭石傳ひに栽込みの中に入つて行つて見たりした。『圍ひ者の暮しツて、かういふもんかね。のんきなもんだね。一日何をしてゐるんだえ？』こんなことを言つて男が笑ふと、『だから、始終、貴方のことばかり考へてゐるツて言つてるぢやありませんか。』などと玉子は笑つた。一時間ほど男は其處にゐた。

　下女のゐる前で、

『そこら歩いて見ませうか。』

『さうだね。都合がわるくないかえ？』

『ちよつとなら好いでせう。』

『ぢや、行つて見ようか。』

　こんなことを言つて、二人は出かける支度をした。下女は別に疑はしいといふやうな樣子をも見せなかつた。『ぢや行つていらつしやいまし。』

と言つて玄關まで送つて出て來た。

公園前で電車を下りて、菊の花壇などのある處を二人は並んで靜かに歩いた。娘達の派手な蝙蝠傘や、

ッて。』こんなことを言つてゐる玉子の聲が其處から聞えた。

やがて此方へやつて來た玉子は思はず溜息が出た。緩くり寢ようと思つて來たのも駄目だつた。これから一夜過さなければならない二階の一間が、すぐ玉子の眼の前に浮んで見えた。玉子は疊んだ着物の上に帶やら赤い帶揚やらを載せながら、また深い〱溜息をついた。

二十

座敷の違ひ棚の上に置いてある幅物をひろげて見せたり、此間買つた簞笥の鍵を明けて新たに作つた派手な長襦袢を見せたり、旦那が好きで本宅から持つて來た貴重な花瓶や茶器を見せたりなどしてから、玉子は男を二階の方に伴れて行つた。其處には玉章の秋景山水の幅物がかけてあつて、伊萬里燒の花瓶に大輪の菊が見事に生けてあつた。『私なんかとても出來ないわ。皆なあの人が來て生けて行くんですよ。大變よ、花をいぢり始めると、半日位ずうつと坐つてゐるんですからね。』

ふと思ひ出したやうに、

『さう言へば、此間、本宅のお上さんが來たわよ。私を圍つて置くッて言ふことが段々知れたんだわねえ。是非行つて見るッて、誰がとめてもきかないんですッて。それは勝氣な人よ。年はうちの母さん位だわ。前から來るかも知れないとは聞いてゐたけれど、其時は吃驚してよ。突然に下女を一人つれて遣

『でも今日は歸らう。家の父の方も心配だから。』

『さう。』

いかにも殘念さうに玉子は言つた。沈んだ銀色をした野の靄の中に、白い烟を立てゝ通つて行く汽車はまるで繪か何ぞのやうに見えた。月の光は流るゝやうにあたりを照らした。

二人が其處を出たのは、もう彼是十時に近かつた。頼んで置いた車はずつと離れた門の處に置いてあつた。樹の間を洩れる月の光を受けながら、二人は其處まで靜かに下りて行つた。

汽車の時間の都合がわるいので、歸りに二人は電車の方を選んだ。空いてゐる電車の中では、二人は隅の方に腰を掛けた、蔭で手を握り合つたりなどした。電車を下りた處で、二人は重ねて逢ふ日と所とを約して別れた。

玉子は遊び勞れてゐた。行く時歩いた長い路の疲勞なども出てゐた。樂しかつた一日の逢瀨を繰返しながら『歸つたらすぐ寢よう、』などゝ思つて歩いた。

座敷に灯の明るくついてゐるのを不思議にして上つて行つた玉子は、其處に旦那の來てゐるのをすぐ知つた。『おや、旦那がいらしつたの？』かういくらか慌て氣味で迎へに出た下女に言つて、すぐ座敷の方へ行つた。『遲くなつちやつて……家へ行つて、妹をつれて銀座へ行つて、彼方此方ぶら〳〵歩いたり何かしたもんだから、つい遲くなつちやつて……母さんがよろしくツて言つてゐましたよ。その中來る

せた。『それや、私、隨分我儘にしてるのよ。厭な時には遠慮なく厭な顏をしてやるわ。金だつて、隨分出させてやるのよ。今度一度來て御覽なさいな。大丈夫ですよ。下女が田舍者で知らないから大丈夫ですよ。旦那が來てたつて差支ないわ。從兄とか何とか言つて置くわよ。それや、いろんな道具なんか隨分買つたわ。あゝいふ處で、二人で暮らすんだと嬉しいけども、貴方には奧さんはあるしね、何うせ駄目ね。』

男は男で、父親の病氣の段々重くなつて行く話などをした。『君も知つてるけども、僕の父はお濱奉行か何かしてゐて、昔は隨分遊んだ通人なんだけども、あゝなつて了つてはもう駄目だね。それに昨日あたりから大分惡いんだよ。今度は駄目かも知れないよ。』などゝ言つた。玉子は引かされてから、一度男の家に訪ねて行つて、粹な父親と綺麗な細君と可愛い三つ位になる男の子とを見た。男は市役所の方に勤めてゐて、月給はさう澤山は取つてゐないけれど、家にはかなり財産があつて、庭に面した座敷などは瀟洒なつくりに出來てゐた。父親に望まれて、玉子は其處で淸元などを彈いて一日面白く遊んで來た。引かされない以前に家で聘んでゐた藝者位に男の細君は思つてゐるらしかつた。

『好い月だね。』

『歸るのはいやねえ。今夜泊つて行きませうか。大丈夫ですよ。今日歸つたばかりだから、來る心配はないわよ、さうしませうよ。』

白い烟などを見てゐた。風呂場は三和土になつてゐて、内から鍵が掛るやうに出來てゐた。湯に入りながら二人は遠い海を眺めた。

『さうなの？』

ふと玉子は思ひ出したやうに言つた。途中で、二人は鈴木のことを話しながら歩いて來た。『さうなの？　千鳥さんが聘ばれてゐるの？』

急に玉子が引いたので、晝を書きに田舍の方へ行つてゐた鈴木は、歸つて來てから一方ならず落膽した。其處の待合の女將が一生懸命に別の女を取持たうとしても、容易にそれに應じなかつた。取替へ引替へ聘んで見せた女も一人として氣に入つたものはなかつた。醉ふと、あのおとなしい人があばれて騷いで、『俺の雪江を伴れて來い。』などゝ女中を困らせた。

『矢張、君の腕だね。』からその話をしながら男は笑つた。玉子は生効のあるやうな氣がした。自分の持つてゐる容色が、さうまで容易に男を引きつけることの出來るのが玉子には嬉しかつた。身を投げて死なうとした去年の自分、あれは矢張この自分だつたかしら？　といふ風にすら思はれた。世の中には面白いことが澤山に澤山にあつた。玉子は湯から上がつて了ふまで鈴木の事を頭から離さなかつた。

何をしても差支ないやうな一間に二人は日の暮れる頃までゐた。前の野には茫と靜かに靄が下りて、光澤のない赤い丸い月が浮び上るやうに海から昇つた。玉子は圍ひ者の厭な生活を絶えず男に話して聞か

御覽なさいよ、髮なんか壞れたまゝよ。』かう言つて髮を見せるやうにして、『まァ、好かつたわ。まさか、貴方は歸りやしないと思つたけれど……。それに、今お琴さんに逢つた。』

『何處で？』

『汽車の中で、大丸髷か何かで上方見物よ。』

『四十位の髯の生えた男が一緒だつたらう？　あれは立花ツて言ふお役人だよ。』

『よく知つてるわねえ。……けども、お琴さん、濱町の方が大切なんぢやないの？』

『それはさうさ。』

二人はいつか踏切の處へ來てゐた。車夫があとから煩さく附纏つて來た。

『彼處に行くんでせう？』

『何うでも好いけど……』

『彼處へ行きませうよ……ね、歩いて行きませう。』

二人は靜かに戀人のやうにして歩いて行つた。晴れた秋の日が長い〳〵路を照してゐた。そこには枝柿の紅いのが並べてある店があつたり、鷄を澤山飼つた養鷄所があつたり、蒼い顏をして若い男がせつせと板を削つてゐる指物師の仕事場があつたりした。二人は成たけ裏道のやうな細い通りを歩いて行つた。

三十分程經つた後には、二人は崖に凭つた大きな家の見晴しの好い一間から、野を横ぎつて行く汽車の

『まァ好いわねえ、京都？　奈良？　羨ましいわねえ。』玉子は一緒に來た客の方を見ないやうにして見ながら、『本當に羨ましいわ。今は好いでせうね。氣候が好いから。さうね、紅葉にはまだ早いけれど。幾日位？　五日位？　大阪にも行くの？　好いわねえ。』

玉子は小聲で何か言ふと、若い妓は笑つて點頭いて見せた。客は玉子の方を頻りに見てゐた。

やがて次の停車場が來た。挨拶して下りて行つた玉子は、プラットホームにも何處にも男の姿を見出すことが出來なかつた。わざ〳〵二等待合室までも入つて見たが、矢張其處にもゐなかつた。何うしたんだらうと思つてゐると、向うの茶屋から急いで此方へ驅けて來る男の姿が見えた。

『何うしたの？』

『ちよつと其處に休んでゐたんだよ。電車で來るか、汽車で來るかわからないもんだから、彼方へ行つたり此方へ來たりしてゐたんだよ。』

『待つたでせう？』

『隨分待つた。』

停車場を出て並んで歩きながら、

『私、何んなに氣を揉んだか知れないわ。歸りさうにしてゐて、中々歸らないんですもの。私何うしようかと思つて、立つたりゐたりしてたわ。電話が家からかゝつて來なけれやまだゐたのよ。だから、

電車のレールを橫切つて、大きな停車場に來た時には、時計はもう二時半の處を指してゐた。汽車の時刻を見ると、あと二十分待たなければならない。いつそ向うの電車で行かうかとも思つたが、先に乘替の場所があつたり何かするのを思ひ出して、仕方がないから其處で汽車を待つことにした。

山手の方へ行く電車が絕えず待つてゐる玉子の前を通つて行つた。種々な人達がぞろ〳〵と乘つたり降りたりするのがほつねんとして腰を掛けてゐる玉子の眼に映つて行つた。『汽車で行つたかしら。電車で行つたかしら？ 屹度電車で行つた。もう遲いッて待つてゐるだらう。』こんなことを考へた玉子の眼には、此前嫖曳した土藏に近い一間が浮んで見えた。障子を開けると、黑い色をした土藏と栽込の松が見えた。それは午後の三時頃で、向うの待合の座敷に客がゐて、三味線の音などが聞えてゐた。玉子が勘定をしようとすると、『好いよ、今日は僕が出すよ。持つてゐるよ、』などゝ言つて、男は玉子のやつたお揃ひの古代更紗の縫ひつぶしの財布を懷から出した。

やがてやつて來た汽車に待兼るやうにして乘つた玉子は、其處にかねて中のよかつた若い妓が大丸髷に結つて、洋服姿の中年のお客と一緒に乘つてゐるのにぱつたり顏を合せて了つた。

『まァお琴さん。』

『雪江さん。』

かう言つて二人は寄つて行つた。車中の人達は皆な視線を此方へ向けた。

『何ァに好い。』旦那はかう言つて矢張其處に坐つてゐた。

まだ時間はあるけれど、髪だッて直して行かなけれやならないし、支度もしなけれやならないし、困つて了つて玉子がゐると、運好く其處へいつも借りつけてゐる酒屋から、『電話です、』と小僧が言つて來た。

肥つた中年の田舍出の下女が出かけて行つて訊くと、店から、旦那にすぐ來て下さるやうにッて番頭さんが掛けてよこしたとのことであつた。『ウム、今すぐ行く。』かう言つて漸く旦那は出かける支度をした。

旦那を見送つて、茶の間へ歸ると、玉子はすぐ鏡臺を出して髪を直し始めた。髪結さんを呼んで來て、大急ぎで結つて貰はうかとも一度は思つて見たが、時計がもう一時半の處を指してゐるので、すぐ思ひ返して、亂れた髪を自分で梳いた。

『二時頃、向うの停車場へ行つて待つてゐますから。』かうその手紙には書いてあつた。

大島お召の一枚着に黑い鶉縮緬の羽織を着て、成たけ眼に立たないやう扮裝をして、旦那に買つて貰つたダイヤの指環と小林に買つて貰つた金の浮彫の指環とをはめて、『ちよつと、家まで行つて來るからね。歸りはそんなに遲くならないつもりだけども……殊によると夜になるかも知れないからね。』かう下女に言つて出がけに、財布の中のさつきの金を改めて見て、浮々した顏をして玉子は出かけて行つた。

あつた。市會議員はこの前の選擧で落選したが、區では羽振の好い方で、護謨の店が銀座の通りにあつた。子供は總領が中學校に通つてゐた。

胸の處に赤い大きな痣のあるのが玉子には常に氣になつてゐた。それを見ると、厭な氣がした。『何うしてこんな人の世話になる氣になつたのかしら、』などゝ自分で後悔するやうなこともあつた。その痣が胸一杯に蔽ひかぶさるやうに大きくなつた夢から覺めた時には、玉子はゾッとして體が震へた。

『お咲、お咲。』

かう呼ぶ聲が常に二階から聞えて來た。

いつも來た翌日は、屹度早く歸つて行くのに、その日は午近くまで長火鉢の傍で新聞などを讀んでぐづぐづしてゐた。段々玉子は氣が氣でなくなつて來てゐた。帶の間に挾んだ手紙のことが絕えず玉子の頭の中にあつた。『今日は緩くりしていらつしやる？』かう訊くと、『うむ、さうもしてられないがな……用も少しあるけれど、』などゝ言ひながら、矢張ぐづぐづしてゐた。手紙にはかねて約束して置いた時間が書いてあつた。實は來るか來るかと思つて居た返事が昨夜來ないから、今日は駄目なのかと今朝まで思つてゐた。それにあの雨でもあつた。『明日は駄目。』かう玉子は思つて失望して寢てゐた。それなのに……手紙が來たのに……天氣が好いのに……

『貴方お午の支度をするの？』

『何うするんだえ？　いるのかえ？』

『え、ちよつと買ひたいものがあるのよ。此間、銀座を通つたら、それは好い襟があつたのよ。震ひつきたいやうなのよ。それに、紙入がわるくなつたから……』

『襟は此間買つたばかりぢやないか。』

『でも欲しいのよ。』

『此處にあるにはあるけれども……少し入用な金だけども……』

旦那が躊躇してゐるのを、

『好いわよ、頂戴よ。』

かう言つて無理に貰つて、『これで買へるわ。本當にそれは好い襟よ。夢にまで見たんですもの。』嬉しさうな顏をして、

『本當に、お金ッてよく要るものね。お小遣なんてぢきなくなつて了ふのよ。母さんの許へも無沙汰をしてるし、叔父さんの許へも近い内に行つて來ようと思つてゐるのよ。また、土產を買つて行かなくちやならないい。』

旦那は五十五六の、何方かと言へば瘦せた方の人であつた。イヤにむつゝりして、容態振つて、朝起きて來た時に、『お目覺めですか、』とか何とか言つて下女が丁寧に挨拶しないと機嫌がわるいといふ風で

『ぢや鈴木さんにも內所で逢ふのかえ?』

『まさか……私がいくら何でも……』笑つて見せて、『ね、さうしませうね。嬉しい。』玉子は男の胸に顏を押し當てた。

十九

その年の秋の彼岸の中日の前の日から、旦那は來て泊つてゐた。二階の一間からは、小さな貸家の混雜した低地を隔てゝ、濁つた汚い色をした海が見渡されてゐた。昨夜の雨は此頃に似合はないほどの强い降りで、折角の大祭日も無駄になるなどゝ思つて寢てゐたが、今朝起きた時は、眩しいやうな好晴で、軒には雀が樂しさうな饒舌をつゞけてゐた。

旦那がまだ寢てゐる中に、階下に下りて來た玉子は、其處の机の上に、女の名で書いた手紙が一通そつと載せられてあるのを見た。それは昨日旦那が來てから出した手紙の返事であつた。玉子は急いでそれを取つて、走り讀みに讀んで帶の間に挾んだが、それから俄かにそは〳〵と落附かなくなり出した。で、旦那と一緒にお取膳か何かで朝飯をすまして茶を飮んでゐたが、『小づかひを少し置いて行かうな。』かう言つて旦那が財布を出しかけたのを見て、

『貴方、そこにもう十圓なくつて?』

だけどね。僅かな月給を取つてゐる身ぢやさういふことも出來ないからね。』

『また、あんな厭味を言ふ。好う御座んすよ。さうなりや私なんかゐなくたつて、秀香さんとでも誰とでも思ふやうなことが出來て、結句好いんでせう。』

こんな話が長く續いた。廊下を通る女中は靜かに睦ましさうな話聲が其處から洩れて來るのを聞いた。二階では照吉姐さんの錆びた端唄の聲が靜かにしてゐた。

『ね、さうしませうね。』暫くしてから急にかう言つた玉子の聲ははしやいで嬉しさうに聞えた。『それが面白いわ。こんな處で逢つてゐるよりかね。さうすれやね、何處か靜かな海岸へでも何處へでも行けるわね。先だッて毎日來てるッていふ譯ぢやなし、本宅もあつて忙しい體なんだから……。本當にね、さうしたら、何處かへ行きませうね。こつそり逢ふのね、昔の唄にでもありさうよ。かうしてきまつて逢つてゐるよりも、その方が何んなに嬉しいか知れやしないわ。隱れあそびッていふことが一番面白いもんですよ。』

『鈴木さんは何うするんだえ？』

『鈴木さん？』玉子はちよつと笑つて、『鈴木さんなんか構はないけども、けどもあの人も好い方よ。給かきなんてあんな無邪氣なもんかしら、それや罪はないわよ。貴方見たことはあるわねえ。顏はあんな顏をしてゐるけれど、あれで、やさしい處があるのよ。氣分がさつぱりしてゐるわ。』

さへすりや好いぢやありませんか？　それで、向うで厭になればやめるだけのものだわ。』

『圍はれちやさうは行かないだらう。』

『行かないことなんかありやしないわ。いくらもあるぢやないの？　さういふ人は？　私だッて、貴方がそんなことは厭だッて言ふなら、無理に行くつて言ひはしないわよ。やめるわよ。でも、私、構ひやしないと思ふわ。行つたッて、今と同じやうにしてゐるわよ。何時でも日をきめて逢ふわ。』女はちよつと途切れて、『私だッて、貴方でもゐなけりや、あんなお爺ちやんの機嫌なんか取れやしない。それに、私考へると、かうして澤山のお座敷をしてゐるよりか、さうする方が好いと思ふわ。お金だッて、さうすれば、今よりは融通はきくし……體も樂だし……。何んな面白い眞似でも出來るぢやないの？』

『それはさうだね。』

『今ぢや、抱妓だから、いくら稼いだッて駄目よ。姐さんの機嫌の好い顏を見る位のもんですからね。……しかし、逢つてッて言ふ譯ぢやないんですよ。まだ母さんにも誰にも話さないんですから。』

『母さんに話して見給へな。』

『え、話して見るわ。けども、貴方の心を聞いてからと思つたのよ。』

『僕はしかし何うでも好いよ。』男は笑つて、『その方が好いかも知れない。君の爲めには少くとも好いね。僕が女房でもなくつて、金でもありや、かういふ時には、男の意地で大騷ぎをするッていふ幕なん

『まァさうね。……いやに窮屈な人よ。お酒を飲むと、それでもちつとはまづい長唄なんか唄ふけれど、お座敷にゐても餘り膝など崩さないッていふ方ですからね。遊んだことはない人でせうね。』

『いつも一人きりで來るの？』

『えゝ。』

『君の爲めから言へば、しかし、本當に好いことぢやないか。』男はいくらか眞面目な聲で、『それは、末の見込ッて言ふことから言へば、わからないやうなもんだけれど、兎に角、そんなお客は今時分滅多にありやしないよ。君の爲めには、一時でも好いからさうして貰つた方が好いね。……しかし本當にさう言ふのかえ？』

『それは本當よ。』かう言つて、『しかし、私、考へるわよ、もう少し。それに、もし、さういふことになつたにしたところで、貴方と別れて了ふことなんかイヤですからね。貴方はそれでも好い？　私がさういふ風になつても、貴方は私を捨てない？　それを聞かして頂戴……』

男はちよつと考へて、『でもね……他人に圍はれちやつてはねえ。』

『そんな女は厭だつて言ふの？』

『さうぢやないけれど、何だか變ぢやないか。』

『ちつとも變なことなんかないぢやないの？　私は金で買はれて行くんですもの。私が貴方を思つて

『さうぢやないのよ。ちよつと、貴方に話して見るのよ。』
『好いことぢやないか。』
『でもね、何うせ長持なんかしないには決つてゐるわ。此方がいくらかでも好いと思つてゐるんなら、末始終のことを考へて行く氣になるけれど、何うせ駄目なのにはきまつてゐるんですものねえ。圍ひ者なんて、それはイヤなものよ。』
男は考へるやうにして、『引かせて、立派に家まで持たせてやるッて言ふんだね。』
『まァ、さうなの。』
『いつ頃から出てゐるんだえ？』
『つい此間よ、まだ五六度しきや逢つてはしないわよ。』
『えらい腕だねえ、矢張すぐ引張られて了ふんだねえ。』
『またあんなことを……』
吸ひさしの巻煙草を男の顔にちよいと押附ける眞似をして玉子は笑つた。
『そして何んな人だえ？　一體？』
『お爺ちやんよ。』
『お爺ちやんはわかつてゐるけれど、これまでに遊びになど餘り來なかつたやうな人かえ？』

『フム。』

『私、成るたけさうならないやうにしてるんですけれどもね。』

『でも、麻布の大杉ッて言へば、中々幅が利く方だよ。世話になれば好いぢやないか。』

『また、あんな事を言ふ？　好かないわねえ。さうぢやないんですよ。だから、貴方に相談するんぢやないの？』

『そして向うでは何う言ふんだえ？　世話をしてやるッて言ふのかえ？』

『まア、さうねえ。』

玉子は吸ひかけた敷島の灰を傍にある灰吹きに落して、『いろんなことを言つちやいやよ。本氣で言つてるんですから。私、此間、少し加減がわるかつたでせう。と、お前體がわるいのに、こんな稼業をしてるのは可哀相だ、少し保養した方が好いよ。なんなら何うかしてやつても好いッてかう言ふのよ。お金はある人らしいわね。』

『少しはあるだらう。護謨か何かの會社を持つてゐるから。』

『借金のことなども聞くのよ。私、そんなに望んではゐないんだから、好い加減には聞いて置いたけれど……。』

『此頃考へて來たッて言ふんだね……』

『でも、秀香には閉口した。』

『あんなことを言つて？　秀香さんは情がありすぎるの何のつて言つてゐたぢやありませんか。君のやうぢやないなんッて言つてた癖に。』

『それが厭だッて言つたんぢやないか。』

『仰有いよ。』

玉子は打つ眞似をした。

二階からはやがて三味線の音が聞えて來た。便所へ行つた玉子は、『照吉姐さん今上つて行つたわ。』かう言つて徐かに入つて來た。枕屏風には藤原時代の男女の色紙形の小さな繪が處々に張つてあつた。

『話ッて何だえ？』

『何でもないの。』かう言つた玉子は、わざと甘えるやうに男の傍に寄添つて、『本當に何でもないのよ。唯ちよつと。』

『何うしたんだえ？』

『話しませうか、此間の話ね、そら、あのお客の話よ。大變向うで乘つて來てるのよ。』

『此間のお客ッて？　何方だえ？』

『稲垣の方よ。』

『だつて、此處が一番靜かで好いよ。向うとかけ離れてゐて、ね、雪ちやん。』

女中が出て行つた後で、玉子は、

『貴方妬けて？』

『何が……』

『しらばくれてゐるよ、貴方は？』後を言はずに玉子は聲高く笑つた。

『だッて何が妬けるんだかわからない。』

『仰しやいよ。ちやんとわかつてゐますよ。お上さん、あれでいくつだと思つて？』

『何だ、それを言つてるんですか。』男は大きく笑つて見せた。そしてあとは女が何を言つても、相手にせずに唯笑つてゐた。

女中が來て、キャッ〳〵騷いで行つたりした。『二階に來るのは誰？　秀香？　ぢやお客はあれだらう。』

男は頤でしやくつて見せて、『あれでもちつとは金があるのかしら。華族は華族でも、貧乏華族だつて評判だがな。秀香の方で惚れてるんだらう。』

『矢張氣になると見えるのね。』女中はかう言つて手を拍いて笑つた。

『貴方も餘ほど箒ね。……少しは女といふものゝ心を汲んでおやんなさいよ。』

玉子が言ふと、

平の上にアネモネの花が鮮かに咲いてゐた。夏がまた來てゐた。下の球突場には、客が二三人來てゐて、いつも賑かな聲がした。

ある夜、若い二十七八の色の白い役者のやうな男と一緒に其處から出て來た玉子は、

『話があるのよ、今日少し……』

『何んな話だえ？』

『あつちへ行つてから話すわ。あそこへ行くわね。』

『作日の今日だからね。』

『なァに好くつてよ。構ひやしないわ。』

で、二人は縺れるやうにして、いつも行きつけの待合の裏から入つて行つた。お增といふ上州生れの唇の厚い髮の薄い女中は、『誰かと思つたら貴方？　今日は女將さんお留守よ。』

『何處へ行つたえ？』

女中は笑つて小指を出して見せた。

『フム。』

など〻男も笑つて、取ッつきの六疊へヅカ〱入つて行つた。

『矢張そこが好いの？』

うある女將から言はれた客は、果して次第に足が遠くなつて行つた。『急に澤山つかふやうになつたら、此方でも用心しないと、ひどい目に逢ふよ。』かう姐さんの言つた言葉が成ほどと點頭けたやうな時には玉子はもう少しで警察に招ばれて行く處であつた。『さうなの？ あの春月のお客さん、そんな人でしたの？ さう言へば、何處かに調子の變なところがあつたけれど、まさかと思つてゐましたよ。さう？ 榮さん、呼ばれたの？ よかつたわ、私、早く手を引いちやつて、今頃まで聘ばれてゐれば、私もさういふ恥しい思をしなくつちやならなかつたのね。さう？ 榮さん一晩留められたの？ そんな事を言はれたんですか？ お金を貰つたら、すつかり吐出せつて？ 刑事さんに？ いやねえ。』かう玉子は言つて思ひ出すやうにして『何うして、そんなことをしたんでせう？ 矢張つかひ込み？ 會社の金を餘程つかつたらしいの？ あの人も行つてゐて？ さう？ 何んなでせうね、いやね。』玉子の眼の前には、暗い警察の留置場の一間が見えた。若い色の白い會社員と榮といふ加賀屋の抱妓とが一緒に並べられて無残な調べを受けてゐるさまも歷々と見えた。話してきかせた女中は、『それでも私の家では、あのお客は二三度來たばかりだから、すぐわかつて何でもなかつたけれど、金寶亭では、何でも大變らしいよ。あそこのお鶴さんが矢張來てたよ。『おい、こら、白狀せんか、』なんて、あのお客ギウギウ言はされてゐたよ。』

『榮さん、何んな顔をしてゐて？ いやだわねえ。』玉子は顔を曇らせて言つた。

玉子の肖像がその青年畫家の畫室の一隅に置かれる時分には、玉子のよく出かけて行くレストランの

その日は一時間ほど遊んで歸つて來たが、一月後には、玉子は度々其處へ出かけて行く樣になつてゐた。夕方に出かけて行つて一緒に角の待合に伴れて來たりした。畫家の寫生帖に、玉子の横顏だの後姿だの正面の顏だのが澤山に描かれる頃には、『此位で好いの？』などゝ言つて低頭き加減にして、三十分位默つて坐つて居た。『照香さんも、矢張かうして書いて貰つたのね。』などゝ玉子は言つた。畫家の口裏から判じて見ると、照香は裸體のモデルをしてゐたかわかりやしないわね。』などゝ玉子は言つた。畫家の口裏から判じて見ると、照香は裸體のモデルを勸めたこともあるらしかつた。『いやなこと、私は照香さんぢやないんですからね。いやなこと、』などゝ玉子は言つた。畫家は畫家で、『君のも一枚記念の爲めに書いて取つて置かうか。』こんなことを言つて眞面目に繪の具を畫板に塗つた。

面白い稼業もあるものだなどゝ玉子は思つた。懶惰で放縱で、いつ行つて見ても、酒を飮んでゐたり寢てゐたりすることが多いと思ふと、時には玉子が訪ねて行つても相手にしないほど眞劍になつて、繪具を塗つてゐることなどもあつた。金離れが綺麗で、ちよつと見ては何處かの書生か何ぞのやうな構はない服裝をしてゐながら、十圓や二十圓の金は何とも思つてゐないやうにずん〳〵出した。待合の勘定も綺麗に拂つて行つた。

不思議にも客の金の拂ひやうなどが此頃玉子に飮み込めて來てゐた。『あのお客はもう緣が切れたよ。』などゝいふ女將の言葉もわかつて來てゐた。『あのお客はもう長いことはないよ。用心してお出でよ。』か

て見せた。寫生帖にはいろ〳〵に其時〳〵の人物の態度を寫生したものなどもあつた。繪を一枚〳〵見て行つた玉子は、ふと藝者を描いた一枚の繪に眼をつけて、

『これ、誰か見たやつね。』

『どれ？』

雪助は顏を其方へ向けたが、『お前さん、それは照香さんぢやないかえ？』

『わかつた、わかつた。』玉子は面白さうに手を拍つて、『照香さん、此處に來るのねえ。わかつた〳〵。隨分ねえ、貴方は？　好いわ、そんなら、その積でゐるから。』畫家は默つて笑つてゐた。

『裸體畫はなくつて？』

『いくらもあるぢやないか、其處に……』

『いゝえ、照香さんのよ。』

『馬鹿を言つてら、そんなものはないよ。』

『あるのよ、屹度、隱して置くのよ。憎らしいねえ、雪助さん。』

『昔のことだよ、それはもう……。』

『いつの昔？　此間、變だと思つたことがあつたのよ。』

『もう好いぢやないか、そんなこと』

『本當に貴方と婆やつきり？』

『さうさ――』

『私、來て上げたいわね。好くつて？』畫家が畫室の方へ行く跡について行きながら、『あ、此處で描くのね。寫眞屋さん見たいね。明るいわね。あ、裸の繪がある。』かう言つて玉子はそこに立てかけてある大きな裸體畫に眼を附けた。『何してるところなの？　これ？　池の緣ね？』後を振かへつて、『あ、此方にもあるわね。裸の繪ばかりね。何うしてこんなに裸の繪ばかり書くんでせう？』

ある夫人の肖像畫の前に立つて見てゐた雪助は、『これは好いわね。雪江さん。好く描けてゐるわね。丸で生きてるやうね。』かう言つて凝つと見て、『かういふ奥さんがゐるんでせうね。』

『それはさうよ。毎日來て、坐つて書いて貰ふのよ。』ちよつと途切れて、男の方を見て、『皆なモデルがあるのよ。裸でも何でも皆なさうよ。一時間いくらで裸になつて坐つて行く女があるのよ。』

『何處に坐るの？　さういふ女が來る時には？　え、貴方？　鈴木さん？　此處？　其處？』雪助はおどけた調子で、

『貴方と二人きりで、一時間もこんな處にゐてよく危くないわねえ。』

『危いことがあるのよ。』

女達の饒舌るのをにや〳〵笑つて聞いてゐた畫家は、風景畫だの肖像畫だのを澤山彼方此方から出し

びに來ないか。誰もゐやしないよ。婆さんが一人ゐるばかりだよ。』度々かう言ふので、ある日、玉子は雪助と一緒に出かけて行つて見た。取次に出た婆さんが引込んで行つて、何かごと〳〵言つてゐると思ふと、『あ、よく來たね。』かう言つて洋畫家は、つくろはないぼさ〳〵した髮をして、玄關の次の間の襖を開けて出て來た。

『まだ寢てたの？　隨分寢坊ね。』

隣の間にある寢道具をちらと見た雪助がいきなりかう言ふと、

『昨夜遲かつたからね。三時だつた、歸つて來たのは。まだ、眠いよ。』眼をこすりながら、『二時頃あの雨だらう。それも出かけて來てから降られたんだからね。電車はないしね。あの通りさ。』其處の長押に無雜作に引かけてある處々に泥のついた着物の方を見た。

『昨夜、雨が降つたかしら。』

『降つたわよ。』

『さうかしら？　ちつとも知らない。』

『旨く寢こんでゐたんだらう。僕がびしよ〳〵ぬれて歩いてゐる時分は、誰かと好い思をして寢てたんだね。』笑ひながら畫家が言ふと、『さうぢやないけれども……さうかしら、降つたかしら、私、餘ほど寢坊と見えるわね。』玉子は笑ひながら男の方を見た。

『今行くわ。』

廊下に出て行くと、『困つちまふのよ。もう歸るツて言つてゐるのよ。まだ明きさうもない？』

『もう好いのよ。今すぐ行くわ。』

二階を上がつたり下りたりする玉子の姿は、暫し明るい電氣の下に見えてゐた。やがて初めの客の歸つて行く氣勢がして、『今度はいつ入らつしやるの？　お近い中にね、屹度よ。』などゝいふ玉子の聲が聞えた。

時間過ぎになつてから、ある家からある家へ行くやうな時には、『待つたでせう。姐さん達が三人も四人も來てるて、中々明きさうにもしないんですもの。私、氣が氣でなかつたわ。でもよく待つてゐて下すつたわねえ。……本當に今日は退屈しちやつた。姐さん達が大勢來て騷ぐお座敷は厭ねえ。』こんなことを言つて、水差とコップの載せてある盆の傍の敷島を一本取つて、落附いた風で靜かにふかした。朝は日ざしの高くなつた時分に起きて、長襦袢のまゝで湯殿に行つて、長い間かゝつて髮を直して、それから客と一緒に近所の料理を取つて食つたりした。『男なんて、薄情なもんよ。私、染々さう思つたことがあるんですもの。それに、男でも女でも何方でも思つた方が負ね。』かう言つて玉子は笑つた。

山の下の路を通つて緩い坂を上つて行くやうな處にゐる客は、上野の秋の展覽會に賞牌を得たやうな若い洋畫家であつた。二三度逢つたばかりなのに、稲毛の海岸になど伴れて行つて吳れた。『僕の家に遊

さへすれば好いんだから。すぐ來るわ。一時間位よ。その間、これが私よ。』玉子はこんなことを行つて強い麝香の匂ひのする紙片を男に渡した。で、急いで帶をしめて、紙入を挾んだあとを輕く叩いて見て、狹い薄暗い一間から郞下の方へ出て行つた。

ある一間では、『貴方、ちやんと知つてゝよ。隱したツて駄目よ。秀子さんがあの時すつと出て行つたから可怪しいと思つたのよ。隱しごとは出來ないわねえ。もうこれからその積でゐるから好い、』などと言つて、わざと體を寄せて男の手を堅く握つた。

ある時ある待合へ入つて行つた時には、帳場にゐた女將が指を出して笑つて、ある形をして玉子に見せた。『さう？』と玉子は言つたが、長火鉢の前で酒を飮んでゐる女將の情夫の中年の男には見向きもせずに、そのまゝすうと郞下の方へ出て行つた。

其處にゐた女中に、

『さう？　あの人とあの人？　何方？　萩？　菊？　二階？　いゝわよ、ぢや、ちよつと出てるからとか何とか言つて、誰か聘んで置いて頂戴よ。さう？　困るわねえ。行くまで待つてるツていふの？誰れも來ないでも好いつて言ふの？　好かないわねえ。ぢや待たしてお置きよ。構はないから。』

かう言つて玉子は下の六疊の一間へ入つて行つた。

一時間ほど玉子が其處にゐると、『雪江さん、ちよつと電話。』かう女中の呼ぶ聲が外から聞えた。

かう言つて玉子は唯凝と小林の顏を見た。

何も彼も過ぎ去つてゐた。不思議なほど自分の心の落附いてゐるのを玉子は見た。何の關係もないやうな日常の話を二言三言いつた後で、玉子はまたうとうとした。

『まア、ソッとして置く方が好う御座んすね。』かう言つて小林は手持無沙汰といふ風で、やがて其處から靜かに出て來た。で、緣側を通らうとすると、其處にゐる母親は、『あれが昨夜の着物ですよ、』とかう聲で言つて指さして見せた。軒端の竿には夥しく泥に塗れた中形と帶とがかけてあつた。

十八

あくる年の春頃から再び濠端に姿を見せた玉子は、何んな小さな待合へでも出かけて行つた。『雪江さん、雪江さん。』かう調法がられて、到る處から電話をかけてよこした。

『雪江さん、奧の離座敷よ。』

かう女中に言はれて入つたその室から、一時間も經たない中に玉子は出て、いつか別の座敷に行つてゐた。かと思ふと、長襦袢のまゝで廊下の隅の電話口へ出かけて行つて、『あ、さう、もう明いたわ。すぐ行くつて言つて置いて頂戴、』などゝ言つた。

『今夜、貴方泊つていらつしやる？　ぢや、待つてゝ頂戴よ。好いぢやないの？　ちよつと行つて來

に逢はせて好いか惡いかといふことがすぐ母親の胸をついたが、斷る譯にも行かないので、母親はそつと茶の間に通して、手短かに昨夜の出來事を話してきかせた。

二人は流石に驚いたといふ風であつた。持つて來た話を話し出す譯にも行かないといふやうに二人は顏を見合せた。まさかそれほど迄とは小林も思つてゐないらしかつた。つい今此處へ來る途中でも、『あゝいふ女はまた別ですよ。實は君が顏を見せない方が好んだけれど……。何アに、いくら手紙にはそんなことが書いてあつても、それが手見たいなもんですからな。』かう一緒に來た男は小林に言つた。二人はまた顏を見合せた。

『寢てるんですか。』

暫くしてから、小林は小聲で訊いた。

やがて小林は玉子の寢てゐる座敷の方へと行つた。小林の顏を見たら、また昻奮して困るだらうと思つてゐた母親は、丸で異つた光景を其處に見た。母親は不思議な氣がした。玉子は眼を開いて小林の方を見たが別に驚いたやうな風も見せなかつた。唯微かにさびしく笑つて見せたばかりであつた。

小林の方が却つてどぎまぎした。

『つい、忙しかつたり何かしたもんだから……本當に濟まなかつたよ。』

『いゝえ。』

堅く握りしめた。蒼白い頬には涙が流れた。

『氣分は何うだえ？』

『もう何ともありませんよ。』母さんに心配をかけて濟まなかつたといふ顏をして、さびしく玉子は笑つて見せた。

『お前、熱が大變あるね。』

『さう？』

かう言つて、またすぐ眠つて行つた。醫師がやつて來た時には、ぱつちりと眼を開いて四邊を見廻した。

『なアに大したことはありません。少し熱がありますけれど、』他には心配するやうなことは御座いません。ぢつと落附かせて寢かして置きなさい。神經で、頭を少しわるくしてゐますから。』茶の間に來てから、醫師はかう母親に言つた。

『でも、何うしてあゝよく寢るでせう？　始終うと〳〵してゐるのが心配になりますが――』

『何アに、ぢつとして置けば差支はありません。體も頭も勞れてゐるんですから。』

それは丁度午後の三時頃であつた。母親はすぐ藥を取りに行つて歸つて來て、これから昨夜の汚れた着物でも洗はうかと思つてゐると、そこへ格子の開く音が靜かにした。

出て行つた母親は、はつと胸を躍らした。其處には、小林と此間來た人とが一緒に立つてゐた。玉子

ういふ心配をかけたといふことが明かに一方に意識されると共に、かういふ境遇に身を置くやうになつた自分の慘めさが歷々と眼の前に映つて見えた。此時ほど玉子は深く自分の身を可哀相に思つたことはなかつた。無邪氣に天王山へ行つて遊んで暮した時分のことだの、崖の處に咲いてゐる赤い椿の花を取らうとして其處から轉がり落ちたことだの、かうした辛い世の中があるとも知らずに其時分は無邪氣に遊んでゐたといふことだのが、物心がついてからの濃い淡いさま〴〵の影と一緒になつて、縺れ合つて、こんがらかつて、ぽつとした玉子の頭を通つて行つた。『私なんか、私の體なんか、何うなつたッて構はない。』かう思ふと、また熱い涙が烈しく胸に堰き上げて來た。

しかし昂奮した後の疲勞はやがてやつて來た。寄宿舍へ行つて、お禮の菓子などを置いて母親が歸つて來た時には、玉子は蒼白い顏を此方に見せて、スヤ〳〵と靜かに落附いて眠つてゐた。入らうとした足をそッと茶の間の方へ戻して來た母親は、『好い鹽梅だよ。靜かに寢てるよ。ソッとしてお置きよ。』

茶の間では、皆な靜かな聲で話した。それとも知らずに、丁度其處へやつて來た宗太郎は、話を聞いて眼を丸くして驚いて、ソッと座敷の方を覗いて見た。

『好い月夜になつたなア。』外ではかう言つて通つて行く人の聲がした。

心の激動と急に出て來た熱とで、玉子は翌日も床から離れることが出來なかつた。うつら〳〵と唯だ眠つてばかりゐた。『母さん。』時にはかうなつかしさうに呼んで、何も言はずに、其處に來た母親の手を

さつぱりした浴衣を簞笥から出して、濡れた着物と着替へさせて、亂れた髪を母親が素早く撫でつけてやつてゐる間、玉子は喪心した人のやうにぼつとして其處に立つてゐた。『落附いてお出よ、何も考へちやいけないよ。』やがて床の上に身を横へた玉子の耳の傍へ行つて母親は言つた。

玉子は惡熱惡寒の身に往來するのを覺えた。其處に寢てゐるのは自分ではないやうな氣がした。唯うとうとしてゐた。『まア、好かつた。これも觀音さんの御利益だよ。』胸を撫で下したやうに母親の言ふあとについて、『私はまた私で、レール路に行つてもそんな樣子はない、誰に訊いても知らない知らないツていふ、仕方がないから歸つて來ると、お前さんが泣いて歸つて來るぢやないか。吃驚したにも何にも……』かう父親の言ふ聲が聞えた。『てつきり死んだものと思つたよ。今夜にも死んだ顏を見なくつちやならないかと思つて覺悟してゐたよ。』母親のかういふのがはつきり玉子の耳に聞えて來た。ランプの明るい茶の間から父親が出たり入つたりする影が見えたり格子戸の開く音が頻りに聞えたりした。『さうですか、それは結構でした。まアねえ、何うなさいましたかと思つて。』心配して近所の人達の見舞に來て吳れる氣勢などもした。

『兎に角私、交番から寄宿舍へ行つて來るからね。』

かう言つて母親は出かけた。

玉子はうつらうつらとして、さうした氣勢を床の中で聞いてゐた。父親を始め、近所の人達にも、さ

く張り落ちた。かうして暗い闇の中に立つてゐる自分が染々可哀相になつて來た。『何んな苦勞でも……何んな難儀でも、私はこれからする。私が死んだら、母さんや父さんは何うなつて了ふんだらう。私は親を養はなければならない身ぢやないか。』玉子はまた歔欷あげて思ふさま一人で泣いた。

それは暗い小路であつた。丁度筋向ひになつてゐる處に理髮肆の灯がほんやり見えてゐた。雨はまだ降つてゐた。立つてゐる軒下の家では、何か細々と話聲がしてゐた。

暫らくしてから、玉子は其處で緩くなつた帶をしめ直して、通りへ行つて、其處に出てゐた年を取つた車夫に、『夕立に逢つて、下駄の緒を切つて了つたもんだから、』などゝ言つて賴むやうに車に乘せて貰つて、家の方へと歸つて來た。それは丁度母親が落膽して歸つて來たばかりの處であつた。『お前、生きてゐて呉れたのかえ？　何うしたんだえ？』玉子の姿を見ると、母親は縋る樣にして泣聲を立てた。

玉子は何と言つて好いかわからなかつた。父親の持つて來て呉れたバケツで足を洗つて、そのまゝ上にあがるにはあがつたが、父母の顏を見ると、堪らなくなつたやうに、いきなり疊に突伏して了つて泣いた。歔欷あける度に、壞れた丸髷が微かに搖いた。

眼の緣を赤くした妹は、其處に立つて、不思議さうな顏をして見てゐた。

『氣を落附かせなければ駄目だよ、父さん、早く座敷に床を敷いてお呉れよ。』かう母親は慌てた聲で言つて、其處に突伏してゐる玉子の體を抱へるやうにして、座敷の方へと伴れて行つた。

母親の胸は迫つて來た。自分が苦勞して今まで育てゝ來たことなども思ひ廻された。あの子を手離すのが可哀相なばかりに、見込みのない夫に附いて來たことなども考へられた。涙がぽろ〳〵落ちて來た。しかしかうしてゐても仕方がなかつた。皆は土堤を下りて門のところまでやつて來た。生徒の一人は橋の處にある交番へ行つて屆けて吳れたりした。

丁度その頃、玉子はその一つ向うの橋の通りの暗い軒下に身を寄せて、濡れた着物を絞つてゐた。玉子はふと目が覺めたやうな氣がした。自分のやつたことが何ういふことで、何ういふ氣で自分は其處へ行つたかと言ふことを飜つて考へて見てゐた。手紙を見てくわつとなつたやうな自分が其處にゐた。妹をまいて一散に暗い小路の中にまぎれ込んで、そこから夢中で海岸へと行つた自分がゐた。確かにその時ば死ぬつもりでゐた。體中はくわつとして自分でも自分のことがよくわからなかつた。玉子は下駄をぬいで波打際に走つて行つた自分を見た。染次のことなどを玉子は頭に浮べてゐた。海は微白く闇の中に見えてゐた。急に玉子は恐ろしくなつて來た。夕立がその時サッと降つて來た。この夕立にはつと氣が附いたやうな自分を玉子は見た。と、同時に、後の土堤あたりで人聲がした。玉子は恐ろしくなつて一散に遁げて來た。夢中で、跣足で雨の降り頻る中を……。

母親のことを考へると、堪らなく悲しくなつて來た。『母さん。』かう腹の中で泣きながら橋を渡つて來た。『本當に死ぬ程だつたんだらうか、私は――』そこの暗い軒下に來て玉子はかう思つた。涙が留度な

波打際まで行つた一人の生徒はこんなことを言つた。

『でも、この闇ぢや、たとへ飛込んだにしても見えやしないだらうけれど……』

『それはさうだな。』かう生徒達は言つた。雨がまた一しきり盛に降り出して來た。

ランタンの薄暗い光を掠めて、太い雨の脚は白く闇の中に見えてゐた。ずぶ濡れになつた母親の丸髷からは、雫がほた／＼と顔に落ちてゐた。

『何うも仕やうがないね。』

『これぢや仕方がない。』

生徒の一人は下駄を取つて見て、『片方きりないね。片方は何うしたらう。』あたりを見廻して、『あゝ此處にある……門番、ちよつと明りを見せろ、あ、此處に櫛がある。』

飛込んだに違ひがない、といふやうに誰にも思はれた。母親はまた海の方を見た。波の打寄せてゐるのが、微白く見えた。

『警察に屆けて貰ふんですね、仕方がないから。』

『何うも仕方がない。』

氣の毒だといふ風に誰の顔も見えた。

『何うしたんです一體？』など、生徒の一人は訊いた、

頻る雨を衝いて此方へとやつて來た。

『ゐましたか？』

『飛び込んだか何うしたかわかりませんけれど……』かう言つた母親は、其處に見覺えのある玉子の駒下駄の轉がつてゐるのを薄暗いランタンの光に見て、急に聲を立てた。『あ、飛込んだんですよ。此處に下駄がある。この下駄は娘の下駄です。何うかして下さい、早く……』

あとから來た生徒は、これを聞くと、ヅカ〳〵と海の方へ走つて行つたが、暗さは暗し、土砂降りに雨は降るし、波打際もはつきりとわからないやうな始末で、何うすることも出來なかつた。生徒達はやがて引返して來た。

『船、船はないでせうか。』

母親は狂氣のやうに言つた。

しかしその近所には船はなかつた。たとへあつたにしても、この風雨に船を出すことなどは出來なかつた。

『それにしても本當に飛込んだんだらうか。』

『飛込んだんですとも……』

『それにしちや何か見えさうなもんだがなァ。何にも見えなかつたよ。白いものも何も見えなかつた。』

『一體、どうしたんです？』

かう言つた門番は出て來た。

詳しいことを話してゐる暇はなかつた。母親は急いでその暗い路の方へと行つた。見ると、其處は土堤になつてゐる。母親は急いで登らうとして躓いて轉んだ。ポツ〳〵落ちて來てゐた夕立は、此時篠をつく樣に烈しくサッと降り出した。

海が微白く前に見えた。

『さつき來てゐたものなら、もう飛込んで了つてゐる。』かう思ふと、母親は氣が氣でなかつた。遠い海の波の中に、玉子が浮きつ沈みつして苦しんでゐるのが眼に見えるやうな氣がする。で、雨が降り頻る中を、夢中で、土堤の上に上つては見たが、自分一人の力では何うすることも出來ないので、引返して、門番にでも力を借りようと思つて、土堤をまた下に下りかけると、其處に門番はランタンをつけて遣つて來てゐた。

『何うかして下さい。』

母親は思はず叫んだ。

『ゐましたか。』

かう言つて門番は土堤を飛越えて上がつて來た。身投があつたと聞いた生徒達は、あとから二三人降り

『お前さんはレール路の方へ行つて御覽なさい……まだ、今、行つたばかりだから。私は海岸の方へ行つて見るから。』かう母親は父親に言つて置いて、急いで通りを向うの方へ驅け出して行つた。

眞暗な闇の中を母親は唯夢中で走つて行つた。何う通りを拔けて、何う橋をわたつたか母親は知らない位であつた。母親は逢ふ人ごとに訊いた。

『今、此處を丸髷に結つた若い女が通つて行きやしなかつたでせうか。』

見たと言ふものもあれば、見ないと言ふものもある。しかし、何うしても此方へ行つたに相違ない。かう思つて母親は夢中で驅けて行つた。

氣が附くと、海軍の學校の寄宿舍か何かゞ其處にあつて、その側を通つて、細い路が海の方に行つてゐる。眞暗だ。波の寄せる音ばかりがサッと微かに聞えて來る。

行きかけて引返した母親は、其處にゐる門番に訊いた。年を取つた門番は言つた。

『あゝ、さう言へば、もう少しさつき其處を浴衣を着た丸髷の若い女が歩いてゐたよ。ぶら〳〵行つたり來たりしてゐたから變だと思つてゐたよ。』

『此方へ行きましたでせうか？』

『さア、それはわからない。』

『しかし、此處は此方へ行くより他に路はないんですね。』

て、愈々別れ話がきまつて、金の額などの持出される頃であつた。夜になつてから、『お母さんちよつとそこいら涼んで來ますよ。福ちやんをつれて行くよ。』かう言つて、玉子はいつもの通り何事もないやうな顏をして出かけて行つた。

曇つた蒸暑い夜で、降りそびれた夕立でも俄にやつて來さうな空であつた。星は一つも見えてゐなかつた。出かけてから十分ほどすると、妹は驅け出して歸つて來て、『姉さんの紙入が簞笥の上にあるから頂戴ッて。』

何とも思はずに、母親が取つてやつた紙入を持つて、妹はまた驅け出して行つたが、待つてゐると言つた路の角に玉子の姿が見えないので泣きさうになつてお福が歸つて來た時には、母親はもう簞笥の上に置いてあつた書置を見て、狼狽てゝ家を飛び出さうとする處であつた。

『何方へ行つたえ？』

かう言つた母親の眼は血走つてゐた。

『え、何だと……』

父親も奥から聞附けて飛び出して來た。

小さい妹は泣きながら話した。『あそこんとこで待つてるからッて姉さんが言つたんですよ……そら、あそこんとこですよ。電信柱のあるところですよ』

『一緒に死んで吳れる人のある染次さんは仕合せだ。』かう言ふと、玉子は堪らなくなつたやうに聲を立てゝ泣いた。

『何だえ？　お前、新聞を見て泣いてゐるのかえ？』

『だつて、母さん、思ひ合つた仲ですもの。あの時分でさへ、それや仲が好かつたんですもの。羨ましい位だつたのよ。』

玉子の眼には色の白い丈の高い洋服姿のよく似合つた若い銀行員と、丸顏の愛嬌のある髮の濃い染次の姿とが歷々と見えた。染次は其時分でも大分無理な逢瀨を重ねてゐたらしかつた。死ぬ氣になつた前の夜の逢瀨などを玉子は想像した。

『でも思つた人と一緒に死んだんだから好いわ。』かう言つて玉子は又歔欷けた。

『お前、此頃、餘程何うかしてるよ。』かう母親はたしなめるやうに玉子に言つた。母親の眼には、此頃の玉子の狀態が常に心配の種になつて映つて見えてゐた。ひどく神經性になつて、ちよつとしたことにもすぐ涙をこぼすかと思ふと、厭に氣味のわるいほど、はしやいで面白くもないことに聲を擧げて笑つたりなどした。その日も一日眼の緣を赤くして、時々思ひ出したやうに涙を袖で拭いてゐた。

それから二三日經つたある日の午後に、玉子は田舍から來た手紙を受取つたが、何と言つてもそれを母親に見せなかつた。玉子は唯默つて蒼白い突詰めたやうな顏を見せてゐた。それは田舍から別な人が來

んか見たくもない……』かう玉子は素氣なく言つて、『私も病氣にでもなつて、早く海岸にでも行つて死んで了ひたい。そしたら、可哀相だと思つて泣いて吳れる人もあるから。』玉子はいつか讀んだ小說の中に其身を置いてゐた。

ある日、茶の間で新聞を見てゐた玉子は、突然に言つた。『ま、染次さんが情死した！』

『誰が？』

勝手元にゐた母親は驚いて此方に來た。『染次さんツて、そら、『母さんは知らないかねえ、常盤屋の抱妓よ。私、仲が好かつた人よ。』かう言つて、玉子は其處に書いてある半段ばかりの悲慘な記事を見た。玉子の體は震へて來た。

『何處でだえ？』

『あの千代本ツて言ふ待合でだよ。』

玉子は其奧の一間をよく知つてゐた。血塗れになつて二人で苦しんで死んでゐる處へ入つて行つたお元さんの吃驚した顏なども眼に見えるやうな氣がした。玉子はゾッとした。淚が流れて來た。

銀行に出てゐる人と言へば、玉子も餘所ながら知らぬでもなかつた。男の方はその日の夕方まだ生きてゐたが、女は其時旣に見事に死んでゐたと書いてあつた。玉子は新聞に顏を押當てたまゝ、長い間默つて坐つてゐた。歔欷げる度に、髷のところが微かに搖いた。

に常に際立つて見えてゐた。
玉子の心持が母親には不憫に思はれた。思ひ詰めた若い女心をかねて知つてゐる母親は、つとめてそれを慰めるやうにした。成べくその話を避けて、芝居や物見遊山の面白い話などをして聞かせた。『何も、そんなにくよ〳〵するには當らないよ、お前、世の中は廣いぢやないか。』母親がかう言ふと、『私、何にもくよくよなんかしてやしないわ。母さんには私の心なんかわかりやしない。』かう投げるやうに言つて、玉子はつまらなさうに外の方へと出て行つた。
くさ〳〵して髮を梳く氣にもならず、一日はひらないでも氣持がわるいと言つた湯にも行かず、氣分がわるいと言つては、亂れた髮を此方に見せて、終日床の中に入つてゐることも尠くはなかつた。さういふ時には、厚い古い小說本などに讀み耽つて、自分の身につまされるやうな女の心持に引くらべて、獨りで歔欷げて居たりなどした。
『少し三味線でも彈いて御覽な。』かう母親に言はれて、機嫌の好い時には、袋を外して、こまをはめて、一つ二つ好きな都々逸を爪彈で彈いて見ることなどもあるが、唄の文句が一々身につまされるといふやうな風で、玉子はすぐ三味線を下に置いた。溜息がつゞいて出た。
『穴守の叔母さんの處へでも行つてお出でよ。』
餘り詰らなさうにしてゐるのを見兼ねて母親が言ふと、『行つたつて、詰らない……。叔母さんの顏な

いく〳〵溜息をついた。

夜中に母親が眼を覺ました時には、明るいランプの下で、蒼白い顏を氣味わるく此方に見せて、玉子は長い長い手紙を書いてゐた。

十七

度々人が遣つて來たりしても、話は纏まらずに一月二月と經つて行つた。玉子はその後何遍となく手紙を書いたが、その返事はいつも要領を得ないやうなものが多かつた。『その中行く』と書いてはあつても、小林は遂にその姿を見せなかつた。家の人達は早くも事件の成行を豫想した。『お前、そんなこと言つたつて、先樣だッて都合があるッて言ふんぢやないか。ちやんとおもてむきに一緒になつたッて言ふ譯ぢやなし、餘りくよくよ思つたッて仕方がないよ。先樣だッて、人まで入れて話しをつけようとしてるんだからね。』こんなことを母親は言つた。

『私は何うしても厭！　小林に逢つてからでなくつては厭です。』

かう言ふ時には、玉子の顏には神經の昂つたやうなピリ〳〵した色が歴々と見えてゐた。絶えず玉子は口惜しさうに下唇を咬んだ。格子を明けて郵便配達夫の入つて來るのを待ちかねて、胸を躍らして受取つた男の手跡の封書を見る見るピリ〳〵破いて棄てたりした。蒼白いヒステリックな顏は、狹い家の中

御返事も出來ないッて言つてやらなかつたの？』
『それは言つてやつたよ。』
『本當に大きなお世話だ。嫁に行くなら、何んな支度でもさせてやるからなんて、小林は言つたんだらうか。』
『それは言つたんだよ、屹度……』
『私、欺されたのね。』かう思ひ詰めたやうに言つた玉子の眼からは、涙がほろ〳〵こぼれて落ちた。何も知らずに、心を任せて置いたのが口惜しいと共に、このまゝ小林にわかれて了ふのが堪らなく辛いのを玉子は感じた。『私、ちよつと行つて來ようかしら？』
『行つたッて、仕方がないよ。向うで、さういふ心算なら、行つたつて逢ひやしないやね。恥ざらしに、笑はれに行くやうなもんぢやないかえ？』
『それもさうね。』
蒼白い疳の高ぶつたやうな顔をして、玉子は頻りに下唇を嚙んだ。『お前、そんなに考へ込まないたッて好いやね。その中、小林が出て來るッて言ふんだから。その時、話せばわかるぢやないか。』かう母親が言つて聞かせても、矢張玉子は落附いてゐられなかつた。後には深く考へ込んだやうに默つて坐つて、母親が知らせて行つても、夕飯の膳に向はうともしなかつた。をり〳〵堪らなくなつたといふやうに深

『それから？』

『でもね、さういふことを根に持つてゐるんぢやないつて、それは繰返し繰返し言つて行つたよ。私達が家を疊んで此方に來る時には、小林もまだその積でゐたんださうだけれど、家の方が大變やかましくつて、今、切れゝば金を出してやるが、一緒に家を東京に持つやうなことがあれば、終には小林も家に入ることが出來なくなつて了ふやうな風なんだツて……そこを間違つて取られないやうにツて、繰返し繰返し言つて行つたよ。しかし、其中、小林は來るには來るんだらう。何だか縣會のことや何かで此頃は忙しいんだとさ。』

母親も氣が拔けたやうにぐつたり言つて、傍にある長煙管を取上げた。

『人を馬鹿にしてるよ。』

玉子はかう言つたが、すつと立つて座敷の方へ行つた。思つてゐたことが氷のやうに解けて行つて了つたのを玉子は見た。心が急に進み立つて來た。復讐の爲に石原は何を饒舌つたか知れなかつた。玉子には何も彼も今になつて意味をつけて蘇つて來るのが口惜しくもあり腹立しくもあつた。周圍の人達が何の彼のと邪魔をして、二人の仲を割いて行つた樣なものだ。母親が心配して暫くしてから行つて見ると、玉子は淺田の置いて行つた机に寄りかゝりながら、ぼつとしたやうにして庭の方を見てゐた。

『母さん、何故、その時もつとはつきり言つてやらなかつた？　當人に御目にかゝらなければ、何の

長火鉢の前に來る母親を促へて、玉子はすぐかう訊いた。

『別に、さう深い話もして行かなかつたけれどもね、小林に賴まれて來たには來たんだよ。何うも、ちよつと都合がわるくつて、お氣の毒だけれども、お約束したことは出來ないッて言ふんだよ。小林の内の內情などを話して行つたよ。いづれ、小林が自分で出て來るには來るが、何うか、それだけ言つて吳れッて賴まれて來たんだッて言ふことだよ。』

『それで何うなの？』

『それについては、お前の身の定るやうにするにはするッて言つてゐたよ。何處か相應な處に嫁にでも行くのなら、支度でも何でもしてやるッて言つてゐたよ。』

玉子はキッとして、

『それを母さん默つて訊いてゐたの？』

『默つて聞いてゐやしないけれど、さういふんだから仕方がないぢやないか。……矢張、私の言つた通りだよ。町で評判に立てられたことなども言つたよ。』

『何んなことを言つたの？』

『保さんと一緒に桃見に行つたことなども言つてゐたし、小林が來た時に、元のお前の馴染か何かゞ來てゐたことも言つてゐたし……それに、石原も何か言つたらしいね。』

『何ういふ人？』

『辯護士か何かしてゐる人らしいよ。』母親は低い聲でかう言つたが、茶をさしてから、眼色と顏色で、『お前、逢つたら何う？』といふ素振をして見せた。

玉子は頭を強く振つて見せた。

襖をしめて母親の向うに行つたあとで、玉子は長火鉢の火箸に手と額とを當てたまゝ、凝と深い思に沈んだ。棒か何かで烈しく體を打たれたやうな氣もした。欺された、と思ふと、熱い熱い血が體中に沸き上つて來た。『その中行くよ、』と言つて莞爾笑つた小林の顏も眼の前を通つて行つた。『それで手紙も碌々よこさなかつたんだ。』かう思つて玉子は下唇を嚙んだ。涙が流るゝやうに頰を傳つて落ちた。

やがて再び入つて來た母親は、『ちよつと逢つて行きたいッて言ふんだよ。』

『私、厭！』

『でも、もう歸るッて言ふんだから、ちよつと逢つた方が好いよ。』

澁々ながら玉子は母親と一緒に座敷の方へ行つた。玉子は小生意氣な色の白い若い男を見た。別に何も話はしなかつた。客の方でしやうとしても此方で受けつけないといふやうな風を玉子は見せた。やがて客は歸つて行つた。

『一體何うなの？』

乞にやつて來たりなどした。玉子は機嫌のわるいはずまない顏色をしてつまらなく一日々々と暮した。

ある日玉子は外から歸つて來ると、上がり端にフランス革の赤靴とステツキとが置いてあつて、座敷では、母親と客とが何か頻りに話してゐた。

玉子は誰かと思つたが、挨拶するのが面倒臭いので、すぐ茶の間に入つて、長火鉢の前に坐つた。男には似合ない靜かな聲で、丁寧に受け答へしてゐる母親の聲の方が却て高くはつきりと聞えた。初めて訪ねて來た人らしかつた。誰だらうと初めは唯思つてゐた玉子の耳は、いつかその中其方へと引きつけられて行つてゐた。後には體がピツタリとそこに膠着いて了つたやうになつて耳を欹てた。玉子は俄に烈しい心臟の鼓動を感じた。

『それは構ひませんけれど、あの子が折角樂しんで居りましたことですから……』かういふ母親の聲に續いて客の細い丁寧な靜かな聲が聞えた。

やがて茶をさしに襖を明けて此方に入つて來た母親の顏には、毎もに似合はず激した色が名殘なく上つてゐるのを玉子は見た。『お前かえ？　今歸つたのは？　父さんかと思つた。』母親はかう言つたが、すぐ玉子の傍へ行つて、耳の傍に顏を寄せ二言三言話した。

『さうなの？』

玉子の顏はサツと赤くなつた。體がぶる〳〵震へて來た。

の宿を通つてゐるやうな氣分で、彼方此方とよく出歩いてゐた。滅多に行つたことのない叔父さん達の家へも訪ねて行つた。そこには母方の祖母がゐて、『咲ちやんかえ？　綺麗になつたね。丸で見違へるやうになつたね、』などゝ言つて喜んで呉れた。玉子は幼い時分のことなどを聞きながら、のんきな心持で、小半日も其處で遊んで來た。

で、かうして十日ほどは玉子は何も考へずにぶら〳〵と唯遊び暮した。小間物屋を始めるに都合の好いやうな店なども彼方此方と聞き合せて貰つた。父親が聞いて來た神田にある店は、位置はさう大して好くはないが、割合に格安で、現在やつてゐるものをそのまゝ讓受けることが出來るといふ話であつた。其他にも一つ二つ聞込んだ店などもあつた。と、急に、田舍の方から便のないのが玉子には心配になり出して來た。あれから手紙が一本來たばかりで、何の音沙汰もない。こつちから出した手紙にも碌々返事がない。三度も此方からやつて漸く來た手紙では、折あしく町にゴタ〳〵があつて、體が明けられなくつて困る。しかし、其中行くから、もう少し待つて居れといふことであつた。月末には手當を爲替で送つてよこした。

『何うしたんだらうね、』などゝ母親も玉子も言ひ暮してゐた。『私、一度行つて來ようかしら。』玉子はかうは言つては見たものゝ、一度引揚げて來た町の人達に今更顏を見られるのも厭であつた。月日は段々經つて行つた。保の家ではまた田舍へ行かなければならなくなつたといつて、保がある日わざ〳〵暇

ゐたが、それでも別れる時には涙を流さぬばかりにして停車場まで送つて來た。

靜かな川や、橋や、川に望んだ明るい座敷や、折角懇意になつた田舍の人達にも別れて行くのが辛かつた。停車場では、玉子は其處で別れて行つた淺田のことなどを思ひ浮べた。

『僕は停車場まで送つて行かないからね。その中行くよ。』かう言ふ小林と玉子は其家の上り端のところで別れて來た。昨日は一日荷造りや何かで忙しく暮れた。家を持つ時小林が買つて呉れた道具類は、すべて賣拂つたり人に呉れてやつたりして來た。

汽車が鐵橋の上を行く時には、玉子は窓から顏を出して四邊を見廻してゐた。橋の上には矢張田舍の人達が步いてゐる。川に臨んだ藤棚は、もうすつかり濃い綠葉になつて、初夏の日が美しく欅の若葉に照り渡つてゐる。玉子は一枚の袷の終りに立つてゐるやうな氣で、過ぎて行つた年月を振返つて見た。其處には種々な光景があつた。熱い情などもあつた。玉子は其處此處に大勢の人に取卷かれた自分の姿を見た。

『お前、荷物はあれで大丈夫なのかえ？』

氣が附くと、母親はこんなことを言つてゐた。お下げに結つた妹は、めづらしさうに野に出てゐる百姓などを指した。麥は黄くなつて、涼しい風は窓から流るゝやうに入つて來てゐた。

家に歸つてからも、玉子は新しい世の中へ入つて行く前のやうな氣分で、寧ろ此方から彼方へ行く中

今は本當にそんなことはないんだから……』

『いゝよ、いゝよ、わかつたよ、』などゝ小林は笑ひながら言つた。

『本當に、私、堅氣になるわよ。これから貴方ばかしよ。好くつて？』かう言つて艶な眼色をして、『でも、つまらないわねえ。貴方にはあんな好い奥さんがあるんだから。』

小間物店なら、さう大した資本もいらない。それに、少し位店を綺麗にしたッて、このしつかりした確かな後楯があれば大丈夫だ。こんな風にも玉子は思つた。一度潰れた家運もこれで取りかへすことが出來るやうにも考へた。

二三日後には、母親は東京から小さい妹をつれてやつて來て、小林に逢つて、更に細い話を聞いた。母親も喜んだ。此頃好いことのつゞくのも不思議だッた。母親は本屋へ行つてゐる定雄が小僧から小賣係の方に廻されたことなどを玉子に話した。始めて一緒に田舍につれて來た妹は、今年十二になつて、丈も大きく、可愛くお下げなどに結つて紅いリボンなどをかけてゐた。『福ちやんッて言ふの？　可愛い兒だね、今に別品さんになりますね。』などゝ小林は言つた。

小林の出して呉れた金で玉子は綺麗に田舍から引上げることが出來た。料理屋を始め、懇意な人達には贈物をしたり暇乞をしたりして歩いた。『たうとう歸ることになつたんだつてね。』かう蔭口を言ふものなどもあつたが、玉子は別にそれを氣にも留めなかつた。石原の細君は、薄々石原との關係を知つては

玉子に取つては、それはかねて望んでゐたやうなものであつた。玉子は一も二もなく喜んで承諾した。小林が東京に親類筋になつてゐる老肆の唐物店の話をした時には、『さうね、小間物屋は好いわねえ。藝者屋も好いけれど、面倒で、口やかましくつて、厭な稼業ですからね。さういふ大店に親類があるんなら、小間物屋なんか綺麗で好いわねえ、私、母さんと二人でするわ。父さんは、此間、漸く口があつて役所の方へ出たッて言ひますからね。それが好いわ。母さんとするわ。綺麗な二階がある家か何かでね。そこに貴方がやつて來て泊つて行くなんて、ちよいと昔の繪本などにありさうね。それには、今ゐる處も好いけれど、牛込か本郷あたりが好いわよ。人形町あたりなら猶好いけれど、あそこいらはちと賑かすぎるわねえ……でも、貴方、始終來て下さるかしら。一月に一度か二度ではいやよ。』玉子はかねての願ひが漸く遂げられたやうに嬉々して、『さうすれば、私、もう貴方のことッきり考へてゐないわ。浮氣なんかしないわ。堅氣になるわ。だッて、稼業なんかしてたりすると、何うしたつて、他が放つて置かないんですもの。何うせ、藝者だつて世の中では思つてるのね。さうすれば私、地味につくつてすつかり素人になるわよ。嬉しい。』かう言つた玉子の胸には、此間、醬油の出來る田舍町の馴染の客がふと訪ねて來て、二人で何か面白さうに話してゐる處へ、突然小林がやつて來て變な顏をしたことなぞが思ひ出されてゐた。

『貴方、此間のことは、もうわかつてね。疑つてゐては厭ですよ。稼業をしてゐる中は知らないけど、

した身上話なども出た。『しかし本當に、こんな稼業をしてるのも、お前の一生の上から考へると、損だよ。今の中よく考へて見なけれやいけないよ。好い緣があつたら思ひ切つて身を固めるんですね。僕の友達に欲しがつてる人があるから周旋してやらうか――』後は戲談のやうにして言つた。

『厭なこと、私はそんな移氣ぢやないんですから、これでも――』

玉子は男の胸に顏を押當てゝ、堅く手を握つた。夕暮から催した細かい靜かな雨は、急に庇のトタンに音を立てるほど大降になつて、戀の唄を歌ひかはしてゐるやうな蛙の聲がそゝるやうに裏の田圃から聞えて來てゐた。『好いわね、今夜は、泊つて行つても……たまには好いわよ。』かう玉子は男に言つた。

十六

足元から鳥が立つたやうに、急に玉子は川緣の町から引上げることになつた。病院から歸つた後、小林は四五度も來たらうか、ある日突然かう言ひ出した。『何うも困つた。あの事で石原をしくじらしてしまふのも可哀相だ。長年私の爲めにも、私の家のためにも盡して吳れた男だからね。それに、あいつ、爺に氣に入つてゐるから、仕方がない。お前、何事もなかつたやうに一時此家を疊んで東京の方へ歸つてゐて吳れないか。僕はその中都合を見て、東京で一軒家を持つなり、藝者屋が出來なければ、小間物店でも何でも持たせるやうにするから。何うも田舍は煩さくつて仕やうがない。』

小林はちよつと顏を曇らせたが、別に驚いたといふ風も見せなかつた。フムなどゝ言つて唯考へるやうな顏をした。

『石原さん、何か言つて？』

『うむ、ちよつと聞いたことがあるがね――』暫く默つて考へて、『まァ、餘り氣にかけないで、ソッとして置いてお呉れ、僕にも考へることがあるから。少し考へるから……』

『石原さん、何んなこと言つて？』

『何ァに、何でもありやしないよ。ちよつときまりがわりい、濟まないやうなことを言つてるたッけ……』

『さう……私のこと何か言つてやしなくッて？』

『いゝえ、別に……』

『なら好いけど、あの人變な人ね。』

小林は默つてまた考へるやうな顏色をした。續いて玉子が此間中から考へてるた話を持出した時には、『それも考へてるるよ。實際、田舍は煩さいからね。ちよつとしても、すぐ評判に立てられるんだからね。』かう小林は言つて、『しかし、まァ二三日考へさせて呉れ……。石原の話もそつとして置いてお呉れ。』

その夜はいつもに似合はず、小林は緩くりして、玉子の母親の話や弟妹の話などを何彼とした。染々

ヒヤヒヤしてゐた石原の來ないのが玉子には嬉しかつた。

『もうすつかり好いの？』

『漸く治つた。』かう言つて小林は入院中の話などを何彼とした。『僕がゐないんで不自由だッたらうね。石原はよく世話をして呉れたかえ？　さうかえ？　母さんが來てゐたのかえ？　さびしかつたらうからな。しかし母さんには氣の毒だッた……さうも思つたよ。病院にも來て貰ひたかつたよ。でも妻はゐるしね、四邊が煩さいからね。』

玉子は染々奥さんが羨ましかつたといふ話などをして笑つた。

『そんな風に思つてゐるのかねえ……でも手紙は度々有難う。』

『私、ね、もつと詳しく書いて上げたいこともあつたんですけれども、石原さんの手からでなくては駄目なんでせう。細いことは書けはしなかつたわ。』

機嫌の好い顔をして小林は風呂上りの後の酒を過した。玉子も二三杯猪口を口に當てたりした。言はうか、言ふまいかと玉子はまだ其時まで思ひ惑つてゐた。もう一度母親に相談してからとも思つた。しかし言はずには置かれないほど玉子の心は男の方へ縋つて行つてゐた。

玉子は男の胸に顔を當てながら靜かに話した。

『さうかえ？』

此方を見た小林は、『よ、其處にゐたのかえ。今行くよ。ちよつと、郡役所に寄つてから……』
『でも、まァ、嬉しい。いつ退院していらつしやつたの？』
『今、出て來たばかりだよ。』
『奥さんは。』
『停車場から一足先きに歸した。』
『さう。』玉子は嬉しさうにして、『ぢや、早くよ、待つてゝよ。』
玉子は胸の躍るほどの嬉しさを覺えながら、何んの彼のと姐さんの旦那に冷かされるのも嬉しく、歸るとすぐに風呂に水を汲み込ませたり酒の支度をさせたりした。自分は自分で一昨日結つた丸髷の形の崩れかけたのを氣にしながら、長い間鏡臺に向つて、鬢だの髱だのを一生懸命に梳いた。それがすむと、簞笥から派手な友禪の長襦袢を出して着て、好きなお召の一枚着の上に笹の模樣の出た帶をキウとしめた。
一時間待つのも長いやうな氣がした。
『何うしたんだらう、旦那は？』かう言つて、玉子はわざ〳〵婢を郡役所の方へ見せにやつた。
やがて小林は來た。
『隨分遲いのねえ。』
『これでも早く來たんだよ、』などゝ言つて小林は莞爾した顏を見せた。一緒に來やしないかと思つて

舞にも出かけて行くことの出來ない身を傷みながらさびしく暮した。圍はれた身の辛さなども染々と思ひ廻された。あのやうな人と公然一緒に何處へでも出かけて行かれる身であつたら何んなに仕合せだらう。こんなことも考へた。一人でさびしいにつけて、一日も早く病院から小林の歸つて來るのが待たれた。

病院から歸つて來たら、石原のことは二の次ぎとしても、かうした不自由な籠の中の鳥のやうな田舍の生活には堪へられないから、早く東京に家を一軒持たせて貰はう。藝者屋を始めさせて貰へば、猶ほ結構だが、都合でさうでなくつても好い。玉子は唯一刻も早く口の煩い、邪魔の多い、石原などいふ厭な男のゐるこの田舍から、二人きりで思ひのまゝの樂しい生活の出來る東京へ行きたいと思つた。小林の繁々遣つて來ないのは、四邊に氣を兼ねてゐるからである。二人だけなら、何んなにでも機嫌を取ることが出來る。かう思つて、玉子は、獨寢の床の中で、嬉しかつたその夜の逢瀨のことなどを思ひ浮べた。色の白い髯の濃い顔などもはつきりと見えて來た。髭と口元の處にある何とも言はれない愛嬌を思ひ出した時には、玉子は體中が火のやうに熱くほてつて行くのを覺えた。

あの日の午後退屈まぎれに澤屋へ行つて、姐さんの旦那を相手に、戲談などを言つてゐると、前の格子を透して、車に乘つて、のんきな顔をして、小林が通つて行くのが見えた。

『あれ、旦那？』

かう言つて玉子は其處から何も彼も忘れたやうに飛び出して行つた。

やうにした。

『だッて、お前は石原と一緒によく出て歩いたり何かするッて言ふぢやないか。それから、石原は毎日のやうにやつて來て、酒など飮んで、遲くまで話して行つたんだッてね。』母親はかう言つて玉子の體を捜すやうにして、『それからお前、此間は若い人と歩いてゐたッて言ふぢやないか。』

『それは保さんよ。』

『保さんが來たのかえ……』母親は玉子の方を見て、『自分が潔白だからつて、そんなことをしては評判になるよ。旦那の留守の時には、成たけ氣を附けなくつちやねえ、お前……』

『だつて、私、潔白なんだもの。』

『世間はさうは行かないよ。』

石原の話を小林にして好いものかわるいものか、ちよつと玉子は思ひ惑つた。

『滅多なことは出來ないよ。』かう言つた母親の言葉にも道理があつた。世の中は玉子にはまだ解つてゐないやうなものであつた。此儘にして默つて過ぎようかとも思つたが、あゝいふことを一度はして置いて、今では忘れたやうな顏をしてゐる石原の心の底もはかりかねた。用事が出來てちよつと母親の東京へ歸つて行つた夜は、澤屋の婢に來て泊つて貰つた。

此頃小林の方へ益々心の偏よつて行つてゐる玉子は、かうして手紙一本書いてやることも出來ず、見

『僕だツて何とも思つてゐやしませんよ。戲談ですよ。』
かう笑ひながら石原は言つたが、しかしその眼は矢張何事かを語つてゐた。
『困るねえ、』など丶母親も言つてゐた。しかしこの場合別に何うすることも出來なかつた。玉子は玉子で、『だつて餘りぢやないの。そんな人とは思はなかつた。東京に藝者屋を出させるやうにッて勸めたのも、さういふ腹があつたからですよ。出來るも出來ないも私の腕だ腕だッて何遍も言ふから私は變に思つてゐたのよ。さうよ、屹度さうよ。自分はかげにゐて、旦那をあやつッて、旨くしやうと思つたのよ。』
『さうかねえ、そんな人かね。』
『旦那が歸つて來れば、私、すつかり言つてやるから好い。』
『滅多なことは出來ないよ。』
『大丈夫よ。』
石原は一晩泊つて、その翌日歸つて來た。『大變よくなりましたよ。もう立つて歩けるやうになつたから、退院もぢきですよ。』こんなことを言つて、土產に買つて來た菓子折などを持つて來た。別に何とも思つてゐないやうであつた。
しかし玉子は母親からやがて思ひもかけないことを耳にした。それは澤屋から母親が聞いて來た話で、玉子と石原との間はもうとうに出來てゐて、町でも評判だといふことであつた。玉子は驚いて目を睜る

玉子はその夜母親に長い／＼手紙を書いた。

そのあくる日に母親の來てゐるのを石原は驚いたやうな顏をして見てゐたが、しかし別に表面には何も出して言はなかつた。『大丈夫ですよ。そんなに心配しないでも。私だッて無理な事はしませんから。』かう一方では見せてゐながら、一方では耻辱を受けた復讐と離れがたない戀慕とを、眼色と口振とで石原は巧みに示した。

『明日は早く病院の方へ行つて來ようと思ふんですがね。手紙でも上げませんか。さびしがつてゐるでせうから……』かう言はれた時には、玉子は氣味のわるい烈しい意思がその裏面に包まれてあるのを發見して暗い厭な心持になつた。何うかして、一時機嫌を取つて、小林の歸つて來るのを待ちたいと思つた。それに、石原が自分より先に病院へ行つて小林に逢ふといふことも氣遣はれた。石原は何を言ふかわからなかつた。玉子はその前に詳しく手紙を書いてやりたいと思つた。しかし石原の手を通してより他にはそれも出來なかつた。病院には細君がついて行つてゐた。

小林が病院に入つてからは、もうかれこれ一月半になつてゐた。此頃では大分好くなつて、月の末あたりには退院して來られるとは聞いてゐたが、それまで玉子は待つてゐられないやうな氣がした。玉子は石原に言つた。『何か貴方考へちがひしてゐるちやいやですよ。何だか變ね。私は別に何にも思つてゐやしないんですからね。』

羽織の紐を長く垂らした學生だの、瓢簞を持つた白鬚の品の好いお爺さんなどがぞろ〳〵下りた。桃は今が見頃だなど丶見て來た人達は話した。ある日、玉子は石原に誘はれて行つて見たが、その二三日後には、思ひもかけず保がひよつくり玉子の家を訪ねて來た。

一緒に桃見に行つた二人は、歸りは川の土堤の上を歩いて、下流にある大きな森の社に參詣したりした。途中で二人は町の人達に幾人も逢つた。石原は石原で、『此間は東京からめづらしいお客があつたさうですね。』など丶意味ありさうに言つた。

變だと思つては居たが、まさかにさういふ心が石原にあらうとは玉子は思はなかつた。ふと氣が附いた時には、石原は何うしても自分の思ひ通りにしなければならないといふやうな熱い心を開いて見せてゐた。『これがわかれば、僕はもう此處にはゐられないんですからね。……これでも僕が隨分玉ちやんを思つてゐたつて言ふことがわかるでせう。僕の心持だッて少しは買つたッて好いでせう、』といふ風なことを言はれた時には、玉子は何うして好いかわからなかつた。酒にでも醉つてゐる時なら、戲談にしてまぎらして了ふことも出來るが、しらふで言はれただけ、玉子は一層困つて了つた。玉子には今まで石原の言つた言葉が皆なある意味を持つて蘇つて來た。自分の身の上を隱さずに話したことなどもつく〴〵後悔された。『だつて、私だつて……それは困るわ。旦那に知れ丶ば矢張大變ですもの。』玉子はかう言ふより他は仕方がなかつた。

かりかねた。
何かの次手に、玉子は小林に藝者屋を出す話を持出して見た。『それも好いね。その內考へて見るよ。』こんなことを小林は言つたが、別に深くそれを考へて見るといふ風ではなかつた。『だッて、私だッて、淋しいわ、一晩だッてゆつくりしていらつしやることはないんですもの。』玉子は後にはこんなことを言つて促した。
『石原もそんなことを言つてゐたッけ。』
小林はある時かう言つて笑ひながら玉子の顏を見た。
自轉車をひつくりかへして、思ひもかけない怪我を小林がしたのは、それから三月ほど經つてからのことであつた。何でも脚をひどく挫いて、田舍ではとても療治が出來ないと言ふので、その翌日すぐ汽車で東京の赤十字病院に入院することになつた。玉子は蔭ながら停車場まで見送つたが、細君と母親とのついてゐる小林には、言葉一つ交すことが出來なかつた。さうかと言つて、病院には猶更訪ねて行くことが出來なかつた。玉子は石原の手を透して種々なことを聞くだけで滿足しなければならない身を悲しんだ。石原は月々の手當の金と小林の手紙とを持つて來て吳れた。
玉子は一月ほどさびしく暮した。思ふやうになつて行かないのがつまらなくもあつた。ぽつ〳〵暖かくなつて、東京から大勢桃見にやつて來るやうな時分であつた。汽車からは、洋服姿の役人風の男だの、

取るやうにするんですね……。それや、何ッて言つたッて、東京の方が好いからね。第一自由がきくからね。田舍では、ちよつとのことでも、すぐ噂に立つて了ふから駄目ですよ。』

『本當ですとも……。さう出來れば、私も家が近くなるし、願つたり叶つたりですけども……』かう言つた玉子は細君に氣兼をして來ても落付いて居ない小林のことだの、手紙をやつても返事も碌によこさない保のことだのを頭に浮べてゐた。暫くしてから、

『本當に出來るでせうか？』

かう思ひ込んだやうに玉子が言ふと、

『出來るも出來ないも、玉ちやんの腕一つぢやありませんか。』

かう言つて石原は厭に笑つて見せた。

『本當に出來れば嬉しいけど……』

『それは出來ますよ。』

石原は凝と玉子の顏を見た。

その時に限らず、石原は自分で酒を賴んで買つて貰つたりすることが段々多くなつて行つた。時には鰻丼を取つて婢にまで御馳走をしたりなどした。玉子は別に何とも思つてはゐなかつたけれど、何だか旦那の留守が氣になるやうな心持もしないではなかつた。一緒に住んでゐる料理屋の姉さんの思惑もは

内情を石原からよく聞かされた。小林の周圍にゐる友達の話、町會や郡會などでの小林の位置の話、田地や小作人の上りの額などまで玉子は石原から聞くことが出來た。『金はそれはあるんですから、旨く言へば、いくらでも出すんですよ。』石原はこんなことをも言つた。

ある夜、石原は遲くまで遊んで行つた。尺八を吹いて聞かせた後で、望んで玉子に長唄を彈いて貰つたりなどした。『何故だか、今夜はひどく面白い。小林君、やつて來ないかな。』などゝ言つて、自分で賴んで、婢に酒と肴とを取つて來て貰つた。平野に吹荒るゝ西風が凄じく欅の梢を鳴らして、これが止んだら、雪になるだらうと思はるゝほど、もう寒く〳〵なつてゐた。奥の一間には火燵がしてあつたりした。

石原の深切な言葉につれて、玉子は其夜はついいろ〳〵な話をして了つた。父母のこと、弟妹のこと、東京で初めて藝者になつた時のことから、淺田や保のことなどまでも話した。『役者ッて面白いもんですよ。』そんなことを言つて玉子は笑つた。

『しかし玉ちやん、本當にこんな田舍に、ぐづ〳〵してゐては駄目ですよ。こんな處で抱妓を置いたッて碌なことは出來やしないんだから。それに田舍では煩さいからね。小林君が落附いてやつて來ないのも、つまりは四邊に氣を兼ねてるからですよ。一つ、小林君に說いて、東京の何處かに藝者屋を出して貰ふやうにするんですね。大將は、玉ちやんには隨分氣があるんだし、それ位のことはぢきして吳れますよ。』石原はこんなことを言つて、『僕も折を見てさう言つて上げるから、玉ちやんも精々機嫌を

『そら御覽なさい、とう〳〵あやまつたわ――。ぢや勘忍して上げるわ。』

玉子は得意さうに手を拍つて笑つた。

飛び乘つたと思ふと、小林は巧に中心を取つて、スーと平らな道を滑らかに輾らせて行つた。で、やがて遠くなつて行つた自轉車の姿は、夕日のさし透つた松並木の中に、いつまでもいつ迄もはつきりと見えてゐた。

石原は何彼につけて他人でないやうな深切を見せた。東京から貰つたなど〻言つて、旨い菓子をわけて持つて來て呉れたりした。小林の來ない日はあつても、石原の姿を見せないことはない位であつた。周旋屋にはめられて、身重になつてゐる抱妓を知らずに置いた時などには、一層常より骨を折つて、小林と玉子との間に立つて、骨肉も及ばないやうな世話をして呉れた。『石原さん、今日は何うしたんでせうね。』『偶々遣つて來ない日には、玉子は何となく物足らないやうな氣がした。

小林ばかりではなく、小林一家にも石原は深く取入つてゐるらしかつた。大旦那の妾が東京にゐて、それに今年十歲になる男の子があつて、年を取つた大奧さんが、それを妬いて仕方がないと云ふ話などを石原は玉子にして聞かせた。『坂田の小林ッて言へば、大したもんだけど、矢張、家庭は難かしいもんですね。大旦那ッて言ふ人は、それはやさしい氣の置けない人で、昔は隨分道樂もしたんだッて言ひますがね。小林君に好く似てゐますよ。』など〻も話した。玉子は小林も話さないやうな大きな豪農の內の

『困るなア。』

こんなことを小林は言つたが、終には仕方がないと言ふやうに、『ぢや、先きに歸つてゐるよ。』かう言つてすぐ自轉車に乘らうとした。

『少し一緒に歩きませうよ。滅多にこんな處を歩きたいッて、歩けないのだから。私が自轉車を押してあげるわ。』

『馬鹿を言つてる。』

かうは言つたものゝ、これも矢張仕方がないといふやうに、小林は自轉車を輕く手で押して、靜かに後へ戻つて行つた。『そら、御覽なさい、勝つたわねえ。』などゝ女達は囃した。

少し行くと、川は大きなカーブを描いて、土堤の上にある松並木の梢からかけて、一面に明るい夕日がさしわたつてゐた。松並木の間からは、茅葺屋根だの大根畠だの水田だのがチラ〳〵と透いて見えてゐた。

女達は面白がつて、キャッ〳〵言つて、自轉車を押してやつたりなどした。『私には乘れないかしら。』玉子はかう言つて、二人に押へて貰つて、物ずきに乘つて見ようとして、危く倒れかけて聲を出した。

一二町はこんな風にして縺れるやうにして歩いて來たが、『本當に勘忍して頂れ、先きに行つてゐるから、押して行かせられては大變だから。』

かと思つた。』

『さう？　寄つたの？』

玉子は嬉しさうにして、『もう一度、うちの方へお歸んなさいよ。』

『いや、今日はさうしてゐられない……。少し用があるから。』

『いゝぢやないの、ねえ照ちやん。』力にするやうに抱妓の方を見て、『折角、此處で逢つたのに、歸しちやつまらないわ。』

『まア、さう言はずに、今日は少し用があるんだから。』

歸らうとするのを引留める女の姿と自轉車と中折の帽子とは、暫しの間其處に離れたり縺れたりしてゐた。蘆の穗の白い川は夕暮近い赤い雲を靜かに映してゐた。向うの土堤には、頰かぶりをした百姓が鼻唄を唄ひながら空車の音を立てゝ通つて行つた。

『何うしても歸さないわ。そんなに奧さんのことばかり心配しなくつたツて好いぢやないの？』玉子は兩手をひろげて無邪氣に『とうせんぼ』の眞似をして、

『照ちやんも手傳つて頂戴よ。』

『今日は本當に困るんだから。』

『困つたつて好いわよ。ちつとは私の心だツて察しても好いわよ。』

一緒にゐた澤屋の婢が教へて呉れた。かういふ大きな邸に何不足なく暮らしてゐる細君を玉子は羨ましく思はずには居られなかつた。

歸りにも同じ長い土堤を通つて歸つて來た。少し來たところで、一緒に行つた抱妓が不意に、

『姐さん、旦那よ。』

『うそ！』

『うそぢやなくつてよ。そら御覽なさい。』

向うから勢ひよく自轉車を走らせて來るのは、確にそれであつた。『まア！』と言つてゐる中に、自轉車は滑らかに此方へと近寄つて來た。

『何處へ行つたの？』

自轉車を下りた小林は、莞爾した顔をして、二人の方へ歩いて來た。

『何だ？　さうかえ？　家を見に行つたのかえ？　つまらない。』かう續いて言つて、『誰かに見つけられはしないかえ？』

『大丈夫よ。』

『でも、そんな恰好をして、あそこいらをまごくしてゐては、人が不思議に思つたらうね。困るねえ。』

ちよつと笑つて見せて、『僕は今ちよつと寄つて見たら、二人で出かけたッて言ふから、何處へ行つたの

いて行つた。そこまでは町からは小一里あつた。川の岸には、漆の眞赤に紅葉したのがあつて、枯れた蘆を長い鎌で人がサク〳〵刈つてゐたりなどした。收穫の大方濟んだ野には、刈稻がかけて干してあつたりして、初冬の晴れた日影が靜かに一面にさしわたつてゐた。長い土堤を二人の歩いて行くのが繪か何ぞのやうに此方から見えてゐた。

刈稻を山のやうに積んで、上さんが後押をして汗を流して輓いて行く車にも幾臺となく出會した。ある處では、路を除けて、その車の通り過ぎて行くのを待つた。『百姓なんて、辛い稼業ね。』かう玉子は言つてその後を見送つた。

土堤から少し右へ入ると、五六十軒茅葺屋根のかたまつた村があつて、路はその傍を通つて田圃の方へと出て行つた。小林の邸はやがて玉子の眼の前にあつた。苅込んだ樫の垣、大きな門、三つもある白壁の土藏、庭木のこんもりとした栽込――此方の廣場では、雇人共が寄り集まつて、賑かに唐箕を廻してゐるのが手に取るやうに見えてゐた。

桔槹がギイと音して高く揚つた。

玉子は彼方此方を覗いて見た。かねて聞いてゐる怜悧な若い細君のことなども思ひ出されて來た。まだかういふ身の上にならない前に、三つ位になる女の兒を伴れてその細君の汽車に乘らうとしてゐるのを見たことがあつた。ハイカラな奧樣――何處の奧さんかと思つてゐると、『あれが小林の奧さんよ。』と

小林は來ても泊つて行くやうなことはなかつた。酒の支度をする時には、いつもきまつて石原が呼びにやられた。鼠色の中折をかぶつて、ステッキを持つて、雪駄などを穿いて、裏口から扉を明けて入つて來る姿は、田舍の人とは何うしても思はれないほどハイカラであつた。おどかす積りか何かで、玉子のゐる室の障子の破れからソッとステッキを入れたりなどした。濃い髮を綺麗にわけて、流行の香水などをいつも四邊に匂はせてゐた。

『おい、石原君、尺八を聞かせて呉れないか。』

酒の後には、小林はいつもかう言つて石原を促した。月の明るい夜などには、その音が殊に冴えて美しく聞えた。『實際君の尺八は旨いね。東京へ行つて名人のを聞いて見ても、いくらも君よりは上手ぢやないやうだ。』こんなことを言つて小林はほめた。石原は石原で、『今夜は遲いから泊つていらつしやい。何ァに、家の方は今度私が行つた時よく言つて置きますから。』などゝとめても、『でも、近いから、自轉車で行けばすぐだから。』かう言つて小林は遲くなつても歸つて行つた。

その借りた家には、料理店の先代の主人の姉に當る五十先の女が十歳になる娘と一緒に二た間ほど仕切つて住んでゐた。その人達とも玉子はぢき懇意になつた。夜などさびしい時には、三味線を其方へ持つて行つて彈いたりなどした。

小林の家の樣子が見たくつて、澤屋の抱妓と一緒に出かけて行つた時には、川に添つた路を眞直に步

『君にすつかり頼んだよ。』などゝよく言つた。玉子には聞かせないやうな話をも二人ではよく話した。町の助役か何かをしてゐる小林は、常に忙しさうにして彼方此方へ出かけて行つた。玉子は短い月日の中に一枚の繪から別の一枚の繪に急に移つて行つた樣な自分の生活を繰返して考へずには居られなかつた。品の好い、金持の若旦那らしいすつきりした小林は、玉子の若い心を時の間に引寄せて行つた。種種に言つて吳れた人達も他にも澤山あつたが、玉子は其方へは目も吳れなかつた。石原は仲に立つて、何彼と二人の世話をした。

醬油の出來る利根川緣の田舍町から每夜のやうに通つて來た客は、土地でも聞えた金持であつたが、それが身請でも何でもしてやるといふやうな態度を示して來てから小林は急に金を出してやると言ひ出した。話は時の間に纏つた。やがては藝者を二人置かうといふ話までも出來た。

裁判所に出てゐる石原は、その家を裏町の通りに持つてゐた。木槿垣などのある家で、肥つた二十七八の細君が莞爾した顏を見せて、いつも玉子の訪ねて行くのを迎へた。玉子は引いてからも、何ぞと言つてはよく其處へ出かけて行つた。石原のゐない留守に行つて、半日もその細君と話して來ることなどもあつた。何でも仙臺あたりの生れで言葉に濁つた訛があつたが氣の置けない話好きな深切な人であつた。『夫婦とも好い人ね。』東京に歸る前に、ちよつとお禮に行つて歸つて來た母親はかう玉子に向つて言つた。玉子も石原夫婦を力にした。

玉子の意氣な姿がくつきりと際立つて見えてゐた。濃い八字髭をした三十一二になる石原の姿は、その日は終日其處を出たり入つたりしてゐたが、一片附かたづいた頃には、上手な尺八の音が奥の一間からしづかに洩れて聞えて來てゐた。手傳ひに東京から來てゐた母親が行つて見ると、石原は好い心持さうな態度をして、萩などの咲いてゐる庭に向つて、柱に身をよせかけて、頻に尺八の管を口に當てゝゐた。玉を轉ばすやうな音はそれからそれへと續いて聞えた。

『石原さん、お上手なんだね。』

かう母親が玉子に言ふと、

『えゝえゝ、御得意なんですよ。』

其日には小林は自轉車でちよつとやつて來たが、掃除が濟んだのを見たり、綺麗になつた庭の踏み石の處に立つたり、手傳ひに來た人達に挨拶をしたりしてから、

『今日はちよつと手放されない用事がありますから、母さん失禮しますよ。』かう言つて一時間もゐずに歸る支度をした。

『石原君、後をよろしく頼むよ。』

こんなことを言つて、スーと自轉車を街道に走らせて行つた。

小林は萬事石原を仲の好い友達のやうに――時には子分のやうにして使つた。

うな氣分で、默つて待合室に立つてゐた。其處へ、玉子の知つてゐる客が二三人ドヤ〳〵と入つて來て、

『小梅――何うした？』

とか何とか言つたり、玉子の傍に立つてゐる淺田の顏を搜すやうにして見たりした。『ちよつと、お見送りに來てるんですよ。』こんなことを玉子は言つたが、其時には二人の默つてゐた氣分ももうすつかり破れてゐた。やがて時間が來た。

『御機嫌よう。それでは、御大事に――』

やがてレールを越えて向うの闇に見えなくなつて行く淺田の姿を見てゐた玉子は、急に堪らなく悲しくなつて來た。もつと何か言つてやれば好かつたと思つた。しかしそれも長い間ではなかつた。川の緣の料理店では、明るい賑かな座敷が玉子の歸つて行くのを待つてゐた。

十五

その年の秋の中頃には、坂田の小林が澤屋の小梅を落籍して藝者屋を始めさせるといふ評判が町を賑かにした。萬事取卷の石原が世話をして、常盤屋といふ小料理店の後の幾間かを借りる約束をしたが、移轉の日には、澤屋から手傳ひの若者などが行つて、景氣よく掃除をする音が四邊に響いて聞えた。隣の垣根に添つた裏道からは、新しい手拭を姉さんかぶりにして、奥の離座敷の障子に掃塵をかけてゐる

叔父が一緒に國へ作れて行くと言ふのを種々言ひ解いて一人で來たのも、實は玉子に逢ひたいと思つたからであつた。停車場で下りて酒屋で訊いて、それからこの料理屋へとかれはわざ〳〵やつて來た。しかし相對して見れば、話すやうなことはもう何も殘つてゐなかつた。不足を言つたり厭味を言つたり愚痴を言つたりする時期は、もうとうに過ぎ去つてゐた。張詰めた心を互に抱いて、せめては泣いて別れようと思つて來た希望も徒らな空想であつたことを淺田は見た。『短い緣だつたな。』かういふ言葉さへ終に口から出ずに終つた。

玉子は暗く激したやうな淺田の顏や言葉や態度が段々落着いて行くのを見た。で、二人は一時間ほど田舍の話や東京の話などを靜かに話した。『もう酒も澤山だ。』かう言つて淺田はやがて行く支度をした。

『まだ、時間があるわよ。八時四十分よ、下りは――』かう言つたが、玉子はちよつと下へ行つて、戻つて來て、『私、送つて行くわ。』

『何アに、好いよ。』

『でも……』

車を二臺頼んで、二人はやがて停車場の方へと行つた。さびしい田舍の停車場には、暗い三角燈がしよんぼりとついてゐた。レールを越した田では蛙の聲が湧くやうに聞えてゐた。

二人は一緒に住んだ年月を胸に繰返しながら、しかもお互にそれを口に出す氣にはなれないといふや

『何うしてそんなことおつしやるの？　國に歸つたつて、またぢき出て來られるんでせう？』

かうなだめるやうに玉子が言ふと、

『いや、もう出て來られないかも知れないよ。僕ももう百姓になるんだから。』

前に置いた盃を一つあけて、『しかし、僕は何うせ終には一度は國に歸らなけれやならなかつたんだから……それは仕方がないんだけども……かう早くその時機が來ようとは思はなかつた。』過去を思ひ廻すやうにして、『でも逢へて好かつた。逢はずに別れて了はなけれやならないかと思つてゐたよ。』

『今歸つて來たばかしですもの。』

『何處へ行つたんだえ？』

『ちよつと……』と言ひかけたが、出かゝつた言葉を玉子は飮み込むやうにして、『ちよつと近所に園遊會があつたもんだから、其方へ行つてゐたんですの。』

淺田は玉子が田舍に來てからの苦惱を思ひ出してゐた。病氣はすつかり治つたけれど、別れの辛さは今でも猶ほ執念く心に絡み着いてゐた。女の心が假令自分に偏つて來てゐても何うにもならないやうな身分の今の身の上ではあるが、それでも女の心の落附いて他方へ向いて行つてゐるのが常に男には口惜しかつた。母親の口を通じて玉子の心持を度々聞いて知つてゐる淺田は、無理のないのを知つて居ながら矢張無理を言ひたいやうな心持で幾月か過した。

奥の一と間には、果して淺田が蒼白い疳の立つたやうな顏をして坐つてゐた。酒もかなり飮んだらしかつた。

『貴方、病氣は何う?』

かうなつかしさうに心配さうに玉子は言つても、淺田は暗い顏をして默つてゐたが、不意に、

『今日はね、實はね、お別れに來たんだよ。お前の心持もう大抵わかつたから……』

『何うして?』

『いや、もう何も言はない。餘程、逢はずに行かうかと思つたんだけれど、こゝを通つて、ついよる氣になつちやつた。國に歸る途中なんだよ。母さんにも、お前にも大變世話になつたね。』

『何うして、そんなことを言ふの?』

『いや、もう何も言ふまい。母さんからちやんとお前の腹も聞いたよ。お前だツて、いつまで僕の樣なものにくつ附いてぐづ〳〵してはゐられないんだからね。それは僕にもわかるよ。』かう言つた淺田の聲は曇つて、眼から涙がこぼれさうになつてゐた。

玉子も誘はれて悲しくなつて、何と言つて好いかわからないやうな氣がして、暫しはぢつとして坐つてゐたが、やがて淺田は思ひ返したといふ風で、

『本當に世話になつたよ。』

多額納税者の若旦那だといふ客に、その頃玉子は二三度川の縁の座敷で逢つてゐた。田舍にはめづらしい品の好い男振の好い無口な人で、ハイカラにわけた髮の濃いのが色の白いのにくつきりとよく映つて見えてゐた。土地の裁判所に出てゐる石原といふ三十位の男がいつも取まきに一緒にやつて來るのが例になつてゐた。その石原には玉子も前に度々逢つてよく知つてゐた。『若旦那、何うです? 田舍にはめづらしい妓でせう、』などゝ石原は言つた。

大して心も動かさなかつたが『小梅さん、好い運が向いて來てゐるのに……まだ解らないんですか、』などとお上さんに言はれる頃には、玉子の心も段々その客の方へ向つて偏つて行つてゐた。『何うです? 玉ちやん、向うでも大變に氣に入つてゐるんですよ。坂田の小林ッて言つちや大したものなんだから。』から廊下の處で石原に言はれた時には、不思議にも暖かい血が玉子の體に上つて來てゐた。

夜汽車で三人一緒に東京の方へ出かけて行つて、川に臨んだ眺望の好い室で一晩泊つて、あくる日は芝居を見て、家にも寄らずに歸つて來ると、丁度其處に、橋の傍の料理屋から口がかゝつて來てゐて、知つてゐる東京のお客で、ちよつとでも好いから是非逢ひたいと言つてゐるといふことであつた。一緒に東京から引上げて來たお客を放つて置く譯にも行かず、それに内々は淺田らしいといふことをも勘附いてゐたので、一度はそれとなく斷らせて見たが、何うしても逢ひたい、ちよつとでも好いからと達て言ふので、玉子は決心して、急いでその料理店へと出かけて行つた。

保が何うにもならないのが玉子には口惜しかつた。しかし一方では何うにもならないのが却つて一層玉子の心を其方の方へと伴れて行つた。海岸を散歩して、ある家に入らうとした時、保は何うしても言ふことを聞かなかつた。保は詩集などを手にして、センチメンタルな男の心持を女に話して聞かせるやうな青年であつた。『男にも童貞の苦みといふことがありますから。』眞面目でこんなことを玉子に言つた。

母親の方からは、手紙が絶えず届いて來てゐた。玉子がゐないので自暴になつて、新宿通ひが此頃段段烈しくなつて行つたといふことは度々聞いて知つてゐたが、ある日の手紙には、突然役所の方が一時休職になつたといふことを知らせて來た。運わるくわるい病氣を背負ひ込んで、うん／＼淺田が唸つて寢てゐる傍で、汚れたものを母親が洗濯してやつてゐるといふことなども書いてあつた。

其病氣で淺田は一と月以上も母親の世話になつてゐた。淺田からも手紙が來て、是非一度逢つて話したいなどゝ書いてあつたが、玉子は碌々返事も出さずに暮らした。

淺田の田舍の方でも、かうなつては、まさか放つて棄てゝ置くわけにも行かなかつた。叔父がまたやつて來て、種々話があつたといふことであつた。――此方からも人が入つて、淺田も漸く國に歸ることになりましたから、御安心なされたく、殊によると近い中に、當人が行くかも知れませんから成るべく逢はないやうにした方が好い――かう細い字で心配して母親は書いてよこした。田舍の方でも、母親の深切がいくらか飲み込めたらしいやうなことも細々とその手紙の中に書いてあつた。

がひよつくり出て來たりした。裏町のお師匠さんは、矢張子供達を集めて、三味線だの踊だのを賑やかに教へてゐたが、『まァ、玉ちやんかえ。』かう言つてなつかしさうにして迎へて呉れた。お座敷でも知つてゐる顏が多かつた。『玉公がこんな容色好しにならうとは思はなかつたなァ。』町の金持の砂糖屋の肥つた主人はこんなことを言つて笑つた。ある姐さんは、その時分深間であつた旦那と切れて、銀行に出る若い亭主を持つてゐたりした。町で遊ぶ人達は、驚いたやうな心持ちで、好い聲で唄を唄つたり、上手な三味線を彈いたり、巧な口の利き方をしたりする冴えた如才のない玉子を見た。田舍の藝者などには見られない樣な氣の利いた服裝をしてゐる玉子を見た。大きな凱旋の歡迎會などでも、巧にお座敷を取持つて、一座の花のやうにかゞやいてゐる玉子を見た。『あゝも違ふものかね。元はよく隅の方で默つてゐるやうな娘だッたがな。えらく發展したもんだね。僕なんか口ではもうかなはなくなつたよ。』町の息子連の一人はかう言つて舌を卷いた。何んな日でも二座敷や三座敷をしないやうなことはなかつた。

裏町にある鰻屋などに止むを得ず引張つて行かれる時にも、玉子は旨く口を外す手腕を持つてゐた。

『今度ね。だつてこんな處ぢや駄目よ。近い中に何處かへ行きませうよ。東京へ芝居でも見に行きませうね。』などと言つて、いつの間にか其處から拔けて歸つて來た。玉子は自分の心持と自分の生活との間に、夥しく隙間のあるのに氣が附かずには居られなかつた。泣きたいやうな心持でゐて、表面では、唄など唄つて、客の驚くほどはしやいで見せた。

五月の初めに、玉子はいよ〳〵田舍の方へ行くことになつた。その一日前には、玉子はこつそり保を誘ひ出して一緒に海岸の方を散歩した。

十四

藻の花の白く咲いてゐる川の緣の料理店へ玉子は再び褄を取つて入つて行く身となつた。『玉ちやんがまァ好い藝者になつたつちや、三四年見ないとあゝも違ふもんかねぇ、俺ァ、別な人かと思つた。』通りの店屋の上さん達は、かう眼を瞬るやうにしてその後姿を見送つた。賣れたにも賣れないにも、今までにこんなに賣れた妓はないといふほどであつた。澤屋の小梅——新しくつけた名よりも、玉ちやん、玉ちやんと彼方此方からかけてよこした。

停車場に出てゐる車夫、休憩所の上さん夫婦、鹽煎餅などを店で賣つてゐる婆さん、詰襟の服を着た停車場の助役、さういふ人達は四年前と少しも變らない顏をして、同じやうに其處に住んでゐた。醬油の出來る利根川緣の田舍町の方へ行く乘合馬車は、其時分と少しも變らずに、汽車の着く度に下りて來る旅客を乘せて、喇叭を長く鳴らして、半は茅葺半は瓦甍の田舍町をガラ〳〵と通つて行つた。

橋を渡つた處の料理店の上さんの死んだあとには、色の生白い女中上りのやうな若い女が帳場に坐つてゐるかと思ふと、銀行の前には依然として自轉車が置いてあつて、登記所の門からは、知つてゐる顏

と言ふんです。それは、何うせ長くは駄目でせうけれど、二た月三月遊びに行つて來るつもりで行つて見たら何うです？』その人はかう言つて勸めた。『さうするわ。私、いつまでかうしてゐたつて、着物がなくなるばかりですもの。』かう決心したやうに玉子は言つた。

玉子は淺田に向つて言つた。『さうぢやないのよ。貴方には私の心持なんかちつともわからないんだから。私も困るし、東京では事が面倒になるから、田舍へ行つてかせいで來るッて言つてゐるんですよ。それも長い事ぢやないのよ。いけなけれやすぐ一と月でもよして來るわよ。お金を澤山借りて行くッていふ譯ぢやないんだから、體が縛られて行くんぢやないんだから……。さうして二人して稼げば、ちつとは生計が樂になるぢやないの。』

切れるの別れるのと言ふのではないといふことを玉子は繰返して話した。此頃にないほどの情を見せて淺田の機嫌を取つたりなどした。兩方で思つてゐる心は、ちよつと位離れてゐたとて、さう變るものではないといふ態度をも見せた。『私、これでしんは堅いんですから。』かう言はれると、淺田はそれでも厭だとは言ふことが出來なかつた。かと思ふと、淺田と二人きりでゐる時には、『行く決心はして見たけれど、またお客の前に出なけれやならないと思ふとつくぐ厭になるわよ。』と悲しさうにして、『好いわ、田舍は東京の樣でないから好いわ。操を守らうと思へば、いくらでも守られるんですから、貴方も浮氣をしてはイヤですよ。』玉子は染々した調子でこんなことを言つた。

一緒に腹を立てた。ある日などは、ちよつとしたことから玉子と母親とが物言ひを始めて、鏡臺に向つて結ひかけてゐた髪を玉子は自分で無茶苦茶に壞したりなどした。『本當に、お前は親不孝になつたよ。ものお咲ぢやなくなつて了つたよ。これも皆な男のお蔭だよ、』などゝ言はれる時には、淺田はじつとして聞いてはゐられなかつた。何うかすると、淺田は懊惱する心を新宿の方へと運んで行つた。

二た月三月もまたかうした空氣の中に過ぎて行つた。玉子の十八の春は來て、梅が咲いたり花が散つたりした。『貴方、お小遣を少し頂戴。貴方だッて、好きなことをして無駄なお金をつかつてゐるぢやありませんか。さう〳〵母さんから貰つてゐられやしませんからね。』玉子はかう疳性に言つて、なけなしの金を淺田の財布から出させるやうなことも度々あつた。長押にかけてある淺田の軍服と軍帽、それを見るのも此頃は玉子には厭になつて來てゐた。『本當に何うかしなけりや?』母親も後には淺田を同居させた自分の慾を後悔した。

『私、出るわ、私が出さへすれば好いんだから。私がゐなけれや、淺田だつて、いつまで此處にかうしてゐやしないでせうから。』ある日かう玉子と母親と言つてゐる處に、丁度折好く最初に玉子が遁げて來た田舍の澤屋の親類の人が遊びに來てゐた。『行くつもりなら話して見ませう。あそこも二三年前とは餘程好くなつたさうですから、』などゝ言つて、其日は歸つて行つたが、二三日してからまたやつて來て、『向うでも喜んでゐました。行くなら、何彼なしに、賣れても賣れなくつても、月三十圓のきめで來て吳れ

『何うかしなければ仕方がないわよ。』かう言つては玉子はよく淺田に相談を持ちかけて行つた。それに引かへて、淺田はもう一度間借でもして二人で一緒に暮らしたいといふやうな希望を絶えず玉子に洩らしてゐた。

『ぢや、貴方、家の方の手當を何うかして下さる？　それが出來れば好いけれど、とても今はそれは出來ないんでせう。』かう玉子に言はれると、『お前は薄情だ、僕のことなんかちつとも思つてゐては吳れやしないんだ。さういふ了簡なら、それで好い。』淺田はかう言つてすこし暗い顏をして見せた。

『だつて、生計が困るんぢや仕方がないわよ。さう言ふと、また、お金のことばかり言ふやうに言ふけれど、實際さうなんだから、仕方がないわよ。貴方にもちやんと分つてゐるぢやありませんか……。』かう言つて玉子は考へて、『私、いつそもう一度、何處からか出ようかしら？』

これまでにも玉子は二度も三度もそれを持出した。その時には、淺田は、『勝手にしろ、』とか何とかきまつて言つたが、すぐ折れて、『その位なら、僕は心配はしはしない、』と言つて深く思ひに沈むやうな顏色をした。男について何處までも行くことの出來ない玉子の心が淺田には物足らなかつた。何ぞと言つては、『お前は薄情だ、薄情だ、』と淺田は言つた。

淺田の玉子に對する疑惑は、女に離れ難いといふ心につれて益〻強く熾になつて行つた。金の切目が緣の切目といふやうな心持に一家は段々落ちて行つた。金のことを言ひ出すと、淺田も玉子も母親さへも

ゐる宗太郎だの、本屋に勤めてゐる定雄などのやつて來る時には、狹い家の中は坐つてもゐられないやうに混雜した。さういふ時には、淺田はプィと立つて獨りで外の方へ出懸けて行つた。

『困るねえ、』とも何とも母親は言つたことはないけれど、さういふ暗い不愉快な氣分は、常に家中に漂つてゐた。冴えた玉子の頭には殊にそれが鋭く反射した。何うかしなければならないといふことが玉子の頭の中を絶えず往來した。時には淺田の鉛がすつかり剝げて了つたやうに玉子に見えることなどもあつた。さうかと思ふと、餘りに冷淡な母親の態度に反抗して男の方に偏つて行くやうな心持も起つて來てゐた。玉子は絶えず焦々して暮らした。それに、淺田と一緒になつてから、母親と玉子との間には、不思議にも今までにないやうな默鬪も起つて來てゐた。父親のことや、家のことや、兄弟のことなどを心配してゐた二三年前の玉子とは、丸で心持が違つて來てゐた。

母親の待設けてゐた田舍の方からの話は二た月經つても三月經つても何とも言つて來なかつた。『田舍者は本當に氣が長いからね。義理も人情もわかりやしないんだからね。そんなものを相手になんかしてゐられやしないよ。』こんなことを言ふかと思ふと、『第一お上さんがだまつてゐるのが氣が知れないねえ。亭主を人の家にあづけて置いて、よく默つてのんきにしてゐられるもんだね。餘程、何うかしてゐるんだね。』など〻母親は言つた。それに、淺田はその月々の俸給をさへ、すつかりは母親に渡さないやうになつて來た。生計向きの方も段々困つて來た。

たのよ。私がちよいとでもゐないと大騷ぎなのよ。』かう玉子は母親に話して聞かせた。

『間借をする位なら、當分、宅へ來てゐたら、何うです？　宅は狹いけれど……』かう母親はある時淺田に言つた。淺田も始めは幾らか躊躇してゐたけれど、婿の樣に深切に取扱つて吳れる母親の言葉は嬉しかつた。

『田舍の女房や子供なんか何うでも好い。お咲さへゐれば。』こんな風にまで心がつき詰めて行つてゐた。玉子にも別に異議はなかつた。ぐづ〳〵に淺田は母親の言葉に從つて行つた。

一緒に暮らすならもう少し廣い家に引越さうかなどゝいふ話もちよつと出たが、長く先きを見てゐない母親は、無駄だと言つてすぐそれを否定した。で、どうせ狹い玉子の家は、やがて新しい簞笥や道具などで一杯になつた。二人は奧の六疊の座敷に住むことになつた。

毎朝軍服を着て出かけて行つて、四時過にはきまつて格子戶を明けて淺田は歸つて來た。時には頭が痛いと言つて玉子が搔卷をかぶつて寢てゐることもあれば、面白くなさゝうな顏をして默つて母親が裁縫をしてゐることなどもあつた。晴々した二階で過したやうな樂しい氣分は其處では最早味ふことは出來なくなつた。晩酌も好加減で切上げなければならなかつた。『もうおよしなさいよ。酒なんかありやしないわ。』かう玉子は言つた。

俸給だけでは何うにもならないやうな生活であつた。父親は矢張まだ遊んでゐた。機械工場に行つて

もいくらかは手傳つて、母親は態々淺田の力になるやうな態度を示して來た。『餘りひどい叔父さんの言ひ草だ。お咲とぐるになつて私が騙してゞもゐるやうな口ぶりだつたけれど、私は今でこそかう落魄れてゐても、これでも昔は老舗の娘なんですから、』などゝ母親は淺田に言つた。それと共に母親は一方玉子の心を探ることに注意してゐた。淺田を滿更惡くは思つてはゐないが、さうかと言つて、何處までも淺田について行かうといふ決心も玉子にはないらしかつた。母親は玉子の心の中に目覺めて來るものゝあるのを見落すやうなことはなかつた。『お前、何うかしたのね。イヤに此頃はくよ〳〵してゐることがあるよ。何か心配してゐることでもあるのかえ？』母親がこんなことを言つて訊くと、『だッて、母さん、つまらないんだもの、何だか悲しくつて涙なんぞばかり出るんだもの、何うしたんでせう、一體、私は？此頃は？』かう言つて玉子は母親の顏を見た。また時には、『淺田だつて、可哀相よ。あれでも私の爲めに、あんなになつたんですもの。』『こんなことを言ふかと思ふと、『でも、いつまでかうしてゐても仕方がないわねえ……私なんか、本當に不仕合せよ。何うせ、本當にしんから力になつて吳れる人なんかないんだから。こづちでいくら思つたッて駄目なんだから。』かう言つてヒステリックに涙を袖に拭いたりなどした。

十月の末には、淺田はもう其家にはゐられなくなつてゐた。お咲と一緒に何處か間借でもしようなどと言つてゐた。何うしても玉子は放さないといふやうな腹で淺田はゐた。『此頃それや嫉妬がひどくなつ

何うしても搜し出さなければ氣がすまないやうな心持が玉子はしてゐた。自分で捨てさせたゞけに一層さういふ心持を深く感じてゐた。不思議なほど心が猫に向つて偏つて行つてゐた。

『何うしたら好いだらう？』氣が附くと、こんなことを考へて玉子は暗い溝の傍の處に立つてゐた。

十三

淺田の金廻りはます〳〵わるくなつて、終には家をも疊まなければならないやうになつた。國の方からは、叔父に當る人が度々出かけて來て、今やめなければ勘當するといふ父親の言葉をも傳へて來た。玉子の母親はわざ〳〵出かけて行つてその叔父に逢つたりなどした。病院の方も首尾がわるく、不正なことが上官に知れたりなどした。幸ひその上官が淺田を引立てゝ呉れた人なので、公然にならずに濟むには濟んだが、以前のやうにもう融通は利かなくなつてゐた。御用商人の一人に勸められて始めてゐたことも一と月か二た月の中にすつかり駄目になつて了つた。

『勘當されるなら、されても好い。』淺田は自棄になつてこんなことを言つた。それと共に、淺田の心は強く執念く玉子の方へ絡み着いて來てゐるのを母親は見て取つた。困つたものだと思つたけれど、堅氣だけに、餘り薄情なことも母親には言はれなかつた。兎に角、半年なり一年なり世話になつた人だと思つた。それに先きが財産家であり、女房子もあり、實子でありするので、此際世話をすればといふ慾

て行つて、何か頻りに話してゐたが、やがて出て來て『昨夜は啼いてゐましたけれど、今朝はもうゐなかつたさうですよ。何うしたらう、あの猫ッて子供達が言つてゐたさうですよ。……誰か拾つて行つたか、それとも何處かにまぐれて行つたかしたんですね……さうですか、お氣の毒ですね。今度來たら、家においてあげますから。』丁寧な主人は玉子の悄れた風を見て、同情したやうな言葉をかけて與れた。

玉子はそれから廣場の向うの方へ行つて建具屋の店で訊いて見た。『知りませんな。』其處に仕事をしてゐた若者は、じろ〳〵玉子の方を見ながら言つた。奧から丁度出て來たもう一人の若者は、『何だ？ 猫だ？ 知らねえな、此頃は猫なんか一つも見かけたことァねえ。』ぶつきら棒に言つて、其處に坐つてすぐ仕事に取りかゝつた。酒屋では、まだ宵の口なのに、小僧がこくり〳〵居眠をしてゐた。はひつて行つて訊かうとすると、『は、何を上げます？』かう狼狽して眼を摩りながら飛起きたが、『猫？ 猫なんか知りません。』『何だ馬鹿々々しいといふやうな調子で投げるやうに小僧は言つた。

何處にまぐれて行つたらうと思ふと、玉子は可哀相で可哀相で仕方がなかつた。こんな遠くの方へ來る譯はないと思はれるやうなところまで行つて訊いた。

『昨日、まぐれて來たさうぢやないか。いや、あれァ、三毛ぢやねえやな、黒だ、どら猫た、』などと職人風の男は言つた。『知りませんな……』忙しい世の中に猫をさがして歩いてゐる人もあると言つたやうな調子で、ある家の上さんは言つた。

出して伴れて來て、死ぬものなら自分の手で死なせなければ心持がわるいやうな氣になり出した。二三日此方、玉子はわるく神經が昂つて、心が動搖して、自分でも自分の心持がわからないやうになつてゐた。

『あの通りの藥屋だッたね？』

かうりんに訊いてふら〳〵と玉子が出かけた時は、夜になつてからもうかなり經つてゐた。まだ歸つて來ない淺田のことなどは念頭に置いてゐなかつた。夜風がさびしく袖を吹いた。ある屋敷の垣つゞきの草地では、虫が靜かに啼いてゐた。

その通りの藥屋には、四十五六の人の好さゝうな主人らしい男が新聞を見て坐つてゐた。八百屋には葡萄だの水蜜桃だのが綺麗に灯に輝いて並んでゐた。

廣場はしんとしてゐた。晝間子供の遊び散らした棒だの紙片だのが其處に白く見えてゐるばかりであつた。りんの言つた灯のついた勝手元も其處にあつた。

玉子は暫くぼんやりと立つてゐたが、引かへして、藥屋の前に來て、『まことに變なことをお訊ねいたしますけれど、此處等に三毛の小猫がまご〳〵してをりは致しはせんでしたらうか。……うちの猫が昨日からゐなくなりましたんですが、此邊で見たッて言ふものが御座いましたんですが……』

『さう言へば、その猫でせう、昨夜、にやァにやァ言つてゐましたよ。』

主人はちよつと途切れて、『たしかにさうでせう。お宅のですか。お待ちなさい。』かう言つて奥に入つ

かえ、汚なくつて仕方がないぢやないか。それまた吐いた。』かう言つて顏をしかめた。終には玉子もあきらめて、ある夜りんにそれを捨てに行かせた。りんが愈抱いて出て行く時には、『近くぢや歸つて來るから駄目だよ、』などと言つた。

『可哀相だね。』

玉子は小猫のことを考へながらその夜を過した。あんな汚い猫は、何處でも拾つて呉れるところがないに違ひない。野良猫になつて生きてゐられゝばよいけれど、あの病氣ではとても生きてゐられやしない。かう思ふと、溝の中に死んでゐる猫の慘めな姿などが玉子の眼の前に歷々と見えて來た。保の初めて尋ねて來た時に偶然に家に屆けてあつた小猫の運命は、矢張自分のやうに思はれて、玉子は悲しくて涙を拭いた。この小猫と保とを一緒にして、玉子は何んなに人知れず可愛がつてゐたか知れなかつた。

『しかしもう駄目よ。……私なんか何うせ駄目よ。』かう思つて、玉子はにやァにやァ啼きながら彼方此方を迷つてゐる猫のことを考へた。

りんの言つた明るい勝手元の灯などが見えたりした。『何故捨てる氣になどなつたらう。死ぬまで家に置いてやれば好かつた。死ぬまで家に置いて死んだら自分で地を掘つて埋けてやればよかつた。私は薄情だ……』涙が漲るやうに胸につき上げて來た。

その翌日も玉子は一日猫のことが氣になつて仕方がなかつた。夕方には、何うしてももう一度さがし

玉子はほろりとした。

それは淺田の手元が段々わるくなつて家にやる月々の手當も生計向の方も十分に出來なくなつて來たといふ頃の事であつた。小猫は腹をわるくしてよく粗相をした。背を高くして苦しさうにしてゐると思ふと、忽ち白い丸い物を座敷だの緣側だのに吐(もど)した。『何うかしたんだねえ。何か惡い物を食つたんぢやないか、』などと言つて、玉子は自分の飮んでゐる牛乳の殘りを飮ませたりなどした。鷄卵などをもやつた。家の母親は、『そんなものを食べさせては猶いけないんぢやないかえ、』と言つたが、『でも、腸がわるいんだから。』かう言つて玉子は柔かな肴などまで食はせてやつた。處が腹の方もまだ治らない中に、今度は猫の全身に細かい腫物が澤山に出來て、毛がバラ／＼と拔けるやうになつて來た。其處にも此處にも毛が拔けて落ちてゐた。小猫は見るが中に瘦せ細つて、苦しさうに緣側の隅などに丸くなつて寢てゐることなどが多くなつた。玉子は可哀相に思つて、よく膝の上などに抱いたり何かしてやつたが、今度はそれが玉子の手や足にかぶれて來た。『まア、イヤだ。痒い／＼と思つたら、三毛のがうつツたんだよ。』それから玉子は寄つて來る猫を突放すやうにした。『猫に、それが出來ちやもうお了ひですよ。猫のお醫者にかけたツて治りやしませんよ、』などと教へて吳れる人などもあつた。母親は、『一體お前いろんなものを食べさせるからわるいんだよ……捨てゝおしまひよ。汚なくつて仕方がない、』などと言つた。淺田は此頃自棄のやうになつて、一日も二日も家を明けることがよくあつたが、歸つて來ては、『まだこんな猫を置くの

『寢ませうよ、もう。』

かう言つて玉子は淺田を促して二階へ行つた。

それは蒸暑い夜であつた。わざと一枚明けて置いた雨戸からも風は少しも入つて來なかつた。玉子の頭には種々な男の顏がごたごたと通つて行つた。一緒にゐる淺田の呼吸は保の呼吸のやうに思はれた。玉子は灯を消さなければ眠られないやうな習慣になつてゐた。

『保さん。』かう腹の中で呼んで見たりした。下ではりんの雨戸を繰る音が靜かに聞えた。

十二

『りんや、お前、何處に捨てゝ來たの？』

『あの向うの通りに、藥屋があるでせう。あそこの傍の廣場の處に置いて來ました。』

『誰もゐなかつたかえ？』

『え。』

りんはかう言つたが、『でも、啼くんですもの、困つて了ひましたよ。何でも廣場の傍の處でした。何處の宅だか、勝手の灯が明るく向うに見えてゐましたよ。』

『可哀相ね。』

『何うしたんだえ？』

『何でもないのよ。今、ちよつと考へたことがあつたのよ。』かう言つて淺田の手を堅く握りしめて、『だッて、かうしていつまでも一緒にゐられるか何うかと思ふと、心細くなるんですもの。』

『大丈夫だよ。』

淺田はかう言つて、手を握りかへすやうにした。

『だッて、貴方は奥さんがゐるし……何うせ私なんか何うにもならないんですもの、今日の芝居のあの一枝の通りよ。』

『何ァに、誰が何ッて言ッたッて、僕さへしつかりしてゐれや好いぢやないか。』

『それが出來ないのよ。』

玉子は何うして好いかわからないやうな心持で、急にヒステリックに頰を傳つて落ちて來る涙を拭つた。

果してりんは長火鉢の處で假睡をしてゐた。格子戸の開く音におどろいて出て迎へた眠むさうな顔を見て、『矢張、話して來た通りね。』かう言つて玉子はちよつと笑つて見せたが、すぐ遣瀨ないやうな辛いやうなやきもきするやうな心持に落ちて行つた。

土産の菓子などを其處にひろげて茶を淹れたりなどしてゐたが、やがて、

お鮨の御馳走などになつて歸つて來た。『お咲ちやんですッてね、丸で見違へるやうになりましたね。』かう言つて凝と母親から顔を見られた時には、玉子は自分の身の上が耻しくなつて、サッと顔を赧くした。母親のゐない留守に訪ねて行つた時には、玉子は保をさそひ出して、レールを越えて、妙華園の方へ行つた。二人並んで行くのが何となく玉子には嬉しかつた。それは六月頃の晴れた日で、玉子のさしたクリーム色の蝙蝠傘には、午後の日影が美しく照つた。その時紅と白の薔薇の小さな鉢植を其處から二人で買つて來て、白の方を保が持つて行つた。家に歸つてから、玉子は『綺麗でせう、』などと言つて淺田に見せたりしたが、枯らすまいと思つて、人知れず何れほど注意したか知れなかつた。朝に晩に、玉子は忘れずに水をかけてやつた。その次に保に逢つた時には、『此方も枯れないでゐるわねえ、私のもまだよく咲いてゐますよ、』などと言つて喜んだ。併し二人の間は何うにもなるやうなものではなかつた。宿直の夜など、玉子はひとりで保のことを考へて溜息を吐いた。

玉子は自分でも自分の心持がわからないやうな氣がして歩いた。それはいろ〳〵な男の方に心が偏つてゐて、それでゐてしつかりと攫んだもの丶ないやうな心持であつた。淺田も惚れてこそはゐないが決して厭とは思はなかつた。淺田の田舍の方では自分のことを何の彼のとわるく言つてゐるといふことが耳に入る度に、不思議にも淺田の方に自分の心が偏つて漲つて行つてゐるのを玉子は見た。

手を握つて歩きながら、思はず知らず溜息が出た。

淺田に寄添ふやうにして步きながら、

『本當に上手だつたわね。あの役者……聲が好いわね。それは靜子ッていふ藝者は夢中なのよ。』闇に淺田の手を握つて、

『誰だつて惚れずにはゐられないやうな役者だわね。』

『澤山あるんだらう、あゝいふ人には？』

『それはあるわねえ。藝ばかりではないわよ。矢張、女形をする役者は、何處かやさしい處があるわ。心持がいつか女見たいになつてゐるのね。』

『中幕に出た時もよかつた。』

『さうね。あの時も好かつたわ。』不思議にも玉子の體は男こひしやといふやうな情に燃えてゐた。玉子はまた淺田の手を闇に握りながら『捨てちやいやですよ。』

堅く手を合せながら、二人は默つて家の方へと步いて行つた。小刻みな玉子の足音はしんとした夜の空氣の中に際立つて聞えてゐた。星は煌々と美しく空に光つてゐた。

『りんは居眠りでもしてゐますよ、屹度……』こんなことを言つた玉子の胸には、今度はマントを着た幼馴染の靑年の姿が見えてゐた。

玉子はそれまでにも二三度保に逢つてゐた。保の母親をも知つてゐるので、別に變な顏もされずに、

かせる玉子の聲は何處となく上調子になつてゐた。

しかしまさかに樂屋にまで入つて行く勇氣は玉子にはなかつた。『藝者をしてゐればそんな事はわけはないのだけれど……』こんな風に思ひながら、せめては自分の來てゐることだけでも何うかして知らせたいと思つて、幕間には樂屋に近い通り路の方へ行つて見たりした。何處かの藝者らしい女のずん〲樂屋に入つて行くのが羨ましかつた。處が三幕目の時だつたか、運よく玉子はそこでその役者にばつたり出會した。『雪江さん、來てるの？　まァ久し振ね。』かう言つてその役者は莞爾した。『さうなの？　一緒に來てるの？　何處にゐるの？』などと訊いた。玉子の體はまたぞく〲震へた。

それからはその役者の眼は舞臺から絶えず自分の方を見てゐるやうに玉子には思はれて仕方がなかつた。『藝者をしてさへゐれば――』そんなことを何遍くりかへして思つたか知れなかつた。ところが、四幕目の幕間には、今度はその役者が玉子のゐる席へとやつて來て、淺田の方を見ないやうにじろ〲見ながら、丁寧に挨拶をして、五分間位其處に一緒に坐つてゐた。狂言の話などをして行つた。玉子は淺田に言つて祝儀をやつて貰つたりした。

歸る前には、玉子は初め逢つた處で再びその役者に逢つた。『ぢやまたね。』『本當に久し振でしたね。』などと言つて別れて來た。淺田に伴れられて歸つて來るのが玉子には辛かつた。體が急にほてつて來たりした。

『え、一二度お座敷で逢つたことがあるわ。旨いでせう。あれで、女形では中々上手な方よ。あの一枝が旨かつたぢやないの？』玉子は少しはしやぐやうな調子で、『ちよつと、あの連中ではあの位に出來るのはないわねえ……え、あつちにゐる時には、よくあそこにある芝居に出てるたんですよ。靜子ッて言ふ妓があつたでせう。あの人が大騷ぎをしてゐるのよ。』

『今でも矢張さうかえ？』

『さうでせう屹度。私もあの人のお座敷で一緒に逢つたんだから。』

淺田と一緒に伴れ立つて、その土地の芝居にその役者の顔を見に行くことは、まさかに玉子には出來なかつたけれど、その役者が他の一座に雜つて遠い離れた劇場に出てゐるといふことを新聞で見た時には、玉子の心は躍らずには居られなかつた。『それは面白い狂言らしいわ。行つて見ませうよ。』かう言つて淺田を說いた。『ちつとも此頃何處にも伴れて行つて呉れないわよ。遠くつたつて大丈夫よ。電車があるもの、』などとも言つた。何の彼のと引張り出すやうにして、玉子は淺田を伴れて行つた。

その役者を舞臺の上に見ることは、玉子には此上ない得意であつた。綺麗なお孃さんに扮した姿は、玉子の體をぞく〳〵させた。其聲だ。やさしい其聲だ。玉子は其夜の歡樂を眼の前に浮べて見た。この大勢の觀客も、傍にゐる淺田もさういふことは夢にも知らないのだ。かう玉子は思つたりした。と、祕密といふものゝ興味が玉子の胸に漲るやうに押寄せて來た。『旨いわねえ、あの役者。』かう淺田に言つて聞

主孝行の働き者の細君らしかつた。淺田が隱して隱して文庫の底に藏つて置いた寫眞では、玉子はいかにも田舍者らしいかつぷくの大きな不器量な三十女を見た。じみなお召に舊式な繻珍の帶をしめて、恰好のわるい丸髷に結つてゐた。口がイヤに大きかつた。しかし、淺田の話では、その細君の里は、土地でもきこえた金持で、田地などは淺田の家よりも餘程多いといふことだつた。『まだ親父が生きてゐるから自由にならないけれど、自分の代になれば、これぱかしの金、何でもないんだがな。』などと淺田は常に言つた。

此頃では、御用商人の群の一人に勸められて、內所で何か始めてゐるらしかつた。わざ〳〵田舍まで行つて持つて來た金を、一日二日で何處かにやつて了ふやうなことなどもあつた。『兜町の方へでも行つてるんぢやないかえ。』かう母親は心配して訊いた。

夏の夜の明るい灯の中から、ある夜遲く二人は家の方へと歸つて來た。例の路を曲つて、此方へとやつて來たが、通りにはまだひやかしの客がぞろ〳〵通つて格子先を一軒づつのぞいて行くものなども澤山にあつた。賑かな太鼓や三味線の音なども聞えてゐた。しかし橫町に入ると、流石にしんとして、星が銀のやうに空に煌いて、夜は更けたといふことがそれと知られた。

『お前あの役者知つてるのかえ？』

かう淺田が訊くと、

十一

終點で電車を下りて、橋を渡つて、大きな貸座敷などの並んだ通りを少し行くと、其處に家の方へ曲つて行く細い近路があつた。其處を淺田と玉子とは夜遲くよく並んで歩いて歸つて來た。長い梅雨が晴れて、氣候が段々暑くなり出した時分には、夜の町の灯に引かれるやうにして、寄席だの芝居だの活動寫眞だのに二人は出かけて行つた。名高い女義太夫の再勤をわざ〳〵遠くまで聞きに行つたことなどもあつた。三度に一度は母親も一緒に伴れられて行つたりした。『何年振りであの上手な三味線を聞いたらう…』などと母親は喜んでゐた。

玉子は淺田の此頃何か頻に煩悶してゐるのに氣が附いてゐた。金廻りなども初めのやうではなくなつて來てゐた。持つて來るといふ金を三日も四日も後らせるやうなことも尠くなかつた。それに、こつそり女を圍つて置くといふことが田舍の方へも知れて行つたらしかつた。何でもそれは田舍の友達たと言つて淺田が伴れて來て二階で酒を飮ませた肥つた男の口から洩れて行つたに相違なかつた。『ちよつと國へ行つて來る。』かう言つて淺田は土曜から日曜にかけて田舍の方へ出掛けて行つた。

女房子の話も淺田は時々少しづつは話して聞かせた。五歲位になる女の兒の寫眞を出して見せながら。

『これがゐるからまだ好いんだよ。落附いてゐるんだよ、』などと淺田は言つた。それは何でも溫和い亭

『ちよつと、二階へ上つて御覽なさいな。それは好い景色よ。』こんなことを言つて、やがて玉子は青年を二階へつれて行つた。りんはかなりに長い間二階から下りて來ない二人を見た。何か面白さうに話して笑つてゐる聲なども聞えて來た。丁度、其時、郵便が來たので、それを受取りにりんが玄關に出てゐると、『りんや、何あに？　誰か來たの？』といふ玉子の聲が二階から聞えて來た。

『郵便ですよ。』

『さう、持つて來て御覽。』

りんが上つて行つた時には、青年は欄干の前に立つて、ひろ〲と見渡されたあたりの景色などを見てゐた。富士がよく見えてゐた。玉子は郵便を受取つて、裏をかへして見て、それを淺田の机の上に置いた。二人は猶暫く二階にゐた。

やがて出來て來た鰻丼を二人は長火鉢の傍で食つた。『此處等の鰻は不味くつて食べられないわねえ。保さん、今度、いつか一緒に何處かへ何か食べに行きませうか。保さん、芝居は嫌ひ、きらひぢやないわねえ。今度、何處かへ本當に行きませうよ。』こんなことを玉子は言つたりした。やがて一時間ほどして青年の歸つて行くのを玄關まで見送つて出て行つた玉子は、つまらなさうな顏をして、溜息をついて、長火鉢の傍に來て坐つた。猫がにやァにやァと啼いてゐた。

隣に玉子の友達がゐたので、小さい時分からお互によく知り合つてゐた。それは大きな寺の隣にあるやうな小學校で、その廣場では、女の生徒達が女教師の唱歌につれてよく『龜よ、龜よ、龜さんよ』などと言つて踊つた。友達と一緒に青年の家へ遊びに行つて、立派な座敷で繪本などを見せて貰つてゐる處へ、品の好い青年の母親が出て來て、めづらしい菓子を紙に包んで呉れたことなどもあつた。急に、父親が死んで、田舍へ行くことになつた時には、幼心にも玉子は何となくさびしいやうな氣がした。二人は其時分の大勢の友達のことなどを話した。『さうあの人はもう子供が出來たの？　早いわねえ、』などと言つて笑つた。

『でも、母さんと二人きりでは、保さんは氣樂だわねえ。』

玉子はかう言つて、『ぢや、毎日此處から學校へ通つていらつしやるの？』

りんが歸つて來た時には二人は矢張面白さうに餘念なく話してゐた。茶だの菓子だのが其處に出てゐた。青年は何方かと言へば、口數の少い方で、思ひ切つたやうな玉子の言葉に卷かれるやうに折々顏を赧くした。『え、え、』などと點頭いてちよつと笑つて見せるところに言ふに言はれない無邪氣なさつぱりした愛嬌があるのをりんは見た。しかし青年には、かういふ處に長居をしてはといふ遠慮があつて、何となく落附いて坐つてゐられないといふやうなところがあつた。『いゝわよ、今、何か來ますから、もう少し遊んでいらつしやいよ。』かう玉子は幾度もとどめた。

『さうですかね。もう……』かう言つて、ちよつと考へて、『此頃は？　學校は？』

『三田に行つてゐるんです。』

『さうですか。三田ですか。清さんも三田に行つてゐるぢやないんですか。』

『杉山君は去年よしました……今、遊んでゐるでせう。』

『さう、』と玉子はまた青年の方を見て、

『私の話誰かに訊いて？　さう？　きいちやんそんなこと言つてゐましたか？　もう駄目ね、私なんか――。でも仕方がないわ。不仕合せに生れて來たんだから。』

『そんなことはありませんよ。』

青年はかう言つて笑ひを顏に見せて、『そして此處にはいつ來たんです？』

『つい、此間來たばかしよ。ひどい家でせう。でもね、これでも二階はちよつと見晴しが好いのよ。』にやァにやァ啼いてゐる猫を頰に押當てゝ、『よく啼くのねえ。何をそんなに啼くんです？　兄弟にわかれて、他人の家に來たから悲しいんですか。』

こんなことを言つて、玉子は後の茶簞笥の中から煎餅を一枚出してやつた。小猫は始め匂ひをかいでから小さな齒の音を立てゝ食つた。

二人は學校にゐた時分の話を飽かずに話した。青年の方は三級も四級も上であつたけれど、その家の

りんに向つては、『めづらしいこともあるものね。家から歸らうと思つて出かけて來ると、向うから歩いて來るのが何うしても似てゐるのよ。一緒に小學校にゐた人よ。』半ば青年の方に話しかけるやうにして、『ずつと此方へ來てゐたんですか？　さう？　一昨年から？　私、ちつとも知らなかつたもんだから。母さんと御一緒？　さう？　本當に久し振ね。いつ逢つたきりでせう。私がまだ田舍に行かない前だから。もう五六年になるわね。本當にめづらしいわね。』

りんはいかにも嬉しさうにしてゐる玉子を見た。『それから、ちよつとでも好いからつて、無理に來て頂いたんだよ、』などと玉子は言つて、『私もお客樣もまだお午飯前なんだから、氣の毒だけども、あそこへ行つて、鰻か何かさう言つて來てお呉れな。』

玉子は座蒲團を侑めたり、火鉢に炭をついたりなどした。りんは綺麗な男らしい厭味のない青年を見た。かういふ處に突然につれられて入つて來て好いのかわるいのかといふやうな躊躇もいくらかその態度に見えてゐた。何か言はれて顏を赤くした。『丸で見ちがへるやうになつて了つたんだわね。』こんなことを言つて飽かずに玉子は青年の方を見て、『何方もお變りがないの？』

『難有う――父に死なれて、一時困つたけれど、何うやらかうやらしてゐます。』

『妹さんも大きくなつたでせうね。家の福ちやんよりは一つか二つ上ね。』

『さうです、もう十歲になりますよ。』

れた。玉子の前には、矢張りまだ知らない世間の面白いことが澤山に澤山にあつた。

ちよつと家へまでと言つて出かけて行つた玉子は、午時分になつても歸つて來なかつた。『お午飯は家ですまして入らつしやるだらう。』かう思つて、りんは漬物などを出して、獨りでさびしく午飯をすました。其處へ此間玉子が賴んで置いた三毛猫の子を近所のしもたやの上さんが屆けて來て吳れた。『さう？奧さんお留守？それぢや、置いて行きますからね。お歸りになつたら、よろしく言つて下さい。』かう言つて歸つて行つた。それは生れてまだ二十日位しか經たない小さな可愛い三毛猫であつた。にやァ〳〵鳴いてりんの後を追つた。

『何つてまァ可愛い猫だらう、』などと思つて、りんは勝手の洗ひ物をすましてから、それを膝の上に抱いてやつたりした。にやァ〳〵と小猫は頻りに鳴いた。

ふと、足音がして格子戸が明いたと思ふと、りんは其處にマントの下に絣の羽織を着た書生風の二十一二の青年と一緒に玉子が入つて來るのを見た。

『めづらしい人に逢つたのよ。』玉子はかう言つて上つて來て、『おや、何うしたの？猫が來たの？さう？お上さんが持つて來て吳れた？氣の毒だつたわねえ。好い三毛猫ね。』すぐ抱いて頰の處に猫の顏を可附けて見て、『好い可愛い猫ね。此間から欲しくつて〳〵仕方がなかつたのよ。』かう後から入つて來た青年に向つて言つて、『まァ、此方にお入んなさいよ、誰もゐないのよ。』

か、』などと訊いた。

『此頃は淺田君、ちつとも彼方へ出かけて行かないんですつてね。餘り現金ですよ。あそこの女將がこぼしてゐましたよ。偶には好いでせう。奧さんだつてそんなことはよく知つてるんだから、ねえ、奧さん、』などと玉子を前に置いて、醉つた其中の一人が言つたりした。三人で一緒に來た時には、『今夜は、ちよつと淺田君を借りて行きますよ。なァに遲くなりやしません。ぢき返してよこしますからね、』と言つて、もう好い加減に醉つた淺田を伴れて出かけて行つた。

『今日は誰？　艶香さん？』歸つて來た淺田を捉へて、玉子は笑ひながらこんなことを言つて、『貴郎、私がまだあそこにゐる時分から艶香さんを聘んでゐたぢやありませんか。あの人寫眞屋さんか何かゞ情夫ですよ。その他にも二人位あるわ。あの人、前によし町にゐたんですけどね。手くせか何かがわるくつて、其處にゐられなくなつて、此方に來たんですつて。評判のわるい妓よ。』

『艶香なんていふ妓知りやしないよ。』

『ちやんと知つてますよ……』かうは言ふものゝ、玉子は嫉妬をやくほど淺田を思つてはゐなかつたから言へば、男は喜ぶ位に唯心得てゐたばかりであつた。

『相惚れか何かでかうして世離れて暮してゐるなら面白いだらうけれど。』こんなことをある日ふと考へたことがあつたのを、玉子はまた思ひ出してゐた。色の白い男だのＪだのがそれからそれへと考へら

に入りさうなお召の反物を土産に持つて來たりなどした。『奥さん、奥さん！』かう言つては機嫌を取つた。麗らかな日に二階を明け放して、近所の料理屋から旨さうなものを二三品取寄せて、酒を出したりする時には、玉子は下から三味線を持つて行つて彈いた。『本當に奥さんらしくなりましたね。庇髮がよく似合ひますよ。ねえ、淺田君。』その中の一人はかう笑ひながら玉子の方を見て言つた。

さういふ人達は、大抵何か相談する用事を持つて來た。『さう無理ばかり言つても困りますな。』かう淺田が嚴しい顔をして言つてゐる時などもあつた。かと思ふと、向うの方から高く出て、『でも淺田君、さうして頂かなければ、私達も商賣になりませんからな……此間のこともありますし……いや、その方は好いですけども。』などと言つた。淺田が困つたやうな顔をしてゐるやうなことも度々あつた。

『僕は成たけさうして上げたいと思つてゐるけれど、さうばかりも行かないこともあるからね、そこはお互に察し合つて貰はなければ。』淺田はこんなことを言つて強ひて笑つた顔を見せた。

『何うも弱つて了ふ。あゝいふ奴は、儲けることばかり考へてゐるんだから……。』客の歸つた後で、淺田はかう玉子にこぼした。淺田とさういふ人達と何ういふ關係になつてゐるかと言ふことは、玉子にはまだ詳しくわからなかつたけれど、お互に金を儲ける算段をしてゐるといふことだけは前からよく呑み込んでゐた。その中の一人が、夜突然やつて來て、二階でちよつと話して、急いで歸つた後に、金が澤山置いてあるのを玉子が見たことなどもあつた。淺田は、『お喚、此處に置いてあつた書付を知らない

かありやしないわ。』其時玉子はかう言つて淺田の顏を見て、『向うでも、何にも言ひはしませんよ。さうか、それはお目出度かつたつて言つて呉れたばかりだわ。ちつとも可怪しいことはありやしない。手紙の文句でもわかるぢやないの。』

『いゝよ、いゝよ、わかつたよ。』淺田はその時打消すやうに早口で言つた。

宿直の翌日は、淺田はいつも何物をか搜すやうな眼色をして家中を見廻した。母親か父親かが泊つて呉れた時には、いくらか安心してゐる樣な風であつたが、それでもいろ〳〵と留守中の話などを根掘り葉掘り聞いた。やらないでも好い小遣ひをりんにやつたりなどした。

さういふ素振を男から見せられた時に限つて、玉子は病院から金を貰つて歸つて來た日のことを思ひ出した。電話をかけると、その女形の役者がすぐ其處に出て來て、やさしい聲で、『え、行きますよ。』などと言つた。女の言ふなりに何處までもなつてゐるといふやさしい男の氣分が玉子の胸に染々と印象されて殘つてゐた。『素人になつちやまさかそんなことは出來ないから。』かう思つて一緒に過した一夜のさまは、今でも明かに玉子の眼の前にあつた。

『私、これでも氣分は堅い方なんですから。』玉子はそんなことを淺田に言つた。

御用商人の群はよく其處を訪ねて來た。それは、『あんな妓を淺田君も物好きな。』などと言つたやうな人達であつた。しかしその時はそんなことを夢にも言つたことがないといふやうな顏をして、玉子の氣

かう言ふと玉子は長押から三味線を下して、面白い流行唄などを彈いた。長唄を彈いて見せる時には、『ヤァ、よい』などと言つて男は聲をかけた。樂しさうに莞爾してゐる淺田の顏は、四邊に際立つて見えてゐた。

仕事の多い時には、淺田は夕飯を食ふとすぐ、二階に上つて、机に向つて、せつせと罫の入つた洋紙に數字を書き入れてゐた。『面倒なものね。』傍から玉子がこんなことを言ふと、『厄介で爲方がない。明日までにやつて持つて行かなけりやならないんだから、』などと言つて頻りにペンを走らせた。

一週間に一度づゝ宿直の日があつて、その時は玉子の家から大抵父親なり母親なりがとまりに來ることになつてゐた。

『また宿直が來た。此間泊つたばかりだと思ふのに――』などと言つて、その日はつまらなさうな顏をして淺田は出かけて行つた。一夜でも女を一人殘して置くのが氣になるといふやうな風が此頃段々歷々と見えて來てゐた。引いてから、一週間ほど經つた時、Jから手紙が玉子の許に來たことがあつた。それを運わるく淺田に受取られた。手紙には、別に變なことも書いてなかつたけれど、引いてから玉子がJの許に電話をかけたといふことを、淺田は不愉快に思はずには居られなかつた。『だッて、それは爲方がないわよ。矢張、稼業をしてゐれば、お客ですもの。別に、何にも言つたわけぢやないのよ。かうして引くことになりましたからつてお禮の電話をかけたばかりなんですもの。ちつとも可怪しいことなん

麗にといて、髱を長く後に見せてゐた。着物なども注意して成るべく同じのを着ないやうにしてゐた。三時過ぎになると、いつもきまつて、『りんや、金盥にお湯を取つてお呉れな。』かう言つて、玉子は鏡臺を明るい障子のところに持ち出してお化粧を始めた。近所の錢湯に出かけて行つた時には、襟のところを眞白にして、ほんのりした色艶の好い顔をして歸つて來てゐた。ある日、束髪に結つたのが淺田の氣に入つて、『矢張、さういふ方が細君らしく見えるね。』と言つたので、玉子はそれから束髪を續けて結つた。

『一度、この髪で寫眞を撮つて置きたいわねえ。』こんなことを言つて、玉子は自分で鏡にうつして見たりした。額は廣いが、何方かと言へば小柄な顔のつくりは、庇の大きい束髪とよく映つた。

毎日午ごろには、近所の肴屋の若い衆がきまつて番臺をかついで『今日は――』とか何とか言つて、威勢よく入つて來た。しかし魚の種類のまだよく呑み込めない玉子には、何を買つて好いかちよつとわからなかつた。『爲方がないから、また刺身でも取つてお置きよ。』かう玉子はりんに言つた。淺田で、『これは誰がつくつたんだい。りんかえ？　鹹くつて食へないぢやないか。』などゝ口を歪めるやうにして言つた。それでも玉子は、何うかすると、物々しく赤い襷などかけて、臺所へ出て働いてゐた。さういふ時には、きまつて甘たるい玉子燒などが夕飯の膳に上つた。

長火鉢のところで、メリンスの大きな座蒲團を敷いて、淺田はいつも晩酌の顔を赤くしてゐた。

『何か聞かせないかえ。』

知つてゐる。何うせ長くは續きはしまいといふやうに母親は見てゐたが、それでも每月の手當は貰ふし、かうして每日のやうに娘の顏を見に來られるのが嬉しかつた。『母さん、また、明日來てお吳れ、正午前にね、』などと玉子が言ふと、『でも、餘り留守に來て親子で勝手なことをしてゐるやうに思はれるのもいやだから、』などと母親は言つた。淺田は默つて、むつゝりして、始終何か物を考へてゐるやうな人だつた。

『母さん、まァ好いでせう。今少し遊んでお出でなさい。』淺田はいくらか田舍訛のある言葉で母親に言つた。

りんは下町生れで、髮などを綺麗にして置くことの好きなやうな子であつた。玉子は氣をつけて自分の持つてゐる流行の半襟を遣つたり、時々多分のお小遣をやつたりするので、りんは喜んでよく働いた。何うかすると、旦那の留守に、一人で三味線を出して『梅の春』なんかを彈いたりなどして遊んだ。『お前、その位彈けるのを投つて置くのは惜しいよ。ひまの時には習つて上げるから、もうすこし稽古をおしよ。りんは容色好だから、何んな運でも向いて來るよ。』玉子は一廉世間を見て來たやうな口の利き方をした。

四時、遲くも五時には淺田は役所の方から歸つて來た。靴の音がして、格子戸ががらりと明くと、玉子はいつも其處に出て迎へた。其時は玉子はいつでも眼の立たないほどの薄化粧をして、丸髷の鬢を綺

たもんですよ。それに、旦那樣が年を取りすぎてゐますね、』などゝ評判した。

近所の桂庵から伴れて來た下女は、十六か七で、色の白い、ぽつてりした子であつた。赤い帶揚などをしてゐた。名をりんと呼ばれてゐた。『りんや、りんや、』かう玉子の冴えた調子で呼ぶ聲が其處から聞えた。

母親は妹を伴れて毎日のやうに其處にやつて來た。幼い妹は見晴しの好い二階をめづらしがつて、來るとすぐいつも階梯を登つて行つた。そこの六疊には、大きな一貫張の机が置いてあつて、淺田が役所から持つて來た罫の入つた洋紙などがその上に載せられてあつた。餘り長く下りて來ないのを氣にして、母親が行つて見ると、妹はその机に向つて、姉さんに買つて貰つた雜誌の繪などを熱心に見てゐた。

『福ちやん、福ちやん、下りてお出で。好い物を上げるから。』

下からかう玉子が呼んだ。

兎に角に娘がかういふ新しい家を持つたといふことは、母親に取つては此上ない喜悅であつた。淺田には女房子がある。部屋住の身の上でもある。それに、段々聞いて見ると、財產家と言つてもさう大した財產家でもないやうだ。今度のことにしても、御用商人あたりから金を餘程融通させた處もある。戰爭中で、人手が足りないので、割合に好い役を勤めてはゐるけれども、主計と云へば、軍人でもさう大した好い處ではない。それに、玉子が別に深く淺田を思ひ込んでゐるといふ譯でもないのを母親はよく

『この汽車の地響きさへないと申分はないところなんだけども……だけどそんなに十分なことを言へないわね。これでも結構よ。』

『結構ともね。』

四五日前に、玉子は淺田と來て、愈この家を借りることにした。親元身請の金の外に、玉子の父母にも淺田は尠からぬ金を渡した。新しい簞笥、新しい長火鉢、新しい寢道具、何處を見ても新しいものばかりであつた。二つあるものはと言つて、玉子の家から運んで來たものも少しはあつたが、大抵は新しく買入れたものが多かつた。表の荒物屋からは、手桶だの、柄杓だのを小僧が運んで來た。

それは建てたばかりでまだ誰も入つたものはないといふやうな家であつた。横町を入つて、それからまた少し奧へ入つて行かなければならないやうな位置にあるその貸家は、長い間人の目に留まるやうなことはなかつた。出來てから三月近くもかし家札が斜に貼られたまゝになつてゐた。

奧へ入つて行かうとする處にある二三軒の人達は、綺麗にお化粧をして、根の高い形の意氣な丸髷に結つた若い細君を不思議さうにして見た。何ういふ人だらうなどゝ言つて噂した。軍服姿の主人を見た人は、『御祝儀をすませたばかりの若夫婦ですよ。何うもさうらしいですよ、』などゝ言つた。すると上さんは、『けどもね、おつくりの爲方が普通ぢやないと思ひますよ。それに、口の利き方なんかでも、今まで娘でゐた人ではありませんよ。この間、移轉した日にちよつと來て吳れましたけれど、それは落附い

『向うに黒く、見えるのは、何だえ？　あれは？』

『あれは汽車ですよ。段々あれが此方へやつて來るんですよ。』

其處に並んで立つてゐた玉子はかう言つて其方を見た。

『さうかえ、あれが汽車かえ。』

『見てゝ御覽なさい……そら、段々近くなつて來るから。』かう玉子が言つてゐる中にも、その汽車は次第に此方へ〳〵と近くなつて來てゐた。一目に見渡された長い線路に、始めは點のやうに見えてゐたのが、段々玩弄箱位の大きさになつて、やがては、斜に靡く白い烟がはつきりと見え出して來た。

『汽車だね、矢張。』

かう母親は言つて、『何處等になるだらうね？　彼處は？』

『さうね、大井の少しこつちの方でせうね……向うが妙華園だから。』

『妙華園が見えるのかえ？』

『それ、其處がさうですよ。』かう言つて玉子は指した。そこには低い丘のやうなものが見えてゐた。

『あそこになるかねえ。』

『さうでせう、ほら……そこに踏切を越えて行くんだから。』こんなことを二人して言つてゐる中に、汽車はもうそこにやつて來て、地響きをさせてその下を通つて行つた。

『今日は宿直だから。』

『さう。』

殘念さうに言つて、『さびしさうね。こんな處に一人でゐちやさびしいわね。それで一體何處に泊るの？』四邊を徇して『そこに寢るところがあるの？　さう？』立上つて、『好いわよ、見せたつて。』かう言つて玉子は立つて向うの方に行つた。室の隅の小さな扉を明けると、そこに五疊の間があつて、雜多したものゝ中に寢道具などが積みかさねてあつた。

やがて其處から戻つて來た玉子は『さびしさうね、私、來て上げませうか。』かう言つて面白さうに笑つた。

十

二階から富士が手に取るやうに見えた。廣くあたりが見渡されるといふやうなところで、松の生えてゐる寺の墓地の向うには、混雜した工場の烟突の烟が見えたり、小さな橋の架つた汚い堀割が見えたりした。扇の形のやうに其處から二筋にわかれて行つてゐる汽車のレールもそれと明かに指さゝれた。

『好い見晴らしだね。』

こんなことを言つて、長い間欄干のところに立つてゐた母親は、

『ぢや、これだけやつて置くよ。』

『何うも難有う。』

かう玉子は禮を言つて受取つて、『家の方へは何時行つて下さるの？　此間、母さんがお目にかゝつてから大變に喜んでゐるのよ。父さんも喜んでゐたわ……本當に安心したつて言つてゐてよ。此間はまた難有う。妹まで何が藏いたつて。』

『何ァに。』

『ぢや、今月ね。何でも、あの向うの處に好い家があつたつて父さん言つてゐてよ。二階があるのよ。八圓位だつて言つてゐたわ。』

『其内一緒に行つて見よう。』

『何時行きませう？』

『さァ、』と言つて、淺田は少し途切れて、『二三日の中また彼處に行くよ。』

『さう――』

玉子は卓の前に行つて書類や帳薄をいぢつて見たりなどした。『もう何うせ、藝者をやめるんだから、一度位さういふ思ひをしたつて好いわ。今日歸つたら電話をかけてやらう。』かう腹の中で思ひながら、

『今日は何うしても出られないの？』

『うむ、』などゝ言つて、淺田は根の高い形の好い玉子の丸髷を見た。

『これからもう始終、髷に結へるから嬉しいわ。』こんなことを言つた玉子の胸には、昨夜の不意の嬉しい出來事が歷々と浮んで來てゐた。思ひもかけず出かけて行つた待合に、雪助と他の藝者とが二人ゐて、近所の芝居に出てゐる色の白いやさしい口の利き方をする役者が三人ほど來てゐた。その芝居には玉子も度々出かけて行つて、誰が好いのとかねてよく噂してゐた。中でも女形をする丈い高い役者は、殊に玉子の氣に入つてゐた。玉子は皆なに冷かされたり調戲はれたりして、體中が熱くほてつて來たりした。一座は遲くまで賑かに花を引いた。それは他の座敷では見ることの出來ないやうなやはらかな暖かい樂しい氣分で、勝つたり負けたり笑つたりする間に、男の呼吸と女の呼吸とは、溫かく氣味わるく一間の中に混り合つた。鮮かな着物の色彩が四邊にチラ〳〵したりした。玉子は一時過ぎになつてから雜魚寢をした時のさまなどを頭に浮べた。

『此間はいろ〳〵難有う御座いました。』

『いや。』

一時間ほど前に、矢張この室に淺田をたづねて來た一人の御用商人があつた。その商人の置いて行つた紙包は、そのまゝそこの大きな卓の抽斗に入れられてあつた。やがて淺田はその一部を其處から出して女に渡した。

く路を通つてゐた。晴れた午後の日影の暖かい野には、カーキー色の汚れた軍服を着た傷病兵が其處此處に點點として歩いてゐて、それが繪か何ぞのやうに此方からくつきりと見えた。幾棟となく連つたペンキ塗の洋館の向うには、テントやバラックなども見えてゐた。

玉子は教へられたやうに、門の前で車を下りて、門番に男の名を言つて、小使につれられて、ある小さな扉の中から汚い應接間のやうな處へ先づ入つて行つた。約束して置いた通り男は宿直で其處にゐた。顏を見せて、ちよいとゝ言つてすぐ出て行つたが、今度は玉子は傍の細い廊下から男の事務を取つてゐる一間の方へとつれられて行つた。書類や帳簿の一杯に載せられてある卓が二脚三脚も置いてあるやうな室で、壁には男の軍帽と短劍とがかけてあるのを玉子は見た。男は莞爾しながらやがて椅子を持つて來て女に勸めた。『いつでも此處で仕事をしてゐるの?』こんなことを言つて、めづらしさうに玉子は四邊を見まはした。

『此處に大勢ゐるの?』かう玉子が訊くと、『三人ゐるんだよ。今日は日曜だから皆な早く歸つて了つたけれど。』かう言つた淺田はベルを鳴らして小使を呼んだ。年を取つた人の好さゝうな小使は、別に怪しみもせずに、丁寧に挨拶をして、赤く濁つた茶を其處に置いて行つた。

『奥さんと思つてるのね。』

玉子は得意さうに笑つて見せて『よく似合ふでせう。』

その話は出來さうに見えたり壞れさうに見えたりした。『何うも、考へて見たけれど、部屋住の身分だからね、』などと言はれた夜には、玉子はつまらなさうな顏をして歸つて來た。かと思ふと、自分がすつかり其男の心と體とを堅く握つてゐるやうに見える夜などもあつた。二階の一間で焦々して待つてゐるを承知しながら、成べく男に逢ふ時間を遲くしやうといふやうな餘裕を心に持つた時には、玉子は何となく得意な氣がした。男はまた男で、『何もそんなこと氣にしないたつて好いぢやないか。僕さへ好けりや、他人は何と言つたつて好いんだから……大丈夫だよ、僕も十分なことは出來ないけれど、言つたことはするよ、』などと言つて玉子をなだめた。玉子はJの話をわざと大きく男に話して聞かせたりなどした。

で、少くとも其話は二月か三月續いた。何方つかずの中に二月が來て、去年の弘めをした日もやがてやつて來た。玉子は自分ながら自分の心持の段々ませて行つたのに氣が附かずには居られなかつた。玉子はおづおづしたやうな心で一軒每に褄を取つて挨拶した時のことなどを思ひ出してゐた。戰爭が彼方此方で勝つて町が國旗と萬歲の聲で埋められるやうな日も度々あつた。男は其時分濠端の病院から郊外の分院の方へ勤めることになつてゐて、戰地から傷病兵が澤山に來て忙しくつて困るなどゝよく玉子に話してきかせた。

それはある日曜日であつた。玉子は大きな丸髷に結つて、車に乘つて、町の裏から野の方へと出て行

ども思ひ出されてゐた。『一體、何ういふ風になつてゐるんだい。』やがて男はかう言つて考へるやうな顏をした。

『私なんかそりや輕いわ。』

玉子はかう云つて、いろ／＼話をして、親元身受にすれば譯はないといふことまで話した。玉子は一年ゐた慘めな境遇から更に前にひらけて來る新しい世界と境遇とを想像した。『母さんに逢つて頂戴ね……母さん何んなに喜ぶかしれないわ。』玉子は體を男の方に寄せるやうにした。

玉子はその話の氷のやうに解けて行くのを心配した。何うかして此話だけは取り留めたい。自分も仕合せな妓の一人になりたい。大して自分の好きな男といふではないけれど、身請そのものを藝者の唯一の仕合せのやうに信じてゐる玉子には、もしこれの出來ない場合には、一生の運を取逃して了ふやうにさへ感じられた。それに一年ゐた社會から離れて別な社會に入つても行きたかつた。父母に樂をさせることも今よりいくらか多く出來るやうにも思はれた。しかし何よりも玉子の心を動搖させたのは、傍にゐて自分のことを何の彼のと其男に言つて聞かせる御用商人の群であつた。『あんな妓なんか』とか『淺田君も物好きだ、』とか『何うせ金を使ふのなら、もう少し好いのを、』とか言ふ言葉は、絕えず玉子の耳に入つてゐた。男の口裏からもさういふ語氣がよく汲み取られた。『見ていらつしやい。屹度、身請させて見せて上げるから、』といふやうな意氣地も強く盛に起つて來た。

てゐた。『あの男の家はあれでも好いんだよ。田舍では立派なもんだよ。女房子はあるけれど、何うせ田舍に置くんだからね。それに、氣前の好い男で物がよくわかつてゐて、友達としても賴み甲斐のあるやうな男だよ。』など とその醫者は話して聞かせた。その夜は淺田は遲く一人でやつて來た。玉子が受けてゐた座敷をすまして其處に出かけて行つた時には、淺田はいつもの奧の六疊に餉臺を前にしてぽつねんとして坐つてゐた。淋しさうな顏色をしてゐた。それをいろ〳〵なだめたり何かしてゐる中に、急に心がぴつたりと合つたやうに二人は染々とした。これまでには飛び〳〵に話して置いた身の上話を今更のやうに玉子は持出して、筋道を立てゝ男に話して聞かせたりした。父母のことも話せば、弟達の話もした。父親の口が今だに何處にもなくつて、自分が此處に出た時の金も長い居食ひにもう大抵はなくなつたなどゝいふ話もした。玉子の眼には涙がこぼれさうになつてゐた。やがて二人は顏を合せたり手を組み合せたりした。『本當に父さんがもう少ししつかりしてゐて吳れると苦勞はないんですけども……何處かに出る口があつても、矢張り家の足しにはならないやうな人ですものね。ですから出來れば矢張私が何うかしなければならないんですの。』

染々した聲で玉子は言つた。自分の持つた容色や腕や柔かな氣分や、色彩の鮮かな長繻絆や、ほの暗い靜かな一間の空氣や、さういふものがかなりに大きな幻影となつて男の體の中に働いて行つてゐるのを玉子は此時ほど明かに意識したことはなかつた。待合の女將や內の姐さん達の常に言つてゐる言葉な

た。

Jの方に行つてゐて、そのお客のゐる待合から度々電話がかゝつて來ても、終に行かれずに時間になつて了ふことなども稀にはあつた。田舍の年寄が離しさうで中々離さないのに困つたことなどもあつた。さういふ時には、玉子は朝早くまだ寢てゐるそのお客の室へ行つて、『昨夜は親類に行つてゐたもんだからすみませんでした……。』とか何とか言つて申譯をした。さうかうしてゐる中に、不思議にも男は今まで見せなかつた心を開いて見せて來た。男の心の俄かに此方に偏つて來るのを玉子は感じた。

『一體、何ういふことになつてゐるんだえ？』

かうそのお客は聞くやうになつた。

ある夜は何うしてか玉子の心が今までにないやうにそのお客の方に寄つて行つてゐるのを見た。多い男の中にゐて、それでゐて、男の情に餓ゑてゐるやうな境遇では、Jの何方つかずの微温い心持は玉子にはまだ物足らなかつた。此方から絶えず寄つて行くのを外して置いて、すつかり自分のものにして了ふといふやうな處が何處かにあるのを發見した時には、玉子は廊下のところに立つて悲しい辛い思に下唇を嚙んだ。色男ぶつたやうな厭なところも段々それと見え出して來た。玉子は幾度もそれとこれとを引較べて考へて見るやうな女になつてゐた。淺田の友達で矢張その病院につとめてゐる醫者から、淺田の田舍の家のことなどをさぐるやうにして聞く時分には、玉子の心も餘程其方の方へ開いて向いて行つ

悄然立つた玉子の姿を黒くくつきりと見せてゐた。

秋から冬にかけて、玉子には度々逢つてゐる客が二三人あつた。ある家では田舍の旦那といふやうな四十年輩の人が來た。ある家ではＪといふ金釦鈕をつけた學生が來た。商人見たいな人達につれられてよく遣つて來る三十位の脊の高い色の淺黑い人は、ある山手の陸軍の病院につとめてゐた。淺田さん淺田さんと呼ばれてゐた。

玉子の心は矢張若いＪに偏つてゐた。その家からかゝると、いつも嬉々として出かけて行つた。しかしその病院に勤めてゐる人の方も滿更には思つてゐなかつた。男振は好くないが、何處かさつぱりとしてゐた。『あんな妓よりもつと好いのがいくらもある、』などゝ商人達の言ふのを聞流して熱心に心を寄せて來るのも玉子には嬉しかつた。それはその病院で會計の方をしてゐるやうな人で、戰爭になつてから仕事が忙しくつて困るなどゝ言つてゐた。一緒に來る商人達には、醫者の機械を賣る店の番頭だの、種々な材料を病院に納める商人などが多かつた。何でも家は田舍の方にあつて、汽車に乘れば四時間位で行けるほどの距離であつた。田地なども多く持つてゐるやうなことも話してきかせた。『病院なぞにつとめてゐるのはイヤなんだけれど……家に歸つてゐれば旦那樣ですましてゐられるんだけれど、矢張東京が好いからな、』などとも言つた。それに此前に玉子が逃げて來た田舍は、丁度その田舍に行く道の途中に當つてゐた。その話を玉子がした時には、『さうかえ、あんな處にゐたのかえ。』かう其人は不思議にし

指環が一つ二つ殖えた位のもので、他に身の輕くなるやうなこともなかつた。父母に樂をさせるどころか、その顏を見に行くさへ容易でなかつた。一月に精々一度歸つて行くにしても、抱妓の身は夕方には早く歸つて來なければならなかつた。

それに、細かい男の心は玉子にはまだよくわからなかつた。それは約束したことが約束にならないやうなものでもあれば、捉へたものがすぐ指から滑つて脫けて行つて了ふやうなものでもあつた。あの人がと思ふやうなお客がフイと離れて行つて了ふやうなことはこの社會にはめづらしくなかつた。『お前さんそれは下手だよ。』かう姐さんによく言はれたが、それでは何ういふ風にすれば好いのか、それが玉子にはまだ細かく呑込めなかつた。騙されて指環を取られた時には、姐さんから注意されて、雪助と一緒に慌てゝそのお客の下宿してゐる家へ行つて見たりなどした。『お客を見損ふから駄目なんだよ。矢張、まだ苦勞が足りないんだね。』かう言つて姐さんは笑つた。

好い運の向いて來た人の話を聞く度に、『私なんかとても駄目だ。』かう思つて玉子はよく氣を腐らせてゐた。お座敷のかゝつて來るのを初めは樂みにも力にもしてゐた玉子が、此頃では、『また、あそこからかゝつて來たよ。イヤだねえ、』などゝ思つた。一騷ぎ騷いで姐さん達の挨拶して歸つて行つた後のさびしさ辛さがひしと身に染みるやうな夜も幾度かあつた。二階の階梯の上の廊下のところに立つてゐる時には、思はず深い深い溜息が出た。前の山の樹立の上には、丸い明るい月が靜かに上つて、欄干の處に

とも知らずに三四度は逢つた。死んだ細君の話を何ぞと言つては持出して、聞いてゐても可哀相なやうな氣のする人であつた。『雪江さん、貴女は私の細君になつて下さる？　なつて下さいね。お照がゐなくなつてから淋しくつて爲方がない、』などと言ふ時には、少し變だとは思つたけれど、別にこれと言つて變つたやうな處もなかつた。靜子の時も矢張さうだつたさうだが、それがやがて玉子を捉まへて死んだ細君と同じやうな取扱ひ方をして來た。『お照、お照、』などと玉子を呼んだ。後には玉子も無氣味になつて此方から遠退くやうにした。と、それから少し經つてから、矢張その待合で靜子と一座をしたことがあつた。其時靜子は、『まァ私、本當に何うしやうかと思つた。一日に何遍彼方此方からかけて來るかわからないんですもの、怖いより何より氣味がわるくつて……おや、さう？　雪江さんも……イヤだわねえ。』と言つて笑つた。『可哀相は可哀相なんだけども……イヤだわ。』かう言つた時には、靜子は身の毛のよだつやうな素振をして見せた。今だにその息子は待合から待合へと相手をあさつてゐるといふ話であつた。玉子は何とも言はれないやうな厭な〳〵氣がした。

彼方此方で戰爭があつて、賑やかな萬歲の聲と、國旗と、三味線の音と、號外賣のふれ聲との中に、うかうかと月日は經つて行くのであつた。中形の浴衣を着て濠端の夜風に吹かれたり、戰地から來ためづらしい活動寫眞をお客と見に行つたりした夏も過ぎた。初めは珍らしかつたお座敷も、中頃にはつまらなくなり後には厭にさへなつて來た。一生懸命に稼いでも、姐さんの機嫌の好い顏と、着物が一二枚、

記者をしてゐる友達の爲めだと言つて、土地の藝者の寫眞を集めて借りて行つたりした。艶種なども面白がつて聞いて行つた。蝦蟇仙人に似てゐる顏をして、咽喉をつかへさせたやうな笑ひ方をするので、雪助は、『今日また蝦蟇さんが來てねえ、』などと言つてはよく笑つた。お客になつて玉子を聘んで呉れたのは、角の梅本といふ待合であつたが、それから逢ふ度に、雜誌だの本だのを持つて來て呉れた。『私本を讀むのが大好き、此間、「己が罪」ッていふ小說を讀んで泣いちやつたわ。面白いわねえ、』などと玉子は言つた。玉子は內に配達されて來る艶種の多い新聞の小說を每朝一番先に讀むのが例だつた。『面白いのよ、あの小說は、』抔と言つた。後には、その記者は自分の書いた本などを持つて來て呉れた。それに、玉子の讀耽つてゐる新聞の小說の作者の話をして呉れたのも矢張其人であつた。『さうですか、此の近所にゐらつしやるんですか？　さう？　柏家の園江さんの人？　本當でせうか。園江さんなら私二三度逢つて知つてゐるわ。私もお目に掛りたいわねえ。貴方知つてゐらつしやるなら、是非一度お目にかゝらせて頂戴よ、』抔と玉子は言つた。しかしその新聞記者は容易にその作者を伴れて來ては呉れなかつた。

戀女房であつた細君の死んでから急にお茶屋や待合に出入するやうになつた人は、豐川稻荷の方へ行く町の通りの洋物店の息子であつた。一度逢つた時から藤屋の靜子といふ妓にひどく打込んで、每日のやうにお茶屋や待合へ出かけて行つたが、樣子が何うも尋常ではないと言ふので、後には靜子が身を躱すやうにして逃げて廻つてゐた。そのお客をある待合で知らん顏をして玉子につけた。玉子は少く

ど、終には旦那が怒つたり何かして大變だつたといふ話であつた。『でもね、姐さんの顏さへ見りやすぐ機嫌が治るんだから不思議ね……旦那の方が惚れてゐるのね、』後で雪助はこんなことを言つて笑つた。それに、旦那は隣のを借りてよく電話をかけてよこした。何うかすると、その電話を抱妓達が取次いだが、時には都合のわるいやうなことを言つて姐さんに怒られたり何かするので皆それを厭がつてゐた。玉子も二三遍へまな電話のかけ方をして姐さんに怒られた。『好い旦那なのに……姐さん何うしたんだらう？』こんな事を思つた玉子には、姐さんの心持なんかまだ十分よく呑込めてはゐなかつた。玉子に取つては面白いやうでもあり怖いやうでもあり悲しいやうでもあり淺猿しいやうでもある世間であつた。戰爭の號外はそれからそれへと續いて出た。戰爭の話で持切つたやうな座敷もあれば、株か何かの話で夢中になつてゐるやうな席もあつた。其中で、ある男がある女を追ひ廻して出齒庖丁で殺した話などを玉子は聞いた。

　玉突の兄さんは、『雪江さん、雪江さん、』と言つて可愛がつて呉れた。通りの角に、玉突場があつて、其處に大勢種々な人達がやつて來た。近所の息子連は、夕方には屹度其處に集まつて來て賑やかに騷いで行つた。新松葉の梅龍といふ玉好きな藝者が、二三人の客といつも騷いで玉を突いてゐるのが硝子戸の灯の中に透して見えてゐたりした。鰻屋の兄さん、小間物屋の敬ちやん、漆器商の定さんなどといふ人達がゐた。町の奥の方にゐる新聞に出てゐる人は、雪子姐さんの許へよくたづねて來て、時には雜誌

折角出かけて行つて、一時間とゐないで歸つて來るやうなことも度々あつた。さういふ時には、自分と同じやうな妓が二人も三人も行つてゐて、『あなたもう明いたの？　私もよ……』こんなことを言つて、さつさと歸り支度をした。『あの姐さんも隨分ね。あんな立派な姐さんでさへあゝなんだから……私なんか爲方がないわよ、』などと笑つた。

玉子は自分のお客の座敷の時には、よく頼んで雪助だの隣のお酌だのを聘んでやつた。雪助は三味線を上手に彈いた。お酌は可愛い子で、玉子の姿を見ると、『ちよいと、雪江さん、』などゝ人なつこいやうな呼び方をした。兩親には小さい時にわかれたやうな不仕合せな子で、家にゐる時には姐さんに叱られてよく眼の縁を赤くしてゐたりなどした。『私の岡惚れの子なんだから、聘んで下さいね。』かう言つて玉子はよくお客に頼んでやつた。

内の姐さんの旦那は、一週間目位には屹度やつて來ては泊つて行つた。其時には、旦那はお座敷にして呉れたり、お小遣を呉れたりした。『何うだえ？　流行るかえ？　さうかえ？　それは好いねえ！　大分馴れて面白くなつて來たらう。』こんなことを言ふかと思ふと、『もう情人が出來ても好い時分だね、』などと笑ひながら言つた。何うかすると、夜遲くやつて來て、姐さんがゐないで困つて了ふことなどもあつた。ある夜などは、何うしても姐さんの行方が知れなかつた。雪子姐さんが歸つて來て、心當りを訊いて見ても矢張わからなかつた。玉子は丁度其時お座敷がかゝつて來て、あとはよく知らなかつたけれ

やりきれないものね。私なんか、そこへ行くと、悟つたもんだよ。何うせなるやうにしきやならないよ。面白いことをするだけ得だよ、』などと言つた。内の姐さんはまた姐さんで、『でも、一度は運が向いて來るもんだよ。雪江さんなんかだつて、二十五迄の中には、屹度好い運が向いて來るよ。だから其時は旨く捕へて逃さないやうにするんだね。それに豐川樣は不思議ね。豐川樣を信心すると屹度運が開けて來るよ。私なんかも彼處へお參りに行つた明る月から、今の旦那にお目にかゝる樣になつたんだから……だけど、若いお客は駄目ね。何うしても、年を取つたお客でなけりや！』

それが玉子にはよく解らなかつた。年を取つたお客でなければ、何故駄目なんだらうなどゝ思つた。雪助に話すと、『姐さん、あんな事を言ふのよ。お爺ちやんなんか厭なこつた。矢張り若い人が好いわよ。』かう雪助は笑ひながら言つた。大學生だと言ふすいたらしいお客があつて、それが二三度來てあとはぱつたり來なくなつた時には、玉子は何だかつまらないやうな氣がして二三日ふさいで暮した。『あの方何うして？』などと其處の待合のお女將に訊いても、それは何うにもならないやうなものであつた。帳場に行つて、女中に座敷を聞いて、襖を明けて入つて行く時の最初の好奇心と言つたやうなものも段々薄くなつて行つた。客は笑つたり騷いだり戯談を言つたり大きな聲を張上げて節も何もない唄を平氣で唄つたりした。一騷ぎ騷いだ後のお座敷に玉子はよく聘ばれて行つた。

意地のわるい姐さん達は『何處の妓？　あゝさう？　あそこの妓かえ、』などと言つて尻目にかけた。

『何でも一生懸命に稼がなくつては駄目よ。私なんか色戀どころではないわ。一座敷でも餘計にして、着物でも殖やすやうにするより他に爲方がないわよ。』かう隣のわけの妓の言つた言葉などを玉子は思ひ出したりした。それに引かへて、仕合せが天から降つて來たやうな妓などもあつた。ある待合の女將は、『何が何だかわからなくなるよ。あの妓、あの西洋人に出るのは厭だ厭だッて爲方がなかつたのよ。それが何うでせう。今ぢや大したもんよ。麻布のあそこに行つて御覽よ。それは大きな立派な西洋づくりよ。それで、ダイアでも何んでも、欲しいもの次第だからね。それに、本國にも奥さんが無いんだつて……あの妓の家なんか、それは見てゐる中に、丸で變つて、あの汚いお袋が絹物か何かでブラ〳〵してゐるんだからね。』などと話したかと思ふと、ある中年の妓は、段々男を手繰り寄せて、他のお座敷には出ないといふ約束で、別物を月々澤山に貰つて、愈々お目出度く引かされるといふ段取になつたが、ふとしたことから彼方此方にお客を澤山に持つてゐたといふことが先方にわかつて、貴樣のやうな奴にはもう二度と逢はない、逢ひたくないといふ電話が掛つて來て、すつかり運を取り逃がして了つた。『本當の奥さんにするつもりだつたんですよ。船の方か何かに出てゐる人で、立派な旦那でしたよ。あの旦那なら、それは仕合せだつたのに……運といふものはわからないものよ、今ぢや、あの妓、あんな男と一緒になつて、慘めなもんぢやないか。』かうある姐さんが話した。もう一人の姐さんは、『けども、かういふ稼業をしてゐちや運なんか當にしてはゐられやしないよ。ちよつと面白い眞似でもしなけれやアとても

九

姐さん達の顔も彼方此方の座敷で段々多く知るやうになつた。かけて呉れるお茶屋や待合の數も殖えて行つた。大きな宴會の席で、名のあるお酌や若い妓が得意で踊ををどつたり三味線を彈いたりするのを默つて隅の方に坐つてゐる辛さも次第に覺えて來た。誰も彼も皆な綺麗な扮裝をしてゐた。指環なども澤山にはめてゐた。

ある名高いお茶屋に行つた時には、土地で聞えた大きな藝者屋の抱妓が大勢來てゐて、自分などは取附く端もないやうに扱はれた。客にも立派な人達が多かつた。何處かの華族の若樣だといふ色の白い品のある若い人は、一本になつたばかりの綺麗な妓と廊下に立つて睦ましさうに話してゐたりした。玉子は自分達の逢ふ人達とさういふ人達とを比べて考へずには居られなかつた。つい此間、色のわるく白い解らない言葉を話すお客の座敷へ夜遲く雪助と一緒に行つた時の慘めさなどを玉子は思ひ出した。世の中には仕合せな人が澤山にあつた。自分などは何うなつて行くのだらう。何ういふ風にしたら自分などもさういふ仕合せの身の上になることが出來るのだらう。かう考へると玉子はいつも心細くなつた。行く道は幾條もあるけれど、始め出かけた路は、矢張其路で長く眞直に續いて行かなければならないやうなものであつた。

事務所見たやうなものがあつて、その向うの工場からは汚ない勞働服を着た職工がぞろ〳〵と出て來た。それは多くは髮を箒のやうにして體中を油で黑光にさせて居るやうな人達であつた。さういふ人達の中に入つて行かなければならない幼い弟を玉子は可哀相に思はずにはゐられなかつた。

『姉さん、左樣なら。』

かう言つて、弟は工場の傍の小さな入口からさつさと入つて了つた。玉子は悲しいやうな傷ましいやうな氣がして、その弟の入つて行つた入口を暫しの間見てゐたが、出たり入つたりする汚い職工達にじろじろ見られるので、玉子はやがて思ひ切つて其處から出て來た。『私なんか、私なんかもつと苦勞したつて爲方がない――』かう思ふと涙が胸にこみ上げて來さうになつた。

電車を待つてゐる間、父母の方へ行く電車は何臺となく通つて行つた。染々母親に逢ひたいとは思つたが、さう自由にはならない自分の體を思ひかへして、やがて玉子は此方の方の電車に乘つた。家に着いた時には急いで歸つて來ても、もう灯が點いてゐた。『雪江さん、さつきからお座敷がかゝつてゐるのよ。』顏を見ると雪助は玉子に言つた。それは玉子の嫌ひなしつこつい年寄の商人のお客であつた。かけて來た待合ですぐ知れた。玉子は急いで着物を着替へなければならなかつた。

『お錢なんか入らない。』

『いゝから。藏つてお置きよ。何か好きなものを買つてお上がりよ。』

玉子は無理に弟にそれを藏はせて、ちよつとと言つて電話を借りに行つた。

『もし／＼貴方吉村、お氣の毒ですが、宅の雪助さんを呼んで頂戴な。』かう言つて暫く立つてゐたが、『あなた雪助さん、私何處からもかゝつて來なかつたでせうね……さう……私――ちよいとね、弟の處迄行つて來たいんですがね。一時間位すると歸つて來ますがね。ちよいと姐さんに訊いて見て頂戴な。』また暫く立つてゐて『さう行つても好いつて？　成たけ早く歸つて來てよ、ぢや左樣なら。』かう言つて戻つて來て、『お前の處まで姉さんが送つて行つて上げるよ。』

ある通りの小間物屋の店では、玉子は弟を待たせて置いて、弟の着る薄いメリヤスのシャツを買つてやつたりなどした。濠端から乘つた電車をある四辻で乘替へて、公園の傍のやうなところを通つて、弟の奉公してゐる工場のある處へ來たのは、もうかれこれ五時に近い頃であつた。其處は電車のレールの兩方から交叉して來てゐるやうなところで、其處らに澤山ある工場の烟突からは、煤烟が黑く黃く白く地を這ふやうに靡いて、機械の雜音と汽笛と電車の唸りとが一つになつて暴風のやうに四邊に轟き渡つて聞えた。戰爭が始らない以前と比べて、玉子は其處に驚くべき凄じい活躍と煤烟とを見た。

電車を下りると、宗太郎はちよこ／＼と急いで歩いて行つた。呼吸の塞るやうな煤烟の中に、小さな

『何を食べるの？』

『何んでも好い。』

『此處は天ぷらが旨しいよ。蝦の鬼がらもあとで食べるね。』

『うむ。』

其處に、脊の低い、十二三の、これも不仕合せな境遇から奉公に來てゐる色の白い女の兒がお誂へを聞きに來た。『天ぷら二つ、』といふ金きり聲が高く聞えた。

『お前、たんとお食べよ。』

天ぷらに鬼がらを食つた後で、玉子はかう弟に言つた。弟は他に鴨なんばんを一つ食つた。取附の室にゐた二人連れの客はやがて勘定をすまして歸つて行つたが、出て行く時此方を覗くやうにして見て行つた。それは靜かで麗かでさぞ花見に人が出てゐるだらうと思はれるやうな日であつた。『ひまがあると、淺草あたりまで行つて見たいんだけど……お前だつて、そんなに遊んではゐられないね。』玉子はこんなことを言つて溜息をついて。

『お前もう澤山？』

で、玉子は此間姐さんから貰つたお小遣で買つた新しい小さな紙入を帶の間から出したが『お前、お小遣におし。』かう言つて其處から一圓札を宗太郎に遣つた。

『此頃は何うしてだか福ちやんの夢ばかり見るのよ。昨夜も見た。母さんと私と福ちやんと三人して歩いてゐる處なの、あの町の通りか何かよ。福ちやんが繪の本か何か買つて呉れつて、本屋の前で立つて歩かないで困つてるところよ。學校に毎日行つてるかえ？』

『此間も、己が行つてゐた時に歸つて來てゐた。手だの顏だのを眞黑にして歸つて來てた――』

『さうかえ、今度、その中、姉さんも一度行つて見よう。』

なつかしさうにして玉子は言つたが、ふと『それぢやお蕎麥でも食べようか。』

『うむ、蕎麥なら食つても好いや。』

『お前は蕎麥が好きね……蕎麥屋なら、あそこに旨しいお蕎麥屋があるよ。』

玉子はかう言つて、丁度突當つて曲らうとするところを左へ細い横町を入つて行つた。ざるそばといふ看板の出てゐる普通の町の通にある蕎麥屋と違つた構へで、門から入るところに松が靡いて、踏石が敷いてあつた。取附の室には客がゐたので、二人は離れの方へ行つた。

かうして弟を御馳走するといふことは、玉子には非常に嬉しいやうに見えた。母さんもかういふ處に一度伴れて來て御馳走してやつたら何んなに喜ぶだらうなどと思ふと、玉子は何だか自由に出來ない身が悲しいやうになつて來た。羽織も着ずに、汚れた襦袢を着て、髮の毛をのばしてゐる弟も慘に可哀相に見えた。

『天ぷら？』

『天ぷらも食ひたくないやい。』

『ぢや、何か食べたいものをさうお言ひよ。一時間位、私も遊んで行つて好いんだから。』

宗太郎は莞爾してゐた。二人はいかにも嬉しさうにして歩いてゐた。馬車が來て通つて行つたりした。

『定ちやん、何うしてるだらうね？』

『此間、近所まで使ひに來たつて、家に寄つて行つたッて母さん言つてた。』

『さう！』玉子は嬉しさうに弟の顏を見て『でも、よく來て呉れたね。今度はおとなしく辛抱してつとめて呉れなくちや困るよ。……今に皆な大きくなつて、母さんや父さんに樂をさせて上げなくつちやならないんだから、お前だつてもう大きくなつたんだし——。』

『大丈夫だい！』

『今度は大丈夫かい。それに、機械の方は好いんだらう？　今度の戰爭で？』

『うん、その代り、忙しくなつて、皆な困つてらア。』

『今に好くなつて、澤山姉さんにも樂をさせて呉れるねえ。定ちやんもおとなしいけど、あの子は弱いからね。姉さんは、宗ばかり頼りにしてるんだよ。』弟の方を見て、『福ちやん、おとなしくしてたかえ。』

『うむ。』

それに、あそこをぶら〳〵してゐると、人がイヤに見やがるんだもの。餘程、歸らうと思つちやつた。』
――こんなことを宗太郎は言つた。
『家には行かないかえ？　此頃？』
『此間、行つた。』
『母さん、丈夫かえ。』
『うむ。』
『今度の内は何うだえ？　好いかえ。』
『うむ、今度は大店だから好いや――』
かうして餘念なく話して歩いて行く二人を路行く人達は振返つて見て行つた。ある大きな藝妓屋では綺麗につくつた若い妓が褄を取つて出かけようとしてゐた。山の櫻が綠葉の間からチラ〳〵白く見えるやうな麗かなのどかな春の日であつた。
『本當に何が食べたい？』
『何にも食ひたくなんかないや。』
『鰻？』
『鰻なんかイヤだア。』

宗太郎は叔父の家に半年ほどゐたが、惡戲で、やんちやんで、叔父の子をいぢめて爲方がなかつた。負はされた子を柱に縛つて逃げて來たりした。それに、何うしても機械をやりたいと言ふので、つい此間、此處からそれほど遠くないある工場へ世話する人があつて年季を入れることになつたことは、此間ちよつと家に行つた時に聞いた。今度は辛抱して呉れゝば好いがなどゝ母親は言つてゐた。

『お前、また何うかしたんぢやないの？』

『何うもしやしねえ。ちよつと、琴平さまの處まで使ひに來たから、姉さん何うしてゐるかと思つて逢ひに來たんだえ。』

『さう？　それなら好いけれど……、』玉子は安心して、『ちよつとお待ちよ。……少しは遊んで行つても怒られやしないのかえ？　なら、お待ち。』かう言つて家に入つて行つた玉子は、姐さんにちよつと話して、一二時間ひまを貰つて、やがて羽織を引かけて出て來た。

『お前、今日は御馳走して上げるから、何でも食べたいものをさうお言ひ。』

『何にも食ひたいものなんかないや。』

『今日はおとなしいね。本當にお言ひよ。今日は姉さんお小遣ひを持つてゐるから。』

こんなことを言ひながら、姉弟は通りを何處へ行くともなく歩いて行つた。『俺は餘程、歸つて了はうかと思つたんだ。だつて姉さんのゐる處はあの家に違ひないと思つたけど、誰も出て來ないんだもの。

『誰？　私に？』

かう言つて立上つて、上り端から格子の外を玉子は覗いて見た。其處には誰もゐなかつた。

『誰？　誰もゐないぢやないの？　何うしたの？』

『來ててよ、先つきから、其處の前のところをまご〳〵してゝよ。』

『何とか言つたの？』

小雪は藝者達のゐる室の高窓の障子を明けて見て、『先きから來てたのよ、其處を行つたり來たりしてゐるから誰かと思つたのよ。小僧さん見たいな人よ。雪江ッていふ人は此處にゐますかつて訊いてたわ。』

玉子は俄に胸の躍るのを覺えた。『さう？』「宗太郎か誰か來たんぢやないか」と思ひながら、いくらかきまりがわるいやうな困つたやうな氣がした。其處にあつた駒下駄を突かけて格子を明けて外に出て見た。しかし通りにはそれらしい姿も見えなかつた。

『何うしたんだらう？』と思つたが、ふと氣が附いて、其處の二三間先の細い小路の處に行つて覗いて見ると、丁稚姿の宗太郎が果してきまりがわるさうにして其處に立つてゐた。姉の顏を見ると、なつかしさうにして此方へ寄つて來た。

『何うしたの？』

『何うもしやしねえ、姉さん、此處にゐるつて言ふから來て見たんだい。』

どした。近所の二階に間借をしてゐる雪助の馴染の學生上がりの男の許に一緒に出かけて行つた時には、其處で皆なしてお鮨なんか取つて食べた。歸りには坂のところにある豊川稲荷にお參りをして、おみくじを二人して引いて見た。凶が出たと言ふので、雪助はイヤにふさいで、『お前さんのは吉ね、憎らしいわ。』などゝ言つて破つて棄てた。丁度その時戰爭に出かけて行く兵隊が長い列をつくつて通つてゐて、何うしても向う側には行けないので、大勢の人達と一緒に長い間其處に立つて待つてゐた。大きな國旗が路を狹んで交叉してあつたりした。萬歳？　などゝ頓狂な聲を立てる者もあつた。

玉子は其處此處で戰地に發つて行くやうな人達の宴會を見た。近頃にないやうな活氣がその土地にも漲つてゐて、日が暮れると、何處のお茶屋でも待合でも、賑かな三味線の音が湧くやうに聞えた。藝者が褄を取つて闇の中を縫つて行くのが梭のやうに其處にも此處にも見えた。『三百五十米、打てッと言ふ間に水烟』などゝいふ唄が流行つて、軍歌が悲壯な調子で唄はれたりなどした。明後日發つて行くといふ若い好い男の中尉に、唯一度逢つたゞけで別れを告げるのは玉子には辛かつた。『本當に凱旋していらつしやいよ。忘れちやいやですよ。』かう言つて玉子は彈丸除のお守を男の手に渡した。

八

ある日の午後、お稽古から歸つて來て茶の間にゐると、小雪が『雪江さん、お前さん、誰れか來てよ。』

り物をしたりしなければならないといふことなども分つて來た。時々手の裏をがへしたやうに變つて行く女中達の顏色やら細かい氣分やらも呑込めて來た。

藝者といふものがわかつて來た時分には、多い藝者の中に自分はどんな位置を占めてゐるかといふことも知れて來た。それからそれへと聞く種々な話、好い旦那に立派な引祝をして貰つた妓もあれば、借金に首が廻らなくなつて一度逃出してそしてすぐ捉まつて伴れて來られた妓もある。男と身を躲した妓もあれば、下廻りの役者に夢中になつて、お客から金を引出す算段ばかりしてゐる妓などもある。玉子のゐる内のすぐ近所に、お腹が大きくなつて一時廢業して引込んでゐた中姐さんがゐたが、其處に來る旦那とあの晩つかみ合ひの喧嘩をして、揚句の果は、ちらし髮で跣足のまゝ飛出して、濠に身を投げたりした。その時は大騷ぎだつた。玉子は怖いやうな氣がしながら、濠端から人に負はれて全身濡れて死んだやうになつて歸つて來たその姐さんを見た。『男の嫉妬ッてそれは怖いものよ。』其時内の姐さんの言つた言葉は、後になつても、玉子の頭に刻まれたやうにはつきりと殘つてゐた。

かと思ふと、雪助は『だつて好いわ。さういふ嫉妬をされて見たいわよ。』などゝ言つた。雪助は常に若いお客の話を玉子にして聞かせた。『お爺ちやんなんか振つておやりよ。お爺ちやんにかぎつてしつこいわねえ。駄目よ、お前さんなんか。もつと若いお客を持つやうにおなりよ。昨夜のお客はそれはすいたらしい好い男よ。學生よ。學生はさつぱりしてゝ好いわ。』かう言つてチウと口を鳴らして見せたりな

とのすきな頭の禿げた醫者や、さういふ人達に玉子はやがて彼方此方の座敷で逢ふやうになつた。

『この子は本當にまだおぼこんなんですから……、何にも知らないんですから、無理をしては駄目ですよ。』何處の家の女將も玉子を前に置いて笑ひながらかう客に言つて聞かせた。

『昨夜のお客、何んな人？　矢張、お爺ちやん？』

何うかすると、雪助はかう笑ひながら訊いたりした。『私なんかいくら遲く歸つて來てもおきまりの御祝儀ですもの、爲方がないわよ。雪江さんなんかとは違ふんだもの。それはさうと、姐さんこの頃矢張お小づかひ呉れて？　呉れない？　何とか言つてお貰ひなさいよ。姐さんとお上ばかり儲けてるのよ。』など〻言つて聞かせることがあつたかと思ふと、『昨夜おかしかつたわ。小雪の奴ね、散々雪子姐さんに油を取られてゐたわよ。何でも雪子姐さんのお客から、知らん顏をしてお小遣を貰つてゐたんですつて。それも春月でよ。それが知れて大變だつたわ。姐さんにも怒られてゐたわ。好い氣味だつてよ。』など〻雪助は玉子に言つた。

玉子はそれでもかなりに賣れた。『今に段々融通の利く妓になるよ。調子が好いからね。イヤな顏をしないから好いよ。でも、あの時は可哀相だッたよ。泣きさうな顏をしてゐたよ。』其處の女將が笑ひながらかう姐さんに言ふやうになる時分には、玉子もかなりその土地の事情に詳しくなつてゐた。女將は勿論だが、女中達にも愛想を言つたり、機嫌の好い顏を見せたり、僅かなものでも好いから時には何か贈

てからのことであつた。其時には、玉子には他の待合でもう新しい客が出來てゐたけれども、それでも玉子は口惜しいやうな氣がした。廊下でぱつたり出逢つて、『何うしたえ？此頃は。』かう聲をかけられた時には、わざと知らん顏をして挨拶もせずに二階に登つて行つた。『何うせ賣物ですから。』と言つてやりたかつた。

帳場に來ては、『お上さん、あのお客に今そこで逢つちやつたのよ。誰？』などとわざと平氣な顏をして訊いた。

不思議にも新しい世界が玉子の眼の前に展けて來た。それは今まで眼の前に見えて居りながら遂にわからなかつたやうなものであつた。今まではおぼろげに一膜つゝんだやうな世界であつた。それがすつかり鮮かに見え出して來た。

壁のかげに行つて泣いてなんか居られない。のんきなことを言つて笑つてなんかは猶更居られない。あの時姐さんやお上さんに笑はれたり怒られたりしたのは無理はない。かういふ風に玉子は考へ出して來た。姐さんと旦那との關係、その旦那のある姐さんが、藝者でゐる時分からの仲で或役者に大騷ぎをしてゐるといふ噂も滿更虛言ではないといふやうなことも段々玉子に呑み込めて來た。うつかりしてはゐられないと玉子は思つた。

商人のやうな角帶を緊めた爺さんや、お役人らしい鹿爪らしい顏をした洋服姿の男や、戲談をするこ

玉子はその反物を手に取つて見た。それは牡丹色がゝつた矢絣であつた。その他に、『これはお小遣ひにおしよ、』と言つて姐さんは五圓札を一枚奥れた。

其處の待合の女將は、それからは打解けた調子で、種々なことを言つて玉子に教へた。

『お前さん、小さくなつてゐては駄目ですよ。思ひきり甘えておやりよ。この間、あのお客の歸る時、お前さん、お近い中にとか何とか言つて？　言はない？　イヤな人ね。さう言はなくつては駄目だよ。よく氣をつけるやうにすると、好いことが澤山にあるんだから。お客の氣に入るも入らないも、皆なお前さんの腕だから。』こんなことを言つて、何かそのお客の言つたらしいことを笑ひながら玉子にほのめかしたりなどした。其處でも玉子は顏を赤らめなければならなかつた。

その客に玉子の聘ばれたのは僅に五度ぐらゐであつた。段々其客の方から遠退いて行つた。『何うも面白くも可笑しくもない妓だ。本當に手入らずだつたよ。まさかと思つたが本當だつたよ。あれでも困るなァ。』などゝその客が言つてゐたといふことだつた。姐さんや女將さんの言つたことは逸早く雪のやうに解けて流れて行つて了つたのであつた。それを聞いた時には、流石に玉子も赫とした。一時の玩具にされたといふことが口惜しかつた。取つてかへしのつかない眼に逢つたといふやうな心持もした。無邪氣では居られないといふ覺醒が強い力で起つて來た。

その同じ待合で、その客が他の若い妓と戲れてキャツ〳〵騷いでゐるを見たのは、それから少し經つ

にして玉子は向うの方へと出て行つた。廊下の處に立つてゐた時には『雪江さん？　なにしてるの？』など丶肥つた女中は聲をかけて行つた。ある女中からはじろ〳〵と顏を見られた。

強い烈しい體がわく〳〵震へるやうな感じを玉子は經驗した。濃い痛い鬚が體中に蘇へつて、熱でもあるやうにくわつと熱くなつて來たりした。家に歸ると、姐さんは始めは變な眼色をして、人の體をさがすやうにして見てゐたが、やがてそれと解ると、急に莞爾し出して『其處にお菓子の貰つたのがあるからお上り。』など丶言つた。

家の人達はしかし何も言はなかつた。變な眼色をするものさへもなかつた。當り前のことだといふやうな顏をしてゐた。それが玉子の心を落つかせた。あくる日髮結から歸つて來ると、其處にいつも出入の吳服屋が來てゐて、種々な反物を並べさせて姐さんは見てゐたが『雪江さん、何れが好い？』と言つて、銘仙の不斷羽織の柄の好いのを二三反其處に出した。『さうね、この中では、私、これが一番好き。』かう言つて中で一番柄の粗いのを玉子が選ぶと『罪がないね。こつちの方が高いのだよ、ぐつと好いのよ。』其處につけてある小さな札を引くり返して見せて『何うせお前さんに上げるんだから何方でもすきな方が好いけれど、こつちにおしよ、この高い方に……これだッて地味ぢやないよ。立つて御覽。』かう言つて袖のところに當て丶見て『そら、よく似合ふぢやないか。』

『さうね、似合ふわね。』

あつた。玉子は生活の波の其身の上に蔽ひ被つて來るやうなのを感じた。丁度、其時、號外賣の聲がまたすさまじく町を通つて行つた。

玉子は長襦袢姿で廊下へ出て、

『姐さんすみませんが、後生ですから、號外を一枚買つて頂戴な。』

かう其處を通つて行く女中に聲をかけた。

その軍人は何處か濠端に近い大きな役所に勤めてゐる人で、『おい、貴樣、何うした？』といふやうな荒つぽい口の利き方をした。號外は何んな號外でも屹度買はせて熱心に讀んだ。『いよ〳〵我輩の世の中になつて來たぞ。』などゝ得意さうに言つた。『貴方もお出かけになるでせうね？』と女將が訊くと、『何に、己は内にゐる方だから、急には出かけるやうなことはないがな、しかし長い中には、これでも一度や二度は行くだらうよ。』かう言つて聲高く笑つた。鬚が濃く、色が黑く、顏が歪んで、何處に一つ好い處があるではないのに、女將は、『好いお客樣だらう、あれで豪い方なんだよ。そら、何うかすると、金の紐見たいなものを胸のところに澤山つけた軍人がゐるだらう。あゝいふ人なんだよ。戰爭のことを種々先に立つて考へる人なんだよ。大事にしなくつてはいけませんよ。』などゝ言つた。

そればかりなら好いのに、其處の女將は玉子を前に置いて、『好い妓だつたでせう。おとなしくつて、やさしくつて、素直で――。』などゝ遠慮なしに客に言ふので、終には其處に居たゝまれずに、顏を眞赤

は初めて逢つた時から五六日位經つてからのことで、『氣にさへ入れば、末長く面倒を見て呉れるッて言ふんだから……若い好い男が持ちたけりや、一度先づさうして置いて他にいくらも何うにでもなるんだから――』かう言はれて、玉子は漸く心をきめて、姐さんのいふなりになる事にした。その時その奥の一間にはその客が唯一人でぽつねんとしてゐた。初めて逢つた時のやうに他の藝者が大勢來てゐなかつた。それがいくらか玉子の心を落附かせた。玉子は顔を赧くして餉臺のところに小さくなつて坐つてゐた。

玉子は何方かと言へば、早く體の發達したやうな子であつた。母親が吃驚するやうなことを十二三の頃から言つてゐた。『この子は本當に始末にいけないね。滅多なことなんか言へないよ。』田舍に行く前には、母親はよくこんなことを言つたものだ。田舍に行つてからも、さういふことは、解らずなりにも澤山見たり聞いたりして來た。多いお客の中には、面白がつてわざといろんなものを持つて來て見せたものなどもあつた。それが不思議にも、女になると同時に、さういふことを玉子はぱつたり口にしなくなつた。そんな事を考へるのが何だか悲しいやうでもあり情ないやうでもあり腹立しいやうでもあつた。その癖、『私のやうなものでも誰かお嫁にして呉れる人はあるのかしらん。』などゝ思つて、獨りで小さな胸を痛めることなどもあつた。さういふ風にして玉子は今日までやつて來た。

その夜、玉子は姐さんの旦那のことだの、家にゐる抱妓のことだのをすがる唯一の力のやうにして、絶えず頭に浮べてゐた。さういふ人達の通つて行く路は、矢張玉子も通つて行かなければならないので

の座敷にその客が赤い顏をして二三人の藝者と一緒に坐つてゐた。

一度は承知したやうな顏を見せて、こつそり裏から拔けて歸つて來たりなどしたけれど、何うしても姐さんや其家の女將の勸めに從はなければならないといふことが段々玉子にも飮込めて來た。玉子は涙を溜めて壁の方へ行つて立つてゐたりした。さういふ時には、何より先に家の方のことが眼の前に見えて來て、二度と父母に田舍から歸つて行つた時のやうな思ひをさせるのに忍びないやうな心持がした。鬚の濃い怖い顏と、父母の顏と、姐さんの顏とが一つになつて玉子の頭の中を廻轉した。

姐さんはなだめたり賺したりおどしたりした。こんなに酷いことを言ふ姐さんだつたのかしらと思ふやうな時には、玉子は體を震はして下唇を咬んだ。『だつて、雪江さん、それは無理だわ。藝者になつちや爲方がないよ。』雪助は同情して顏を寄せるやうにして小聲で言つて吳れた。『この子は、また泣いてゐるのかねえ、變な子ね。』かう雪子に言はれるのも辛かつた。

芝居、役者、指環、帶、さういふものもすぐ眼の前に並べられるやうに言はれた。玉子は幾度か思ひ返してはすぐまたあとへ戾つて行つた。『爲方がないわ、藝者より他に何にも私はなれないんだから。』かう思つた時には、あちこちの杜庵に口を賴んで步き廻つた時のことなどが思ひ出されて、涙が瀧津瀨のやうに溢れて來た。『爲方がないわ、爲方がないわ。』玉子はかう繰返した。

その夜のことは、後になつてまでも、はつきりと玉子の胸に刻まれてゐるやうなものであつた。それ

貰ひに行つた。玉子が一緒に伴れられて行つた時には『この間やつたのをもう使つた？　困るねえ。』などゝ言ひながら、腰を曲げて立つて、古箪笥の小抽斗の鍵をぢやら〳〵させながら、そこから銀貨を二つほど出して呉れた。雪助はそれでみつ豆だのお汁粉だのを買つて食つた。ある日姐さんからちよつと言はれたことを玉子が話すと、『それは爲方がないわよ。何んな人？　見たことがあつて？』などと雪助は訊いた。玉子はあの待合の奥の一間で他の藝者達と一緒に見たあの客のことを思ひ出してゐた。何でも少佐とか中佐とか言ふ軍人で、脊の大きい、鬚の濃い、軍帽をかぶつた跡のはつきりと額のところに見えてゐるやうな人であつた。年は四十四五位であつたが、玉子の眼には、もう餘程お爺さんの樣に見えた。戯談を言つてゐるのかしらと始めは思つてゐた。其處のお上が何とか彼とか言ふのも本當に聞いて好いのかわるいのかちよつと判斷のつかないやうに玉子は思はれた。それが段々本當らしくなつて來た時には、玉子の體はわく〳〵震へた。何うしやうかと思つた。泣きたいやうな氣もした。『だつて稼業だからね、お前さん。それがイヤぢや藝者なんかしてゐられやしないよ。藝者ッて言ふものはね、好い旦那がつかなけりや爲方がないもんだから……。雪助のやうになつても困るぢやないか。お前さんの腕一つで、あのお客が何んなにお金を積んで呉れるやうになるか知れないんだから。』こんなことをも姐さんは小聲で含めるやうに言つたりした。それは丁度戰爭が始まつて、號外賣の聲が喧しく町から町へと響き渡つて聞えるやうな時であつた。あの晩、其處から口がかゝつ來て怖々ながら出かけて行くと、奥

でわざわざ札を見に出かけて行つて、『皆な出てるのよ、蔦屋のあの子さへ出てるのに、何うして私にはかゝつて來ないでせう。』などとこぼした。賣れない日の續いた抱妓ほどみじめなものはなかつた。厭な眼色で姐さんに睨まれたり、不斷なら言はれなくつてもすむあらを取立てゝ言はれたりした。當てゝ言ふわけでもあるまいが、『小雪ちやんはよく賣れるね。』などゝ言はれると、切火の音をさせて元氣よく出て行く人が憎かつた。雪助は、『何うして私、こんなに肥るんでせう。イヤになつちまうわ。』などと言ひながらいつも鏡を出しては見てゐた。あんな家と言はれるやうな小待合から時間すぎにかゝつて來ても、雪助は喜んで出かけて行くやうな妓であつた。

玉子はしかしこの雪助と一番先に仲好になつた。毒のない隔てを置かない心持が、世間をまだ多く知らない無邪氣な玉子の心とぴたりと合つた。小まちやくれて、イヤにお世辭を言つて、姐さんに取入らうとする小雪に對する反抗の念もこの二つの心を結び附けるに十分であつた。雪助のまだ小さい時分に父親の方は何處へ行つたか分らなくなつてゐたが、母親は川に近いある土地のお茶屋の女中頭をしてゐた。それに祖母さんがこの近所にゐた。雪助が若いに似合はず三味線に長けてゐるのは、元下谷で藝者をしてゐたその祖母さんに小さい時分から育てられたからで、その祖母さんは、今でも露路の中で六疊の間借をして、安い月謝で若い妓に三味線を敎へてゐた。元はよく出て藝者屋を廻つて歩いたのだが、此頃では、年を取つて、腰が曲つて、家の中を歩くのも大儀のやうになつてゐた。雪助はよく其處へ小使を

てゐた。

それにさういふお座敷は皆な其土地での一流のお茶屋なり待合なりであつた。蜂龍、稻垣、春の屋、住吉、春光亭などゝいふ家であつた。蜂龍などから口のかゝつて來るのは、玉子のゐる内では、殆どないと言つても好い位稀であつた。雪子姐さんでさへ、さういふ處からかゝつて來ると、『不思議ねえ、誰がかけてよこしたんだらう。』などゝ言つて出かけた。

『あゝいふ處は面倒臭いわねえ。居心があんまり好くないわ。』などゝ言ふのを玉子はよく聞いた。お座敷で難かしいものを立派に踊つて見せたり三味線を姐さん達より上手に彈いて見せたりする同じ年位の若い妓を見ると、玉子はぢつとして其處に坐つてゐられないやうな氣恥しさを覺えた。何故遊んでゐないで、もう少し稽古をしなかつたらう？　無理に母さんに頼んでも稽古にやつて貰へば好かつた。玉子はかう思つて徒に過ぎて行つた年月を悔んだ。田舍の姐さんの三味線の調子の高いのを上手だと思つた愚かさなども段々解つて來た。お座敷では玉子は小さくなつて姐さん達の騷ぐのを唯見てゐた。

髮結から雪助と一緒に歸りながら『あの人よ、よく新聞に出るのは？　綺麗ねえ。』かう玉子が言ふと、『でも評判ほどでは無いでせう。矢張、看板がよくなくつちや駄目よ。』などゝ雪助は言つた。

容色の好い小雪の方は、いつもお茶を挽いたことはない位に賣れたが、雪助は二晩位動かずにゐることが度々あつた。ならし一つといふ譯には何うしても行かなかつた。で、潮先になると、氣にして、檢番ま

緊めながら、そんなことを言つて最後に出て行つた亭主の話などをした。『お鶴さんの根は固くつて氣持が惡い。』などゝ雪子は言つた。『島田はお留さんが上手だがら、あそこに行つて結つて見て御覽よ。雪江さん。』雪助はかう言つてある日一緒にその髮結の家に玉子を伴れて行つてやつた。そこには近所から藝者が大勢來てゐた。格子窓の處に鏡臺を並べて、何かべちやくちや饒舌りながらすき手に髮をすいて貰つてゐるものもあれば、出來上つた髮を一生懸命に更に鬢櫛で梳いてゐるものなどもあつた。玉子の行つてゐる時には、丁度其處にその土地で名高い綺麗な若い妓が來てゐた。新聞などによく出されてゐる顏は一目見たゞけですぐそれと解つた。指環なども澤山にはめてゐた。『春ちやん、今日は何處？　築地？』などゝ髮結さんに訊かれて、『えゝ、』などゝ愛嬌ある片頰を笑ませてゐた。玉子は其處にゐる間、片時もその藝者から眼を離さなかつた。羨望と憧憬とに玉子の心は燃えた。約束ばかりのお座敷をしてゐるといふ話や、土地よりも新橋とか柳橋とか他所の一流待合やお茶屋へ出て行く方が多いといふ話や、其他いろくちや好ましい羨ましい話を澤山に聞いてゐるので、一層羨ましいやうな悲しいやうな妬ましいやうな心持がした。自分の身裝の汚いのも振返られて、何となく肩身が狹いやうな氣もした。家は違ふがこれも矢張綺麗なお酌が、その藝者と何かいろくな話をしてゐるのも羨ましかつた。それは昨夜のお座敷の話か何かで、『あのお客さん知らん顏をしてゐるんですもの、私、吹出しさうになつちやつたわ。……それなのに、姐さんてば、澄してゐるんですもの。』などゝ言つて笑つた。その藝者も思出して笑つ

ん、檢番にゐてよ。』などゝ言つてゐたが、その雪子もやがて歸つて來た。四邊が急に賑やかになつて來た。近處の芝居に出てゐる役者の噂などが雪子の口から出たりなどした。『また春の屋の上さんから見物を頼まれちやつた！』などゝも言つた。旦那が歸ると、雪子と小雪とは、行火をして『少し寝かしてね。眠いのよ。』と言つて、小掻巻を押入から出した。姐さんは用事があると言つて出かけて行つた。

玉子は手持無沙汰にしてゐた。『何うなつて行くんだらう。』考へると心細くもなつて來た。昨夜、『早く好いのをおつけよ。さうしなくつちやお座敷が出來やしないよ。』と言つた待合のお上の言葉なども思ひ出された。

七

昔深川で藝者をしたといふ年寄の師匠は、雪子姐さんに一中節などを教へて行つた。一人の方の中年の五目の師匠は、抱妓達を相手にして、清元だの長唄だのを彈いたり習つたりした。抱妓が三味線を取る時には、ヤアとか何とか聲をかけて膝を拍いて拍子を取つた。さういふ人達は多くは町の裏の露路の中に住んでゐて、午後から藝者屋を一軒毎に廻つて行つてその日を暮した。髮結さんにはお鶴さんといふ肥つた脂切つた三十位の人が來た。亭主運のない星で今までに三人持つて、二番目のには子供まであつたが、皆な道樂で折角貯めた金を使つては出て行つた。『もう男には懲々。』元結をキリヽと齒で咬へて

で、旦那と姐さんとは朝からまたさし向ひで一二杯始めてゐたが、それを他所に雪助は勝手の方から茶碗とお櫃とを抱へて來て、藝者達のゐる暗い室で、小さい餉臺の足を起した。婆やが漬物を入れた丼を持つて來ると、

『婆や、買つて置いて呉れて？』

かう雪助が訊いた。

『買つて置きましたよ。』わざと押つけるやうに婆やは言つて、苞から小皿に移した納豆を其處に持つて來た。

『よくお前さん飽きないね。』

『だつて、私、納豆がなくつちや朝の御飯が何うしてもおいしく食べられないんだもの。』

雪助はこんなことを言つたが、姐さんのゐる方へ行つて、『お先に頂戴しますよ。御免なさい。』と挨拶して餉臺に向つた。玉子も箸を取る前に其方へ行つて挨拶をした。

飯だけは炊き立てだが、味噌汁も何もなかつた。玉子は朝每の暖かい家の味噌汁のことなどを考へながら、漬物だけで飯を濟ませなければならなかつた。『明日は私も納豆を買つて置いて貰はうかしら。』などゝ思ひながら、玉子は飯の後の湯を飲んだ。

旦那の歸つて行つたのは、もうかれ是十一時に近かつた。小雪さんが十時前に歸つて來て、『雪子姐さ

て來たのも玉子は知らずにゐた。眼を覺ますと、朝日が窓から差込んで、通りを人が歩いてゐた。

『私、ちつとも知りませんでしたよ。』起きてから玉子はかう雪助に言つた。何うも抱妓達の使ふやうな言葉がきまりがわるくつて玉子にはまだ言へなかつた。

『あら、姐さん、虚言よ、そんなことなんかないわ。それは虚言よ。』などゝ抱妓は輕い調子で言つた。

藝者達のゐる室と座敷と長火鉢のある茶の間とは、抱妓達が毎朝掃除することになつてゐた。雪助といふ妓は、三味線は上手だが、容色はそんなに好い方ではなかつた。體もわるく肥つてゐた。黑繻子の襟のかゝつた半纏などを着て、バケツの水を汲んで來て、玉子の掃除をするあとから、縁側の拭掃除をテキバキとした。玉子は白い手拭を髪の上に見せて、赤い襷をかけて、茶の間の障子を輕くバタ〱はたいた。猫が縁側の日當りに丸くなつてゐると、その向うの庭にそろ〱咲き初めた沈丁花が白くくつきりと見えてゐて、隣の待合の植込の松の緑が蔽ひかぶさるやうに此方に靡いて來てゐた。

掃除のすんだ時分、二階からどてら姿で下りて來た旦那が、婆やの汲んで持つて來た金盥の傍で、長い間草楊子をつかつてゐるのが見えた。金盥かちは湯氣が微かに白く揚つてゐた。稍暫くしてから、寢卷姿の姐さんが下りて來て『小雪ちやんまだ歸つて來ない？　雪ちやんも……』こんなことを言つて、充血して赤くなつた眼を丸くして、長火鉢の傍へ行つて、引寄せるやうにして長煙管を取つたが、立膝をしたまゝで煙草を一服二服ふかした。

泊りだらうといふ話だの、お茶屋の上さんの噂だのを長々と饒舌つてゐたが、『本當にもうお寢よ。』かう玉子に言つて『婆や、蒲團はあれを出しておやりよ。』

姐さんが二階に上ると、賑かな笑聲がまた一としきり聞えてゐたが、玉子の寢道具を婆やが出して呉れる時分には、それもうばつたり絶えて、裏通りを行く夜更の汁粉屋の賣聲が際立つて四邊に聞えて來た。

玉子は六疊の隅の方に蒲團を敷いて、壁の方へ顏を向けて海老の樣に足を曲げて小さくなつて寢た。壁の向うは丁度二階に上る階梯のところになつてゐた。玉子はいろ〳〵な光景を心に繰返した。思ひがけない世間が玉子の前に展げられて來たやうな氣がした。雪子さんは泊つて來る。小雪といふあの妓はあんなに遲くなつてから、出かけて行く。もう一人の雪助といふ人は何うしたんだらう。かう考へるとそれからそれへといろ〳〵なことを思ひ出されて、何うしても眠られない。それにしても、母さんは何うしてるだらう、もう寢たらうかなど〻考へると、今度は狹い自分の家だの父母のことだの宗太郎のことだのが際限なく眼の前に浮んで來た。小さい妹がさびしさうに一人で寢てゐるさまなども思ひ出された。涙はいつか玉子の胸にこみ上げて來た。ふと氣が附くと、二階からは、細々した話聲が聞えて、つづいて微かに笑ふ聲がした。

うつら〳〵してゐる中に、つい寢込んで了つたと見えて、一時過ぎに音高く格子を明けて雪助が歸つ

ァに此方で好い。』かう言つて旦那は今まで婆やの坐つてゐた方へと行つて坐つた。矢張赤く醉つた顏を莞爾させて、玉子の方を頻りに見てゐた。

『これを上げませう。』

姐さんは傍にあつた緋縮緬の大きな座蒲團を取つてやつた。

『好い子でせう？』姐さんは玉子の方を見ながら旦那に向つて、『これで、お座敷馴がしさへすれば、立派な好い妓になるよ。私があれほど大騷ぎをしたのも無理がないでせう。』小間物屋で逢つた時とは丸で違つたやうな、あの姐さんがこんな樣子をするかと思はれるやうな甘たるい口の利き方をして、火鉢の上に翳してゐる旦那の手に自分の小さい白い手を合はたりなどした。仇つぽい眼色をして旦那の顏を飽かず覗くやうにして見てゐた。自分でついだ茶碗の茶を半分旦那に飮ませたりした。

婆やが二階の支度をすませて下りて來ると、『おこたの火も入れて？』と訊いて見て、『ぢや、もうおやすみなさいよ。』

『うむ。』

などゝ旦那は言つてゐたが、もう一度茶碗に茶をついで飮んでから、すつと立つて靜かに二階へと昇つて行つた。

姐さんは猶暫らく其處に坐つて、婆やを相手に、檢番から持つて來た御祝儀の話だの、雪子も今夜は

て來た。『あそこでお座敷にして呉れたから、四つした譯だわねえ。好い方だともね……。今に面白いやうに賣らせてみせるよ。』姐さんは機嫌の好い調子でこんなことを言つて、『勝本ッて言ふ家はあれで中々流行る家だからね、お客にも好いのが來る處だよ。それにお上さんがしつかりしてゐるからね。』二階には旦那が酒を飮んでゐた。姐さんはやがてまた二階へ上つて行つた。爪彈か何かの三味線の音が微かにした。

十一時過ぎになつてから口がかゝつて來て小雪はまた出かけて行つた。少しすると、姐さんは下りて來て、『何處から、』などゝ婆やに聞いてゐたが、火鉢のところにぽつねんとさびしさうに坐つてゐた玉子の方を見て、『もうお寢よ、今に流行るやうになると、早くから寢てなんかゐられないけれど……、今日は疲れたらう。お弘めの日はイヤに氣が張つてゐるもんだから。』などゝ笑ひながら言つた。勝手元の方に向いては、『婆や、二階の支度をしてお呉れよ。』

姐さんはもう不斷着に着替へて、棒縞のお召の前掛などをかけて、仇つぽい風をしてゐた。いくらか醉ざめの氣味で、顏にはまだほんのりと紅く殘つてゐるけれど、『おゝ寒い、』などゝ言つて、兩手を頰に當てて顏を火の上に寄せた。機嫌の好い顏色で、微笑を含んで玉子の方を飽かずに見てゐた。

婆やが二階に上ると引違ひに、銘仙のどてらか何かを引つかけた旦那は、莞爾しながら下へ下りて來た。厠に入つてゐる時間はかなり長かつたが、軈て手を洗ふ氣勢がして、今度は姐さんのゐるところの後の障子を明けて此方へと入つて來た。『此處にお坐りな。』かう姐さんが言つて席を讓らうとすると、『な

と小指を出して見せて、『まア、姐さん、今日お弘めした妓？』と言つて、其處に坐つ居る玉子の方を見た。その藝者の指にはめたダイアの指環が玉子の眼にきら〳〵と光つて見えた。

『雪江ちやんッて言ふの？』玉子の挨拶するのを見て、『何うぞ何分――』とちやかすやうな口の利き方をした。

『靜ちやん、相變らず元氣ね。』

かう姐さんが笑ひながら言ふと、

『あたいなんか駄目よ。』かう言つて、其處にあつた敷島の袋から一本拔いて火をつけて、それを中指と人差指との間に挾んで、すぱ〳〵吸ひながら、すうと其處から出て行つて了つた。廊下で女中と何か話してゐる聲が暫しの間聞えてゐた。

其處に肥つた女中がやつて來て、『今お客樣にお座敷にして貰ふやうに賴んで上げましたから、ちよつと顏を出してお出なさい。』と言つて吳れた。玉子は喜んで禮を言つて其方へと行つた。

一時間ほどして、玉子は帳場に來て、お上さんに挨拶して、家の方へと歸つて行つた。其處から家はいくらもなかつた。家では抱妓の小雪といふのが六疊の處にゐて顏を出して迎へて吳れた。雪子もう一人の方の抱妓もまだお座敷から歸つてゐなかつた。

婆やに手傳つて貰つて、着物を脫いだり疊んだりしてゐると、輕い足音がして二階から姐さんが下り

姐さんで、『本當にまだ何にも知らないんだから、おぼこなんだから……。でも好いわねえ、この位の中が。今に苦勞を覺えるんだよ。』こんなことを言ふかと思ふと、『私達だつて、一度はかう言ふ時があつたんだからね……。本當に今でも綺麗な子供なんか見ると、もう一度あゝいふ年になりたいと思ふよ。』姐さんはこんなことを言つたりした。

植込の綠葉の中に灯影のチラ〳〵するやうな家が多かつた。門から入つた處に籠行燈のついてゐる家などもあつた。室といふ室が皆な綺麗に掃除してあつて、床の間には水仙などが生けてあつた。二階にも下にも客があるらしく、三味線の音が盛にして、笑ひ興ずる聲が賑かに其處から洩れて聞えて來たかと思ふと、電鈴の鳴る音につれて、女中は忙しさにバタ〳〵と廊下を通つて二階へと上つて行つた。一方では、電話機の把手をぐる〳〵廻して、『あなた檢番ですか、三筋さん、お座敷、』などゝいふ聲が聞えた。

『もう一時間ほどすると貰へますから、待つてゝ貰つて下さいな。ようう御座んすね。……さう、困るわねえ。だつて、私もう少しさつき電話がかゝつて來たばかりなんですもの。何とか言つて待たして置いて頂戴よ。ね、よう御座んすね……。それからね。あの話、何うなつて？　あゝさう、それなら好いけども……。ぢや左樣なら。』

かういふ電話が聞えたと思ふと、酒に醉つた二十三四の丸顏の綺麗な藝者が着物の裾をだらしなく引摺るやうにして、帳場の方へと入つて來た。何うしたの？　と言ふ眼色をお上がすると、『これよ……』

姐さんの旦那が義理でかけて呉れたお約束の座敷であつた。その旦那は、兜町の方へ手を出したり何かしてゐる商人で、中脊で男振の好い唄の上手な人であつた。さつき、お弘めに出かける前に、丁度二階から下りて來て『好い妓だ、』などゝ言つて玉子をほめた。かと思ふと『しかし大變だね、かういふ處から大きい姐さんになつて行くのは、』などゝも言つた。お約束のお座敷には、姐さんも家の二人の抱妓も皆な行つてゐた。それにその料理屋の女將は、姐さんとは深い懇意の仲であつた。水入らずだけに座敷は面白い遠慮のない氣分で話されて、平生は謹んで成たけ酒をやめるやうにしてゐる姐さんの顏まで赤く赤くなつた。後には土地で名高い大きな藝者屋から、綺麗なお酌が三人までもやつて來て、賑かに踊をおどつたり何かした。

皆なして家に歸つて來る途中で『ちよつと、皆な旦那と一緒に歸つてゐてお呉れよ。私はちよつと此妓を伴れて賴んで來る家が二三軒あるから。』かう言つて姐さんは玉子を伴れてある家からある家へと入つて行つた。姐さんはかなりに醉つてゐた。『さつき見たらう。好い妓ぢやないかえ。最屓にしてお呉れよ。』ある家ではこんなことを言つた。姐さんと一緒に長い間この土地に出てゐたある待合の女將は、『いいともね。今日はお座敷にしてやるよ。遊んでお出でよ、』などゝ言つた。その女將は酒に醉つてゐた。

帳場のところに坐つてゐると、姐さんは帶の恰好を直して呉れたり、襟を引張り出すやうにして呉れたりした。『本當に好い妓をさがしたね。丁度好いよ、この位が、』などゝ其家の女將は言つた。姐さんは

ふ嬉しさの方が先に立つて、思つたほどきまりのわるい思ひもせずに玉子はお座敷に入つて行くことが出來た。お客は肥つた頭の少し禿げた四十恰好の人で『好い妓だ。今に大に發展しさうな妓だね。』などと言つて笑つた。『いくつだえ？』などゝも聞いた。

雪子の他に、他の若い藝者が二人ほど其處に坐つてゐた。玉子はその人達から顏だの扮裝だのをじろじろと見られるのがきまりがわるかつた。それにその藝者達がかねて知つてゐる仲だと見えて、近くにある劇場に出てゐる役者の話などを何の彼のと面白さうに話した。お客に冷かされて『あら、さうぢやなくつてよ。まさか私でも……』などゝ若い方の一人は言つた。

玉子はその人達に何か話しかけて懇意になりたいとは思つたけれど、何ういふことを言ひ出して好いのか、何ういふ口の利き方をして好いのか、それがちよつとわからないので默つて手持無沙汰にして坐つてゐた。お銚子の代りを下の帳場へ二度も三度も取りに行つた。お客の厠へ入つてゐる間には、帶の間から鏡を出して、そつと顏を映して見た。肥つた、人の好さゝうな、莞爾した其處の女中は『今日お弘めをしたの？　雪江さんて言ふの？　またかけて上げるよ。』などゝ深切に言つて呉れた。

其席では、若い方の一人が『柳』といふのを踊つた。踊の巧いのにも感心したが、雪子の三味線の冴えてゐるのにも心を惹かされた。玉子は羨ましいやうな心持でそれを見た。

一時間ほど其處にゐて、今度は通りの奧になつてゐる小料理屋の方へと玉子は出かけて行つた。それは

それは晴れた寒い日で、通りの大きな邸の門の處には、碧い空を地に梅が白くくつきりと咲いてゐた。姐さんの家の方では、お弘めをする支度がもうちやんと出來てゐた。姐さんの元の名の雪子にちなんで、其處の藝者は大抵皆な雪の字をつけてゐた。雪子、小雪、雪助――玉子は雪江と名乘つて出ることになつてゐた。その名の入つた手拭などももう出來て來てゐた。

近所の湯に入つて來て、鏡臺に向つて丁寧にお化粧をして、さていよいよお弘めに出かける支度に取りかゝつた。姐さんと雪子とが何の彼のと世話を燒いて與れた。それはお古ではあるけれど今までに身につけたことのないやうな立派な衣裳であつた。で、キウと帶を緊めて、褄を取つて、すつきりと立つた其姿を大きな鏡に寫した時には、玉子は自分ながら一本の立派な藝者になつたやうな氣がして嬉しかつた。やがて箱屋につれられて、土地の料理屋やら待合やら藝者屋やらを一軒一軒廻つて行く玉子の姿は、午後の晴れた町の空氣の中に浮き出すやうにくつきりと見えてゐた。

六

お弘めから歸つて來ると、雪子の出てゐる待合から電話がかゝつて來た。『今日は私一番先に聘んで上げるよ。』かう雪子が先程言つてゐたのを思ひ出して、玉子は嬉々して出かけて行つた。

田舍で經驗したのとは丸で違つてゐる場所の不慣も氣にはなつたが、兎に角一本の藝者になつたと言

たり三味線を彈いたりしてゐた。二階が姐さんの居間になつてゐるらしかつた。

『本當に何にもまだわからないんですから、何うか十分に仰しやつて戴きませんと……』かう賴んで歸つて來た母親の眼には涙があつた。母親は娘の行末のことなどを考へながら、濠端の路を山の下の電車の停留場の方へと歩いて行つた。其處には料理屋だの待合などが澤山に軒を並べてゐた。

『もう二度と家に逃げて來るやうなことはさせない。今度こそは家からはすつかり離れて他人の中に入るのだから。』かう言つて母親は種々なものを拵へては御馳走をして呉れた。二十日正月には玉子の氣に入るやうにお汁粉をつくつて呉れたりした。一日は父親が川崎の大師から穴守の方へと伴れて行つた。さうされゝばされる程玉子は悲しくなつて涙が出た。田舍に行つた時にはまだ知らなかつたやうな別離の辛さを染々と身に覺えた。

明日行くといふ夜は、神棚に燈明がついて、玉子の膳には心ばかりのお頭附きの魚が載せられた。『お前の心祝ひだよ。』かう母親に言はれると、玉子の小さい體はわく〳〵震へた。嬉しいやうな悲しいやうな情ないやうな心持で胸が一杯になつて箸も碌々取れなかつた。あくる日は種々世話になつた小間物屋の上さんに暇乞をして、母親に伴れられて家を出た。おとなしく上り端の處に父親と並んで見送りに出てゐた妹の方へは、玉子は出かけてからもう一度戻つて行つて頭を撫でた。『おとなしくしてお出でよ。姉さんまたすぐ來るからね。』

『お前、十四になるんだね、早いもんだね。』から玉子が言ふと、『姉さんだッて十六になるんぢやないか。』から言ふ弟の言葉に皆な笑はずには居られなかつた。切餅の燒ける匂ひだの香ばしい海苔の匂ひなどが一間に樂しく漂ひ渡つた。丁度其處へ小間物屋の上さんがまたやつて來た。それでは出す事にしやうときまつたのは、定雄が一日遊んで歸つて行つた後であつた。

さうきまつたなら一刻も早い方が好い、二月から出るやうにしませうと先方からは話を急いで來た。前のこともあるから成たけ多い金で體を縛ることはやめにしませう。身のまはりの支度金だけでもと此方で言ふのを、それでは餘り話にならないからとのことで、小間物屋の上さんが中に入つて、相應の金を持つて來て、それで證文を入れることにした。

着物は皆な先方持ち、着の身着まゝで行つても好いのだけれど、さうも行かないと言ふので、家にあるもので入用なものは皆な持つて行かせるし、他に新しいのを二三枚母親が見立てゝ買つて來て呉れた。で、お召の派手な模樣だの、不斷着の銘仙の羽織の縞柄などのあたりに散らばつて見えてゐる一間で、母親は毎夜遲くまで針を運ばせた。

種々な話を持つて母親が始めてその姐さんを濠端近い家に訪ねた時には、姐さんは喜んで迎へて何彼と歎待して呉れた。下の六疊が藝者達のゐる處で、其處からは三十近い年增の看板借りの人が此方へ出て來て丁寧に挨拶をした。丁度その時五日の師匠が來てゐて、若い抱妓達は、聲を張り上げて唄を唄つ

に母親の仕向けることなどもあつた。『お前、小間物屋の娘のやうだね、』などゝも言つた。とても母親が許して呉れさうにもないので、つまらなさうな顏をして、妹に當つたり何かしてゐる時には、玉子の心は暗い生活の底に落ちて行くやうに悲しくさびしかつた。『それほど當人が望むんなら、思ふやうにさせて了ふ方が好いぢやないか。』かう父親はのんきなことを言つた。

寒いさびしい年の暮はさうした何方つかずの氣分の中で過ぎた。ごまめ、數の子、鮒の昆布卷、何んなに困つてもそれだけは小さくしたくないと母親の言つたお供餠は、赤い大きな蝦と橙とを載せて、茶箪笥の傍の處に見事に飾り立てゝあつた。正月はそれでも賑かに暮らした。母方の叔父さん達がやつて來て、お秀お秀と母の名を呼んで、酒を飮んで行つたりした。小さい方の叔父さんは、『折角當人がさう望んでゐる氣を挫いてもいけないから、思ひ切つて、さうさせてみるのも好いだらうよ。今度は二度目だし、それに、大きくもなつてゐるから、この前のやうなことはないだらう。』かう言つて玉子の味方をした。叔父さん達は堅氣の奉公などのとても玉子に出來ないといふことをよく知つてゐた。玉子が妹と一緒に家の前で大きな羽子板で羽根をついて遊んでなどゐると、通りすがりの人は皆な振返つて見て行つた。

十六日には、本屋に行つてゐる定雄が宿下りで遊びにやつて來た。他人の中にゐても脊丈は伸びて大きくなつてゐた。

あれより惡くつて立派に流行つてゐる妓達も澤山ある。それに、あの冴えた氣の利いた明るい調子が好い。あれなら屹度賣れる。賣れなくも私の腕で賣つてみせる。かうその姐さんが言つてゐたと小間物屋の上さんは玉子に話した。『堅氣の奉公なんかしたッてつまらないよ。さうする方が好いよ、咲ちやん。』かう言つて上さんは度々勸めた。

『私が行つて、お母さんに話して上げよう。』

小間物屋の上さんはわざ〳〵出かけて行つて、玉子の母親に逢つて呉れた。初めの時には、母親はきつぱりと斷つて置いて、あとで玉子をその傍に呼びつけた。

『お咲、お前は一體何ういふ氣だえ？　まだあれだけで懲りないのかえ？　お前の了見を聞かしてお呉れ。』かう言つた母親の聲は眞面目であつた。

『母さん、何うか堪忍して下さい、堅氣の奉公をするにしても、私の勤まりさうな處は何處にもありやしないんですから……今度はもう屹度父さんや母さんに迷惑をかけるやうなことはしませんから、何うか、もう一度其處にやつて下さい。』玉子はその時一生懸命になつてさうした意味の言葉を切れ〳〵に言つた。母親は唯默つてゐた。

母親も迷つてゐるやうに見えた。強ひて留めようともしなかつた。結局はお互に考へて見るといふやうな形になつたまゝで、一日は一日と經つて行つた。小間物屋の方へ出かけて行く玉子を引留めるやう

あんな子は駄目だなどゝ言つてゐたかも知れない。かう思つて玉子は失望した。私なんか、とてもあんな好い姐さんの家の抱妓にはなれやしないなどゝ思ひながら、店で女の兒の相手になつて、繪のある雜誌などを玉子は見てゐた。『嘆ちやん、嘆ちやん、』かう呼ばれて再び奧に行つた時には、上さんは好きな酒を燗德利に入れて銅壺に浸けたりなどしてゐた。『さつき肴屋がお前さんの好きな蟹を置いて行つたから、それを煮て上げるよ。秋蟹だから旨いよ。』などゝも言つてゐた。自分のことは何もそんなに言はなかつたらしいので、玉子は安心して其處に坐つた。

鮨が來る時分には、その姐さんの顏もほつと赤くなつてゐた。『私はこれで此頃強くなつたんだよ。』などと云つて、盃を唇に當てゝ旨さうにして飮んでゐた。上さんに盃をさゝれた玉子は、『私、飮めないの』などと云つた。やがて三味線が取出された。一つ二つ上さんの彈いた後をその姐さんが常磐津を彈いた。玉子も後には無理やりに撥を取らせられた。

五

明けて十六になつた年の二月に、玉子はその姐さんの家から抱妓になつて出ることになつた。去年の秋に小間物屋で逢つてから、姐さんは何うしてもあの子を抱妓に置きたいと何遍も何遍も言つて來た。三味線もあの位出來ればまァ何うにかかうにか間に合ふし、容色は萬人に勝れたといふほどではないが、

玉子はこんなことを思ひながら、右の方の指にはめてゐる煌々した指環を見た。

上さんと其人とは從妹同士以上の親しい口の利き方をした。藝者屋を出してゐる土地の話だの、お茶屋の上さんの話だの、お客の話だのをその姐さんがすると、上さんは店の商賣の不景氣なことだの、何處かの工場へ勤めてゐる自分の亭主の話だのを何の彼のと持出して話した。『お前さんなんか仕合せだよ、御覽な、私なんかこんなにして働いてゐるんだよ。髮なんか丸で箒のやうだよ。』かう言つて上さんは壞れかけた丸髷に觸つてみたりした。其處に、店にお客が來て上さんは立つて行つた。

『田舍に行つてゐたんですつてね。』かうその姐さんの言ひ出したのを切つかけに、玉子は種々田舍のお座敷のことなどを話した。『祝儀が五十錢よりも少いことなぞあるんですか、』などゝその姐さんはさも吃驚したやうに言つた、其處に店から入つて來た上さんは、『肥料臭い人ばかり相手にしてるんだもの、田舍ぢや爲方がありやしない。それもね、前橋とか長野とか言ふ處ならまだ好いけれど……あんな處ぢや爲方がないよ。何故あんな處に咲ちやん行く氣になつたんだらう？』

『でも小母さん、大變に好い處のやうに言はれたんですもの。』玉子は氣恥しいやうな氣がして顏を赧くした。『咲ちやん氣の毒だけども、ちよつと角まで行つてお鮨を言つて來て頂戴な。』かう上さんから賴まれて、其處にゐた女の兒をつれて出かけて行つたが、やがて歸つて來た玉子は、奧に行くのか何だかきまりがわるいやうな氣がし出した。上さんとあの姐さんと、何か自分のことを噂してゐたに相違ない。

その人が今小間物屋に來てゐると言ふことは、上さんの眼配せで玉子にはすぐわかつた。玉子は銘仙の新しい着物に着換へて『何にもそんなに改まつておつくりなんかしないでも好いぢやないか、』と母親の言ふのにも頓着せずに、鏡臺に向つて永い間髪を直したり白粉をつけたりしてから出かけて行つた。小刻みな駒下駄の音は、いつもと違つて、元氣よく通りに聞えた。

『小母さん、先程は失禮。』かう挨拶して玉子は店から上つた。店と奥とを劃つた硝子障子の間から上さんの顏がちらと見えて、その奥にその從妹の姐さんが坐つてゐた。『此方にお出なさいよ。』かう上さんに言はれて、玉子はきまりわるさうにして入つて行つたが、明るい處から來たので暫しは何も見えなかつた。

『好い子だねえ。』

かういふ聲を玉子は先づ耳にした。

段々四邊が見え出して來た頃には、結城の縞の着物に鼠がゝつた羽織を着て、黑繻子とお召の腹合の帶をしめて、指環を三つも四つも兩方の指にはめた三十近い意氣な年增の姐さんが其處に坐つてゐるのを玉子は見た。早口で物を言ふ癖があつて、何か言ふ時にはちよつと片頰を少し笑ませた。眉のところと口のあたりに溢れるばかりの愛嬌があつた。

『あの光るのがダイヤだよ。』

『咲ちやんゐますか。』

ある日かう表から聲をかけたのは、通りの小間物屋の上さんであつた。母親が其處に顔を出すと、『ちよつとこの咲ちやんを貸して頂きたいんですが――』上さんはかう輕く挨拶しながら言つた。母親はまた母親で、『いつも咲が上つて、お邪魔ばかりして、さぞお喧しう御座いませうに……』などゝ言つて、『咲や！』と後の方を振返るやうにして呼んだ。玉子は勝手の方にゐた。

玉子が顔を窓の處に出すと、上さんはかねて言つて置いたことを知らせるやうな眼配をして、『ぢや、ちよつと遊びに來て頂戴ね。』

『え、すぐ。』

かう玉子は言つたが、小さい胸は俄に躍つた。『今度、從妹が來たら、是非一度逢つて話を聞いて御覽よ。來たら知らせるからね。』かう上さんは此間も言つた。上さんの從妹といふ人は、ある土地で長い間藝者をしてゐて、今では旦那から金を出して貰つて、抱妓を二人置いて藝者屋を始めてゐた。

『從妹は去年藝者の方を廢業したけれど、矢張長くゐた土地なもんだから、お茶屋さんや何かに懇意で、抱妓はよく賣れますよ。私なんぞが行つて見ても、よく口がかゝつて來るんで羨ましい位だよ。』などゝ上さんは話した。『田舍なんかとは、そりや比べものになりやしないよ、咲ちやん、』などゝも言つた。上さんはその從妹を中心にして、玉子の心をそゝるやうなことを澤山に話して聞かせた。

で食つてゐても爲方がなかつた。一人でも口を減したいといふ母親の考へであつた。しかしさうした奉公では、親に樂をさせることなどはとても望めなかつた。玉子は近所にゐる手を皺だらけにして使ひ小走りに出て行く家婢達の慘めな生活に其身を置いて考へた。知つてゐる裏の邸のお留さんといふ仲働は、朝は暗い中から起されて掃除をしたり子供の世話をしたり働いてゐたが、『咲ちやんなんかとても勤まりやしませんよ。それは忙しいんだから。お化粧してゐるひまなんかありやしないんだから。私なんか鏡を棚の上に置いて、ひまを見てちよい〳〵するんですけど、それでさへ、奥さまが何とか彼とか喧しく言ふんですもの。とても駄目ですよ。』などゝ言つて聞かせた。

何處か好い處の小間使ならと言ふので、父親は彼方此方に行つて聞いてみて吳れた。時には大店の商人の家が却て氣風に合つて好いかも知れないなどゝも言つて、わざ〳〵日本橋の方の大きな桂庵に行つて頼んでもみた。しかし。いざとなると、此方で二の足を踏むやうな處でなければ、厭な意味のかくれてゐるやうな處が多かつた。玉子は後には氣を腐らして鬱ぎ勝に月日を送つた。

父親の勤口の方も矢張捗々しく運ばなかつた。月給は少くとも樂な處と云ふやうな父親の望み方は、到底忙しい當世風の勤口には向かなかつた。父親は午後になると、いつも手拭に石鹼箱をくるんで湯から歸つて來て、母親の顏色が面白くないと見ると、『ちよつと、其處まで、』などゝ言つてすぐまた出かけた。

の廻りのことだけでも不自由な思ひをせずに濟んだ。それがいよ〳〵やめたとなると、重荷はまた一家の生計の上に加はつて行つた。

母親の不機嫌な顏は玉子の心を暗くした。父親が長い日を平氣で盆栽などをいぢくつて暮してゐるのを見るのも辛かつた。逃げて歸つて來た宗太郎は、『まア、それぢや俺の宅にでも來てゐろ。』と言つて母方の叔父が一時伴れて行つて吳れたが、弟達の前に對しても、かうして自分ばかり遊んでゐられないやうな氣が段々玉子の胸に濃くなつて行つた。藝者には母さんが何うしてもして吳れないから、何處か堅氣の奉公口をさがさうと思つて、玉子は獨りで小間物屋のお上さんや菓子屋の小母さんなどに賴んでみた。自分でも二つ三つ町の通りの桂庵に出かけて行つて、何處か好いお邸か何かで見習ひ奉公に行くやうなところはないかと訊いてみたりした。そこには中年の婆さんがゐて、じろ〳〵と意味ありさうに玉子の顏を眺めて、『唯の奉公ですか。唯の奉公ではお邸でも何でも一月働いていくらにもなりはしませんよ。』などゝ言つた。その時玉子よりぐつと容色の惡いあんな女がと思はれるやうな十六七の娘が自分で進んで妾奉公の口を搜しに來てゐた。

玉子が賴んで歸りかけると、『お前さん、一體、何處？　家は？』などゝ氣味惡く玉子の顏を眺めながら婆さんは言つた。

堅氣の奉公なら見習の爲めに出しても好いといふやうな口振を母親は見せた。かうして皆なして遊ん

を立てゝひどく激昂してゐた。

『父さん、そんなに怒つてゐても、見てお出で、明日の朝はまたのこ〳〵出かけて行くから。』母親はこんなことを言つてゐたが、翌朝になつても父親には出かけるやうな樣子は見えなかつた。『お前さん本當なの？　役場をやめたつて言ふのは――』母親はかう言つて父親の顏を凝と見た。

『何もあんなけちな所に出てゐなくつても、他にいくらも好い處がありますから大丈夫です。』父親は昨日とは打つて變つて厭に落附いた調子で笑つてゐた。

町の役場に周旋する人があつて二年ほど前から父親は勤めてゐた。稅の方などを取扱つてゐたのであつた。しかし、薄給ではあるし、盆栽を買つたり好きな甘い物を食べたり、江戶ッ子氣質の物惜みをすることが大嫌ひで、他人の爲めに財布をはたくのを何とも思はなかつたりするので、家計の足しにはいくらもならないやうなものであつた。『お前さん、今月はもう五圓入れて吳れなけりや困るぢやないか。』かう母親が言ふと、『そんなこと言つたッて、もうお金なんかありやしませんよ。』などといつて笑つて取合ないやうな父親であつた。それに、役場の同僚の爲めに、高利を借りる保證人になつて酷い目に逢はされたことも一度や二度ではなかつた。『お前さん、もう役場なんかやめてお吳れよ。本當に馬鹿々々しい。手ぶらで遊んでゐて貰ふ方がいくら好いか知れやしない。』母親は困つて後にはこんなことを言つた。しかし勤めてゐれば、何んの彼のと言つても、其日其日をまぎれて送つて行くことが出來た。父親の身

とすると、『三味線なんかおよしよ、忘れてお了ひよ。』など、母親は言つた。長屋の窓から三味線の音の微かに通りに洩れて聞える時は、それは大抵母親の留守の時であつた。玉子は乗合などをよく彈いてゐた。

勝手元に出て、母親を手傳つて、煮焼をしたり洗物をしたりするのは左程苦には思はないけれど、細い綺麗な指の段々汚れてしみだらけになつて行くのが玉子には辛かつた。リスリンをそつと買つて來てつけて、手と手を引くり返して見てゐるやうな寒い〳〵朝もあつた。

おつくりをする道具にも玉子は以前のやうに親しんでは居られなかつた。小さい時から、お化粧をすることが好きで、朝日の當る縁側に鏡臺を持出して、長い間白粉をつけたり髪をいぢくり廻したりしてゐることが多かつた。『お前、いつまでいぢくり廻してゐるんだい。』など、母親はよく叱つた。母親が結つて呉れた髪が氣に入らないで半日ぐづ〳〵言つてゐることなども以前には度々あつた。しかし此頃では自分の氣に入るまで鏡の前に坐つてゐることなどは出來なかつた。三日も四日も壊れかけたまゝで髮櫛を入れなければならない桃割を玉子は悲しい心持で鏡に寫した。

ある日父親は毎日出かけて行く役場からプン〳〵怒つて歸つて來た。『俺はもうあんな役場やめて來た。人を馬鹿にしやがる。』

母親が聞いても、譯は話さずに、父親は唯怒つてゐた。『あんな役場なんか誰が行つてやるもんか。人を馬鹿にするのも好い加減にしろ。』「相手が眼の前にでもゐるやうな口の利き方をして、父親は額に青筋

れて男が逃げて行つたり、男に出齒庖丁で女が殺されたり、男と女と一緒にわるい事をして牢屋に入れられたりした。かと思ふと、立派な人にひかされて、榮華を極めてゐる新橋の藝者のことを書いてある。次に、貧しい家から、何々夫人と言れる迄飛離れた立身をした女のことなどが出てゐた。ダイヤモンドの指環、金鎖の時計、何百圓したといふ帶、馬車、花環――眼も彩にチラ〳〵するやうなはなやかな世間が其處にあつた。玉子は眼眩しいやうな怖いやうな望みの多いやうな心持でいつも其處から歸つて來た。

『私なんか、そんな榮華は望まれない。何んなに貧乏な家でも構はないから、母さんや父さんの安心するやうなところに行つて、堅氣で暮さなけりやならない。』こんなことを考へる時には、玉子の眼にはいつも涙が滴れさうになつた。くわつとして急に體が熱く〳〵なつたりした。田舍に行つてゐた四ヶ月の經驗が玉子の胸に蘇つて來るやうな時には、其處が女の榮華に行く途だといふ風に考へられて、姐さん達が各自に持つてゐる旦那の顏やら素振やらが眼に浮んだ。甲府に行つた仲の好い友達が羨ましく、『今晩は――』などゝ言つてお座敷に出て行く派手な姿が眼の前にちらついて見えた。幾夜か續いてお座敷の夢を玉子は見た。

氣のふさぐ時なんかに、三味線を出して、昔習つた常磐津をよく彈いた母親も、此頃では滅多に撥を取るやうなことをしなかつた。長押にかけた二挺の三味線には埃が一杯にたまつてゐた。玉子が彈かう

その頃、小間物屋の店で取つてゐる新聞に、悲しい小說の續き物が載つてゐた。それには親の爲めに苦勞をする若い娘の心が書いてあつた。玉子はそれが讀みたいばかりに、夕方になるといつも小間物屋の店の方へ出かけて行つた。『小母さん、今日の新聞は？』かう言つて玉子はいつも入つて行つた。丁度店に客があつてお上さんの手が塞がつてゐる時には、『小母さん、見せて下さい。』かう言つて自分で上つて行つた。其處にゐる七つ位の女の兒に破つて棄てられて、折角のつゞきを見られないで失望して歸つて來ることなどもあつた。明るい店のランプの下で熱心に新聞をひろげながらお上さんの夕飯の間に店番をしてゐる玉子の姿は、いつも通つて行く人達の眼についた。『小母さん、明日は來られないかも知れないから、新聞を除つて置いて下さいな。』かう言つて歸つて行つたりした。

『お咲ちやんはそれでもよく新聞を讀むのねえ。感心ねえ。そんなに面白くつて？』かうお上さんが言ふと、『だつて、小母さん、それは可哀相なんですもの。』玉子は娘の心を思ひやつて、眼に涙を浮べてゐた。新聞には自分のまだ知らない世間のことが澤山に書いてあつた。

『お前、一體何處へ行くんだい？』

毎日夕方になると、駈出すやうに出かけて行くので、後には母親は不思議にして聞いた。『それなら好いけれど、お上さんが煩さがりやしないか。』

可哀相なその續物の他にも、新聞には種々なことが書いてあつた。男が女と情死したり、女學生を伴

世辭ばかりではないらしいと思はれた。小間物屋のお上さんから、『惜しいもんだよ、お咲ちやんなんか三味線も彈けるし踊だッて出來るんだし、今に、母さんに樂をさせることなんか譯はないから。』などゝ言はれて、何故田舍にもう少し辛抱してゐなかつたらうなどゝ思つた。好意を持つた眼と惡意を持つた眼との區別なども解つて來た。『田舍にお酌に行つたんだらう。』などゝいふ侮蔑の眼を他から向けられた時には、大きなお世話といふやうな顏をして、プイと向うへ立つて行くことなどをも覺えた。自分の家の貧しいことが何よりも口惜しいといふことは、田舍に行かない前からも思つてゐたけれど、此頃では、それが一層強く強くなつて行つた。さういふ時には、玉子は母親から聞いた横町の本宅の話などをよく持出した。

玉子の住んでゐる横町から少し出ると、横濱の方へ行く汽車の線路が通つてゐて、その向うに細いくく裏道があつた。それはある遊廓の裏のやうになつてゐるところで、下宿屋のやうな大きな二階屋の格子窓からは、白粉のはげた色の蒼白い女の顏が見えたりした。時には襤褸の汚れた赤い蒲團が高い物干に干してあつたりなどした。『あゝいふ人さへある……あゝして親の爲めに身を賣つてゐる人さへある……。』玉子はこんなことを考へて、さういふ生活に自分から進んで入つて行きたいとすら思つた。『何んなことでも親のためなら、家の爲めなら……』かう玉子は考へて、一夜眠らずにゐたことなどもあつた。暗い焦々した狹い宅にゐるよりも、矢張廣い世間の方へ出て行きたくもあつた。

だえ。』氣の勝つた母親は後にはピリ〳〵した調子で言つた。
母親の言葉は、玉子の小さい胸にも轟くやうに聞えた。『母さん、堪忍してやつて下さい。まだ小さいんだから……。』かう言つた玉子の眼からは涙が滴れた。
『何うした、何うした、宗が歸つて來た？』
父親は頓狂な聲をして、奥から眼をこすりながら起きて來た。
默つて坐つた親子四人の上にやがて寒い夜が更けて行つた。ひとつ夜着に寢に行つた姉弟はしつかりと抱きついていつまでも歔欷の音を禁めなかつた。

四

同じやうな月日は經つて行つたけれど、玉子に取つては一年は短い間ではなかつた。玉子の心は日増に複雜になつて、細かい影が段々細かい影を生むやうになつた。悲しい辛い腹立しいことに逢ふといつもすぐ眼の縁を赤くした玉子も、此頃は默つて考へて、下唇を嚙むやうな癖が出來て來た。
玉子の前には、廣い世間がひらけてゐた。裏の小母さん、角の菓子屋の小母さん、近所の若い娘などのよくお饒舌に集る小間物屋のお上さん、さういふ人達の話も少しは玉子にも解るやうになつて來た。『お咲ちやんなんか心配することはありやしないよ――。』かう言つて笑ひかける小母さん達の言葉も滿更お

『宗ぢやないか。』

かう言つた母親は急いで表の雨戸の鍵を外した。思はず知らず立つて來た玉子の顏も白く上り端の處に見えてゐた。

『宗だよ、お前。』

かう言つて母親は玉子と顏を見合した。

『そんなところに立つて泣いてゐる奴があるもんかねえ！』外に立つて入るにも入られずぶる〳〵顫へてゐる小さい黑い影を內に引入れながら、叱るやうにして母親は言つた。また一つ殖えて來た苦勞が一番先に母親の胸に込み上げて來た。

『何うしたんだえ、お前。』

『……だつて、己は辛れいんだもの……己は……己は……』

歔欷げながら宗太郎は障子の隅に小さくなつて坐つてゐた。正月歸つて來た時には元氣が好かつた。主人から貰つたお年玉か何かで凧を買つて、天王山に行つて、一日面白さうに遊んで歸つて行つた。あいふ風なら落附いてゐられさうだ。かう思つて母親は安心してゐたのであつた。

『それぢや、お前、矢張御主人に默つて逅げて來たのかえ？　困つた奴ばかりだね。本當に性根のない碌でなしばかりだよ、ねえ。勤まらないなら勤まらないつて、何故母さんなり御主人なりに言はないん

やうに靜かに時を刻んでゐた。

『寒いね、母さん。』

玉子は裁縫の手を留めて母親の方を見た。

『もうお寢よ、十一時ぢやないか。』

『本當に寒くなつた……』獨語のやうに玉子は言つて、其儘長火鉢の傍に來て、鐵瓶を下して、殘り少くなつた火に炭を加へた。

『おゝ寒い。』

顏を兩手で押へて、火の上に寄せるやうにした。その時ふと表の雨戸の處で誰か歔欷げるやうな氣勢がした。母親は裁縫の手をとゞめて、ちよつと聞耳を立てるやうにしたが、

『お前、誰か泣いてるぢやないか。』

かう言つて、急に思ひ當ることがあると言ふやうに急いで母親は立ち上つて、障子を明けて上り端のところへと出て行つた。

『誰だえ？』

『…………』

歔欷げる聲は急に高くなり出した。

好きな三味線も彈かずに、多くは母親を手傳つて勝手元にゐた。しかし時々田舍のお座敷のことなどを思ひ出した。それに、町の通りに出ようとするところに、玉子と仲好しで同じやうに甲府あたりにお酌になつて行つた娘の宅があつた。それはしもたやで娘を藝者などにしなくつても好いやうな家だつた。そこで玉子は其娘と一緒によく三味線を彈いたものだ。『雪ちやん何うしてゐるだらう？』玉子は其前を通る度に、遠くへ行つたその友達を思ひながら歩いた。

三

二月になつてからのある寒い夜であつた。玉子は母親と一緒に茶の間に坐つて紅いメリンスの襦袢の袖などを縫つてゐた。父親は町から歸つて來てすぐ奧の八疊に寢に行つたが、いつかもう高い鼾を立ててゐた。

ランプの光線は狹い一間を暗くぼんやりと照らした。苦勞にやつれた繕はない母親の顏が、浮出すやうに見えてゐる向うには、茶簞笥だの、茶道具だの、鬱金の袋に入れられた三味線だの、水天宮を祀つた小さなお宮だのが混雜と並んで見えてゐた。本宅を疊んだ時から、段々に賣拂つたり何かして、今ではもう澤山には殘つてゐないが、それでもまだこの狹い家には置き切れないほどの道具が棚の上に載せられてあつたりした。昔の形見の立派な時計は黑朧色にピカ〳〵光つて、再びこの家に春の來るのを待つ

頂戴よ。』玉子はかう言つて母親の袖を引いた。

縁側の隅の方で、午後の寒い日影を帶びながら、末の妹を遊ばせてゐる玉子の眼には、いつか涙が滴れさうになつた。それに、田舍から歸ると間もなく、玉子は女になるといふものを初めて見た。玉子は母親に知れないやうに、そつと井戸端に行つて、盥に水を汲んで、汚れたものを洗つたりなどした。桃割に結つた小づくりな姿がはつきりと長い間井戸端に見えてゐると、其處に手桶を抱へて來た裏の小母さんが、『咲ちやん、また行くんですか。』などゝ訊いた。

母親が大勢の子供の事を常に頭に浮べて考へてゐると同じやうに、玉子も矢張弟妹のことを考へた。『宗ちやんは、今頃は何うしてゐるだらう。寒いから風邪でもひきやしないか。』かう思ふと、此間まで裏の天王山に行つて活潑に遊んでゐた幼い弟のことがすぐ思ひ出された。惡戲が烈しいので、近所からよく苦情を持込まれるやうな子で、母親は、『また、宗が惡戲をしましたか、ほんとに爲方がないんですよ。』などゝ言つて詫びた。かと思ふと向うの出方一つで、『宅のも惡いが、お前さんの處の兒も隨分惡戲だよ。』かう母親は喧嘩腰の物を言ひ方をしたりした。小さいに似合はず棒を立てゝ遊んだり船を拵へたりすることが好きなので、『機械商にするに限る。宗ちやんは器用だから。』などゝ人々は勸めて吳れた。玉子は同胞が皆離れ〴〵になつて行かなければならない樣な生活を悲しく思つた。

『もう二度とさういふ眞似はさせない。』と口癖の樣に父母が言ふので、玉子も今度は其氣になつて、

つて美しかつた。

田舍の方の話は、一月も經つてから漸く纏つた。里の祖母はその金を拵へるために、持つてゐた家屋を一軒賣つたりなどした。『お前が强情なばかりに飛んでもない眼に逢つた。』言ふまいと思ひながら、ついさうした愚痴が母親の口から出た。

『宗太郎を御覽な、あんな小さいのに、よく辛抱してゐるぢやないか。』

こんなことをも母親は言つた。

玉子は肩身の狹い樣な心持を始めて覺えながら、幼い妹を負つて町の通りの方へ出て行つた。何うかすると、母親と父親とは物言ひを始めた。平生はやさしい落附いた靜かな氣分で、口を利くにも丁寧な物の言ひ方をする父親が、さう言ふ時にかぎつて、別の人かと思はれるやうな荒々しい言葉やら素振やらを見せた。折角昨日買つて來た片時も傍を離さないやうにしてゐた盆栽を庭に放りつけたりなどした。母親の强い烈しい聲が勝手元の方から聞えて來た。

玉子は世にもあられもないやうな心持がした。田舍に行かない以前にも、それを見てゐるのが辛さに他所に出る決心をしたのだが、今は一層辛さと悲しさとが深く胸につき上げて來た。焦々して不愉快な濁つたやうな空氣が時には二日も三日も續いた。『何も知らない罪のない子供を他人の中に出して置いて親が遊んでゐるつてことがありますか、』などゝ母親は言つた。『母さん、母さん、後生だから默つてゐて

愛い、可愛い……』など、指して笑つて通つて行つた。わざ〳〵傍に寄つて來て、頰の處をちよいと撫でて行く脊の高い外國人などもあつた。そこでは玉子は海といふものを每日のやうに見た。ボーといふ汽船の笛の音が夜中に聞えた。

玉子の每日通つて行つた小學校は、崖の下のやうな處にあつた。そこの廣い庭で、五六人の友達とお手玉を取つたり何かした時のことは、今でも繪の樣になつてはつきりと玉子の眼に殘つてゐた。幼い弟と父母と伴れ立つて、遠くひろ〴〵と海の見える公園に行つた歸途には、そのぢき傍の料理屋で午飯を樂しく食つて、それから少し來た所の青いペンキ塗の大きな家に入つて行つて寫眞を撮つた。其時、『孃ちやんは眞中の方が好いでせう、』と言つて、母親の傍に立つてゐる玉子をそのまゝ眞中に伴れて來た。その寫眞屋の莞爾した顏は不思議にも玉子の記憶にいつまでも殘つてゐた。『さうよ、覺えてゐますよ、愛嬌のある莞爾した、薄い口髯のある――』寫眞箱の中からその寫眞を出して見る時には、玉子はいつもさう言つて其時分のことを思つた。其時別に父親と母親とだけで寫した寫眞も矢張その寫眞箱の中に入つてゐた。母親はお召の着物に帶揚なんかをして、笑を含んでその左の方に立つてゐた。父親は會社の事務員と言ふよりは、堅氣の大店の商人といふやうな扮裝をして、角帶をしつかり結んで、椅子に腰をかけて少し橫向になつてゐた。『あの時お前が定雄と何か惡戲をしてゐたもんだから、それが氣になつてそつちを向いたんですよ。』父親は笑ひながら、いつもこんなことを玉子に言つてきかせた。母親は若く

はゐられないやうな氣がした。『父さんさへしつかりしてゐて吳れれば——、』かう言つていつも繰返しだ愚痴ももう遠い昔になつた。江戶子氣質で、喧嘩早くつて、それでゐて飽きつぽい父親は、槇町の本宅から離れてから、いろ／＼なことを計畫しては、すぐ失敗して、また別の職業を始めた。吳服物の行商のやうなことは、それでも先祖から大きくやつてゐたゞけに、かなり長く續いたけれども、それも終ひには大きな貸倒れになつて、元金も子もすつかり、それにつぎ込んで了ふやうになつた。吳服物の澤山置いてある一間で、父親が夜遲くまで算盤をはじいてゐると、母親が機嫌のわるい顏をして、何かぐづ／＼言つてゐるやうな光景を總領の玉子だけはよく覺えて知つてゐた。『お前さん、それだから爲方がないんだよ。』かう母親は常に言つた。其時には母親の顏には神經のピリ／＼したやうな表情が漲り渡つて、裁縫をしてゐる物尺を疊に投りつけたり何かした。幼心にもそれが怖いやうな悲しいやうな氣がして、玉子はいつもよく泣いた。『この兒は泣蟲だよ。』かう母親に叱られたことを玉子は今でもはつきりと覺えてゐた。

いろ／＼計畫した商賣の爲めに、家を疊む時に殘して持つて來た僅かな財產も段々少くなつて行つてゐた。『土田には商賣をさせては駄目だ。』親類の人達もやがてはこんなことを言ふやうになつて來た。會社の事務員に世話する人があつて、父母に伴れられて遠い處に玉子が行つたのは、それから暫し經つてからのことであつた。その遠い町では、外國人がよく通りを步いて行つた。玉子が表で遊んでゐると、『可

から子に結つてリボンをかけた房々した髪を此方に見せて、可愛い顔をしてスヤ〳〵寢てゐた。

『父さんは？』

『いつもの通りさ、角に行つてまた油でも賣つてゐるんだらう。』

母親はこんなことを言つて、長火鉢の前で煙草を一服二服ふかした。急に心配になり出して來たといふ風に見えた。母親の眼の前には自分等の通つて來た路が歴々と見え出して來た。神戸から歸つて來た時分には、まだ好かつたが、段々困つて、三年前まで住んでゐたすぐ前の家にゐられなくなつて、この狹い家に移轉して來たことなどを母親は考へた。玉子の三歳になつた頃、とても行末の見込はないと言ふので、親類相談して、暫く里へ歸つてゐたことがあつた。その時、父親は玉子に逢ひたいと言つてよく其處へやつて來た。ついその情に絆されて母親は父親とまた一緒になることになつた。その時里の母親は、『お前行くならよく考へてお行きよ。段々子が可愛くなるばかりだから。』と眞面目な顏をして言つた。あの小さかつた娘が、今またかういふ苦勞をかけるかと思ふと、母親は長大息をつかずには居られなかつた。

これから何うなつて行くんだらうと母親は考へた。十四なるこの玉子と、本屋に丁稚奉公に行つてゐる十二になる定雄と、つい去年ある機械場の丁稚になつて行つた宗太郎と、末のお福と、かう大勢の子供を抱へて、居食同樣に其日〳〵を送つて行く慘な生活のことを考へると、母親はかうしてぢつとして

屋では玉子を放すことを惜んで、何うにかして、もう一度出て吳れるやうにと何遍もくりかへして言ひ込んで來た。旦那を無理に取らせるやうなことはこれから決してさせないからなどとも言つた。しかし今度のことに懲々してゐる母親は、『もう、こんなことはさせない、お前が好きで、言ふことを聞かなかつたばかりにこんな目に逢つた。もう二度と再びお前の言ふことなんか聞くもんぢやない。』と言つた。貧しい中で、母親は田舍へ借金を返すことに苦心しなければならなかつた。それに、愈玉子が歸つて行かないときまると、田舍の方では、段々無理なことを言ひ出して來た。母親は自分の里の兄の許に行つて賴んでみたり、里の母に話して一緖に心配して貰つたりした。里の祖母さんは、『困つたねえ』と言ひながら、それでも自分で貯へて置いた金を出して吳れた。

その夜、突然歸つて行つた時のことを玉子は折々眼の前に浮べて見た。母親は其時通りに面した三疊の室でひとりで靜に裁縫してゐた。『母さん、母さん』と表から玉子は呼んだ。『咲ちやんぢやないか――』かう言つて吃驚したやうに母親は立つて來て雨戶を明けた。外には玉子が悄然として立つてゐた。

玉子は旦那を取ることを姐さんに勸められた話を成るべく大袈裟に誇張して母親に話した。途々玉子が心配して來たほど女親は强い小言も言はなかつた。『だから、私があれほど言つたぢやないか。』かう言つて母親は唯困つた樣な顏をした。

『福ちやん、もう寢たのね。』玉子はかう言つて八疊の方へ行つて見た。今年七つになる幼ない妹は、

母と一緒に暮した。妹はそこで生れた。『私ほど不仕合せな者はない――』かう思つて玉子はそつと涙を襦袢の袖で拭いた。

明るい灯と賑やかな町とが、やかて汽車の兩側に見え出して來た。上野はもう近かつた。乘客は皆な棚から鞄を下して下りる支度に取掛つてゐた。汽車は賑やかな明るい都會の方へ絶えず進んで行つてゐた。

大きなプラットホームの雜沓はやがて其處にあつた。玉子は苦勞にやつれた父母の顏を絶えず胸に描きながら、多くの人達と一緒に明るい町の方へと出て行つた。

二

玉子は田舍に行かない前と同じやうにぶら〳〵暮した。家の近所から毎朝學校に活潑に出かけて行く昔の友達を羨しいやうな心持で見たりした。自分もあゝいふ風に白いリボンでもかけて女學校へ行きたいとも思つた。しかし、去年學校をさがつてからは、教科書などは皆な縁側の隅の押入の奥深く藏ひ込んで了つた。それに女學校に入るやうな餘裕を持つた身分でもなかつた。

逃げて來た田舍との話は、いろ〳〵にこんがらかつて容易に簡單には纏らなかつた。中に入る人では要領が得ないので、後にはわざ〳〵母親が出掛けて行つたりした。土地でかなりに流行つただけに、澤

れなかつた。鮨は冷くそして乾いてぼそ〳〵してゐた。

數多い客車やら貨車やらを連接して、凄じい煤煙を漲らせて、遠い處からやつて來た汽車に乘つてからは、玉子は窓の隅の方に小さく押されるやうになつて、冷たい窓の板に顔を當てゝゐた。押へても押へても涙が溢れ出して來た。

乘換へた客室は客が一杯になつてゐた。大きなランプも今迄のとは違つて明るく四邊を照した。人達は色々なとを話して笑つたり何かしてゐた。果物を剝いて母親にわけて貰つてゐる小さな娘もあれば、丸髷に結つた奥さんらしい綺麗な人を伴れて長い旅をして來たといふやうな紳士もあつた。『もう、東京迄いくつ停車場があるんです？』玉子の後の腰掛に背中合せに乘つてゐた年增の女はかう伴れの男に訊いた。

『かうと――もう五つだ。』

『五つ、ぢや、もうぢきだね。』年增の女はあくびを飲み込むやうにして、『もうすつかり勞れて了つた。飽き飽きしたね。』

『もうぢきだよ。』

玉子は五つ六つの時に、父母に伴れられて汽車に乘つて遠い旅に行つたことなどを頭に浮べてゐた。其時分は父母もまだ今のやうに落魄してはゐなかつた。大きな鞄を持つたり、信玄袋を持つたりして長い旅をして行つた。母親の顔にも若々しい喜悅の色が湛へられてあつた。玉子は其遠い町で三年ほど父

腰掛に腰をかけて、他から見えないやうに顏を窓の方に向けた。

汽車の搖くにつれて、大きな油壺の底はキラ〳〵した。薄暗いランプの光線は、埃や煤煙の臭ひの漂つてゐる中に微かに震へて、桃割に結つた玉子の髮と、袖を合せて寒さうにしてゐる小さな後姿とをぼんやり照した。

外は眞暗でもう何も見えなかつた。

二間しかない貧しい家に父母がしよんぼり坐つてゐるさまが見えたり、お師匠に行くと言つて出かけたきり歸つて來ないので、澤屋で騷ぎ出して、彼方此方に追手を出したり何かしてゐるさまが玉子の眼に浮んだり消えたりした。お座敷に出てゐてそれを聞いて吃驚して歸つて來る姐さんの顏なども見えた。婆さんはさぞ自分の惡口を言つてゐるだらう。しかし、それよりも今度は歸つて行く家の方のことが段々心配になり出して來た。『だつて、無理に旦那を取らせようとするんだもの、姐さんがわるいんだから爲方がない。家に歸つたら、さう言ふから好い。』かう自分で自分を辯解してみたが、二年の約束で高い金を借りて行つた身が今度は心配になつて來た。父親と母親との苦勞に窶れた顏が小さい玉子の胸につかえた。

乘換をする大きな停車場では、玉子は一時間以上も寒い待合室で待つてゐなければならなかつた。お腹が空いたので、鮨を一箱買つてみたが、海苔卷を二箇食つたゞけで、あとは何うしても食ふ氣にはな

車を下りた。『行く處迄行つて上げべい。』と言ふのを遂つてことはつて、五錢餘計に車賃を車夫にやつて——急いで町の方へと歩いて行つた。一刻も早く、この車夫からも遁れたいと言ふやうな氣分に玉子はなつてゐた。少し行つて振返ると、車夫の姿はもう見えなかつた。玉子はほつとした。

火のちら〱點いた村の通りを急いで通つて、路の角に遊んでゐる子供に停車場への路を聞いた。小さな停車場は村の外れにあつた。

停車場の入口には、葉の落ちた大きな柳の木があつて、助役だの改札だののゐる硝子窓の灯は明るく此方から見えてゐた。其處から出て來た驛夫は、夕暮の薄暗い空氣の中に白くくつきりと出てゐる玉子の顔を覗くやうにして見た。玉子は明るい窓に顔を寄せて、

『下りはまだですの？』

『もうすぐです。』かう窓の中の一人は言つた。

乘客は百姓が一人ゐるばかりであつた。切符を買ふと、改札がもうすぐ其處へ出てゐた。玉子はやがてレールを越えて向う側に行つたが、コートも無しに寒さうにして立つてゐるその姿は、長い間ボンヤリしたランプの下に見えてゐた。

やがて汽車は來た。もしや町の誰かが乘つてゐやしないかと思つて、玉子は車室に入ると其まゝ、キツト四邊を見廻した。しかし幸ひにも其處には誰も知つてゐる顔はなかつた。玉子はすぐ傍に空いてゐた

氣のつくものはあるまい。俄かにかう思ひついた玉子は、懐の財布に觸つて見た。其處には何その時の用意にと思つて持つてゐた金が五圓ある筈だ。

『車屋さん、武里まで行つて呉れませんか。』

『行きませう。』

かう言つて車夫は玉子を見た。しかし別に怪しいと思つたやうな様子もなかつた。で、賃錢をきめて玉子は乘つた。玉子は賴んで幌を深くかけて貰つた。

町を通らずに、レール路に添つた近路を車夫は通つて行つた。車夫は四十位の堅さうな中爺であつた。『汽車に乘るんなら、其處の町から乘る方が好かんべえがな。』など丶言つたが『はア、さうか、武里に用があるんか、それぢや爲方がねえ。』こんなことを言ひながら、今度は町の上流半里位のところにかつてゐる橋を渡つて行つた。

途中に村があつたり、小さな町があつたりして、此方に來れば、もう追手のかゝる心配はない。まさか逆に汽車に乘つて行つたとは思はないに相違ない。幼い玉子にそんな智慧が出たとは氣が附くまい。『始めから、さうすれば好かつた。』など丶玉子は車の上で思つた。

武里までは町を越して一里半位あつた。其處に着いた時には、日がもう平野に落ちて、寒い〳〵風が吹いて來た。夕燒の空の中に遠い山が深い紫色になつて連なつて見えてゐたりした。玉子は村の入口で

摺れちがひながら、

『玉ちやん？』

かう聲をかけられた。見るとそれはいつもよく聘んで吳れる近在の物持の若い旦那であつた。新形の脊廣を着てゐた。

『何處に行くんだえ？　玉ちやん。』

『ちよつと其處まで、お使ひに……』

玉子は狼狽しながら言つた。

自轉車はすうと通つて行つて了つた。玉子が振返つて見ると、もう町の入口の方へ行つてゐる。玉子は安心が出來なくなつた。あの人は屹度いつもの料理屋に出かけて行く途中に相違ない。『今、玉子に逢つた』などゝ言はれると、其處から澤屋に知れるのはすぐである。次の停車場まで行つたにしても、すぐ追手がかゝつてつかまへられて了ふ。いつそ今日は知らん顏をして歸つて、また機會の好い時を見つけようか。かう思つて二足三足玉子はあとへ引返した。

其時野の向うから一人の車夫が空車を曳いて來るのが見えた。町の車でないのは玉子にはすぐわかつた。『さうしやう、次の停車場に行つてはつかまるかも知れないから、此處から向うに行つて、水田を通つて、先の武里から下りで久喜まで行つて、あべこべに其處から大宮の方へ乘換へて出て行けば、誰も

まへられて了ふ。さうかと言つて夜は出られない。出られたにしても、怖くつて一里先の停車場までなどはとても行くことは出來ない。玉子はたうとう何も持たずに單身で知らん顏をして其處を出て行くことに心をきめた。

町を出外れようとする處に、店に蜜柑だの柿だのをならべて、ちよつとした衰染で通りすがりの百姓に酒を飮ませるやうな店が一軒あつた。そこの上さんは澤屋の遠い親類か何かになつてゐた。顏を見たこともあれば、一二度其處に來たこともあつた。何うやら斯うやら町の裏道を通り拔けて來た玉子は、其處に來てまた吐胸をついた。見つかつたら大變だ。何處に行くッて聞かれたら返事のしやうがない。玉子は怖々ながら其前を通つて行つた。

幸ひにも大和障子が半分明けてあるばかりで、上さんの顏も亭主の顏も見えなかつた。綿フランの汚れた襟卷で顏を包んだ百姓が唯一人ぽつねんと酒を飮んでゐるばかりであつた。

それから先には廣い野が展けた。もうすつかり收穫がすんで、田にも畠にも百姓の影は見當らなかつた。大根の葉がひたと田の中に捨られてあつたりした。空車の音が四邊に響いて聞えたと思ふと、向うから鼻唄を唄ひながら機廻りの男がやつて來た。夕日は明るい光線を一面に野に漲らした。急いで歩いて行く玉子の影は長く水田の上に動いて行つた。

鈴の音がチリリンとしたと思ふと、平らな路を向うから自轉車が滑らかに此方へ向つて走つて來た。

いつもの通り町の大通りから横町へと入つて行つたが、澤屋の家が見えなくなると、お師匠さんの方へは行かずに、裏道を通つて、停車場とは反對の方へずん／＼玉子は歩いて行つた。町の橋の下流に架つてゐる橋をわざ／＼大迂回をして渡つたりして、成るべく細い通りから通りへと選んで行つた。不斷着の儘で包らしいものは何も持つてゐなかつたが、指には母親から貰つた大切の指環を二つはめてゐた。帶留も金の方のをしめて來てゐた。

知つてゐる人に逢ひはしないかと思つて、誰とすれ違つても顏を見ないやうにして玉子は急いでさつさと歩いた。途中でお爺さんの百姓と番頭らしい男と知らない子守とに逢つたばかりで、幸ひにも誰にも見附けられずに町を向うに通り拔けることが出來た。玉子はほつと長太息をついた。昨日の園遊會に、客の何かの話について、『さう！　次の停車場まで歩いて行つても一里ないの？　さう！』と言つたが、その時から玉子は獨りで逃げて東京へ歸る堅い決心をした。姐さんに打明けて暇を貰つてとも思はないではなかつたが、幼い心には、婆さんなどにいろんなことを言はれたり、いろんな素振を見せられるのが厭であつた。あとで母さんに來て話をつけて貰へばそれで好いと、唯單純に玉子は思つた。玉子は昨夜は一晩まんじりともしなかつた。あれも持つて行きたい、此も持つて行きたい、お客に貰つたあの花櫛も持つて行きたい……しかし、裏口からそつと拔けて出て行くにしても、そんな大きな包みなどはとても持つては行かれなかつた。其處にも此處にも知つた顏ばかりだ。すぐ知れて、追手がかゝつてつか

と訊いた。姐さんは時間になつても歸つて來ないやうなことが多かつた。其時は姐さんは大抵町の裏道にある鰻屋に行つてゐた。そこには暗い狹い室があつた。

玉子が毎日踊を習ひに行くお師匠さんの家にも若い藝者が二人ほどゐた。踊やら三味線やらを町の娘達が午過から大勢習ひに行くやうな家で、町の大きな呉服屋の娘は、お酌のやうな綺麗な扮裝をして毎日其處にやつて來た。肥つた脂切つた顏をしたお師匠さんは、拍子を取りながら、聲を張上げて越後獅子などを絶えず唄つた。元、土地の藝者でお師匠さんの娘に當る中年の姐さんは、をり〳〵其處に訪ねて來て、『澤屋に來たの！　好い子ですねえ。』と言つて玉子をほめた。『踊りも上手ですねえ。』などゝも言つた。

停車場の前を向うに行くと、町の家並は段々盡きて、田圃の方へ出て行くやうになつてゐた。汽車の踏切の傍に、澤屋の持つてゐた畠があつて、其處に婆さんと姐さんとに伴れられて枝豆を探りに行つた時には、玉子は一層家の方を戀しく思つた。長いレールが遠く續いて向うの青空には白い雲が靜かに漂つてゐた。停車場では、やがて來る汽車に積むための荷物を一生懸命に運んでゐるのが見えた。玉子は派手な姿を見せて、長い間其方を見てゐた。

踏切を越えて土地の代議士の園遊會に姐さん達と一緒に行つた翌日の四時過に、玉子はちよつとお師匠さんの許までと云つて澤屋を出た。

田舍訛の子守唄が絶えず其處から聞えて來た。メリンスの前垂をした玉子の姿が澤屋の裏口のところに見えると、『ヤッ、藝者ッ子、藝者ッ子！』かう言つて傍に寄つて來た。

玉子はお座敷で種々な人達を見た。銀鎖を縮緬のへこ帶に卷きつけた、顏に一面ににきびの出てゐる田舍の金持の息子もあれば、町の財産家の若旦那だと云ふ髮を綺麗に分けた色の生白い青年などもあつた。瓜二つ割つたやうな顏のよく似てゐる兄弟は、町から一里ほど行つた近在の物持の息子であつた。『家が亂脈なんですとさ、お父さんには、お妾がありながら、家には始終ゐないんですつて。それに、母さんがまけずに浮氣をするんですつて。あの家ももう駄目だつて言ふ話だよ。』など〻姐さん達は噂し合つた。それに、姐さん達と一緒に戲談を言つたり唄を唄ひ合つたりする人達は、大抵玉子の叔父さん位の年輩の人が多かつた。家に來て母さんのことをお秀〳〵と言つて酒を澤山飲んで行く叔父さんに似た人は、二里ほど離れた町の砂糖屋の旦那であつた。『玉ちやんにも誰か好いのを取持つて頂戴な。』そのお座敷に出る姐さんは、玉子の方を見てこんなことを言つた。醉つて、騷いで、三味線をガチャ〳〵鳴らして、後には倒れて其處に寢て了ふやうな人達ばかりであつた。玉子のきらひな執こい町の吳服屋の若旦那は、『玉公、氷を持つて來い』など〻言つて、蹌踉した體を玉子の方に寄せるやうにした。

お座敷の騷ぎの靜まつた頃を見計つて、姐さんとお帳場とに挨拶して、玉子はいつも家の方へ歸つて來た。夜風が寒く衣の袖を吹いた。家ではもう婆さんが床の中に入つてゐて、『玉公か。姐さんは？』など

母親に三味線を教つてゐる時分のことなどを玉子は頭に思ひ浮べてゐた。何うしても藝者になる。家にゐるのは厭だ。かう言つて駄々をこねて母親の言ふことを聞かなかつた。生ひ立つた土地と、一緒に遊んだ兒と、落魄した貧しい家庭とは、藝者ほど好いものはないといふ念を早くから玉子の幼い心に起させた。その時、母親は『いくら親が困つてたからッて、親の言ふことを聞かないやうなものは、一生緣を切る約束で人にやつて了ふから。』などゝ言つた。玉子は夜遲くお座敷から歸つて來て、薄い寒い蒲團にくるまりながら、母親の言つた言葉を繰返した。幼い玉子の心にはまだ世の中がわからなかつた。父親と母親とが何故あんなに喧嘩をするか、それも不思議に思はれた。幾夜か續けて母親の夢から玉子は覺めた。

荷車や馬車や車が絕えず澤屋の前を停車場の方へと通つて行つた。同じ年頃の娘が綺麗な扮裝をして母親と一緒に車に乘つて通つて行くことなどもあつた。店に來る鞄を持つた客が『ちよつと東京まで、』などゝ言ふのを聞くと、いつも胸を躍らした。

汽車の通る路は澤屋の裏からも見えた。青々とした菜畠などが其處にあつた。停車場で客を乘せた汽車は、ポッ〳〵と喘ぐ樣に白い烟を吐いて其前を通つて行つた。東京の方へ行く人達のいろ〳〵な顏は動いて行く窓の中に見えてゐた。

桐の木が並んで植ゑられてある畠の傍には、額髮を手拭で卷いた子守達がいつも五六人遊んでゐて、

つくつて見せた。

鐵橋を渡る時には、汽車の音は殊に高く轟くやうにあたりに響いて聞えた。その鐵橋の上からは、いつも玉子の聘ばれて行く料理屋が見えてゐた。もう一軒の方の料理屋は町の通りにかゝつてゐる橋を少し行つた處にあつた。玉子は其處で此方に來てから覺えた踊をよく踊つた。

玉子は色の白い脊の小づくりな綺麗な子であつた。東京から來たお酌さんと言ふ名で料理屋の間にきこえてゐた。『澤屋では好い子を置いたもんだ。今にどんなによくなるかわかんねえ。』かう人々は噂し合つた。

停車場から町の方に來る茅葺屋根の多い長い路を世話をして呉れた男と母親とに伴れられて、澤屋の家に入つて行てからもうかれ是れ四月以上になつた。來た時はまだ暑かつた。絽の單衣などを着てゐた。婆さんは何の彼のとチヤホヤして、裏の畑から玉蜀黍などを探つて來て燒いて呉れた。それがもう今では寒い風が吹いた。川の藻の黑く浮いてゐる中にさびしい赤い夕暮の雲が映つたりした。婆さんは、『玉公、何をぼんやりしてゐるんだえ。奥の方を早く掃除して呉んねえでは爲方がねいぢやねえか、』などゝ叱つた。三味線は姐さんが教へて呉れた。幼い身には、難かしくつて覺えられないのを、癇癪を起して、『さうぢやないんだよ、かうだよ、』などゝ言つて、木の撥で玉子の手を打つたりした。後には玉子は奥の壁の陰に行つて泣いた。

春雨

一

晝間は三味線のお稽古だの、店に出入りする大勢の人々の面白い話だの、絶えず口癖のやうにガミ〳〵言ふ婆さんの小言だのにまぎれて、つい忘れるともなく忘れてゐることが多かつた。しかし夕方に町を掠めて通つて行く電車の音を聞くと、玉子はいつも堪まらなく東京の方をこひしく思つた。ゴーといふ音は遠くの野の方から來て、半鐘臺や二階屋のくつきりと夕燒けの空に捺したやうに見えてゐる町を通つて、鐵橋をわたつて、そして向うの方へと段々遠くなつて行つた。玉子はお座敷に出てゐる時でも、其時は縁側の方へ出て行つて、欄干に凭つてその遠くなつて行く汽車の音を聞いた。

『何うしたの？　また東京を思ひ出したの？』

眼の縁を赤くしてゐるのを他の姐さんに見られて、かう言はれた事なども一度や二度ではなかつた。

『いゝえ、さうぢやないのよ、ちよつと今……』かう言つて、玉子は涙を飲込むやうにして強ひて笑顔を

春雨

もう久しいことだ。明るい光線に透して見るコップの中の酒、卓の上に置かれてある綺麗な花、白いエプロン、さうした中で見る女の美しさにかれは久しい間遠ざかつて居た。

かれの入つて來たのを逸早く見て取つた一人の男は、いきなり椅子から離れて、此方に遣つて來た。

『おい久し振ぢやないか、何うした？』

『やァ、これは珍客だ？』

彼方此方から聲が掛つた。藝者を伴れて來て居る男が其處にも此處にもあつた。かれの知つてる畫家は眞先にコップを取つて押付けるやうにしてかれにさした。皆な醉つて居た。

『おい、貴樣の話を大分聞いたぞ。』こんなことを言ふものがあるかと思ふと『おい、三鞭酒！　三鞭酒！　好い處に來た。今夜はうんと抜かせてやれ。』などゝ言つて、手を揚げるものもあつた。人達はかれの周圍に集つた。

二三の人達は藝者を伴れてこれから自働車で何處かへ行かうとして居た。『おい、貴樣も行かんか。』などと言つた。

明るい電燈の下には、女が行つたり來たりして居た。やがて自働車が來た。

『さう……何うしても歸るの？　今度は何時來て？　明後日來て頂戴。』

寒いから好いと言ふのを聞かずに、女はコートを着て、いつものやうに、田圃の中の停留場まで送つて來た。

都へ通ふ電車には、客が三四人しか乘つて居なかつた。停留場から停留場へと滑かに輾つて行く電車の窓からは、夕燒の微かに殘つた空が見えたり、樂しい農家の團欒の夕の灯が見えたりした。都に近づくにつれて、段々乘客が多くなつて、町の明るい家並が其處此處に見え始めた。

都の電車に乘り替へた時には、日はもう全く暮れ果てゝ居た。賑かな人の群、明るい灯の影――それは重苦しい暗い感じからかれの心を離れさせるやうに見えた。かれは海岸のさびしい一間に置いて來た女を想像しながら、次第に都の賑かな巴渦の中に入つて行つた。

一時間後には、かれは大きな停車場に近い橋のある賑かな通りを歩いて居た。赤い青い電燈の光がグルグル廻つて、柳の木の下の明るいアスハルトの路には、人がぞろぞろと通つて居た。

彼はやがてあるカフヱの扉を排して、明るい漲るやうな電燈の光の中にこつそりと其身を見出した。此處は以前かれのよく遣つて來たところで、いつでもかれの二三の友達を其處に見出さないことはなかつた。其處には畫家も來れば、小說家も來た。かれのやうな種類の人達も遣つて來た。

かれは今夜友達の顏を見たいと思つて來た。快活な聲、滑かな會話、屈託のない顏、それを見ないの

なかつた。

潮は頻りにさして居た。石垣に當る音がたぶたぶと聞えた。海の中の杭に繋がれた一艘の船は、風と波とにつれて絶えずぐるぐると廻つて居た。舳に繋いだ綱は、船の動搖につれて短くなつたり長くなつたりした。長く引張られた時には、女の長い髪が見えるやうにさへ思はれた。

女は窓の處に立つて、長い間見て居たが、男の方を振返つて、『本當に見えてよ、髪が……厭だわねえ。』

一時間ほど經つと、その埠頭の上は俄かに賑かになつて來た。巡査は行つたり來たりした。やがて雁木の上に置かれた二つの棺は、あたりに際立つて白く見えた。船頭はまた船を漕いで行つた。

『もう見るのはよしませうねえ。』

女はかう言つて窓を閉めた。

日の暮れるまで男は其處に居た。女は寂しがつて容易に男を歸さなかつた。『あんなものを見て、今夜はまた魘されてよ。厭だわねえ。』女は神經の昂つたやうな蒼いやつれた顏をして居た。

不思議にも今までのことが繰返されるやうな日であつた。男は過ぎ去つた苦痛と歡樂とを歷々と眼の前に浮べて見た。佗しい薄暮の色は海の方から來た。

『ぢやまた來る。』

ど引いて居る物體が重いやうに見えた。海の向うには、小蒸氣が通つたり白帆が見えたりした。

海は思ひ切つて碧かつた。

岸から一丁ほど離れた海の中に長い杭が一本立てられてあつて、其處には誰も乘つて居ない船が一艘繋がれたまゝ徒らに波に弄ばれて居た。船頭は櫓を掉に替へて、漸く其處まで漕いで來たが綱を船尾のところから解いて改めてそれを繋がれてある船の舳の所に結んだ。

やがて不愉快な厭なものから離れたといふやうに、その船は岸の方へと急いで漕いで行つた。

『潮がもつと來なくつては揚げられないんだね。』

見て居た人達はかう囁き合つた。

それでも猶ほ暫くの間、人達は其處を去らうともしなかつた。巡査を乘せた船はやがてその向うに見える長く海中に出て居る小さい埠頭の處に行つた。其處は町の警察の分署の裏になつて居た。巡査が一人其處から出て來たが、船から上つて行つた巡査と雁木の上に立つて、何か一言二言話して居るのが手に取る樣に見えた。船から上つた巡査はやがて急いで奧の方へ入つて行つた。跡に殘つた巡査は船頭を相手に、長い間其處に立つて、何事をか話して居た。海の方を指して見たりした。

船頭は長いたわしで、せつせと船の腹を洗つて居た。

暫く經て男が再び窓を明けた時には、もう巡査も船頭も其處に居なかつた。見て居た大勢の人達も居

それから男は其處にも泊つて行くやうになつた。其處等の漁師達は、朝早くその裏の石垣の上の門から、砂原づたひに海岸を散歩して居る男の姿ををり〳〵見た。男は海苔を取つて歸つて來る船に朝日の當るのを眺めて居た。

三十六

潮がさして來た。

白く泡立つ波頭の上を沈んだり揚つたりして、一艘の船は、此方へと遣つて來た。風の强い日であつた。船から下した綱は重い何物をか引いて居た。

巡査と船頭とが其處に乘つて居た。巡査の佩劍には日がキラキラと光つた。

海岸には人が大勢出て居た。石垣の上の門の處にも女達が幾つとなく顏を出して居た。『土左衛門！』『情死！』などいふ聲が其處此處から起つた。

其家の大きい娘は、階梯の下から二階の人達に聲をかけた。男は前の日から來て泊つて居た。やがて二階の窓は明けられた。

男の顏と並んで女の蒼いやつれた顏が其處から見えた。

船頭は一生懸命に櫓を操つて居た。それにも拘らず、船は容易に此方へと遣つて來なかつた。それほ

しかし女は手紙では滿足が出來なかつた。男戀しさに體の震へるやうな心持を此頃ではつくづく覺えて來た。

朝日の當る暖かい夜着の中から、半分身を乘り出して、机の上の硯と卷紙とを取つて、打伏になつて、夜中考へて置いたことなどを手紙に書いた。

ある日午後から遣つて來た男が日暮に歸らうとすると、女は何うしても今日は歸さぬといふやうな素振を見せて男を引留めた。

『好いのよ。好いのよ。此處ではそんなことは、母さんから聞いて知つて居るから構ひやしないのよ。本當に構はないのよ。』かう言つて、すぐあとをついで、『本當に貴郎は此頃は薄情になつてね。もう私がこんなになつたと思つて、そんなにするなら好いわ……人の氣も知らないで。』其眼にはもう涙が滲み出して居た。

『でも變ぢやないか。』

『好いのよ。』女は早口に言つて、『でも貴郎が厭なら爲方がないわ。』

『さういふ譯ぢやない……』

『男は薄情ね。』

女の熱い心が漲るやうに押寄せて來るのを男は感じた。

に集つた。

女の姿も此頃では滅多に町に見えなくなつた。それに人目につき易い體にもなつて居た。女は二階の一間に籠り勝ちに日を暮らした。寒い朝などは午近くまで床を離れずに居ることなどもあつた。長襦袢一つで階下の厠に下りて來て、朝の寒さに震へながら、冷めたい足で急いで階梯を上つて、再び暖かい夜着の中に體を入れた。

女の心は不思議にも男の方に偏つて行つた。賑かな都會、離れて來た音樂と灯との生活、それよりも一層心が男の方に向いて居た。日毎に男が戀しくなつて行くやうにも思はれた。

小さい古びた机の上に置いてある硯で、女は男に遣る手紙を幾通となく書いた。山茶花の花などを其中に巻き込んで封じて遣つたことなどもあつた。書いてやる文句の中にも、突詰めたやうな心持がいつとなく出て居るのが自分にも解つた。

『じれつたい！』

かう言つて書きかけた手紙を幾通となく破つて捨てた。

女の兒は女の許に來る男の手紙をよく持つて來た。『をばさん、手紙！』その聲を聞くと、女はわれを忘れて室から飛び出して、階梯の半途まで下りて行つて、それを躍る心で受取つた。男の手紙は、大抵やさしい情の深い言葉で充たされてあつた。『體を大事にしろ！』さうしたことを細々に書いてあつた。

田圃道を傳つて、電車の停留場の見える處まで、女は男を送つて行つた。

それから男は度々遣つて來た。男にはその町が一種のなつかしさを持つて來るやうになつた。腥い臭ひの充ちた町、狹い汚い騷がしい船着場、海苔の干してある海岸の眞砂道、ことに海の見える二階の一間に、さうした狀態の女を置いて見るといふことが男にはめづらしかつた。男は時には、女を訪ねる前に、わざと獨りで其町をあちこちと步いて見ることなどもあつた。欅の木のある社にも行つて見た。汚い小川の橋の上にも立つて見た。凩の凄じく吹く日に、大川の土手の上に立つて、日に光る遠山の雪を見たこともあつた。

女は男の來るのを日每に待つた。約束した時刻には、停留場まで出かけて行つた。

三十五

冬は段々深くなつて行つた。

手水鉢の水が厚く凍つて、柄杓で叩いても割れない樣な朝もあつた。海岸の砂原に引き殘された處々の水溜にも、午近くまで薄い氷が解けずに殘つて居た。

凩に晴れ渡つた海の鮮かな碧は、もう見ることが出來なくなつた。薄く曇つたやうな日が續いて、水蒸氣がいつも深くあたりを籠めた。漁師達は朝早く舟の支度をしながら、粗朶を折りくべた焚火の周圍

黑い娘は、奥で襷がけで働いて居たが、母親に呼ばれて其處に出て來て煤けた鐵瓶から大きな土瓶に湯をさして、そのまゝ一椀の茶を客に勸めた。知らせに行つた女の兒は長い間歸つて來なかつた。

『何うしたや？　お前行つて見て來う。』

上さんはその大きな娘に言つた。

女は海岸に散歩に出て居た。やがていつも聞馴れた小刻みな後齒の下駄の音が庭石傳ひに聞えたと思ふと、其處に庇髪にした女の姿が現はれた。『裏に行つて居たもんだから……でもよく分つてね。』かう言ひながら、女は男をその二階に伴れて行つた。

窓から展げられた海を男は飽かず眺めて居た。其日も海は鮮かに碧く晴れて居た。帆を揚げた船が幾艘ともなく通つて行つた。青く白く塗つた小蒸汽が綺のやうに波を蹴立てゝ行くのも見えた。

『これは好い處だね。』

男は幾度も繰返して言つた。

其處で男は午飯の御馳走になつた。午前の十時頃から日の暮れる頃まで男は女と相對して居た。別に話とてもないが、何だかさうやつて長く相對して居たかつた。日が暮れてから、二人はつれ立つて、海の岸から川の土手の方へと歩いて行つた。舟着には漁師達が集つて何かガヤガヤ言つて居た。薄暮の色は柔かに靜かにあたりに行きわたつて、岸には火を燃して居る舟などもあつた。

あつた。女は正月に嗜んで食ふ海苔が、かうして出來るのを珍らしいことに思つて、上さんからいろ〳〵なことを聞いた。漉いた紙のやうに其處等に立掛けられた海苔には、薄い冬の日が當つて居た。

その途中のある家の垣の外には、紅白の絞の山茶花の綺麗に咲いて居た。ある日女はそれを折つて來て、藍の模樣の鮮かに出てゐる一輪ざしにさして、海に向いた方の窓のところに置いた。

男が其處に遣つて來たのは、女が來てから五日ほど經つた後であつた。矢張暖かい春のやうな日であつた。畠の畔には、黄菊白菊が霜にやつれながらまだ殘つて居て、風が靜かに落葉をころがして吹いて行つた。

縞羅紗のインバネスを着て、鼠色の中折の帽子を冠つた男の姿は、電車の停留場からその畠の間の細い路を通つて町の通りの方へと出て行つた。角の駄菓子屋で聞き、通りに遊んで居る子供に聞いて、漸くそれと解つた家には上さんが子供を抱いてほつねんと入口の處に立つて居た。男は靜かに其處に入つて行つた。上さんはそれと聞いて、すぐ點頭いて、其處に居た女の兒に言つた。

『をばさんにな、東京のお客樣だつて言つて來なよ。』

女の兒が知らせに行つて來る間を、男は大きな丸い火鉢の置いてある處に腰をかけて待つて居た。古く煤けた天井、自在鍵に吊された圍爐裏の黑い鐵瓶などが目に立つて見えた。十五六になる大きな色の

といふやうな人で、夜は大きい舊式のランプの下で、若い漁師達を相手に、面白さうに海の話などをした。上さんは多い子供達の世話に忙がしく、末の兒に大きい乳房をふくませながら、近所の上さん達に何彼と應對して居た。竈の上には、火が赤く闇を隈取つて見えた。

『何うかすると女は遲くまでその群に交つて話をして居ることなどもあつた。と、其處に上さんは末の兒を寢つかせて遣つて來て、『一つ彈いて聞かせてお呉れや。』などと言つて、自分が娘であつた頃の古い三味線を取出したりした。女は笑ひながら、流行唄などを彈いて聞かせると、『今は、東京では、そんな唄が流行るかや。』かう言つて上さんは面白さうにして聞いて居た。女の兒達はその周圍に圈をなして集つて居た。

平野の果ての山々にはもう雪が來て居た。海へ注ぐ大きな川の土手の上からは、それが朝日夕日にかがやきわたるのが見えた。幾艘ともなく岸に繫つて居る苫を葺いた船の上には、朝霜が白く置いた。

海には粗朶の林が幾列にも並んで、潮がさして來ると、それが女の髮か何ぞのやうに水に漂つて見えた。黎明の中から海苔を取りに行く船の出て行く賑かな氣勢は、女の室まで手に取るやうに聞えて來た。

引潮の時には、裏の出口から、海岸づたひに漁師の家並の裏の方へ出て行かれるやうになつて居た。退屈すると、女は獨りでよく其處に出かけて行つた。

暖い日などには、海苔の一面に干してあるところに立つて、其處の上さんと話をして居ることなども

夕暮など、裏の石垣の上の門の處に白い顏をくつきりと見せて、さびしさうに一人で海を見て居ることなどもあつた。

派手な女の姿は到る處に鮮やかな色彩を際立たせた。家の女の兒達は、東京のをばさんを珍らしがつて、何ぞと謂つては、その後に跟いて行つた。町でもいろいろな噂をした。『藝者だとよ、何うもさうだと思つた――』などと上さん達は言つた。

太く根を張つた欅の樹のある社の境内に女の兒と伴立つて來て居ることもあつた。濁つた汚い小川に沿つた道を、夕日に照されながら、靜かに歩いて行くこともあつた。暗い動かない水に夕燒の空が微かに映つて居るのを橋の上に立つて凝と見て居ることなどもあつた。風の吹く日は、海は藍を溶かしたやうに碧かつた。女は窓を明けて波頭の白く立つのを見て暮らした。

その二階の一間からは、石燈籠だの松だののある落葉の積つた中庭が見下された。そのすぐ傍が風呂場になつて居た。女が來てから、毎日風呂を立てゝ臭れるので、午後には、細い煙突からいつも黃い白い煙がほそぐ\と颺つた。四時頃になると、女の兒はきまつて、『をばさん、お湯が沸いたよ。』と知らせに來た。

母屋の方には、漁師達が絕えず出たり入つたりした。肥つた老いた此家の主人は、いつも莞爾して居る

頃から細い路を拔けて、麥畑や大根畑などの青々とした間を通つて、それから猶少し行つたやうな處にあつた。電線の唸る響がをり〳〵聞えて、ボーと鳴る音と共に、赤く白く塗つた電車は、常に威勢好く田圃の中を通つて行つた。

その電車に乘つて、母親に送られて、女が此處に遣つて來たのは、矢張ある暖かい冬の日の夕暮であつた。停留場の人達は縮緬の七分コオトを著た此處等では餘り見懸けたことのない綺麗な丸髷の女を物めづららしさうにして見た。兼ねて話がしてあつた其處の親類の家では、新しい珍客をよろこんで迎へて豫め綺麗に掃除して置いた奥の離れの二階へとすぐ案內して行つた。此處の上さんは女の母親の從妹で『まァ、いゝお上さんになんなすつたな、小さい時分にはよく遊びに來たことがあるが、覺えて居さつしやるかな、』などゝ女の丸髷を見い〳〵言つた。

二階は六疊で、窓の外には狹い小さい欄干が出張るやうになつてついて居た。其處には萬年青の鉢などが置いてあつた。海は其處から手に取るやうに見えて、潮のさして來る時には、すぐ下の石垣まで、波は押寄せて來て靜かな音を立てた。

天井の低い、壁の煤けた、古い錦繪の貼つてある室で、女はやがて日を送ることゝなつた。退屈すると、女は母屋へ出かけて行つて、上さんを相手に、都會の賑かな話や、面白い芝居の話などをして聞かせた。時には七歲になる可愛い口の利き方をする女の兒の髮を結つてやつたりした。

三十四

低く孕んだ帆が海へと出て行つた。濁つた大きな川の岸には、船が幾艘となくかゝつて居て、大漁の模様の出た褞袍を著た漁師や、髮を無造作に束ねて大きな聲で子供を叱つて居る上さんや、日向で網の破目を繕つて居る男や、粗朶の垣や、貝殼の屋根や、さうしたゴタ〳〵したものゝ上に、此頃ではめづらしい暖かい冬の日が一面に靜かにさし渡つて居た。

長閑な日だ。

其處の岸から汚い漁師町がすぐ開けて見られた。庇の傾いた古い小さい家屋が兩側に並んで、かうした處に特有な一種腥い氣がそれとなく四邊に充ち渡つて居た。貝殼を載せた屋根がそれからそれへと續いた。

井戸の傍で洗濯をして居る上さん、白い手拭をかぶつてせつせと働いて居る頰の紅い娘、緣側に出て日和ぼつこをして居る汚ない婆さん、町の通りには、頭に大きな臺を載せたヨカ〳〵あめ屋が、太鼓を叩いて賑かな聲を立てゝ通つて行つた。町の中頃にある大きな家の前の吹井からは、綺麗な水が絕えず溢れ出して居た。

この漁師町の裏には、なにがし町からなにがし町へ通ふ電車が通じて居て、其處の停留場は、町の中

な氣がすると見えて、何處か情愛に違つた處がある。猶盡きずに女はさうしたことを話して、『でも私は幸福よ。貴郎はそんな薄情ぢやないから。』かう言つて、男の顏をぢつと見た。

『そんなことはないわ。女でなくつては、誰の兒だか、本當のことは解らないなんて、そんなことはないわ。生れて見りや、ちやんと解るわ。』

女はかう重ねて言つた。

眼の緣には暗い影がそれとなく見えて居た。白粉をつけて居るので、鳥渡見ては解らないが、顏の色つやも何處となく荒んで居た。態度にも衰へたやうなところがあつた。

『まだわるいの？』

女中からかう聞かれて、何の彼のとまぎらして居る女のさまが殊に男にはいぢらしく見えた。虛僞をのみ期待してゐる女から始めて眞實を見たといふやうな心持がした。男は今更にぢつと女を凝視めるやうな人であつた。

捉へることの出來ない、縛ることの出來ない、何んな細かい網の目の中からでもいつかつるりと抜けて逃げて行つて了ふやうな女の心――それを包んだ女の體に、熱い力強い男の心がいつか微妙に働いて、かういふ狀態を眼の前に見せてゐるといふことは、男には殊に意味深く感じられた。其處に男の勝利を見た。

つては大きな事實であつた。虚僞でも何でも好い、自分の子でなくても何でも好い。女がさういふ體の狀態に居るといふことが男にはめづらしかつた。

かれは明るい心を抱いて、明るい電車の中に居た。

三十三

女から母親と相談した結果を知らせた手紙も來た。男の方からも出かけて行つて、いつもの處で逢つて細かい話などもした。女の體は確かに變調を來して居た。女は本當のことを知らせた。

『かういふ稼業をしてるのですから、さう思はれても無理には思はないわ……けども、もし生れて貴郎に似てたら、何うして？』女はいつもに似合はない靜かな調子で言つて、『だから、かうした稼業をして居るものに出來た子は本當に可哀相よ。私など隨分いろいろなことを聞いて知つて居るわ。』

產れ落ちると、すぐ里子に遣つて、一月も經たない中に知らぬ顏をしてお座敷に出たといふ人もある。見も知らない他人にお金をつけて遣つて了つた人もある。その爲めに幸福になつたものもないではないが、それは極く稀だ。かう女は話して聞かせた。さる名のある老妓は、若い頃に出來た其兒に別れるのが辛くつて、田舍の里親にキチンと里扶持を遣つて、其兒が十三四になるまでも、一月に二三度は屹度行つて見るのを樂みにしてゐた。それに大きくなつてからが可哀相だ。本當の父親でもさうでないやう

『私、母さんに相談して見てよ……何うせ、彼處では何うすることも出來ないわ、近所にも具合がわるいし……それに變だわ。それから私、向うの方にも知らせたくないのよ。何の彼のッて、人に言はれるのは厭ですからねえ……でもまだ一月やそこらは好いけども、さういつまでも構んでも置けないわ。』かう言つて男の手を闇に握つて、『私、考へて置いたことがあるのよ。私の遠い親類が田舍に在るから、其處に行かうと思つて居るのよ。海の傍よ。そしてそんなに遠くないのよ、漁師で、家が廣いから喜んで世話して呉れるわ……。』

場末の電車の停車場には、誰も待つてゐるものもなかつた、電燈が霧に濡れて繪のやうにかゞやいて居た。驛員が停車場の中で珠算を彈いてゐるのが硝子戸を透してはつきりと見えた。

二人は踏切を越えて向うへ行つた。

『もう好いよ。』

『でも、電車の來るまで。』

女の顏は電燈の光を受けて、殊に際立つて白くくつきりとして居た。

電車が來て、やがて男は乘つた。踏切を電車が通る時にも女はまだ其處に立つて居た。

不思議にも男の心には、優しい思ひが充ちて居た。誰の子だかわかりやしない。さうした疑惑は無論起らないではなかつたが、しかしそれよりも女が心を打明けて縋つて來たといふことの方が、かれに取

男は耳を歛てずには居られなかつた。

『先月あたりから、變だ、變だと思つてましたけどもまさかと思つてねえ。處が矢張さうなのよ。』

『うそだらう。』

『本當よ。』

女の聲は眞面目に聞えた。

二人は默つて歩いた。

暫くしてから、男は、『本當にかえ？』

『え。』

『それはお目出度いぢやないか。』

『あんなことを言つて』、二足三足歩いて、

『まだ母さんには本統に話してはないのよ。けども好いわねえ、出來たッて。』

『それは好いさ。』

男はかう言ふより他に爲方がなかつた。

二人はまだ默つて歩いた。霧は處々の灯を掠めては白く流れた。ボウと音を立てゝ遠い處を通つて行く電車の音が聞えた。

一時間ほど經つた後には、男は醉つて其處にごろりと横になつて居た。『貴郎、少し寢て行く方が好いわ。醉つたの？　此頃は弱くなつたわねえ。いくらも召上りもしないのに……さうなさいよ、ね？』かう言つて女は搔卷を持つて來てかけて吳れた。

男が眼を覺ました時には、もう全く日が暮れて、ランプが點いて居た。女は其傍で頻りに本を讀んで居た。『目が覺めて？　おひやを上げませうか。』かう言つて女はすぐ立つて行つた。

座敷の方にも洋燈がついて居て、妹は頻りに明日の學科の復習をして居た。父親は近所に行つて居なかつた。

其處から電車の停留場に行く路は、半は屋敷町で、半はカンテラなどの明るい場末の町になつて居た。病中だから好いと言ふのを聞かずに、女は男を送つて出かけて來た。

『話すことがあるのよ。』

わざとはしやいだ調子で女は言つた。

霧の深い夜で、四邊は靜かであつた。薄白い夜の色の中を時々人が影のやうに擦れ違つて通つて行つた。大きな邸の門のガス燈の前を通りかゝらうとした時、女は不意に、

『貴郎、私、たうとう變な體になつて了つたのよ。』

寫眞を手に取つて見て、『母さんも若つたわねえ。二十七八ね……憖麽時代もあつたんだねえ。』

『若かつた時は、之れでもお綺麗だつたとサ。』

母親はこんなことを言つて笑つた。

其他にも男の寫眞だの、女の寫眞だのが澤山にあつた。『ほら、これよ。』女は其處から一枚の寫眞をさがし出して男に見せた。それは女が田舍で圍はれて居た若旦那の寫眞であつた。五つ紋の羽織を著て袴を穿いて居た。

『これは貴郎は知つてるわねえ。』

女は猶ほ笑ひながら、ハイカラな洋服姿の眼のぎよろりとした別の寫眞を出して見せた。

それは一時女が大騒ぎをした男であつた。

男は笑つて居た。

かうして居る中に、男は段々醉つて來た。壁にかけてある三味線を女はやがて取つて鬱金の袋を外して、コマをはめた。『母さんの常磐津は古いのね。今とは餘程違つて居るところがあるわ。』こんなことを言ひながら、此頃習つて居る『戻橋』を彈き出した。

前の小窓にはまだ簾がかけてあつて、一枚空いた障子からは、通りを隔てゝ向ぅの家の植込が見えてゐた。豆腐屋が鈴を鳴らして通つて行つた。

『此子は學校から歸つて來ると、まだおやつをねだるのよ、貴郎。』女はこんなことを傍から言つた。妹は顏を赧くして立つて行つた。

茶湯臺には種々なものが載せられた。

『此處等には何うせお口に合ふやうなものは御座いませんから。』母親は燗の出來た德利を銅壺から拔いた。

誰も酒の相手をするやうな者はなかつた。『私はお酒の匂ひを嗅いだゞけでも醉つて了ふんですよ。』から母親は眉を寄せて言つた。湯から歸つて來た父親は、煙草盆を前に置いて、脊を丸くして、頻りに煙草をふかして居た。

『父さんも、そりやお酒は駄目な方よ。……甘い方には眼のない方だけど……父さん、これ上げませうか。』娘は笑ひながら、傍にあつた唐饅頭の菓子鉢を父親の方に押遣つた。父親は莞爾して居た。

遠い昔の話が出た。女の稚い時の話等を母親は飽きずに話した。『父さん、寫眞を出して御覽なさいよ。』寫眞の箱の中には、女が赤坊の時のだの、五歲位のだの、十二三位の時だのゝ寫眞が幾枚もあつた。母親が派手なつくりをして、父親と一緒に女を中にして寫したものは、中でも殊にはつきりして居た。『それは大阪で撮つたのよ。其時分、家では大阪に行つて居たのよ。私七歲の時だわねえ。』から言つてその

ソツト座敷の方へと行つた。軈て袴を脫ぐ氣勢がした。母親が立つて行つて、何か二言三言小聲で話をしてゐたが、容易に此方に顏を出さうともしなかつた。母親との低い話聲は暫くの間障子のかげで聞えてゐた。

『何してるの？　此方にお出な、好いお土産を戴いてよ。それは、本當にお前さんの大好きなものよ。』かう言はれて、顏を赧くして出て來たのは、十四位の脊の大きい可愛い少女であつた。髪をお下げにして白いリボンをかけて居た。

丁寧にお辭儀をした。

『ほら、御覽、こんな好いのよ。』姉は其處にあつたボール箱の蓋を明けて見せて、

『お禮を仰しやらないと、上げませんよ。』

『何うも有難う。』

また丁寧にお辭儀をした。

若い娘には、何よりもかうしたものがうれしいといふやうに見えた。室の隅の方に小さくなつて坐つて、頻りにその箱をあけては見て居た。『好いでせう、氣に入つたでせう。やたらにかけちや駄目よ。』かう言つて姉はまたそれを手に取つて見て『色氣が好いわねえ。お前には丁度好い。』

母親が傍にあつた菓子を取つてやると、

わざとらしい處がなく總べてが隱すところなく顯はれて居た。母親の前では、矢張普通の娘に過ぎなかつた。

我儘な打解けた調子で、睦しさうに母親と話して居るのが男の耳には殊に快く聞き取られた。『昨夜は床の中で遲くまで母さんと二人目を覺まして居て、いろんな話をしてよ。私の生れた時の話なんか出たんですもの……もう遲いからお寢ッて母さんが言つても、聞かないで、私が起して居たわねえ。』こんなことを女は言つて笑つた。

まだ茶も淹れない中に、役所から、父親は歸つて來た。話をするにも顏を赤くするやうな人で、成ほど老舖の若旦那であつたらしい面影が、まだ其處等に殘つて居た。娘に對する言葉にも、絕えず他人に物を言つてるやうなやさしい處がある。やがて立上つて、『ぢや、私は御免を蒙つてお湯に行つて來ますから、』かう言つて出掛けようとするのを母親は追ひかけて言つて、何か御馳走の註文を賴んだ。

『それから父さん、あそこに行つて鰻を賴んで來て下さいよ。』

娘からかう言はれて、

『よし、よし、すぐ持つて來るやうに行つて來る。』

せかせかとして出かけて行つた。

妹といふのは、姉に比べては丸で別な子かと思はれるやうな少女であつた。默つて上り端から入つて

男はそれを飜して見た。『己が罪』としてあつた。

『今時分こんな本を讀んでゐるの？』

『いゝえ、前にも讀んだことがあるんですけれど……家にあつたからまた讀んで見たのよ。可哀さうね、矢張……』

男は笑つて居た。

室にある簞笥だの、机だの、額だのが段々男の眼に入つて來た。廁の方の緣側には、まだ夕日が微かにさし殘つてゐた。其處には楓や柘榴や欅や松などの盆栽が一杯に並べられてあつた。

暫く經つた後には、親しみ易い氣の置けないやうな空氣の中に男は居た。『まァお宜しいでせう、別にお構ひも出來ませんから、此方にいらつしやいましっ』かういふ風に母親からも女からも言はれて、無理に居間の長火鉢の側に連れて行かれた。

綺麗に色の出た鐵瓶や五德や火箸や藥鑵などの置いてあるその側で、女は母親を扶けて、炭を繼いだり水をさしたりした。茶簞笥の上には、小さな水天宮のお宮が祀つてあつて、その傍には茶道具がゴタゴタ置いてあつた。それを女は白い腕を伸ばして取つた。

家庭で見る女の態度は、尠くとも男にはめづらしかつた。口の利きようにも甘えるやうな處がなく、

にすこしも似てないでせう?』
『さうだねえ、さう言はれゝば似てないね。』
『私、父さん似ですもの。』
すぐ話頭を替へて、
『今も貴郎のこと考へて居たのよ……手紙が今朝著いて、今日、明日は來て下さるだらうと思つて居たわ。』
何處となく窶れの見える女は、銘仙の袷に黑繻子の帶をひつかけに結んで居たが、鳥渡引つかけた黑縮緬の羽織は、一層その顏を青白く病人らしく見せた。
それでも襟は派手なのをかけて居た。
『そんなに起きて居て好いのかえ?』
『今まで臥て居たんですけれど、餘り氣がクサ〳〵するから、起きて母さんと話でもしようとして居た處よ。』髮に觸つて見て、『こんなに壞れて了つて、本當に氣持がわるい。いつそ解かうかしら?』
さも煩さうに、垂れて來る鬢の毛を指でかき上げた。
枕元はすぐ緣側になつてゐて、其處には菊の見事に咲いた大きな鉢が置いてあつた。床の傍には、厚い本が讀みかけたまゝになつて伏せてあつた。

處よ。』

八疊の間には、床が敷いてあつて、友禪の赤い搔卷の襟當が室の中に際立つた派手に見えて居た。六疊の居間には、肥つた品の好い四十恰好の女が居た。

やがて靜かに立つて來たその女は、座蒲團を男に勸めてから、丁寧に初對面の挨拶をした。

『母さんよ、私の……』

傍から女が引合せた。

『いろ〳〵これがお世話になりまして、何からお禮を申してよろしいのか知れません……』やさしい靜かなしかし何處かにしつかりした處のある調子で母親は話し出した。

『まア、ねえ、これがさぞ我儘を申すことでせうと思ひまして……』かう言つて間を置いて、『それにいつも彼方此方と面白い處を見せて頂いたり何かして、それは平生喜んで居るんで御座いますよ。』

その言葉は想像して居たよりも柔かく快く男の耳に聞えた。

母親が向うに立つて行つた後で、

『若い母さんだね。』

かう男が言ふと、

『だツてまだそんなに年を取つて居ないんですもの、四十よ、まだ、』かう言ひかけて女は笑つて、『私

一番幅の廣い色の派手なリボンを買つて、ボール箱の中に入れて貰つて、それをかれは風呂敷に包んだ。

それから町へ出て、見舞の菓子なども買つた。

それは遠い處であつた。電車を幾度も乘り替へて行かなければならないやうな處であつた。電車を下りてからは、汚ない暗い町を通つたり、屋敷町のやうなところを通つて行つたりした。ある塀の角に、白い地に黑くその町の名の書いてある札を見た時には、かれはもうかなり疲れて居た。

番地を追つて、彼は其處等を行つたり來たりした。庭の松が板塀の外に出て居るやうな處もあつた。細い通りには、建具屋の仕事場があつて、其處では若い職人が二三人せつせと板を削つて居た。番地はやがてかれを奧深い巷路へと導いて行つた。

その家の前に行つて、かれは暫し立留つた。

格子戸を開けると、鈴がチリチリンと鳴つた。ハイと挨拶した聲は聞馴れた女の聲であつた。

『まア、貴郎。』

障子を開けて出て來た女は、吃驚したやうに聲を立てゝ、長火鉢の置いてある居間の方を鳥渡見たが、

よく來て下すつたわねえ。……こんなに早く來て下さるとは思ひもかけなかつたわ。さア、何うぞ。汚い

彼はこれまでに女の實家に行つて見たことはなかつた。それはいろ〳〵な話を聞いて知つては居た。其處には人の好い父さんとしつかりした母さんともう徐々年頃にならうとする可愛い妹が居て、父さんが其妹を生命の次ぎ位に可愛がつて居るといふことなども知つて居た。女はよく其人達の話をして聞かせた。父さんが盆栽道樂で、僅かな月給を大方それにつかつて了ふ話などは女から度々聞いて居た。

しかし女から今まで實家に來いなど〻言はれたことはついぞなかつた。

男は不思議な氣がした。普通の家庭に置いて見るその女、それを男は想像した。それに、今まで全く別な世界に住んで居て、今女と別れて了へば、永久に知らない人で濟んで了ふ人達に逢ふのも不思議な氣がした。それに好奇心もあつた。

その日は生憎に忙しかつた。彼が仕事を濟して其處へ出掛けたのはもうかれこれ三時過ぎであつた。秋晴の好い日で、蒼い空が洋館の並んだ賑かな綺麗な町に展けられて居た。アスハルトの敷きつめた人道には柳の枯葉がパラパラと日を受けて散つて居た。

町の中頃に大きな勸工場がある。やがて其處に入つたかれは西洋雜貨商の肆を見い見い歩いて行つた。女の妹の爲めに土産を買つて行かうと思立つた。かれは二階から下に下りようとする處の肆の前に足を停めて、幾筋となく其處に長く下げてあるリボンを見て居た。小さい髷に結つた愛嬌のある其處の上さんは、やがて傍に寄つて來て、一層幅の廣い流行のリボンの卷いたのを幾箇となく出して客に見せた。

男にはこの小犬が何となくなつかしいものゝやうに思はれた。かれは其處に來ると、いつもあたりを見廻した。それの居ない時は何となく侘しい辛い心持がした。丁度女でも居ない時のやうに。

三十二

私、此頃加減が惡くつて、あちらでふせつて居たんですけれど、他人の處では、十分保養が出來ませんし、それに不便ですから、五六日こつちの家に歸つて休んで居ますの、お目にかゝりたいと思つて居ましたけれど、こんな處には來て下さらないだらうと思つて、今までお手紙も上げないで居たんですの。だけど、今日といふ今日は、寢て居て、しみ〴〵お顏が見たくなつて、何だかさむしくなつて爲方がありませんから、此の手紙を書きました。來て下さいますわねえ。遠方ですけども――

――月――日　　　　　　　　　　　　　　　――より

――様

封筒の裏には、かねて聞いて居る女の實家の番地が書いてあつた。夜遲く近所のポストに入れに行つたといふことは鮮かな消印の字で知れた。

遠くから來た男が歸つて行つてから、かれは二度ほどいつもの室で女に逢つた。女は『もう遠くに行くのはよしたわ。』などと言つて居た。其時も何處かやつれた元氣のない顏をして居た。

い不安とか疑惑とか言ふやうなものとは全く違つて居た。

『離せるなら離して見ろ。』

こんなことをも考へた。

『長い間に築き上げた心、それを一朝にして破られて堪るものか。肉體は？ 肉體は？ それはいくつにもわけることが出來るかも知れないが、肉體に伴つた快樂の度數は到底わけることの出來ないものではないか。』時にはそんな處まで問題を持つて行つた。

割合に落附いた靜かな心持で居られることを男は喜んだ。

男はつめとて此方から出懸けて行かないやうな方針を取つて居た。

わざと避けるやうにもして居た。

いつも電話を借りる建物の前をかれは一日おきに通つた。流石に其處を通る時には、心が動かない譯にゆかなかつた。大きな建物からは、扉を排して人が出たり入つたりした。肥つた髯の生えた紳士が其處から出て來て待たせて置いたゴム輪の車に乘つて威勢よく出かけて行つたことなどもあつた。

赤斑の可愛い小犬が居た。何處かその近所で飼つて居るらしかつた。いつも其處等をブラブラして居た。大きな犬の通るのを遠く離れて吠えて居たりなどした。朝は日の當つた扉の處に蹲踞んで、茶色がかつた可愛い眼で此方を見て居た。雨がその垂れた尾に降つて居る時などもあつた。

三十一

とてもかうした女からまことの戀を望むことは出來ない。かう思つてかれは山の中に出懸けた。其處でかれは女を忘れる方法を講じようとした。しかし今では其時のやうな激した單純な心持はもう起らなかつた。二人の關係は其時とは著しく違つて居た。氣分も違つて居た。

自分ながら不思議に思はれるほど靜かな落附いた氣分が續いた。かれは女の悶えて居るのを知つて居た。また自分から容易に離れられなくなつて居るのをも知つて居た。かれはいつの間にか深い束縛の出來たのを顧るやうな人であつた。

女の話――其處からかれは女の細かい心持を汲み取つた。女の日每に送つて居る生活、女と女の兩親との關係、幼い頃から今までに至る間の物語、其處からかれは女の總ての氣分と性質とを判斷するに十分な材料を得て居た。

女の周圍に居る人々の話や生活や情僞や、さういふものからも段々女が詳しく知れて來た。初めは疑惑と不安の間に包まれて居た女の影も、今でははつきりと鮮かに見え出して來た。

時には自分の愛して居る女を多くの男の中に手放しては置けないやうな氣がしないでもなかつた。肉體の保護といふことを考へる時は殊にそれが強かつた。しかしそれは以前感じたやうな、女に逢はれな

たら好いぢやないか。顧慮せずに心をそれに注いで行つたら好いぢやないか。惚れた男に、心から思ひを注ぐことの出來ないのは、男が本當に解つて居ないからだ。さういふ女は一生惚れたやうな心持がして居ても、心から男に惚れたんぢやないんだ。』

『それは本當よ。』

かう言つた女の眼からは涙が溢れ出して居た。

『それは本當よ。』女は繰返して言つて、『私などでもよく解るわ。男の情はあとから解つて來るわ……しかし解つた時はいつでももう遲いのよ。解つてから、追ひかけて行つたッてそれは駄目よ。』

『それは無論さ。』

『けどもまたかういふやうな處もあるわねえ。男は女が惚れたやうな素振を見せると、すぐお高くなつて、もうこの女は自分のものだつて言ふやうな氣分になるわね。それが見えると、私はすぐ厭になつて了ふわ。さういふ具合で、中途からイヤになつた人はいくらもあるわ。私の性分でねえ、屹度……』

二人はかうしたことを其時盡きずに話した。不思議にも言葉と言葉とに熱があつた。二人は更に一つの戀の障壁を越えたやうな氣がした。『これでも男の心は解らないか。』それを男は醉つて幾度か繰返した。

『あの端書を出さなければよかつた。』
女の話を聞いてゐる中にこんな考へが幾度となく男の頭を通つて行つた。
男は靜かに女の話を聞いて居た。時々道理らしく點頭いて見せた。
『ぢや別れようかね。』
心を抑へたやうな眞面目な調子で、暫くしてから男が言つた。
女は頭を振つて、
『その位なら、私、こんなに苦勞なんかしないわ。』
複雜した女の心は容易に言葉で言ひ現はすことが出來ないやうに見えた。女はいろいろにしてその心持を男に傳へやうとした。しかしその言葉は多くはツボにはまらずに、他の方に外れて行つた。女はぢれつたさうに、『兎に角別れるなんて、そんなことはイヤですから。』
『ぢや何うすれば好いんだ？』
『まァ好いのよ。そんなに私を酷めないで置いて下さい。もう、そんな話よしませうよ、私、よすわ。』
かう言つて、女は酒をグイグイ飲んだ。男も一緒に杯を重ねた。男は其時、男に惚れることの出來ない女の可哀相なことを話して聞かせた。
『何故、惚れた男に心から惚れることが出來ないんだ。戀しいと思つた男には、ドシドシ惚れて行つ

男と女と伴れ立つて其處を出たのは、もう餘程遲かつた。二人ともかなりに醉つて居た。町ではもう戶を閉めて居た。

『馬鹿な奴？』

男はこの言葉を旣に幾度となく女に浴せかけた。氣が附くと、二人はいつか樹の影の深く繁つた處に來て居た。電燈が明るく葉裏を透して見せた。

其處にはベンチがあつた。

女は苦しさうにして居た。酒の醉に堪へないと言ふやうに、頭を垂れて、手を男の膝に乘せて居た。

『おい何うした？　馬鹿な奴だなァ。これでも男の心が解らないのか。』

かう言つて男はまた女の手を堅く握り緊めた。女はぐたりとして居た。

其夜、女の話を聞いて居る中、男は絕えず一種の鼓動を胸に覺えた。しかしそれはいつもの烈しい强いものではなかつた。寧ろ靜かに小刻みに押寄せて來るやうなものであつた。哀愁もそれにつれて起つた。話の中の男の影は、女が言葉を重ねてゆく中に、段々濃く明かに其姿を見せて來た。

日光の山の中に一人で出かけて行つた時のことが思ひ出された。其時、それと知つて悶えた心持は忘れられなかつた。あの時出した端書、それも頭に上つて來た。

『なら、よすわ……』

かう言つて、女はまた三味線を彈き出した。流るゝやうな滑かな調子は、靜かな夜に際立つて冴えて聞えた。

『私、遠くに行かうと思ふの。』

暫くしてから女は思切つたといふやうに。

『でも、まだきめた譯ぢやないのよ。貴郎が可いッて言へば、行かうかしらとも思つたのよ。』

女はかう附加へて言つた。

男にも段々其話がわかつて來た。いろいろたぐり寄せて聞いた話の中には、此間つれられて行つた男が居た。

『貴郎、怒つて？』

男が默つて酒を飲んで居るのを見て、女は心配さうに言つた。

『大丈夫だよ。そんなことで怒りやしないよ。』

不思議にも其夜は男には樂しさうに面白さうに見えた。三味線が頻りに鳴つた。女の輕い聲と男の重い聲とが雜り合つて四邊に聞えた。女中はいつになく賑かなのを見て『まァめづらしいわねえ。何うかしたのねえ。今夜は？』などゝ言つた。

『私の幸福になることなら貴郎は喜んで聞いて下さるつて言つたわね……今でもさう？』
『今ぢやもうそんなことは誓はない。』
『さう？　ぢや矢張うそだつたのねえ。』
彈き懸けた三味線をやめて、思ひ出したやうにして、女はこんなことを言つた。男は女の顏を見て居た。
『ぢや……あの……』
言ひかけて、男の顏を見て、
『言はうと思つたけど……よすわ。あんな顏をして居るんだもの。』
『ぢや何うすれば好いんだ。』
『本當に聞いて下さらないんだもの。』
『聞いてるよ。』
『本當？』
『本當に聞いてるぢやないか。』
女は躊躇したやうな風を見せて、『でも、怒るから厭よ。』
『怒るか怒らないか、言つて見ないぢや解らない。』

して默つて居た。
女の態度に何かかくれた意味があるといふことは男にも知れて居た。『そんなに思はせ振をしないでも好いぢやないか。』男はつとめて心を平らかにして、絶えず笑顔を見せて、其處から女の祕密を聞かうとした。
『そんな……祕密なんて言ふことはありやしないわ。今更、貴郎にそんなことをする女ぢやないけれど……』
『ぢや、隱さずに、本當の心を話して聞かせたつて好いぢやないか。』
『え、話してよ。』少し間を置いて『でも、今日は厭……』
『何故だえ？』
『でも、何故か今日は日がわるいやうな氣がしますもの……また其中話すわ……そんなに無理に話せツて言つたッて、女にはそれは出來ないわ。女ツて言ふものは、心の狹いものよ。貴郎。』
こんなことを言ふかと思ふと『私、默つて何處かに行つて了つたら、貴郎屹度怒るわねえ。』などゝ言つた。ある日逢つた時には『貴郎といふ人に何故私は逢つたんでせうねえ。貴郎さへ居なければ好いのに……。貴郎が居るのが口惜しい。』
かう言つて、男の膝に顔を當てたりした。

『さう、貴郎には解らないの？……でも私が貴郎を思つてゐることは確かね。それだけは確かだわねえ。』

『それも何うだか解らない。』

『でも、私はちやんと思つて居ますもの……さう思つて言る本人が言ふんだからたしかだわ。』かう言つて、『思つて居るやうには貴郎には見えなくつて？』

『見えることもあるが、見えないこともあるねえ。』

『さう？』

考へるやうな顔色をして『ぢや、私、素人になつて何處かに行つて了つても好くつて？……私、もう、稼業をしてゐるのがつくづく厭なんですもの。』

『行かれちや困るけれど、強つて行くと言ふのなら、爲方がないねえ。いくら思つてゐたつて僕の體ぢやないんだから。』

『さう、貴郎の體ぢやなくつて？』

急に調子を高くして『いくら思つたッて、爲方がないわねえ。奥さんになれるんぢやなし……。』

かう言つて女は突伏して了つた。

それは何うしてか話の調子が裏へ裏へと外れて行くやうな日であつた。後には女は蒼い眞面目な顔を

三十

ある日こんな話をした。

『私、素人になつても好い？』

『誰れかして呉れる人があるのかえ。』

『それはないこともないわ。』

『ぢや、して貰つたら好いぢやないか。』

男がかう言ふと、女は笑を眼元に湛へて、ぢつと男の顔を見て、

『本當？』

男が輕く點頭くのを見て、

『本當に好いの？』

繰返して言つて『ぢやさうしてよ。本當になつてよ。』

ある時はまた次のやうなことも言つた。

『貴郎、本當に私のことを思つて居て下さるわねえ。』

『何うだか解らない。』

派手な眞似をした女は、ぢき其土地に居られなくなつて住替へをした。

女は依然として稼業を怠けて居た。何ぞと言つては、用事をつけて、父母の家に出かけて行つた。丸髷に結つて居ることが多かつた。それを男は不思議にして『何うしたんだえ、此頃は？』かう聞かれることも度々であつた。

『だつて、つくづくお座敷に行くのが厭なんですもの……、此間もある處に行つてゐたら、不意にいやになつて、何うしてもゐるのが厭になつて、お上さんに小言を言はれても何でも歸つて來て了つたのよ。それに何だか此ごろはイヤに氣分がふさぐのよ。』かう言つて、女は夜一夜眠られずに考へて居たことなぞを話した。かうした社會に居るのがつくづく厭になつたことやら、手紙を出して昔のことを考へたことやら、意味もなしに悲しくなることやら、いろいろなことを打明けて、

『もう、私、素人になるの。』

こんなことを言つては笑つた。手がらもわざとじみな目立たないやうなのを選び、髷も餘り大きくないやうなのを買つて來て、成たけ素人に見えるやうな髮の結ひ方をした。『よく似合ふでせう？　これなら、外を歩いても、誰も藝者だと思ふ人はないわねえ。』かう言つて、低く結つた丸髷を男に見せた。

も熱が覺めて行つた。早く解決をつけたい時には、わざと烈しい情を寄せて見ることなどもあつた。長く引張らうと思ふ男には、つとめて情を惜しむやうに、心を見せぬやうにした。

女は自分の住んで居る社會の狀態やら物語やらに熟して居た。榮えた老舗が一朝にして滅びて行つたのをも見た。若い男が病を得て死んで行くのをも見た。ある女に打込んだ男は、詐欺取財といふ罪名の許に、餓に迫る妻子を置いて、暗い處に行くやうな末路に邂逅した。ある男は、會社の金を多分に費ひ込んで、その穴を埋めたいばかりに、經驗もない相場に手を出して、終には何うにも彼うにもならなくなつて、母親と妻とに遺書を殘して、姿を何處へか躱して了つた。其男に關係した女は交情の好い友達だつたので、女はよく其席に取卷に聘ばれて行つた。唄の上手な、洒落をよく言ふ、頭の禿げた面白い人であつた。金を湯水のやうに遣つて、五人も六人も藝者を聘んで夜もすがら騷いだ。それと知れた時には、誰も彼も吃驚しないものはなかつた。遺書を手にして、其女は茫然として居た。二三日して刑事が遣つて來て調べたり何かした。『本當にあの人は死んだかも知れないわ……一番後に逢つた時にも變なことを言ふと思つたのよ』其女はかう言つて、毎朝出て來る新聞の三面記事を注意して讀んで居た。

女の方にもさうした悲劇は尠くなかつた。肺病を客から受けて海岸に二月ほど行つて、間もなく死んで了つたものもあつた。まだ十六にもならないお酌さんで、眼がつぶれるやうな烈しい病氣に罹つて居るのを見た時には、女も思はずゾッとした。思ひのまゝにならない話が此處にもあつた。男に打込んで、

てから、その男は何處かの綺麗な藝者をつれて、女の出てゐる隣の座敷に來て騷いで居た。しかし女は別に何とも思はなかつた。

女はふと思ひついて、多くの手紙の中を彼方此方とさがし出した。其處には女の爲めに忘れられない手紙が一通ある筈である。何うしたのか、それが見當らない。女は抽斗を殘らず拔いて見た。その手紙は手紙と手紙との間にもみくちやになつて挾つて居た。

讀んで居る中、女の眼には涙が滲み出して來た。町の裏通りの綺麗な二階屋に女は其時圍はれて居た。裏には畠を隔てゝ汽車の線路が見えて居た。その田舍の富豪の若旦那は、其處によく遣つて來た。女中が一人つけてあるばかりで、さびしい退屈な日が多かつた。意氣な中折帽を冠つて、インバネスを着てズッと裏から入つて來た時などは、何とも言へず嬉しかつた。

結ひなづけと結婚しなければならなくなつて、其の若旦那とは、泣きの涙で別れて來た。女は其時分のことを考へて茫然して居た。

手紙を彼方此方と讀返して居たが、軈て女は丁寧にそれを元のやうに藏つて抽斗を閉めて長大息をついた。自分ながらうかうかと通つて來た。惚れたとか何とか言つても、自分の方から熱情を注いで行つたやうなことは今までにも餘りなかつた。男の情を手繰り寄せて、頂上まで昇らせると、其處からいつ

い顔をしてさへ居ればそれで好いものだ。かう姐さんは言つた。

女は別れて來た人達のことを時々頭に描いて見た。さういふ人達の記念は、指環だの着物だのになつて殘つて居た。それでも女は手紙だけは丁寧に保存して取つて置いた。ある日、簞笥を開けると、其處から種々な人の種々な手紙が出て來た。

幾束かの手紙は別々にわけて絹の紐で縛つてあつた。いつもならば心にも留めないで藏つて了ふのが、常であつたが、其日は何うした加減か、心がそつちの方に向いて居た。女は絹の紐を解いてそれをひろげて見た。

其處にはいろいろな心が燃えたり悶えたりして居た。もう一度是非逢つて吳れと言ふのを、何うしても逢はずに別れた男の手紙が一番多かつた。染々するやうな文句がその中に書いてあつた。こんなに烈しく男から思はれたことがあるかと思つて、女は暫しはそれに讀耽つた。

喧嘩して別れた男の手紙は、細い綺麗な手跡で書いてあつた。この男には女もかなり心を打込んで居た。無理算段をして逢つたことも一度や二度ではなかつた。しかし今考へて見ると、惚れ合つて居たといふよりも、寧ろあたりの騷ぎが大きかつたので、いくらかは見得もあつて、惚れなければならないやうなことになつて行つたのであつた。その證據には、たとへ喧嘩をして別れたとはいへ、涙一つこぼさず、一月も經つともう其の男のことをはすつかり忘れて居た。そればかりではなかつた。半年ほど經つ

夜遲くかゝつて來たお座敷に平氣で出て行つた自分が不思議のやうにも考へられた。

夜、蒲團の中で、男の心などゝいふことを考へて居る時は、ことにさびしかつた。信用の出來ない賴りにならないことばかりで、甘い言葉、優しい言葉、堅く誓つた言葉、それが皆な氷のやうに溶けて流れて、跡も形もなくなつて行くやうなことが多い。若い頃から評判で、ダイアの三つ四つも持つて居た姐さんさへあの人ならばと心を注いで從いて行つた男の無情を今日もつく〴〵滴して居たことなどをも思ひ出した。

今までに遣つて來たことも繰返して考へられた。普通の人が聞いたら吃驚するやうなことを平氣でやつて來た。『だツて稼業だから爲方がないわ。』心の咎めるやうなことに邂逅すと、いつでもかう自分で辯護した。

いつの間に覺えるともなく、男に對する手管といふやうなものを覺えて居た。男はぢき熱して來た。其時女はわざと離れたやうな形をして見せた。すると男は財產も名譽も生命も惜しくないといふやうに打込んで來るのが例だ。

女の知つて居るある姐さんは、『まだお前さん、そんなことを考へてゐるのかねえ。……そんなことではまだ駄目よ。』かう言つていろいろなことを敎へて吳れた。

引張れるものは引張れる處まで引張らなければいけない。別れるのは何でもない。別れる時には、悲し

日頃贔屓にして呉れるある女將からは、『何したのさ？　お前さん。稼業だけは怠けずにしなくつてはいけませんよ。』かう言れたのももう度々であつた。其度毎に、『本當にお上さん、今月からは稼ぐわ……私だつて困るんですけれど……何だか氣分が悪かつたり、いろんなことがあるんですもの。』しかしその今月からが二月にも三月にもなつても、女は矢張怠け勝に日を送つて居た。

お稽古にも行つたり行かなかつたりして居た。折角始めた常盤津の師匠の稽古にも一月ほど行つて止して了つた。かと思ふと、これから一生懸命になつて、東京中のあらゆる名高い師匠の許に通つて專心藝を磨かうかなど〻思ふこともあつた。淘宮の上手なお婆さんが赤坂にゐるのを、わざわざ尋ねて行つて、その身の上を見て貰つたことなどもあつた。そのお婆さんは、小綺麗な身裝をして、髮を小さい丸髷にして居た。あなたは心配するやうなことは御座いません。此十二月になれば、自然に運が向いて來ます。かう言ふかと思ふと、『矢張あなたは一生定つた夫を持つことが出來ません、』など〻言つた。

活動寫眞に入つて、夜を無駄に費して了ふことも尠くなかつた。新派劇を見て、身につまされて、家に歸つてまでも涙が出て爲方がないこともあつた。電車に乘つて、一人で遠くの寄席へも行つた。

看板借になつて居るので、家では別に何も言はなかつたが、それもで、何うかすると『そんなに遊んで居て損ぢやありませんか。今日も彼方此方から掛つて來てよ。』姐さんは笑ひながら言つた。

何も彼もつまらないといふやうな氣が絶えずして居た。稼業の厭なことにも新しく目が覺めて來た。

不思議な人生――かれはぢつと空間を見詰めて居た。

二十九

女は此頃何うかして居た。

檢番から掛つて來るお座敷も、少し氣分が惡いからとか、用事がありますからとか言つて斷ることが多かつた。夜遲く二階で本など讀んで居ると、隣の若い藝者達が下駄を鳴らして元氣よく出かけて行くのが手に取るやうに聞えた。

『何うしたの？』

其處等で顏を見合せる友達は、皆なかう言つて不思議にした。

『本當に何うしたの？　此頃ちつとも顏を見せないぢやありませんか。……それやあなたなんぞ商賣しなくつても好いんでせうけれど……』かねて行きつけて居る待合の女中は、輕い調子で女の顏を見い見い言つた。

昨年あたりは毎日四座敷や五座敷はかゝしたことがなかつた。春のお約束の數なども一生懸命に彼方此方と賴み廻つて、檢番にかけてある札の順番を競つて見たことなどもある。何んな陰氣なお座敷にも、元氣の好い明るい顏をして居るのが土地の評判になつて『あの妓は如才ない』と言はれて居た。

は女がかれの常に往來する處にいまだに出て居て、時々かれと顔を合せては平氣で笑つて居た。

ある女は長い間心を押へるやうに押へるやうにとして居た。何にも言はない方ではあるが、おとなしい、しんみりした、よく涙を滴す女であつた。讀んだ小說の人物を實際にある人の樣にして話した。夢の話をするのが好きで、自分が金魚になつて泳いで居た話などをして聞かせた。その女は男の方の戀の覺める時分になつて、始めて漲るやうな心を注いで來た。

後には、其女はよく酒を飮んだ。默つて蒼い顏をして、さす盃を幾杯でも見事に受けて飮んだ。裾を引いたまゝ、足袋跣足で庭の敷石の上などを平氣で步いた。

かれはいつの間にか今の女のことを考へて居た。此間逢つた時、『女にも忘れられないやうな男が幾人もあるだらうねえ。丁度珠數の球のやうなもんだねえ。小さい球を繫いで居る親玉のやうなのが五つや六つはあるだらう?』こんなことをつ言たことをかれは思ひ出して居た。女は其時笑つて種々と男のことを話して聞かせた。

ライフの中の無數の男と女との關係が不思議なやうにかれには思はれて來た。何處まで行つて盡きるのか、それが解らなかつた。逢へば戀人、離れゝば路傍の人、さういふところがあるかと思へば、切つても切つても切れずに、終には身を亡して了ふやうな烈しい強いところもあつた。それは肉體まで行かなければ解釋の出來ないやうなものであつた。

ソファの上に身を横へて居た。

長く一緒に居て、別れてから、滅多に思ひ出さないやうな女もあれば、一月ばかりの中に、互ひに心を突詰めて、思ひもかけず其處から覺めて行つたやうな女もあつた。深い關係もなく、たゞ逢つて離れて行つた女でありながら、心と心とが今だに觸れて居て、何處かで不意に邂逅したなら、すぐ燃えて行くであらうと思はれるやうなのもあつた。

旅で逢つて、二日其處に居て、それで別れて來た女は、何故かいつまでも深く頭に殘つて居た。長い年月を經た今でも、すぐはつきりと眼の前に浮んで來た。肌の白い、眼付の可愛い、やさしい口の利き方をする女であつた。『あんた、もうぼんちがあるだつしやろ。』かう言つて微かに笑つた顏は彫りつけられたやうに常に眼の前にあつた。

其女は忘れようとしても忘れられなかつた。いつか出懸けて行つて逢はう逢はうと思つて居る中に、年月が經つて行つた。今でもかれは、何うかすると、手蔓を求めて、其處から其處へと探して行つて逢つて見たいと思つて居る。

烈しい戀の爲方をする女もあつた。其女とはよく喧嘩をした。始めはその口說の面白いのに引かれて居たが、後にはそれが煩はしくなつて來た。あれつきりにならうとは思ひもかけないやうな別れ方をして別れて來た。不思議なのは、其後電話もかけて來なければ、手紙も寄越さないことだ。更に不思議なの

その旅館も二人が曾つて行つて泊つたことのある旅館である。手を取つて若い男女が闇に死に赴いた路は、二人が春の日ののどかな光を浴びながら並んで歩いて行つた路である。二人が行つた時には見晴しの好い崖の上に、如才ない婆さんの出した茶店があつて、そこで繪葉書だの貝類だのを買つた。土産にする爲の鰒をも其處で購めた。

『あの崖から飛込んだのねえ、屹度。』

二人はいつまでも其話をした。

『私達も死ぬ時は、あそこで死にませうね。』暫く經つと、女はかう言つて笑つた。その時には二人はもう大分其話から離れて來て居た。

夜になつてから、二人は果物を取寄せた。朱塗の盆には五箇ほどの梨の實と鋭利な小刀とが載せてあつた。寢る前に跡を片附けに來た女中は、果物がまだ殘つてゐるのを見て、氣をきかせて、そのまゝその盆を其處に置いて行かうとした。と、女は後から慌てゝ呼留めて『姐さん、これ持つて行つて頂戴……刄物なんて置いて行つては厭よ。』

二十八

かれはこれまでの自分のライフの上に濃い淡い影を投げて行つた女の數々を思ひ浮べて居た。かれは

にも見えた。その同じ無關心な波に漂はされた藻のやうな女の長い髮、それがまたかれの頭を掠めて行つた。

かれの前には二人の戀の行先が明かに展げられて見えた。女は時々ヒステリックな心の狀態に身を置くことがあつた。さうした場合に言つた言葉が、今かれの胸に生きたものとして蘇つて來た。『私は一人で死ぬのは厭よ。』女はかうしたことをよく言つた。

一時間ほどして歸つて來た男は、女がさびしさうにして緣側に立つて居るのを見た。『常香さんが眼について爲方がないのよ。』神經の昂つたやうな蒼い顏をして女はこんなことを言つて居た。

『心中する時には、男の方から言ひ出すのね、屹度。私、屹度さうだと思ふわ。男の身が詰つて、何うにも彼うにも行かなくなるんだわねえ。女は男から言はれると、いやだとは言へなくなつて死ぬ氣になるんだわねえ。女は可哀相ねえ。』

女も矢張其身を其場合に置いて居た。

『ほら、御覽なさい、まだこんなに動悸が打つて居るのよ。』かう言つて女は男の手を執つて胸に當てさせた。

心臟の皷動は高く響いて居た。

情死したその海岸を、かねて二人が知つてゐるだけそれだけ、その印象が強く胸に來たのであつた。

岩陰の浪になぶられて漂つた長い髪、それが男の心にも矢張長い間絡みついて居た。女は午飯の時にも、『何んだか考へると、御飯も食べたくないわ。』などゝ言つて居た。

晝過には、男は矢張一人で海岸へと散歩に出かけて行つた。松の間から見える海は、今日は殊に際立つて碧く見える。其處には離れた座敷があつて、今來たらしい若い男女が、縁側に並んで樂しさうに話して居る。男はその傍を通つて、細い路を海岸へと出た。かれは行き詰つて女と情死した男のことを考へて居た。

情死の話は二人の間にいつまでもついて廻つて居た。義理やら人情やらの爲めに、其處まで陷つた心持が羨ましいやうな氣もすれば、恐ろしい樣な氣もする。普通の心の狀態では知ることの出來ない其境に行つて見たい樣な氣もした。

Strong as Death 肉體の滅びた後までも離れまいとしつかり體を結び付けた强い執著、其處には普通の人間の知ることの出來ない不可思議な世界が開けて居た。『いかに互ひに相愛したと言つても、いかに互に離れられないと云つても、其處まで行かなければ、互ひの戀の終結ではない。』男はかう思つて長い間海を見て居た。

海は波を寄せてはかへし、寄せてはかへして居た。そんなことは何うでも構はないと言つて居るやう

の心持などがそれと明かに想像されるやうな氣がした。岩陰の波に漂つた長い髪――それが二人の胸に同じやうな感動を與へた。

『お師匠さんが何んなに吃驚したでせうと思つて……』

かう女が言つたのは、それから暫く經つてからのことであつた。

情死した男の寫眞を見て『好い男ねえ。』と言つて、やがて女は微かに笑つた。其處まで深く雙方から押詰めて行つた心、それを二人は長い間默つて考へて居た。

情死、それは、大抵男の方から誘つて行くものだ。暫くすると、二人はこんなことを話して居た。『矢張、男が弱かつたのねえ、やさしかつたのねえ、屹度。』女の眼には同情の涙が滲み出して居た。

それは尠なからず女の心を動かしたやうに見えた。何ぞと言つては、すぐ話を其方に持つて行つた。最終に女に逢つた時の話などもして聞かせた。其時、女は髪を銀杏返にして、鶉お召の羽織を著て居たが、お師匠さんに何か言はれたと見えて、眼の縁を赤くして居た。お稽古が濟んで歸らうとすると、『まア宜しいぢや御座いませんか、』と言つて、茶を淹れて菓子など出して呉れた。女の出て居るところの話などをして、三十分ほど其處に坐つて居た。歸る時にはめづらしく立つて送つて來て呉れた。『孝行で、溫順しいので評判な娘さんでしたのにねえ。』かう言つて考へるやうにして『でも、羨しいわ……。好きな男と一緒に死んだんだから……。辛い思ひをして生きて居たッてつまらない。』

んな氣に……』

その新聞には藝者と若い男とがある海岸で心中したことが、詳しく書いてあつた。二人は女の伊達卷と扱帶とをつないでぐるぐる體を卷いて居た。男の袂から出た名刺で、男の素生も段々知れて來た。女はある處でかなり賣れた藝者である。

菊の家常香――年十九。

その藝者を女はかねてから知つて居た。年を取つた長唄のお師匠さんの一人娘で、長火鉢の側で時々口を利いたことなどもある。沈んだ氣質で、何方かと言へば顏はさびしい方であつた。つい半月ほど前にも逢つたと女は話した。

情死した人達は、海岸の旅館に五日ほど一緒に來て居て、其の日は散歩に出ると言つて出懸けたまゝ歸つて來なかつた。死體を發見したのは、それから三日ほど經つてからで、其處の岩の陰で鰒を捕つて居た漁師は、波になぶられて居る女の長い髮を見て、吃驚して、それから大騷ぎになつた。

『何んなでしたらうねえ。』

男の新聞を讀み終るのを待つて、かう言つた女の顏には、心の動悸が歴々と見えて居た。

旅館から出て行く時の心持や、暗い闇の中を辿つて歩いて行く心持や、帶を結んで體に卷きつけた時

なく相逢つて、言葉を交して、それからかう長く續いて來た間柄が不思議だといふやうな話をした。女は男の青年時代の寫眞を男から貰つて持つて居た。その話などもした。『あなたが十二三の時分ね、私の產れたのは？』かう言つて、女は考へ深い日付をした。

何うした加減か、女は此頃染々した話をすることが好きになつて居た。夢中で過して來た今迄の生活が今になつて振返られるといふ風にも見えた。

『隨分、私ものんきだつたわねえ。』

話の前後の關係もなく、女は不意にこんなことを言つたりなどした。

午後には、日影が松の細い葉を漉して、暖かに緣側にさし込んで來た。男が散步から歸つて來ると、女は日の光を背に浴びながら、緣側の柱に身を凭せて、喪心した人のやうに海を見て居た。

海に沿つた道には、秋の機動演習に出た兵隊達がぞろぞろと通つて行つた。列を離れて、井戶を其處等の家に求めて、渴いた口を釣瓶に當てゝゐる兵士などもある。松原の中には、をりをり演習の銃聲がけたゝましく鳴り響いた。

あくる朝、女中は新聞を枕元に置いて行つた。男が顏を洗つて歸つて來ると、寢卷のまゝで、緣側の處で、それをひろげて見て居た女は、不意に、『まァ、お師匠さんの娘が心中した……』

胸の動悸を押へることが出來ないといふやうに、走り讀みに急いで讀んで、『まァ、ねえ、何うしてそ

旅館の前にある大きなふき井からは、綺麗な水が湧き出して居た。朝早く其處で二人は戲談を言ひながら顏を洗つたことがあつた。男は其時分と今とを較べて歩いて見ないわけに行かなかつた。まだ其頃は何とも思つて居なかつた。好奇心の方が多かつた。女が居ようが居まいが、そんなとは餘り氣にならなかつた。

其時女ははしやいで唄をうたつたり三味線を彈いたりした。裾を端折つて、遠淺の海の中に入つて、さも面白さうにして貝を拾つた。今は其時とは丸で氣分が違つて居た。女は戸外に出て見ようともしなかつた。二人は一間に籠つて靜かな物語に耽つた。

『何うだ、其處等を歩いて見ようぢやないか。』

かう男から誘はれても、

『よしませうよ。』

女はいつもかう言つて、さびしさうにして笑つた。其時から見ると、女は顏も體も著しく痩せて居た。世の中の苦勞を知らない時期は既に通過した。海も、松原も、遠淺も、女にはめづらしくなかつた。波の音は遠雷のやうに響いて來た。障子を明けると、松の大きな幹が其處に根を張つて居て、海が眩ゆく日に光つて見えた。

二人の間には、過去を追憶するといふやうな話が多かつた。初めて逢つた時の話なども出た。ゆくり

一種不思議な心持に男はなつて居た。昔の物語の挿畫にでもありさうな氣がして、かれは靜かに女の後に跟いて行つた。廊下の板の音が踏む毎に微かに鳴つた。

廊下を曲つたところで、女は慌てゝ蠟燭の火を袖に蔽つた。夜風が俄かに何處からともなく吹いて來た。

やがて厠から出て來た男は、今度は女の爲めに代つて蠟燭を持つてやつた。蠟燭はをり〳〵夜風に消えさうになつた。かれも矢張袖でそれを蔽つて居た。

『險呑ねえ。』

やがて其處から出て來た女はかう言つて、男の手から蠟燭を取つた。その灯影に映つた女の顏は際立つて白く見えた。

月はもう高くなつて居た。地上に沈んだ夜霧は依然として元のまゝであつた。二人は廊下を默つて歩いて行つた。

階段の處で、『まア、よかつた。消えないで……』かう言つて女は蔽つた袖を蠟燭から離した。

海岸の旅館には、その以前にも一度行つたことがある。旅館の女中は、二人の顏を知つて居て、松の林の中にある一番綺麗な室へと案内した。

りなく不意に開けて其處から新しい離れ難ない羈絆が出來て來たやうに思はれた。それは女の話やら態度やらで解つた。

女は今まで話さなかつた話を打明けてするやうになつて來た。『此頃、お座敷に出るのが何だか厭で爲方がない。』こんなことを言つて笑つて見せた。

月が遲く出た。『まア、綺麗なお月さんが出ましたよ。』女はかう言つて緣側に立つて居た。間もなく男も起つて其處へ出て行つた。並んだ二人の影は、長い間緣側から壁に黑く映つて居た。

夜霧は白く地上に沈んで見えた。夜汽車が白い烟を立てゝ行くのが夜目にもそれと明かに見える。海もその向うに展けられて見えるやうにさへ思はれた。

夜中に男は厠に起きた。『私も一緒に行くわ。』かう言つて、女は枕元に置いてあつた蠟燭にマッチを摩つた。

厠はかなり遠かつた。階段を下りて、風呂場の傍を通つて、長い廊下をずつと向うに突當るやうな處にあつた。

派手な長襦袢を著て、裸蠟燭を持つて、素足で女は先に立つた。しんとした長い廊下、一方は崖で、一方は廣い野になつて居た。

女の持つてゐる蠟燭は絕えず夜風にチラチラと瞬いた。

『かうして歩けば、あなたの奥樣としか見えないわね。』女はかう言つて、笑ひながら歩いた。その時のことを男は思ひ出した。

『さう？　まだ忘れずに居るの？』

女は其時お召のコウトを著て、端折つて著た著物の裾の足に纏はるのを氣にしながら歩いて居た。輕い咳嗽が絶えず出た。『大事にしなくつてはいけないぜ。』かう男は幾度も言つた。

其路には矢張元の通りに、下駄の齒入屋があつたり駄菓子を賣る婆さんの店があつたりした。秋の午後の日が二人の前にあつた。

海の見える高臺の旅館に行た時には、二人は三味線も彈かずに遲くまで話した。何うした拍子か、女の稚い時分の話が出て、それが容易に盡きやうともしなかつた。女は話を止めて幾度か溜息をついた。それは染々と昔が思ひ出されるやうな夜であつた。離れた遠くの室に、客が一組あるばかりで、あとはひつそりとして居た。庭にある瓦斯燈がさびしさうに闇の中に光つて見えた。

『もう夜風は寒いわね。』

かう言つて女は障子を閉めたりなどした。雨のやうに繁く聞える蟲の音を時々二人は默つて聞いた。

男は女の心の段々此方に寄つて來るのを此頃それとなく感じた。今迄開けなかつた心の何處かがゆく

を唄つて聞かせる女の聲は低かつた。女は時々三味線の手を止めて『本當に歌の通りね。私、何うかすると、家に居ても三味線が彈きたくなつて、一人で彈いて居ることなどがあつてよ……不思議ねえ、矢張身につまされるんだわねえ。悲しくなつて、涙が出ることなどもあるわ。』かう言つて女は靜かに笑つて見せた。やさしい心と歌曲と三味線の音と、それにしめやかに降る絲のやうな雨と、それが二人の柔かな心に靜かな濃い影を織り込んで行つた。

時には二人はわざと車を捨てゝ、場末の町を歩いて行くことなどもあつた。乾物屋、八百屋、肴屋、其處には髮を箒のやうにした上さんが、胸をはだけて、子供に乳を飲ませて居たりなどした。『あんなお上さんを見ても、何だか羨しいやうな氣がしてよ……早く人の奥樣になりたい。』歩きながら、女はこんなことを言つた。町から裏通に入ると、汚い溝があつたり、大きな塀を取廻した邸があつたりした。田の向うに見える小さい工場の烟突からは、薄い煙が晴れた秋の空にくつきりと見えて、機械の響が手に取るやうに聞えて來た。

『あの時は嬉しかつた。』

男はかう言つて其時の話をした。それは春の初であつた。女はひどい風邪を惹いて長い間床に就いて居た。それが漸く治つて、久し振で逢つた時、女は無造作に髮を櫛卷に丸めて、何う見ても素人としか見えないやうな風をして居た。二人は其時もこの裏道を並んで行つた。いかにも二人は釣合つて見えた。

旅館が常に客を待つて居た。

二人はさうした旅館によく出かけて行つた。女中達はパナマの帽子を冠つた男と絽縮緬の羽織を着た女とを、いつも離れた一間へと導いた。

滅多に土地の女を聘ぶやうなこともなければ、深酒をして騒ぐやうなこともなかつた。女中が行つて見ると、いつも靜かに何か話し合つて居ることが多かつた。『姐さん、サイダを頂戴な、』女はこんなことを言つた。

秋草の見事に咲いた庭を前にして靜かに半日を過した時には、秋雨が人の心を濡すやうに蕭々と降つて居た。其時何處か遠くで歌澤か何かを爪彈で彈いてゐるのを聞いて、女は急に、『何か彈きませうか。』かう言つて三味線を取寄せて、樂しさうな顏付をして、お得意の端唄をしめやかに彈いた……さういふ時には、柔かい砂にじつと染み込んで行くやうな、一種濕ひを持つたなつかしさが二人の心に歌曲のやうになつて通つて行つた。男は胸の痛くなる樣な微かな悲哀のメロヂーを其身に感ぜずには居られなかつた。

昔から傳つて來た歌曲の悲哀、其處には遣瀨ない思ひだの、あきらめてもあきらめられない心だの、言つても盡きない愚痴だの、別れて行く戀の悲みだのが小さい星のやうになつて殘つて光つて居た。それ

女中達の居る處は、丁度その眞中になつてゐて、其處にかけてある電鈴は、鳴つただけで、其室の番號が知れるやうにしかけてあつた。女中は、長い廊下を通つて、階段を上つて、入口の戶の鍵を外して、そして客をそのかけ離れた室へと案內して行つた。

風呂場は何處の家でも綺麗に廣くつくられてあつた。三和土になつて居るところもあれば、贅澤な檜木で流しを張つて置くところもあつた。板の間には、白粉の匂ひのする大きな鏡臺が置かれてあつて、その鏡には絕えず綺麗な女の顏が映つた。越後者らしい三助は、湯の加減を見たり、客の脊中を流したりした。

川に臨んだ家の月の夜は丁度繪のやうであつた。對岸の家々の灯の影は長く水に落ちてチラチラして居た。銀のやうな月の光は岸に繫つた樹立の葉を篩して、溶々と流れる水に美しく碎けて見えた。三味線の意氣な音締に交つて、女の笑ふ聲が靜かに縺れて聞えた。

たぷたぷと寄せて來る水の音を、夜中聞いて居るといふやうな水に近い室もあつた。岸に近く漕いで行く船は、をりをり茶湯臺を眞中にして、女に三味線を彈かせて、小聲で唄をうたつて居る客を樹立のしげみに見ることなどもあつた。

靜かな處、都會の響の聞えないところ、ちよつと世を離れた心持になることの出來るやうなところ、さういふ處を選んで、人々は出かけて行つた。都から二時間で行ける海岸の停車場、其處にもさうした

二十七

町を離れて、瀟洒な旅館がところどころにあつた。樹立の中から二階の欄干の見える家では、奥に瀧が落ちて居て、何だか山にでも來たやうに思はれた。崖に凭るやうにつくられてある大きな家からは、汽車の通る野を隔てゝ、遙かに晴れた海が眺められた。

中には茶室がゝつた意氣な小さな板葺の家を廣い庭の彼方此方につくつて置く家などもあつた。綺麗に打水をした敷石を傳つて來る女の後齒の下駄の音は艶に聞えた。

人達はゴム輪の車を輾らせたり、自動車のけたゝましい音を立てたりして、さうした旅館へと出掛けて行つた。其處に行く路には、場末の暗い町があつたり、河に沿つた長いさびしい土手があつたりした。明るい車の灯は更けた夜の闇を破つて威勢よく光つた。

其處に居る女中達は、多くは意氣な銀杏返に結つて、お召の前垂をして、翡翠の簪などを挿して居た。

『いらつしやいまし――』かう言つて賑かに客を迎へた。

靜かに世をかけ離れたといふやうな室が多かつた。四疊半、六疊、三疊、茶がけの幅物の下には、その節毎の草花などがあつさりと生けてあつた。

海の見える高臺の旅館には、屋根のある長い廊下が此方から彼方へと傳つて行くやうに出來て居た。

『十八位だつた。』
『名は何つて言ふの？』
『好いぢやありませんか、そんなことは聞かんでも……』
『好いぢやないか、教へたつて。』かう言つて、『だから嫌ひサ、男ツて言ふものは……』
女はそれが氣になると言ふやうに、幾度となくその女の名を聞かうとした。後には、聞かずには置かないといふやうな氣勢をすら示して來た。『友子？　いゝわ、今度あつちの人に逢つたら聞いて置くわ……あなたも隨分ねえ、そんな眞似をしておいて、それで別れるなんて、人をいぢめて。』
『何方がいぢめられたんだか解りやしない。』
『好いわ、さういふ積なら。』
かう言つて、女は男の膝のところをぴしやりと打つた。
溢るゝやうな女の愛情、それが今度は男の方へと強く強く壓迫して來た。『あなた――』かう言ふ言葉は絶えず男の體を動搖させた。腕と髮と唇と、それにたはいなく打勝たれて行く佗しさを男は感じた。
『別れるなんて氣の強いことを仰有い。ちやんと知つてますよ。私から遁れることの出來るあなたですか。』かう女が言つて居るやうに男には見えた。

銀杏返しに結つた髮が、長い間暗い夜の闇の中に見えて居た。

再び身を起して、座敷に入つて來た女の眼は赤かつた。女は再び手巾を手に持つて居た。

崩れるやうに其處に坐つて、

『私、別れても好いわ。』男の顏を見て、

『別れませうね？』

『ウム、別れよう、本當に別れよう。』

言葉とは正反對に、打解けた氣分が二人の間にあつた。『厭よ、あなた。』男が女の手巾を取らうとすると、かう言つて女はそれを振放つた。やさしく睨んだ眼付には、男の心を搔きむしらずには置かないといふやうな一種の表情があつた。

二人はやがて以前の二人であつた。女の居ない間の苦悶——決して口には上すまいと思つた苦悶を男はいつか女に話して居た。下駄と傘とを終夜考へて居た話などもした。

『どんな女？』

それを話すと、女はすぐかう言つて聞いた。

『綺麗の女だつた。』

『幾歲位？』

それは色彩の複雑した繪卷物であつた。晴れた日もあれば、曇つた夜もある。時雨の通つて行くところもあれば、小春日ののどかにさして居るところもある。野が見えたり、川が見えたり、賑かな町の通りが見えたりする。殆ど破れやうとして僅かにつゞいて居るところなどもある。

丁度ライフが續いて行く樣に、矢張二人の繪卷物は、何處までも續いて行かなければならなかつた。氣が附くと、女は泣いて居た。

男はそれでもまだ默つて居た。沈默——そこから互ひの理解が生れて來た。居なかつた間の男の熱情は、やがて漲るやうに女の方へ灑がれて行つた。

濕つた女の心は、柔かな海綿のやうであつた。男の嫉妬も不滿もいつかそれに吸はれて行つて了つた。反動から起つて來るやさしい氣分を男は總身に覺えた。

別れようと言ひ出した自分が却つて別れることの出來ない身であることをかれは深く自覺した。

女は長い間眼を半巾で押へて居た。男が身を起したのをもわざと知らないやうな風をして居た。やがてふいと立つて、裾を曳いたまゝ、欄干のところへ歩いて行つた。半巾を帶の間に挿んだのが此方からもそれと見えた。で、稍暫く電燈の光線の廣がつた中に女はすらりとしたその後姿を見せて居たが、やがて靜かに欄干に身を凭せかけて、組合せた手の上に額を載せた。

いて出したいと思つたんだけども、何うしても書くやうな間がなかつたのですもの。それに、私は手紙など上げなくたツて、貴郎がそんなことを考へて居るとは思はなかつたわ。貴郎は何うしても私を信用して下さらないのね？』

口惜しさうな表情をして、

『別れたいなら別れて上げるわ？』

かうした幕をこれまでにも二人は幾度打つたか知れなかつた。其處に行つて、二人はいつも突當つた。男に取つては、それは暗い佗しい壁であつた。それから先には一歩も出ることの出來ないやうな厚い厚い壁であつた。

男は默つて居た。

繰返しても繰返しても爲方がないといふやうなことを男は考へて居た。商賣をやめさせて――いつも考へは其處まで進んで行つた。商賣をやめさせるといふことは親讓りの財産のあるかれに取つてはさう大して難かしいことではなかつたけれども、しかし商賣をやめさせての後は？　それから後は？　それから後は？

兩手を後頭部に組合せて、仰向けになつて、天井を見詰めたかれには、女と自分との長い關係が、一幅の繪卷物のやうになつて見えた。

默つて女の顔を見て居た。
『何かおつしやいよ。』
『だッて、僕だッて辛かつた。』
『だッて爲方がないぢやありませんか。』女はかう言つて間を置いて、『貴郎も此頃は本當に解らなくなつてね。』
いつもならば、誰がさういふ解らない男にしたとか何とか言つて、笑つて濟まして了ふのだが、今日は男は何うしてもさういふ氣分になれなかつた。かれは難かしい打ち解けない顔をして居た。
『何うせ駄目なんだ。』
暫くしてから獨り語のやうに男が言つた。
『何が駄目なの？』
かう言つたが、すぐ追ひかけて、
『何が駄目なの？　え？　仰有いよ。私の惡いところはどんなにも謝るわ。だから仰有いよ。何が駄目なの？』
『言つたッて解りやしない。』
『解らないことはないわ。私だッて、隨分いろんなことを考へて居たわ。手紙だッて、何うかして書

默つていつまでも男の顏を見て居た。

『それぢや私の行つたのがわるかつたのねえ？』

『何うせ、女には男の心は解りやしない。』

『ぢや、勘忍して下さい、私はいくらでも謝るわ。私はそんな氣で行つたんぢやないんですから。』かう言つて間を置いて『今更、貴郎にそんなことを言はれては、私は何うして好いか解らなくなるわ。これほど貴郎に世話になつて置いて、そんなことが出來ますか、私に？　それや手紙をよこさなかつたのはわるかつたわ。しかし、私は安心してたのよ。貴郎が承知して下すつたんだからと思つて安心してたのよ。』

『しかしもう澤山だ。』

『何が澤山なの？』女は口惜しさうにして、『別れるなら、それは別れても好いわ……これでも私はいろいろ貴郎のことを考へて居たのよ。ぢや……』と男の方を見て『何故、あの時好いッて言つたの？』

男の默つて居るのを見て、

『貴郎がそんな風に考へて居るなら、見物になど行きやしなかつたわ……京都なんぞ見たくもなかつたわ。』

男は何か謂はうとしたが、胸にのぼつて來る言葉が、皆な嫉妬になつたり愚痴になつたりするので、

それが男の心を曇らせた。

『もう別れやうか。』

突然男はかう言ひ出した。

その調子がいつものやうに輕くないので、女はぢつと男の顏を見た。

『何うしたの？』

『だツて、僕だツてつまらないからな。』

女は暫く默つて男の顏を見て居た。

やがて、

『貴郞、何うかしたのね？』

『もう、隨分長く一緒に居た。何うせ別れなければならないのだ。僕のやうなものに、いつまでも關係をつけて居ては、お前だツて、損だから。今が丁度好い機會だ。』

『何故そんなことを言ふの？』

『いや別に意味はないんだ。かう言ふ幕はもう飽きるほど打つて來たからね。何時まで經つたツて同じことだ。』

女は常に似ず眞面目な顏をして居た。男の言ふことが丸で思ひ懸けないといふやうな顏の表情をして、

て歸つたら好いだらう?』暫くすると、かれはこんなことを考へてゐた。

かれの冴えた頭は容易に靜まらなかつた。段々强くなつて來る雨の音に耳を傾けながら、かれは長い間下駄と傘とのことを考へて大きな眼をあいて居た。

女はスヤスヤ眠つてゐた。

二十六

旅に行つた女はやがて歸つて來た。『つい、落附いて見物して居たもんだから……え、奈良にも、宇治にも行つて見たわ。文樂には毎日のやうに行つたわ、』快活な調子で、面白かつた旅の話をして聞かせた。樂しさうな明るい女の顏を見ることは、兎に角男には嬉しかつた。男は長い間の重い壓迫から僅かに遁れ得た人のやうに晴々した顏をして居た。女の居ない間の苦悶は、男は始めは少しも顏にあらはさないやうにして居た。つとめて平氣な顏をして、客と一緒に歩いた旅の話を女から聞いて居た。

『奈良は好いわねえ。すぐ傍まで鹿が來るのねえ。可愛いものねえ。』かう言ふかと思ふと、すぐ川に臨んだ景色の好い宇治の旅舍の話をした。

流石に客については女は餘り多くを言はなかつた。むしろそれを言はないやうにして居た。しかし、その話の中には、いつもその好い男の客がついて廻つて居た。其處にも此處にもその客の姿が見えた。

かと思ふと、旅に行つた女のまぼろしが、其暗い佗しい心の中に明るく際立つて見えて居た。依然としてかれは其女の濃い情を忘れる事が出來ない人であつた。

あさましい人間の醜い心、醜い形、醜い姿、それが恐ろしいまでに歴々と見えるやうに思はれてかれは戰慄した。自分で入つて行つた暗い底は何處まで續いて行くか知れないやうな氣もした。

かれの前には震へた神經の世界が展げられてあつた。普通の人間は何とも思はずに、平氣に快活に通つて行くライフから、かれは今底の知れない恐怖と神祕とを發見して、かうして落附いて寢ては居られないやうに思はれて來た。暗い夜の一間の中にぼつつり點いて居る電燈、それがかれに大きな破壞を齎らして來はしないか？　一塊肉の如く自分の傍に横つて居る生物、それが俄然としてかれの一生にある驚くべき變化を齎らして來はしないか？……電燈は急に暗くなつたり明るくなつたりした。

水を打つたやうな夜の沈默、其處には何の物音もない。何の動搖もない。生息して居る總てのもの〻何等の音信もない。沈默……不意に電燈はぼつと消えた。

かれは俄かに氣味の惡い溫味を自分の體に覺えた。

やがてまた電燈が點いた。

サツといふ音が聞えたと思つたが、それは雨の音であるといふことがやがて解つた。『雨だ！』かうひとりで言つたかれは、もう恐ろしい夜の思ひからいくらか離れて居た。『傘も下駄もない、明日は何うし

『よく御存じねえ。』

夜中に眼を開いたかれの上には、五燭の電燈が暗くついて居た。かれは第一に烈しい渇を覺えて、手を延して、枕元の藥罐の水を飮んだ。

スヤスヤと心持好く眠入つて居る女を起さぬやうに、靜かに再び仰向に寢たかれの心は、曾て經驗したことのないほどに暗い侘しいものであつた。體が底の底に陷ちて行くやうにさへ思はれた。かれはぢつと電燈の細い赤い線を見て居た。

赤い線は丸い電球の中に影をつくつて三筋にも四筋にもなつて見えた。あたりはしんとして居た。その靜かな夜が却つてかれの心を動搖させた。

悔むといふ念、其でも言ひ足りない。憎むといふ念、それでも言ひ足りない。はかなむといふ念、それでも言ひ盡せなかつた。複雜した種々な思ひが、彼方からも此方からも襲つて來た。

昨夜聞いた其女の生立やら、境遇やら、まだ深くさうした社會の泥に染まない無邪氣な心やら、それが浮んで來るかと思ふと、一方からは男を引着ける巧みな女の心やら、それに絡み付いてひきずられて行く男の心やらが際限なく思ひ出された、一度陷つては、手も足も拔くことの出來ない泥沼——さういふことも深く考へられた。

其女は一時間ほど前に遣つて來た。室に入るや否、『君は何處かで僕を見たことがあるだらう？』かう無遠慮に男は言つた。女はぢつと男の方を見て居たが、少し考へるやうにして、

『さうね……何處かで御目にかゝつたやうですけれど……。』傍に姐さん達の居るのを見て、きまりが惡るさうに其處に小さくなつて坐つた。三味線も彈かなかつた。唄もうたはなかつた。『一つやつたら好いぢやないか？』かう言はれても『駄目よ、私なんか、』かう言つて默つて坐つて居た。

男が厠から奥の一間に戻つて來た時には、姐さん達ももう其處に居なかつた。『何だ、もう片附けるのか？』かう女中に言ふと『でももう時間過ぎよ、貴郎。』

『あゝあゝ。』

長大息をつきながら男は横に倒れた。

やがて氣が附くと、女は傍に來て坐つて居た。

『何處でお目にかゝつたの？　私？』

『此間、電車を一つ乘越したぢやないか？』

『まア、厭だ。あの時見てゐらしつたの？　隨分お人が惡いわねえ。』かう言つて賑やかに笑つて、『私、隨分、あの時はきまりがわるかつてよ、何うしやうかと思つたわ。』

『芝居に行つたんだらう？』

『おい、もつと三味線を彈け。もう少し騒がうぢやないか。』かういふ男の聲につれて、三味線はまた盛んに鳴り出した。お酌達は賑かにかつぽれを踊つた。

男にはこの騒ぎの靜まるのが堪へられない苦痛のやうに見えた。旅へ行つた女の姿が絶えずかれの頭の中にあつた。『もつと飲んで騒がうぢやないか。』かれは德利を押しつけるやうにして、女達の盃に酒をついだ。

『貴郞、今日は何うかしましたね！』

さつきからその狀態を見て居た女中は、男の顏を見い見い言つた。こんなに騒いだり飲んだりすることは、かれに取つてはこれまでについぞためしのなかつたことである。

厠へ行かうとして立上つた男の脚は、それでも流石にフラフラして居た。『危なう御座んすよ、』かう言ひながら、女中は後から跟いて行つた。

『貴郞何うかしてね？』

『何故？』

『でも、こんなことは珍らしいから。』

女中は押すやうにして、男を厠の中へ入れた。男が出て來た時には、其處に電車の中で見た女が立つて居た。

つて居た。久しく行つたことのない家の女中は、威勢よく格子戸の開いたのを耳にして、硝子障子の中から顔を半分出して見て居たが、『まァ、貴郎ですか――本當におめづらしい！』かう言いて、かれを後から押すやうにして奥の間へつれて行つた。

かれは室の中央にある茶湯臺の傍に長く身を横へた。かなり深く醉つて居るかれには、時間といふ觀念はもうなかつた。ふと、氣が附くと、いつか其處に二三人の藝妓が來て居て、何か頻りに饒舌つて居た。皆な知つて居る顔であつた。

『友子といふのが此土地に居るだらう。』不意にかれは思ひ出したやうに言つた。

夜は更けてもその一間の騷ぎは容易に止まなかつた。梧桐と松とを前にした室の障子には、女の姿や三味線の影が映つたり消えたりした。『まァ賑かねえ！』女將はかう言つて入つて來た。

女達も醉つて居た。『お女將さん！』など丶黄い聲を立て丶、裾もあらはに、其傍に踞るやうにして寄つて行くものもあつた。一人の女は、『好いわねえ、貴郎、今日は醉つても。』かう言つて、グイグイ酒を飮んだ。

姐さんのあばれるのをお酌達は傍に離れて見て居た。醉つた男の前には、紅だの、紫だの、白だの丶色彩がチラチラした。黄い塵が眼の前を舞つて通つた。

『遠出がつけてあります。』

かう其電話は素氣なく言つて切れた。

歸つて來て居りながら歸らぬ振をしてゐるのではないかといふ疑念は、兎に角これで晴れた。かれはそれで滿足しなければならなかつた。女の手紙が今日こそは來て居る!　かう思ひながら、かれはいつも家の方に歸つて行つた。

かれは其頃かなりの金を懷ろにして居た。しかし其金も女が居なくつては何の効もなかつた。金が何んなにあつても、山ほど積んであつても、女が居なくつては駄目だ。かれは女の爲めには、其財布の中のあらゆる金を捨てゝも惜しくないと思つた。生きて居る意味の對象がその女である以上、その女を失つては、かれの爲めに生存の意味の破滅と言はなければならなかつた。かれは女の爲めに家を亡ぼした人達のことなどを考へながら、電車の停留場へと歩いて行つた。

十日經つても、何等の便りを受取ることの出來なかつたかれは、もうぢつとしては居られなかつた。一週間目に受けた侮辱に懲りて、今度は向うからかけて來るまで、二度と電話口の前に立つまいと決心したかれも、今はベルを鳴らさずには居られなかつた。しかし其電話も矢張失望に終つた。女はまだ歸つて居なかつた。

日が暮れてから二時間ほど經つて、かれは停留場に近い狹い賑かな通りに其の姿を見せた。かれは醉

電話はいつも『まだ戻つて參りません、』と言つた。四日が五日になり六日になつた。女からの消息もなかつた。

家に居る時は、男は絶えず苦しさうな長大息を吐いて居た。戸外では、町の賑かなのも、人々の樂しさうなのも、電車の通るのも何も、眼にも頭にも入らないといふやうに、首を俛れてぼんやりして歩いた。顏には暗い影が歴々と見えてゐた。

人と話をしながらも、それは聞かずに、女のことをのみ思つて居て、トンチンカンな挨拶をすることなども度々あつた。大勢人の居るところでは、隅の方に小さくなつて、椅子に凭り掛つて、額に手を當てたりなどして居た。

『何うかしましたか、君？』

かういふ質問を受けたことも一度や二度ではなかつた。かれはその度每に痛い傷痍に觸られるやうな氣がした。

一週間目の午後、小さいいつもの電話室は、またかれの姿を其中に入れた。折惡しく混線した電話は、容易にその番號をさへ出さなかつた。かれは焦れに焦れて電話器の壞れるほどベルを鳴らした。漸く出た女中は知らない女で、『いつお歸りになりますかわかりません……出先のことですから、』などゝ言つた。かれは念を押す爲めに、更に其處の檢番の番號をさがして、電話をかけて見た。

すぐ分つた。

其女は發車しかけた電車によろけながら、人々に見られるのを恥かしさうに顏を赤くして、やがてかれの席の筋違ひのところに來て腰をかけた。矢張眼と眼の間の遠い女であつた。かれはその女の境遇と心持と感情とをすぐ知ることが出來た。其の停留場の附近には、かれの曾つて往來した狹斜がまたこの先には、さうした女のよく出かけて行く小芝居があつた。

かれは絕えず其女の方を見て居た。さういふ社會に入つてからまだいくらも月日を經て居ないといふことは、恥かしさうにして居るその態度で解つた。客の席に出ても、姐さんの前を憚つたり、きまつた旦那のある若い綺麗な妓の前に小さくなつたりして、三味線も碌に彈かないといふやうな女である。かれは今までにも旣にさういふ女の多くを知つて居る。もし女が東京に居たなら、一顧の價値もなかつたに相違ない。しかし其日は不思議にも其女が眼についた。

下りる停留場で、ウッカリしてゐて運轉手がもう車臺を動かさうとしてゐる頃に、其女は立上つた。女が重い戶を明けた時には、車掌の笛は鳴つて電車は動き出して居た。女は恥かしさうにしてまた元の席に戻つた。惡ずれのしない無邪氣なさまをかれはぢつと見て居た。

女の傘には赤い漆で名が書いてあつた――友子

かしい匂ひ、それを偲ぶために、かれは雨を侵して一枝折つて來て、藍の模樣の白く出てゐる一輪挿にさして、それを机の上に置いた。

うたたねなぞをして居ると、微かにそれが夢の中に匂つて來た。其處に女が居た。なつかしい匂ひを持つた女が居た。かれは苦痛と快樂との縺れ合つた思ひに心を惱ましながらからうじて日を送つて行つた。

町で見る多くの女、それも總てかれを刺戟した。藍蛇の目の傘を見てもかれの體は震へた。派手な襟、紅い綺麗な袖口、房々した髮、それが皆なかれに取つては女を思ひ出させる材料となつた。

かれはせめて女から來る繪葉書を待つて居た。『繪葉書位それはよこすわ……お土産も買つて來るわ。何かあつちから送りませうか、貴郞の好きな物？』女はかう言つて居た。しかしかれは徒らにその消息の來るのを待つ身であつた。

雨は猶續いて降つた。緣側の硝子戶から覗いて見る門の郵便箱はいつも空であつた。たまたま手紙が白く見えて居ることがあつて、雨を衝いてわざわざ行つて見ても、それは多くはつまらない用事のない手紙であつた。

一日、ある電車の停留場から藍蛇の目の傘を持つて乘つて來た女があつた。それは意氣なコートを着た髮の綺麗な十八九位の女であつた。鬢はふつくりと出て居た。何ういふ境遇の女であるかは一日見て

うしたものが、海だの、山だの、町だのと一緒に絶えずかれの想像を往つたり來たりした。つとめて輕い心持で居ようとしても、それは駄目であつた。

『兎に角、己に相談して呉れた。』其處が彼に取つての唯一の隱れ場所であつた。苦しくなると、かれはいつも其處に遁れた。はかない憐むべきかくれ場所であることを自覺しながらも、かれは其處にかくれるより他に爲方がなかつた。

かれの住んで居る都會の町、其處に女が居ない。電話をかけても居ない、訪ねて行つても居ない。さうした事實は男に受つては大きな事實であることが段々解つて來た。後にはこの事實が永久に續きはしないかとさへ疑はれた。

一日二日と經つて行つた。秋雨が蕭々と續いて降つた。かれの想像は一刻も女の傍を離れなかつた。蛇の目傘をさして、男に伴れられて東山あたりの大きな寺の石段を登つて行く女が見えたり、河に臨んだ瀟洒な料理屋の欄干に、だらしない風をして醉つた身を凭せかけて居る艷な姿が見えたりした。常に其身に與へて呉れる體質から來る快樂、それを矢張惜し氣もなく他の男に與へて居るといふことがかれには堪らなく苦しかつた。

雨の中を微かに匂つて來る木犀のかをりも、何處か女の匂ひに似て居た。一種言ふに言はれないなつ

ては上方見物は出來やしない。』かう言つて機嫌よく笑つた。男の身にしては、かう打明けて相談されるのが嬉しかつた。

でも、電話が掛かつて來て、いざ行くとなると、流石に心が躍らない譯に行かなかつた。今少し詳しく内容を聞きたいやうな氣もした。餘り早く切つて了つた電話も惜しかつた。

男は其容のことをかなり詳しく知つて居た。餘所ながら見たこともある。色の白い、丈の高い、意氣な、役者のやうな男。『女にはあゝした男が好いんだね、』こんなことをわざと言つて見たこともあつた。

かれは女の口から聞く其容の話と女の其容に對する態度とから、其の關係の如何なる程度にあるかを常に判斷して、決して恐るべき競爭者でないことを知つて居た――でも矢張安んじて女を其手に任かすことが出來なかつた。かれは二時間ほどしてから、改めて電話を女の家にかけて見た。女はもう家には居なかつた。

山に出かけた時には、男の方から女に離れて見ようとした。今度は――事情は違ふにしても――女の方から男に離れて行つた形になつた。女の行つた處には、男の本宅もあれば、女を誘惑する凡らゆる有力なものがある。かれは山に行つた時の自己の孤獨を思ひ出した。

やがてかれは東海道の長い汽車に乘つて居る女を想像する人であつた。一等室の寢臺車や、白く垂れたカァテンや、亂れた髪を直す爲に明方に女の入つて行く化粧室や、汽車の旅に疲れ切つた女の顏や、さ

をあちこちとさがして、其處にあるベンチに腰をかけた。

二十五

ある日、女から電話が掛かつて來た。

『私、四五日留守にしても好う御座んすか。』かうその電話は言つた。『また此間のやうな行違ひがあるといけないから……好う御座んすわねえ、行つても？』

『何處へ行くんだえ？』

『彼處よ。此間話して置いたでせう。』その聲は一種の笑を含んで居た。

『何時行くんだえ？』

『よければ今夜行かうと思ふの……好いわねえ。ぢき歸つて來ますよ。』

此方の返事を聞かうともせずに、『ぢや御機嫌よう。お土產を持つて來てよ。』

男が何か言はうとする中に、その電話は逸早く切れて了つた。

此間逢つた時、女は其話をして居た。『貴郞がいけないッて言へば、私、よすわ……』男の顏を見て、『でも好いでせう。私、まだ彼方は見たことがないから……大丈夫よ。そんな氣で行くんぢやないのよ。』

其時女は嬌笑を顏に湛へて居た。男は『好いとも好いとも、行つて來る方が好い。さう言ふ時でなくつ

好いだらう。頭が痛くつて爲方がないから。』

『え丶、え丶御緩り。』

かう言つて女中は出て行つた。最後の望も絶えたといふやうに、男は長大息をついて、ごろりと仰向になつて天井を見詰めた。胸につかえて居る大きな塊が絶えず體を動搖させた。かうした思ひをさせる女を憎む念は心の底から強く強く起つて來た。

男が起きた時はもうかれこれ十一時に近かつた。飯を食ふやうな氣がしなかつたが、それでもかれは箸を執つた。女將や女中の辯解を聞くのももう煩さくなつた。ゆくりなくかうした事情の下に置かれて、かうした男の未練を女達に見られるのも腹立しかつた。『好いよ、好いよ、時にはさういふ事だツてあるさ、爲方がないさ。』彼はかう言つて、其處を出かけた。『ではわかりましたらすぐお知らせしますから。』上り端まで送つて出て來た女將の言葉は、かれの頭にいつまでも殘つて居た。かれの重い足は行くともなくいつもの公園に入つて行つた。芙蓉は今が盛りで紅い白い花が晴れた午前の日影に明るく照されて居た。乳母車に子供を乘せた子守だの、若い綺麗な細君を伴れた洋服姿のハイカラな男だの、紫の袴を裾長に穿いた女學生だのが見事に咲いたその前を往つたり來たりして居た。公園の中の道には、西洋婦人を乘せた二頭立の馬車が威勢よく轆つて行つた。

噴水の傍らには子供達が多く集つて居た。かれは其處を通つて、樹の繁つてゐる人の居ない靜かな處

與へなかつた。宿醉の醒めない頭はガンガン鳴つて、起上つては、すぐまた額を枕に當てた。

雨戸を明ける音だの、裏町を通る人の氣勢だの、納豆賣の聲だのを聞き乍ら、かれは長い間大きな眼を明けて天井を見て居た。階梯を昇つて來る足音は、幾度となく外れて別の室に入つて行つた。心の底では、かれはまだ女の來るのを待つて居た。

女中が入つて來ても、かれは容易に起きるやうな氣分にはなれなかつた。床を離れるのが殘り惜しいやうな氣もした。『昨夜は飮んだと見えて、頭が痛くつて爲方がない。』平氣を粧つて言つた男の聲には、一種空虚なところがあつた。

女中は昨夜の申譯を何彼として聞かせた。『今朝も、眼が覺めると、すぐかけだんですけども、まだ分らないんですよ。本當に何うしたんですか、不思議なこともあるもんですねえ。』

『好いよ、好いよ、もう放つて置くさ。』

『でもねえ、餘り不思議ですから。』

『もう何時だえ？』

男はわざと話頭を變へた。

『九時少し前位でせう。』

『もうそんなになるかね……』少し考へるやうにして頭を押へて『もう少しねかして置いて貰つても

かれは立つて歩くことも出來ないほどに醉つて居た。

歸るにもう電車はなかつた。それにかう醉つて居ては車では危なかつた。で女將と女中とは、寄つて、たかつて、男を別室の寢床の中へつれて行つた。

男は久しい間眼を見開いて居た。平生の溫順しいのに似もつかないやうに、『おい何うした？』を連呼した。

女は何うして居るか知れたものでなかつた。かう考へると、男は居ても立つても居られないやうな焦燥を心に感じた。一人でこんな處にこんなにして居たッて仕方がない。かうも思つた。しかし矢つ張り女には逢ひたかつた。歸るといふ氣分には何うしてもなれない。『まア貴郞――』かう言つて女が入つて來さうに思はれて爲方がなかつた。

悶えたり、焦れたり、考へたりして過して行く一夜は、男には此上なく辛かつた。眠るとすぐ惡夢に襲はれた。

『兎に角今夜の七時までは居たんだ。行方が知れないと言つても、朝までにはそれが分らないといふことはない――』うつらうつらしてゐる中にも、かれはそれを思つて居た。

Before Dawn! いつの間にか其處に女が來て居る喜びを男は想像した。

あくる朝もかれは自分を一人さびしく寢床の上に見出した。女は遂に Before Dawn の喜びをかれに

ら出かけた後が解らないんですよ。十一時も過ぎましたね。本當に困つて了ふよ。』如才のない女將は其處に入つて來た女中の方を向いて『お前、宅の方へも電報をかけるやうに檢番に賴んだかえ？』

『え、さつきさう申しました。もう返事が參る頃でせう。』

『ことに寄ると、宅に行つたのかも知れないよ。あの妓は氣まぐれな子だから。』かう言つて女將は銚子を手にして見て『これは駄目だよ、お前。熱いのを持つてお出で。』

女中は𨻶て燗をした德利を運んで來た『まだ何とも返事がないかえ……困つたねえ、家に居ると言ふから、さつきのお電話にかうしてお出になるやうに申上げたのに……本當に困つて了ふよ……も一度聞いて見ませう。』かう言つて笑ひながら女將は出て行つた。

男は惡く醉つて居た。三時間も前から押へに押へて飮んで居た酒は、決して少い量ではなかつた。疑惑も盛んに出た。行方を飽までも突詰めて見よう、といふ意地もかなり强かつた。何んなに遲くなつても、逢つて話を聞かなければ滿足が出來ないやうな氣もした。男は歸るといふことを口から出さなかつた。

女將や女中の言ふことを信用すれば勿論、信用しないでも、十二時過までには何とか返事があるに相違ない。かう思つてかれは酒を飮んだ。

『宅にも歸つて居りませんさうで……。』女中がかう言つて氣の毒さうな顏をして入つて來た時には、

自由にならないのに常に業を煮やして居た。

女に逢つた夜でも、女に用事があつて、いつもの處まで送つて來られないことがあつたり、前に約束の座敷があつて、長く待たせた揚句に、酒に醉つて長い裾を引摺るやうにして入つて來たりすることなどがあると、男はいつも不快な思ひをせずには居られなかつた。それほどかれの心は女に偏つて居た。

靜かな生活――讀書と散歩と旅行とにのみ心を開いてゐた靜かな生活、それは今高い空の上になつて了つた。垣にさし透る秋の日影を見ても、もう昔のやうに心を動かさなかつた。

電燈の青白い公園の門の處で、二人はそれから幾度か別れた。晝のやうに月の明るい夜もあつた。

二十四

一夜女は容易に逢つて來なかつた。

其處の女將や女中は、いろ〳〵にして電話をかけて呉れた。

『居ない譯がないんですけれど。』かう言つて女中が出たり入つたりした。席を賑かにする爲めに聘んだいつもの女達の三味線もつひに歡びを成さなかつた。

『本當に何處へ行つたんでせうね。七時頃ですツて、初め行つた處はちやんと分つて居るんですけれど……いゝえお茶屋ぢやないんですよ。ぢき近所の唯の家なんですがね、其處に一時間ほど居て、それか

降る庭などをぼんやりと見ながら、終日女のことを考へて暮らして居ることなどもあつた。

山から歸つて來てからは、一層さうした思ひに暮らすやうな日が多かつた。女の周圍に夜となく晝となく集つて來る男――其の男の中には、何ういふ男が居るか解らない。時の間に巧に女の心を奪ひ去つて了ふものがあるかも知れない。氣の合ふといふことは、時間の問題でもなく、義理人情の問題でもなく、世話をした態度の問題でもなく、單に眼と眼、心と心、體と體との刹那の投合にあるのであるだけそれだけ、男はぢつとして居られないやうな氣がした。

女の口からちよいちよい洩れる他の男の話もあるが、それよりも突然ある第三者が起つて來て、今まで長い間かゝつて漸く作り上げた甘いイリユージヨンを時の間に粉微塵に碎いて行つて了ひはせぬかといふ樣な氣がして爲方がなかつた。

それでも時にはわざと逢ふ時日を長く延して置いて見ることなどがないでもなかつた。さういふ時には、かれは苦悶を押へて、一日一日と女から來る音信を待つた。大抵電話が懸つて來たり、手紙がソッと朝の郵便箱に入れられてあつたりする。しかし何うかすると、五日も六日も消息なしに過ぎて行くことがないでもなかつた。その時にはさも〳〵絕望した人のやうに、蒼く澤のない顏をして町の通りを步いて行つた。

其時の意味のない焦燥をかれはこれまでにも幾度となく經驗して居た。かれは自分ながら自分の體の

逅して、マア貴郎！ ッて言ふやうなことがあつたら、面白いだらうな。』

『本當にねえ。』

かう言つて互ひに笑つたこともあつた。

しかしこんな話をしたのも、もう以前のことである。此頃では、さうした氣分にはなれなかつた。逢ひさへすれば好いのであつた。顔を見さへすれば、兎に角それで滿足が出來るのであつた。別れる時には、二人はいつも此つぎに逢ふ時と日とを約束した。『それでは御機嫌よう。』女の聲は常に男の後に聞えた。

不思議に思はれるほど、其の幻影は常に男の眼の前を離れなかつた。それにのみ唯心が向いて居た。それでも逢つた一日二日は、甘い言葉や柔しい態度やなつかしい表情などの名殘の影が、濃く深く身の周圍に殘つて居て、『自分の女』といふ觀念が強く男の心を宥めたり慰めたりして居るが、それも、風が吹き、雨が降り、日が照つて居る間に段々薄くなつて行つて、あとからは疑惑と不安とが常に新しい絶えざる力を以て頭を擡げて來た。

始めは半月位は何でもなかつた。それがこの頃では十日になり、一週間になり、五日になるのを男は見た。女の影の段々薄くなつて行く時のさびしさも此頃では殊に痛切に感ずるやうになつて來た。雨の

たこともあつたらしかつた。海に臨んだ高臺の邸にも一年位は居たらしかつた。其處の庭には雛頭の花が澤山咲いて居て、四目垣の向うに、晴れた碧い海が給のやうに見えた。女はさびしいのに堪へかねて、いつもその四目垣に凭りかゝつて海を見て居た。『其の頃は世の中や男のことはまだよく知らないころでせう。大きな家に老婢と居るのがさびしかつたわ。』こんなことを女は言つて聞かせた。『それは皆な話すと面白いわ。私これで隨分苦勞をして來たんですからね。』かうした話をする時には、女は昔を追憶するといふやうななつかしい眼付をするのが常である。

『でも、少しは時々思出すやうな男があるだらうね？』

かう男が訊くと、

『それはあるわ。悲しくつて、別れてから半月位稼業を休んで居たことなどもあるわ。』

『變なもんだね。』

『でも、忘れて行くから不思議ね。段々傷痍が治つて行くんだわねえ。』

さういふ話をする時には、かれはその多くの男の中の一人として自分を考へて見ぬ譯に行かなかつた。一人々々過ぎ去つて行つた戀と慾、燃えて、熱して、冷めて、そしていつとなく路頭の人になつて行く順序は、歴々と彼の眼の前を通つて行く樣にすら思はれた。其背景には時の影が寂然として立つて居た。

『こんなことを言つて居る中に、時が經つて、お前がお婆さんになつて、何處かの角でひよつくり邂逅

二十三

疑惑は絶える間がなかつた。かれは依然として山に行かない以前の重荷と苦悶とに惱される人であつた。唯一の味方と信じて居た時も、容易にかれのために解決を與へるやうな機會をつくつては吳れなかつた。

因が因を成して行つた。追憶を生んで行つた。嬉しかつたこと、喜ばしかつたことばかりではなかつた。腹を立てたことも、不愉快な思ひをしたことも、矢張かれ等の間の色彩を濃くする有力な材料となつた。

重荷に堪へないで、別れようとして遣つたことは、却つて二人の間の關係を深くする一幕に過ぎなかつた。

『私が商賣をして居なければ、貴郎はこんなにはして吳れない。』かう女の言つた言葉は、女の言つた意味以外に、深い一種の意味を持つて居ることを男は發見した。男から疑はれるやうな境遇に身を置いて居るといふことは、女に取つて此上ない强味である。其處にかくれて、女は常に男を引張つた。

何うかすると女はこれまで關係した男のことを話して聞かせることがあつた。女は少くとも二度や三度は旦那にひかされたことがあつたらしかつた。田舍に行つて大きな屋敷に召使に侍づかれて生活して居

『あの人？　逢つてよ。』

すぐ男の手を握つて『逢つても好くつてね。』

『惡くつたつて爲方がないさ。』

暫く默つて歩きながら、

『本當を言へば、うそよ。あんな人になど逢ひたくないわ。あんなやきもちやきなんか。』

『隱さなくつたつて好いよ。ちやんと知つて居るんだから。』

『だつてうそですもの。此間歸つて、宅に昨日まで行つて居たんですから、逢ふ間などないぢやありませんか。』

『そんならそれで好いさ。』

『厭よ、此頃は貴郞は本當に邪推深くなつたんですもの。すぐ怒つたり何かするんですもの。』

『怒つてやしないよ。』

『さう？　怒りやしなくつて？　ぢや好いけども……。』

二人はその細い通りを拔けて、濠端に出て、其處から大きな公園へと入つて行つた。二人に取つては、この公園は記念の多い場所であつた。其處には、電燈が青白くポプラの葉裏に照つてゐた。いつもの門の處まで行つて、別れを告げて、其處から男は電車に乘つた。

人に世話をさせて置いて……。』

　肥つた女將や、其處に聘ばれて來た藝妓などに向つては、山の話を得意になつて話して聞かせた。怖かつた瀑の話、面白かつた舟遊山の話などは、人々を羨ましがらせた。ヘンリッタの話をしては、『それは綺麗な若い西洋人よ。』などと言つた。女將は貰つた土産の禮を繰返して言つた。

　久し振で聞いた三味線の音は、男の心にさまざまの追懐を齎して來た『殘る暑さ』や『萩桔梗』などを女達は彈いた。三味線を傍に置いて、

『暫く彈かないと變ね。』

女はかう言つて『糸だこが、ほら、こんなに小さくなつてよ。』

ダイヤの指環をはめた細い華奢な指を男に見せた。

其夜遲く、女は男が送つて、細い靜かな通りを歩いて來た。

『もう逢つた？』

突如にかう男が訊くと、

『逢つたつて、誰に？』

『言はないでも解つてるぢやないか。』

女は笑つて、

話器を耳にしたかれは、それを見ながら、いつもそはそはする心持で相手の出て來るのを待つて居た。

小さい狹い電話室、それほどかれの一喜一憂を支配したものはなかつた。その中で、かれは悶えたり苦んだり、喜んだり絶望したりした。電話を切つてから、ぶるぶると身を震はせて、三四分默つて立盡して居たこともあつた。蒼い痙攣した顏をして其處から出て來たことなどもあつた。時にはまた、晴々した嬉しさうな顏に無限の喜びを湛へて出て來た。

夜遲くかけに行く時には、建物の中はヒツソリとして、一隅に一箇點いてゐる電氣ランプの下で、卓に凭りかゝつて若い宿直の男が雜誌などを讀んで居た。轉寢などをして居ることもあつた。

四日目にかれは其處からまた電話をかけた。其時は女は出て來た。

座敷で見た女は、山で見た女とは餘程調子が變つて居た。言葉でも、態度でも、何處となく生々したところがあつた。長く裾を引いた縐御召の姿は、別な人かと思はれるやうに艶に見えた。『留守にした間そりや隨分忙しかつたんですつて。』かう言つて、敷島を指と指との間に挾んでスパスパと吸つて見せて、『宅に行くと、母さんにすつかり小言を言はれて了つてよ。本當に子供ぢやあるまいし、いくら體が自由だからつて、慾がないにも程があるつて、かうなんでせう……私、腹が立つたから、喧嘩して遣つたわ。』

無邪氣な、何も苦勞もないといふやうな快活な調子で、言葉を續いで『人間つて勝手なものね、散々

『今日は留守なんですがね……』
『お座敷に出てるの？』
『屹度宅に行つたんでせうと思ふんですけど……昨日から用事をつけて出たつきりなんですが。』
『それぢや今日歸つて來るか何うか解らんねえ？』
『もう歸るでせうと思ふんですけれど……』
『それぢやまた……』
かう言つてかれは電話を切つた。電話の前に立つ時には、かれはいつも胸を躍らした。其處で聞く女の聲は、殊に一種の微かな顫動をかれに與へた。女の居間は二階にあつた。『鳥渡お待ち下さい――』かう言つて女中はいつも取次いで呉れた。『もし、もし、貴郎ですか。』さう言つて話し出す女の聲は、男の心をそゝるやうにした。
かれはそれまでに電話をかける處を彼方此方と選擇した。人の聞いて居ないところ、長く話して居ても差支ないところ、忙しくないところ……かれが昨年以來選んで置いたのは、大きな建物の隅にある靜かなかけ離れた電話で、其處には滅多に人も遣つて來なかつた。小さい電話室の戸を閉切つてさへ了ふと、何を話しても外から聞かれるやうな憂はなかつた。其處からは、硝子戸を隔てゝ、だらだらくだりになつた綺麗な敷石と、暢氣な顏をして立つて居る交番の巡査と、大きな赤煉瓦の建物とが見えた。受

女は自分の身上話をしたりなどした。

『是ほど言つても貴郎にはまだ私の心はわからない？』さうした女の言葉――この言葉を男はこれまでにも何度聞いたか知れなかつた。しかし幾度聞いても、それは矢張空しい言葉であつた。かれはいつまでも同じことを繰返して居る二人の間を思はない譯に行かなかつた。

かれは疲れて居た。悶えて居た。かれに取つては、女は蛇のやうであつた。

二十二

翌日の夕方まで其處で遊んで、上野に著いた時は、もう全く夜になつて居た。荷物と女とを乘せた一臺の俥は、やがて電燈や瓦斯の明るい町の灯の中に見えなくなつて行つた。

『左樣なら、御機嫌よう。』

車上から後を振返つて言つた冴えた其聲は、はつきりと男の耳に殘つて聞かれた。町にももう何處となく秋の氣分が行きわたつて、星は晴れた空に聰かしげに瞬いて居た。

男はこれまでにも一週間と女に逢はずには居られなかつた。女の居る家には電話がかゝつて居た。かれはいつも女を電話口に呼出して長い電話をかけた。

歸つてから三日目にかけた電話には、其家の女中が出て來た。

寧ろそれ以上であつた。向うむきになつて身を横へた女の小い體を見た時には、かうまでに此身を自由にする惡魔をずだずだに斫りさいなんで遣りたいとまで思つた。何うとも勝手にしろ、もう二度と口も利かない。かう思つた。かと思ふと今度は、此儘別れては腹が醫えない、一度は此方から甘い言葉で、女を引張つて置いて、いざと言ふ時に、ウンと外して前に踏らせて吳れなければ男の意地が立たない。こんな事をも頭に描いて見た。併し女が自分の傍に寄つて來て坐つた時には、さうした種々の考はすぐ消えて了つて、抑へられない歡喜が胸に溢れた。

其處では、二人の物語をさまたげる何物もなかつた。電鈴を押さなければ、女中は決して其處に遣つて來なかつた。もう夜になつてからかなり時間が經つた。あたりはしんとして居た。

池には母屋の電燈がチラチラと綺麗に映つて居た。石の燈籠には灯が入れてあつた。蟲の聲は雨のやうに其處にも此處にも聞えた。

『明日からもうお前は僕一人の自由にならない體になるんだねえ。』

『もうそんなことは言はないで頂戴よ。』

かうした會話もをりをり聞かれた。

『心？　心だつて分けられないことはないぢやないか。女の心は幾つにも分けられるぢやないか。』

男の強い聲はかう言つた。

汽車はをりからの大河の鐵橋を轟々と音を立てゝ駛つて來た。

二十一

一緒に來た時の滿足、離れなければならない不滿足、それが纏れ合つて、しつこく男の心に食ひ入つて居た。『さつき、貴郎は怒つてゐらしつてね。』氣が附くと、女は笑を顏に湛へ乍ら男の方を見て居た。

それは池に臨んだかけ離れた六疊の一間であつた。二人は停車場から車で其處に遣つて來た。暗い杉並木の奥に古い名高い社があつて、綺麗な芝生の上には、大きな石碑などが立つて居た。その奥の家では銀杏返に結つて意氣な女中が出て迎へた。

『お前も怒つて居たぢやないか。』

『だつて餘りですもの。』

『男の心は女には矢張解らないんだねえ。』

女はそれに答へようとはせずに、

『貴郎と一緒になると、屹度あゝして酷められるのね？』

男は長い汽車の間の佗しい沈默を思出さずには居られなかつた。其の時の心の暗鬪――夫れは丁度讎敵のやうな心持であつた。

かつた。
もう二人は全く醉から醒めて居た。搔上げても搔上げても、女の鬢の毛は蒼い頰に垂れて來た。男は眞面目な難かしさうな顏をして、常に一處を見詰めて居た。
男の隣に絞附の羽織を着た一人の紳士が乘つてゐた。それがある賑やかな停車場で下りた。暫くすると、女はもう堪らなくなつたといふやうに、いきなり男の傍に遣つて來た。そして下駄を脫いで、膝を摺付るやうにして其處に坐つた。
『何處かで下りて遊んで行きませうか。』
かう小聲で言つた女の顏には、やさしい笑が湛へられてあつた。
『何うでも好い、歸つても好いよ、僕は。』
『遊んで行きませうよ、ね？』
『でも……』切符を買つたからと男が言はうとすると、
『好いわ、切符なんか無駄になつたつて。ね？　遊んで行きませうね？』かう言つて『這麼風にして別れるのは、私いや？』
『でも無理にさうしなくつても好いよ。』
『好いのよ。』

を指し示して居た。綺麗な水は處々に小さい瀨をつくつて流れた。

女も段々醉が發して來たらしかつた。赤い顏をして體を持餘したやうにして居た。下駄を脫いで腰掛の上に坐つたりなどした。後には向うむきになつて、前髮を窓の下に當てた。歔欷けてでも居るかのやうに髮が搖いた。

男は久しい間、大きく出た帶の松の模樣と行儀わるく坐つた白足袋の裏とを眼にしながら、この一箇の小さい體の自己に及ぼす關係を考へてぢつとして居た。

暫くして、再び此方を向いた女の眼には、歷々と淚の痕が認められた。しかしまだ心が解けないと言つたやうに、女は絕えず男の眼を避けて居た。ある停車場で、隣の客が二人下りると、其儘上の網から信玄袋を下して、空氣枕をふくらませて、體を小さくして橫になつた。矢張向うむきになつて居た。をりをり長大息を吐くのが帶の上の顫動に見えた。

男は無益の考から離れようとして、幾度か努力した。しかしそれはいつも徒勞に歸した。窓の方を向いて、移り變る景色を見ても、何の甲斐がなかつた。二人の不機嫌は矢張二人の不機嫌であり、二人の苦悶は矢張二人の苦悶であつた。

線路の交叉してゐる停車場では、旅客がドヤドヤと入つて來た。もう女は橫になつて居ることが出來なかつた。急に起き上つた女は、兩方から壓迫せられるやうに、小さくなつて腰をかけなければならな

『ぢァ、矢張上野で好いのね。』

男は默つて點頭いて見せた。

女は自分の財布から五圓紙幣を一枚出して、『ぢや、二等の上野を二枚買つて來て下さいね。』かう言つて女中に渡した。

女中が切符を買つたり、荷物をチッキに代へたりして來る間二人は矢張默つて相對して坐つて居た。

『もうお支度をなすつても宜しう御座いますから。』かう女中が其處に來て言ふ時分になつても、矢張口を噤んで何も言はなかつた。二人は默つて勘定をすませて其處を出た。

停車場では、殆ど待つ間もなかつた。人々は改札口からもうぞろぞろとプラットフォムに押寄せて行つた。二人の入つた二等室には、西洋人の夫婦だの、切下げの上品のお婆さんだの、官吏らしい髭の生えた男だのが乘つて居た。二人は筋違ひに腰をかけた。

町を掠めたり野を横ぎつたりして汽車は動いて行つた。二人は矢張默つたまゝ一言をも交さなかつた。二人の胸には種々のことが往來した。

『己はこれほど思つて居る……』かう男は、自分の腹をつかみ出してそのまゝ女に見せてやりたかつた。女はこれまでに別れて來た多くの男のことを考へて居た。

ある停車場では、薪が一杯に積み重ねられてあつた。ある停車場では、大きな時計の針が間違つた時

りでグイグイ飮んでゐた。

女はそれを見て居たが、やがて、

『私にも頂戴！』

かう言つて、盃を取つて、矢張手酌で、二三杯つづけて飮んだ。

男の顏は赤く濁つた佗しさうな色を帶びて來た。女の顏は蒼かつた。

『何うしても歸る？』

『ええ。』

女の答はキッパリしてゐた。

また二人は默つて了つた。

女中が切符を買ふ爲めに其處に入つて來た時には二本目の德利がもう空になつて居た。

『貴郞、何方まで？』女はキッとした顏で男の方を見て、『矢張、上野で好いの？』

『僕は何處でも好い。』

『何處でも好いつて、それぢや困るわ。何處か途中で遊んでいらつしやるなら、さうしていらつしやいな。』

『いや、遊んで行かんでも好い。』

二十

これで東京に歸つて了ふのは飽氣ない、何處か一晩途中で泊つて行かう。かう男が言出した。しかし女はそれに應じなかつた。久しく留守にした東京のことが氣に懸るから、何うしても今日は歸ると言つた。男はまた男で、昨日東京から女の許に掛つて來た電話に疑惑を抱いて居た。その電話を聞いて歸つて來てから、女の狀態が急に生々した調子を帶び出した。東京に歸るのが何處となく嬉しさうに見えた。

『貴郎も隨分解らないのね。』男の疑惑に對して、女は二三度もかう言つて笑つた。『私はそんなんぢやないのよ。』

町の停留場前の茶店で一時間ほど汽車を待つて居る間、男は詰らなさうな佗しさうな顔をして居た。歡樂の後の悲哀が犇々とその身の周圍に押寄せて來るといふやうに頻りに手酌で盃を空けてゐた。やがて手を鳴らして女中を呼んで、銚子の代りを命ずると、

『貴郎、まだあがるの。』

『…………』

男は默つて居た。

後には女も顔を曇らせて了つた。女中の持つて來た酒の酌をしてやらうともしなかつた。男ばかり獨

谷に沿つて、山は段々開けて行つた。崖の下のやうな處をも通つて行つた。遊覽の客は草鞋をつけたり車に乘つたり駕籠に搖られたりして遣つて來た。路は俄かに林の中に入つて行つた。其處にある電車の發着所の前には、幾臺ともなく並べて置かれた車が、一時間每に到着する電車からの客を待つて居た。

待合室の一方は茶店になつて居た。二人は其處で電車の來るのを久しい間待つた。

新に開かれた電車は、新建の家屋の多い新開地のやうな處を通つたり、大きな觀音の堂宇の見える處を通つたりして、次第に山を離れて行つた。

大きな谷川に架けた鐵橋の上からは、濶い高原が展けて見られた。空は碧く高かつた。野原には蟋蟀が鳴いて居た。

橋を渡つた處の停留場では、電車が兩方から擂れ違ふ樣に出來て居た。長く待つてゐる間、男は車を下りて、其處等を彼方此方と步いて居たが、終には待ちくたびれて、傍にある葦洲を張つた小さな茶店に入つて行た。ちよろちよろと筧の落ちる綺麗な水の中には心太が旨さうに浸けてあつた。女もやがて下りて來た。『何うしたんでせう？　遲いのねえ。』かう言つて眉を蹙めながら、矢張男の傍に來て腰をかけた。店で爺と話して居た近所の者らしい男は、じろじろと絕えず二人の方を見て居た。

長いレールに晴れた日が照つた。

二臺の車は、草鞋の下げられた家の傍を通つたり、高く架つた吊橋の上を輾つたり、泡立つ谷川の縁を走つて行つたりした。麓にある瀟洒な一軒の茶屋の二階からは、林を透した水の音が淙々として聞えて來た。

白金巾をかけた卓の上には、野から採つて來た花が大きい青磁の花瓶に一杯になつてさゝれてあつた。女は疲れた樣に椅子に腰をかけてゐたが、やがて其處にかけてある長い鏡の前に行つて立つた。機嫌のよい時でなくては見られないやうな明るい顏がそれに映つて見えた。

『東京に歸つてもつまらないから、何處かもう少し遊んで行かうかな。』

こんなことを男が言ふと、

『まだあんなことを言つてるのね。』

かう言つて女はその傍に來て腰をかけた。男の沈んだ顏付をして居るのに比べて、女は何處となく生生として居た。女の心は明るい灯や賑やかな町の方へ行つて居た。

男の頭には種々なことが往來した。かれは依然として元のまゝのかれであつた。二ケ月以上の月日、それがかれの身の上に何の變化をも齎しては來なかつた。賑やかな町を背景にした女をかれは矢張頭に描いて居た。『また多くの男の中にこの女を見なくつてはならないのだ。』氣が附くと、かれはこんなことを考へて居た。

『女には平氣でさう言はれるけれど、男には出來ない。出來ないのがよく分つて居て、出來るとは男には言へないからねえ。』

『矢張情が薄いんだわ。』

男は默つて居た。

八月の末にはもう山には秋が立つて居た。朝晩は山の空氣が肌に冷々した。二人はもう都に歸る準備に取掛つて居た。昨日、東京から電話がかゝつて來たので、降り頻る雨を紺蛇の目の傘に衝いて出掛けて行つたが、其處から歸つて來た女は、もうちやんと山を下ることに心を決めて居た。『貴郎も一緒に歸るわねえ……私、一人で歸るのはさびしいから。』などゝ甘えるやうな調子で言つた。

山に來た時のことが新たに彼の頭に繰返された。容易に別れられない、二人の間柄を考へてかれは黯然とした。

十九

二人が山を下りた日はよく晴れて居た。深い谷底に聞える水の音は段々近くなつて、絶壁に臨んでゐる茶屋からは、兩方から落合つて流れて行く谷川がそれと明かに指さゝれた。白い雲が流るゝやうに連なる山の上に靡いた。

『一緒になつたつて駄目だつて言つたぢやありませんか。一緒になつて毎日顏をつき合せてゐては、戀も何もなくなつて了ふつて言つたぢやありませんか。』

『そのことか。』男は思ひ出したやうに言つて、

『だけど、それは本當だから仕方がない。實際、お前だつて商賣をやめた人達が何んな風になつて行くかを平生よく見て知つてるぢやないか。』

『それはさうね。』

女は考へるやうな眼付をして下唇を嚙んだ。

『それはさうだわ。』すぐ繰返して、『貴郎だつて、ぢき飽きて了ふわねえ……男はそれだから賴りにならない！』

『いや、さういふ譯ぢやない。』

『いゝえ、さうよ。男つて言ふものは皆なさうよ。』

『そんなことはない。女に言はせると、男が身を投出して來なければ、賴りにならないといふやうな氣がするかも知れないけれど、それはとても出來ないことだからねえ。女が出來ないと同じやうに、男にも出來ないことだからねえ。』

『女は出來てよ。』

めた。男も黯然として暗い湖水を見た。
女の白い顔に涙の流れるのが夜目にもそれとはつきり見えた。
表ではまだ道者が著いたと見えて、鈴の音が町の喧騒に雜つて賑かに聞えた。

十八

『私が素人だつたら、貴郎はこんなにしては呉れませんわねえ。』
『何故？』
『何故つて……』女は笑つて、『さうよ、それに違ひないわ。私が商賣をして居なければ、貴郎は振向いても見ないわ。』
『そんなことはない。』
『ぢや、私商賣をやめても好くつて？　それでも貴郎は世話をして下すつて？』男の心を讀むやうな眼付をして、『それ御覽なさい。矢張駄目だわ。』
『駄目なことはない。』
『さう？　ぢや世話して下さるのね。此間のやうなことは言はなくつてね？』
『此間のことつて何だらう？　そんなことを何か言つたことがあつたかね？』

『あの向うに遠く離れて居るのが、一つあるでせう？　私見たいね。』

こんなことを女は言つた。

男は笑つて居た。

『私の心に丁度よく似てるわ。』

女はぢつとそれを見て居た。成程それは多くの灯から離れて一つさびしさうに水に漂つて居た。湖水は黒く光つた。

女はいつか男の手を握つて居た。二三日前から、女はヒステリックな氣分になつて居た。默つて眼を赤くして居ることなどもあつた。

『さびしいんだらう？　もう東京に歸らうか。』かう男が言ふと、『東京に歸つて商賣したつてつまらないわ。』かう言つて一層さびしさうな顔をした。

遠く離れた一箇の流燈は、それでも沈みもせずに、長い間水の上をゆらゆらと漂つて居た。誰もそんな方には眼をつけて居るものもなかつた。喝采がまた起つた。見ると青い赤い灯がまた無數に岸に近い水の上に流されてゐた。

『たうとう沈んだわ。』

かう言はれて、男が其方を見た時には、もう其處には其灯はなかつた。女は男の手を一層堅く握り占

舊暦の七月一日から七日間の山開き、殊にその最初の日は賑かであつた。お山の日の出を拜まうとする人達は、前の日から湖水に臨んだ町へと群を成して押寄せて來た。社務所の軒には注連が飾られ、白裝束をした神官達は其處等を忙しさうに往つたり來たりした。日の暮れない中に早くも一杯になつて了つた禪頂小屋の外には、白衣の道者が其處此處に固つて集つて居るのが見えた。鈴の音は後から後へと聞えて來た。

夜になつてからの湖水は、美しく灯にかゞやいて居た。蜃氣樓のやうに俄かに現はれた夜の縁日、あの險しい山路を何うしてこの商人達は登つて來たらうと思はれるほど數多い露店が道の兩側に出來て、喧しい呼聲が山の空氣に夥しく響いて聞えた。覗き機關（からくり）があつたり大蛇の見世物があつたりした。賑かな人々の聲は波の寄せるやうに二人の世離れた別莊にも聞えて來た。其處から見た空は、火事でもあるかのやうに明るく美しく輝いて見えた。

湖水には流燈があつた。それは土地の有志の人達の催しをしたものであつた。二人は大勢の人の中に交つて旅館の二階の欄干からそれを見て居た。岸からも船からも無數の燈が水の上を流れて行つた。大きいのもあれば小さいのもある。すぐ水に沈んで消えて了ふのもあれば、ゆらゆらと長い間水上に漾つて居るのもある。遠く一つ離れて漾つて居るものなどもあつた。

燈火を流す舟には、酸漿提灯が一面について居た。灯を流す度に、喝采の聲が樓上から起つた。

……本當に緩くり話しがしたいわ。』

『何んて言ふんだえ？』

『名前？……元は君子、今は檜物町の春村の奴つて言ふんだッて。』

『鳥渡好い藝者だねえ。』

『可哀相なのよ。約束した人とは何うしても一緒になれなくつて、一度引かされて、それも駄目で、また今年の春出たんですつて……稼業はもうつくづく厭だつて言つてたわ。』少時考へて、『一時間でも好いから、何うか出來ないかしら？　話がしたいわ。』

『すれば好いぢやないか。』

『だつて向うに都合があるんですもの……今日歸るか知れないつて言ふんですもの。』かう言ひかけてすぐ立つて下に下りて行つたが、間もなく歸つて來て、『矢張駄目よ。今日歸るんですつて。』

女は萎れた顏をして居た。暫くしてから、

『私も東京に歸らうかしら。』

十七

六根淸淨、お山繁昌……白衣を著て金剛杖をついた道者の鈴の音は、亮かに谷間谷間に響き渡つた。

『一度引いたことがあつたわねえ。』

『それが大變なのよ。』かう言つて『あゝじれつたい。緩くり話がしたいわねえ。』

『別莊に來なくつて。』

『でも……』

『今日歸るの?』

『え……ことに由ると、一晩泊るかも知れないけれど。』

『泊つたらいらつしやいよ。』

『でもねえ。』

二人の話して居る傍を、宿屋の女中や番頭がじろ〳〵見乍ら通つて行つた。容易に盡きない話を二人は早く手短かに話した。其時分一緒に居た女達の話も出た。

男が厠に行かうとして、階梯を下りて行つた時にも、まだ其處に立つたまゝで女は熱心に何か話をつづけて居た。厠から出て來た時には、女は笑を含んで此方を見て居た。髷の女も鳥渡振返つて白い綺麗な顏を此方に見せた。

やがて二階に上つて來た女の顏には、涙の痕がそれとなく見えて居た。男の訊くのをも待たず『私の仲好だつたのよ、あの人は? まだ私が向うの土地に居る時分よ。一緒によく抱きつこして寢たのよ。

何年にも逢つたことのない昔の友達は、急に言葉も出ないといふ風で、暫しは默つて其處に立つて居た。

『まァ、本當にめづらしい！』

『まァ、こんな處で逢はうとは、夢にも思ひかけなかつたわねえ。』

二人は涙を滴さぬばかり、手を握らぬばかりにして居た。

『何時來て？』

『今來たばかりよ。』

『まァ、本當によかつたわねえ……私が此處に御飯を食べに來なければ、同じ處に居ても、逢はれなかつたわねえ。』

『あなたは前から來て居て？』

『ぢき其處の別莊に居るのよ。』

『旦那樣と一緒？』笑つて見せて、『好いわねえ。』

『貴方は？』

髷の女は、頷で向うの方をしやくつて見せた。

『さう？』女は點頭いて見せて『今、何處？　矢張あたこ？』

『今は檜物町に居るのよ……あれからの話をすると、それは大變よ。』

ふ。煩惱、執着、それから解脫する爲めには、人間のあらゆる束縛から逃れ、世間のあらゆる歡樂から離れ、肉體を毀損してまでも、猶苦行を怠らなかつた人達の生活――それがかれの生活に意味あるコントラストをなして考へられた。

今日に限らず、さうした心持になることはこれまでにも度々あつた。盲目な滿し難い本能の力に相對する時は、殊にその感が深かつた。歡樂に向つて熱心に進んで行く心と、努力に向つて勇猛に進んで行く心と、其處に全く異つた二つの道があるのをかれは常に明かに知つて居た。

『煩惱と執着と嫉妬と愛慾とに惱まされた自分の生活と、平和と信仰と無邪氣と敬虔とに和らげられたその人達の生活と、……其の距離は？』

かれは其處まで考へて來て、思はず知らず頭を振つた。

十六

旅館の長い廊下から階梯を下りやうとして、女は思はず聲を立てた。

『まア。』

『まア、めづらしい！』

丸髷には結つて居ても一目でそれとわかる意氣な女は、矢張驚いたやうに、かう聲をかけて立留つた。

得意になつて山に居る一種の住民のことを種々と話して聞かせた。それは山の奥から山の奥へと木を伐つて暮して行く人達であつた。谷合の深い處に、人知れず小屋掛をして、木材のあるうちは其處に住んで居てなくなると、山から山へと移つて行くのが、其人達の生活であつた。

『まア、そんな暮しをして居る人があるの？』女は一層驚いたやうな顏をして、『それでお上さんも子供もあるんですか？』

『それはさうですとも。』

船頭はかう言つて笑つた。

『まア、ねえ、貴郎、』と向うに立つて居る男の方を見て『まだこの先の山の奥に暮して居る人があるんですつて？　厭ねえ、よく怖くはないわねえ。』

男はそれでも考へたまゝ默つて立つて居た。

何うした聯想か、男の頭には此時兼ねて聞いて知つて居る冬嶺行者の話が歴々と浮んで通つた。苦行に苦行を重ねて、それでもまだ心の解脱を得ることの出來ない行者達は、冬の雪の中を侵して、この大きな山脈を、峰から峰へと修行をして歩くのが例であつた。手一合などといふ苦行を敢へてしたものもあれば、蕎麥粉を雪に交ぜて食つて、この山の中に冬三月を過したといふ名高い僧侶もあつた。昔は峰から峰へ行者小屋が出來て居て、毎年一人や二人この冬嶺行者に出かけて行かないものはなかつたとい

一つの佛像は、ギヨロリとした怖い恐ろしい眼をして居た。一つは暗い影の中に影のやうになつて立つて居た。他の一つは凄い笑を顏に湛へて居た。

『此處には、平生、誰も居ないの？』

女は聲を低くして訊いた。その低い聲でさへ、堂内に凄く響き渡るやうに女には氣味惡く思はれた。何うした機會か、男の胸にも此時神祕な不可思議な氣分が起つて來た。かうして默つて立つて居る佛像――雨が降らうが風が吹かうが、乃至はいかなる悲慘なことが此の世の中に起らうが、この深山の中の人氣のない堂宇の中に默つて寂として立つて居る佛像のこの冷靜とこの Indifference、それが自分の熱したり悶えたりする動搖した心にある暗示を與へなければ止まないやうにかれには思はれた。また、それと同時にその冷靜とその Indifference とが自己のこの苦悶を救つて呉れるやうにも思はれた。

かれは女と自己との關係を考へてぢつとして其處に立ち盡した。

其處等を見て廻つた船頭は、『山の奴等ア、矢張賭博打ちに來ると見える。』こんなことを言つて、棚の上に殘つて居る蠟燭やマッチの殼などを指し示した。

『夜こんな處に來る人があるの？』

女が驚いたやうにして訊くと、

『え、此の山ん中に、木を伐り出しに來てる奴が澤山あるんでがさア……。』かう言つた船頭はやがて

が保護するやうにして、やがて靜かに下りて行くのが見えた。

船は蔦の蔓の下つたり、荆棘の花の白く咲いたりする岸を縫ふやうにして漕いで行つた。密樹の間を洩る、日影は、女の肩から男の膝のあたりに絶えず濃淡の縞を織つてチラチラして居た。二つのコップにつがれた麥酒、古新聞に包んで持つて來られた干葡萄――それを女は氣味よく音を立て、嚙んだ。

五大尊のある岸に船が著いた時には、女はもう上がらないと言つて居た。でも、男が船頭を案内に立て、、岸から續いて居る樹影深い涼しさうな路を彼方へ行かうとすると、後から聲を立て、、呼んだ。

『私も行くわ。』

で、女は船頭の藁草履を結び附けにして穿いて出懸けた。『私、こんな草履を穿くのは、生れて始めてよ。』行く行く女はこんなことを言つて笑つた。二三杯飲んだビールの醉ひが發したといふ風で、わざと駈けて先へ行つて見たりなどした。島とは違つて、此處には涼しい蔭が多かつた。男は灌木の林の中に入つて、細い枝を切つてステッキにした。

段々路は細くなつて、熊笹が深く兩側に繁るやうになつて來た。二町位と船頭が言つた路はかなり遠いやうに二人には思はれた。軈て一と處樹の切開かれた處があつて、其處に荒廢した堂宇が見えた。

全く人氣の絶えた堂宇の中に、寂然として立つて居る古びた佛像の姿は、二人の胸に一種不思議な思ひを起させるに十分であつた。女は男に凭り添ふやうにして、默つて其の佛像の前に立つた。

『此方の言葉はそれでも話せるのかね？』

『から、駄目だつて言ふこつてす。ペラ、ペラ、ペラ、何のことァない、豆がらに火がつくやうだつて言ひますが、本當ですな、異人のしやべくるのは。』後を振返つて見て『異人でも、矢張男は女に甘いもんだと見えますな。』船頭はこんなことを言つて笑つた。二人も笑はずには居られなかつた。

湖の水は餘り冷たい方ではなかつた。それでも浸さぬよりはと言つて、載せて來た麥酒の罎を紐に結へて、女はさつきそれを湖水の中に入れた。紐の末を女はしつかりと持つて居た。

『中々重いわ、貴郎少し持つて頂戴。』

で男は代つて持つて遣つた。ふと氣が附くと、船は此方から彼方に行かうとして居た。湖水は今が一番深い處で、四方からさし込んだ日の光線は、稜角をなして底に七色の色彩を描いて居た。

樹の影の少い石の多い上野島には長く留まつて居なかつた。女は石に躓いて幾度か轉びさうにした。容易に遣つて來ないのを何うしたのかと男が戻つて行つて見ると、下駄の桁をかいた女は足袋跣足になつて困つて其處に立つて居た。

『しやうがないわ。』

でも、下駄は役に立たないほどでもなかつた。日影の著い凸凹した路を、船を繋いだ方へと、女を男

『さうね』

女はぢつと其方を見て居た。ヘンリッタが唄ひ終ると、今度は一緒に乗つてゐる男が大きな聲を立てて Songらしいものを吟じ始めた。水に映つた影は縺れたり解れたりして居た。

すれ違つた時には、距離が二間位しかなかつた。彼方からも此方を見た。何か囃し立てるやうな聲をかけた。ヘンリッタは綺麗な笑顔を此方に見せた。

『西洋人は暢氣ねえ。』

すれ違つて少し來た頃、女は笑つてかう男に言つた。

『あの女唐は、あれで、中々食へた女ぢやありませんャ。』船頭は客がそれと知つて居るとは知らずに、ヘンリッタの事を何彼と話し出した。

『あの向うの家を借りて居る女だらう？』

かう遮つて男が言ふと、

『旦那はもう御存じですか。』思ひもかけないといふ調子で言つて、『あんな綺麗な虫も殺さないやうな顔をしてゐて、あれで大變なんですからな。昨年なんぞ千兩も稼いで行つたさうですからな……それでゐて、吝嗇いと言つたら……。私達の仲間の家を借りて居るんですけれど、間代きりで、心附けなんぞ忘れてもしやしないといふこつてす。』

『ほら、解つたでせう。此方を見て居る。笑つて居る？』

見ると、女中もハンケチを振つて居た。

五六間ほど離れた處を一隻の端艇が漕いで行つた。

『あの人ぢやなくて？』

女の眼は逸早くそれに乘つて居る西洋婦人を認めた。成程それはヘンリツタであつた。まだ年の若い派手なネクタイをした西洋人が一緒にそれに乘つて居た、櫂を水の上にあげた舟は、緩やかに波に漂つて居た。

樂しげに笑ふ聲が水に響いて聞えた。やがてヘンリツタは何か歌らしいものを聲張り上げて唄ひ始めた。それは冴えた幅のある好い聲であつた。戯れ合うた二つの影は、碧い澄んだ水に捺したやうに明かに映つて居た。

『到頭好いお客を捉へたと見えるね。』

此方からそれを見て居たかれは、かう言つて笑つた。

『さうね。』女も笑つて、『中々好い男ぢやありませんか。』

『さうだね、烏渡好い男だ。女よりも若いやうだな？』

に見えたり隱れたりした。

ボートを岸の繁つた樹の間に埋れるやうに繫いで、ひとりで靜かに書を讀んで居る若い婦人などもあつた。

暫く來た處で、

『そら私達の家が見えてよ。』

かう女が男に指した。

成程樹の間から、二人の小さい別莊が見えた。誰も居ない六疊の座敷には、午後の日が明るくさし透つて居た。籐椅子の上に置かれた讀みさしの洋書の頁が風に飜つて居るのも見えた。

其處で過した二人の生活は丸で別人の生活か何ぞのやうに男には思はれた。半月の生活が取あつめて考へられるやうにも思はれた。女にも同時にそれと同じやうな思ひが上つたと見えて、

『此處から家を見ると、不思議な氣がしてね。』

『さうだね、彼處に雨の降る日にお前が來たとは思はれないやうな氣がするね。』

『私はまた何だか貴郎が彼處で本を讀んで居るやうな氣がして爲方がないわ。』

こんなことを言つて居ると留守居をして居た女中が、やがて緣側の處に其姿を見せた。女は俄かに、

『お時さん！』と聲を張上げて呼んだ。ハンケチを振つて見せた。

碧い水の堆積は、湖水のいかに深いかを思はせるに十分であつた。『この湖水は深いんですねえ？』かう言つた女の言葉につれて、中年の眇目の船頭は、いろいろなことを話して聞かせた。無數の埋木が底に沈んで横はつて居る事だの、大きな山椒魚が澤山住んで居る事だの、昔から深さを量つたものがないといふことだのを話した。

『だから、此處で死んだものゝ、死骸の上つたためしがありませんや。』

船頭は輕く櫓を押し乍ら、續いて昨年溺死した西洋人の話をして聞かせた。

『怖いわね。』

女は水に浸した腕の雫をハンケチで拭きながら『それで、たうとう死骸が上らなかつたの？』

『西洋人ですから、隨分お錢をかけたんですけれど……。』船頭はかう言つて『その時は、それは騷ぎでしたぜ、中禪寺の舟は皆な出拂つて了つた位でしたぜ……それでもたうとう解りませんや。』

船頭は少し來たところで、柱を立てゝ帆を揚げた。それはつぎはぎの眼に立つて見える汚い帆布であつた。涼しい風が人々の袂に吹いた。

舟は岸を遠く離れない處を通つて行つた。朝に夕に散歩したところも、舟から見ると趣が全く變つて居た。西洋人の別莊は密樹の間から、椅子や卓を置いた居間だの、ピアノの置いてある二階だのを水彩畫のやうにして見せた。乳母車に子供を乘せた西洋婦人が長い裾を引きながら通つて行くのが緑葉の間

『いゝわ、死んでも、貴郎と一緒なら。』かう言つて女は笑つた。

見ると、舟はもうかなり沖に出て居た。派手な蝙蝠傘は晴れた水の光に映つて丸で繪か何ぞのやうに見えた。其の向うには、斜に帆を揚げたボートが一隻通つて行つた。對岸の森の中の西洋人の別莊だの、寺の屋根だのが分明と指さゝれた。

湖に臨んだ家々の雁木は棧橋のやうに長く湖水に突き出して居た。旅館から其處に行くには、大きな厨の傍を通つたり、炭や薪の置いてある物置の側を通つたりしなければならなかつた。雁木の上では襷がけになつた女中がせつせと物を洗つて居た。湖水は透徹るやうに澄んで、日影のチラチラする底に小石が碧く數へられた。暫くしてから、二人は其處に下りて行つた。

花莫蓙を敷いた新しい荷足が一隻、準備を整へて其處に待つて居た。

二人を乘せた船はやがて出た。

樓上樓下の客は皆それを見送つた。笑つて何か噂し合つて居る人達もあつた。欄干に凭つて此方を見て居る新婚の二人の姿は、沖に出るまで小さくなつて見えて居た。

女は樂しさうにして居た。白い腕を惜しげもなく見せて、舟緣に凭るやうにして、綺麗な水を弄んだりなどして居た。をりをり寄せて來る波に驚いては、『まア、ひどい、』なぞと言て笑つた。

『面白さうね。』女は男に云つた。『向うに見物するやうな所があるんでせうか？』

『それはあるさ。歌が濱だの、合潟だの、上野島だの……』

『島があるの？』

『島つて言ふほどではないが、此山を開いた人の墓のある處がある。』

『此山を開いた人つて……矢張坊さん？』

『それはさうさ。勝道上人つていふ。』

『行つて見たわねえ。』

『ぢき舟に醉ふ癖に……』

『いゝえ、私は舟は大丈夫よ。小さい時分に、神戸から父さんや母さんと汽船で横濱に來たことがあつたけれど、ちつとも醉ひはしなかつたわ。今でも覺えてるわ。』靜かに湖上を漕いで行く舟の方を見て、『行つて見ませうよ。ね、貴郎？』

『此處の湖水は深いよ、落ちると、大變だよ。』

『大丈夫よ。』

『ぢや落ちて死んでも知らんよ……。それでも好いかえ！』

戲談らしく男が言ふと、

男は自分の名でない名を其處に書いた。女は呼鈴を鳴らして女中を呼んで、それを一まとめにして出させた。

新婚の二人は此方を見て居た。

食事を濟まして、欄干に凭り懸つて、湖水を見て居た女は、かう言つて男の方を振返つた。

『ちよいと來て御覽なさい。』

其處には、湖水を遊覽する一隻の舟が今出ようとして居た。一番最後に遣つて來た派手なつくりをした女が慌てゝそれに乘ると、舟はゆるやかに雁木から離れた。辷したやうに滑らかな碧い湖水には、船頭の漕ぐ櫓の痕がぶたぶと日影に光つて見えた。

男が三人、女が二人、それに十歲位になる女の兒が乘つて居た。麥酒の罎や菓物や茶道具などが載せてあつた。艫尾の方に置かれてある七輪の鐵瓶の中には、德利が小さく見えて居た。

流石に日ざしが暑いと見えて、男の一人は新しい手拭で頰かぶりなどをした。面白さうに樂しさうに笑つて話をして居るさまが、手に取るやうに此方から見えた。舟が少し出た處で、最後に乘つた女は、目の覺めるやうなお納戶色の蝙蝠傘をぱッと開いた。

旅館の二階三階からはそれを見て居る人が多かつた。新婚の二人も矢張欄干に凭りかゝつて見て居た。

『ぢや見せるわ。』

女は懐からそれを出して、澤山繪端書の重ねてある處に置いた。――番地――樣と表面にしてあつて、『御機嫌よう御座いますか、お體を大切に。』と書いてあつた。女は笑つて男の顏を見た。男も笑つて居た。

『よくつて？　出しても？』

『わるくつたつて、爲方がない。』

男は別に機嫌がわるいといふ風にも見えなかつた。

『貴郎も何處かへお出しなさいよ。』

『僕は何處にも出す處がない。』かう言つたが、その端書を取つて、『僕も此處に署名してやらうか。』

『えゝ。』

女は笑つて居た。

『本當に好いか。』

『いゝわ。』

『まあ氣の毒だからよして置かう。』

『いゝのよ、本當にいゝのよ構ひはしないわ。』

女は甘えるやうにして言つた。
『何處へ出すんだ？』
『好いとこよ。』
やがて繪端書は取寄せられた。それには、町の家並だの、瀧だの、歌が濱から見た男體山だの、中宮祠の前から見た湖水だのがあつた。女は其處に置いてあるペンを取つて、わざと品をして、綺麗な横顔を向うの二人に見せるやうにして、繪端書を書いた。
それは多くは簡單な暑中見舞であつた。『私、此處に來てますのよ。さびしい處ですの。』などと書いたのもあつた。平生贔屓になる客に充てたのもあつた。男は一枚々々それを飜して宛名を見た。
最後の一葉は、手に取つて、見えないやうにして書いた。書きながら、時々此方を見て笑つた。で、宛名を書き終ると、すぐそれを自分の懐に入れて了つた。
『お見せ。』
それを見て居た男は、笑ひながら手を出した。
『いゝのよ。』
女は初めは笑つて言ふことを聞かなかつた。
『見せたつて好いぢやないか。』

「歡樂の國」といふ名畫を曾てかれは見たことがあつた。背景をつくつて居る光線には、一味の深い悲哀と暗い幽鬱とが藏されてあつた。滿たすべからざる歡樂の不滿が常にかれを根柢から惱した。
女が物思ひに沈んだやうな顏をして居る時には、男は常に同情を持つた心持になつて居た。それと反對に、男が疲れ切つた不安な顏をして居る時には、女はそれを慰藉する樣なやさしい態度を取つた。

十五

女は時々都會の夜の灯を思ひ出した。『今頃は東京は賑やかでせうね……』かう言つてはいつもさびしさうな顏をした。湖畔の町へは、それでもよく出懸けて行つた。晝飯などを食ひにも行つた。旅館の室は多くは湖水に臨むやうにつくられてあつた。其處には卓が据ゑられて大きな花瓶に山の草花が一杯に投げ込まれたやうにしてあつた。
西洋人が二人づれで睦しさうに湖水を指して何か語り合つて居ることなどもあつた。ある日行つた時には、貴族の息子でもあらうと思はれるハイカラな若い男が、新婚らしい庇髪に結つた細君を伴れて來て居た。眼の綺麗な色の白い頰の豐かな女であつた。卓に凭りかゝつてペンで頻りに繪葉書を書いて居た。
『私も繪端書が書きたいわ。』

間は、滅多にそれは結つたことはなかつた。庇髪は、下町の座敷には伴はなかつた。

『今日は旨く結へたでせう？』

女はわざと男の氣分を引立たせるやうにして、後を向いて髪を見せた。

何故か今日は男は深い沈思から急に浮び上がることが出來なかつた。女に强ひて誘はれて散歩に出ても、快活に笑つて話をする氣分になれなかつた。

心も體も疲れて居た。あらゆる束縛から離れたいといふやうな佗しい心持と飽まで歡樂を追求しようといふやうな熱した心持とが一緒になつてしつこく絡みついて居た。男は唯女の話しかける言葉を點頭いて歩いて居た。

歡樂の滿足と慾求の滿足とは、男に取つてまだ十分な滿足ではなかつた。其處に猶ほ何か深いまことの意味が要求された。眼、眉、髪、肌、それに其身の總てが占領されて了つた時の心は、暗くもあり、重苦しくもあり、佗しくもあつた。世界が丸で別の世界のやうにも見えた。それに引かへて、女は心も體もすべて男にまかせ切つた時に於てのみ唯幸福であるといふやうに見えた。

其時に於ける女の笑ひ――その笑ひを男は時々思ひ出した。それは黄いやうな感じのする笑ひであつた。その笑ひの底には、恐ろしい影がひそんで居た。他界から微かにさして來たやうな影がひそんで居た。それは死に近い影であつた。

其處に蹲踞んで花を探つてる女の方をかれは再びぢつと見た。

女は男がさうしたことを考へて居るとは夢にも知らず、やさしい笑を顏に湛へながら、折り取つたおいらん草の紅と白とを組み合せて、それを默つて物を考へて居る男の胸のところに挿した。半ば捲くられた女の腕は白かつた。

『何を考へて居るの？』

『何にも考へて居ない。』

『嘘！　考へて居てよ。』男の顏をぢつと見て、『そら、考へて居るぢやありませんか。』

『…………』

『ちやんと解つてよ。』

男は猶默つて女の方を見て居た。

『つまらないことを考へるのは、およしなさいよ。』おいらん草の束ねたのを襟の處に骨折つて挿して、

『貴郎も隨分神經家ね。』

男が猶默つて居るのを自烈度さうにして、『何處かへ行つて見ませうよ。そんなにして寢てるたつてつまらないわ。』

女は丸髷が壞れてから、自分で器用に庇髮に結つた。それが一層女を素人にして見せた。都會に居る

なれるでせうね。私の心をすつかり貴郎に見せる時は何時來るでせうね。早く、早く其時が來れば好い。』などと書いてあつた。かれ自からに取つても、何うかして、完全に女の體と心とを自分のものにしたかつた。競爭者から安全な地位に移して、朝に夕に其眼、其眉、其髮を見て居たかつた。――それが出來ない位なら、寧ろこの二人の間を破壞して、全く路頭の人になりたいとまで思つた。

十日間――尠くとも其十日間はかれは女を獨占することが出來た。其眼、其眉、其髮を常に自己のものとして眺めることが出來た。しかしそれが何であつたらうか。それがいかなる効果を齎らして來たであらうか。またそれが何んな新しい路をかれ等の前に開いたであらうか。

ある希望を滿たし得た刹那の歡喜以上に何等の意味ある發展を來したであらうか。依然として女の心は女の心、男の心は男の心、女の體は女の體、男の體は男の體ではなかつたらうか。心はすぐに離れることが出來るではないか。いかなることを考へる自由をも有してゐるではないか。女はすぐ他の男を思ひ浮べることが出來るではないか。

こんな風に思つて居るかれの眼の前には、女を崖から突落した男だの女の横腹に鋭利な出刄庖丁を突き刺した男だのが歴々と浮んで通つた。昨日、瀑壺を覗いた時の女の恐怖も點頭かれた。

一方ではまたかうした力に縛られて、何うすることも出來ない其身が繰返して考へられた。『もう駄目よ、そんなことを言つたつて駄目よ。』かう言つた女の言葉も思ひ出された。

い眉を蹙めた。

『もう歸りませうよ。』

女はかう男を促し立て、急いで恐ろしい瀧の畔を去つた。林の中から明るい湖水の見えるあたりに來るまで、女は男の手を離さなかつた。

十四

男は籐椅子に凭りかゝつて、凝と女の方を見て居た。

女は湯上りの艶な姿を、夕暮近い庭に見せて、靜かに歩いて居た。凉しい風が灌木の林を絶えず吹いて通つた。

何うすることも出來ないと云ふやうな考が男の頭腦を頻りに往來した。女が此處に來てから、もうかれこれ十日にもなる。しかし狀態は依然として元のまゝである。同じ不安、同じ不滿足、同じ動搖――。何ういふ風に結末をつけてゆくか。何う云ふ風に新しい路が開けてゆくか、かれにはそれが解らなかつた。解らないのが、かれには辛かつた。

『商賣などをやめて、早く一緒になりたいねえ。……始終中、髷に結つて居たら、うれしいでせうねえ。』女は此處に來ない前にも度々かうしたことを言つた。女からかれによこした手紙にも、『何時一緒に

の手を當てさせて、
『ひどい動悸でせう？』
かう言つて女は男の顔を見た。
『何も、そんなに怖がることはないぢやないか。』
『だつて、怖いわ。』
『何うして、今日はそんなに怖いんだらう！　此間はそんなことはなかつたぢやないか。』
『さうねえ、此間は怖いなんて言はなかつたわねえ。』
女の顔は白く且つ蒼かつた。唇も色を失つて居た。男は四五日前に女と初めて此處に遣つて來た時、『此處から一緒に落ちて死にませうか。』と快活に言つた女の言葉を思ひ出して、それを今の狀態に引較べて考へた。
女中の運んで來た茶は溫かつた。女は氣になるやうに、女中を捉へて、昨日飛込んだ男の話を詳しく訊いた。『いやだわねえ、そんな處を見てゐて、姐さんは氣味がわるくなくつて？』
『もう度々見つけてをりますから。』
『だつて氣味がわるいねえ……』間を置いて、『何だつて、手招きなんて、そんな眞似をするんでせう？でなくつてさへ、後を引くものだつて言ふぢやありませんか。厭なことねえ？』女は不氣味さうに美し

死といふ恐ろしい念が同時に二人の胸に上つて來た。

二人は顏を見合せるのを恐れた。

『もう行きませうよ。』

暫くして女はかう男を促した。

男は默つて立つて居た。死でなければ完全に女の愛の全部を占領することが出來ないといふことを考へて、かれはぞつとした。無數の牲を呑んで猶平然として落ちてゐる瀧は、更にこの離れ難ない一致し難い二つの體を呑むべく用意してゐるやうに見えた。

『もう行きませうよ、貴郞。』

女は再び繰返して言つた。顏には神經の顫動が歷々と見えて居た。

男はそれでもまだ默つて瀧壺を覗いて居た。飛沫は上つては晴れ上つては晴れた。昨日も男が此方の女中を手招きして勢好く飛び込んだといふ落口の柵が黑くかれの眼に映つた。

『後生ですから、行きませう。』

女は泣きさうにして言つた。

坂を登る時、女の脚はぶるぶると顫へた。男は先に立つて手を引いて遣つた。瀧の上の休茶屋に來ても、女は猶その恐怖の念を捨てなかつた。『御覽なさい、ほら、こんな動悸。』早鐘を撞くやうな其の胸に男

は、強くそれが男の胸に響いて來た。女がそれを思つて居ない時でも、さう思はれて爲方がなかつた。

しかし女もてのことを思ひ出さないでもなかつた。さうした經驗を多く持つて居る女に取つては、一人の男から他の男に移つて行くことは、さう大して問題とするに足らなかつた。寧ろ一つの男の心よりも無數の男の心を占領することを女性の矜持としてゐた。女は、湖水のほとりを歩きながら、さうしたことを一人で考へて居ることなどもないではなかつた。

男の心と女の心とは、絡み合つて、縺れ合つて、そして常に離れようとして踠いて居た。

靜かな林の私語が二人の周圍にあつた。

十三

瀧壺の見える處へと二人は下りて行つた。落つる瀧の音は人語を辨ぜぬほどにに凄じく四邊に反響して聞えた。

路の盡きた處には、危險を拒ぐための柵が嚴重に結ひ廻してあつた。二人はそれに凭りかゝつて瀧壺を覗いた。

飛沫と霧との底に碧い淵が恐ろしい口を開いて居た。

二人は何も言はなかつた。女の手はいつか男の手を堅く握つて居た。死――今まで起したことのない

『何うしてッて言ふ譯もないけれど……何だかつまらなさうだから……』

『つまらなさうに見えて？』

かれは笑つて點頭いて見せた。

『そんなことはないわ。』

かう言つたが、女は矢張りつまらなさうに、退屈さうにしてゐた。

倦怠、疲勞――そこから戀のにげて行くのをかれ等は恐れた。

強い抱擁、烈しい接吻、それでなければ、二人は滿足を得難かつた。その瞬間に於いてのみ、二人は底に觸れたやうな氣がした。

はなやかな賑やかな町の灯、人の心を耽溺の底に引張つて行くやうな音樂の調子、自由な、派手な、放蕩な生活、さういふものが、女の默つてさびしさうに物思はしげにして居る顏や態度の背景をつくつて居た。そしてその背景は、常に女をかれから奪ひ去つて行く大きな力の一つであるやうに男には思はれた。

別れの手紙を書いた時の氣分を、男は時々繰返した。女が此處に來てからも、尠くとも二三度は男はそれを言ひ出した。しかしそれを言ひ出す時は、氣分の爽かな輕い心持の時に限つて居た。その言葉も半は戲談、半は皮肉と言つたやうな淺く輕い調子を帶びて居た。それに引替へて、互ひに默つて居る時に

互ひに心を合せようとするやうな努力が常にかれ等の間に働いて居た。默つて顏を見合せて居る時間を二人は成たけ避けるやうにした。

それは猜疑と不安との時間であつた。觸れ合ふ眼と眼とは、互ひに其心の底を讀まうとして居た。然し幾ら打割つて見せても、まだ觸れ得ない心が底に殘つて居た。

二人の戀は普通に見るやうな簡單な熱い烈しい戀ではなかつた。

『何うして、さう貴方は薄情でせう？』

かう言つた女の言葉は男に對する女の要求をまだ十分に言ひ現はしては居なかつた。

男はまた男で、さも心のさびしさに堪へ兼ねたやうに默つて、『捨てゝ行くやうなことはもうないね？もうそんな間柄ではないね？』かう言つて、女の手を握つたりなどした。然し矢張心の底では、まださういふ風に女を信じては居なかつた。

ある時、男が、

『かうして居てもつまらないだらう？』

かう訊くと、

『何うして？』

くつては、子供は出來ない。』

『さう？』

かう言つて女は默つて考へて居た。

『その證據には、お前は心と體とをすつかり男にまかせて了つたやうなことはあるまい？』

女はまだ默つて居た。やがて、

『ぢや、まァ、私は心から惚れた人がないといふ譯ね？』わざとらしい笑ひ方をして、『さうかしら？……さうね……さう言はれゝば、さうかも知れないわねぇ。貴郎にだつて、心から惚れて居るつて言ふ譯ぢやないかも知れないわね。』眞面目なやうな戲談なやうな眼付をして、

『何故私はかうでせう？　疑ひ深いんですかねぇ。』

『疑ひ深いのとは違ふよ。……隨分熱心にはなるんだよ。しかし何處かかう氣が定まらないやうな處があるね。』

『さうですかね。性分ですかね。』かう言つた女の顏には一種苦しさうな表情が歷々と見えて居た。すぐ、『何うして、こんな性分に親が生みつけて呉れたんでせう？　詰らない！　詰らない！　いくらひとが惚れて居てもさう思はれるんだもの。私の顏や心持がさう出來て居るんだから。』投げるやうに、『子供なんか要らないわ。男なんか賴りにならない！　私は一生ひとりで商賣して暮らすわ。』

な氣がするんだね？』
『さうかも知れませんよ。』
男は考へるやうな眼付をして、女の顏を見つめて居た。
暫くしてから、
『とてもお前には子供は出來ないね。』
『さうでなくつてよ。かういふ商賣をして居ても出來て爲方がない人さへ隨分あるのよ。』
『しかしお前には出來さうもない。』
『何故なの？』
『男に捉へられないやうな處がある女には、子供が出來ない。』
と、女は男の心を讀む樣にして笑つて、
『ぢや、私はうは氣だと言ふのね？』
『さうぢやないけれど、お前の心持には、何處かかう男に底を見透されまいといふやうな氣分がある。何處までも自由で居たいつていふ樣な處がある。さういふ風な女には子供は出來ない樣だね。』
『そんなことはありませんよ。』
『ないことはない。僕はいつもさう思ふよ。女は男にすつかり心と體との全部を任せて了ふやうでな

に水を渡つて聞えた。

『西洋人が來たのね……それは可愛い子が居るのよ。私がさつき其處を通ると、にこにこして立つて居ますから、此方からも笑つてそばに寄ると、小さい方がね……さうね、五歲位の子よ、女の子よ、それが、私の方に飛びついて來るんでせう。私本當に可愛ゆくなつて了つて、すぐ抱いて遣つて、いろいろあやしたり何かしてゐると、ぢき、その門の中に母さんらしい人が見て居て、私の方に來て何か言ふんですけれども、ちつともわからないのねえ……本當に西洋人の子供は可愛いわねえ。』散步から歸つて來た女は、かう言つて『私、子供が欲しいわ。』

『さうかね、お前なども子供が欲しいことがあるかね？』

『それはあるわ。』女は片頰を笑ませて、

『可愛い子供を見ると、私にもあんな子供があつたら、と思つて、考へるわ。そりや商賣をして居る中は、出來ては困るけれど、一生子供はないのかと思ふと、心細くなることがあつてよ。』

『さうかな、僕はまた子供など欲しくはないと思つて居た。』

『女はさうは行きませんよ。』

『さうかな、して見ると女は矢張子供が一番大切なんだね。子が無くつては、生きて居る効がない樣

かれが見て居ても、可哀相に思はれるほど鬱ぎ込んで居る時もあつた。その時は機嫌を取つても効がなかつた。默つて、蒼い顏をして、碌々口も利かずに居た。これが何うしてあのやうな快活な明るい調子を出すことが出來るかと不思議に思はれるほどであつた。

寧ろその複雜した對照が、女の眼を美しくし、女の心を美しくし、女のスタイルを美しくして居た。始めは男はそれを唯變つた不思議な心の姿とばかり思つて居たが、今ではもうさう簡單には思はれなくなつて居た。その明るい暗い心が、ぴつたりと男の心に絡み著くやうになつて居た。

さうした社會によく見る女のやうなうは氣な移り氣な處はあつても、一方には何處か眞面目な眞率なところがあつて、それが女の心を一層複雜にして見せた。

女は以前にもその幼い生立を話して聞かせた。何不足ない町娘で育つて、藥師の夜の緣日には、近所の若者の評判にも立てられ、踊の師匠への行きに歸りに、その派手な姿は行きかふ人の眼をも惹いた。『今でも、其處を通ると、昔の藏がちやんと殘つて居るのよ。』その話をする時は、女はいつも聲を曇らせた。

一日一日とさびしい湖畔の生活はつづいた。夏は段々暑くなつて行つた。昨日は少し先きの別莊に西洋人が一家族遣つて來て、閉め切つた門は明け放され、窓には白いカーテンや簾がかけられ、子供が二三人、物めづらしさうに門の處に出て此方を見て居た。夕方には十八九になる娘の彈くピアノの音が靜か

『貴郎、本などを見て居るのはおよしなさいよ。』

かう口に出してこそ言はないが、眼は常にさうした意味を語つた。かうした山の中に來て、獨りで放つて置かれるのが女には殊につまらなさうに見えた。

『貴郎、瀧でも見に行きませうよ。』

時にはかう言つて男を伴れ出して行つた。

十二

都會の明るい灯や、響や、音樂や、さういふ空氣の中に朝夕を送つて居た女に取つては、林の中の生活は、やがて單調に退屈に思はれるやうになつて來た。湖水も、山も、靜かな天然も、一日二日經つ中には、始めのやうな色彩を其眼に與へなくなつて了つた。

それに、女は普通の女のやうに、落附いた靜かな單純なところがなかつた。聰かしげに覗いた青空のやうに美しく晴れたかと思ふと、すぐ後から鬱陶しい雲が襲つて來た。『何うして、私は、かう氣分が變り易いんでせう。』かう女は常に口癖のやうに言つて居た。

『本當に自分ながら、自分の心が解らなくなるのよ。一體、私の星が惡るいんだわね。三碧といふ星は誰も皆なかうなんですッて……厭になッて了ふわ。』男はかうした言葉をよく耳にした。

形はどちらかと言へば、好い方ではなかつた。すらりとはして居たが、やゝほつそりし過ぎて居た。唯襟筋の長いのと髪の見事なのとが僅かにそれを償つて居た。

中でも一番特色を持つて居るのは、その黒瞳勝の眼であつた。それは日の光に由つて絶えず其色を改める海の波のやうに時によつて明るくもなれば暗くもなつた。心持の好い時には、滑かでやさしく何の波濤を起しさうにも見えないが、不機嫌の時には暗く皮肉な愁ひを帯びて、容易に料り知られないやうな深い祕密を包んで居た。かれはいつも其處に影と日向との巧に織込まれて居るのを認めた。

密樹の蔭で見る女は、中でも際立つて美しかつた。柔らかな、薄暗い空氣の中に見る輪廓は、明るい湖畔などで見るものとは全く趣を異にして居た。男が水色のハンモックを樺の林の中に吊つて、書など見て居ると、女はいつも其處に遣つて來て、樂しさうに笑つて話し懸けた。

その時は屹度林の間を洩れて、美しい日影が濃淡の縞を織り出して居た。涼しい風が浴衣の袖を吹いて通つた。

『それは何です？』

かう言つて、男の手から洋書を取つて、わざと頁を飜へして見たりなどした。

ある書の挿畫には、男と女とが抱き合つて居るものなどもあつた。ぢつとそれに見入つて居た女は、

『これは小說？』かう言つて男の方を見て、『何うして居るの？　これは？』などと訊ねた。

『さう？　貴郎のものぢやなくつて？　貴郎の私ぢやなくつて？』男の顏をぢつと見て、『まだあんなことを言つてるんだもの。私、本當に厭になつて了ふわ。こんなに迄しても、私の心は解らないのかしら。』

かれは別にそれを辯解しやうともしなかつた。女が立つて鏡臺や化粧道具を片附けるを見ながら、別れの手紙を出した時の心持などを考へて居た、

しかしそれも僅かの間であつた。二人はやがて睦しさうに伴れ立つて湖水の方へ出懸けた。

十一

女は絕えず異つた態度と表情とを見せて居た。着物や化粧の具合で、肩がほつそりと柔かに見えたり、顏が蒼くヒステリックに見えたり、姿が生々と快活な風に見えたりした。眼の周圍に濃い影の生ずる時には、其心が相手の心にぢつと浸み込まなければ止まないやうな一種の潤ひを持つて居た。時にはまた非常に醜く見えることもあつた。思ひ屈してつかれ果てたといふやうな表情をする時には、口が際立つて大きく見えた。髮の毛の濃いのを誇りにして居る女とは思はれないほど艶のない衰へた氣分を起させることなどもあつた。

心の明暗がこれほどその態度に影響を見せる女も滅多になかつた。潮のやうな心の干滿――其處に單純でない見透かされない捕促すべからざるエキスプレッションが働いて居た。

かければ、山から水が來るやうになつて居るから。』

『さう？』

見る見る女の髪は綺麗に成つて行つた。毛筋を取つて、二三度梳ると、鬢はふつくりと結立のやうに水々しいふくらみを出して來た。毛筋で撫でた髷には、新して筋がくつきりと鮮かに立つて見えた。

白粉下をつけて、白粉を塗つて、さて小刷毛でそれを撫でると、顔は見違へるやうに柔かな落附いた色を帶びて來た。女は今一度合せ鏡をして、後の髱の具合を見て、是で好いと言つたやうに、バタバタと鏡臺を疊みにかゝつた。襟をかき合せた派手な中形が殊に其姿を艶に見せた。

『お綺麗になつたでせう？』

わざとこんなことを言つて、男の方を見て笑つた。

今日に限らず、男はかうした場合には、いつも女の媚に對して、一種の輕い憎惡を覺ゆるのが常であつた。それは自分の力で女の總てを占有することの出來ないのを憎むやうな心持でもあれば、其力に捉られるのを自ら腹立しく思ふ樣な心持でもあつた。他の男に對する嫉妬に似た情も交つて居た。男に捉へられない女の自由を憎むといふ樣な心も交つて居た。

『いくら綺麗になつたつて駄目だ。僕のものには何うせならないんだから。』氣が付くと男はかう言つて居た。

やがて髮に挿した蒔繪の櫛を取つて、鬢の後れ毛をかいたり、前髮の曲つたのを直したりした。空の晴れたのに、今始めて氣附いたらしく、『マア、好いお天氣ねえ、眩しいやうだわ。』女は櫛の手を留めて湖水の方を見たりなどした。

男は緣側に腰をかけて居た。

信玄袋の中には、新形旅行用の化粧道具が入つて居た。鏡だの、毛筋だの、刷毛だの、石鹼だの、白粉だのが何處に何う入つて居るかと思はれるやうに、その小さい革製の箱の中から出て來た。

『これは松島に行く時、買つたのよ。覺えて居て？』女はこんなことを言ひながら、毛筋を長く兩方の鬢に挿して、鬢かきで髱の亂れを丁寧に梳き始めた。傍には眞鍮の金盥に湯が汲んであつた。

『此處はお湯は何うするの？　宿屋まで行かなくつては入れないの？』

『いや、其處に湯殿があるよ。いつでも立てられるやうになつて居るよ。』

『さう？』

熱心に鬢をかきながら、『では、今日は立てゝ貰ひたいわね。お湯に入らないと何だか氣持がわるいわ……貴郎は今まで何うして居て？』

『一人で立てるのも面倒だから、僕は宿屋まで出かけて行つたがね……立てるのは譯はないよ。樋さへ

久しい間、朝日の影の次第に湖水を占領して來るのを見詰めて居た。

かれは今まで湖水に向つて起したさまざまの感情を今の感情に引比べて考へて見ない譯に行かなかつた。空の晴れたやうに矢張かれの心も晴れて居た。光と歡喜とにかゞやきわたつて居た。朝日も湖水も何も彼も皆なかれと歡樂を同うして居るやうに思はれた。

尠くとも一時間位はかれは彼方此方と歩いて居た。子規の啼聲が常に增して冴やかに鈴のやうに聞き取られた。靜かな波の上には、舟が一隻二隻通つて行つて、段々高くなつた朝日は、今や殆んど湖の全面に輝き渡らうとしてゐた。此方の岸の草藪の露もキラ〳〵と七色に光つて見えた。

流石に女ももう目覺めて居るだらうと思つて踵を旋したかれは、まだ雨戸が三枚明けたまゝになつて居るのを見た。『もう起きないか、』緣側の處からかれはかう呼び起した。

女はまだ眠さうにして居た。起き上つて、傍にあつた小形の金時計を取つて見て、『貴郎は、いつも早いわねえ、まだ八時ぢやありませんか……え？　もう散歩していらしやつたの？　ぢや爲方がない起きるわ。』で、はだけた寢衣を搔き合せて、緣側にだらしなく坐つて、其處に散らばつて居る懷鏡を手に取つた。鏡には亂れた丸髷と白粉のはげた顏とが映つた。

『眠さうな顏ねえ！』

かう自分で言つて笑つて、『昨夜はよく寢たわ。矢張勞れて居たのね。』

い闇の中にはつきりと見えた。樂しさうに笑ふ聲もした。

林の中の別莊の雨戶が再び閉められる頃には、雨はまた音を立てゝ降つて來た。

十

朝はあざやかに晴れて居た。湖は鏡のやうに滑かに碧を湛へて、水禽の掠めて行つた後は、一痕長く水の上に白い線を引いて見られた。山はくつきりとその輪廓を靑い空に見せてゐた。

樹の梢からは、殘つた雨滴がをり〳〵バラ〳〵と熊笹の上に落ちた。空氣は澄んで、光つて、凄じかつた昨夜の雨や雲は何處へ行つたかと思はれた。

かれが雨戶を明けた時には、朝日は既に湖の半面を照して居た。『好い天氣だ！　好い天氣だ！』かう連呼して、彼はいぎたなく勞れて眠つて居る女を呼び起した。しかし女は眼を覺さうともしなかつた。

『もすこし寢かして置いて下さいよ。』

さも眠さうな、甘えるやうな聲で言つて、そのまゝ寢反りを打つて、向うむきになつて了つた。

かれは止むを得ず、前の方の雨戶を三枚だけ明けて置いて、ひとりで戶外へと出て行つた。で、少時の間、かれの姿は、湖に臨んだ丘の上に見えたり、漣の靜かに寄する汀の畔に見えたり、朝日の斜にさし透つた林の中に見えたりした。路が一方湖水になつて居る處では、かれは傍にある石に腰を懸けて、

雷は段々強くなつて行つた。耳を掩ふやうな凄じい音がすぐ頭の上でした。『大丈夫だよ。此處の雷は、音はひどくつても、滅多に落ちるやうなことはないんだから、』かれはかう女に言つて聞かせた。

『でもひどいわねえ。』

女は眞面目な顔をしてぢつとして坐つて居た。電光と雷聲とは絶え間もなく絡れ合つて、墨の樣な闇の中に、濡れた草藪と灌木の林と湖水とを青白く見せた。また光つたと思ふと、凄じい音が殷々として長く長く轟き渡つた。

雷の鳴つて居たのは、それでもさう長い間でもなかつた。一時間ばかりして、段々其音は遠く遠くなつて行つた。雨も小降りになつて來た。『もうあがつた。雨戸を明けよう。』かう言つてかれは立つて行つた。

『雷が鳴つたから、これて雨がすつかり上がるかも知れない。』つゞいてこんなことを言つたかれは、下駄を突かけて、戸外に出て見た。

雨は降つたり止んだりして居た。時々強く降つて來ては、またばつたりと晴れて行つた。山際に段々遠くなつて行つた雷の音に耳を傾けながら、女は漸く心が落附いたといふ風で、『隨分怖かつたわねえ……山の中でこんな雨に逢つたら、それこそ大變ね……早く來てよかつた！』

二人は猶暫く緣側の處に坐つて何か話して居た。ランプの灯のかげに動く女の丸髷と白い顔とは、暗

九

夕方から烈しい風雨になつた。

樹の鳴り草のさわぐ音に雜つて、ゴーと吼ゆる風の音は、山から山へ凄じく傳つて行つた。雨は瀧津瀨のやうに白く光つて軒から落ちた。

左程大きくなかつた雷も段々その響を加へて來た。電光は梭のやうに行き違つて、碓を廻すやうな音が絕えず湖水に響き渡つた。『雷さまは私好きよ。』などと言つて、緣側の柱の處に立つて、面白さうに降り頻る雨を見て居た女も、後には、『隨分ひどいのね。』かう言ひながら座敷の方に入つて來た。

『さう？　雷さまが此處の名物？　いやな名物ねえ。』

こんなことも言つた。

『貴郞何んだか氣味がわるくなつて來てよ。戶を閉めませうよ。』暫くしてから女はかう言つて立上つて、一生懸命に前の雨戶を引きはじめた。もう日は暮れかゝつて居た。

片時も止まずに雨は降頻つた。

雨戶はそれでもところどころ細目に明けて置いた。そこからは、洋燈の光が濡れた草の葉やら、おしろい草やら、棒のやうに漲り落ちる雨の脚やらにチラチラと搖いで映つて光つた。

女はそれには構はず、『屹度噓よ……さうよ。それなのに、私遣つて來たのよ。私も隨分馬鹿だわねえ。でなけりや、此處に來るのに、私を一緒に伴れて下さらない譯はないんですもの。別れるの何んのつて、あんな水臭い手紙をよこしたのは、さういふ心持なのよ。』

『そんなことはないよ、何故そんなことを言ふんだえ?』

『だつて貴郎も餘り好い氣だわ。可愛い顏をしてるの、本當の戀はあゝいふ娘でなくつちや出來ないのなんのつて……私の心だつて少しは考へて見て下さいよ。』

『なんだ? そんなことを言つてゐるのか。』

『だつて何だか解りやしないわ。さつきだつて、あの女中は厭に人の顏をじろじろ見て笑つて居るんですもの。』

『馬鹿なことを言つてるね、お前は?』

『何うせ馬鹿よ。』かう言つて、『本當につまらない! 怖い厭な思ひをして、こんな處まで遣つて來て……お邪魔なら、來なけりや好かつた。』

こんなことを言ふかと思ふと、女はすぐ笑つて話をして居た。急須に湯をさして持つて來て、『もう奥さんが來たから、浮氣は駄目よ。』などゝ言つた。

に、一人で居るなんて、私などにはとても出來ないわ。』

やがて女中の話が出ると、

『好い容色ね。』

かう女は言つた。

『容色はよくないけれど、鳥渡可愛い顏をして居るだらう? それに罪がなくつて好い。本當の戀なんて言ふものは、あゝいふ娘でなくつては出來ないんだ。』

『初めつから貴郎の世話をしてゐて?』

かれは笑つて點頭いて見せた。

『貴郎に惚れて居るのよ、屹度、』『平氣な顏でこんなことを言つて、』『だつて、すぐ赧い顏をするんですもの……私が來て、お氣の毒見たやうね……』女は笑つて居た。

いつも男の經驗するそゝられるやうな氣分が續いた。嬉しいやうな佗しいやうな樂しいやうな心持が男の體を動搖させた。女が持つて居る力に引摺られて行く佗しさが強く意識に上つて來た。

『でも、本當は、私のことなんか何うでも好いんでせう。淋しかつたなんて、實は嘘よ。氣まぐれに端書を呉れたのよ……』

『そんなことはないよ。』

『ぢや、當分此處に居ても好いんだね。』

『それは好いわ。そのつもりで來たんですもの。』

『でも、さびしいだらう？』

『そんなことはないわ。靜かで好いわ。本當に人氣離れておく山住ひだわね。』

かう言つて快活な調子で『たうとう來たわね、日光に？』

女は籐椅子に腰をかけたりなどして居た。根上りに結つた丸髷には、翡翠の根掛がよく似合つて見えた。細い華奢な指には小さなダイヤの指環が光つて居た。

『これ、此間貰つたのよ。』

こんなことを言つて、それを呉れた客のことを笑つて話して聞かせた。

此處に來てからの生活のさびしかつたことなどを男が話すと、女は片頰を笑ませながら、面白さうにして聞いて居た。ヘンリツタの話は殊に深い興味を惹いたらしく見えた。『さうですかね。こんな處まで來て、そんな眞似をしないたつてよさゝうなものですにねえ。』

かう言つて考へて、

『まだ此處よりも奥なんですか、其家は？　西洋の人は矢張えらいわねえ。この雨に、そんな山の中

勝手元の方へ行つて窺いて見たりした。緣側の處へ行つては、『湖水が見えるわね、好い景色ね。』かう言つてすらりとした後姿を此方に見せて、暫しの間、ぢつと立つて見て居た。

『さびしいにはさびしいけど、靜かで好いわねえ。』

こんなことも言つて笑つた。

今までの淋しい侘しい林の中の生活は、俄かに派手な色彩で彩られた。女は艶のある聲で、東京の話を何彼と話して聞かせた。汽車の中で、女の一人旅を人々に怪まれた話などもした。

『何うせ素人には見えないでせう。なもんだから、皆なじろ〳〵見るんでせう。何うしても田舍ですわねえ……それから町でお中食をつかつて居ても、番頭さへ何方さまへなんて、怪訝な顏をして聞くぢやありませんか。女の一人旅はいやなものですわねえ。』

かれは次第に女の生々した話やら氣分やらに引込まれて行くやうに見えた。微笑を顏に湛へて、快活に話して居るさまは、今まで蒼い顏をして、ブラブラと其處此處を散步して居た人とは思へなかつた。時には女の話につれて聲高く笑つたりなどした。

『一人ではもしものことがあつてはッて、家でも言つたんですけれど……去年と違つて、體が自由になつて居るもんですから、さうやかましくも言ひませんのよ。』

何かの話の次手に、女がかう言ふと、

かれはかう言つて笑つた。
離れて苦しんで居た心がぴつたり合つたやうに二人は眼を見合せた。
これまでにも逢ふとすぐ心が解けて行つた。
明るい笑顔の前には、疑惑も不安も動搖も何もなかつた。折角思ひ立つた決心もまたこれで水の泡に歸して了つた。こんなことを思ひながら、かれは女の方を見て居た。
しかし一通の端書に引寄せられて、遙々雨を衝いて、この山の中まで女が遣つて來たといふことは、かれをして男性の矜持を保たしむるに十分であつた。
『それでも本當によく來て呉れた。』
かれは今一度かう繰返して言つた。
『よく來て呉れた處ではないのよ。お禮など言つて貰はうと思つて來たんぢやなくつてよ。貴郎にあんな風に思はれては、私は立つ瀬がないから、何も彼も捨てゝ置いて出て來たのよ。來る間も、それや氣が氣ぢやなかつたわ……わかつてね、わかつて下すつてね。』
女はかう言つて、男の心を引きつけなければ止まないやうな眼付をした。
女は嬉しさうにして居た。少時してから、室の中を其處此處と歩いたり、火鉢の前に坐つて見たり、

『それでも逢はれて本當にうれしかつた。貴郎がもし居なかつたら、何うしやうかと思つて、心配しいしい來たのよ。』

『それで家の方は、何ういふ風にして來たんだ？』

『家の方？　家の方は心配はないんですの、檢番にはちやんと用事をつけて來ましたから……本當に、貴郎、手紙のやうなことを考へて居るの？』

かれは女の方を見て、『だつて考へない譯に行かないぢやないか。僕だつて、男の一分が立たないやうなハメには陷りたくないからねえ。』

『そんな風に考へて居るの？』ぢつと男の顏を見て、『だッて、あれほど私の心を言つたぢやありませんか。それぢや貴郎には私の心はまだ解つて居ないのねえ。』

『さう言へばさうかも知れない。殊に女の身ではさうかも知れない。けれど口で言つたことより、眼で見たことの方が確かだからねえ。……僕はまた今頃は箱根にでも行つて居たかと思つて居た。……まァ然し、よく來て吳れた。』

『まだあんなことを。そんな厭味を言ふやうな貴郎ぢやなかつたのに……。此頃は、貴郎も大變質が惡くなつてね。』

『さうかな。』

『それはさびしかつた。』

『私のことなど思ひも出さない？　すつかり忘れて了つた？』

かれは笑ひながら、

『忘れて了つたよ。』

『さう？　忘れて了つて？　ぢァ、何故あんなはがきなど下すつたの？』

かれは投げるやうに、

『まア、好いさ、そんなことは何うでも……』

『好くないのよ。私の心持が解らなくつては、私だッてつまらないぢやありませんか。それや商賣をしてるんですから、怒られるやうなことはそれや澤山あるでせうけれど。』

『まァ好いよ。』

『隨分心配してよ、私。あの手紙では、本當に吃驚してよ。貴郎は屹度何處かへ行つて了つたに違ひないし、行つた處は解らないし、申譯をしたいにも爲やうがないし……それは、隨分氣を揉んでよ。だからはがきを頂戴した時には、それは本當に嬉しかつたわ……まだ、私を忘れては下さらなかつたんですね。』

かう言つて笑つて、

女中は火鉢の傍に坐りながら、知れないやうにして、絶えず二人の方を見て居た。男は女中の眼の中に一種の笑が含まれてゐるのを認めた。

紺蛇の目の傘をさして聽て歸つて行つた女中の後姿を見送つて居た女は、『おとなしさうな女中ね。』かう言つて意味ありさうに男の方を見た。

『貴郎も隨分ね。』

『何故？』

『何故もないわ。人の氣を知らないのも程があつてよ。』

『でも爲方がないさ。』

『何故爲方がないの。』かう言つて正面から男を見た女の顏には、稍々眞面目らしい表情があつた。すぐに言葉をついで、『貴郎は私達の間があんな一本の手紙で別れられるやうなものだと思つて？』

『でも、僕は苦しくつて爲方がなかつた。とても僕の力では、世話が出來ないと思つたから、それであの手紙を遣つたんだ。』

『あの手紙を私は破いて捨てて了つてよ。』二人はまた默つた。

暫くしてから、女は、

『で、こんなところに居て、さびしくはないの？』

けて、再び柱の處に來て、體を斜に品をして坐つた。敏捷で、そして一刻もぢつとしてゐないその眼は、火鉢の傍で茶を煎れる支度をして居る女中の方を見たり、其處に坐つて居る男の方を見たりした。暫く默つて互ひに顔を見合せて居たが、

『何うして？』

やがて女はかう男に言つた。

『お前こそ何うした？』

『私？』可笑しさを包みかくしたやうな笑ひ方をして、「まァ好くつてよ、後で話すわ。」かう言ふ眼付をして、また男の眼をぢつと見た。

女中は茶を運んで來て、それを女の前に出した。男は、『羊羹がまだあつたらう？』かう女中に言つた。と、女は急に思ひ付いたやうに、信玄袋の中から、袋に入れた菓子を出して、『彼處で買つて來たのよ、』かう言つて、新橋の壺屋の唐饅頭を出した。

『これは旨いな。』

かう言つて、男はそれを一つ取つて、今度は女中に、『お時さん何うです、旨いお土産がありますよ。』

女中は顔を赧くして、鳥渡お辭儀をした。女は半紙を帶の間から出して、唐饅頭を五つほど包んで、それを女中の方へ遣つた。女中はまた辭儀をした。

暫くしてから、

『一ゝ何うして來たんだ。』

『何うして來たは隨分な御挨拶ね。』女はあざやかな笑を顏に見せて、『これでも一生懸命で來たんですよ。橋が落ちてたり何かして、それは隨分大變でしたよ。』

『今朝發つて來たのか？』

『え……今朝、上野から、』また笑つて見せて、『この雨ぢやとても行かれないなんて、皆ながおどかすんですもの。でも、何時この雨が歇むか解りませんからね……中禪寺に來てまアうれしやと思つて安心すると、まだ先だッて言ふんでせう。私、何うしやうかと思つた？』

男の方を見て、

『よくこんな處に居るのね。』

それは男の心をすつかり讀んで了ふといふやうな眼付であつた。私に逢つてうれしいでせう、かうして私を見て居たら、滿足でせう。かうその眼やら顏やらが言つて居るやうにも思はれた。

『橋の落ちた處は、それや大變でしたよ。見て居ると、石がドンドン流れるんですもの。妾、怖くなつて車の上で、戰へながらこゞんで通つて來たのよ。』

女はこんなことを餘念なく話してきかせた。で、羽織を脫いで、女中の持つて來た衣紋竹にそれをか

見て居た。湖水は鐵色をなして前に展げられて居た。雨がまた一しきりザアと降つて來た。かれは湖水の上に細かい斑紋をつくつて繁く落ちて來る雨をぢつと見て居たが、ふとある物の音を耳にして、それとなく眼を其方に移した。

見覺えある女中の紺蛇の目の傘につゞいて、深く幌をかけた車が一臺、饅頭笠をかぶつた車夫に曳かれながら、泥濘の深い雨の路を此方へ此方へと遣つて來るのが見えた。聞えたのはその車の轍の石にきしる音であつた。かれの胸は俄かに躍つた。もしやと思つたが、此雨にそんなことがありやう筈がないと思つて、すぐそれを打消して了つた。蛇目傘と車とは、絡れるやうにして、次第に此方へと近づいて來たが、やがて門の前に來たと思ふと、車夫は梶棒を下して、猫脊になつた後姿を此方に見せて、前の雨被ひを外づしにかゝつた。勝色の蝙蝠傘と白い手とが見えて、續いて大きな丸髷が見えた。はッと思ふ暇もなかつた。其處にくつきりと現はれた女の姿は、女中のさし翳す傘にさゝへられるやうにして、露の深い熊笹の間の路を此方へと來た。

八

『まァ大變な處に居るのね。』かう言つて、女は緣側の踏石から座敷に上つた。

餘りの不意に驚いたといふやうに、男は唯そはそはとして居た。急には言葉も出なかつた。

それから二三日は雨が降り續いた。灰色の雲が淡く湖水を鎖して、周圍の山も見えないやうな日が多かつた。梅の大きな幹からは、風につれた雨滴がをり〳〵屋根の上にパラパラと音を立てた。かれは散歩にも出られずに終日臥たり起きたりして居た。籐椅子の上に身を橫へて、晝寢をしてゐる顏は靑白かつた。

雲が古綿の樣にちぎれて飛ぶ日は殊に佗しかつた。山巓から湖上に渡る風は凄じい音をして、岸の樹立やら草藪を鳴らした。それに山の上は氣候が驚かるゝ程違つてゐた。袷を著たい位に肌が冷々した。返事は待つても待つても來なかつた。いつも合羽を著た郵便脚夫が降頻る雨を衝いて、ぬれた熊笹の中をガサガサと音を立てゝ入つて來た。その度每にかれは胸を躍らした。しかし多くの手紙の中にも、かれはそれを見出すことが出來なかつた。

天氣に似た佗しい氣分を抱きながら、かれは一日一日と暮らした。湖畔の一間に住んで居るヘンリッタの姿も此頃では滅多に見る樣なこともなかつた。蛇の目傘をさして、三度々々食事を運んで來る女中の姿が、唯灰色な單調を破る許りであつた。

雨は猶ほ降續いた。

ある日の午後、かれは例のごとく籐椅子に橫はつて、向うの山に懸つては晴れかゝつては晴れする雲を

薄暮のやはらかな空氣は、かれの心を次第にやさしい甘い悲哀の中へつれて行つた。かれは久しく味つたことのない情味の染々と胸に溢れて來るのを覺えた。

ポストは町の中頃の大きな旅籠屋の前にあつた。かれが其處に來た時には、日はもうとつぷり暮れて、電燈が店と店につゞいた厨とを明るく照らして居た。忙しさうに働いて居る板番の男の顏は、物を煮る大鍋の湯氣の白い中にくつきりと見えた。其處に、ガヤガヤと一組の客が著いて、山駕籠が三挺まで並んで下された。『入らつしやい。』『おつかれさま。』と迎へに出る番頭や女中の聲を聞きながら、かれは繪葉書をポストの中にそツと落した。

七

かれは女から來る返事を期待しつゝ日を送つた。返事位は呉れるだらう。かう思ふ度每に、かれは繪葉書に書いた文句の餘りに素氣なかつたのを惜しんだり、引く力の薄かつたのを悔いたりした。男性の矜恃に捉へられて思ふ心を傳へることの出來なかつたのをも後悔した。

あの葉書では、無論女の心を動かすことは出來ないに相違なかつた。女は、その葉書を鳥渡手に取つて見て、すぐそれを傍に置いて、其儘忘れて了つたかも知れなかつた。強く出るにしても弱く出るにしても、今少し色の濃い言葉を用ゆればよかつた。こんなことを思ふほどかれの心は女の方に偏つて居た。

一勝負濟むのを待つて、かれは痩せた男を相手にして始めて見た。何うした加減か、今日は球が思つたやうに動かなかつた。いつもならば、容易く走つて轉がつて行く球も、思ひもかけない方へ向つて滑つて行つた。かれは一勝負すまして、不機嫌な顏をして其處を出た。

日增に暑くなつて行く此頃では、客ももうかなり多く集つて來て居た。庇髮に結つた若い女學生風の女だの、子供を連れた丸髷の細君だの、新婚の夫婦らしい二人づれだのが、旅籠屋を出て、涼しい湖畔へとぞろ〳〵步いて行つた。繪葉書を賣る店、FINE ARTS と書いたペンキ塗の大きな看板を掲げた店、それからステッキを並べた店、羔羹を並べた店などが兩側に續いた。片側町になつたあたりからは、薄暮の湖水が繪のやうに展げられて見えた。

岸に打寄せる漣の音は、何となくかれの頭に舊恨と哀愁とを齎すやうなやさしい調子を立てゝ居た。湖水の落口に架つてゐる橋の向うには、レーキサイドホテルの白い洋館が、樹の間からチラチラと見えて、橋の袂にはボートがタブ〳〵と波に搖られて居た。町の出口から橋までの間の平坦な路――その路をかれは行つたり來たりした。

險しい山路に勞れたといふやうな遊覽者は、幾組となく向うから遣つて來た。『やつとついた！』などと言つてくたびれた足を引摺つて行くものもあつた。旅籠屋の前では、番頭や女中が店頭に出て喧しい聲を立てゝ客を呼んで居た。

禪寺湖の繪葉書を取り出して、そこから一番よく湖水の氣分の出て居るのを一枚選び出した。

……此頃は何うして暮らして居ますか、それが知りたい。忘れやうとしても忘れることが出來ない……

唯かう書いたきりで筆を捨てた。此方の宿所は表面に詳しく書いた。

兎に角女の消息を聞かないでは、氣がすまなかつた。苦悶を免がれるにも女の力を借りなければならなかつた。水で消されるか、火で燃やされるか、何方にかしなければならなかつた。燻つて居るつらさをかれは此處に來てつく〲知つた。

夕暮の散歩には、かれは町の方へと出かけて行つた。懐中にはその繪葉書が入れられてあつた。まだかれはそれを出すやうな氣分になれなかつた。餘りに動搖し易い自己の腑甲斐なさが絶えず頭を苦しませた。一度ならず二度までも破つて捨てゝ了はうかとも思つて懐中から出して見た。

宿屋の別室には球臺が備へ付けてあつた。其處には、客が三四人頻りに球をついて居た。赤い白い玉が、青い臺の上を滑かに轉がつて通つた。へこ帶に金鎖を絡ませた紳士らしい八字髯の男は、痩せた背の低い男と笑ひながら頻りに何か批評してゐた。

かれは番頭の居る傍に腰をかけて、袂から敷島を一本出して、マッチをすつて火をつけて、スパスパとそれを吸つた。烟は緩かに輕く室の中に漂つて行つた。

此處に避暑に來て居るやうな風に書いた。『何うです、お暇なら出かけて來て呉れませんか……此間の仲直りもしたいから。』かうした風な文句が其處にも此處にもあつた。昨年の春時分、心がまだかう突詰めて居ない頃には、よくかういふ風な手紙の遣り取りをして、洒落を言つたり、からかつたり、わざと皮肉なことを書いて女を怒らせて見たりした。其頃のことがなつかしかつた。今一度其時分の心持になりないと思つた。

男が幾人あらうが、何ういふ生活をして居ようが、そんなことは、其頃にはまだ眼中に置いてなかつた。其頃では、女がみだれた姿をして室から出て來ようが、氣障な男と伴立つて一緒に歩いて居ようが、或はもつとひどい處を見せつけられようが、別にわるい氣分を感ずるやうなこともなかつた。かれは書いた手紙を讀み返しながら、其時の記憶を頭に繰返した。『まアこんな手紙でも遣つて見るか。』かう口に出して言つて、封筒に入れて、番地と宛名とを書いて、それを机の傍に置いた。で、やゝ暫く頰杖をして、湖水の方を見て居た。しかしいつの間にかその心が變つて居るのをかれは發見した。そんな輕い心持では居られなかつた。

暫し心を落附けようと思つて、かれは緣側から下駄を突掛けて庭に出た。かれの姿はやゝ少時庭やら裏の林の中やらに見えて居た。

三十分の後には、それでもかれは矢張机の前に來て坐つて居た。今度は茶代の返しに宿屋から貰つた中

一度筆を捨てたかれは、暫くの間、仰向けに倒れて、兩手を後腦のところに組合せて、ぢつと天井を見て居た。朝雲暮雨と書いた横額の長押にかゝつて居るのに今始めて氣が附いたやうにかれは無心にそれに見入つた。

ふと氣が附くと、自分といふものゝ意氣地なさといふことよりも、男の意氣地なさといふことが考へられて居た。女の勝利――それが腹立しかつた。

それでもかれは筆を執つた。

始めに出來た手紙は、いかにも調子が弱かつた。『何うしても別れられない。』こんな文句も書いてあつた。『此間遣つた手紙はあれは破つて棄てゝ呉れ……今ではもうあんな心持ではないから。』かうした言葉も書いてあつた。湖畔の別莊の涼しいことだの、若い女中と二人で世を離れて日を送つて居ることだの、山百合の澤山咲いて居る事だの、其他種々な事を書いた。最後に、『この手紙を見たら、來て呉れ、……屹度來て呉れるね、』と書いた。

名宛を書き終つて、さて讀返して見た。『こんな手紙が出せるか。』かれはいきなり自分でかう言つて、さも腹立しさうにそれを破つて捨てた。

次に書いたのは、今少し輕い洒脫な調子を持つて居た。苦悶を出來るだけ包みかくして、靜かに一人

えた。此頃で稀に見るといふ靜かな夕暮であつた。滅多に筆など執つたことがないので、硯は全く乾いてカラカラになつて居た。水入れにも水が一滴も入つて居なかつた。かれは手紙を書かうとする思ひ立ちの前兆が凶であつたやうに、其儘水入を下に置いて、兩手を頰にあてゝ、久しい間深い思ひに沈んだ。

暫くして彼は身を起した。手には水入れを持つて居た。筧から綺麗な水のちよろちよろと落ちるところには、さつき女中が裏の山から取つて來た大きな山百合が無造作にさしてあつた。ボチャンと音して水の底に沈んだ水入からは、小さい泡がブク〳〵と湧くやうにあがつて、やがてそれがばつたりと止つた。瀨戶の藍の濃い色がくつきりと水の中に見えて居た。

机の前に戾つて來たかれは、兎に角水入から水を硯に落して、そして靜かに墨を磨り始めた。

墨が濃くなつても、かれは磨る手を留めなかつた。引張つて行く力と押へて居る力とは、其處でも爭鬪を續けて居た。しかし矢張引張る力には敵はないと言つたやうに、かれは鞄の中から卷紙と封筒を出して、そして筆を執つた。

書きかけては、幾度となく丸めて捨てた。今の氣分にはまつたやうな文句が何うしても出て來なかつた。前に書いてやつた手紙が思ひ切つて絕望的であつたので、それと今の氣分との間に、大きな間隔が出來て居るのをかれは發見した。

て歩いた樂しい夕暮の徜徉や、さうしたあらゆるものが新しい幻影となつて、かれの前を生きて過つた。

かれはかの女を自由にした。解放した。かの女は何處へ行つてももう好い身になつてゐる。誰を情人にしても差支へない身になつてゐる。一日と言はず、半日と言はず、一時間と言はず、誰かの持物となつて、もう再びと指をさすことも出來なくなつて居るかも知れなかつた。それからまた女の身として、あの手紙を見て、かれのことはもう駄目だと失望して、あきらめて、他の人に身を寄せるやうになつたかも知れなかつた。

それを思ふと、居ても立つても居られないやうな焦燥をかれは感じた。

此方の心持の離れて行く度數は、向うの心持の離れて行く度數である。かういふ考へが此時、突如として、頭を衝いて來た。女とかれとの間には、人知れない不可思議な大きな力が開いたり閉ぢたり離れたり卽いたりして居た。

動搖、疲勞、不定――さうしたものから遁れようとして來たかれは、いつの間にか再びその巴渦の中に心を投じて居た。離れない爲には、何んな犧牲を敢てしても差支へないといふ心になつて居た。

手紙を書かうと思つて、かれは籐椅子の上から下りた。机は室の一隅に置いてあつた。其處からは硝子障子を隔てゝ湖水の一角と、深い碧の上に半孕んだ白い帆と、徐に其影を水に涵して居る山と雲とが見

癒え懸けた創傷に更に鋭利な刄を當てられたやうな氣もした。

『一度、肉の關係をつけたものは、何うしたつて離れられるものではない。』かう言つて、その作者は、皮肉な笑を洩して居るやうにも思はれた。更に一歩進めて、『ざまを見ろ！　好い氣味だ！』かうも言つて居るやうにも思はれた。

此處に來てから、もう一週間も過ぎ去つた。其間、かれは僧侶のやうな生活を送つて居た。夜半に眼を覺ますと、洋燈が暗く其の傍に點いて居て、徒らに湖水の波の音がさびしく聞えて來るばかりであつた。傍には誰も居なかつた。

それは夜ばかりではなかつた。晝間でもさういふ狀態の氣分に置かれて居る時が度々あつた。髮やら眉やらが常にかれの眼の前にあつた。

さういふ時には、かうして此山の中に遣つて來たといふ意味が、かれ自身にも解らなくなつて居た。『いつそ、歸つて了はうか。』かう自分で口へ出して言つて見ることもあつた。

一週間逢はずに居ると、嫉妬も不安も男の意氣地も何も彼も忘れて了つて、唯その髮と肩とに向つて屹度引づられて行つた心、それがまた今烈しい力で繰返されて來た。アスハルトの敷き詰めた兩側の路、其處を駒下駄を引摺り乍ら步いて居て、ふと俄かに逢ひたくなつて出懸けて行つた時の町の灯や、何處かへ行つて居ないところに電話をかけて、失望して、三日も懊惱して暮して、それから一緒に伴れ立つ

れば、暗い佗しい如何ともすることの出來ないやうな苦悶もあつた。作中に出て來る男と女との活劇は、矢張かれと其女との活劇であつた。かれは時々其洋書を下に置いて、重い苦しい長太息を吐いた。顔を上に眼を大きく明いてぢつと物を考へて居るやうな恰好をして、さてまた熱心に讀み始めた。鍵を女の手に握られて、出ることも入ることも出來ないやうになつた男の心が殊に深くかれの同情を惹いた。かれは女性に對する男性の復讐などといふことを考へ乍ら、また長大息を吐いた。

洋書の背皮には、Notre Coeur. by Guy De maupassant としてあつた。

その小説をかれは一日懸つて讀んだ。

それはかれの苦痛を眼の前に描いて見せたやうなものであつた。思ひ當る所がある度毎に、かれは頭を左右に振つた。かれは最後の頁を飜すまで、それを手離すことが出來なかつた。

讀終つて、かれはホッとして、その書を傍に置いた。

頭は熱して居た。胸は押しつけられるやうな感じがした。最後の解決が不滿足であり乍ら、而も佗しい心細い感情をかれの心の底に渦のやうに捲き起させた。

知るといふことゝ、判斷を促されたといふことゝは、覺めるといふことに就いて、多くの影響を持つて居なかつた。不思議にも女の幻影が第一に鮮かに浮んで通つた。

べて自分のものにしなければ滿足されないものであつた。

ある時はこんなことも言つた。

『もうお互ひに隨分長く一緒になつて居た。もう別れても好い時分だ。……どうだ、淨く別れようぢやないか。』

『え、別れませう。貴郎がお厭なら、いつでも別れてあげてよ。』

二人は眞面目な顏付をして居た。さてさう言つて置いて、二人は少時默つて顏を見合はして居た。女は口にした敷島の吸口をさも口惜しさうに嚙んで居たが、『別れられるなら、別れて御覽なさい。本當に貴郎は人の心も知らないで……』かう言つて、その吸殼を靜かに灰吹の中に落した。ジーと音がした。

其時、その音と同じやうな佗しさを覺えたことをかれは今でも記憶して居た。

何うせ一度は別れなければならない。それが何時何んな形式を以て現れて來るだらう？　かれはこれまでにもさうしたことを幾度も思つて見た。時にはそれを想像して、其處にロマンチックな感じを味つて見ることなどもあつた。年月を經てからの再會、そんなことまでも想像した。

かれは再び洋書を手に取つて讀み續けた。かれは昨日これを讀み始めてから、少からず心を引寄せられたといふ風で、散歩にも出かけずに、熱心に讀み耽つて居た。すぐれた作家の筆に成つた心の閱歷には、底まで人を引かなければやまないやうな魅力があつた。其處には紅い血潮のしたたるやうな心もあ

それからかれは新聞を三種程取つて、女の顔の挿入されてある六號活字のところを熱心に讀んだ。其處にはさういふ社會の女の消息が短かく面白く書いてあつた。其處からでもかれは女の消息を知り度いと思つた。

六

『貴郎は私を信用して下さらない？』

其時、女は笑を含んで、かれの方を見た。その眼は今でもはつきりと思ひ出された。

『お前の心の全部を寄越せと言ふのではない。一部で好い――唯ほんの一部で好い。お前の心の何處かに僕が居さへすれば好いんだ。それだけは解つたね？』

『私は皆な上げるわ。此頃では一日だつて貴郎の事を思はないことはないやうになつたんですもの。』

男の言つた言葉も、女の言つた言葉も、兩方とも半分は虚僞であつたといふことを考へて、かれは今讀みかけて居た水淺黄の表紙の洋書を下に置いた。

虚僞？　虚僞と言ふ譯でもない。虚僞と斷定して了ふ譯には行かない。かうすぐかれは考へ直した。尠くとも其時かれの言つた言葉は、彼に取つては眞面目なものであつた。眞情を吐露したものであつた。しかし其の要求した一部は、一部ではなく全部であるといふことが段々解つて來た。髮も、眼も、心もす

かれは日を經るに從つて、いくらか其心が輕くなつて行くのを覺えた。勿論、それが以前よりも烈しい力で全身を壓すやうに迫つて來ることはないでもない。時には自分から何うすることも出來ないのに呆れて、ぼんやりと一日を暮して了ふことなどもあつた。しかし此頃では、本を讀んだり新聞を見たりする餘裕が少しは出來て來た。

東京のことも知り度い、友達の消息も聞き度い――其女の近況が殊に知り度かつた。かれは段々東京から來る郵便を待つやうになつた。

このかくれ家に、郵便脚夫が初めて郵便を配達して來たのは、二三日前の午頃であつた。その前にもかれは配達の時間を女中に聞いた。

『一體此處では一日に幾度配達するのかね。』

『三度でせう屹度、朝と午と晩と。』

其時女中はかう答へた。

女から手紙の來よう筈がなかつた。それに此處の宿所も知らせてなかつた。それでもかれは一束にして配達して來た手紙の中にそれを期待して居た。もしや交つて居やしないかと思つて、逸早くそれを引くりかへして見た。雜誌が一册、新聞二枚、手紙が三通、それが別に讀みたいと思ふやうなものでなかつたのを發見した時には、かれは尠からず失望した。

『また、ヘンリツタさんが通つて行つた。』

此頃では大分馴れて言葉をかけられても顏を赧くするやうなこともなくなつた女中は、ある時緣側の隅に立つて、こんなことを言つて、其方を見送つて居た。

『一體、何處へ行くんだね。』

かれがかう訊くと、

『ホテルでせう。』

『ホテルに誰かあの女の世話をする人でも居るのかね。』

『手代さん見たやうな人に賴みに行くんでせう。』

女中はこんなことを言つて笑つた。

『旦那さんを見つけて置いてから、出かけてくれば好いのにな……。』

戲談らしく言ふと、

『だつて、さうは行きません。』

『何故？』

『何故つて、さうは出來ないんでせう。』

女中はかう言つて笑つた。

て來ますから……それは賑やかなものです。』

『そして一體名は何と言ふんだえ……知らないかねえ？』

不意にかれは思ひ附いたやうにかう番頭に訊ねた。

『あの女の名ですか……さう、確かヘンリツタと言つたと思つて居ます。』

『ヘンリツタさん、好い名だな。』

かれはかう言つて笑つた、番頭もにやにや笑つた。番頭は聞きもしないのに、猶ほ種々のことを話した。中禪寺に近い別莊は、誰も女の素生を知つて居て貸さないので、止むを得ず、あんな處の漁師の家の間を借りたのだなどとも言つた。

それと知らない前と後とでは同じロマンチックな感じでも、著しく違つて居るのをかれは思つた。かれはさうした女性がこの淋しい湖畔に、自分と同じやうにして居るといふことを考へてひとり微笑した。さういふ女を卑んだり罵つたりする時代をかれはもうずつと以前に通り越して居た、さういふ種類の女には、かれはいつも一種の好奇心を以て相對するのを常として居た。

その女は派手な紅いパラソルをさして居ることもあつた。水色の服を長く引摺るやうにして歩いて行くこともあつた。帽子に挿した紅い薔薇はいつも遠くから見えた。

『フム、さうかねぇ。』

『何でも拵いだ金も餘程の高だッて言ふ評判でした。えらい女があるもんですな。こんな山の中にまで來て、そんなことをしないたつてよささうなものですにな。』

『でも商賣なら爲方がない。』

かれは笑ひながらかう言つたが、『矢張西洋人ばかりを相手にして居るのかね？……つまり相手を拵へて、此方から先の泊つて居る所へ出張するつて言ふ譯だね？』

『まア、さうですな、其處らの別莊なども泊つて歩くやうでした。』

外國のさびしい山の中に來て、湖水に面した一間に、さうした夏を送つて行く女が一層鮮やかに印象されて來るやうな氣がした。女の服の裾にまつはる可愛い小さい犬は、更に一層その周圍を繪のやうにして見せるやうな氣もした。

その女が遣つて來るのには今年はまだ少し節が早かつたなどといふことを番頭はやがて話して聞かせた。湖畔にある別莊がすつかりふさがる頃には、それは隨分賑かなもので、月の明るい夜など、其處にも此處にも二人づれの群が手を組合せて、蜜のやうな會話を取交すさうである。

『さうですな、八月の中頃でせう。年に因つて、丸で西洋人が來ないこともありますが、雨さへ長續きがしなければ、大抵遣つてまゐります。その頃は町からも、宇都宮からも、東京からも女が隨分上つ

かういふ處に同伴者もなく、かうして間借をして居る若い美しい女といふことは、かれの好奇心を惹くに十分であつた。あとから男の來るのを待つてゐるのか？　それともまたある苦悶を抱いてかうして靜かに世離れて日を送つて居るのか？

その婦人がフランス生れで、横濱から毎年遣つて來て、昨年は町の金谷ホテルに二月、此處のレーキサイドホテルに一月、隨分いかゞはしい噂を立てられた女であるといふことを番頭から聞いた時には、かれは新しいある好奇心の起るのを禁ずることが出來なかつた。

『はア、さうかねえ、それは驚いた！』

さも驚いたやうにかれは言つて、『何うも變だと思つた。一人で森の中を歩いて居るのも、可怪いし、あんな處に一人で間借をして居るのも普通ぢやない。何者だらう？　と思つたが……さうかな？』

かう言つてすぐ言葉を繼いで、

『ぢや、まア淫賣だね？』

番頭は笑つて、『さうなんで御座いませう。去年なども隨分喧しい騷ぎが起つたやうでした。イギリスの海軍の士官と貴族の息子とが其女のことで、決鬪をするなんて言ふ騷ぎで、中禪寺の駐在所でも大變眼をつけて居ました。何でも男に餘程多く關係をつけた樣な話でした……。』

影はかれを離れなかつた。散歩でもしてそれをまぎらすより他に爲方がないやうな日が幾日か續いた。かれは何うかするとそれでも賑やかな町の方へと出かけて行つて、球などついて見ることもあるが、大抵は人の居ない靜かな林の方へと足を向けた。

湖水を縁取つた路は長く長く續いた。それは何處迄行つたら盡きるかと思はれるやうな路であつた。藪と、熊笹と、栂の木立と、をり〳〵見える湖水と、それより他には何もなかつた。別莊らしい家屋ももう此處等には見當らなかつた。

思ひもかけず湖水の一角が俄かにその前に開けた。と、其處に一軒漁師の家らしい簷の低い板葺の家屋がぽつねんとして湖水に面して立つて居た。前には大きな網が日に向つて干してあつて、井戸の向うには汚い狹い勝手が覗いて見られた。渚には舟やらボートやらが繋がれてあつた。

湖に面した一間、其處にはハンモックが吊つてあつたり、籐椅子が置いてあつたり、卓が据ゑてあつたりした。卓の上には紅い白い花が大きな花瓶に生けてあつた。

例の夏場だけ西洋人に間貸をしたものと見える。かう思つたかれは、ふと傍に見馴れた可愛いその小犬の蹲つて居るのを發見して尠なからず驚かされた。犬の主人は、其處に、奥の籐椅子に身を横へて小說らしい本を熱心に讀んで居た。

『はゝア、こんな處に居るのか。』

『あの西洋の婦人はあれは何者です？』

ある日かれは若い女中にかう訊ねた。

『何で御座いますか……よく存じませんけれど……。』

知つて居りながら言ふを憚るといふ樣な風が其態度やら言葉やらに見えた。今日に限らずその西洋の婦人はよく別莊の前を往つたり來たりした。林の中でもこれまでに尠くとも三四度は邂逅した。

いつも小さい可愛い犬を伴れて居た。明髮（ブロンド）の、鼻の高い、色の白い、小づくりな若い女で、眉と眼との間に言ふに言はれない美しい表情があつた。小さな靴に長い服の裾を蹴つて歩いて行くさまは、人を惱殺させずには置かないといふやうな嬌態を持つて居た。

いつも一人で歩いて居るといふことが第一にかれの好奇心を惹いた。湖水に對つて物思はしげに默つて立つて居ることもあれば、口笛を鳴らして道草を食つてゐる犬を呼んで居ることもあつた。昨日逢つたのは夕暮であつた。薄暗い林の中にくつきりとその派手なつくりを際立たせて、いつものやうに靜かなしなをして歩いて來た。摺れ違はうとする時、その美しい眼はぢつと此方を見た。

そこは林の間から湖水の開けて見える處であつた。汀の石には漣がさゝやかな音を立てゝ居た。婦人は其處に立留つたまゝ久しく暮れてゆく湖水を見て居た。

ある日の散歩に、かれは今までよりも遠い處へと思立つて行つた。振り拂つても振り拂つても女の幻

たことを思ひ出した。其時かれは、『戀の出來ない女、戀を玩弄物にするやうな女、さういふ女が面白いんだ。其處に何うかすると洗錬された心持が發見されることがある。』こんなことを言つたのを覺えて居る。其時と今との心の推移の甚しいのをかれは考へた。

籐椅子の上からは、若い女中の姿が常に見えて居た。いかにも苦勞のなささうな無邪氣な顏をして、赤い襷を十文字に綾取つて、甲斐々々しく立働いて居るさまは、尠くとも今のかれの眼には一種の色彩と快感とを與へるに十分であつた。綠葉の薄暗い庭に際立つて明るく見えるおしろい草に對して、こゞみ加減に草箒を持つてあたりを掃除してゐる色白の頬やら、新しい手拭の下から黑い房々した髮を見せて、バケツに汲んで來た綺麗な水に雜巾を浸して居る白い手やら、筧の水のちよろちよろと落ちる傍で、無心に膳や椀を洗つて居るさまなどが、自分とは丸で關係のない繪の中の人物のやうにかれには思はれた。

『午飯（おひる）には、何か肴でない旨い野菜を煮るやうに言つて下さい。』

笑ひながら、こんなことを言ふと、

『野菜――かしこまりました。』

何處か嬌羞を帯びた女中の顏をかれはぢつと見た。

とを引較べてかれは黯然とした。

湖に沿つた路はいろいろな人が通つて行つた。目も覺めるやうな紅い撫子を山駕籠の上に結ひつけて行く娘もあれば、快活な草鞋がけで、採取網を肩にかけて、をりをり立留つて、蝶などを捉へて行く學生らしい少年もあつた。中には瓢簞などを下げて面白さうに笑つて話して行く老人達もあつた。睦しさうに手を組合せて歩いて行く西洋人の群は、殊にこの林の中に際立つて鮮かに見えた。

時には肥つた女の西洋人が、高い臺の上に幅をして乘つて通つて行くことなどもある。それを擔いだ四人の男の額からは、汗がダクダク流れた。

若い女中は、町のもので、家では穀屋をして居て、夏場だけ、親類の旅籠屋に頼まれて手傳ひに來て居た。『お時さんつて言ふんだね、君は？』ある時、かれはこんな調子で話しかけた。

給仕をする間も、何處となくオドオドしたやうな處が見えた。丸顏の、肌の白い、眼の綺麗な女であつた。何か言はれると、すぐ顏を赧くした。

『戀などをさうした社會の女に求めるのは、愚かなことだ。かれ等は自覺しないまでにも、自覺に近い分析と判斷とを持つて居る。經驗が生んだ偏つた觀察を持つて居る。本當の戀の出來るやうな女は、無邪氣な田舍娘か、感情に餓ゑた若い女學生にきまつて居る。』

何うした聯想か、かれは一年ほど前にある友人と灯の明るい都會の通りを歩きながら、かうした話をし

さんの爲めですもの。昔がこひしい。罪がなかつた昔がこひしい。――本當に明日は來て下さいますね。

十月十日

――より

――様

數通の手紙の殼は、秋が來て逸早く萎み去つた枯葉のやうにそこらに散らばつて風に吹かれて居た。庭では女中が庭を掃いて居た。綠葉を漉した明るい日の光は、籐椅子の人の着物の上に線をなして落ちた。

五

脚袢を著けて、齒を黑く涅めて、無造作に髮を束ねた女が、亭主らしい男と一緒に、睦しさうに馬を引いて行くのに邂逅すことなどもあつた。

『今日は。』

其女は挨拶をしてすれ違つた。

かれはその姿の林の中に見えなくなるまで見送つて立つて居た。その單純な無邪氣な生活が彼には羨しかつた。さういふ女を妻にして一生を送つて行く男と、疑惑と不安とに心も身も勞らして了つた自己

せんでした。關屋さんは可哀相な人だと思ひました。

八月十三日　　——より

——様

……明日は屹度來て下さい。そんなことを仰しやたつて、それはうそなんですから。貴郎もそんなことを御しんようなさるとは思ひませんでした。

辛い、悲しい。いつかも言つた通り、どうせわたくしは人並な死にかたが出來ない星なんですから。お淘宮の先生もちやんとそれは言つて居るんですから。いゝえ男なんぞ何うせ頼りにはならないといふことはちやんと存じて居ります。貴郎だつて私の元のことはよく御存じの癖に……男らしくもない。

此間、電車で木山さんに逢ひました。可愛い坊ちやんを連れてお出ででした。私が車掌の居る處からズッと入つて行くと其處に木山さんがゐらつしやるぢやありませんか。私ははつとしましたけれど、御挨拶をすると、『達者かね』ッと仰しやるんでせう。私は悲しくなつて了ひました。坊ちやんが怪我をして、それで東京に出てゐらしつたんださうです。もう大變によくおなんなすつたんですッて、それでも坊ちやんは繃帶をしてゐらつしやいました。可愛い坊ちやん、私もあんな坊ちやんがほしい。貴郎は私が木山さんのことを言つたつて怒りはしませんね。木山さんは私の初めの好きな好きな人ですもの。私がこんなになつたのも、貴郎にも愛想をつかされるやうなわるい人間になつたのも、木山

にちやんと寢て居るぢや御座いませんか。政どんは、ゆふべは姐さんは大變醉つて居ましたねと笑つて居るんですもの、わたしはきまりがわるくなつてしまひました。

何うしてあんな氣になるんでせう。わたしのおなかの中には、屹度わるい虫か何か居るんぢやないかとふつと思ふことなどがあります。自分で自分の譯が分らなくなるんですもの。

近い中に屹度來て頂戴、いろいろ面白いお話がありますから。

十月五日　　　　　　　　　　——より

——樣

……此間は留守にして申譯がありません。實はお斷りして行かうと思つたんですけれど、急なものでしたから、その間がなかつたんです。〇〇に大變叱られて了ひました。何うか惡く思はないで頂戴。

實は可哀相なんですから。

二月七日　　　　　　　　　　——より

——樣

……あれから、町の通りをぶらぶら歩いて歸りました。好い月でしたのね。角の勸工場で買物をして、家に歸つて來ると、二階に月が一杯にさし込んで居て、好い心持でした。關屋さんが丁度其處へお座敷から歸つて來て、それから二人でいろいろな話をして、泣いたり笑つたりして、遲くまで寢られま

『それにしても、何うしてるだらう？　何と思つて居るだらう。あの手紙は何ういふ反應を女に起させたらう？』

すぐ續いてかう思つたかれは、手紙を見た時の女の顏と心持とを痛切に知り度いと思つた。しかしそれは決して知ることの出來ない願ひであつた。

かれは唯歩いて行つた。何處までも何處迄も同じやうな屈曲した路が續いた。霧は段々深くなつて來た。白い輕いのがいつか灰色の重々しいものと變つた。見て居る中に湖水の上にもそれが這ふやうに早く早く靡いて行つた。少時すると林も草藪も全くそれに包まれて了つて、あたりはすべて灰色の天地となつた。かれは唯先へ先へと歩いて行つた。丁度その灰色の霧の中にその苦悶のかくれ家を求める人のやうに。

四

……久しく御目に懸りません。なんだか氣になつて氣になつて爲方がないんです。今日も餘り氣がクサクサ致しますので、お座敷は皆なことわつて、ぐづ／＼致して居ります。それでも時々は自分で自分の氣がわからないことがあるほど、お酒を飲んで、はしやぐことがあるんですよ。おととひの晩、それは醉つて了つて、箱屋の政どんにやつと車に乘せて貰つて歸つて來て、明日起きて見ると、二階

女であつたなら、かれはさうした深い處まで入つて行かなかつたに相違ない。底が見え透いて興味が覺めて、すぐ其處から引返して行つたに相違ない。

幸か不幸か、其女はかれには解らない謎であつた。逢へば必ず新しい好奇心を惹起させるに足りるやうな複雜した心のスタイルを持つて居た。虛僞と眞實と、眞實と虛僞と、それが網のやうに深く織り込まれて、其處に一種名狀せられない微妙な空氣を釀して居た。

その空氣の中に咲いた微かな花のにほひ、それがかれを捉へて行つた。

インスチンタトから起つた苦悶、それを醫すことの容易でないのを、彼は步き乍らつくづくと思ひ知つた。忘れようとすればするほど、其女は益々かれに近寄つて來た。其影は益々濃くなつて來た。

前に展げられた明媚な湖水、平生ならば、それが何んなに眼を樂しませ、心を悅ばせたか知れなかつた。朝霧の薄くかゝつた鏡のやうな滑かな水の面、捺したやうに靜かに映つて居る山の影、をり〳〵輕い翼で其上を破つて行く水鳥の群、ことにかれの辿つて行く路の頭の上には、子規が鈴を鳴したやうに冴えた高音を張つて啼いて居た。しかしかれはそれに慰められもしなかつた。心は矢張忘れなければならない女の傍へ行つて居た。『しかし時が經つたら……ある時日を經過したなら、いつかこの重荷が一つ一つ卸されて行く事だらう！　時！　時より他に、今は自分の味方になつて吳れるものはない。』ふと氣が附くと、かれはこんなことを考へて居た。

でない、手管のやうで手管でない其力は、疑つたり悶えたり不安を感じたりして居る間に巧にその獲物を確實にして行つた。女に騙されるといふことはない、女に騙される位ならば、屹度男も女を騙して居る。こんなことを思ふやうになつた時は、もう其の分析の斧が十分に働かなくなつた時であるのを知らなかつたのであつた。かれの頭には、あの時ある處で二人の間に起つたあるシーンが今もはつきりと印象されて殘つて居た。女は其時エクスタシイに陷つた樣に男の體に取附いて泣いた。眼からは涙が瀧のやうに流れて落ちた。『こんな商賣をして居るものだから、貴郎は信用して下さらない――もう明日からはやめて了ひます。やめますとも。』かう言つて、また歔欷げた。其時庭には月が晝のやうに明るく照つて居た。

其言葉は信ぜられないにしても、其涙――止度なく落ちた涙、それも虛僞であつたらうか。今でもかれはさう思ふことが出來なかつた。

女の自由の總てを占有するといふことは、戀する者の滿足である。しかし戀するものに取つては、その滿足は、餘りに貴重なものではなかつた。飽滿――其處から戀はいつも滑つて遁げて行つた。

男を滿足させることの出來ないやうな境遇に身を置かれた女、寧ろさうした境遇から――フィックルな第二の天性を形ちづくるやうになつた女、それが彼をかう強く引張つて行くについて尠なからぬ力を持つて居たことは爭はれない事實であつた。庇髮に紫紺の袴、戀をすればすぐ結婚を急ぐやうな普通な

意氣地のない奴だ！』かれはまたかう口に出して言つて見た。

何故？　何故かれはかうした心の狀態に到達したのか。かうまで離れることの出來ないやうに精神と肉體とをその女の手に捉へられたか。かれはさうなつて行つた順序を考へて見ない譯に行かなかつた。普通の女として、さうした社會によく見る女として、唯の美しい眉、唯の表情に富んだ眼、唯の愛嬌ある、才ある動作を持つた女としてより以上に、別に深い魅力をそれから受けることなしに、長い間淡い關係をつゞけて來て居た。確に淡い關係であつた。女の持つた弱點はいかやうにも分析することが出來るやうな餘裕を持つて居た。それがいつの間に何うして、その髮の濃いか薄いか、その姿の美しいか美しくないか、その形の整つてゐるか整つてゐないかを判斷するに苦むやうな境にまで引張られて行つたか？　またいつの間に、聰明な分析の斧を全く失つて、心と體とをすべてその女に打込むやうになつて行つたか？　かれは平生尠くとも物に熱することの出來ない冷たい性質を持つて居ることを自認して居た男であつた。事業に死身になることの出來ないのも、中年になつて、親の殘した財產を賴りに、文學に美術に政治に多大の趣味と理解とを有して居りながら、何一つ眞面目なことをすることの出來ないのも、皆なその冷たい性質がある爲めだとばかり思つて居た。中心からかれを動かすものなどが、この世の中にあらうとは夢にも思つて居なかつた。

今更に女の巧妙な力といふことが繰返して考へられた。眞實のやうで眞實でない、虛僞のやうで虛僞

思つて遣つて來た。それであるのに……洋燈は急にヂヂと音を立てゝ、段々暗くなつて行つた。やがて乾いた心が口金の處でボッと赤く燃えたと思ふと、黒い油煙が漲るやうにホヤから出た。かれは慌てゝランプを吹き消した。

闇……無限の闇……その中に唇——紅い唇が見えた。

三

夜の明けるを待兼ねるやうにして、かれはステッキを持つて戸外に出た。朝の霧が薄く湖の上にあつた。湖に沿つた道は、栂や山毛欅の白い幹の並んで立つた林の中へとかれを導いて行つた。矢張其女が頭を離れなかつた。此夏、一緒に此處に來る約束をして居た。一緒に伴れ立つて靜かな湖畔の朝を散歩する筈であつた。中形に鶉の夏羽織、意氣な丸髷に長い白い襟足、それを此處に置いて考へたことも一度や二度ではなかつた。しかし今はもう忘れなければならない、長い間馴れて來た笑顔も眼の表情も何も彼も忘れて了はなければならない。……むしろそれを忘れる爲め、その傷痍を醫す爲めに、かれは態々此處に遣つて來たのだ。

路は屈曲して續いて行つた。湖水が見えたり隱れたりした。處々に出て居る木の根や、石塊、それに躓いて、かれは幾度か前に踣らうとした。それほどかれはそのことに心を奪はれて居た。『馬鹿な奴だ！

ギヂと厭な音がするばかりで、室はすぐ元の暗さに戻つて行つた。

時計は一時三十分の處を指して居る。樹の梢を渡る風の音が微かに聞える。汀に寄せる湖水の波の音もそれと手に取るやうに聞える。ガサガサと草藪の靡く音もする。

今までにもかうしたことがないではなかつた。夜中に眼が覺めて困つたことは幾度もあつた。自分で自分の淺猿しさ意氣地なさを痛切に考へたのは、殊にかうした時に多かつた。床の上に起上つたかれの姿は、久しい間身搖きもせずにぢつとして居た。

ふと氣が附くと、かれは矢張女のことを考へて居た。男から男へと移つて行く女、その移つて行く狀態をかれは深く考へない譯にはゆかなかつた。其度每に男の甞めなければならない苦い經驗の一つ一つ、それをいつでも鮮かに頭腦に上せることが出來るほど、かれの心は赤く佗しく爛れて居た。

第一に、一人の男から他の男へと移つて行つて、それがいつも痕跡を留めないやうな女の巧みな態度が、羨しくもあり腹立しくもあつた。で此處まで來ると、かれの胸は俄かに瞋恚の情に燃えて來た。韁を切つたやうにさまぐ\な記憶や煩悶や懊惱が一緒になつて凄じい波を揚げた。

かれは堪らなくなつたやうに、再び身を床の上に横へた。此處に來てまで、かうした思ひに惱まされやうとは思はなかつた。かくれ家——人の居ないかくれ家に行つたなら、尠くとも自己の力で自己を押へることが出來る。一步を讓つてそれが出來ないにしても、自己で自己を判斷することが出來る。かう

湖水は今暮れようとして居た。明るい夕雲に照された水の面は次第に銹びた暗い色を帶びて來た。此時、彼の眼の前には、都會の町の灯と、電燈の輝いた一間と、なつかしい眼と、はなやかな姿とが歷々と見えて通つた。かれの心は動搖せずには居られなかつた。女は今宵も媚を賣つて居る！

二

ふとかれは眼を覺ました。洋燈は机の上に薄く點いて居た。讀みながら寢入つた書籍は開かれたまゝ其處に放り出されてあつた。

絕えず魘はれた苦しい夢、それは裸體の男が裸體の女を追廻したり、可愛い白い乳の下に銳利な短劍を突き刺したりするといふやうな種類のものであつた。譬へやうもないほど重苦しい心から覺めて、彼は更に一層の暗さと佗しさとを覺えた。

かれはぢつとして天井を見詰めた。大きく見開いた眼は、こんがらかつた頭を統一しようとするやうに、暫しの間瞬きもせずに、夜の靜かな空氣の中に際立つて見えて居た。夜はしんとして居た。苦しさうな遣瀨ないやうな長大息がやがて聞えた。

かれは床の上に起上つた。それと同時に大きな半身像は後の障子に黑くぼんやりと映つて見えた。かれはそのまゝ暗くなり懸けた洋燈の心をねぢつて見た。しかし油がもう殘り少くなつてゐると見えて、

た。と、悔恨の念よりも一種忿怒に近い情が烈しく胸をついて起つて來た。

『賣女！』またかう罵つた。

それは波のやうに飜つたり沈んだりする苦悶であつた。また何處から來て何處へ向つて去つて行くのか解らないやうな苦悶であつた。腹が立てば腹が立つでそれで好い。あさましければあさましいでそれで好い。尠くとも忘れて了ふことが出來るやうな餘地さへあれば好い。それさへあれば、何もこんな山の中まで遣つて來なくつても好いのだ。かれは其處まで行くと、いつもハタと突當つた。

かれは忘れる工夫をした。考へない工夫もして見た。しかし手にした書籍が、いつか其方除にされて、頭が逸早く逆戻りをして居るのに氣が附いては、いつも失望しない譯には行かなかつた。

追憶の數々――中でもフイジカル・レコレクションが殊にかれの全身を動搖させた。『何うでも好い。男があらうが――男が幾人あらうが、そんなことは何うでも好い。十にも百にも分け得られる心と肉體、その一部さへ確たる自己の占有物であれば、それで好いぢやないか。無節操でも、虛僞の塊でも、自分に對して居る刹那さへ自分のものでありさへすればそれで好いぢやァないか。』時にはこんなことを考へさせるほどその追憶は強い生々した力を持つて居た。

夕飯は若い女中が運んで來た。茶をつぐまで其處に坐つて給仕をしてゐたが、軈て洗つた膳や椀を開扉(ひらき)の中に入れて、『お休みになる時分にはまた參りますから。』と言つて出て行つた。

輝いて居た。

『思ひ切りさへすれば好いんだ。』

かれはこれまでにも幾度となくかう心に向つて言つた。そして其獨語はいつも跳ねかへつた鞠のやうに強くかれの胸に戻つて來た。『賣女！　無節操！　虚僞の塊！』かう極端に女を罵つて見ることもあつた。時にはまた其の鋭い判斷の斧を自己に向けて、『馬鹿な奴だ！　意氣地のない奴だ！　これだけのことが思ひ切れないのか？』かう強ひて自己を冷笑して見ることもあつた。

けれど自分ながら不思議に思はれるほど、その罵倒や冷笑には力がなかつた。女に對する心がいつもすぐ傍からそれを裏切つて行つた。『今頃は何うして居るだらう？　何と思つて居るだらう？　あゝ思つたのは自分の無理ではないか。誤解ではないか……。』かう思ふと、自分で自分が自由にならないのが腹立しくなると同時に、いくら深く觸れて行つても、遂にその核心に達することが出來ない性(セツクス)の相違が呪はれて來た。

『何うせ女は女、男は男だ。男の心持が女に解りやう筈がないやうに、男にも女の心持は解らないのだ。』

こんなことまでも思つて見た。男の心持の解らないといふことが第一に心外で堪らないといふ氣がし

を感じて、かれは急いで、それを採み集めて奥の方に押込んで了つた。
『もう何も彼も忘れて仕舞はなければならない。』かれはかう口に出して言つた。
雜誌を讀みかけても、意味が十分に頭腦に入つて來なかつた。で、かれは立上つて小さい庭を彼方此方と歩き始めた。女中は一人殘つて頻りに庭を掃除して居た。紅入メリンスの帶はその若い娘姿を一層無邪氣にして見せた。客はぢつとそれを見た。何かやさしい言葉をかけてやりたいと思つた。しかしさうした氣分にはなれなかつた。
『何か御用は御座いませんか。』
かう言つて聽て女中は歸つて行つた。
其姿が草藪の蔭の路にかくれて見えなくなるのを見送つて居た客は、一種譬へ難いさびしさの烈しく胸を衝いて來るのを覺えた。一人！　唯一人！
自から好んで遣つて來たとは言ひながら、このさびしい世離れた林の中に、かうして一人住まねばならぬことを考へると、かれは堪らなく悲しくなつて來た。
今更にかれはまたも籐椅子の上に身を横へてぢつとしてゐるより他に爲方がなかつた。
前の路をそれでもをりをり人は通つて行つた。奥の溫泉場に米味噌を運ぶ女馬の群だの、赤い蒲團に客を載せた山駕籠だの、尻端折をして歩いて行く都の旅客などが通つた。湖水は今燃えるやうに夕日に

は唯後腦を汽車の窓に靠せかけて居た。汽車を下りてからも車夫の言ふなりに、晝飯を食つたり旅店に休んだりして遣つて來た。

廣い野中の百姓家や、杉並木や、烈しく泡立つた溪流や、ぞろぞろ通る遊覽者の群や、さういふものは、唯現象としてかれの眼の前を通つて行つたばかりであつた。頭腦はガランとして居た。

『まア、暫くじつとして居よう、此處にかうして居たら、自己に打克つことが出來るかも知れない。』

かれはまたかう思つて見た。

その打克つべき自己、それが今は自己ではなくて、恐るべき他の人間か何ぞのやうに思はれ出したのは、もうかなり長い前のことであつた。自分で自分を何うすることも出來ないやうな境遇にいつかかれは其身を置いて居た。

鞄の中に束になつた手紙がはいつて居た。ふとそれがかれの眼に留つた。見馴れた封筒に見馴れた筆蹟、腹立しいやうな懐しいやうな氣がしたが、それでもそれを手に取つて見ぬ譯には行かなかつた。

……これも皆貴郎のお蔭と心から喜んで居ります……

……此頃は久しく御目に懸りませんが、御機嫌は……

……私の心

チラチラと眼を掠めて通つて行くさうした文句、平凡なこの文句にも針でさゝれるやうな烈しい刺戟

翼のやうな二本の櫂を搖かして、輕く水の上を滑つて行つた。

少時行つた處で、二人は櫂を留めて、此方を見て何か話をして居た。けれどこれも長い間ではなかつた。金を湧かせた夕日の波に、再び二本の櫂は光つて、いつか遠く遠くなつて了つた。

番頭と女中とが小僧に車を挽かせて、鞄やら寢道具やらを運んで來た時にも、客は矢張籐椅子に體を横へて居た。火鉢や、鐵瓶や、茶道具や、さうしたものはすべて女中が壁に傍つた扉の中から出して綺麗に掃除して、順序よく並べ立てた。勝手元へは樋を渡しさへすれば、綺麗な水が山からいくらでも來るやうになつて居た。

若い肥つた女中は、手拭を被つて、彼方此方と拂塵をかけたり拭き掃除をしたりした。庭の古葉を掃いたり草を除つたりすると、あたりは見違へるやうに綺麗な瀟洒(きつぱり)した家になつた。

『此處で暫く落付いたら好いだらう。』

客は四邊を眴しながらかう思つた。

鞄を明けると、中から書籍やら衣服やらが出た。手帳だの、半紙だの、手紙だのが順序もなくゴタゴタと入つて居た。旅に出ようとして慌てゝこれを詰めた時の心持がすぐ思ひ出された。

殆ど遁るゝやうにして、かれは其處から上野の停車場へ急いだ。それから此處まで來る長い間、かれ

元の靜かさに戻つた。男の蒼白い顏には、日影を帶びた林の影がチラチラと動いてゐた。

湖水の方からは、賑やかな笑聲と水を櫂で叩く様な音とが絶えず聞えて來た。汀に居た二人は、樹蔭の涼しいのと人氣のないのと湖水の眺めの好いのとに周圍の世界を忘れて、容易に其處を去らうともしなかつた。

涼しさうなリンネルの服と水淺黃の艶な服と白いペンキ塗のボートとが、篠椅子の客の眼の前を掠めるやうにして通つて行つた。

笑聲は猶ほ聞えて來た。

客はやゝ暫く篠椅子に身も心も埋めて居たが、その笑聲に心を惹きつけられたといふやうに、やがて身を起して、駒下駄を突かけて、其方へと出懸けて行つた。

其處では娘は背を此方に向いて、何か頻りに饒舌つて居た。櫂を手にした青年は此方を向いた顏に笑を見せながら、水に浮いたボートの輕い動搖の調子を取るやうにして居る。岸には小石が綺麗な水の中に透徹るやうに見えて、漣が刻むやうに微かな緩やかな音を立てた。蔽ふやうに冠さつた深緣からは、明るい光線が處々に縞を作つて水に落ちて見えた。

繪のやうな光景に、客は少時われを忘れて立つて居た。これをそれとなく見て取つた青年は、俄かに同伴者を促し立てるやうな態度をして、急いで出發の準備に取かゝつた。やがて岸を離れたボートは、

然しその明るい風景が男の氣に入つたとは見えなかつた。かれはやがて同じ調子で番頭の後に跟いて歩き出した。番頭は杉の木蔭に立つてそれを待つて居た。

『湖を縁どつた路は屈曲して、若い灌木の林やら草藪やら熊笹の繁みやらが續いた。山毛欅や栖の大木が深い涼しい蔭をつくつてゐる間には、塀を廻らした閉ぢられた大きな別莊があつたりなどした。一ところ湖水の見える汀には新しいペンキの匂ひのするボートが一隻繫がれて、ブロンドの綺麗な娘とハイカラな青年とが櫂(オール)を握つたまゝ、涼しい風に吹かれてゐた。

『此處は手前の所有ではありませんが、靜かなことは極く靜かです。』番頭はかう言つて、其の向うにある林の中の小さな別莊に入つて行つた。

涼しい綠蔭とさびしい位靜かな四邊のさまとは、客の希望を滿足させるに十分であつた。かれは其の緣側に備へてある籐椅子に體を横へたまゝ、再び身を起さうともしなかつた。其處からは低い草藪を隔てて湖水が一ところ狹く仕切つて見られた。おしろい草や九連草が暗い庭を鮮かに彩つて咲いて居た。

『では、お荷物を運んで參りますから。』

かう言つて番頭は歸つて行つた。

『一人――やうやく一人になつた。』呻くやうに言つた言葉は靜かな四邊の空氣に反響してそれがまた

かう言つて行掛けたが、鳥渡立留つて、

『何れおつれ様が御座りまするので？』

『イヤ、一人だ。』

かう言つた客の顔は俄かに曇つたやうに見えた。

湖の畔には、別莊風に建てた家屋が幾軒もあつた。西洋人を相手にするやうな大きな家では、チャンと戸が明け放されて、岐阜提燈などが軒に吊されて、籐椅子が置いてあつた。何の間からも湖水が見えるやうな家のつくり方で、深く生茂つた山毛欅の林には、前に展げられた湖水が靜かな光を反射させた。

男のパナマ帽と番頭の肥つた姿とは、少時して其湖畔の路に見えた。男は默つて番頭の後に跟いて歩いた。番頭のいろいろに說明するのをフムフムと言つて聞くばかりで、別に何も言はなかつた。兒て廻つた二三軒の別莊には、氣に入つた間がないらしかつた。『もつと狹くつても好いから、靜かなところ。』かう言つてはつまらなさうな顏をして出て來た。中宮祠の前では、何か思ひだしたやうに、立留つて、先に番頭のグングン行くのも知らずに、ぢつと湖水を見詰めて居た。

湖は今鏡のやうに澄んで、午後の鮮かな日影が其の半面を照して居た。空氣の加減か、それとも水の深淺の加減か、濃い碧と深い藍とがくつきりと線を引くやうに限られてあつて、白堊や赤い煉瓦を點綴した對岸は、丁度明るい水彩畫のやうな色彩を見せた。

髪

一

これから避暑客がぼつぼつ來ようとする頃、かなり大きな鞄を携へた三十七八の紳士風の男が、町から中禪寺の旅館へと送られて來て、湖に面した八疊の間に通されると、いきなり手を鳴らして番頭を呼んだ。

『何處か此處らに靜かな別莊の間の空いたのはないだらうか。少し長く居たいと思ふんだが……』

『へ、へ。』

番頭は客の痩せた蒼い興奮した顏をじろじろと見ながら揉手をして、『手前共の持つて居りまする別莊がいくらも御座りまするで、……へ、へ。別に一軒離れた家も御座います。夏分混雜致します時には、お客樣にお願ひして一組二組一緒に入れて戴くことも御座りまするが、當節では滅多にさういふことは御座いません。へ、へ。どうかごゆつくりと……。』

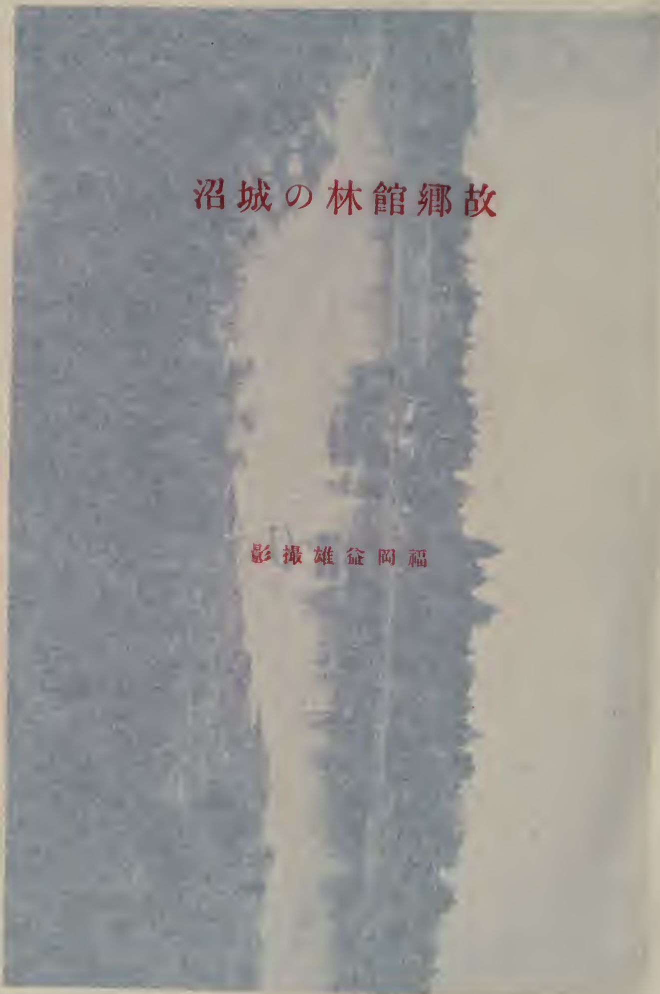
髮

花袋全集第三卷目次

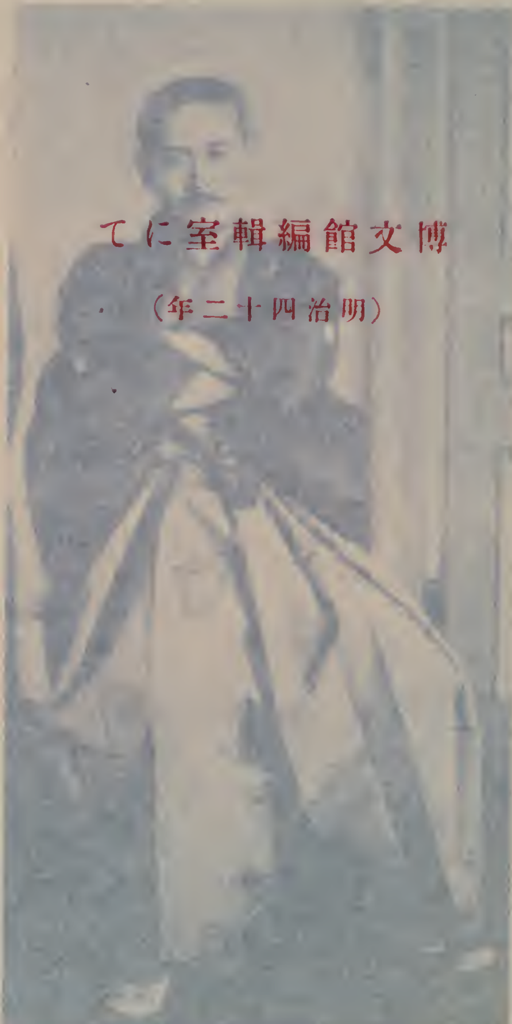


故郷館林の城沼

福岡益雄撮影







博文館編輯室にて

（明治四十二年）

田山花袋著

花袋全集

第三巻

髪・春雨・殘る花・罠外二編

花袋全集刊行會

田山花袋著

花袋全集

第三巻

生・作雨・残る花・民外二編

花袋全集刊行會

